山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第25集

金の尾遺跡
無名墳(きつね塚)

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1987. 3.

山梨県教育委員会
日本道路公団

金の尾遺跡
無名墳(きつね塚)

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1987. 3.

序

本報告書は、中央自動車道建設に先立ち発掘調査された一連の遺跡のうち、1978年度に実施した金の尾遺跡と無名墳（きつね塚）の2遺跡について、調査の結果をまとめたものであります。

金の尾遺跡は、中央自動車道西宮線の甲府昭和インターチェンジと韮崎インターチェンジの中間、甲府昭和寄りの山梨県中巨摩郡敷島町大下条にあって、秩父山地に源を発し甲府市西部を南流して笛吹川に合流する荒川の扇状地末端に位置しております。

調査面積はおよそ8,000㎡、発見された遺構は縄文時代前期終末の住居址1軒、同中期中葉の住居址6軒、中期終末の住居址2軒、弥生時代後期の住居址32軒、弥生時代の方形周溝墓、円形周溝墓17基、さらに縄文～弥生時代の土壙など多数に及び、またこれらの遺構やその周辺からは各時期の土器や石器など遺物も大量に出土いたしました。縄文時代の甲府盆地の遺跡としては出土品も豊富ですが、弥生時代の大規模な集落址が発掘されたことが、最も大きな成果でした。甲府盆地内部でこうした大規模な弥生時代の集落址が発見されたのはもちろん初めてで、しかも墓域と居住地とが分かれており、集落がV字溝によって上記2群に区切られている様子は、当時の集落の形態を推定する貴重な資料を提供するものであります。また、出土した土器には、長野県北部に分布の中心を持つ箱清水式土器の強い影響を受けたものが多く、一部に東海・駿河地方の土器が混じるなど、周辺地域からの文化の流入を如実に物語る好資料でもあります。

無名墳（きつね塚）は金の尾遺跡の北西、北巨摩郡双葉町の赤坂台地上にある後期古墳の一つです。かつて、台地上には多くの古墳群があったといわれますが、今は数えるほどしか残っておりません。本墳から出土した鉄鏃・玉・紡錘車などや横穴式石室の構造は、同台地上にあった二ツ塚古墳・竜王2号墳・同3号墳と類似しており、これら古墳群を築造した勢力を想定する上で貴重な資料を提供しております。特に近時、同じ調査者によって敷島町天狗沢窯址から白鳳時代の鏡瓦が発見され、これら古墳群の存在が再認識されるに至りました。

以上、2遺跡いずれも重要な意義を持ちますが、特に金の尾遺跡は本県の弥生時代を代表する遺跡として、発見当初から注目を受けて参りましただけに、このたび、本報告書の完成によって、その全容が明らかとなった意義は大きいと存じます。より多くの方々が研究資料として本書をご利用下さいますよう念じてやみません。

末筆ながら、ご協力を賜わった関係機関各位、並びに直接調査に当たられた方々に厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯貝正義

例　　言

1. 本書は、山梨県中巨摩郡敷島町大下条字金の尾に所在する金の尾（かねのお）遺跡及び北巨摩郡双葉町下今井に所在する無名墳（きつね塚）の発掘調査報告書である。
2. 本事業は中央自動車道建設に先だって、日本道路公団より委託を受けて実施した発掘調査で、発掘調査は昭和52・53年度、整理報告書作成は57年度より61年度の間に実施した。
3. 本報告書の作成には、文化財主事末木健、新津健、米田明訓があたり、執筆及び編集は末木が行った。ただし、Ⅳ章第２節は長沢宏昌が執筆した。
4. 写真撮影は発掘作業中の遺構等を末木、新津が行ない、遺物は末木が行った。
5. 石器の材質は山梨文化財研究所第６研究室長河西学氏の鑑定による。
6. 本報告書にかかる出土品、記録図面、写真などは山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
7. 発掘調査及び報告書作成にあたって、下記の方々より御協力をいただいた。記して謝意を表します。

笹沢　浩、服部敬史、敷島町教育委員会、双葉町教育委員会、日本航空学園

凡　　例

1. 挿図の遺構平面図中にＰｏを冠した数字は、各遺構より出土した土器№であり、出土遺物挿図の№と一致する。
2. 土器でスクリーン・トーンが貼って有るものは、赤色塗彩された部分である。
3. 石器で条線スクリーン・トーンが貼ってあるものは磨かれているものであり、ドットスクリーン・トーンの部分は擦られている部分である。
4. 遺構中の焼土はドットスクリーン・トーンで表示している

金の尾遺跡

目　　次

第Ⅰ章　調査状況 …… 1
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡概況 …… 1
　第1節　位置 …… 1
　第2節　地理的・歴史的環境 …… 1

第Ⅲ章　遺構・遺物 …… 5
　第1節　住居址 …… 5
　第2節　周溝墓 …… 143
　第3節　柱列・溝 …… 170
　第4節　特殊遺構 …… 184
　第5節　土壙 …… 191

第Ⅳ章　まとめ …… 279
　第1節　縄文時代 …… 279
　第2節　底部圧痕 …… 280
　第3節　弥生時代 …… 283
　　土器 …… 283
　第4節　16号住居出土炭化米について …… 291
　第5節　弥生時代住居について …… 293
おわりに …… 297

挿 図 目 次

第１図　金の尾遺跡位置図……　2
第２図　金の尾遺跡全体図……　3～4
第３図　１号住居址平面図……　5
第４図　２号住居址平面図……　5
第５図　１、２号住居址出土土器……　6
第６図　２号住居址出土土器……　6
第７図　３号住居址、１号溝平面図……　7
第８図　３号住居址出土土器(１)……　8
第９図　３号住居址出土土器(２)……　9
第10図　４号住居址平面図……　10
第11図　４号住居址出土土器(１)……　11
第12図　４号住居址出土土器(２)……　12
第13図　５号住居址平面図……　13
第14図　６号住居址平面図……　13
第15図　６号住居址出土土器(１)……　15
第16図　６号住居址出土土器(２)……　16
第17図　６号住居址出土土器(３)……　16
第18図　６号住居址出土土器(４)……　17
第19図　６号住居址出土土器(５)……　18
第20図　７号住居址平面図……　19
第21図　７号住居址出土土器(１)……　20
第22図　７号住居址出土土器(２)……　20
第23図　７号住居址出土土器(３)……　21
第24図　８号住居址平面図……　22
第25図　８号住居址出土土器(１)……　23
第26図　８号住居址出土土器(２)……　24
第27図　９号住居址平面図……　25
第28図　９号住居址出土土器……　25
第29図　10号住居址平面図……　26
第30図　10号住居址出土土器(１)……　27
第31図　10号住居址出土土器(２)……　27
第32図　10号住居址出土土器(３)……　28
第33図　11号住居址平面図……　29
第34図　12号住居址平面図……　29
第35図　12号住居址出土土器……　30
第36図　13号住居址平面図……　31
第37図　13号住居址出土土器(１)……　32
第38図　13号住居址出土土器(２)……　33
第39図　13号住居址出土土器(３)……　34
第40図　14号住居址平面図……　35
第41図　14号住居址出土土器……　36
第42図　15号住居址平面図……　36
第43図　15号住居址出土土器(１)……　37
第44図　15号住居址出土土器(２)……　37
第45図　16号住居址平面図(１)……　38
第46図　16号住居址平面図(２)……　39～40
第47図　16号住居址出土土器(１)……　41
第48図　16号住居址出土土器(２)……　42
第49図　17号住居址平面図……　43
第50図　17号住居址出土土器(１)……　44
第51図　17号住居址出土土器(２)……　44
第52図　17号住居址出土土器(３)……　45
第53図　18号住居址平面図……　46
第54図　18号住居址出土土器(１)……　47
第55図　18号住居址出土土器(２)……　48
第56図　19号住居址平面図……　49
第57図　19号住居址出土土器(１)……　50
第58図　19号住居址出土土器(２)……　50
第59図　20号住居址平面図……　51
第60図　20号住居址出土土器(１)……　52
第61図　20号住居址出土土器(２)……　53
第62図　21号住居址平面図……　54
第63図　21号住居址出土土器(１)……　55
第64図　21号住居址出土土器(２)……　56
第65図　22号住居址平面図……　56
第66図　23号住居址平面図……　57

第 67 図　23号住居址出土土器(１)……　58
第 68 図　23号住居址出土土器(２)……　58
第 69 図　23号住居址出土土器(３)……　59
第 70 図　23号住居址出土土器(４)……　60
第 71 図　23号住居址出土土器(５)……　61
第 72 図　24号住居址平面図……　62
第 73 図　24号住居址出土土器(１)……　63
第 74 図　24号住居址出土土器(２)……　64
第 75 図　25号住居址平面図……　65
第 76 図　25号住居址出土土器(１)……　66
第 77 図　25号住居址出土土器(２)……　67
第 78 図　26号住居址平面図……　68
第 79 図　26号住居址出土土器(１)……　68
第 80 図　26号住居址出土土器(２)……　69
第 81 図　27号住居址平面図……　69
第 82 図　27号住居址出土土器……　71
第 83 図　28号住居址平面図……　72
第 84 図　28号住居址出土土器(１)……　72
第 85 図　28号住居址出土土器(２)……　73
第 86 図　29号住居址出土土器(１)……　74
第 87 図　29号住居址平面図……75～76
第 88 図　29号住居址出土土器(２)……　77
第 89 図　30号住居址平面図……　78
第 90 図　30号住居址出土土器(１)……　79
第 91 図　30号住居址出土土器(２)……　79
第 92 図　31号住居址平面図……　80
第 93 図　31号住居址出土土器(１)……　80
第 94 図　31号住居址出土土器(２)……　81
第 95 図　32号住居址平面図……　81
第 96 図　32号住居址出土土器(１)……　82
第 97 図　32号住居址出土土器(２)……　82
第 98 図　33号住居址平面図……83～84
第 99 図　33号住居址出土土器(１)……　85
第100図　33号住居址出土土器(２)……　86
第101図　34号住居址平面図……　87
第102図　34号住居址出土土器(１)……　88
第103図　34号住居址出土土器(２)……　89
第104図　35号住居址平面図……　89
第105図　35号住居址出土土器(１)……　90
第106図　35号住居址出土土器(２)……　91
第107図　36号住居址平面図……　92
第108図　36号住居址出土土器(１)……　93
第109図　36号住居址出土土器(２)……　94
第110図　36号住居址出土土器(３)……　95
第111図　37号住居址平面図……　96
第112図　38号住居址平面図……　96
第113図　38号住居址出土土器(１)……　97
第114図　38号住居址出土土器(２)……　98
第115図　39号住居址平面図……　98
第116図　39号住居址出土土器(１)……　99
第117図　39号住居址出土土器(２)……　100
第118図　40号住居址平面図……　101
第119図　40号住居址出土土器(１)……　102
第120図　40号住居址出土土器(２)……　103
第121図　１号周溝墓平面図……　144
第122図　２号周溝墓平面図……　145
第123図　２号周溝墓壷出土状態……　145
第124図　1,2,3 号周溝墓出土土器……　146
第125図　３号周溝墓平面図……　147
第126図　４号周溝墓平面図……　148
第127図　５号周溝墓平面図……　149
第128図　５号周溝墓壷出土状態……　149
第129図　4,5 号周溝墓出土土器……　150
第130図　６号周溝墓平面図……　151
第131図　７号周溝墓平面図……　152
第132図　７号周溝墓土器出土状態……　153
第133図　８号周溝墓平面図……　153
第134図　９号周溝墓平面図……　154
第135図　９号周溝墓土器出土状態……　155
第136図　7,9,11号周溝墓出土土器……　156
第137図　９号周溝墓出土土器……　157
第138図　10号周溝墓平面図……　158

第139図　10号周溝墓土器出土状態…… 159
第140図　11号周溝墓土器出土状態…… 159
第141図　11号周溝墓平面図…… 160
第142図　12号周溝墓平面図…… 161
第143図　13号周溝墓平面図…… 162
第144図　14号周溝墓土器出土状態…… 162
第145図　14号周溝墓平面図…… 163
第146図　15号周溝墓平面図…… 164
第147図　16号周溝墓平面図…… 164
第148図　13,14,16号周溝墓出土土器…… 165
第149図　1,3,5号周溝墓出土土器…… 166
第150図　6,7 8,9号周溝墓出土土器 …… 167
第151図　9 10,11, 3号周溝墓出土土器 …… 168
第152図　14,15,16号周溝墓出土土器…… 169
第153図　17号周溝墓平面図…… 169
第154図　1,2号柱列、13号溝平面図…… 176
第155図　2,3,5,7号溝平面図…… 177
第156図　6号溝実測図…… 179～180
第157図　12号溝実測図…… 179～180
第158図　14，15号溝実測図…… 181～182
第159図　12溝出土土器…… 184
第160図　特殊遺構(1)…… 185
第161図　特殊遺構(2)…… 186
第162図　特殊遺構(3)…… 187
第163図　特殊遺構出土土器(1)…… 188
第164図　特殊遺構出土土器(2)…… 189
第165図　土壙実測図(1)…… 192
第166図　土壙実測図(2)…… 193
第167図　土壙実測図(3)…… 194
第168図　土壙実測図(4)…… 195
第169図　土壙実測図(5)…… 196
第170図　土壙実測図(6)…… 197
第171図　土壙実測図(7)…… 198
第172図　土壙実測図(8)…… 199
第173図　土壙出土土器(1)…… 203
第174図　土壙出土土器(2)…… 204
第175図　土壙出土土器(3)…… 205
第176図　土壙出土土器(4)…… 206
第177図　土壙出土土器(5)…… 207
第178図　土壙出土土器(6)…… 208
第179図　土壙出土土器(7)…… 209
第180図　土壙出土土器(8)…… 210
第181図　土壙出土土器(9)…… 211
第182図　土壙出土土器(10)…… 212
第183図　土壙出土土器(11)…… 213
第184図　土壙出土土器(12)…… 214
第185図　グリッド等出土土器1(縄文早・前期) 215
第186図　グリッド等出土土器2(縄文中期1)　216
第187図　グリッド等出土土器3(縄文中期2)　217
第188図　グリッド等出土土器4(縄文中期3)　218
第189図　グリッド等出土土器5(縄文中期4)　219
第190図　グリッド等出土土器6(縄文中期5)　220
第191図　グリッド等出土土器7(縄文中期6～後期) …… 221
第192図　グリッド等出土土器8(弥生中期) … 222
第193図　グリッド等出土土器9(弥生後期～土師) …… 223
第194図　グリッド等出土土器10…… 224
第195図　住居出土石器(1)…… 227
第196図　住居出土石器(2)…… 228
第197図　住居出土石器(3)…… 229
第198図　住居，その他，出土石器(4)… 230
第199図　その他，出土石器(5)…… 231
第200図　その他，出土石器(6)…… 232
第201図　その他，出土石器(7)…… 233
第202図　その他，出土石器(8)…… 234
第203図　その他，出土石器(9)…… 235
第204図　その他，出土石器(10)…… 236
第205図　その他，出土石器(11)…… 237
第206図　その他，出土石器(12)…… 238
第207図　その他，出土石器(13)…… 239
第208図　その他，出土石器(14)…… 240
第209図　その他，出土石器(15)…… 241
第210図　その他，出土石器(16)…… 242

第211図　その他，出土石器(17)…… 243
第212図　その他，出土石器(18)…… 244
第213図　その他，出土石器(19)…… 245
第214図　その他，出土石器(20)…… 246
第215図　その他，出土石器(21)…… 247
第216図　その他，出土石器(22)…… 248
第217図　その他，出土石器(23)…… 249
第218図　その他，出土石器(24)…… 250
第219図　磨製石斧，砥石他(25)…… 251
第220図　石錘，棒状石器(26)…… 252
第221図　石鏃他(27)…… 253
第222図　石鏃他(28)…… 254
第223図　石鏃他(29)…… 255
第224図　土偶他…… 256
第225図　銅製品，ガラス玉…… 257
第226図　出土木製品(1)…… 271
第227図　出土木製品(2)…… 272
第228図　出土木製品(3)…… 273
第229図　土器底部圧痕…… 282
第230図　弥生土器分類図(1)…… 284
第231図　弥生土器分類図(2)…… 285
第232図　弥生土器分類図(3)…… 286
第233図　弥生土器分類図(4)…… 287
第234図　弥生土器分類図(5)…… 288
第235図　弥生土器分類図(6)…… 289
第236図　金の尾遺跡，16号住居址出土炭化米粒長規模分布図 …… 291
第237図　土器底部モミ圧痕…… 292
第238図　金の尾遺跡弥生時代住居址分類 294
第239図　弥生時代住居入口方向…… 296
第240図　磨製石鏃分布図…… 296
第241図　横刃型石器分布図…… 296

表　目　次

第1表　金の尾遺跡住居・周溝墓一覧 …… 3～4
第2表　縄文時代住居址出土土器観察表 …… 104
第3表　弥生時代住居址出土土器観察表 …… 111
第4表　周溝墓出土土器観察表 …… 171
第5表　12溝出土土器観察表 …… 183
第6表　特殊遺構出土土器観察表 …… 190
第7表　土壙一覧表 …… 200
第8表　グリッド等出土土器出土位置一覧表 …… 225
第9表　石器等一覧表 …… 258
第10表　金の尾遺跡遺構出土遺物内訳 …… 274

図　版　目　次

図版１　◦金の尾遺跡発掘調査前全景
図版２　◦全景
　　◦全景
図版３　◦全景
　　◦全景
図版４　◦全景
　　◦全景
図版５　◦１号住居址
　　◦２号住居址
図版６　◦２号住居址土器出土状態
　　◦２号住居址
図版７　◦３号住居址
　　◦３号住居址土器出土状態
　　◦３号住居炉
図版８　◦４号住居址
　　◦４号住居址土器出土状態
　　◦４号住居址炉
図版９　◦５号住居址
　　◦６号住居址
　　◦６号住居址出土土器
図版10　◦７号住居址
　　◦７号住居址炉
　　◦８号住居址
図版11　◦８号住居址炉
　　◦９号住居址遠景
　　◦10号住居址
図版12　◦11号住居址１号集石
　　◦12号住居址
　　◦13号住居址
図版13　◦13号住居址土器出土状態
　　◦13号住居址炉
　　◦14号住居址
図版14　◦15号住居址
　　◦16号住居址
　　◦16号住居址
図版15　◦16号住居址
　　◦16号住居址炭化材出土状態
　　◦16号住居址土器出土状態
図版16　◦17号住居址
　　◦17号住居址出土土偶
　　◦17号住居址遺物出土状態
図版17　◦18号住居址
　　◦18号住居址出土土器
　　◦18号住居址埋甕炉
　　◦18号住居址作業風景
図版18　◦19号住居址
　　◦19号住居址炉
　　◦20号住居址
図版19　◦20号住居址
　　◦20号住居址柱根遺存状態
図版20　◦21号住居址
　　◦21号住居址土器出土状態
　　◦22号住居址
図版21　◦23号住居址
　　◦23号住居址出土土器
　　◦24号住居址
　　◦24号住居址出土土器
　　◦24号住居址土器出土状態
図版22　◦25号住居址
　　◦25号住居址土器出土状態
　　◦25号住居址紡錘車出土状態
　　◦25号住居址出土土器
　　◦25号住居址梯子材遺存状態
図版23　◦26号住居址
　　◦27号住居址
　　◦27号住居址炉

図版24 ◦28号住居址
◦28号住居址土器出土状態
◦28号住居址
◦29号住居址（上層）
図版25 ◦29号住居址（下層）
◦29号住居址（床下）
◦29号住居址土器出土状態
◦29号住居址出土土器
図版26 ◦30号住居址
◦31号住居址
図版27 ◦32号住居址
◦33号住居址
◦33号住居址土器出土状態
図版28 ◦34号住居址
◦35号住居址
◦35号住居址土器出土状態
図版29 ◦35号住居址（下層）
◦36号住居址
◦36号住居址土器出土状態
図版30 ◦37号住居址
◦38号住居址
◦39号住居址
図版31 ◦39号住居址土器出土状態
◦40号住居址
◦40号住居址土器出土状態
図版32 ◦１号周溝墓
◦２号周溝墓
◦２号周溝墓土器出土状態
図版33 ◦３号周溝墓
◦４号周溝墓
◦４号周溝墓土器出土状態
図版34 ◦５号周溝墓
◦６号周溝墓
◦７号周溝墓
図版35 ◦８号周溝墓
◦９号周溝墓
◦９号周溝墓・セクション
図版36 ◦10号周溝墓
◦11号周溝墓
◦11号周溝墓土器出土状態
図版37 ◦12号周溝墓
◦13、14号周溝墓
図版38 ◦14号周溝墓土器出土状態
◦15号周溝墓
図版39 ◦特殊遺構１、土器出土状態
◦特殊遺構２
◦特殊遺構４
図版40 ◦特殊遺構５
◦特殊遺構６、土器出土状態
◦特殊遺構７
図版41 ◦特殊遺構８
◦特殊遺構10、土器出土状態
◦特殊遺構11
図版42 ◦特殊遺構12
◦特殊遺構13、土器出土状態
◦特殊遺構14
図版43 ◦土壙（１）
図版44 ◦土壙（２）
図版45 ◦土壙（３）
図版46 ◦土壙（４）
図版47 ◦土壙（５）
図版48 ◦住居址出土土器
図版49 ◦住居址出土土器
図版50 ◦住居址出土土器
図版51 ◦住居址他出土土器
図版52 ◦周溝墓他出土土器
図版53 ◦石鏃・土偶・ガラス玉他
図版54 ◦磨製石鏃・紡錘車・打製石包丁・砥石・環状石器
図版55 ◦底部圧痕とモデリング陽像
図版56 ◦同拡大（部分２倍―上1b・下3b）

第 I 章　調 査 状 況

第 1 節　調査に至る経過

1977. 12.　工事中に遺跡が発見された為、発掘調査について道路公団及び県教育委員会と協議。1978. 3, 遺跡範囲確認の為の調査を実施する。1978. 5.10, 道路公団・県教育委員会で委託契約を締結する。1978. 5, 文化庁へ発掘届を提出する。1978. 5. 10, 発掘調査着手。1978. 7～9. 地下湧水の増加により発掘作業中断。1978. 10, 発掘調査再開。1979. 2. 10, 発掘調査終了。1979. 3, 文化庁へ遺物発見通知を提出。1979. 3. 16, 道路公団に精算報告書提出。

第 2 節　調査組織

発掘調査主体　山梨県教育委員会
- 調査担当者　県教育庁文化課文化財主事　末木健・新津健
- 調査員　伊藤恒彦（日本大学文理学部卒）、米田明訓（明治大学大学院生）、長沢宏昌（広島大学卒）、小林義典（大正大学）、藤本（早稲田大学卒）、矢野真一
- 調査協力者　松浦宥一郎、服部敬史、武藤雄六、小林公明、林幸彦、樋口昇一、笹沢浩
- 補助員・作業員・整理員（巻末に記載）

第 II 章　遺 跡 概 要

第 1 節　位置

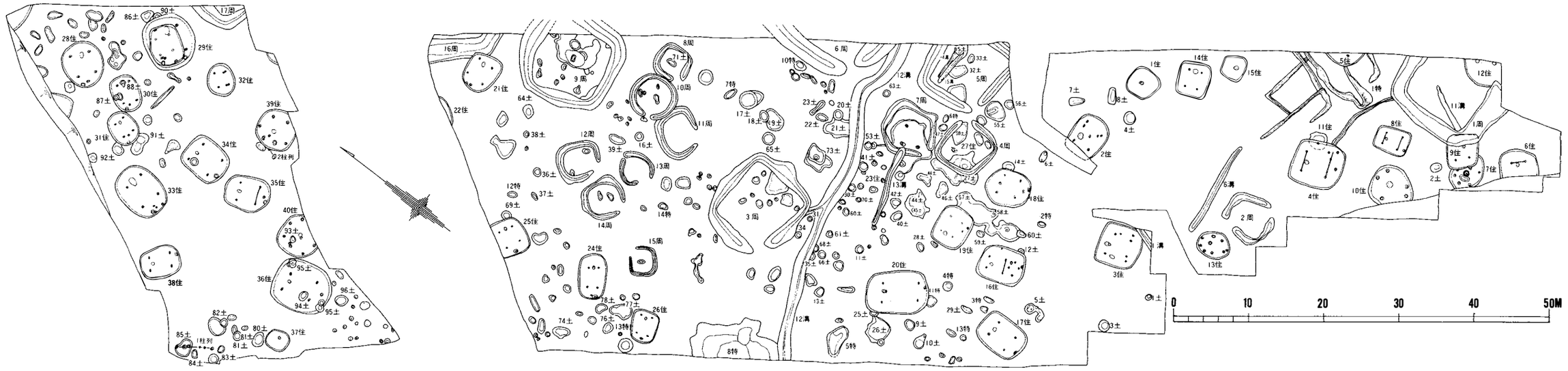
山梨県中巨摩郡敷島町大下条字金の尾地籍に位置する。敷島町は甲府市の西側に接し、北側は奥秩父山地金峰山から、南は国鉄中央線あたりで区切られる。東西幅は狭く、甲府市と北巨摩郡双葉町にはさまれた、南北に長い町であるが、この町の最南端に金の尾遺跡は位置する。

第 2 節　地理的・歴史的環境

前述した位置にある金の尾遺跡は、中央線竜王駅の北方約 400 m にあり、標高 285 m の自然堤防上南端に立地する。西側は茅ケ岳から突き出した赤坂台地が緩かに南へ伸び、赤坂台と金の尾遺跡の間には貢川が流れる。貢川の流れる範囲は低湿地状になっており、遺跡西側で約 500 m の巾がある。遺跡発見が工事中であった為に、この低湿地の試掘調査や発掘調査が不能であった。従って、最も水田が営まれたであろう地区が未調査のままである。しかし、本文でも述べるように、盆地内での自然堤防上末端の弥生時代遺跡を調査しえた事は、この時代を知る上で極めて貴重な資料を得たと言える。

敷島町内の遺跡分布は詳細に調査されたことはないが、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良、平安時代の遺跡や遺物が各地から発見されているし、近年白鳳期瓦窯も発見されるなど、盆地西部では注目されている地域である。

第１図　金の尾遺跡位置図



第２図　金の尾遺跡全体図

第１表　金の尾遺跡住居・周溝墓一覧表

No.	時代	プラン 形	プラン 規模(cm)	炉	柱穴	施設	その他
1	弥生	隅丸方形	436×395	地床炉	不明		
2	弥生	隅丸方形	不明	地床炉	6		
3	弥生	方形	555×564	地床炉	7		
4	弥生	隅丸方形	700×595	土器敷炉	4		
5	弥生	隅丸方形	不明	不明	不明		ほとんど未掘
6	弥生	隅丸方形	不明	石囲炉	4	間仕切溝	完掘せず
7	縄文	楕円形	不明	石囲炉、土器片石囲炉	不明		完掘せず
8	弥生	隅丸方形	480×353	土器敷炉	4	間仕切溝２本	
9	弥生	隅丸方形	不明	地床炉	4		７号住と重複10号溝を切る
10	縄文	楕円形	600×535	地床炉	不明		⅓撹乱
11	縄文	不整形	不明	石囲炉	不明		４号住に切られる
12	弥生	不明	不明	不明	不明		
13	縄文	楕円形	455×365	石囲炉	8		
14	弥生	隅丸方形	453×435	地床炉	4	南壁に粘土塊 南壁ぎわに平石	
15	弥生	不整方形	325×311	地床炉	なし		
16	弥生	隅丸方形	610×488	石囲炉？	4	梯子受けpit 貯蔵穴	火災住居、柱穴から板材
17	弥生	隅丸方形	665×482	石囲炉	4	貯蔵穴	
18	弥生	隅丸方形	612×493	埋甕炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
19	弥生	隅丸方形	596×448	埋甕炉	4	貯蔵穴	
20	弥生	隅丸方形	815×568	埋甕炉	4	貯蔵穴	拡張住居、柱穴から板材
21	弥生	隅丸方形	531×446	地床炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
22	弥生	不明	不明	不明	不明		ほとんど未掘
23	縄文	不明	不明	地床炉	不明		
24	弥生	楕円形	600×377	土器敷炉	不明		
25	弥生	隅丸方形	不明	土器敷炉	4	梯子受けpit	梯子残存
26	弥生	隅丸方形	429×381	埋甕炉	4	北壁寄りに平石 梯子受けpit	入口付近に木炭
27	縄文	不明	不明	石囲炉	不明		
28	弥生	楕円形	580×510	地床炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
29	弥生	隅丸方形	730×650	地床炉	4		拡張住居
30	弥生	楕円形	483×369	埋甕炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
31	弥生	楕円形	448×362	土器敷炉	２？	貯蔵穴	
32	弥生	楕円形	423×364	地床炉	4		
33	弥生	楕円形	720×570	土器敷炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴２	拡張住居
34	弥生	隅丸方形	590×510	地床炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
35	弥生	楕円形	620×462	埋甕炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	
36	弥生	隅丸方形	810×660	土器敷炉	4	梯子受けpit 貯蔵穴	拡張住居
37	弥生	不整円形	300×300	地床炉	なし		
38	弥生	隅丸方形	546×412	土器敷炉	4	貯蔵穴	
39	縄文	楕円形	560×515	地床炉	７？		
40	縄文	円形	不明	土器片石囲炉	不明		完掘せず

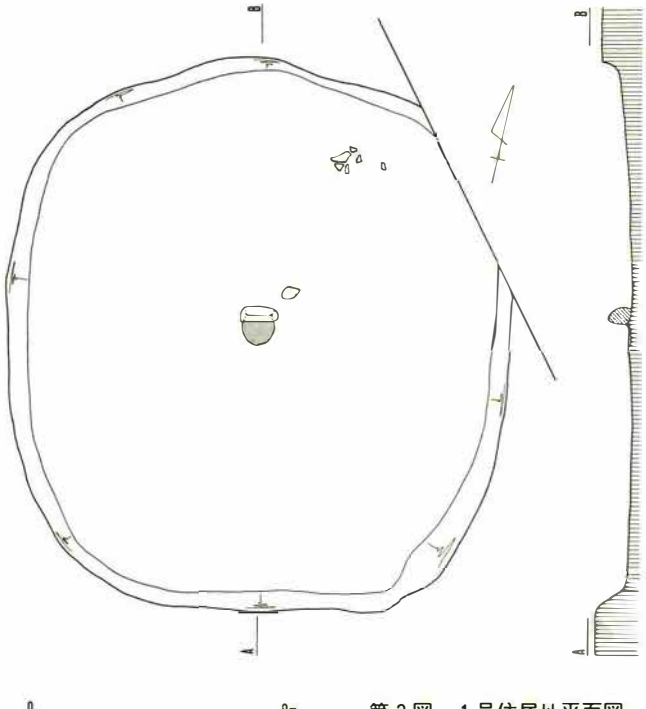
No.	形状	ブリッジ	規模（m）	底面	出土遺物	主体部	備考
1	方形	1	13.8×13.0（推）	平坦	高杯１	無	½未発掘
2	方形	2	6.2×6.5	平坦	壺１	無	
3	方形	1	13.8×11.6	平坦		無	舟底状ピット有
4	方形	1	8.0×6.0	平坦	壺１	無	
5	方形	1	11.0×10.0	平坦	壺１、甕１ 管玉１	無	舟底状ピット有
6	方形	最低１	一辺12.0以上	平坦	甕１	無	
7	方形	1	9.0×8.0	平坦		無	
8	方形	1	5.0×4.5	やや丸底		無	
9	方形	1	12.0×11.0	平坦	壺１、甕２	有？	舟底状ピット有
10	円形	1	直径6.0	平坦	甕	無	舟底状ピット有
11	方形	1	7.0×6.0	やや丸底	甕１	無	
12	方形	1	6.0×5.5	丸底		無	所々底面Ｖ字形
13	方形	2	4.5×4.0	平坦	甕１	無	
14	円形？	1	直径5.5	平坦	甕１	無	舟底状ピット形
15	方形	1	3.5×3.5	丸底		有？	
16	方形	不明	不明	平坦		不明	大部分未発掘
17	方形	不明	不明	平坦	甕１	不明	大部分未発掘

第 III 章　遺構・遺物

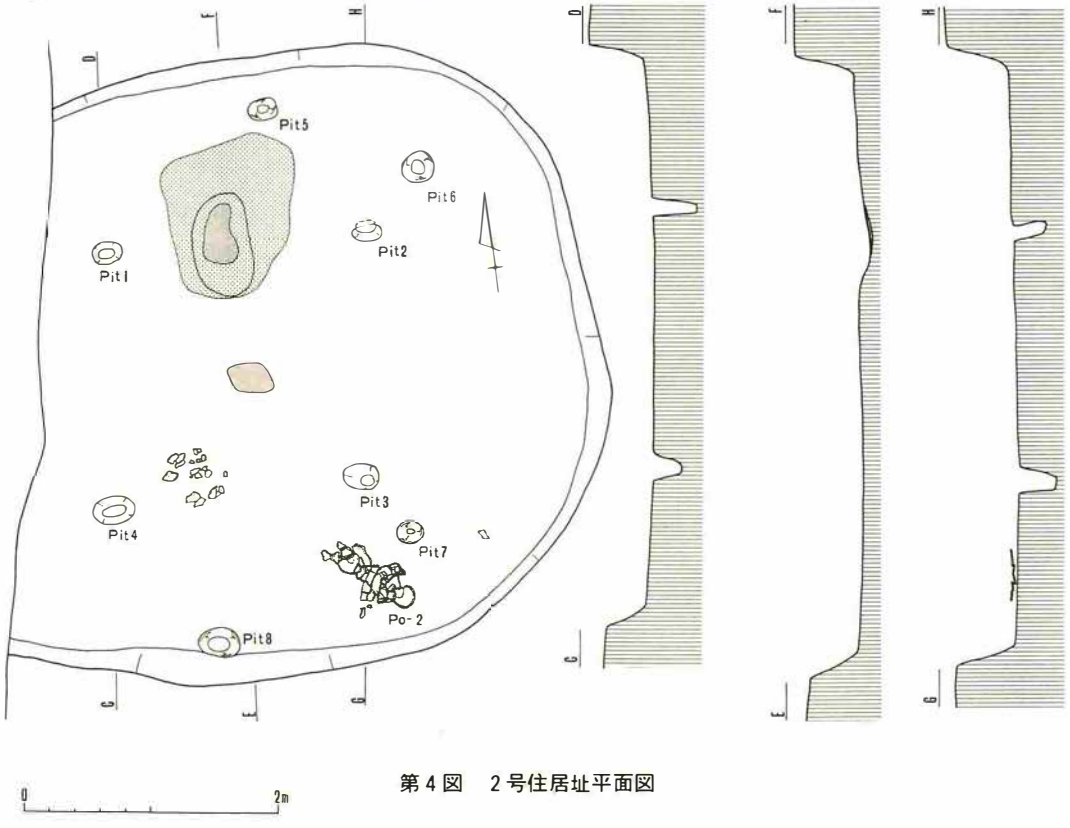
第 1 節　住居址

1 号住居址（弥生）第 3、5 図

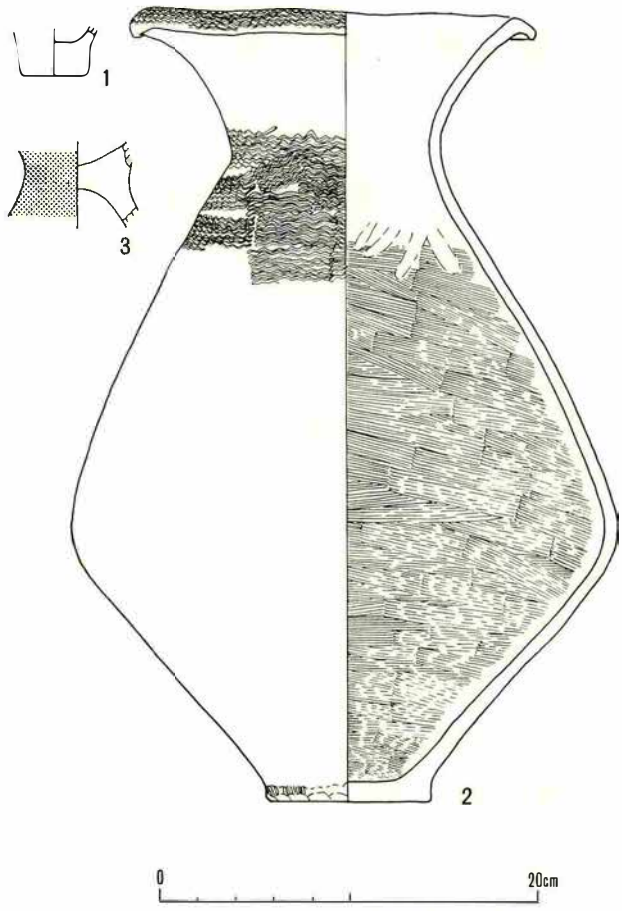
本遺跡の弥生時代集落は中央のＶ字溝をはさんで、南北 2 群に分けることができる。本住居は南集落中央東側に位置し、住居規模は長軸 4.36 m、短軸 3.95 m の隅丸方形を呈し、主軸は長軸方向のＮ－14°－Ｗである。壁高は東18cm、西16cm、南22cm、北14cmで、平均すると17.5 cmの高さをもち、やや外傾している。床は軟弱で、住居中央に枕石を置いた炉があり、規模は東西25cm、南北31 cmの浅い皿状を呈する。柱穴は検出できず、遺物も極て少量である。



第 3 図　1 号住居址平面図



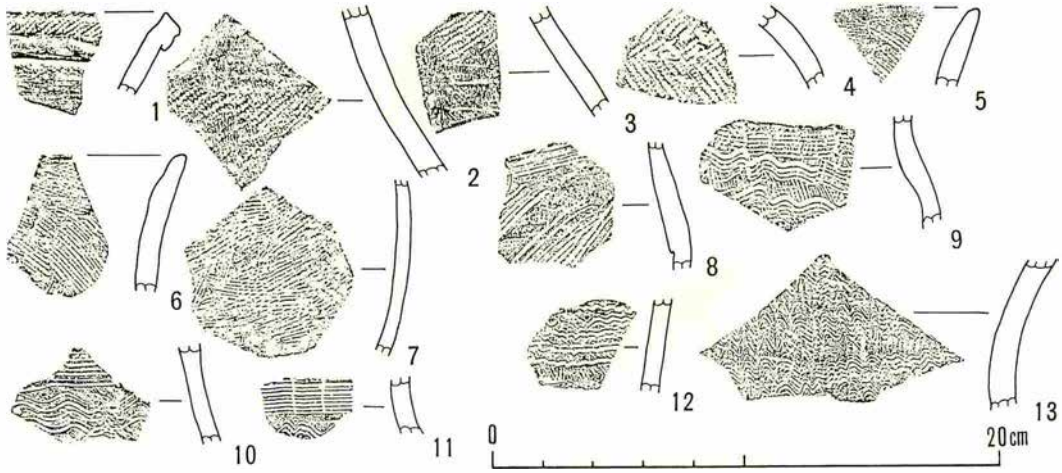
第 4 図　2 号住居址平面図



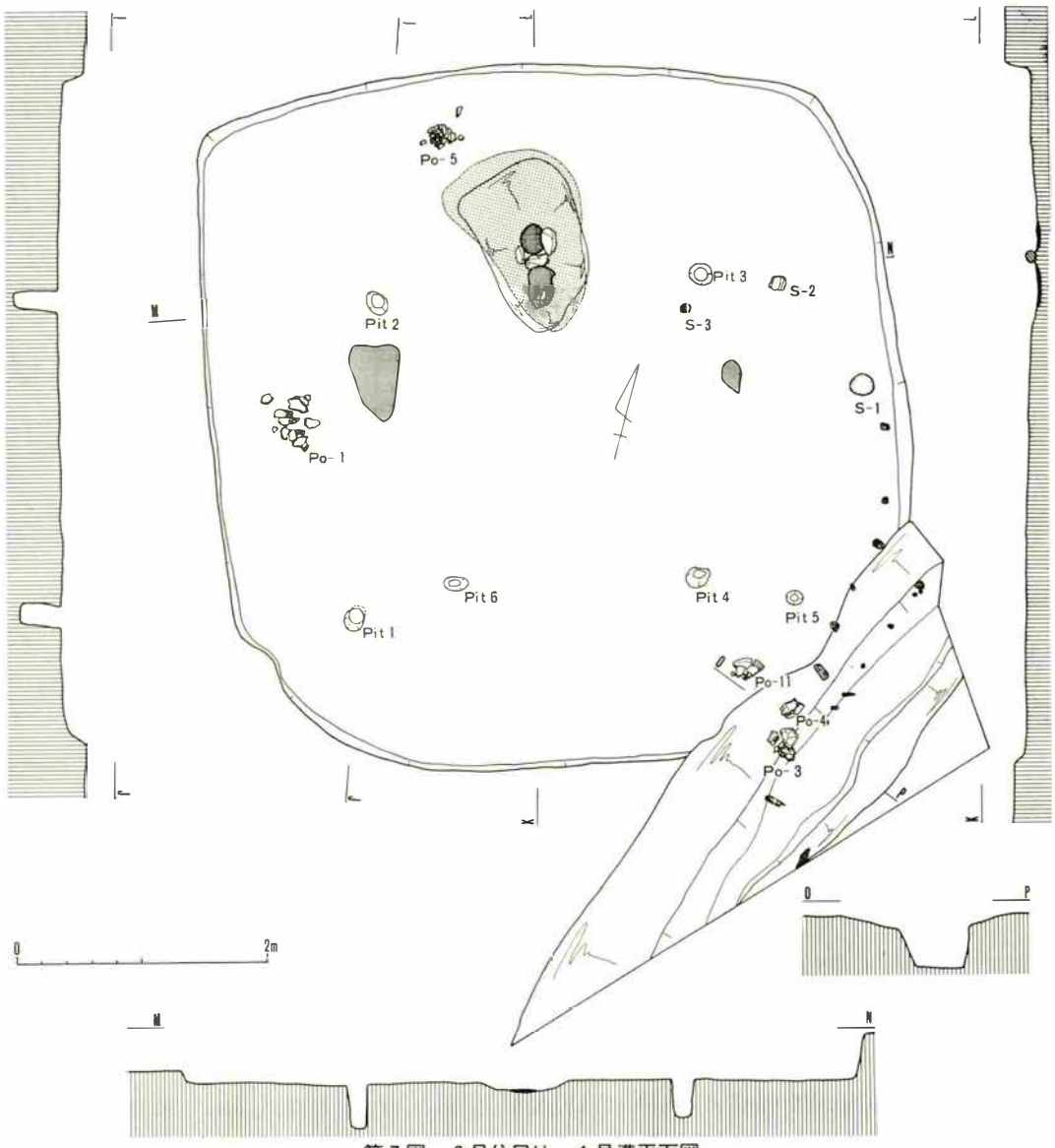
第５図　１、２号住居址出土土器

２号住居址（弥生）第４～６図

南集落中央部に位置し、住居規模は南北4.91ｍ、東西推定5.80ｍであるが、西側は撹乱を受けており正確な規模を測ることができない。平面形は東西に長い隅丸方形で、主軸がＮ－8°－Ｅでほぼ北を向いている。壁高は東58㎝、南37㎝、北44㎝と深い竪穴住居となっており、壁は外傾している。床は柱穴に囲まれた部分が堅くしまっており、周辺はやや軟弱である。地床炉は北柱穴の中間に位置し、東西45㎝、南北83㎝、深さ10㎝の長円形皿形で、焼土は北側に広がっている。柱穴は６本検出されているが、ピット６と７は住居拡張時の柱穴である。主柱穴は５本で、各々の柱穴は主軸に対して直交する軸方向に長い長円形で、ピット１は深さ36㎝、短径17㎝、長径24㎝、ピット２は深さ28㎝、短径11㎝、長径23㎝、ピット３は深さ30㎝、短径20㎝、長径29㎝、ピット４は深さ23㎝、短径21㎝、長径33㎝、ピット５は11.5㎝、短径17㎝、長径22㎝、ピット６は深さ9.5㎝、短径22㎝、長径26㎝、ピット７



第６図　２号住居址出土土器

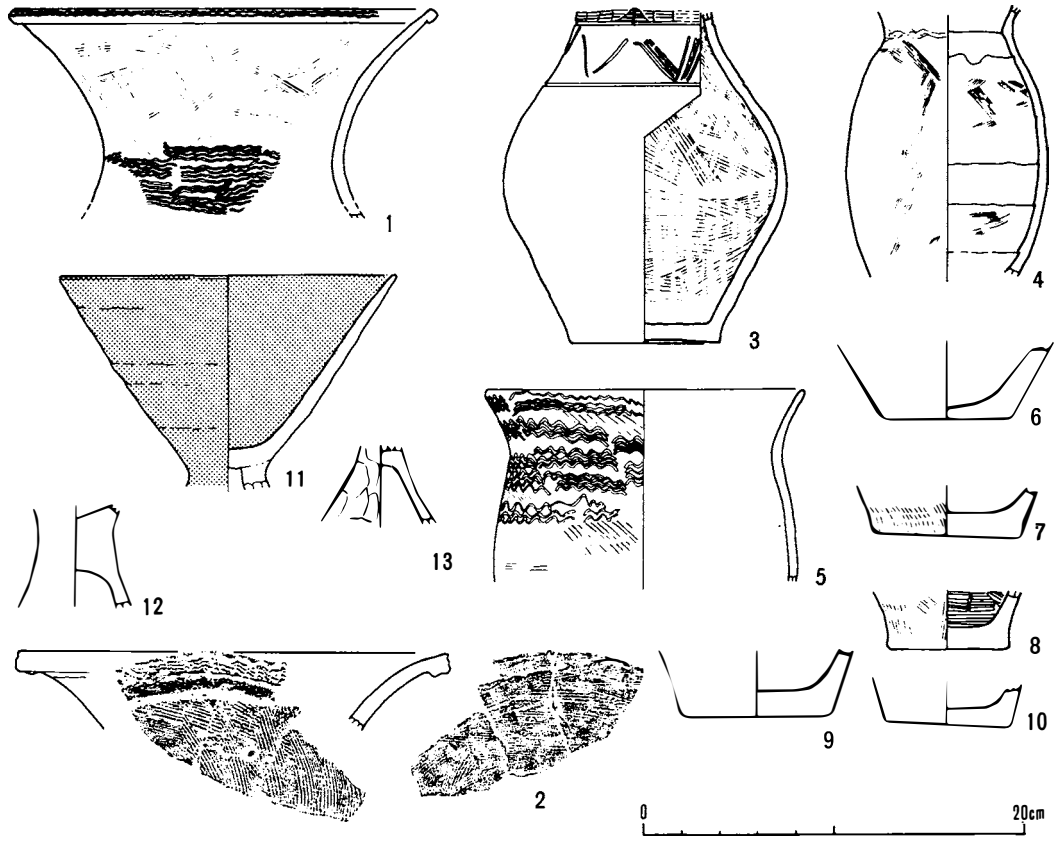


第７図　３号住居址、１号溝平面図

は深さ10.5㎝、短径20㎝、長径23㎝、ピット８は深さ９㎝、短径24㎝、長径32㎝である。主軸南の壁下には梯子受穴があり、東西32㎝、南北24㎝、深さ９㎝である。遺物は床面直上に倒壊していた他はまとまった遺物が少ない。貯蔵穴は確認できない。なお、住居の拡張は、旧柱穴の対角線上に広げており、ピット５も拡張後に設置された柱かもしれない。

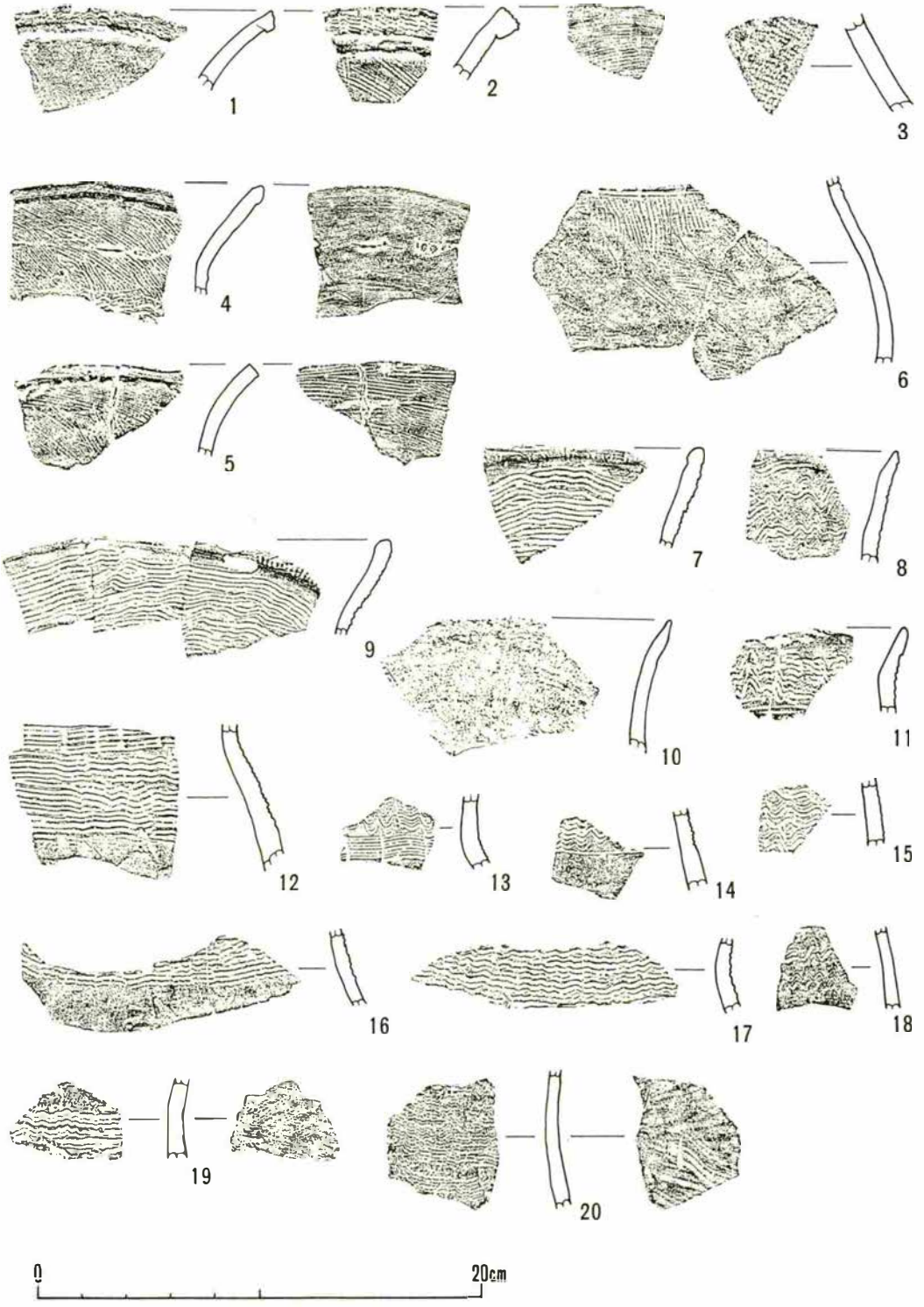
３号住居址（弥生）第７～９図

南集落中央部に位置し、住居規模は南北5.55ｍ、東北5.64ｍのほぼ正方形に近い隅丸方形プランを呈する。東南のコーナーを１号溝に切られているが、遺構の遺存状況は良好である。主軸はＮ－16°－Ｗである。壁は東30㎝、西８㎝、南11㎝、北20㎝で、北東側が深く南西側に浅い

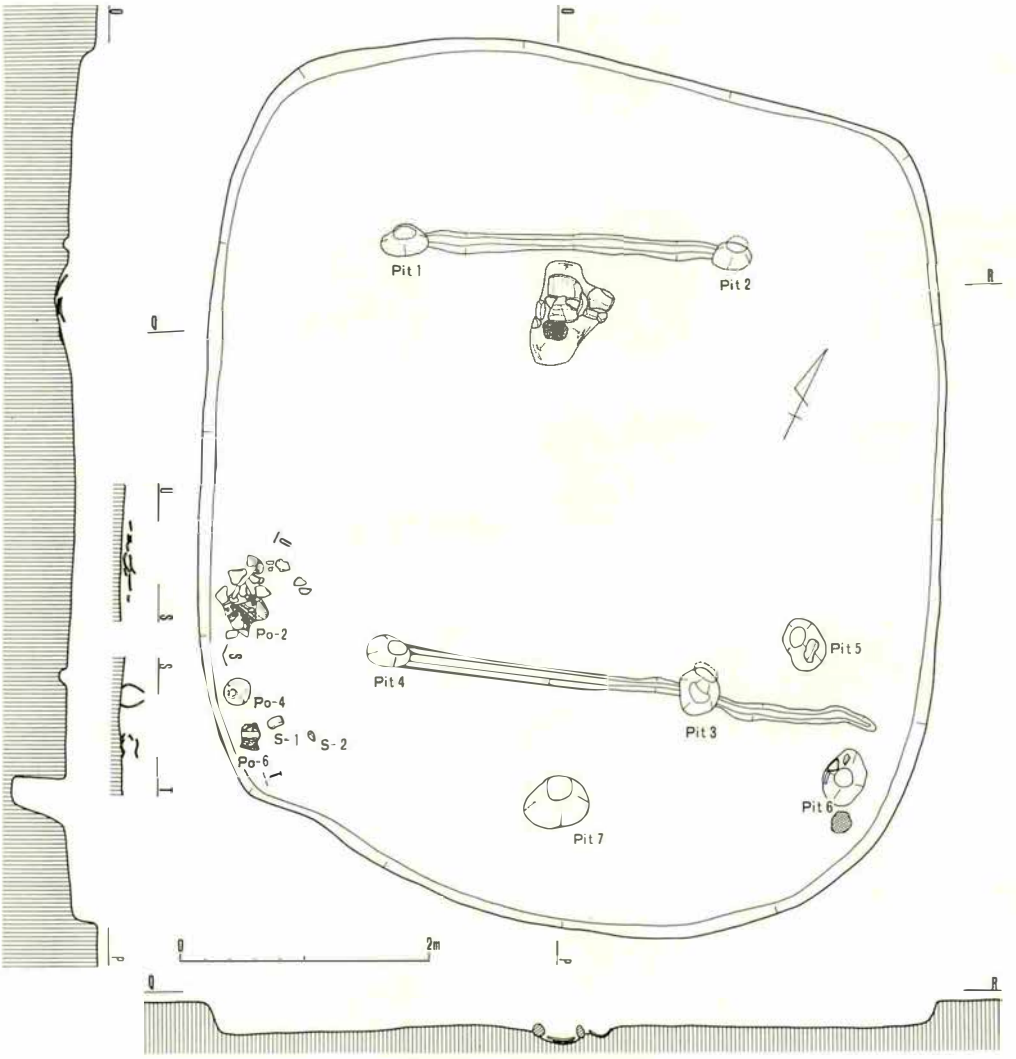


第８図　３号住居址出土土器（１）

状態で、壁面はやや外傾している。床は柱穴に囲まれた中央部が若干しまっているが、周囲は軟らかい。炉は北を除く三方を長方形礫で囲んだ方形石囲炉と、その南に接した楕円形の地床炉が北側柱穴中央に位置する。石囲炉は内径15㎝×25㎝、地床炉は25㎝×35㎝の規模であるが、この２つの炉を含む浅い皿状のピットには焼土が広がっており、南北1.５ｍ×東西80㎝の範囲が最終的に炉として使用されたものであろう。柱穴は６本検出されているが、４本柱穴の建物が１回建て直しをされているので、数が多いのであろう。ただしピット５とピット６が新しいのか、ピット１とピット４が新しいのか判断はつかない。ピット１は深さ35㎝、短径16㎝、長径19㎝、ピット２は深さ34㎝、短径15㎝、長径21㎝、ピット３は深さ30㎝、短径17㎝、長径18㎝、ピット４は深さ33.５㎝、短径16㎝、長径20㎝、ピット５は深さ32㎝、短径11㎝、長径14㎝、ピット６は深さ37.５㎝、短径11㎝、長径20㎝で、ピット１～ピット４までは深さ、径ともそろっている。この住居には梯子受穴、貯蔵穴は認められなかった。出土遺物は、壷２、甕８、高杯２などである。なお、甕のうちPo３とPo4は１号溝中から出土したもので、この住居に含まれないかもしれないが、断面図でも観察できるように、住居から流れ込んだ物として取扱った。



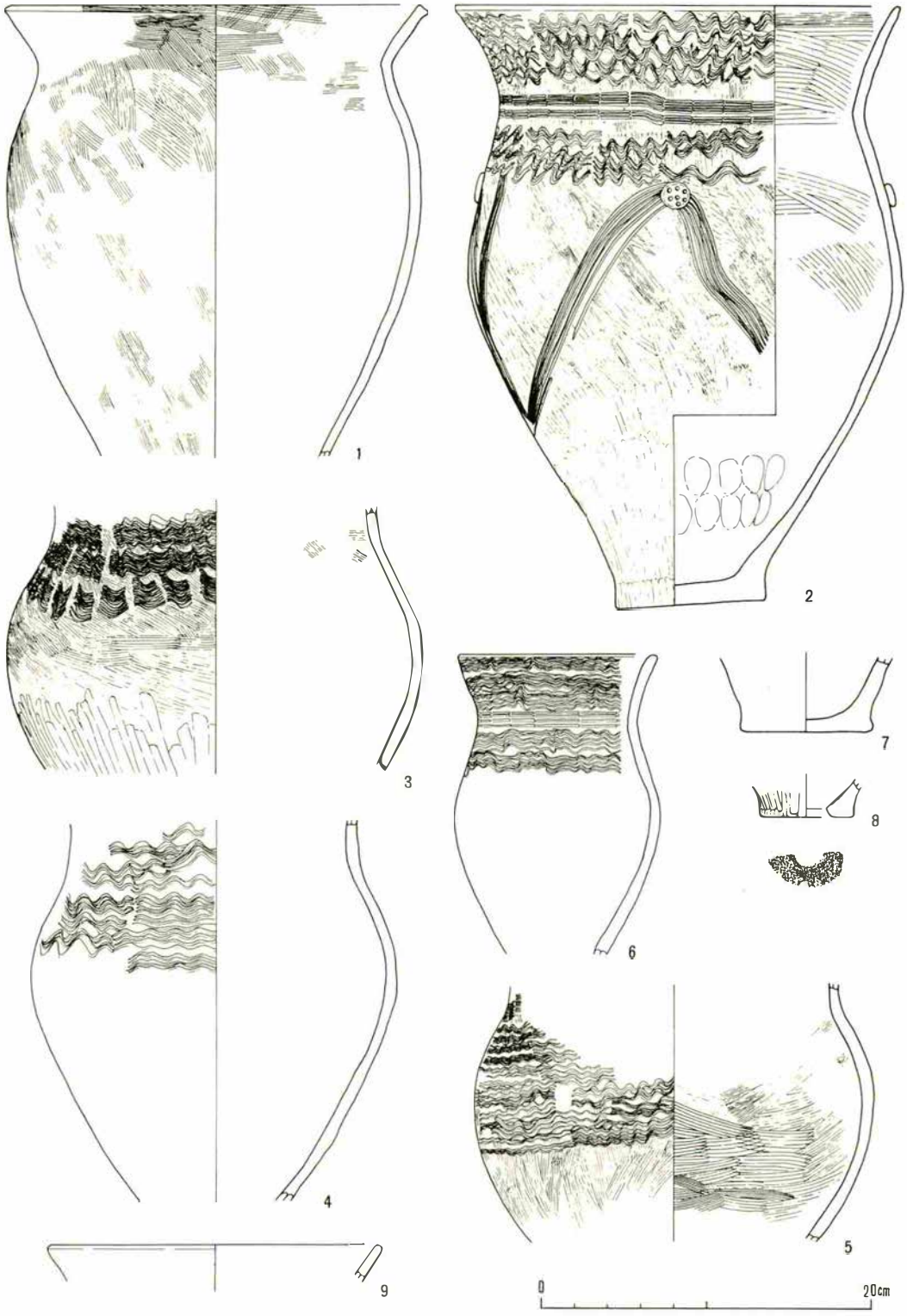
第９図　３号住居址出土土器（２）



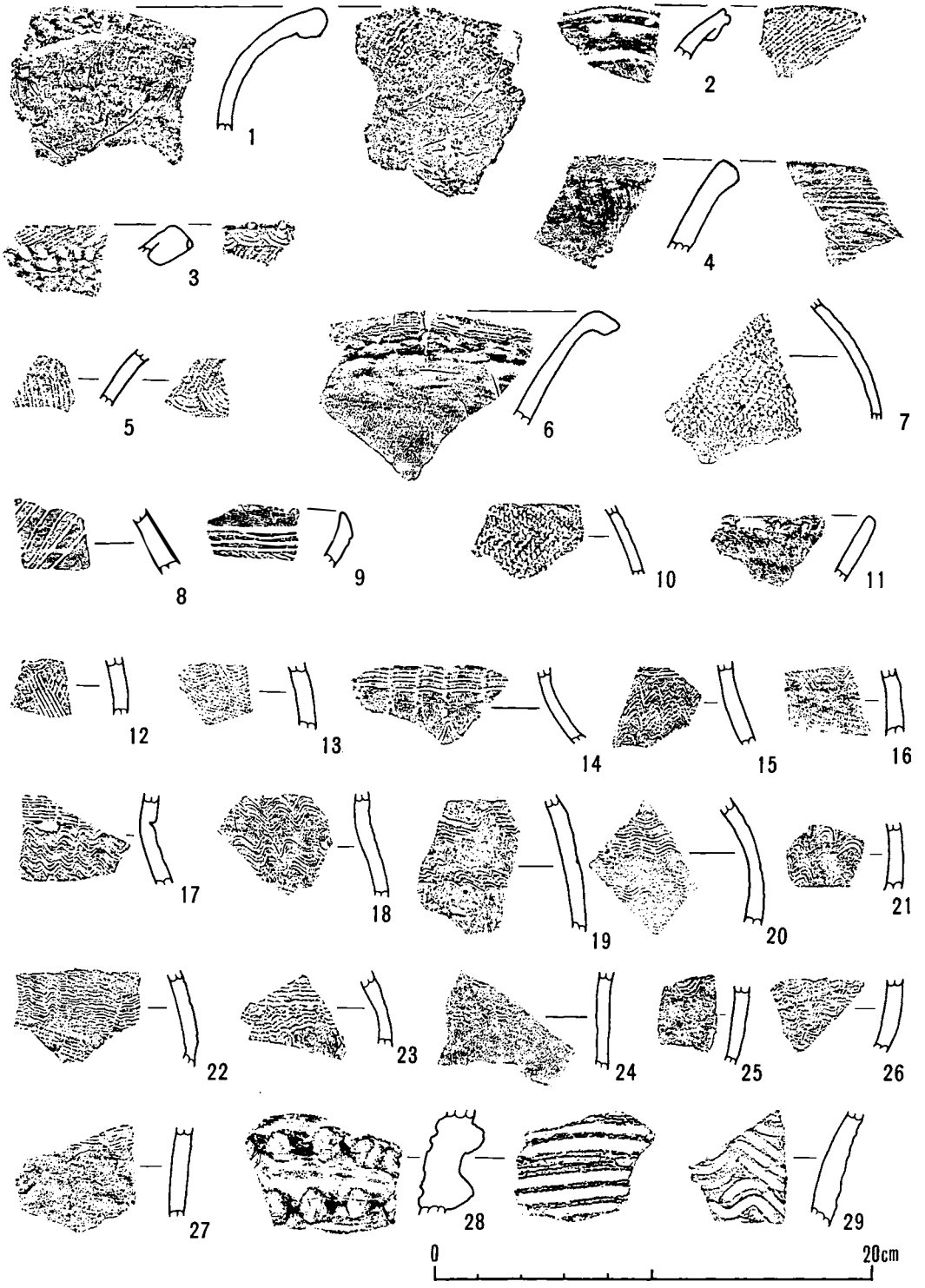
第10図　4号住居址平面図

4号住居址（弥生）第10～12図

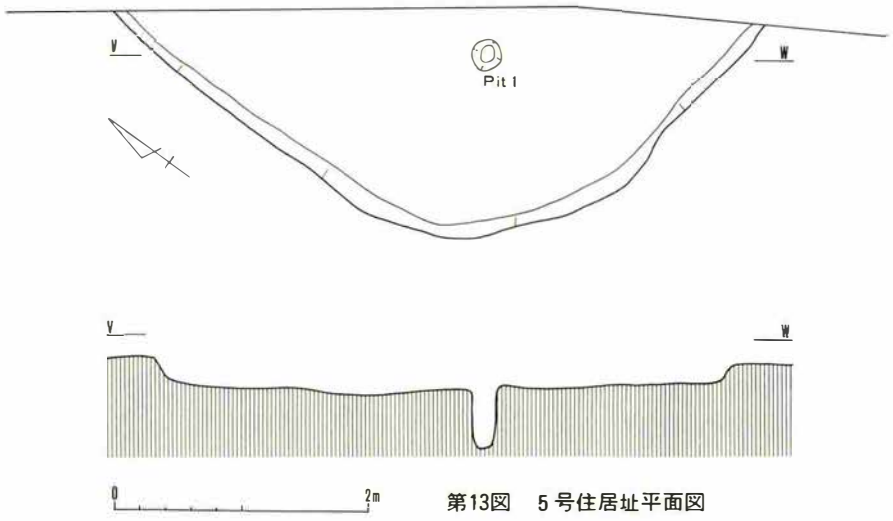
南集落南小群中の北に位置し、縄文時代の11号住居址を切って造られている。規模は長軸7m、短軸5.95m、主軸はN－27°－Wに振れている。住居のプランはやや菱形をした隅丸方形で、特に南側入口部が半円状に膨らんでいる。壁は東17cm、西21cm、南18cm、北11cmの高さをもち、やや外傾している。床面は柱穴に囲まれた部分は良好であるが、外側は若干軟弱である。炉は北側枕穴の間に造られるが、中央よりやや南に位置する。炉の構造は石囲土器敷炉で、東西56cm、南北85cmの規模である。柱は4本柱で、補助支柱がピット5（深さ41cm、短径41cm、長径52cm）と考えられる。主柱穴のピット1は深さ53cm、短径25cm、長径38cm、ピット2は深さ40cm、短径23cm、長径31cm、ピット3は深さ35cm、短径32cm、長径39cm、ピット4は深さ42cm、短径26cm、長径36cmである。各々の柱穴は主軸と直交する方向に長径を持ち、しかも柱穴底面が上面より北へずれている。これは柱を斜に立てたのではなく、柱穴の北面だけを垂直に造り、この面に添わせて柱を建てたものであろう。なお、ピット1とピット2、ピット3とピット4



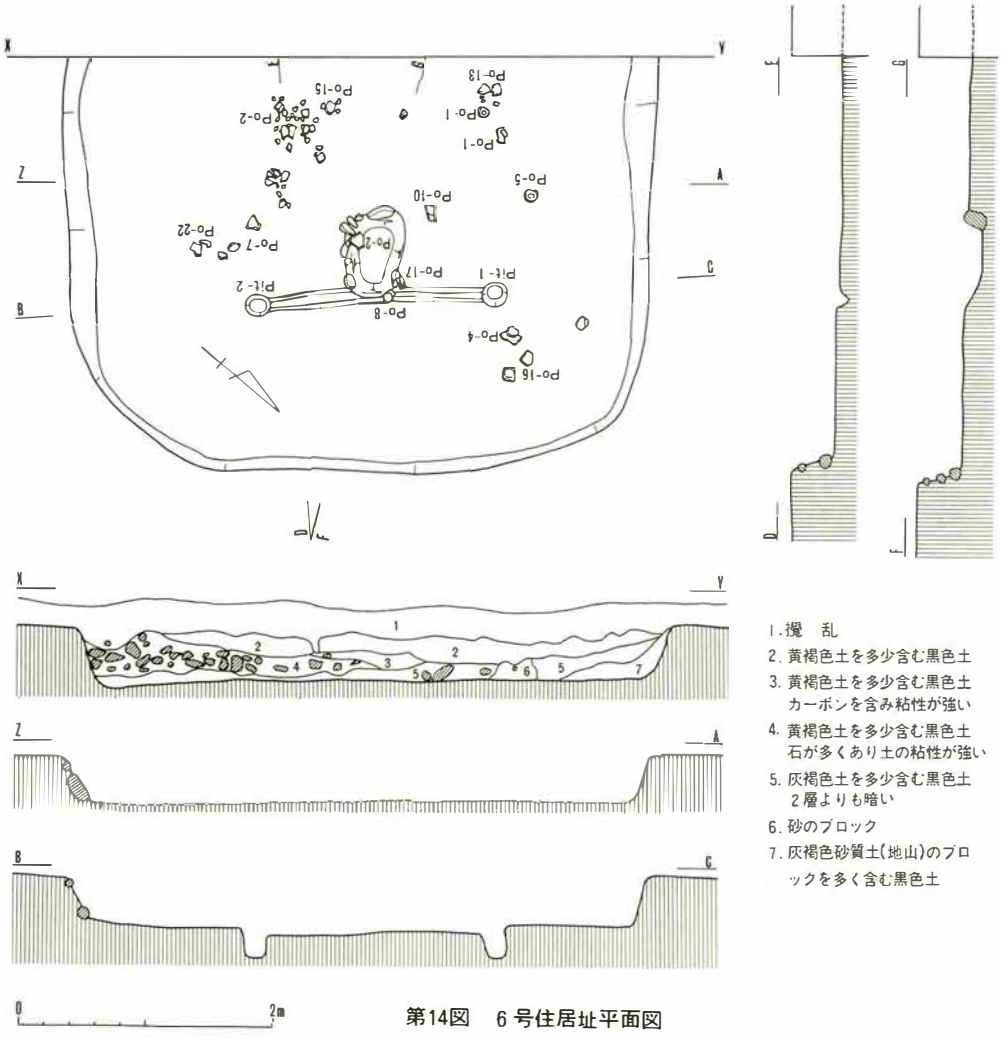
第11図　4号住居址出土土器（1）



第12図　4号住居址出土土器（2）



第13図　5号住居址平面図



1. 攪　乱
2. 黄褐色土を多少含む黒色土
3. 黄褐色土を多少含む黒色土
   カーボンを含み粘性が強い
4. 黄褐色土を多少含む黒色土
   石が多くあり土の粘性が強い
5. 灰褐色土を多少含む黒色土
   2層よりも暗い
6. 砂のブロック
7. 灰褐色砂質土(地山)のブロ
   ックを多く含む黒色土

第14図　6号住居址平面図

をそれぞれ連結する浅い溝が検出された。この用途については不明であるが、この溝中に細長い木が埋め込まれていた例（35住）もあるので、一応間仕切溝と呼称しておきたい。貯蔵穴は住居南東隅に近いピット６を想定している。規模は深さ29.5㎝、短径23㎝、長径46㎝の長円形ロート状を呈している。中より土器片が若干出土している。梯子受穴は主軸上にあり、南壁からほぼ１ｍ離れた所にある。規模は深さ41㎝、長径52㎝で、底面は北に偏している。穴の傾斜は27°あり、この延長線と壁の垂直線との交点が旧来の壁高を表示することができると考えられるが、その場合は壁高１ｍ以上になる。南に張り出した壁を柱穴間仕切溝と並行に修正すると、壁ラインは梯子受穴南に接する部分となり竪穴の深さは50㎝位に納まるので、住居プランを再検討する必要があるかもしれない。出土遺物は、住居の南西隅にかたまって遺存しており、甕７、高坏１、甑１、磨製石鏃１などが出土している。炉内に敷かれた土器は無文の大型壺の破片で、焼成を受けてボロボロとなっている。

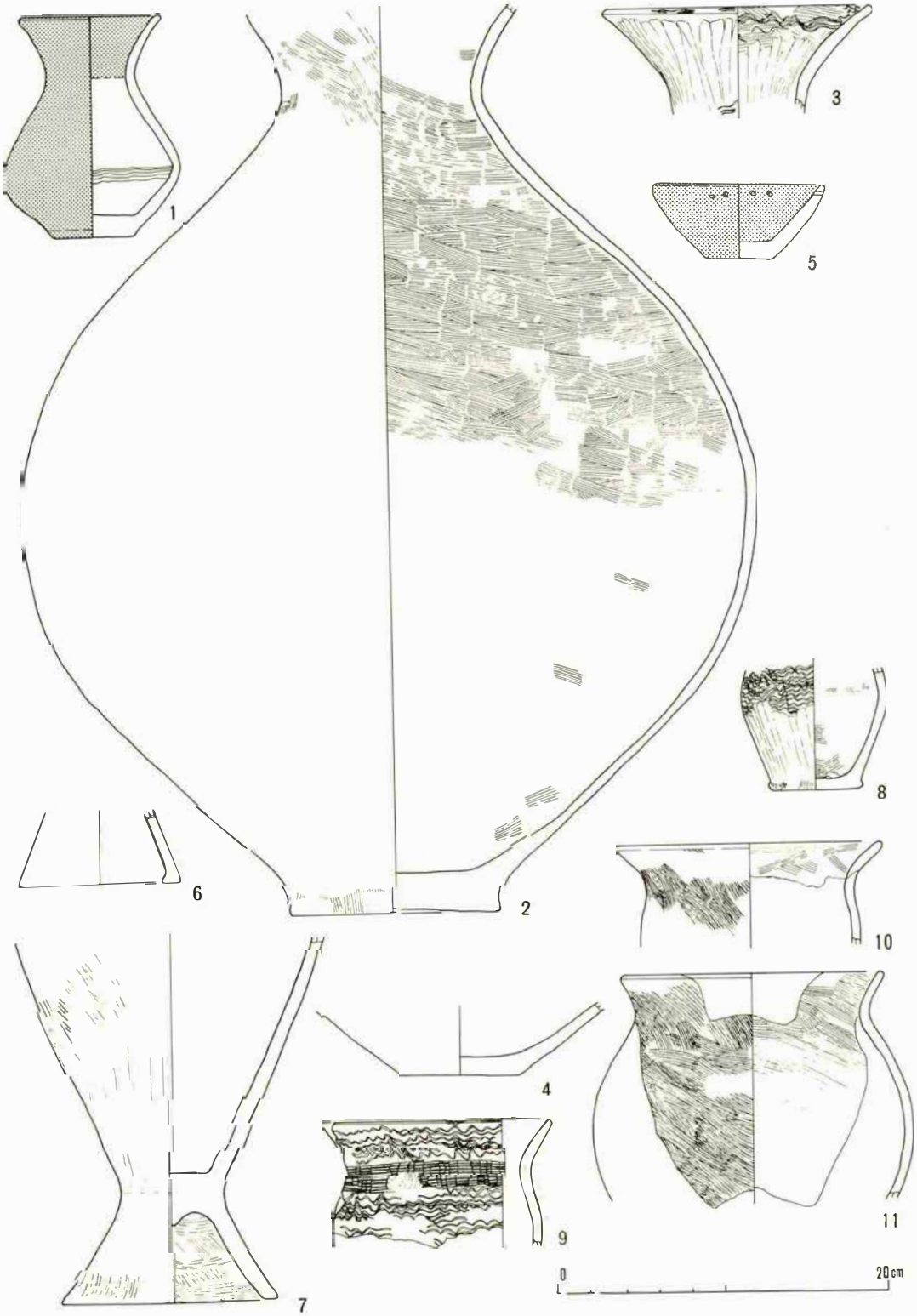
５号住居址（弥生）第13図

南集落南小群の東端に位置し、調査区域外に住居の大半が出ているので、詳細は不明である。周辺には２、３、５、７、８号溝が交錯しており、遺構にも一部かかっている。規模は不明であるが、主軸はほぼ北を向いており、確認できる壁長は、南壁３ｍ、西壁３ｍで、隅は丸く造られている。壁高は南15㎝、西16.5㎝であり、やや外傾する。床面は軟弱で、あまり良好ではない。炉不明。柱穴は１本検出された。深さ47㎝、短径12㎝、長径12㎝である。この他、梯子受穴、貯蔵穴などの施設は確認できず、遺物も見るべきものは無い。

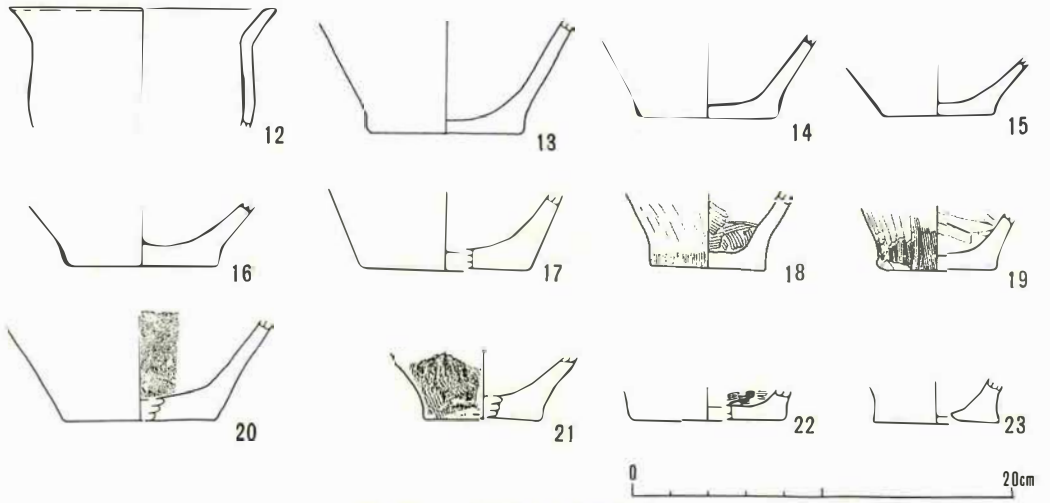
６号住居址（弥生）第14～19図

南集落南小群の最南に位置し、住居址の南西半分が河川によって流出している。住居の規模は主軸方向で残っているのが3.3ｍ、直交する軸で4.6ｍである。住居のプランは隅丸方形で、主軸の方位はＮ―53°―Ｅと大きく東にふれている。この南小群の住居は、南の住居ほど主軸が東に向く傾向が見られる。壁高は南東34㎝、北西39㎝、北東32㎝で、やや外傾している。この住居の掘られた地層は、人頭大から挙大の河原礫が多く入った砂質土で、壁にも礫が顔を出している。床面も同様に礫が露出している部分が多く、良好ではない。炉は枕石を南に置いた楕円形掘込み炉で、北東柱穴の中央に位置し、掘込み周辺には土器片と小礫が若干並べられている。規模は60㎝×50㎝である。柱穴は２本検出され、ピット１は深さ25㎝、直径19㎝、ピット２は深さ22㎝、直径18㎝で、柱穴のプランはほぼ円形である。柱穴を連結する間仕切溝は巾10㎝でＶ字形断面をもっている。

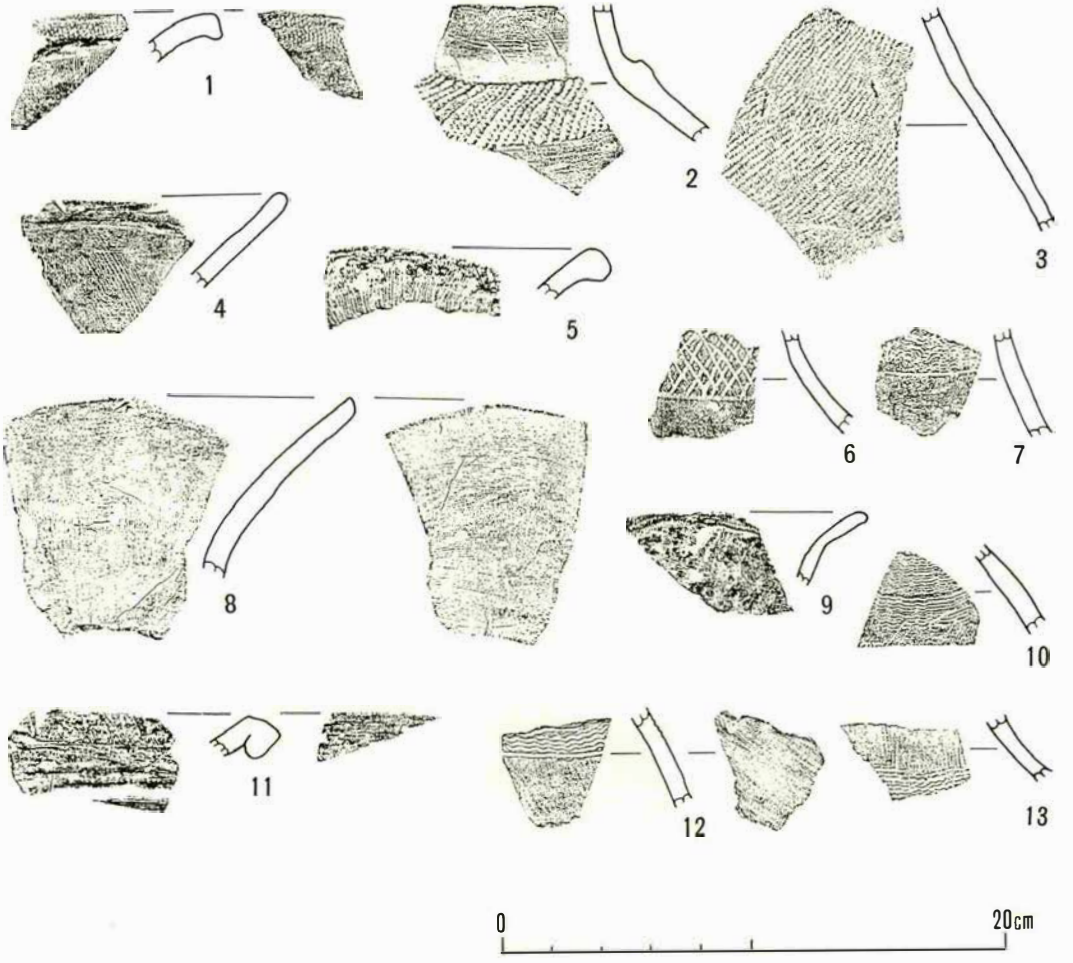
住居内の覆土は礫が多く含まれ、礫の間に土器が含まれている状態であった。礫は南東側で厚く堆積しており、投げ込まれた状態である。出土遺物は甕16、壷３、鉢１、磨製石鏃１などが出土している。特に赤彩された小型壷と口唇に小孔が２孔づつ対に穿たれた小型赤彩坏は良好なセットで、この住居の特殊性を暗示しているものと思われる。



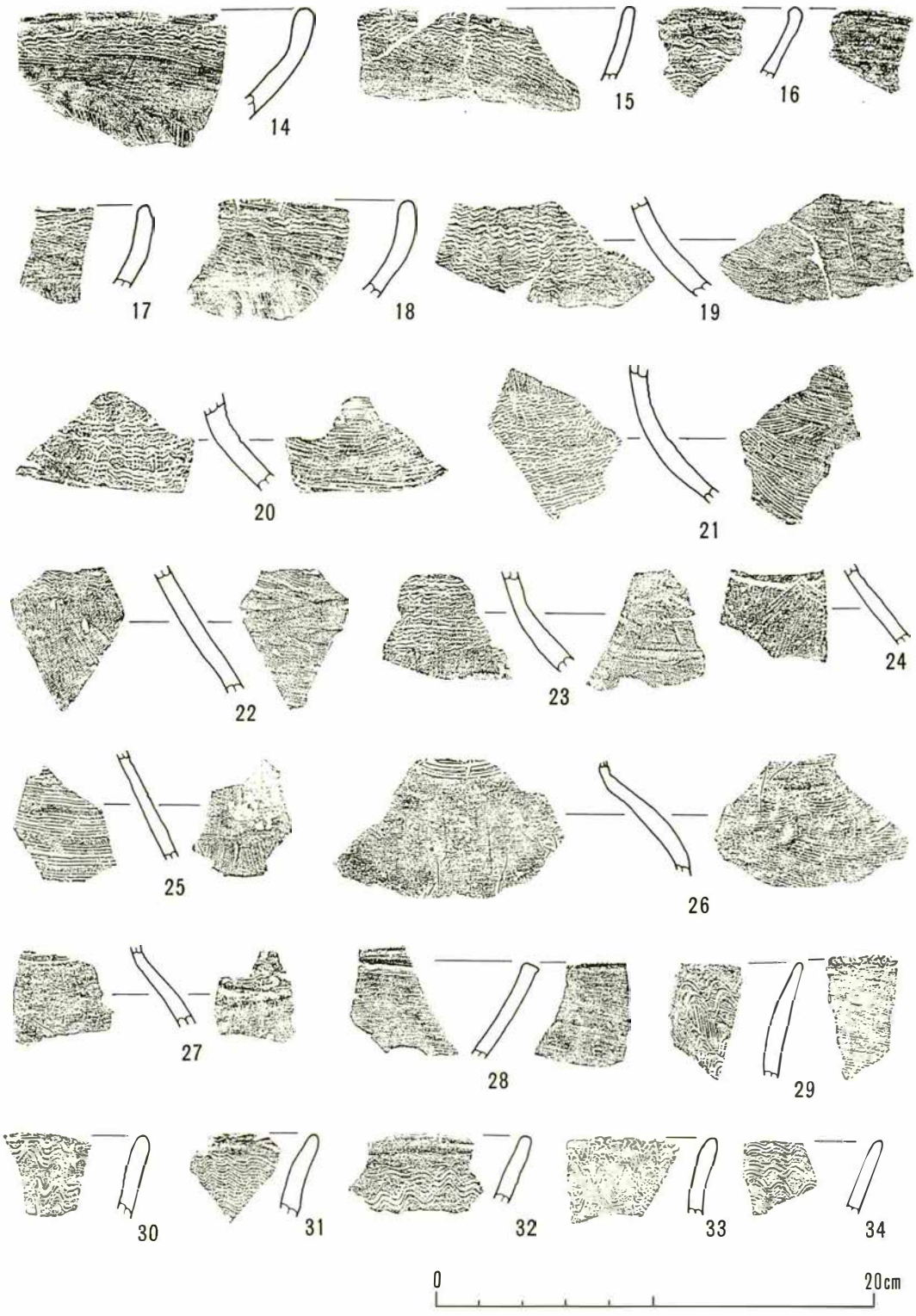
第15図　6号住居址出土土器（1）



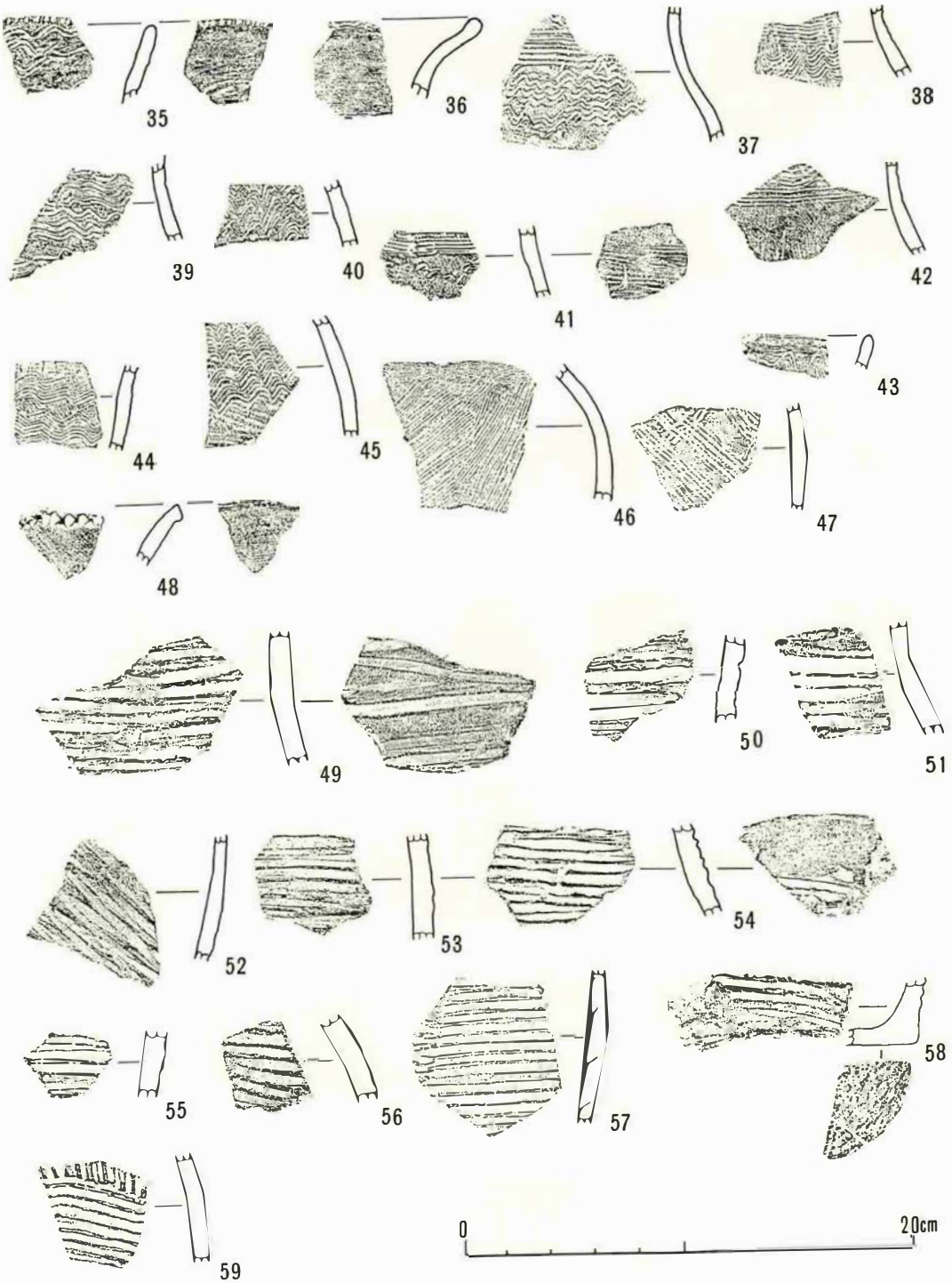
第16図　6号住居址出土土器（2）



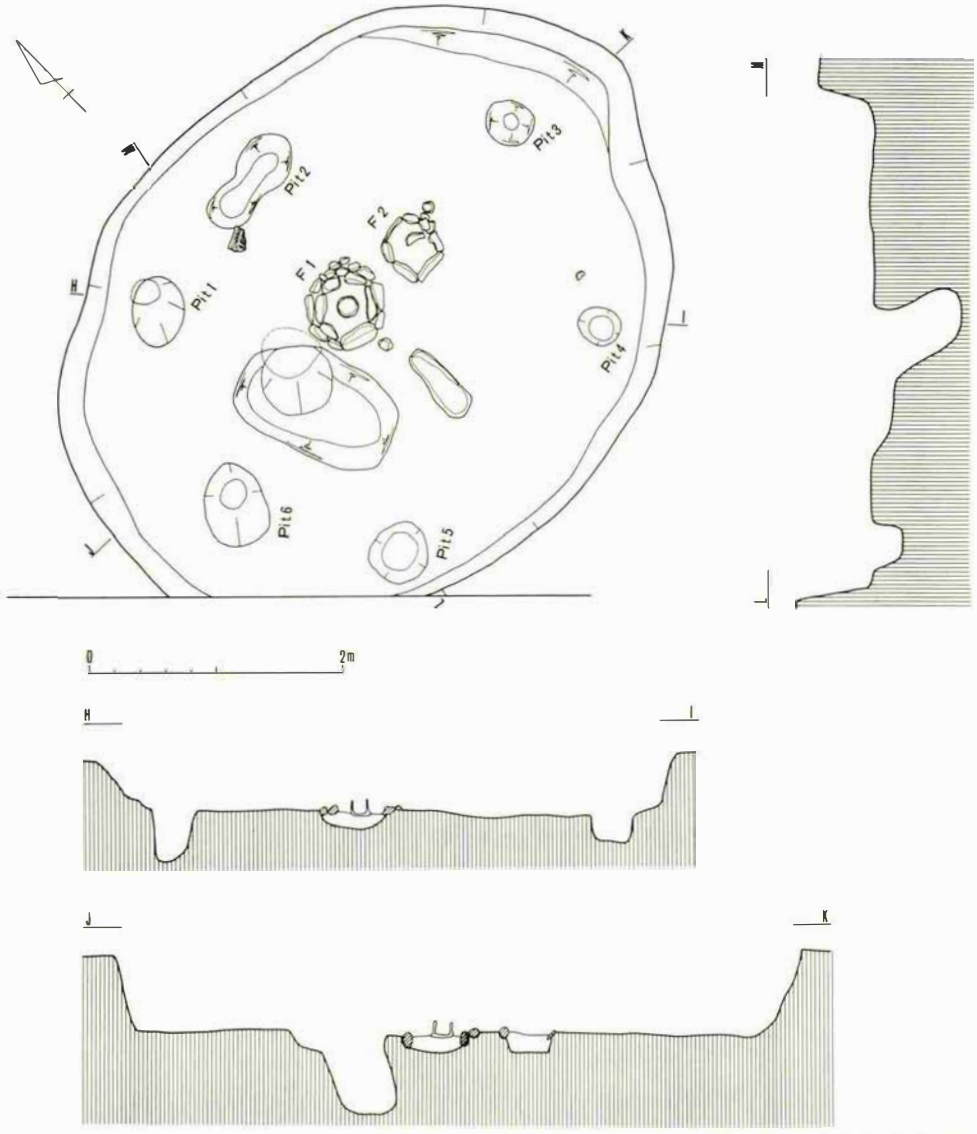
第17図　6号住居址出土土器（3）



第18図　6号住居址出土土器（4）



第19図　6号住居址出土土器（5）

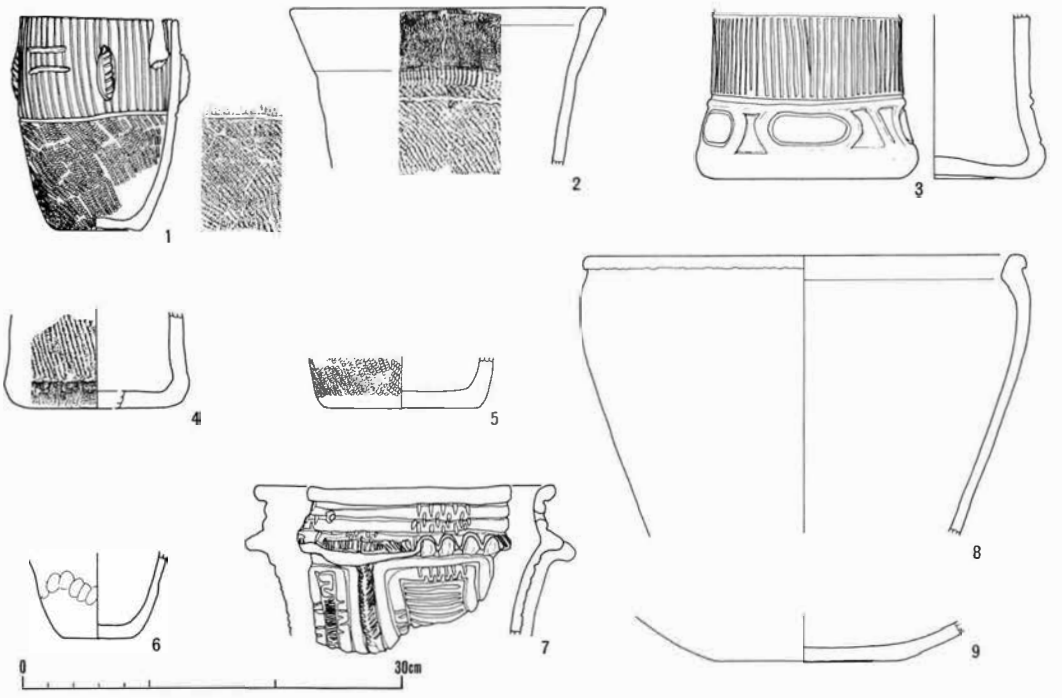


第20図　7号住居址平面図

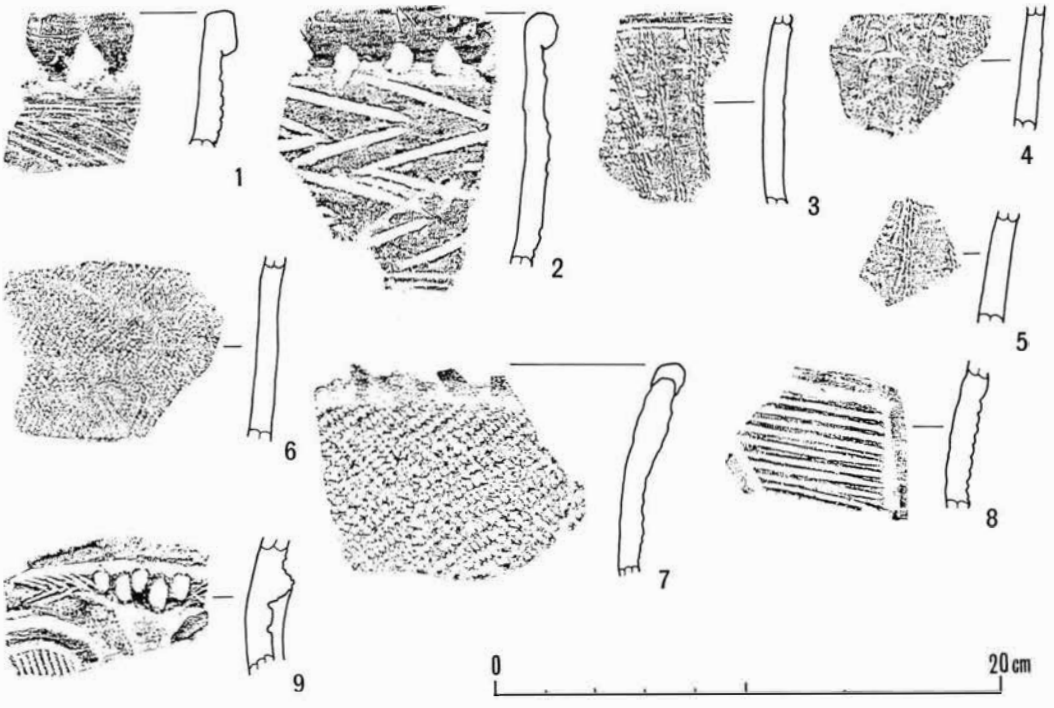
7号住居址（縄文）第20～23図

縄文時代の住居址群は、散村的分布を示し、同時期で重複しているものは無く、極めてまばらである。本住居址は縄文時代住居としては最南端に位置し、9号住居に東側を切られているが、床面までは達していないので、その全貌は残っている。住居は東西に長い楕円形を呈し、長軸5.48m、短軸4.2mの規模で、主軸は2基の炉の中の中心点を繋ぐ線とすれば、N—91°—Eとなる。壁は東69cm、西54cm、南44cm、北56cmの高さがあり、やや外傾しているものの垂直に近い状態である。炉は2基ある。どちらも石囲炉で、住居中心に位置するF1炉は中央に深鉢形土器胴部下半を置き、長方形の礫を2重に巡らした立派な円形石囲炉で、外径東西65cm、南北66cmの規模である。F2炉はF1炉の東にあって、F1炉との間は20cm弱である。この炉は長方形礫5個と1片の土器片で6角形の石囲炉となっており、東西45cm、南北47cmの大きさである。柱穴は6本あり、ピット1は深さ42cm、短径41cm、長径56cm、ピット2は深さ30cm、

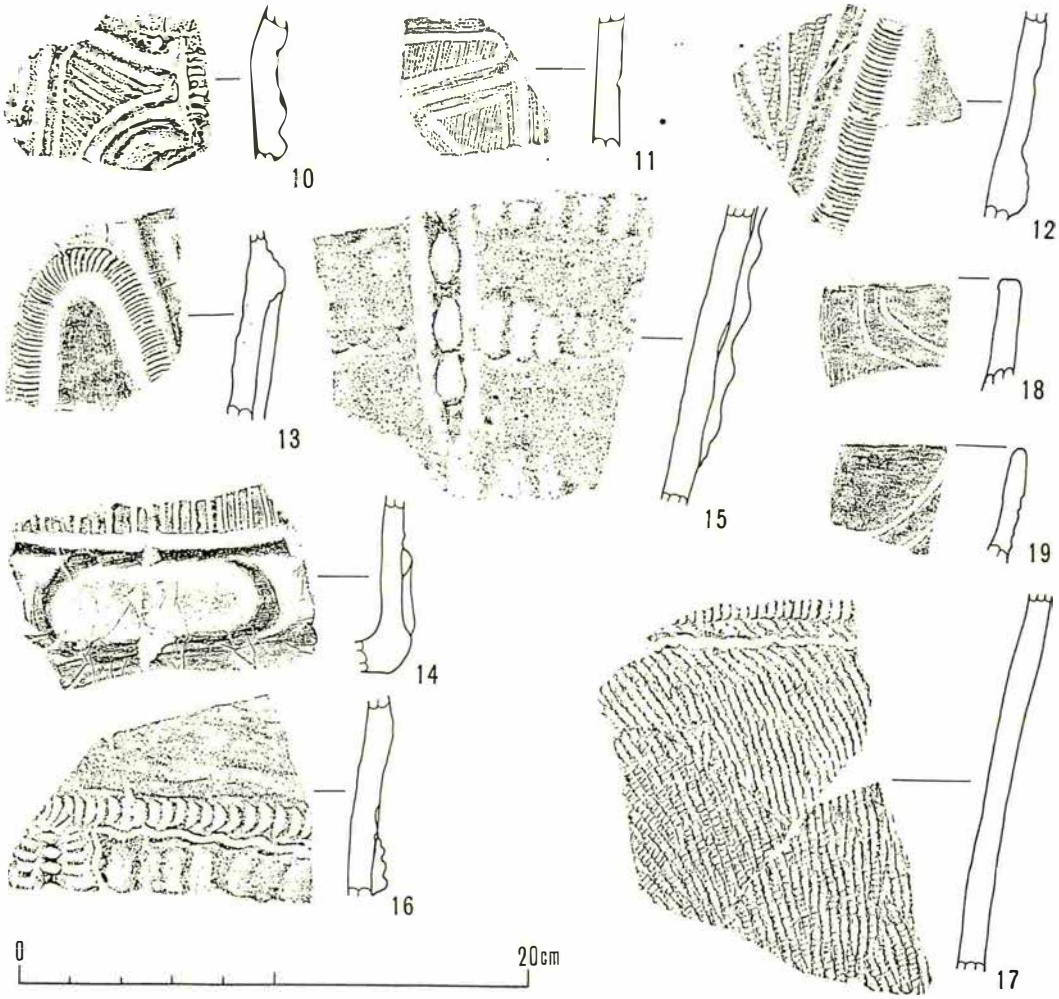
短径26cm、長径83cm、ピット３は深さ13cm、短径35cm、長径40cm、ピット４は深さ22cm、短径30cm、長径35cm、ピット５は深さ24cm、短径47cm、長径47cm、ピット６は深さ43cm、短径49cm、



第21図　７号住居址出土土器（１）



第22図　７号住居址出土土器（２）



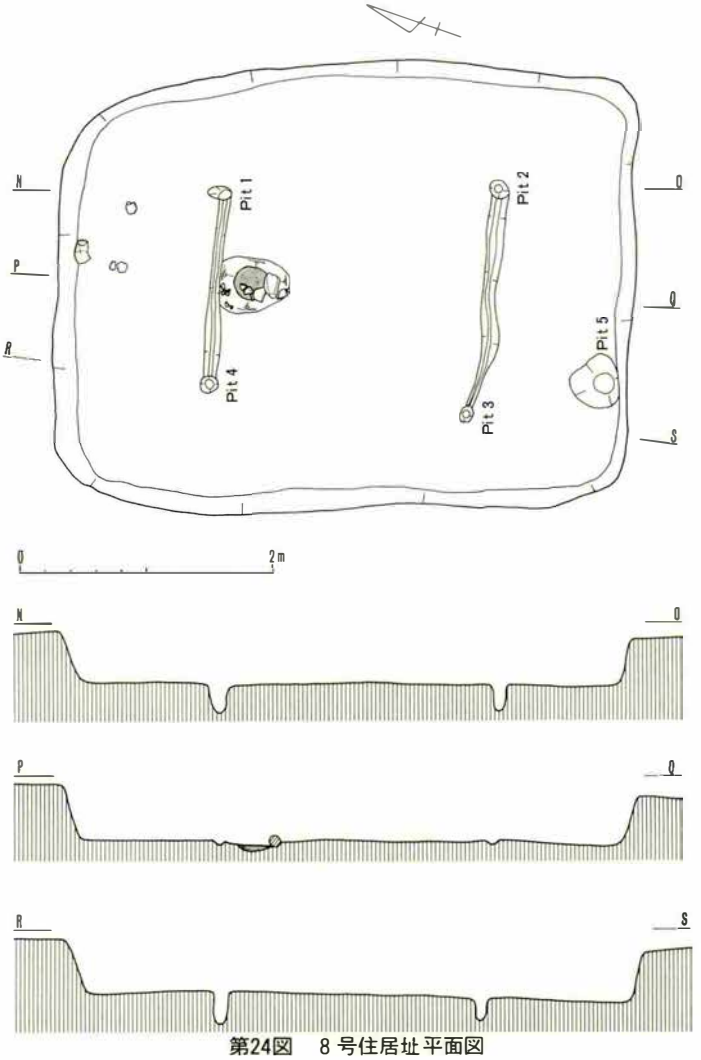
第23図　7号住居址出土土器（3）

長径66cmである。F1炉の西には深さ20cm、径80cm×130cmの土壙があり、その中央に直径60cm、深さ65cmのピットがあるが、住居とは関係の無いものと考えられる。

出土土器は縄文中期中葉のもので、深鉢形土器が多い。打製石斧4、土製円盤3個等が出土している。

8号住居址（弥生）第24～26図

南集落小群のほぼ中央に位置し、他の遺構とは重複しない。住居の規模は長軸4.8m、短軸3.53mの隅丸方形をしており、やや小型の住居である。主軸は長軸方向で、N－15°－Wである。各辺の長さは北辺2.7m、南辺3.2m、東辺4.3m、西辺4.5mで、北東隅を除く各コーナーは比較的直角である。壁高は東38cm、西37cm、南35cm、北42cmで、若干外傾斜している。床面は中央部がやや良好であるが、周辺部は軟弱である。炉は南側に枕石を置く皿状の掘り込み炉で、東西45cm、南北55cmの卵形をしている。炉位置は、北側柱穴間にあって、間仕切溝より内側に造られている。柱穴は4本で対角線上に配され、ピット1は深さ22cm、短径10cm、長径18



第24図　8号住居址平面図

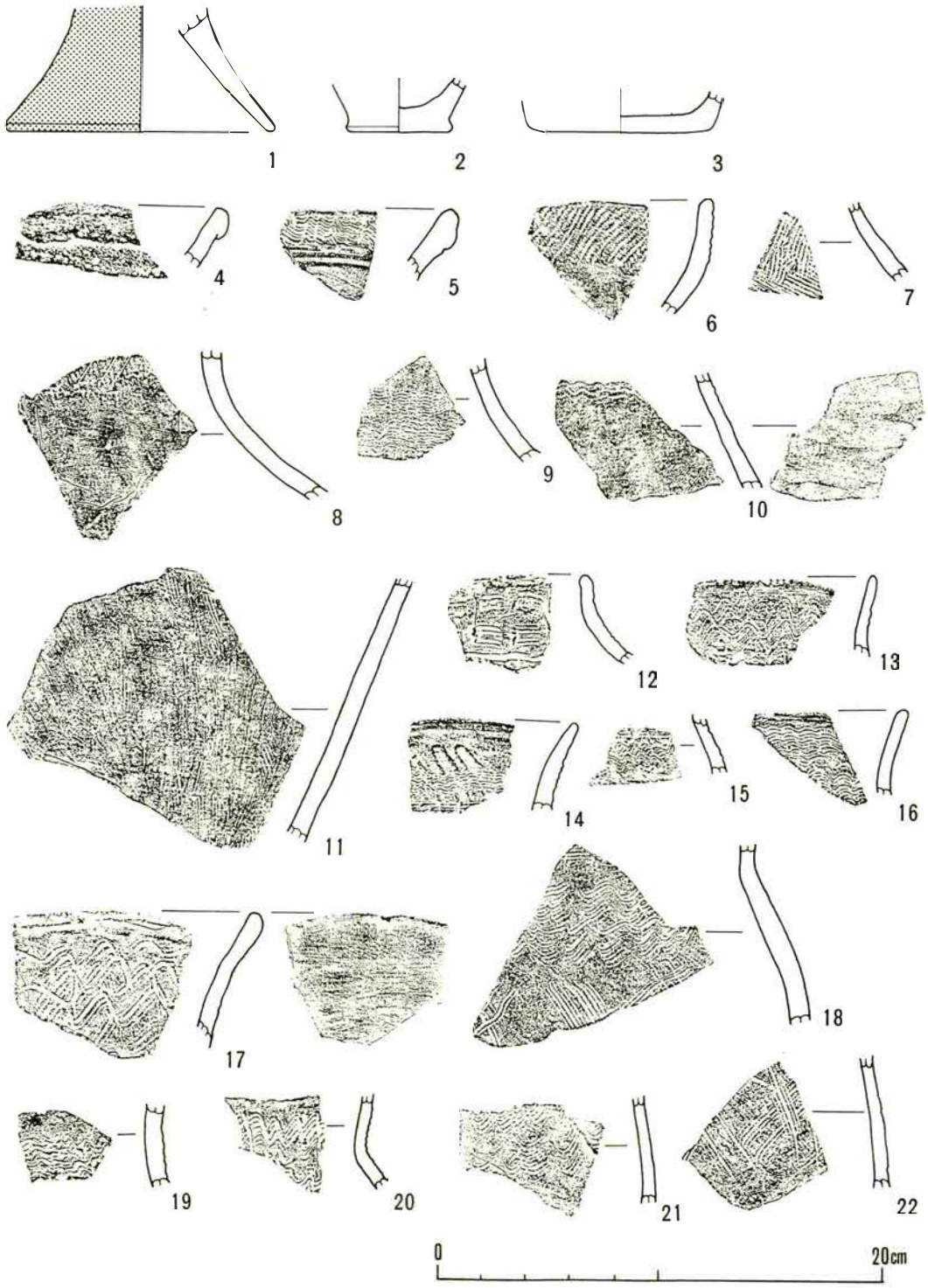
cm、ピット2は深さ20cm、短径15cm、長径18cm、ピット3は深さ25cm、短径14cm、長径14cmである。全体に柱穴は小さく浅い傾向をもつ。ピット1とピット4、ピット2とピット3の間にはそれぞれ間仕切溝が掘られている。巾は8cm～15cm、深さは5cm程で、断面は舟底形を呈する。貯蔵穴は南壁中央よりやや西側にずれて造られ、深さ24cm、東西42cm、南北39cmでロート状断面である。

出土遺物でまとまった物は無く、いづれも破片である。高坏脚、甕底部、同胴部破片などがあり、軽石が覆土中から出土している。なお、若干であるが、条痕文系の土器が混入している。

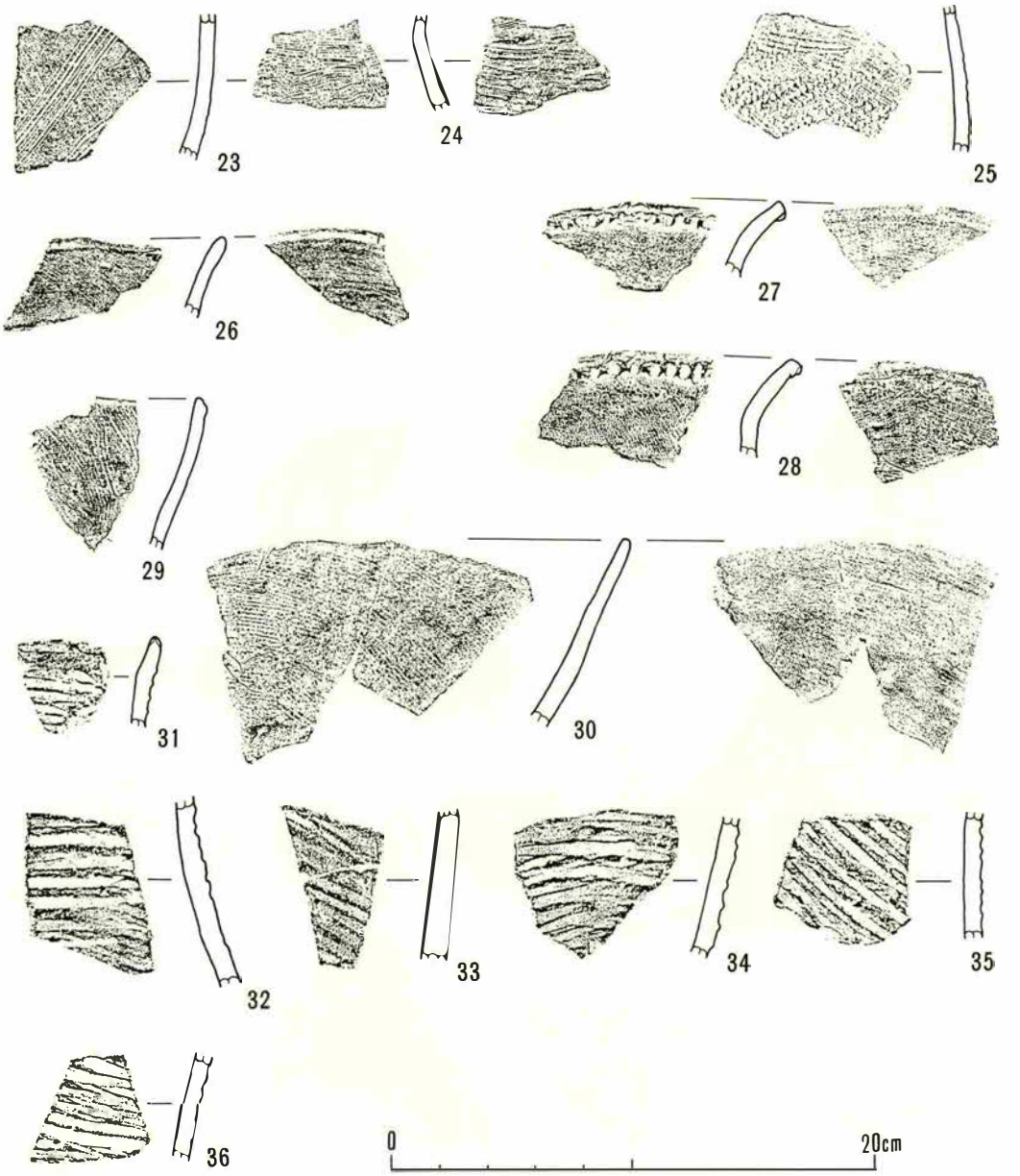
9号住居址（弥生）第27～28図

南集落南小群の南部分に位置し、縄文時代中期中葉の7号住居址の上に重なり、1号方形周溝墓と11号溝に切られている。住居のプランは隅丸方形と推定され、N－47°－Eの主軸方向の長さはおよそ4.9m、これに直交する東西方向は4.15mである。壁は東20cm、西25cm、南20cm、北22cmの高さが残り、壁面はやや外傾している。床面は炉の南側だけが堅くしまって良好であるが、周囲は軟弱である。炉は北側柱穴の中央に位置し、間仕切溝の南に地床炉の中心がある。主軸方向で110cm、柱穴方向で80cmの楕円形に焼土が広がっている。柱穴は3本しか検出されていないが、4本柱の建物であったと考えられる。ピット1は深さ25cm、短径20cm、長径22cm、ピット2は深さ21cm、短径15cm、長径20cm、ピット3は深さ27cm、短径19cm、長径19cmである。各柱穴のプランはほぼ円形で、深さも20cm以上で一定している。ピット2とピット3の間には間仕切溝があるが、溝はピット3から炉に達しているだけでピット2には連結していない。貯蔵穴、梯子受穴は無い。

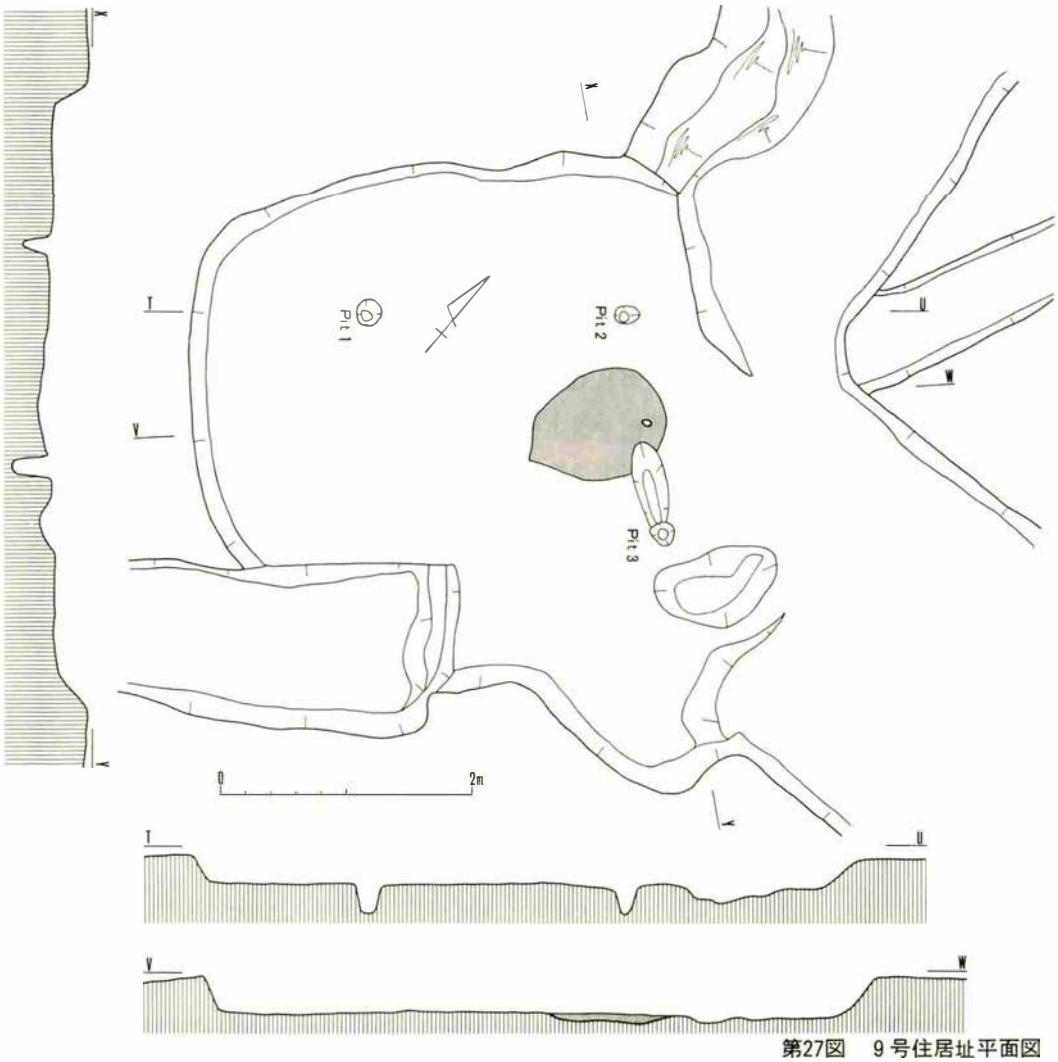
本住居の遺物は、ほとんどが覆土中のもので、甕2、壷1、甑などの破片が出土している。



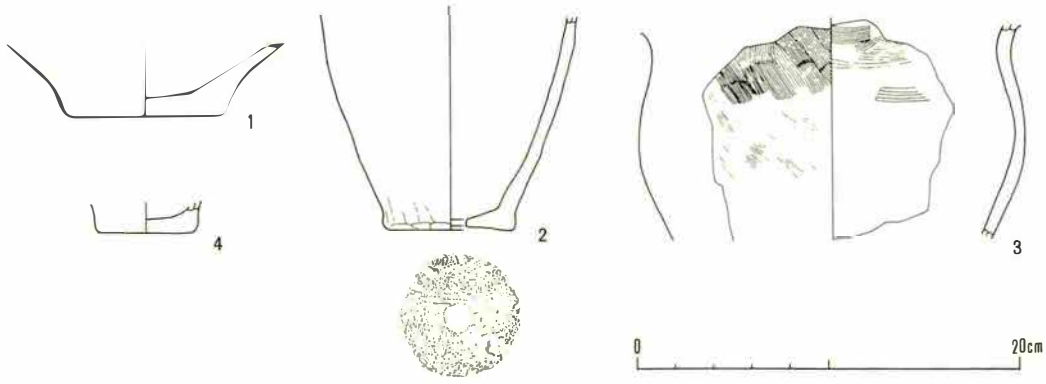
第25図　8号住居址出土土器（1）



第26図　8号住居址出土土器（2）



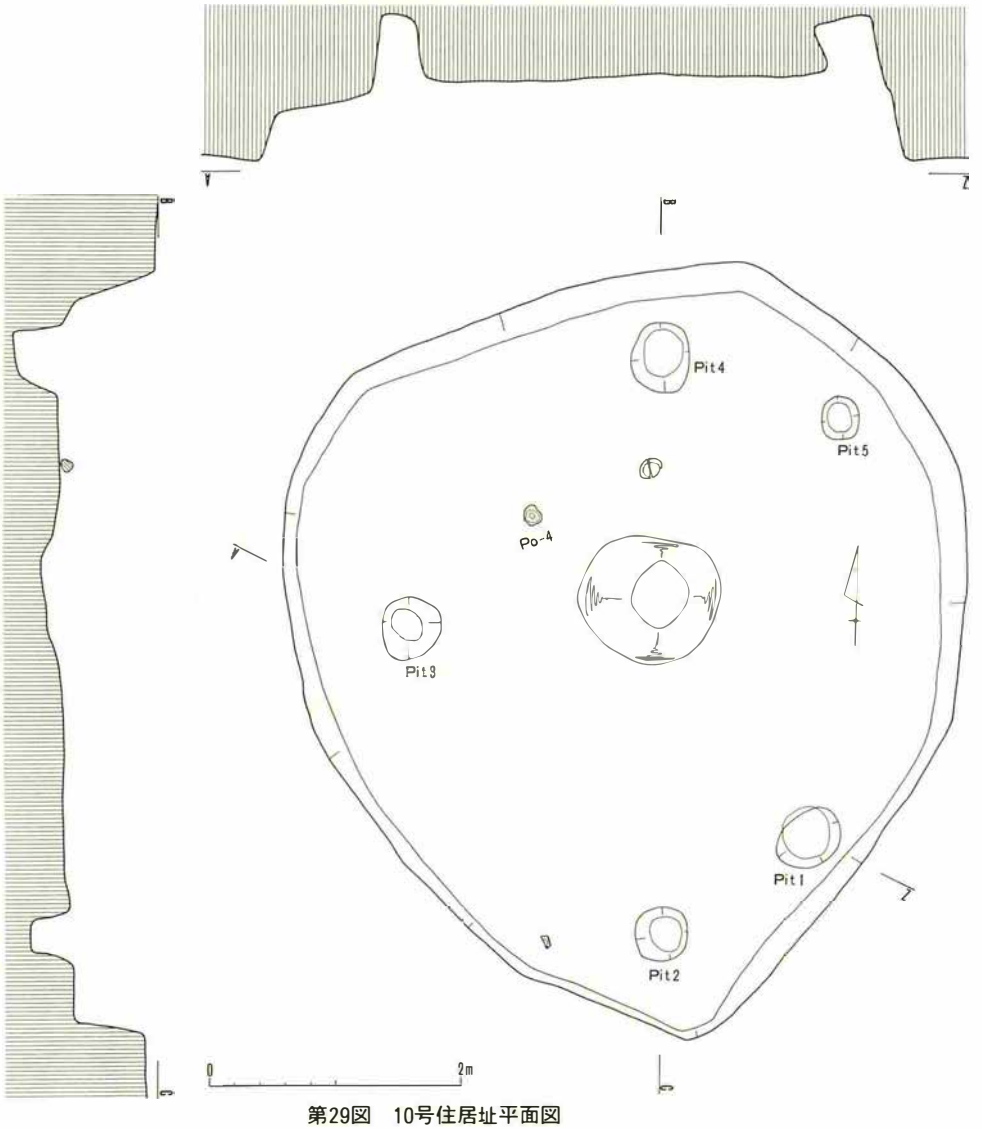
第27図　9号住居址平面図



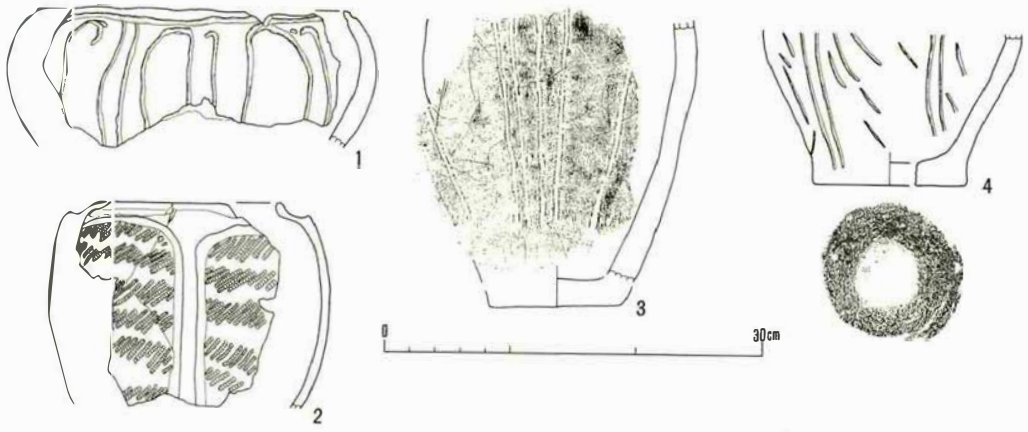
第28図　9号住居址出土土器

10号住居址（縄文）第29～32図

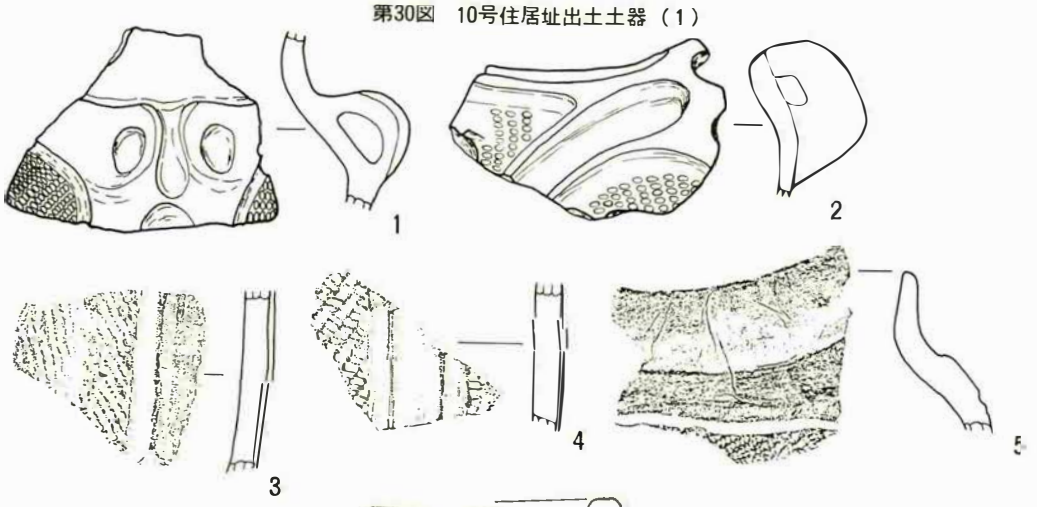
発掘調査区南側に位置し、一部南側を河川によって切り取られている。他の遺構との切り合い関係は無い。住居址は楕円形ないし卵形で、規模は南北６ｍ、東西5.35ｍ、主軸方位はＮ―２°―Ｗである。壁は東54㎝、西37㎝、南55㎝、北62㎝の高さがあり、壁面は若干外傾している。床面は軟弱であるが、砂質土によるものであろう。炉は住居址のほぼ中央に位置し、東西114㎝、南北101㎝の不整円形をした掘込炉である。深さは10㎝程度である。柱穴は変則的な位置に５本が建てられている。ピット１は深さ50㎝、直径48㎝、ピット２は深さ33㎝、直径41㎝、ピット３は深さ61㎝、短径40㎝、長径49㎝、ピット４は深さ36㎝、短径47㎝、長径55㎝、ピット５は深さ22㎝、直径31㎝である。いづれも円形のピットで、ほぼ垂直に穿たれているが、ピット１はやや外傾している。遺物は炉内や覆土中から深鉢形土器片３、浅鉢１、打製石斧７、凹石３などが出土している。この住居出土遺物はおよそ中期終末期に属すると考えられよう。

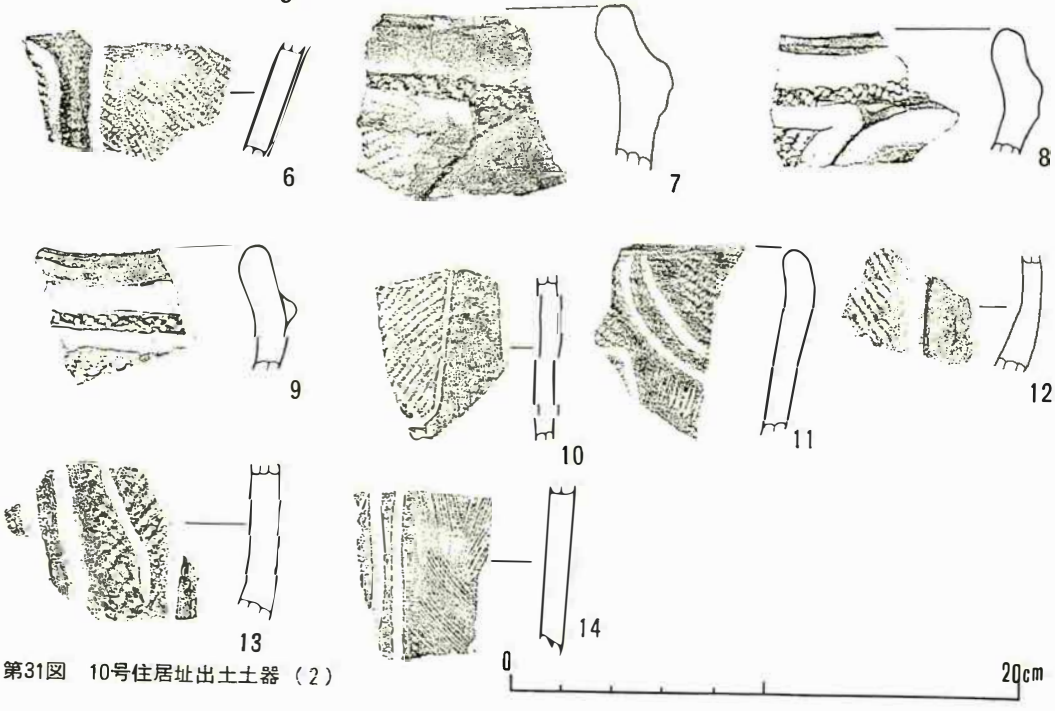


第29図　10号住居址平面図

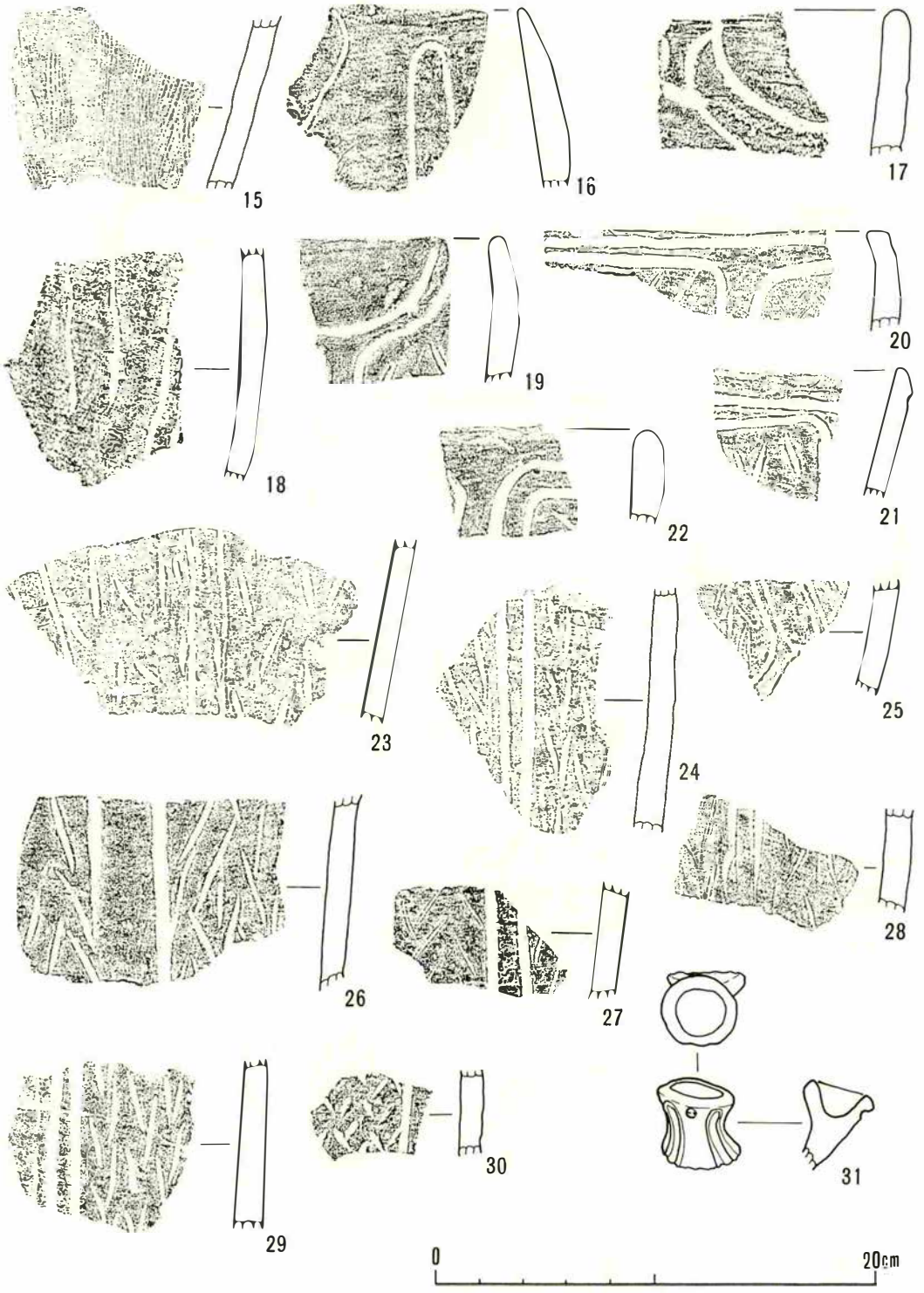


第30図　10号住居址出土土器（1）

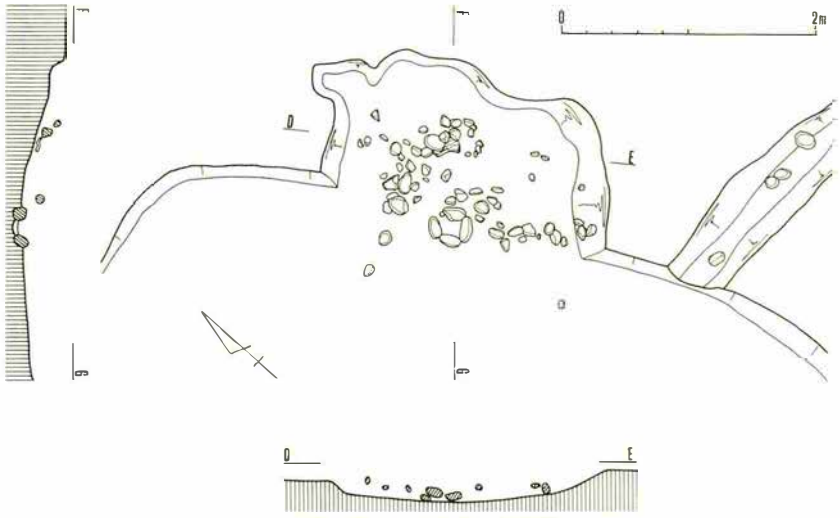




第31図　10号住居址出土土器（2）



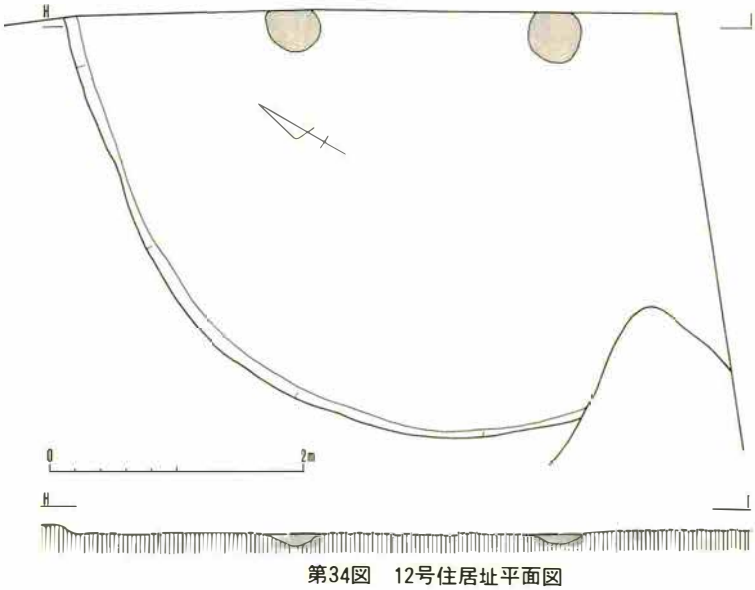
第32図　10号住居址出土土器（3）



第33図　11号住居址平面図

11号住居址（縄文）第33図

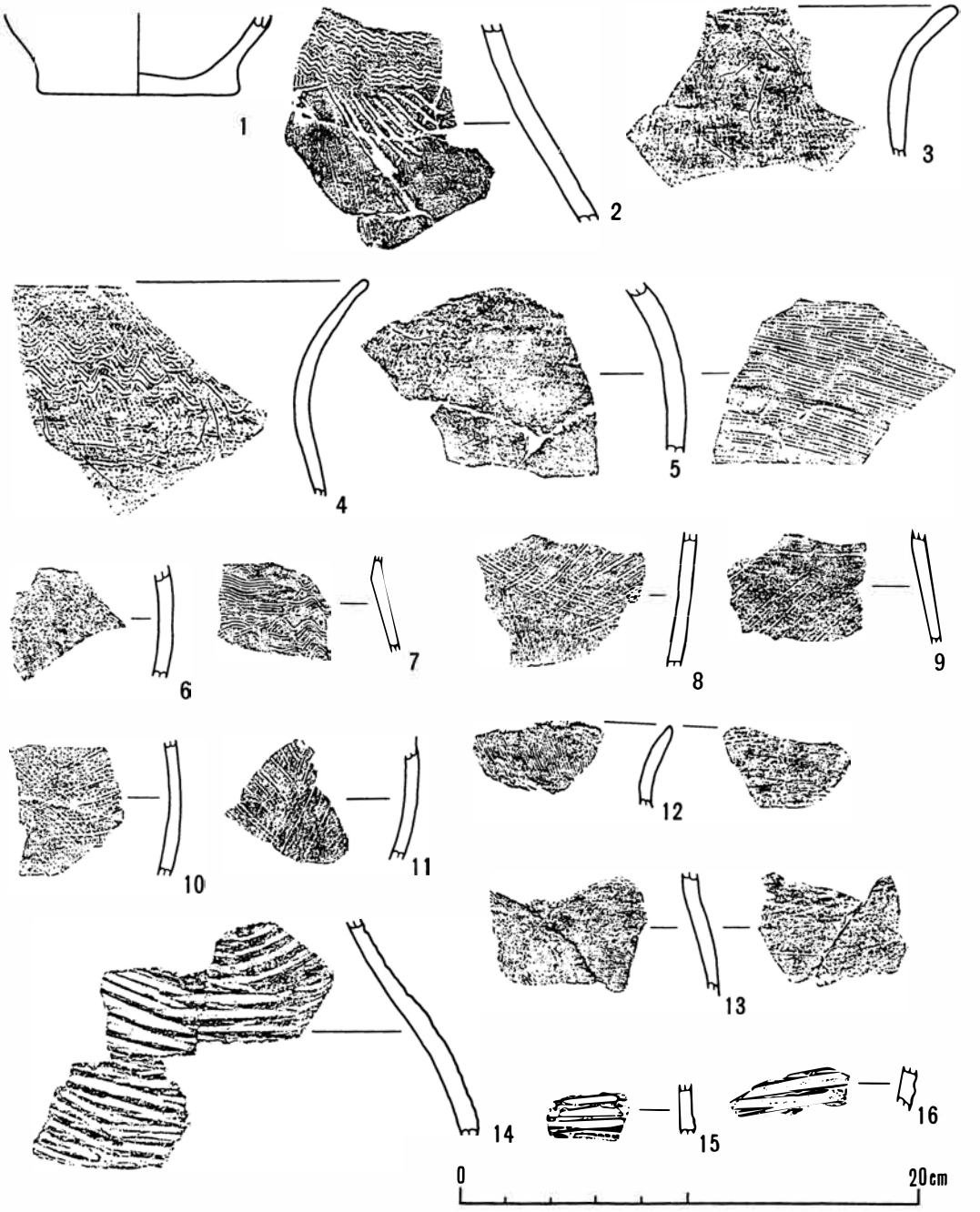
発掘区南側の住居址群中に位置し、4号住居址に住居西半を削られている。住居址のプランは不整形で規模も不明確であるが、4号住居に切られた部分で2.18ｍの径がある。主軸は炉の石組から判断してN—41°—Wとした。床は全体的に軟弱な砂礫層で造られており、壁も北東10cm、南東11cm、北西10cmの高さが認められるが、なだらかに遺構の外面に連続する。炉は遺構中央部に位置し、4号住居の竪穴造成よりかろうじて削除を免れた。炉は方形石組炉で、4個の長方形礫を組み合せて造られ、31cm×35cm、深さ10cmの規模である。住居内からは河原礫が多数出土しているが、時期決定できる土器片は検出されなかった。しかし、炉の形態からは中期中葉頃と推定できよう。



第34図　12号住居址平面図

12号住居址（弥生）第34～35図

南集落の最南部に位置する。南小群に含まれるかどうかは判断ができない。住居址の大半が調査地区外で、西側一部を1号方形周溝墓に切られている。このため住居規模、主軸方位は全く不明である。壁は北から西の一部の約5.5ｍが検出されているが、壁高は約10cmである。住居床面は軟弱で、中央部付近に直径40～45cmの焼土が2箇所ある。こ



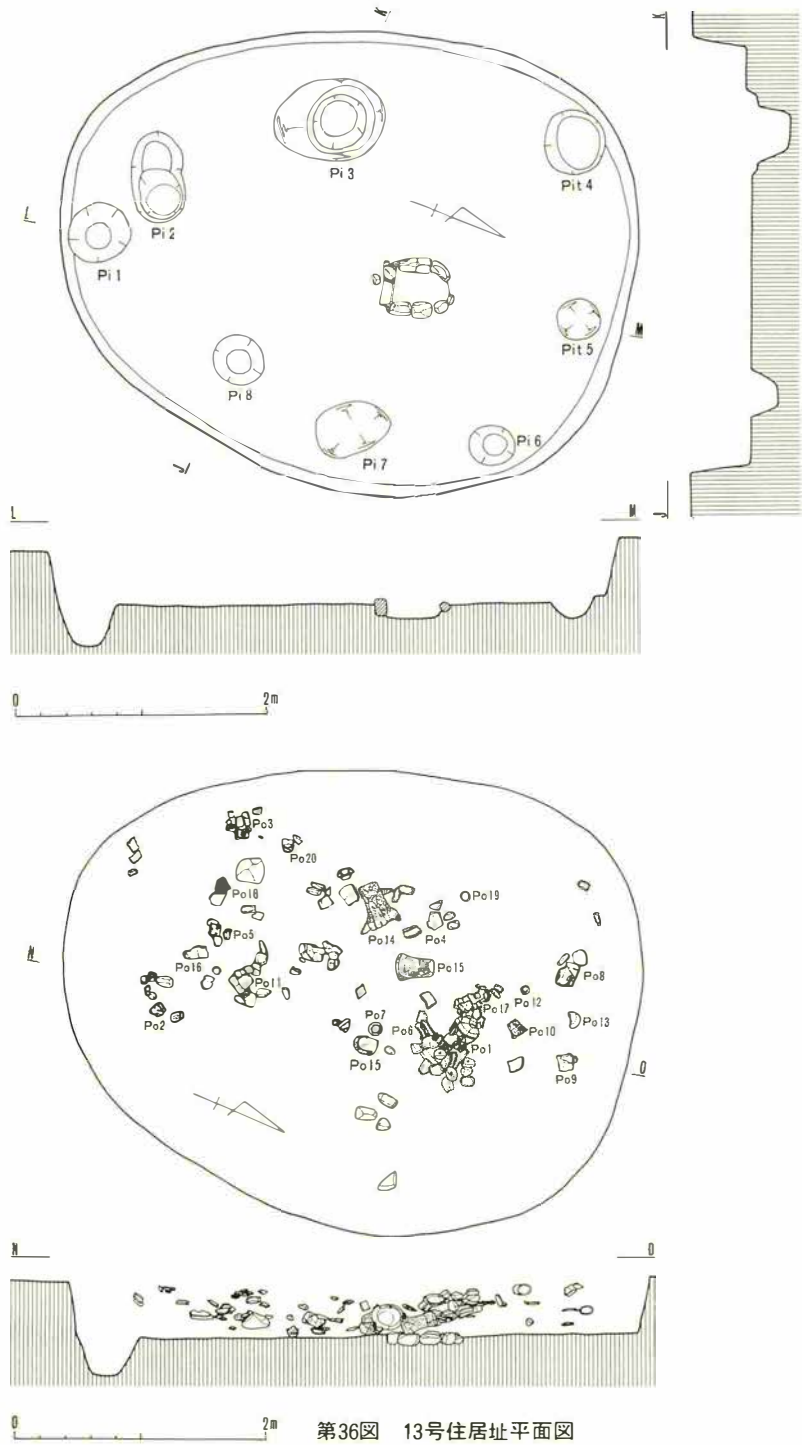
第35図　12号住居址出土土器

れが地床炉であるかは確定できない。なお、柱穴、貯蔵穴等の施設も不明である。

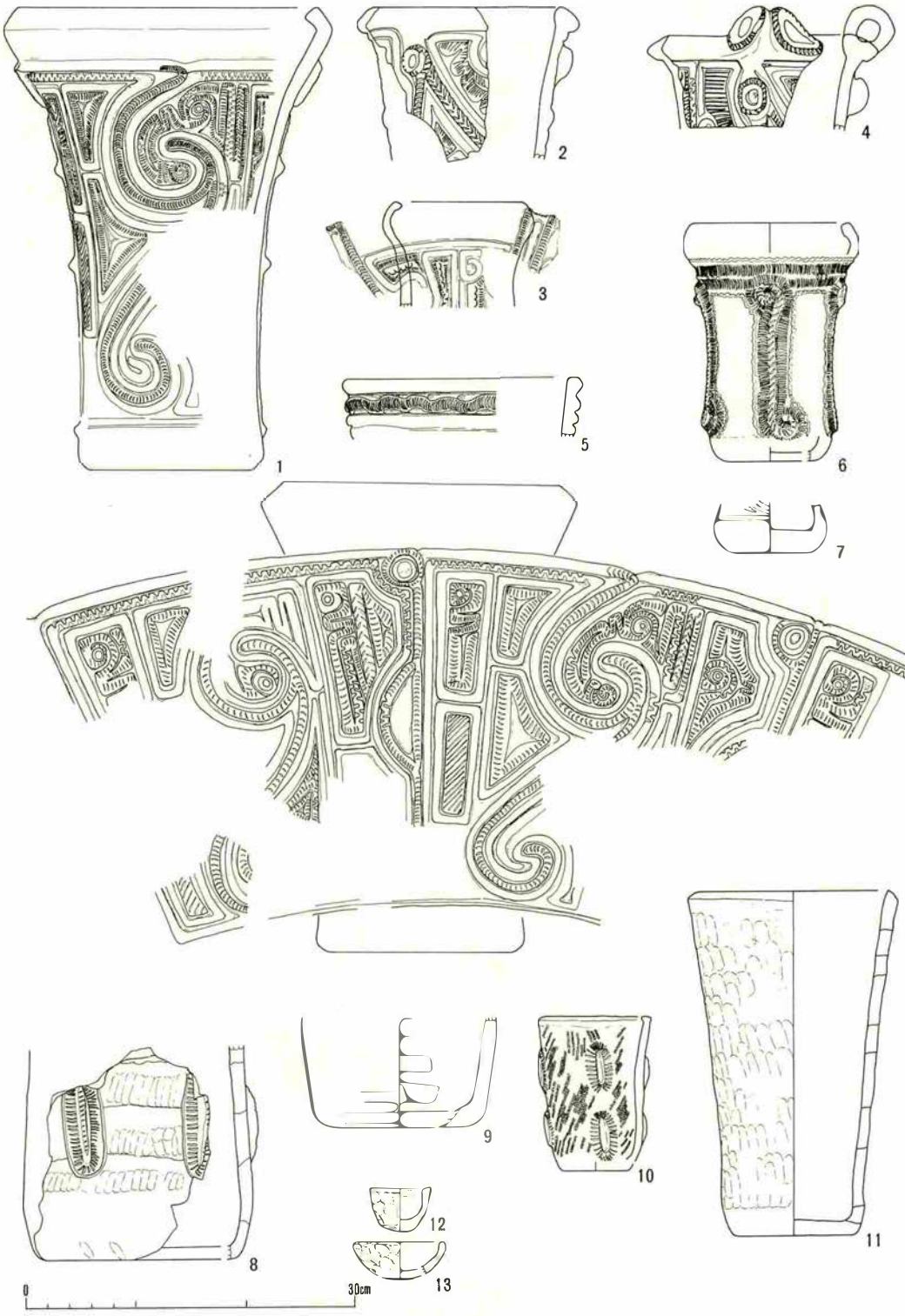
出土遺物はすべて覆土中で、弥生後期の壷や甕の破片を主体とし、若干の中期条痕文土器片を含む。

13号住居址（縄文）第36～39図

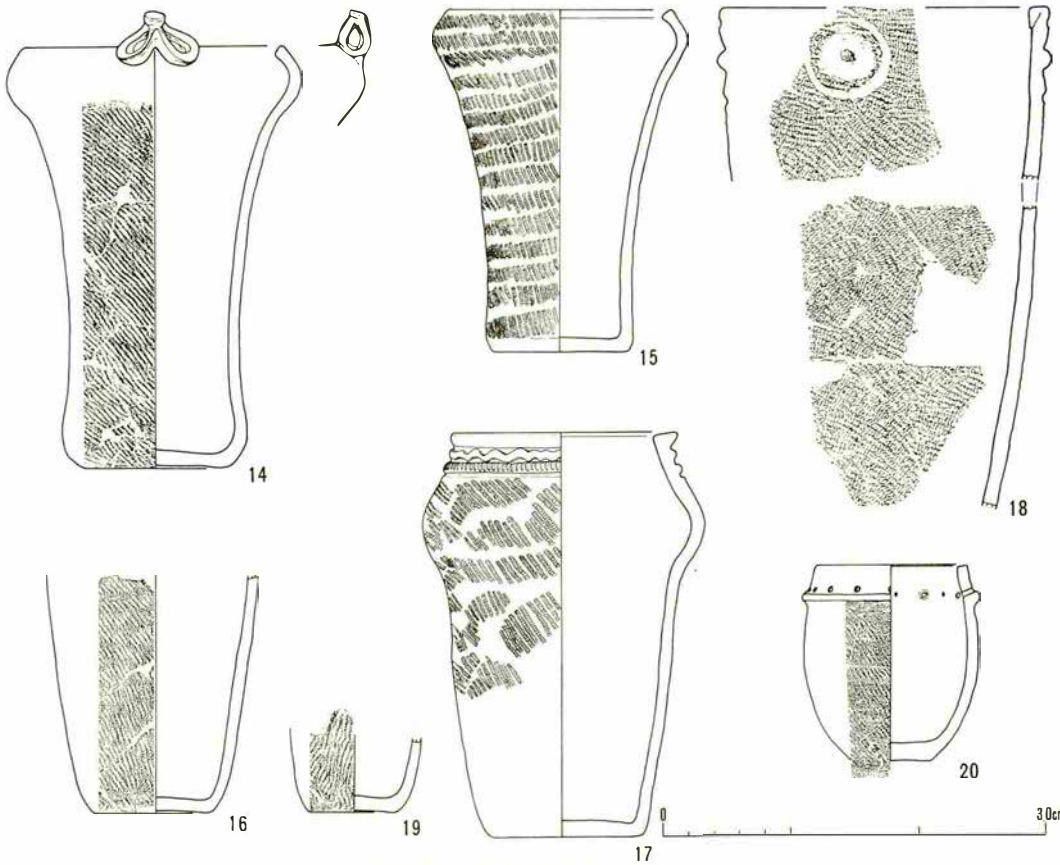
南側住居址群の北に位置し、他の遺構との重複関係は無い。住居規模は長軸4.55ｍ、短軸3.65ｍの長円形を呈し、長軸と同一の主軸はＮ―12°―Ｗの方位を示す。壁の高さは東45㎝、西40㎝、南38㎝、北45㎝で、やや外傾した壁面になっている。遺構は砂層中に掘り込まれており、壁、床とも堅緻ではなく不明瞭で、特に床は凹凸が多く、北から南にかけて緩く傾斜している。覆土は下より白黄色砂層、黒褐色土層、黒色土層、黒味のある黒褐色土層、明るい黒褐色土層の順で堆積しており、特に最下層は地山の砂層と分離する作業が困難であった。遺物はレンズ状の堆積を示す黒色及び黒褐色土層中より出土している。従って、壁際の遺物は20～30㎝程床面より浮いているのに、炉付近では床面直上に分布している。炉は住居の長軸上で北に偏って位置し、長方形の礫10箇を使用して長方形石囲炉としている。東西47㎝、南北54㎝で、内部は浅く掘り窪められているが、焼土はほとんど認められなかった。住居内のピットは８箇あり、壁に近く造られている。ピット３～ピット８の５



第36図　13号住居址平面図



第37図　13号住居址出土土器（1）

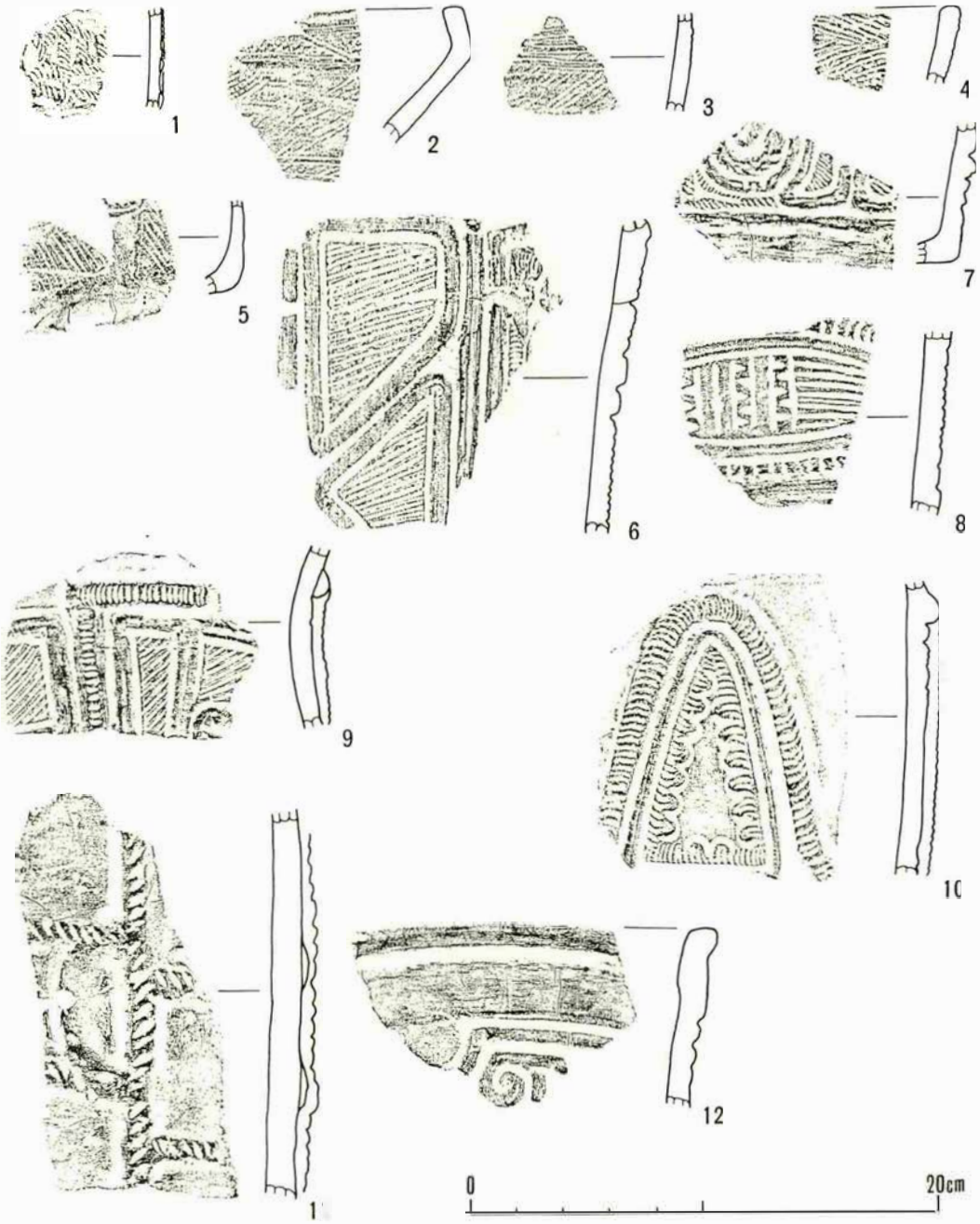


第38図　13号住居址出土土器（２）

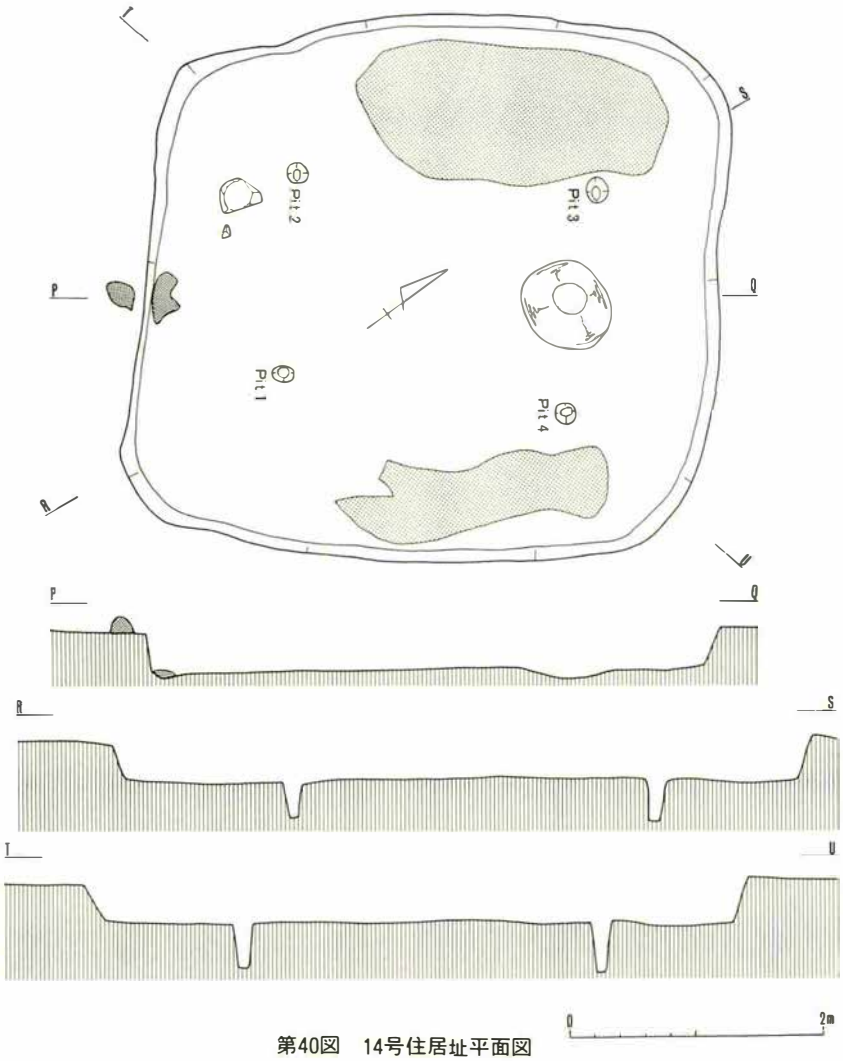
本はほぼ規則的に並ぶが、ピット３とピット４の間は他より広い。ピット１は深さ32cm、直径50cm、ピット２は深さ47cm、直径41cm、３は深さ33cm、短径46cm、長径88cm、ピット４は深さ18cm、直径50cm、ピット５は深さ16cm、直径35cm、ピット６は深さ21cm、直径33cm、ピット７は深さ10cm、短径40cm、長径60cm、ピット８は深さ21cm、直径40cmである。主柱穴はピット１（２）、ピット３、ピット４、ピット５、ピット６、ピット８の６本ではなかろうか。この他貯蔵穴、周溝などの施設は検出できなかった。

出土遺物は深鉢形土器17(破片も含む)、打製石斧17、横刃型石器３、凹石４、石鏃２などがある。土器のうち１～４は筒形の器形に縦区画文が施された土器で、６は素文の内湾した口縁に筒形胴の深鉢形土器で、頸部に横２条の連続爪形文を巡らし、粘土紐による逆Ｓ状貼付文で４分割し、貼付文の両側を連続爪形文、鋸歯状沈線で囲うものである。無文部には指頭痕が残っている。８も６に類似した手法で作られているが、貼付文は短かい。10も2.5㎝の粘土紐を上下２個４箇所に配して、それぞれの周囲を連続爪形文で囲んでいる。地文は荒い縄文である。11は胴部に指頭痕の残る無文の深鉢形土器である。12、13は手捏ね土器で、どちらも指頭痕が顕著に残る。14～20は縄文地文の土器で、14は口唇に突起が１ケ所付けられ、15は素縁、17は口縁部に波状粘土紐と刻みをもつ粘土紐が付けられる。18は円文が口縁に付けられるが、数は不明である。20は有孔鍔付土器で、胴部には横位に縄文が施され、内面は良く研磨されている。

この他覆土中からは前期の北白川下層式、諸磯ｂ式などの小片が出土しているが、本住居の時期は覆土中の大部分の土器と同じ縄文中期中葉と考えられよう。



第39図　13号住居址出土土器（３）

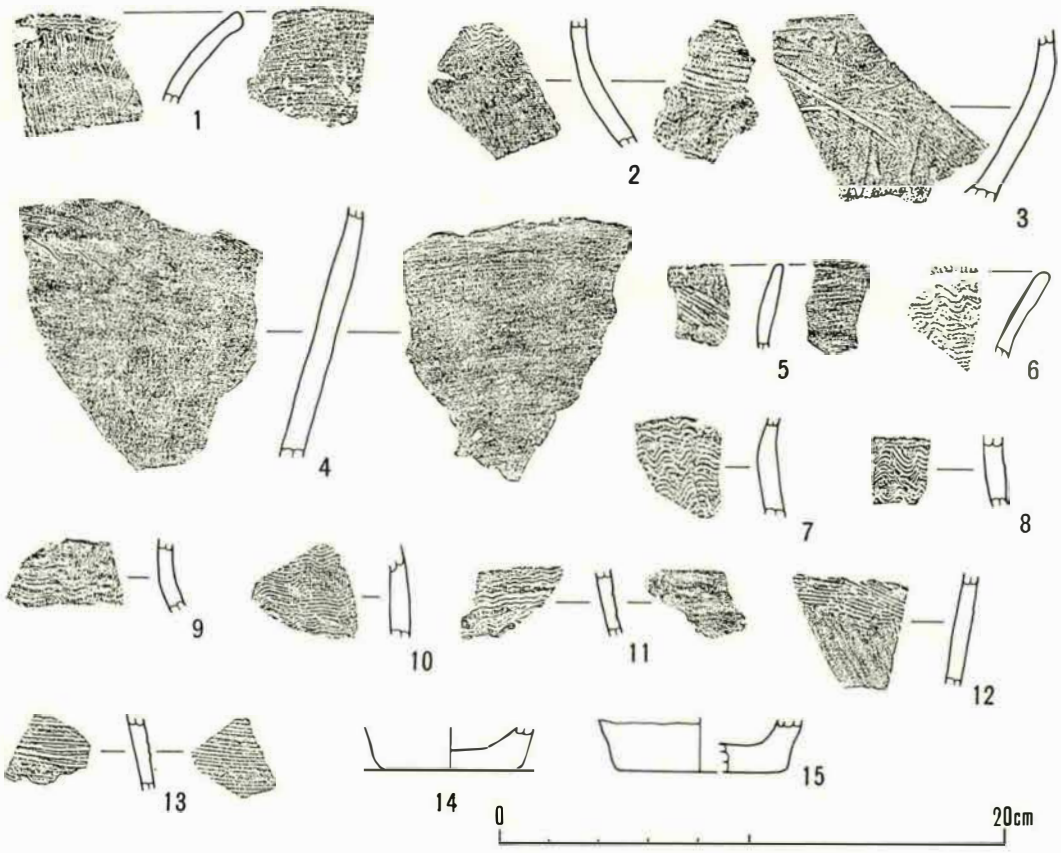


第40図　14号住居址平面図

14号住居址（弥生）第40～41図

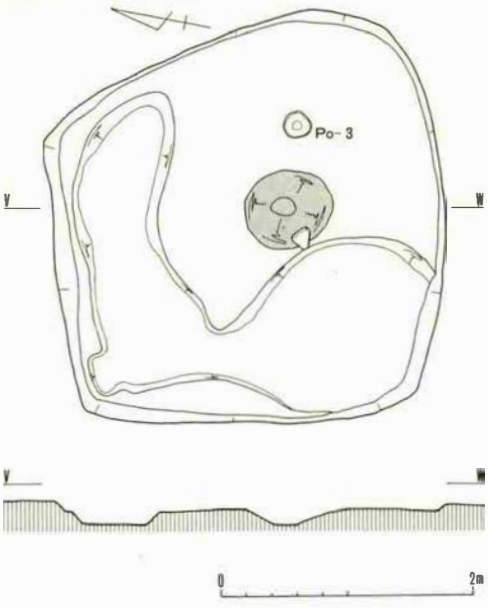
南集落東小群の中央に位置し、他の住居址や遺構とは重複していない。住居は長軸で4.53ｍ、短軸で4.35ｍの隅丸方形を呈している。主軸の方位はN—60°—Eで、環状集落の中央部を向くような入口方向をもっている。壁は北東30㎝、南西30㎝、南東30㎝、北西30㎝で、平均した壁高があり、壁面はやや外側へ傾斜している。床面は中央部分がやや良好であるが、柱穴より外側の東西両側には部分的な貼床がある。東側では巾50㎝、長さ2.3ｍ、西側では巾約1ｍ、長さ2.5ｍである。炉は北東側柱穴中央に位置し、直径約70㎝、深さ8㎝の皿状地床炉である。焼土は中央に直径25㎝の範囲で残っている。柱は4本柱で、ピット1は深さ28㎝、短径13㎝、長径17㎝、ピット2は深さ34㎝、直径15㎝、ピット3は深さ33㎝、直径20㎝、ピット4は深さ40㎝、直径17㎝であり、住居コーナー対角線上に造られている。この他の施設は、南壁入口部の上、下部には粘土塊が置かれている。梯子設置に伴うものであろうか。又、南東コーナーに近い所の床面直上に20㎝×30㎝の平石があり、調理用又はワラ等の加工用に使用されたものかもしれない。

遺物は覆土中より若干の弥生後期土器片が出土している。



第41図　14号住居址出土土器

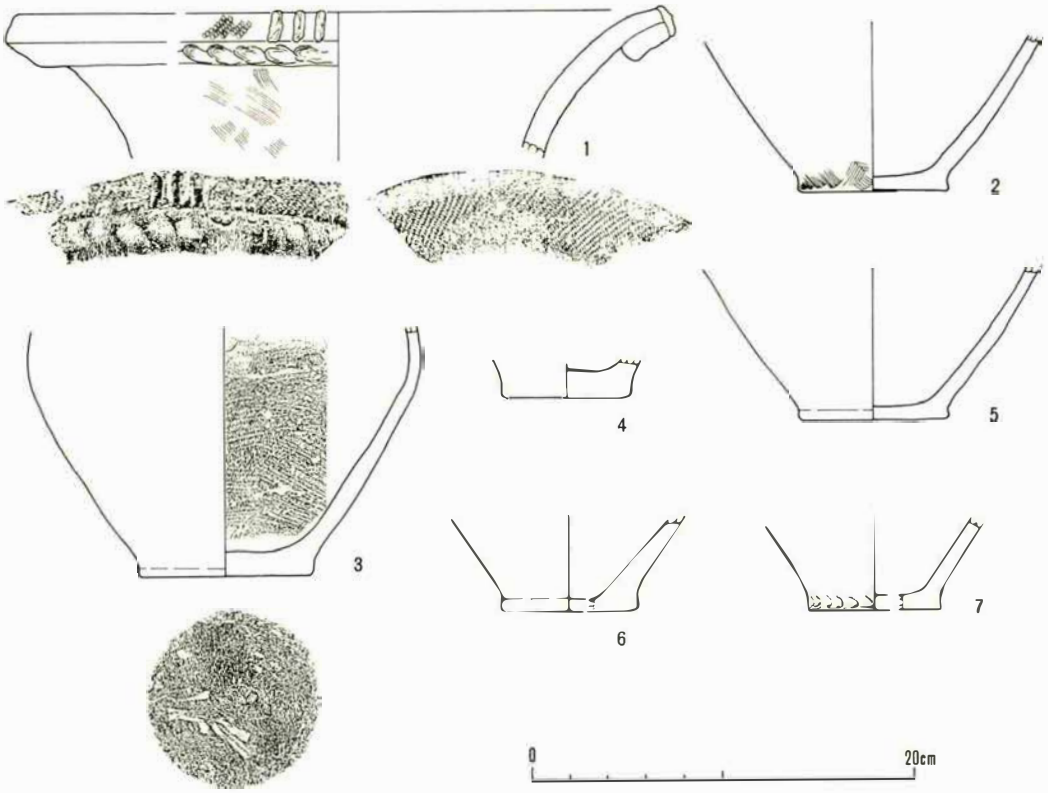
第42図　15号住居址平面図



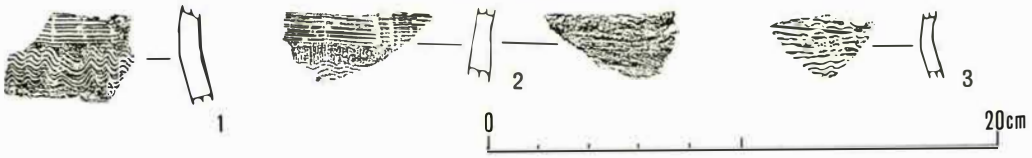
15号住居址（弥生）第42～44図

南集落東群南端に位置し、他の遺構と重複はしていない。住居のプランは隅丸台形を呈し、長軸3.25ｍ、短軸3.11ｍの規模は、本遺跡弥生時代住居最小である。壁は東３㎝、西8.5㎝、南５㎝、北18㎝で、外傾した壁面をもつ。床は炉周辺がやや残っているだけで、北から西側は床より10㎝程掘り下げられている。炉は住居のほぼ中央にあり、東西62㎝、南北70㎝、深さ約12㎝の皿状に窪んだ地床炉である。

出土遺物では、炉の東に壷形土器が直立して置かれている。又、炉の縁に三角形の礫があるが、炉石ではない。



第43図　15号住居址出土土器（1）



第44図　15号住居址出土土器（2）

16号住居址（弥生）第45～48図

南集落北群の中央に位置し、12号土壙を切って造られている。住居の規模は長軸6.1ｍ、短軸4.88ｍで隅丸の長方形を呈し、主軸はN—21°—Wの方位である。壁高は東55cm、西52cm、南55cm、北45cmと深く、壁面も垂直にちかい状態である。

本住居は1回の拡張が行なわれている為に、柱穴、梯子受穴、貯蔵穴等が2組ある。そこで、旧住居から説明する。

①旧住居

柱穴は4本で、ピット1は深さ33cm、短径19cm、長径24cm、ピット2は深さ43cm、短径15cm、

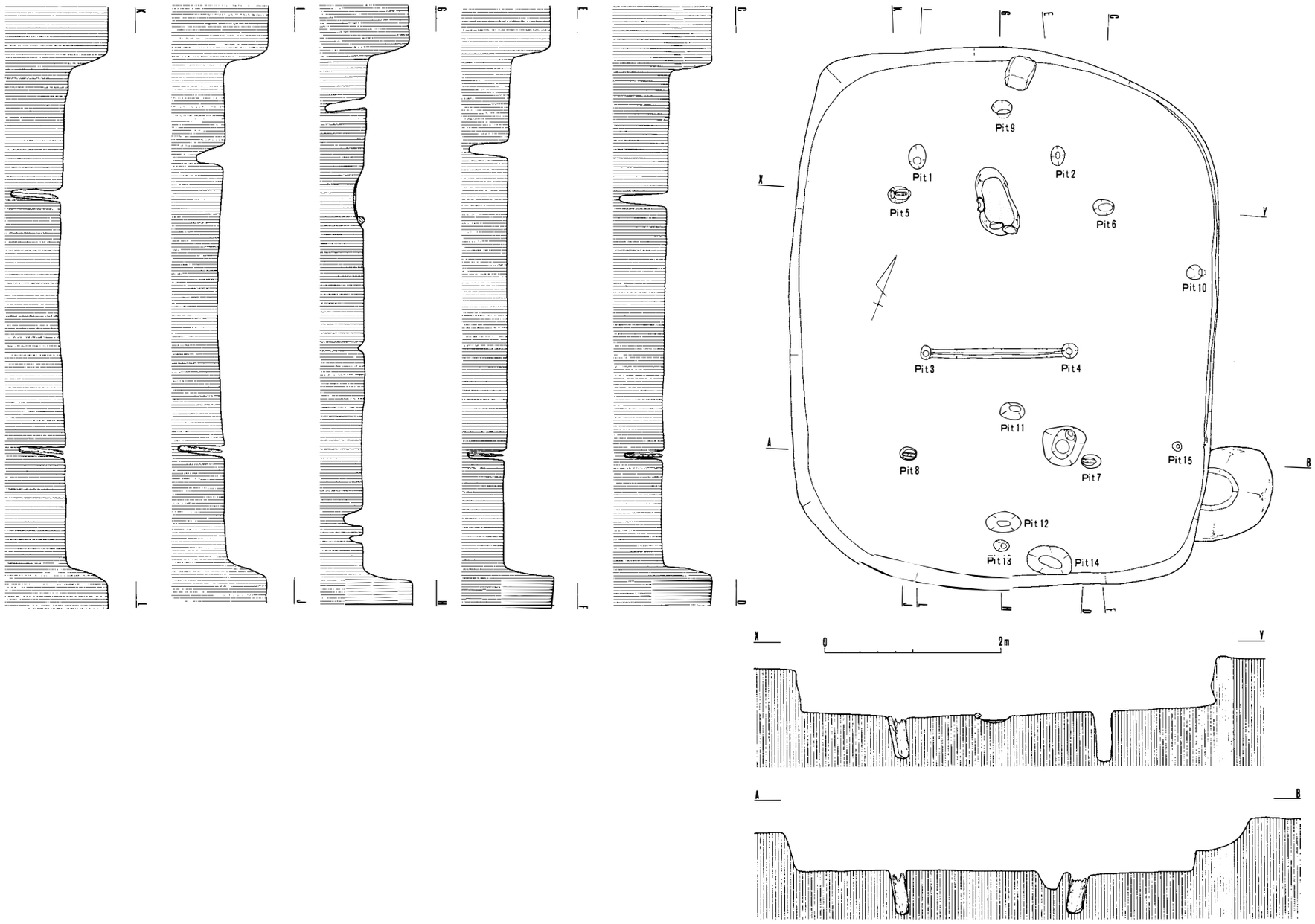
第45図　16号住居址平面図（1）

長径22cm、ピット3は深さ47cm、短径11cm、長径16cm、ピット4は深さ49cm、直径17cmである。柱根を残しているものは無い。梯子受穴のピット11は深さ32.5cm、短径20cm、長径27cmで若干南へ傾斜している。貯蔵穴は梯子受穴の東にあり、東西50cm、南北45cmの断面台形のピットである。ピット3とピット4の間には間仕切溝があり、巾12cmの断面V字形をしている。炉は北側柱穴間中央にあるが、新住居の炉と共用されている。地床炉であるが規模は不明。

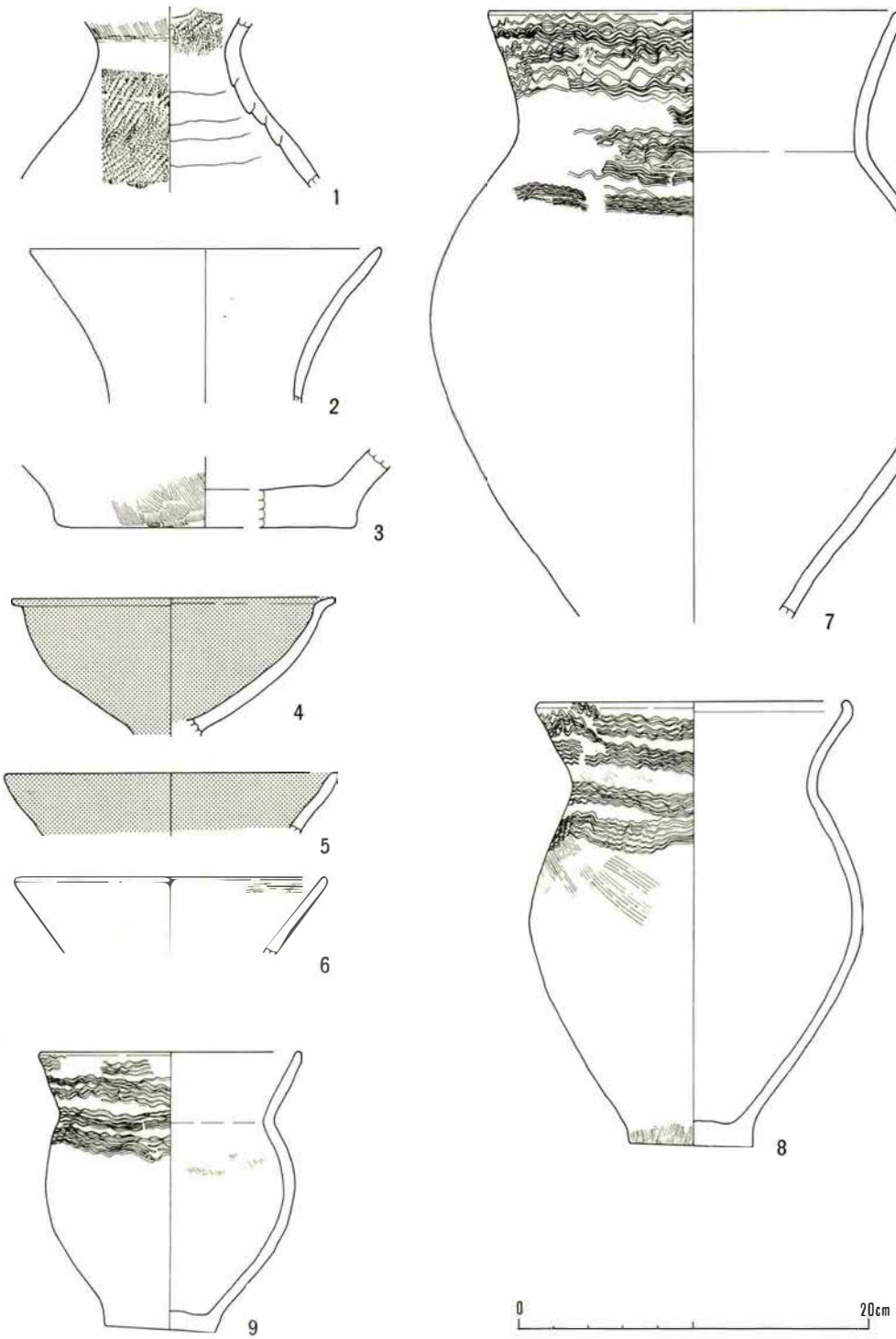
②新住居

主柱穴は5本、支柱穴2本で上屋を支えた住居で、ピット5は深さ57cm、短径18cm、長径24cmで、柱穴内に板状柱根が残っている。ピット6は深さ56cm、短径18cm、長径25cm、ピット7は深さ43cm、短径15cm、長径22cmで、中に板状柱根が残っている。ピット8は深さ52cm、短径14cm、長径20cmで、中に板状柱根が残っている。ピット9は深さ46cm、短径16cm、長径23cmである。柱穴のプランは主軸に対して直角方向に長径があり、板状柱根の残存方向と一致する。従って、柱穴プランが長円形のものは、板状の材による柱で建物が建てられていたことが判る。貯蔵穴は南壁に接して東西52cm、南北32cmの大きさでロート状を呈する。梯子受穴はピット12であるが、深さ21cm、短径24cm、長径40cmである。梯子受穴の南に小穴がある。深さ16cm、短径12cm、長径18cm。この他支柱が東壁側に2本ある。

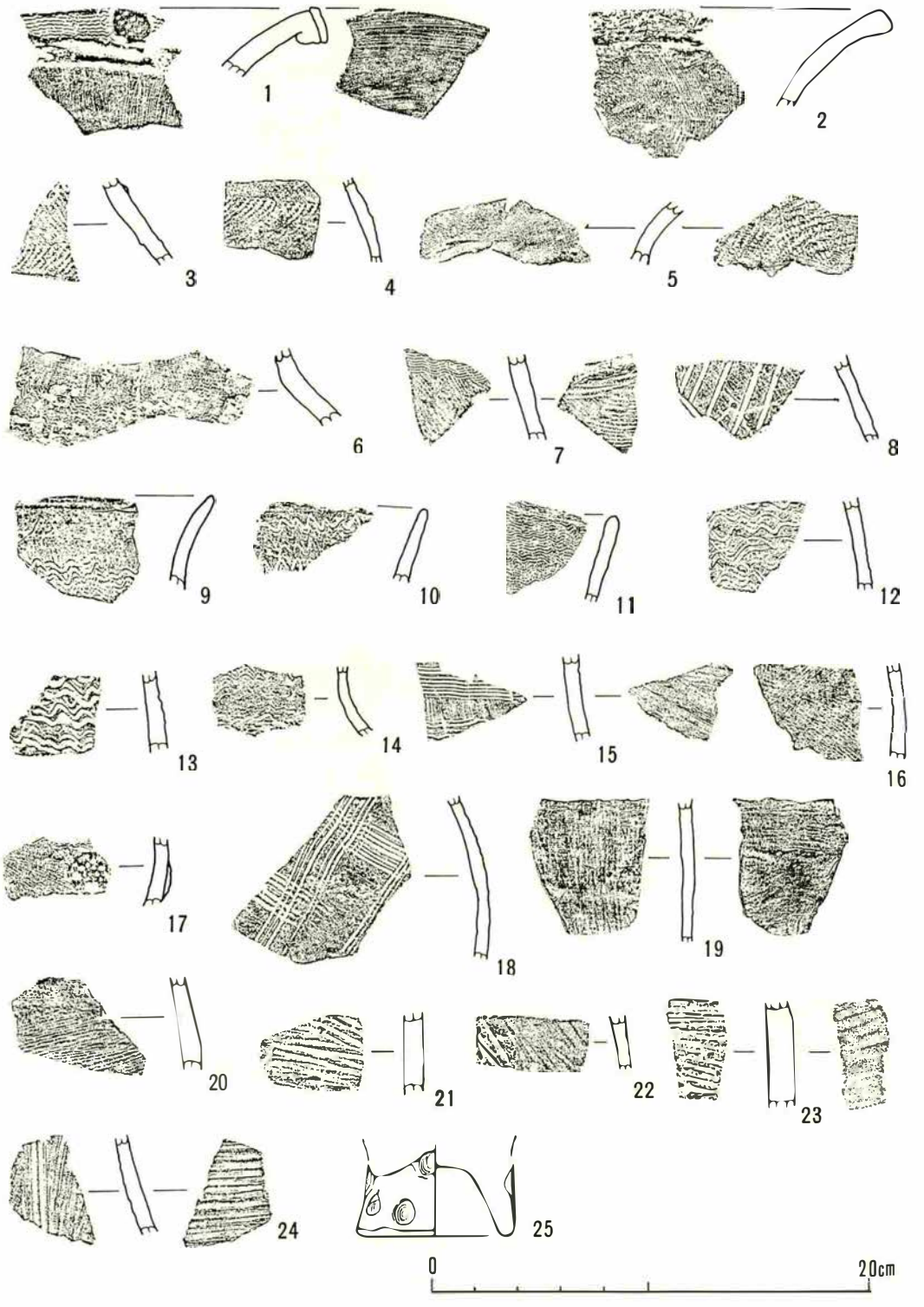
本住居は火災住居で、住居内は屋根、柱の炭化材が焼失のまま残っていた。この焼失面には、炭化した米粒をはじめ、壷、甕、高杯などの土器片等がある。



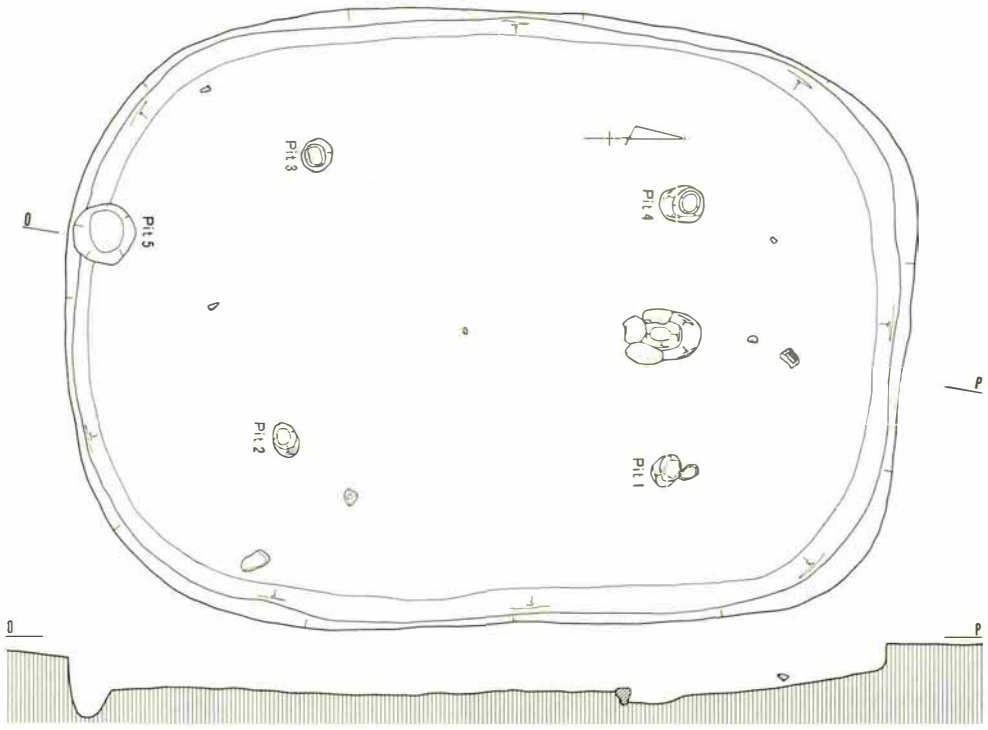
第46図　16号住居址平面図（２）



第47図　16号住居址出土土器（1）



第48図　16号住居址出土土器（２）

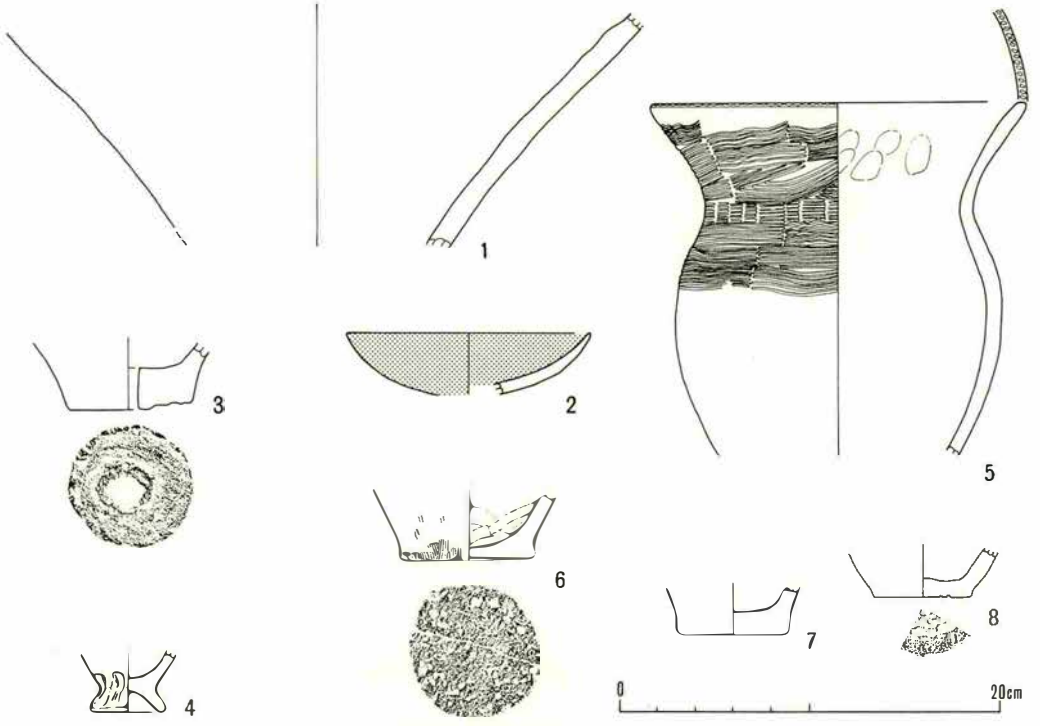


第49図　17号住居址平面図

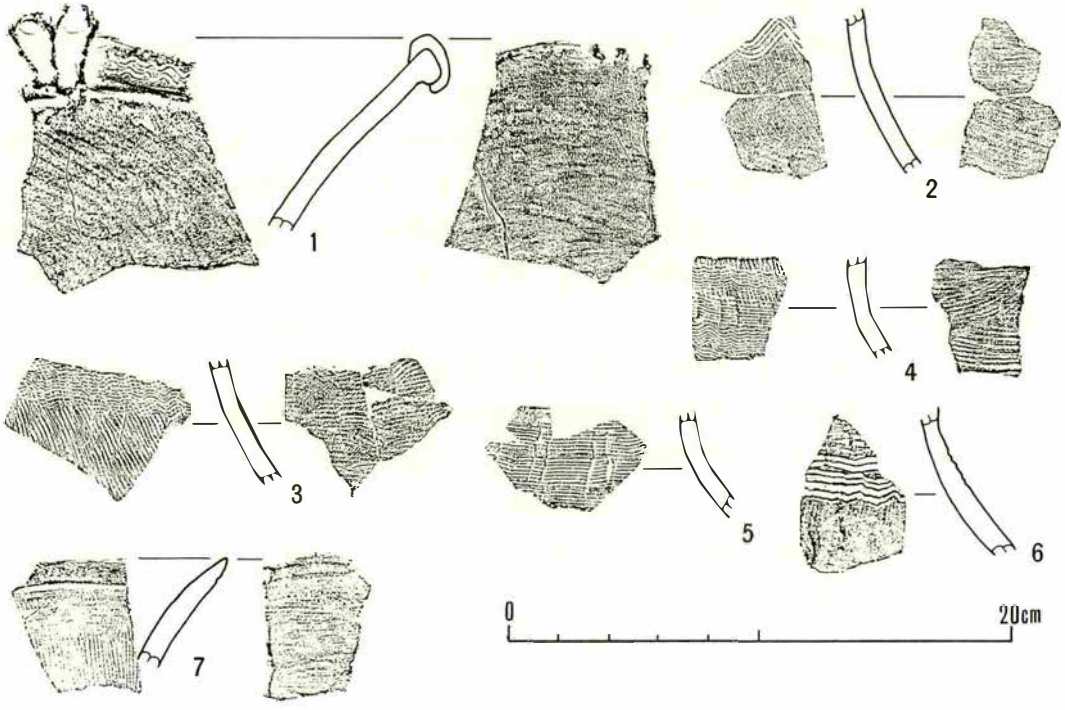
17号住居址（弥生）第49～52図

南集落北群の最西端に位置し、他の遺構とは重複しない。住居の規模は長軸6.65ｍ、短軸4.82ｍで、長軸が主軸となっており、N—11°—Eの方位をもつ。住居のプランは隅丸方形であるが、南壁部は半球状に膨らんでいる。壁は東24cm、西29cm、南20.5cm、北23.5cmで、壁面はほぼ垂直である。床面は柱穴間の中央部が良好で堅くしまっており、外側は軟弱である。炉は北側の柱穴間にあり、北を除く三方を長方形礫で囲った石囲炉である。炉の規模は東西39cm、南北60cm、深さ10cmで、炉中央部に焼土がある。柱穴は４本で、ピット１は深さ60cm、短径22cm、長径25cm、ピット２は深さ65cm、短径20cm、長径28cm、ピット３は深さ61cm、短径24cm、長径27cm、ピット４は深さ63cm、短径29cm、長径34cmである。４本とも深く細い柱穴であり、各々の柱穴プランは主軸に対して直交する方向に巾がある。貯蔵穴は南壁に接して掘られ、主軸より西側に偏っている。東西48cm、南北47cm、深さ49cmで断面台形を呈する。

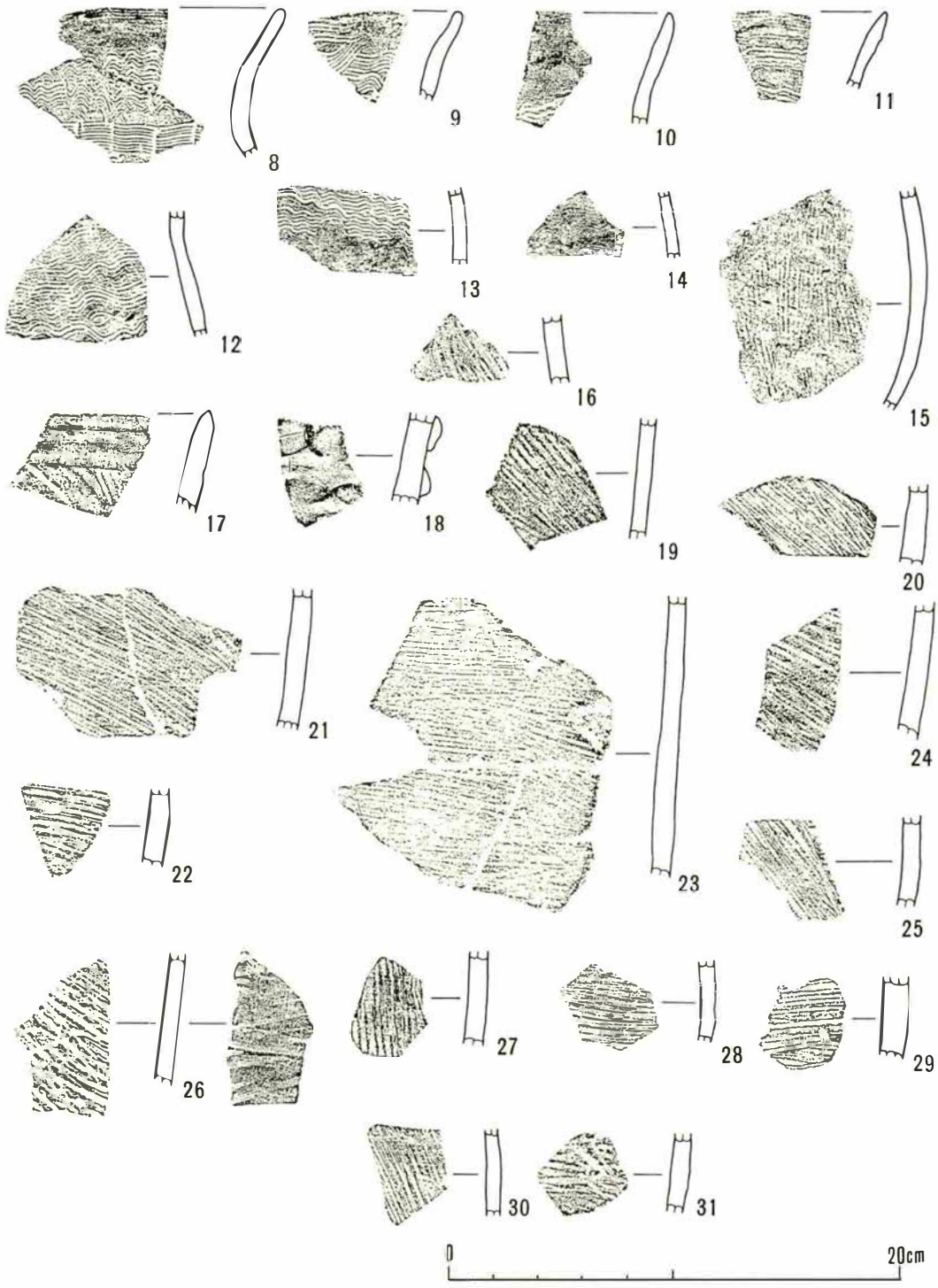
出土遺物はあまり多くはないが、壷、甕、高坏、甑などがある他、土偶、垂木状木製品などが特筆される。本土偶は正式発掘した弥生時代の土偶としては、本県初見のもので、頭部を欠損しているものの重要な資料である。



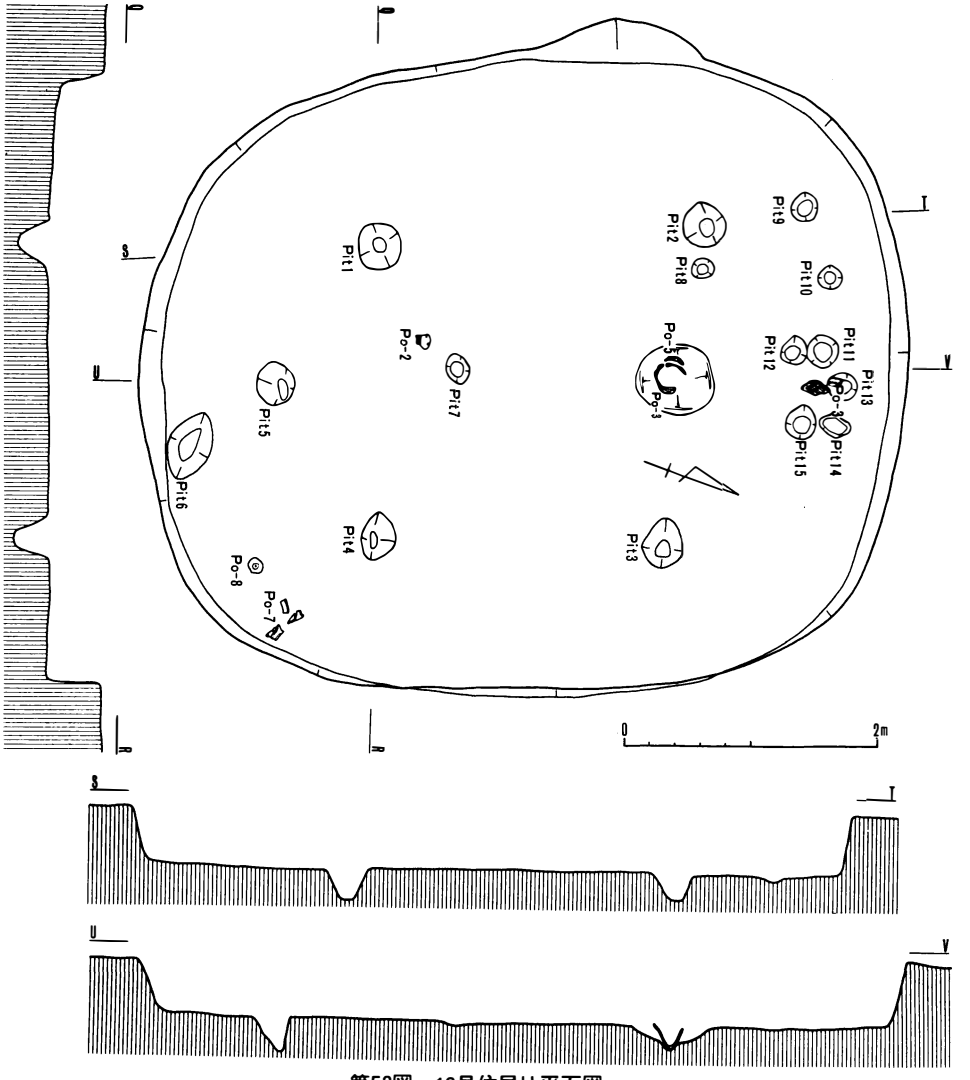
第50図　17号住居址出土土器（1）



第51図　17号住居址出土土器（2）



第52図　17号住居址出土土器（3）



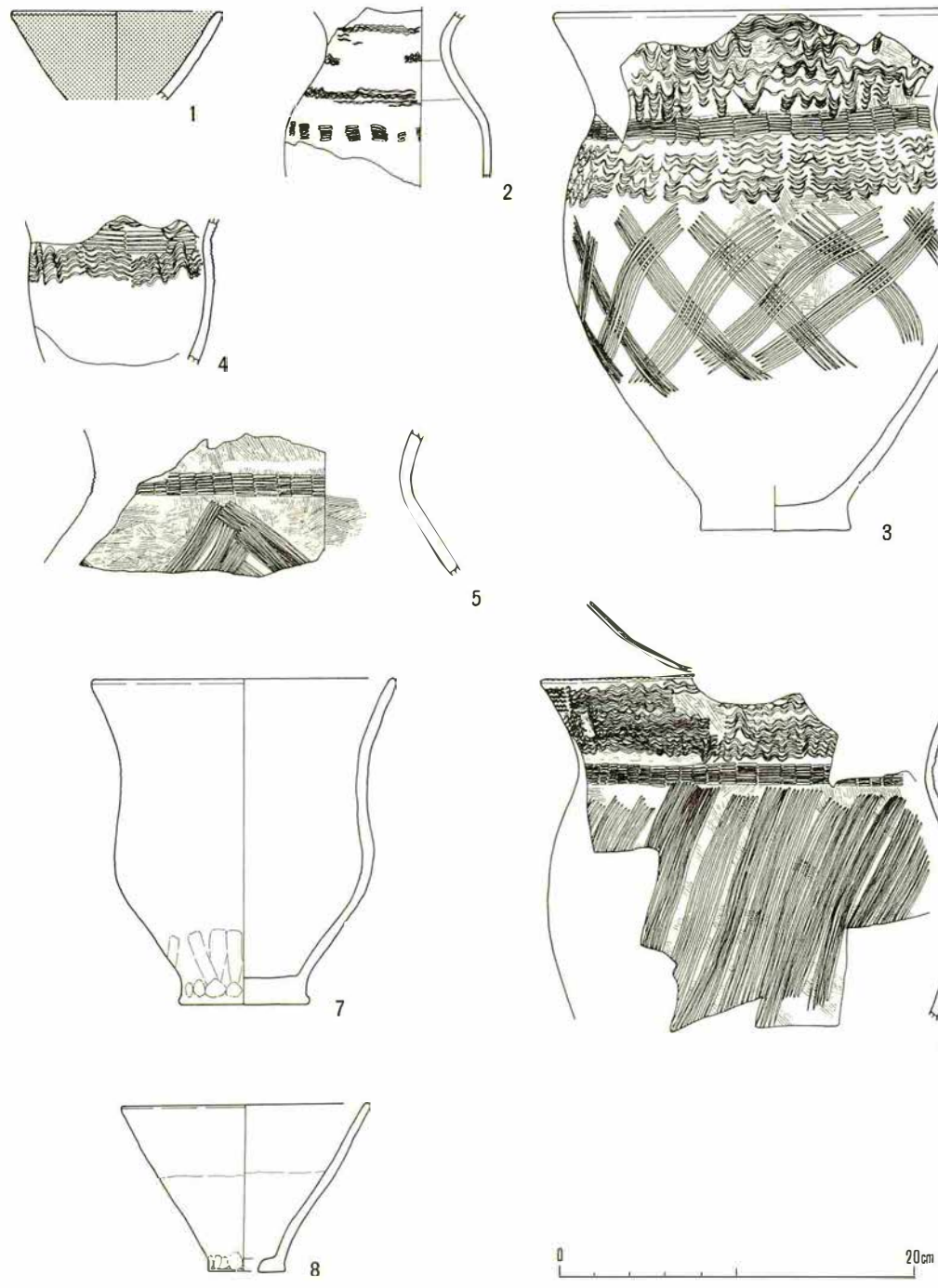
第53図　18号住居址平面図

18号住居址（弥生）第53～55図

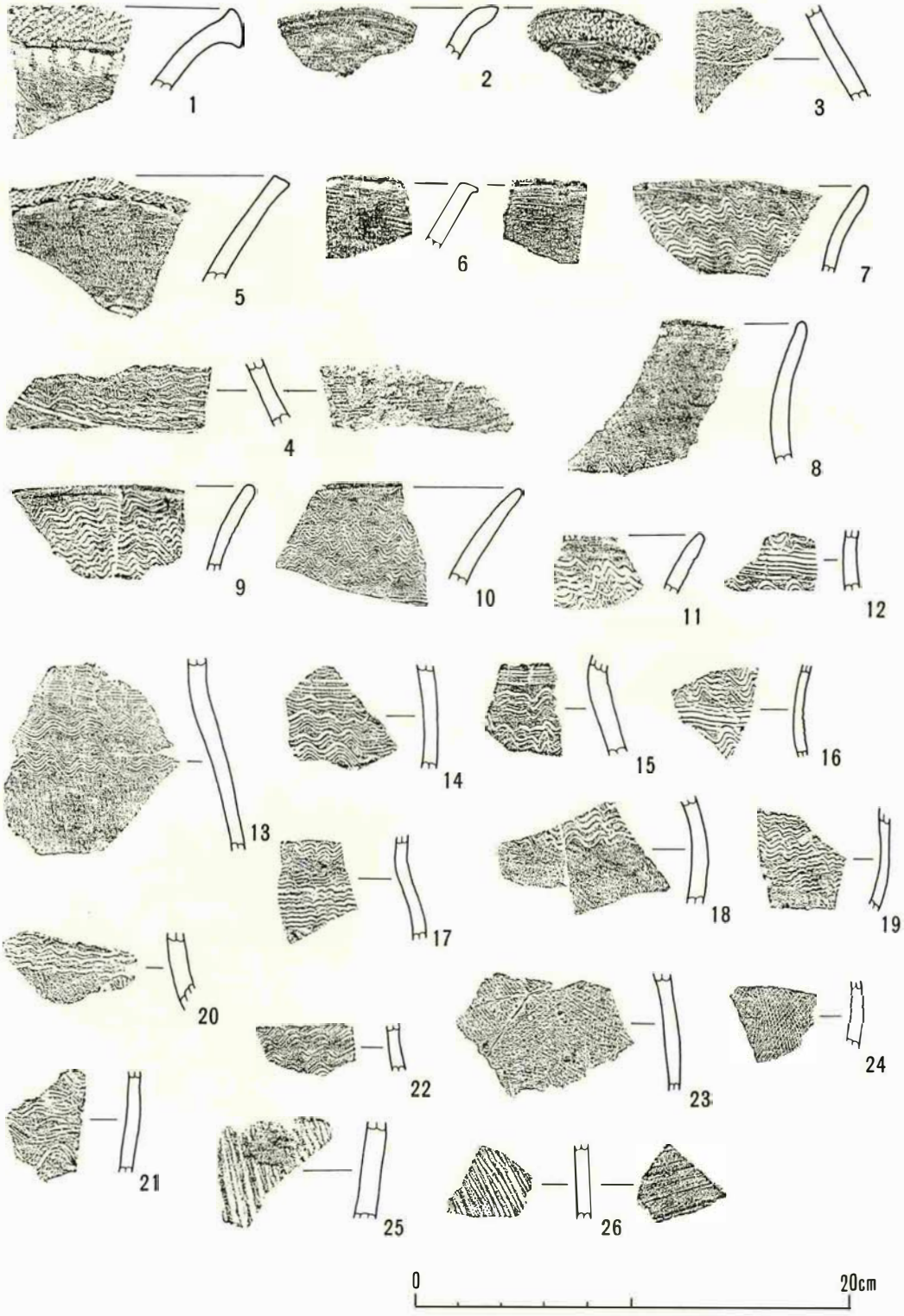
南集落北群の東部分に位置し、14号土壙を切って造られている。住居址のプランは楕円形に近い隅丸方形で、長軸6.12ｍ、短軸4.93ｍである。主軸はＮ―19°―Ｗの方向をもつ。壁は東44㎝、西44㎝、南56㎝、北42㎝の高さがあり、東壁は垂直であるが他は若干外傾している。床面は全面貼床で、黄褐色砂質土と暗褐色粘土質の混土でかたく踏みしめられている。炉は北側柱穴間中央に位置し、70㎝×52.5㎝のロート状掘込中心に土器が直立して置かれる埋甕炉である。土器の土層は、上面に砂混り炭化物層があり、その下はサラサラした灰層と薄い黒色土層、最下には鳥の巣のような繊維が詰められていた。主柱穴は４本、支柱穴等が９本ある。主柱穴のピット１は深さ25㎝、短径33㎝、長径38㎝、ピット２は深さ24㎝、短径34㎝、長径36㎝、ピット３は深さ18.5㎝、短径32㎝、長径40㎝、ピット４は深さ26㎝、短径28㎝、長径38㎝である。炉北側に５本の小ピットがコの字状に配されている。特別な施設かもしれない。梯子受穴は南壁から１ｍ離れて主軸線上にあり、深さ26㎝、短径30㎝、長径34㎝、底面プランは主軸に直交

する方向に細長い長円形である。貯蔵穴は南壁に接して造られ、深さ32㎝、短径37㎝、長径56㎝である。

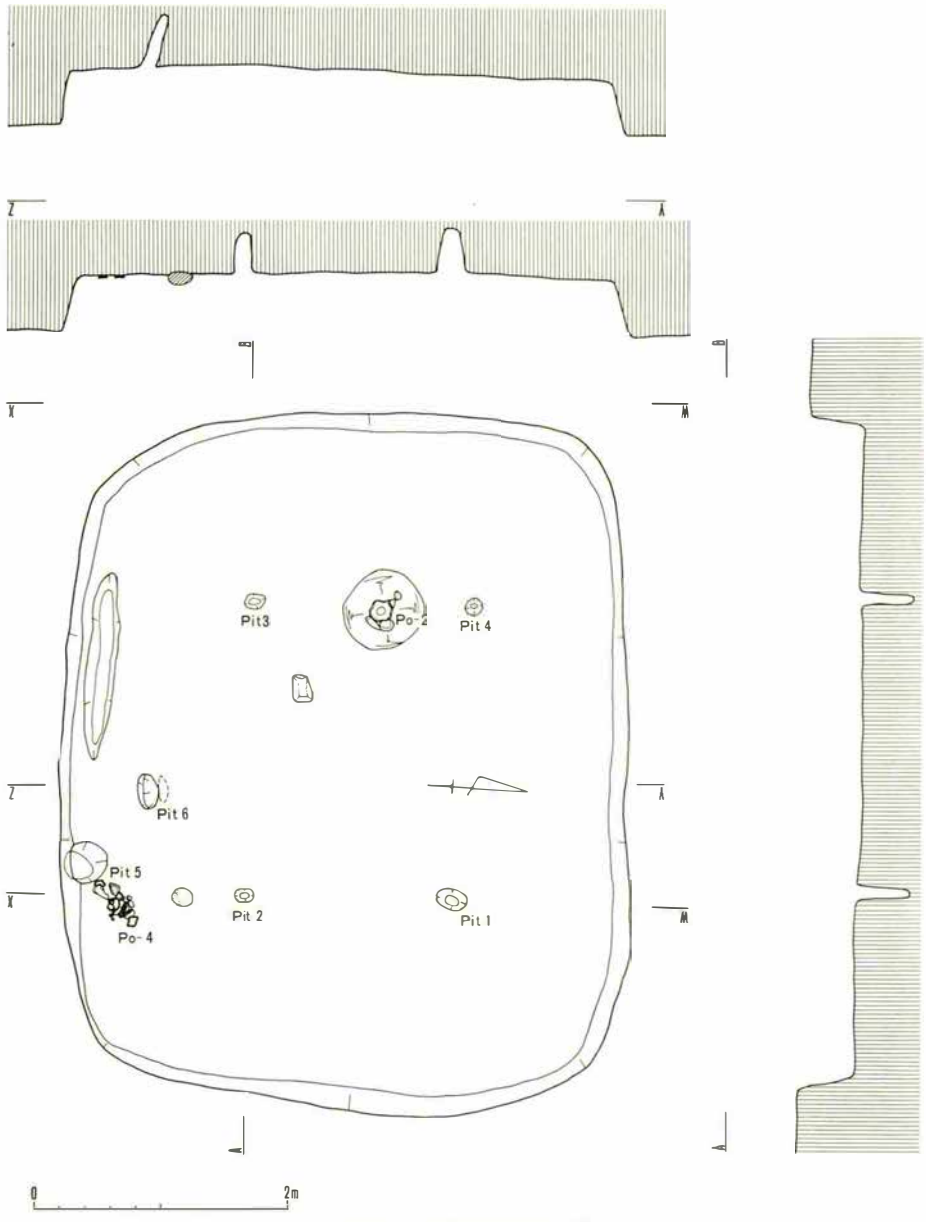
出土遺物は壷破片、甕、甑完形品、磨製石鏃などが出土している。磨製石鏃を本遺跡中最も多く保有していた住居である。



第54図　18号住居址出土土器（1）



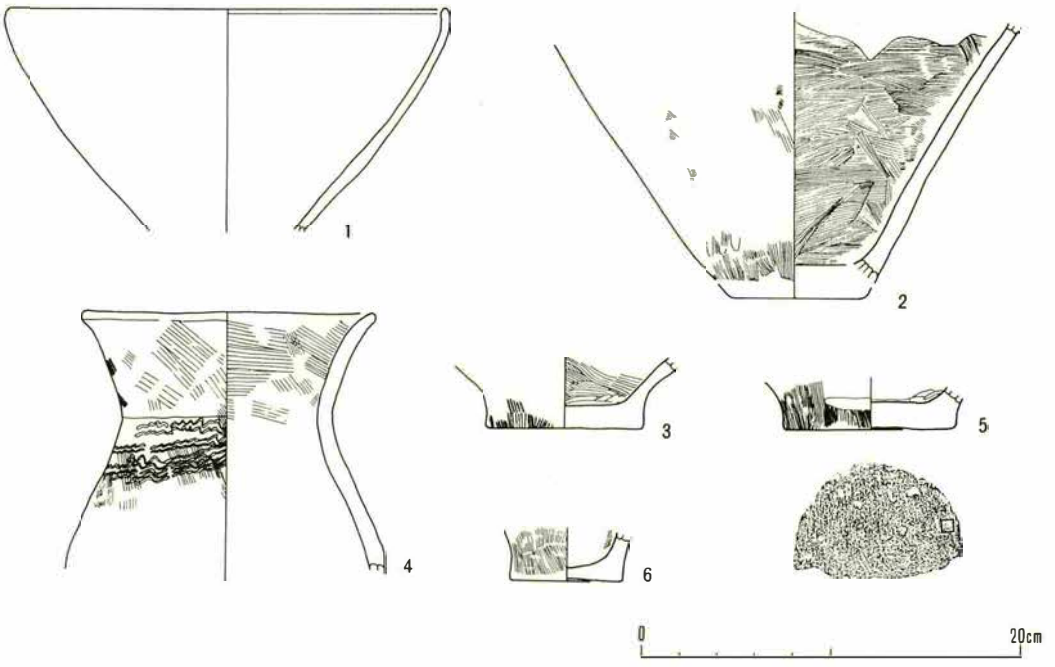
第55図　18号住居址出土土器（２）



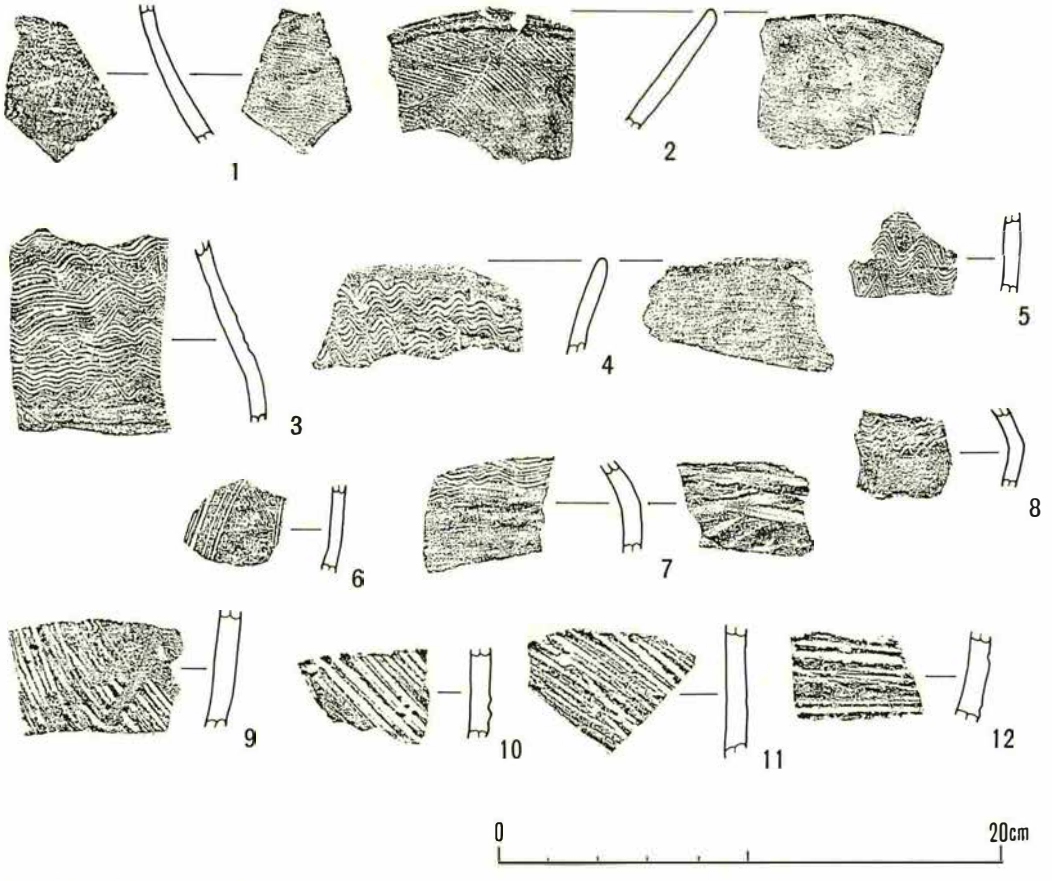
第56図　19号住居址平面図

19号住居址（弥生）第56～58図

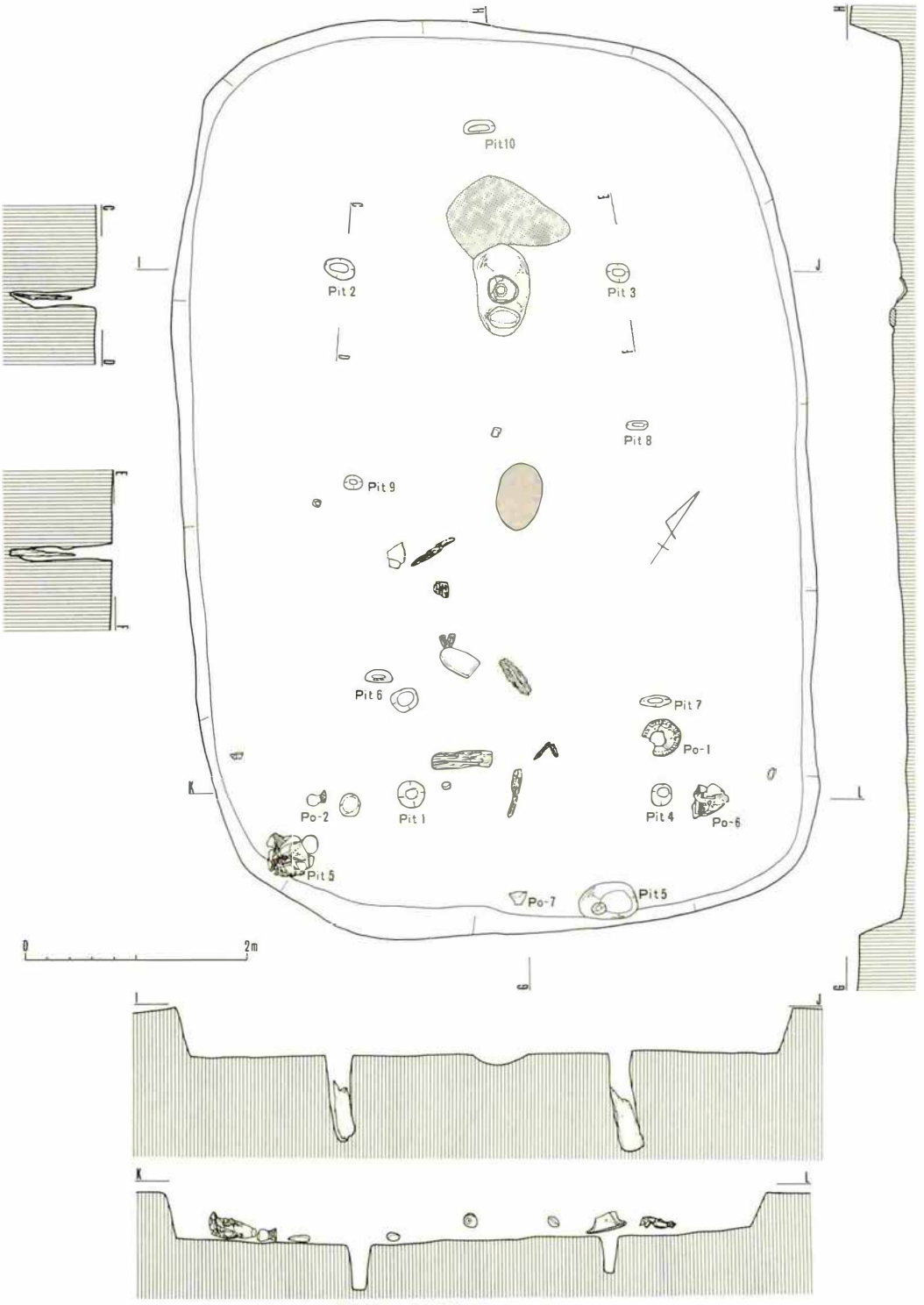
南集落北群のほぼ中央に位置し、57号土壙を切っている。住居は隅丸方形のプランを呈し、長軸5.96ｍ、短軸4.48ｍの規模である。この住居は他の住居と梯子受穴の位置に対する炉位置が異なっており、通常主軸上にある両者が、ここでは、直交する軸に炉がある。従って、入口はＮ－0°－Ｅの主軸上にあり、炉はＮ－90°－Ｗの軸にある。壁は東45cm、西40cm、南44cm、北42cmの高さがあり、やや外傾した壁面である。床面は全体的に良くしまっており、貼床となっている。炉は西側柱穴間に位置し、皿状の窪み中央に土器底部を置き、小礫２個を南に添えている。主柱穴は４本で、ピット１は深さ32cm、短径16cm、長径25cm、ピット２は深さ41cm、短径11cm、長径15cm、ピット３は深さ41cm、短径11cm、長径16cm、ピット４は深さ48cm、短径14



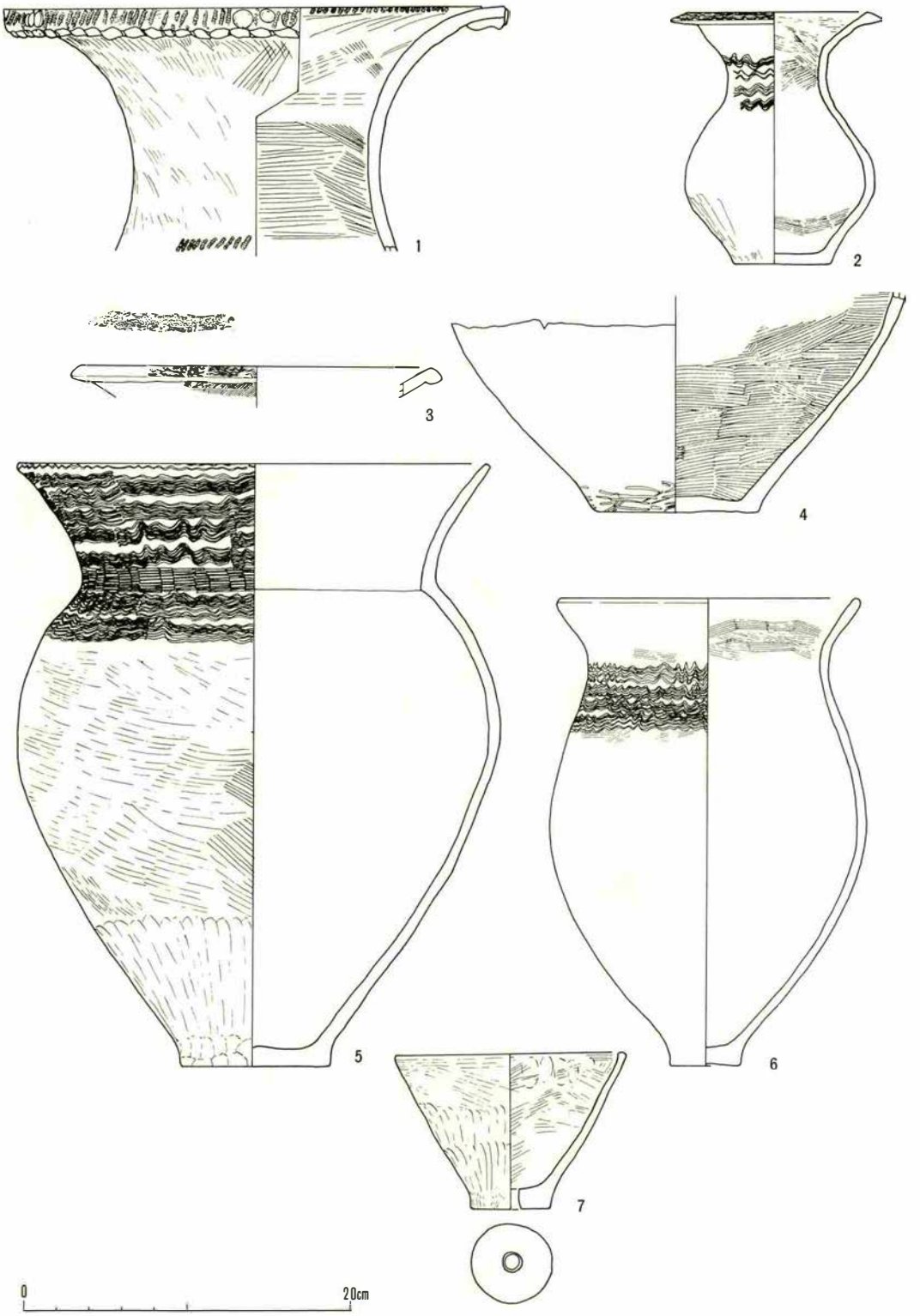
第57図　19号住居址出土土器（１）



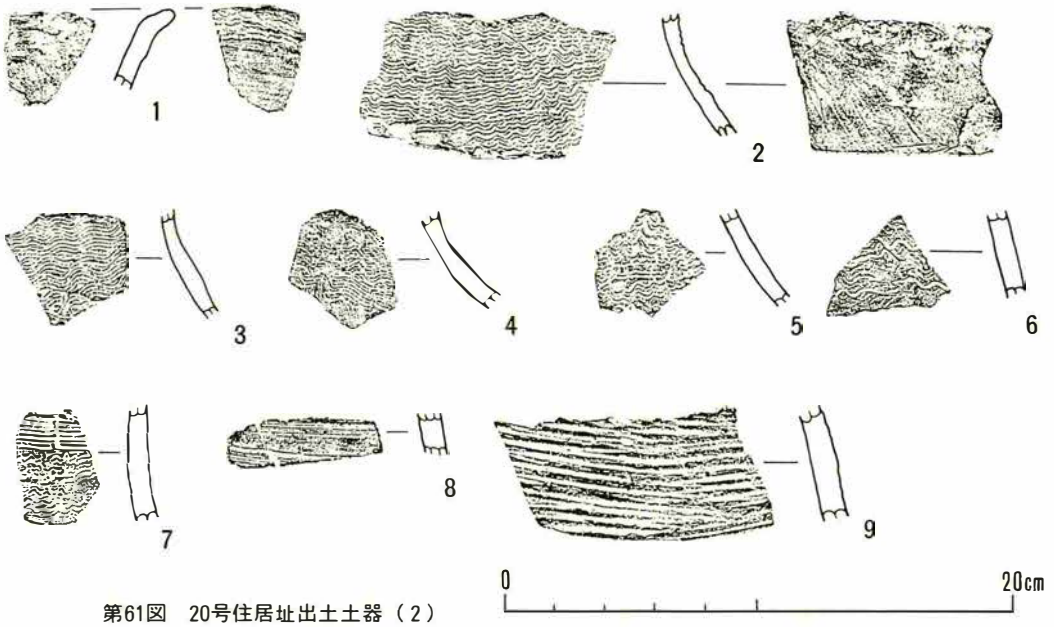
第58図　19号住居址出土土器（２）



第59図　20号住居址平面図



第60図　20号住居址出土土器（1）



第61図　20号住居址出土土器（２）

cm、長径14cmである。梯子受穴は東西27cm、南北17cm、深さ42cmで、入口方向に27°傾斜して掘られている。貯蔵穴は南壁に接しているが、深さ18.5cmで直径30cmで、内側に傾斜して掘られている。出土遺物は少なく、高坏、壷、甕等の破片が主体である。

20号住居址（弥生）第59～61図

南集落北群の北端に位置し、25号土壙、11号特殊遺構を切って造られている。住居は隅丸長方形を呈し、長軸3.15m、短軸5.68mの規模をもつ。主軸はN—39°—Wの方向である。壁は東30cm、西42cm、南36cm、北43cmの高さで、壁面は若干外傾している。床面は貼床で特に柱穴に囲まれた中央部が良好に堅くなっている。本住居は拡張住居で、新住居の床面を剥いだ段階で、炉と柱穴が下層より発見されている。そこで以下は新旧の住居に分けて説明する。

①新住居

主柱穴は５本で、ピット６は深さ62cm、短径12cm、長径25cm、ピット７は深さ59cm、短径10cm、長径24cm、ピット２は深さ79cm、短径19cm、長径27cm、ピット３は深さ90cm、短径17cm、長径21cm、ピット10は深さ48.5cm、短径12cm、長径27cmである。梯子受穴は無いが貯蔵穴は深さ29.5cm、短径33cm、長径52cmのロート状を呈する。炉は埋甕炉であるが、南側に楕円形の偏平な枕石を置いている。これらは東西49cm、南北82cmの皿状窪みの中にある。なお柱穴内に板状柱根が残る。

②旧住居

主柱穴は４本で、ピット１は深さ42cm、直径24cm、ピット４は深さ34cm、短径18cm、長径20cm、ピット９は深さ29cm、短径13cm、長径17cm、ピット８は深さ30.5cm、短径８cm、長径19cmである。柱根の残っているものは無い。炉は北側柱穴間に位置し、地床炉（40cm×60cm）である。梯子受穴や貯蔵穴はない。出土遺物は床面上より壷、甕、甑、炭化材などが出土している。

第62図　21号住居址平面図

21号住居址（弥生）第62～64図

北集落東端に位置し、16号周溝墓に重なる。北集落の住居址群は南集落に比べ密集しており、かつ、本遺跡発見の契機となったボックスカルバート掘削部分があるため、その南と北との関係や、住居の小群を把握するのは困難である。従って、ここでは便宜上ボックスより南を北集落南群と呼び、北側を北集落北群と呼んでいきたい。

住居は不整形に近い隅丸方形で、長軸5.31ｍ、短軸4.46ｍの規模をもち主軸の方位はＮ―78°―Ｅを示す。壁は西壁約25cmでくずれが多くしまりがない。東壁は35cmでやはりくずれが多く、南壁は30cm、北壁は25cmで、各辺の中央部は垂直に立ち上っているが、コーナでは傾斜が強くなる。床面は黄褐色砂質土で貼られ、ほぼ平坦であるが、北東部が５cm程高い。住居中央部と炉の周辺の床面直上にはカーボンが集中していた。炉は東側の柱穴間中央に位置し、40cm×60cmの皿状窪みをもつ地床炉である。炉内の焼土と炭の厚さは約５cmであった。柱穴は４本あり、ピット１は深さ26cm、短径21cm、長径27cm、ピット２は深さ63cm、短径15cm、長径18cm、ピット３は深さ57cm、短径18cm、長径21cm、ピット４は深さ20cm、短径18cm、長径24cmである。梯子受穴は西壁直下にあり、深さ46cm、短径23cm、長径32cmで壁外側に向って20°位傾斜している。

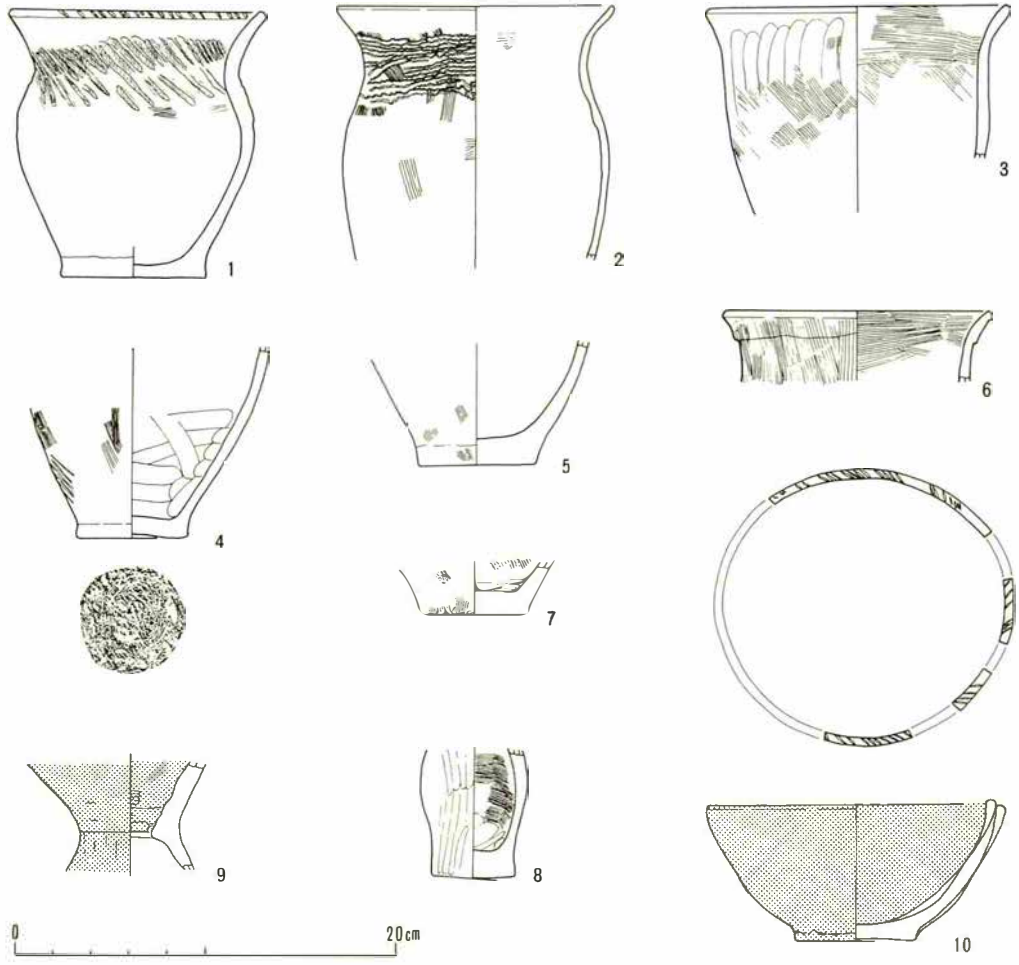
貯蔵穴は壁に接して位置し、深さ23cm、短径23cm、長径28cmで垂直に掘られている。

覆土はレンズ状の堆積をしており大きく2層に分けられる。上層は黒色粘質土で堅くしまっており、白色小砂粒を多く含んでいる。下層は数枚に分かれるが、暗灰褐色粘質土と黄褐色砂質土のブロックが混っている層が主体となっている。なお住居北東部には炭と焼土が床面より15cm程浮いて検出された。住居がある程度埋った時点で何か焼いたのではないか。

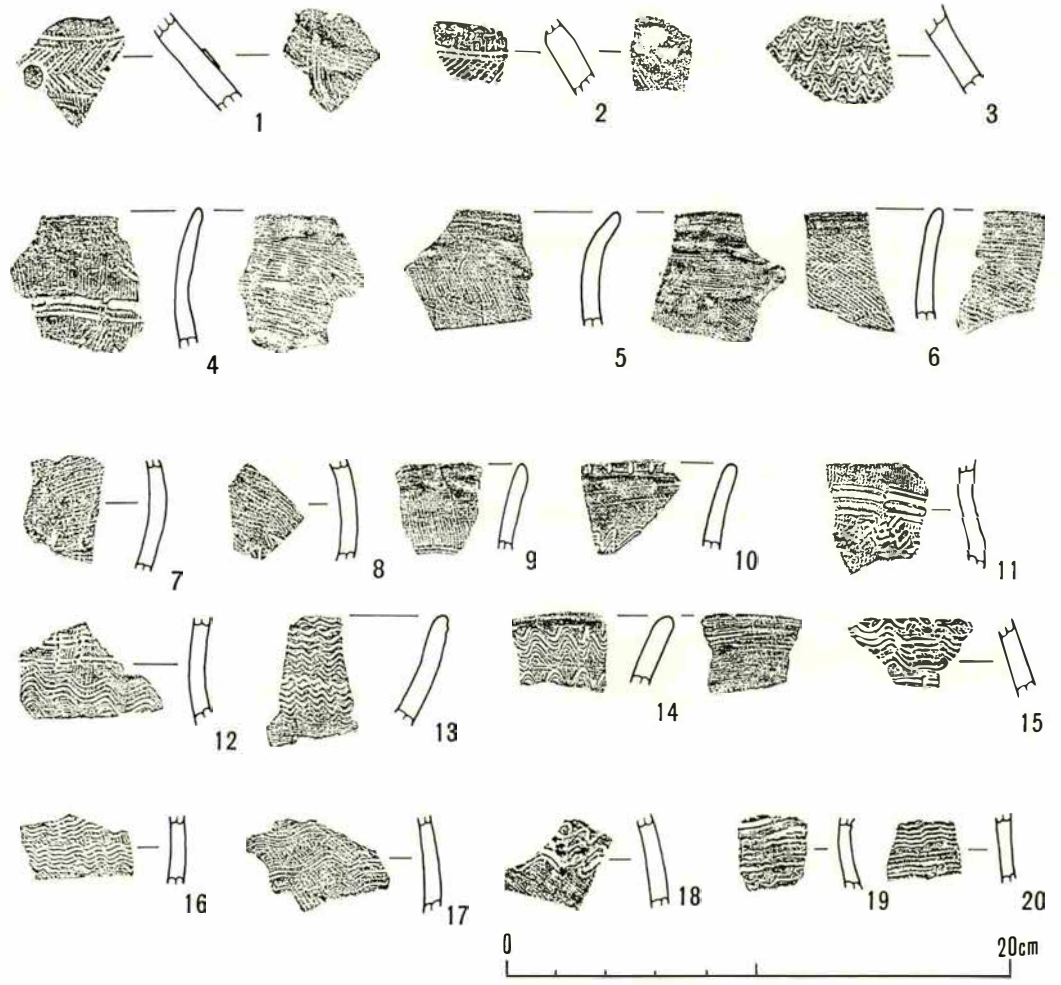
出土遺物は少ない。完形にちかい甕及び甕破片と、赤彩された碗、器台等の土器がある。

22号住居址（弥生）第65図

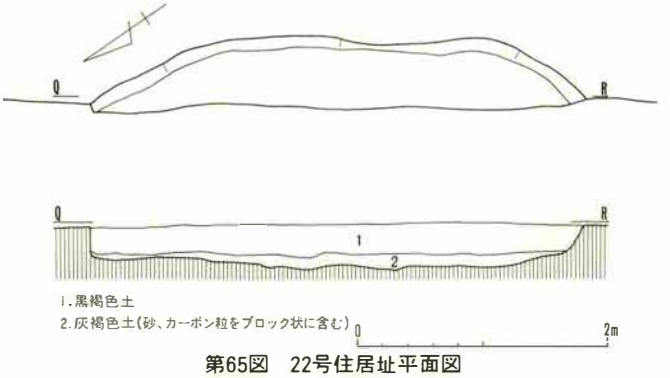
北集落南群に含まれるが、住居址の大部分をボックスカルバートの掘削工事によって削り取られてしまい、わずかに巾70cm、長さ4mの範囲が残って調査されたにすぎない。住居のプランは隅丸方形と考えられ、主軸はN−34°−Eである。壁の高さは東壁で20cmを測るが、壁面はやや外傾している。住居覆土は黒褐色土で、床面は灰褐色土を踏み固めているが、しまりは無い。柱穴その他の施設は不明である。出土遺物は覆土中や床面直上から土器片が若干出土している。



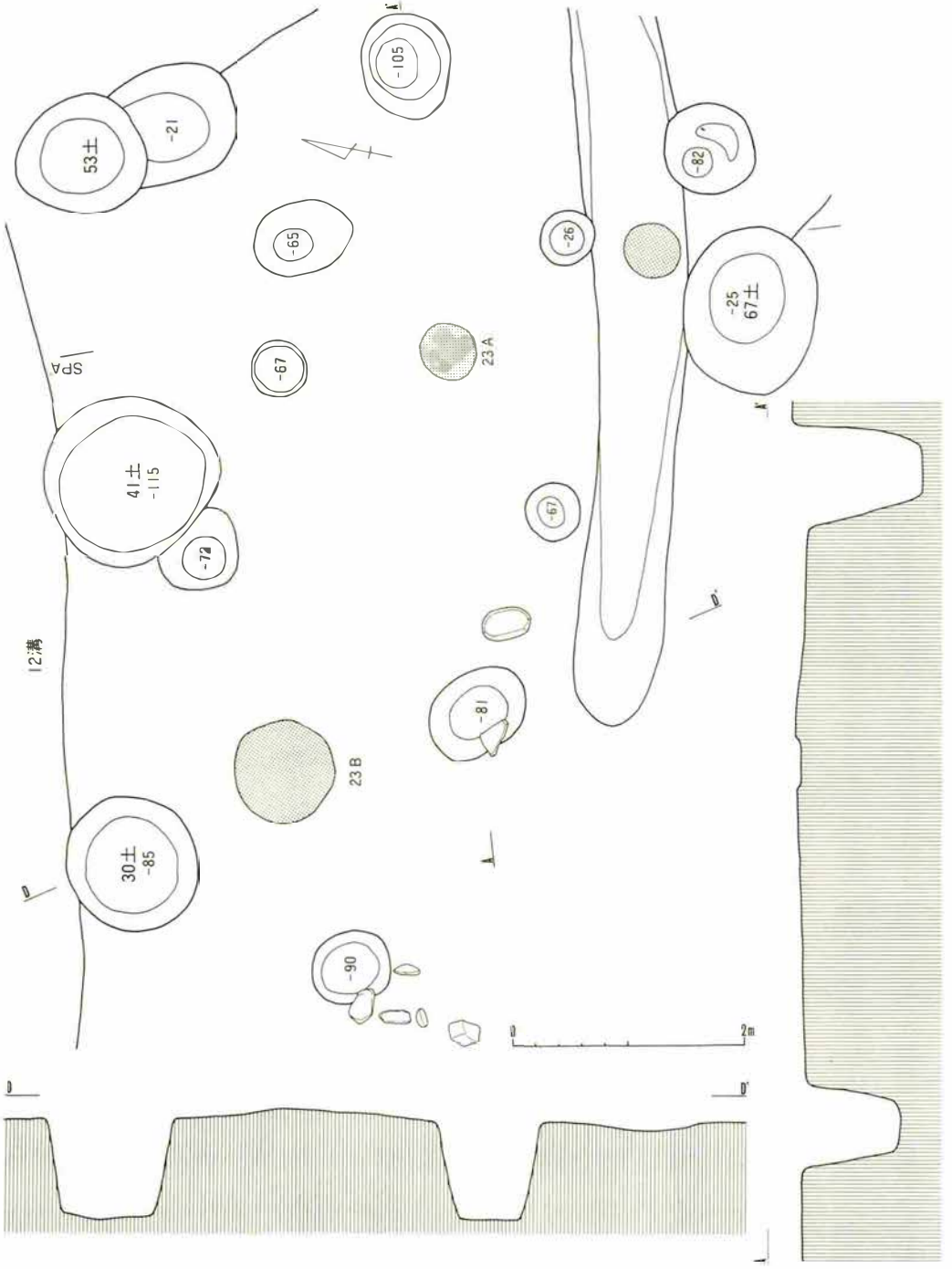
第63図　21号住居址出土土器（1）



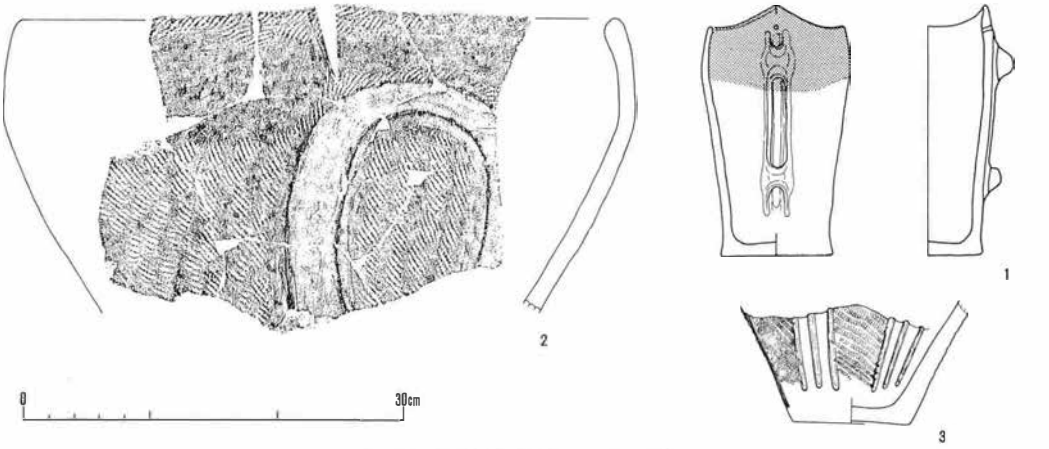
第64図　21号住居址出土土器（２）



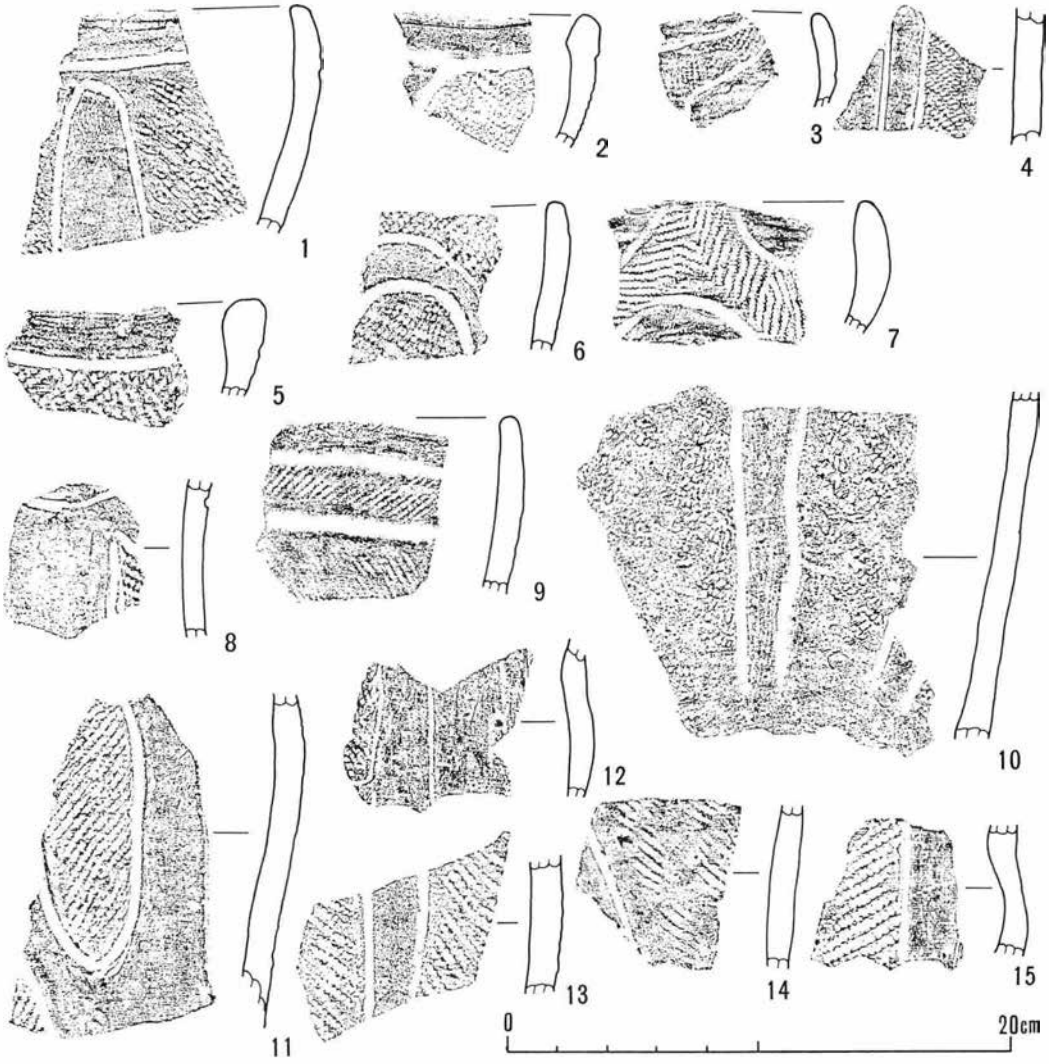
第65図　22号住居址平面図



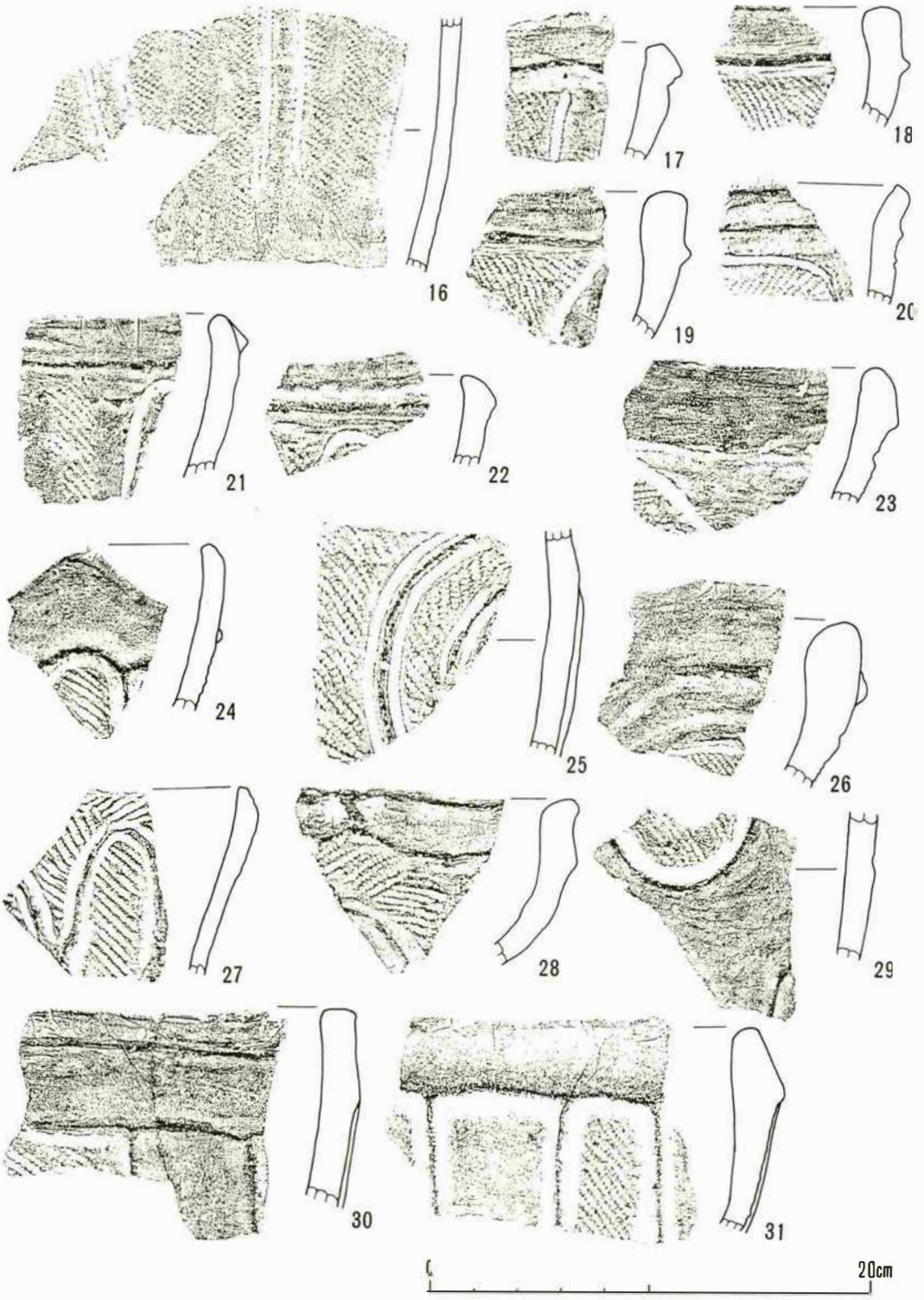
第66図　23号住居址平面図



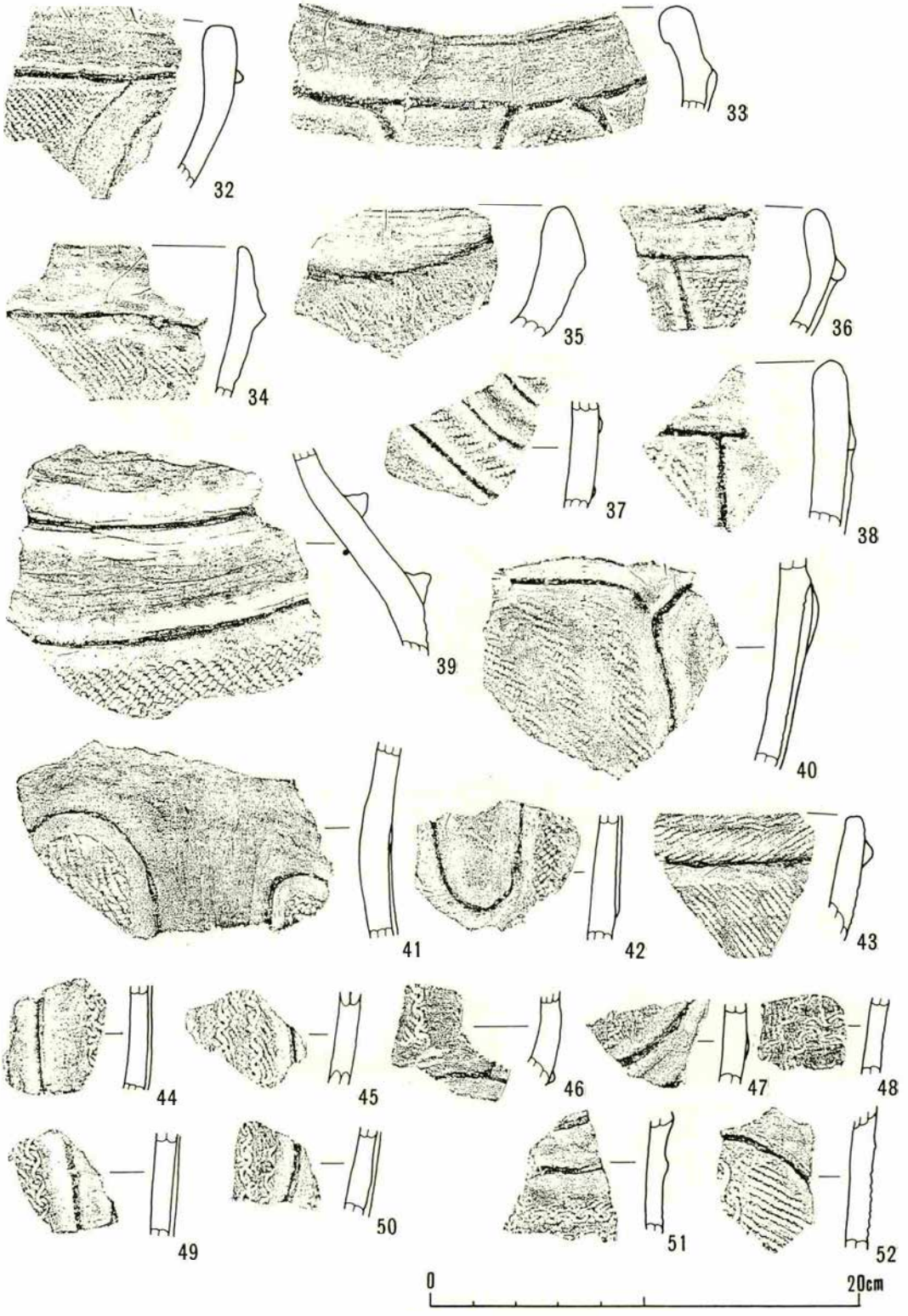
第67図　23号住居址出土土器（１）



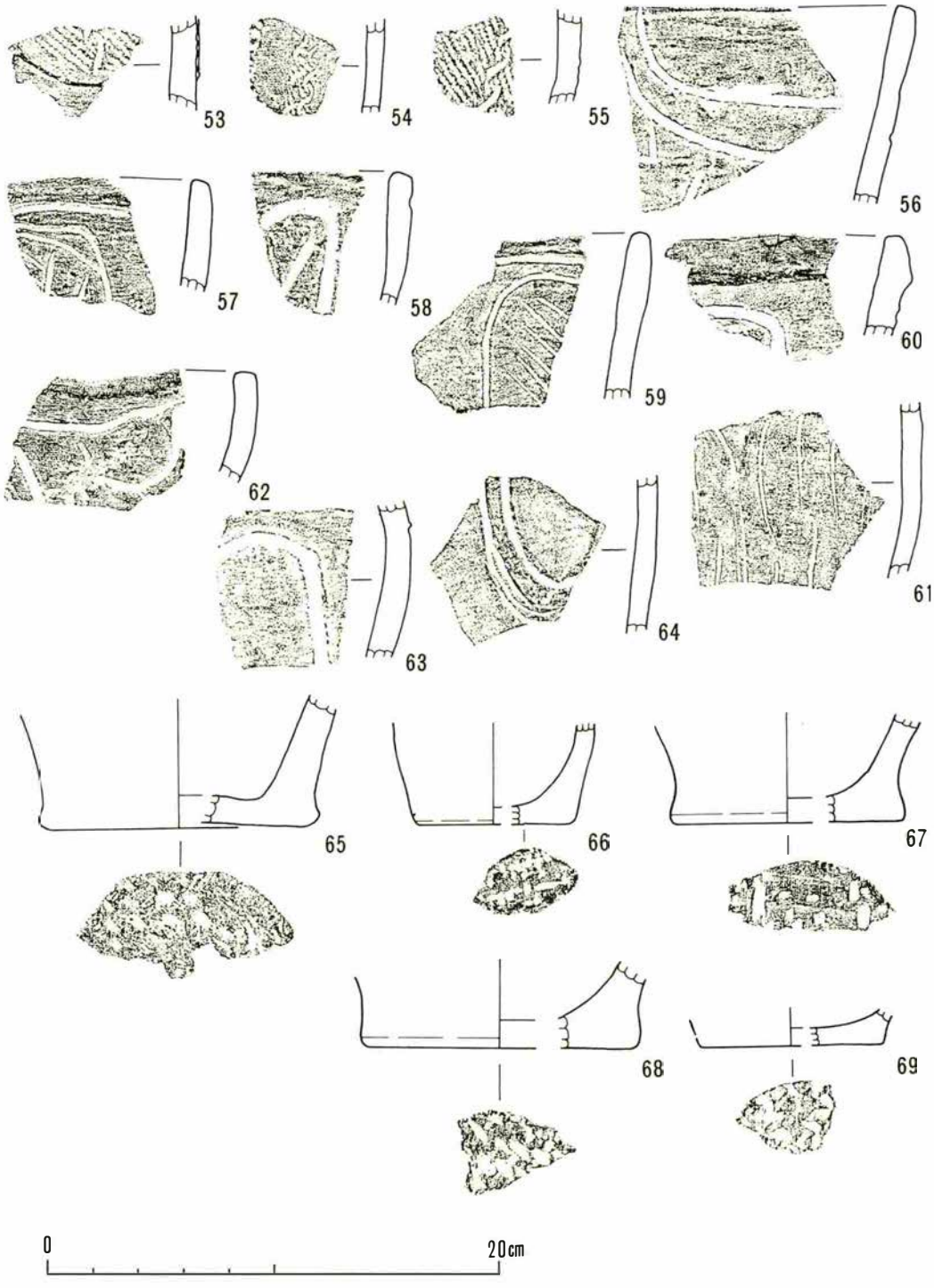
第68図　23号住居址出土土器（２）



第69図　23号住居址出土土器（３）



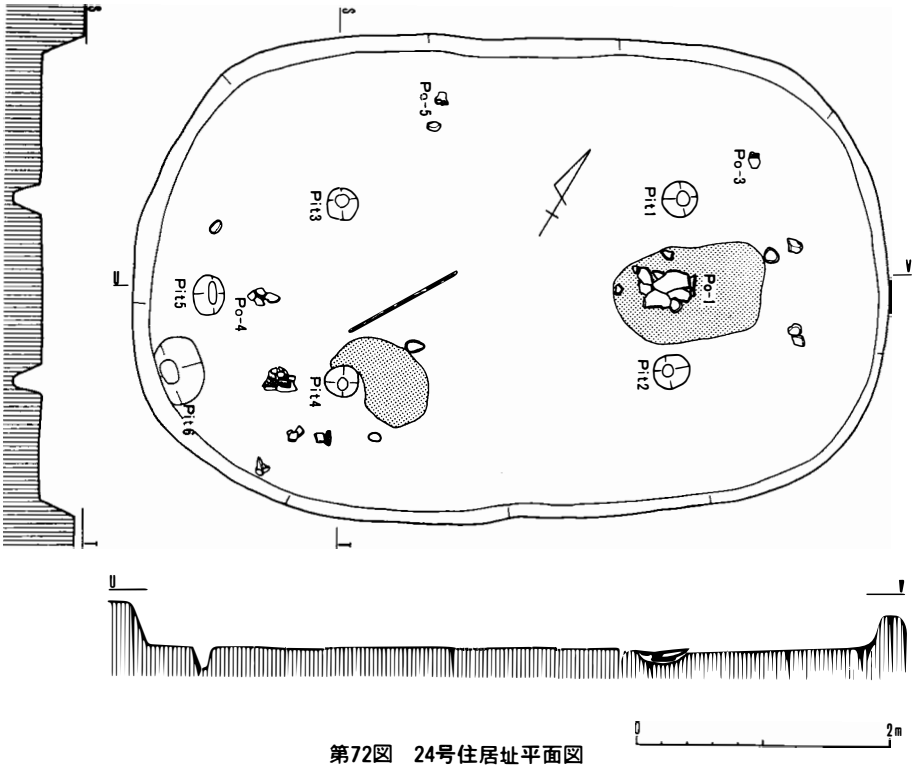
第70図　23号住居址出土土器（4）



第71図　23号住居址出土土器（５）

23号住居址（縄文）第66～71図

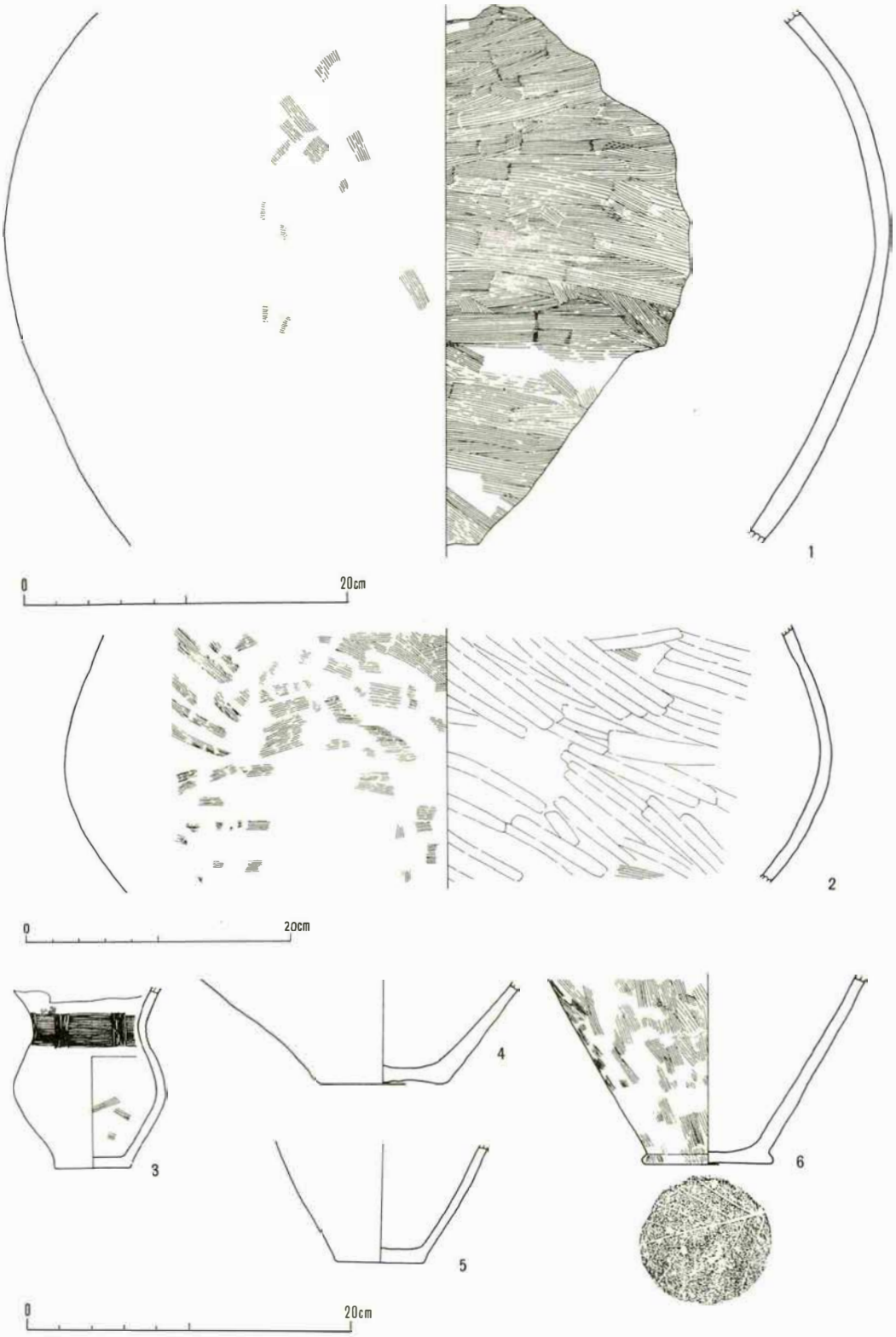
遺跡中央部のＶ字溝南に位置し、13溝をはじめ、30号土壙、41号土壙、67号土壙などと重複している。地床炉と思われる焼土が２ケ所あり、これを23Ａ、23Ｂとした。23Ａの周囲には７～８本のピットがほぼ環状に分布している。これらが柱穴であるとすれば、直径５～６ｍの円形住居になるであろう。又、23Ｂの周囲には30号土壙を含めて４本のピットがある。これも５ｍ位の円形住居になる可能性があるが確定はできない。23Ａの焼土は直径50㎝、23Ｂの焼土は直径90㎝の円形である。出土土器で第67図１は23Ａの炉南側より出土したものであるが、他は23号住居範囲の覆土中より出土した。これらの土器は縄文中期終末に属する土器群で、所謂曽利Ｖ式、又は加曽利ＥⅣ式土器である。特筆すべきは第70図44～52の破片で、伊那地方に分布する結節縄文土器と類似するものである。この他打製石斧、磨製石斧、磨石等が出土している。



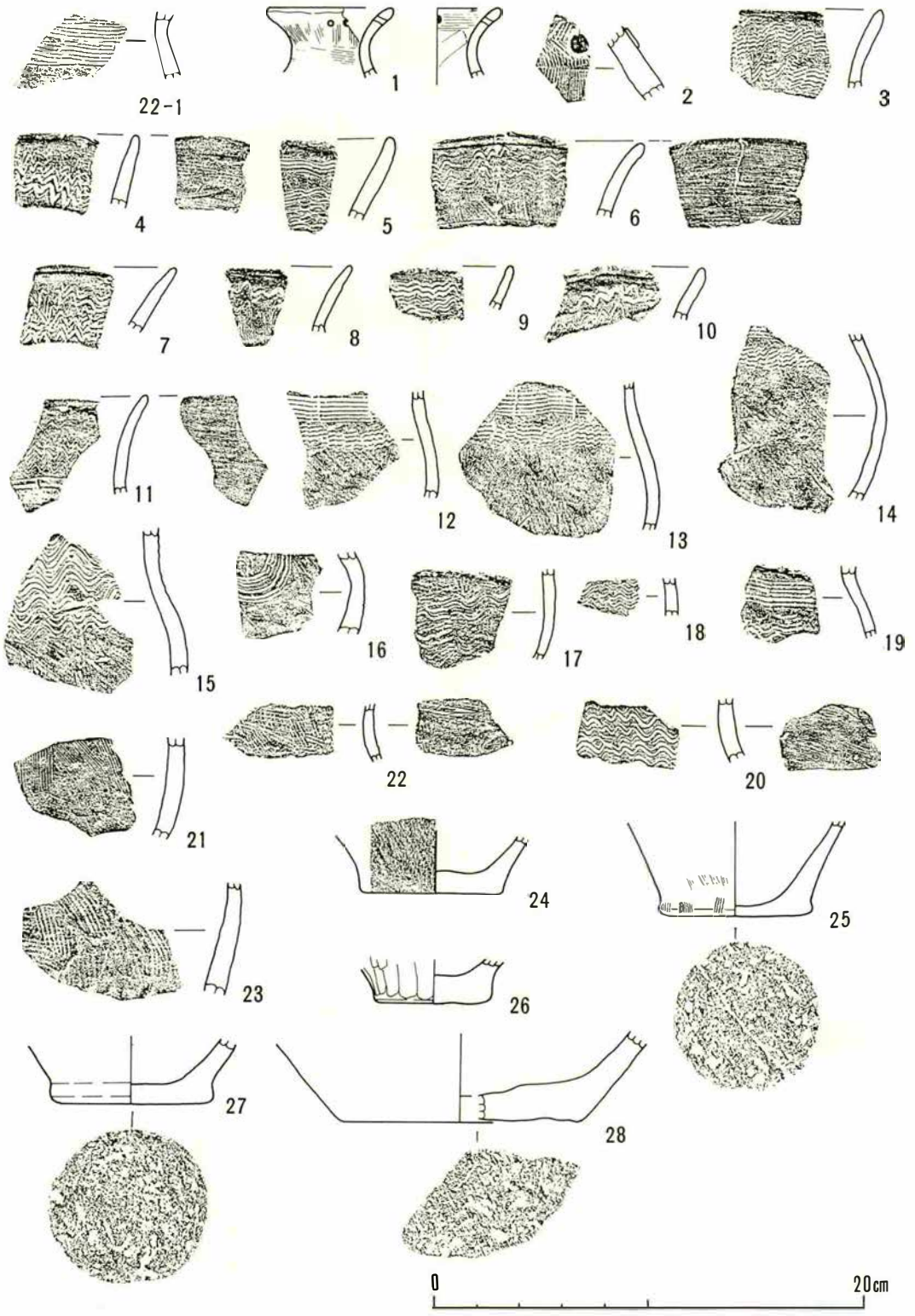
第72図　24号住居址平面図

24号住居址（弥生）第72～74図

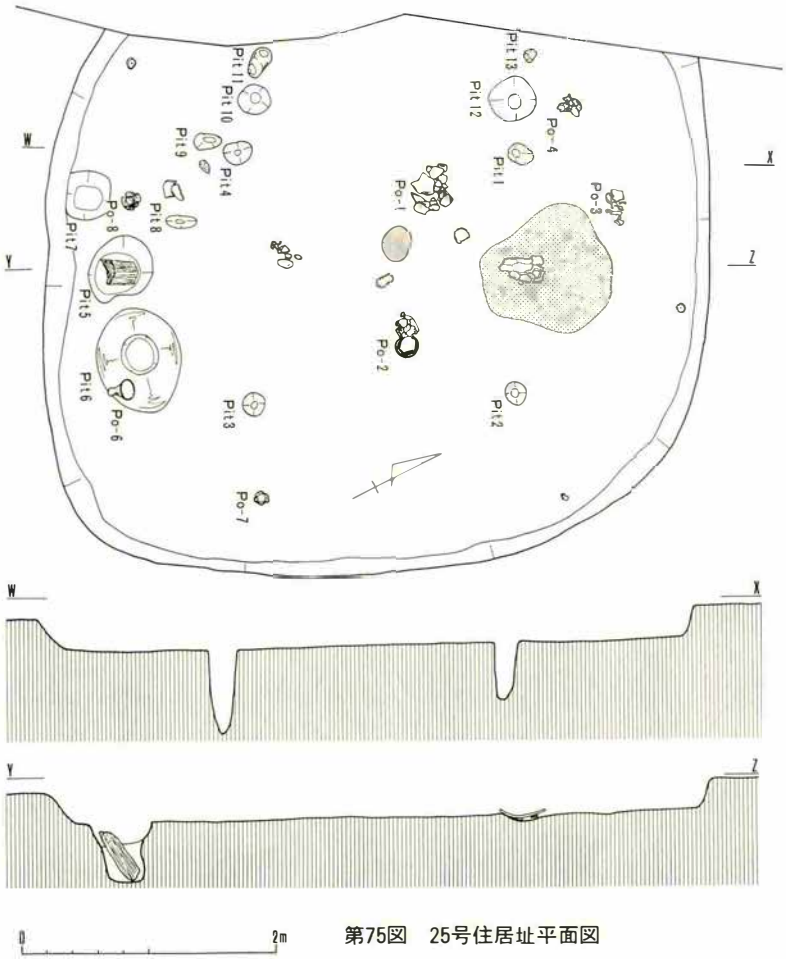
北集落南群の南に位置し、他の遺構とは重複しない。住居址プランは長円形を呈し、長軸6.0ｍ、短軸3.77ｍである。主軸は長軸と一致し、N―56°―Eの方位をもつ。壁は南東24㎝、北西34㎝、南西34㎝、北東26㎝の高さがあり、やや外傾斜の壁面である。床面は地山を床とし、ほぼ水平に造られる。床面には炭化物を含む薄い層が１枚広がっていた。柱穴は４本で、ピット１は深さ20㎝、直径28㎝、ピット２は深さ24.7㎝、直径27㎝、ピット３は深さ21㎝、直径25㎝、ピット４は深さ22㎝、直径26㎝である。炉は北東側柱穴間中央に位置し、東西74㎝、南北117㎝の範囲に焼土が広がる。焼土の真中には土器片が敷かれ、その下には40㎝の円形皿状ピ



第73図　24号住居址出土土器（1）



第74図　24号住居址出土土器（２）



第75図　25号住居址平面図

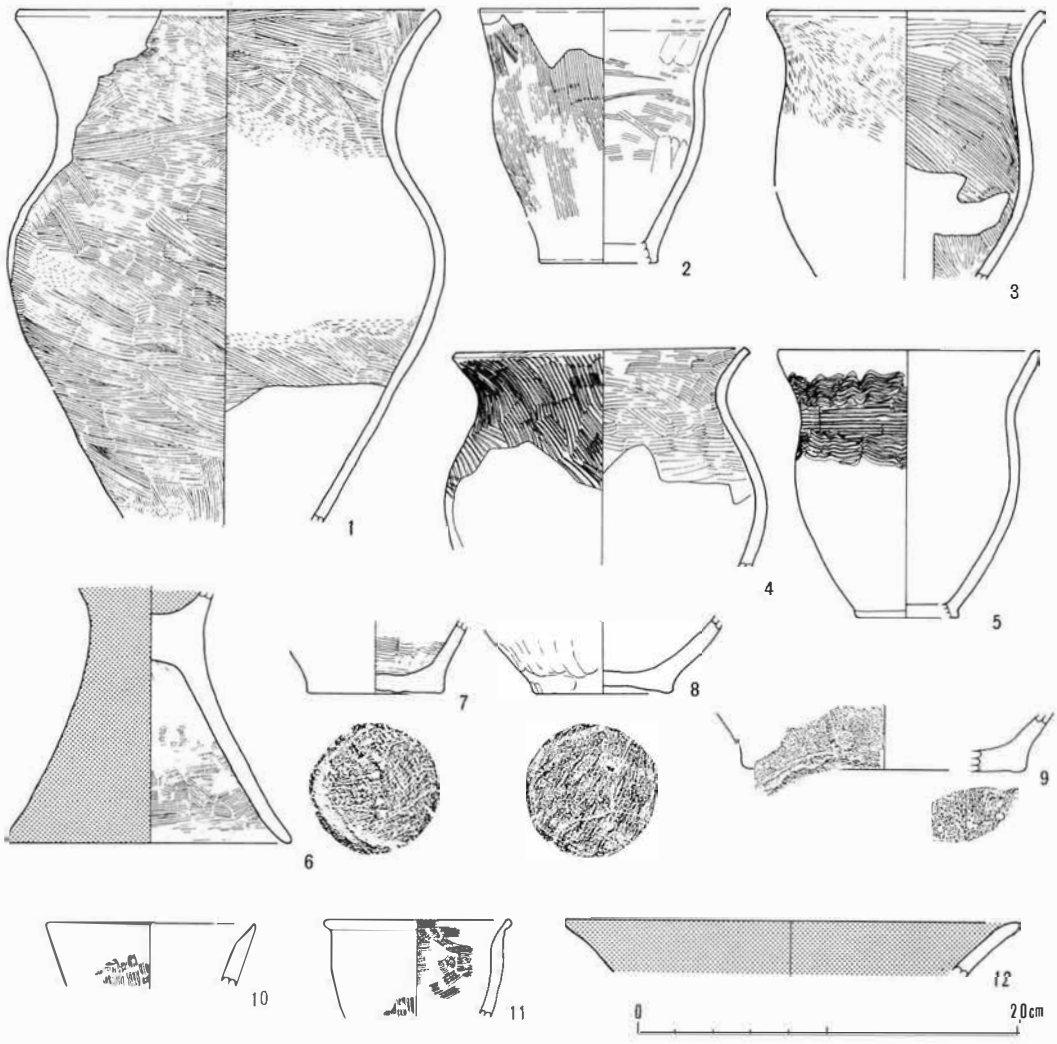
ットがある。貯蔵穴は南西の壁に接しており、深さ50cm、短径50cm。梯子受穴は深さ18cm、短径24cm、長径31cmである。出土遺物は炉に使用された壷破片をはじめ、小型甕、壷などがある。又、住居中央には棒状木製品が遺存していた。

25号住居址（弥生）第75～77図

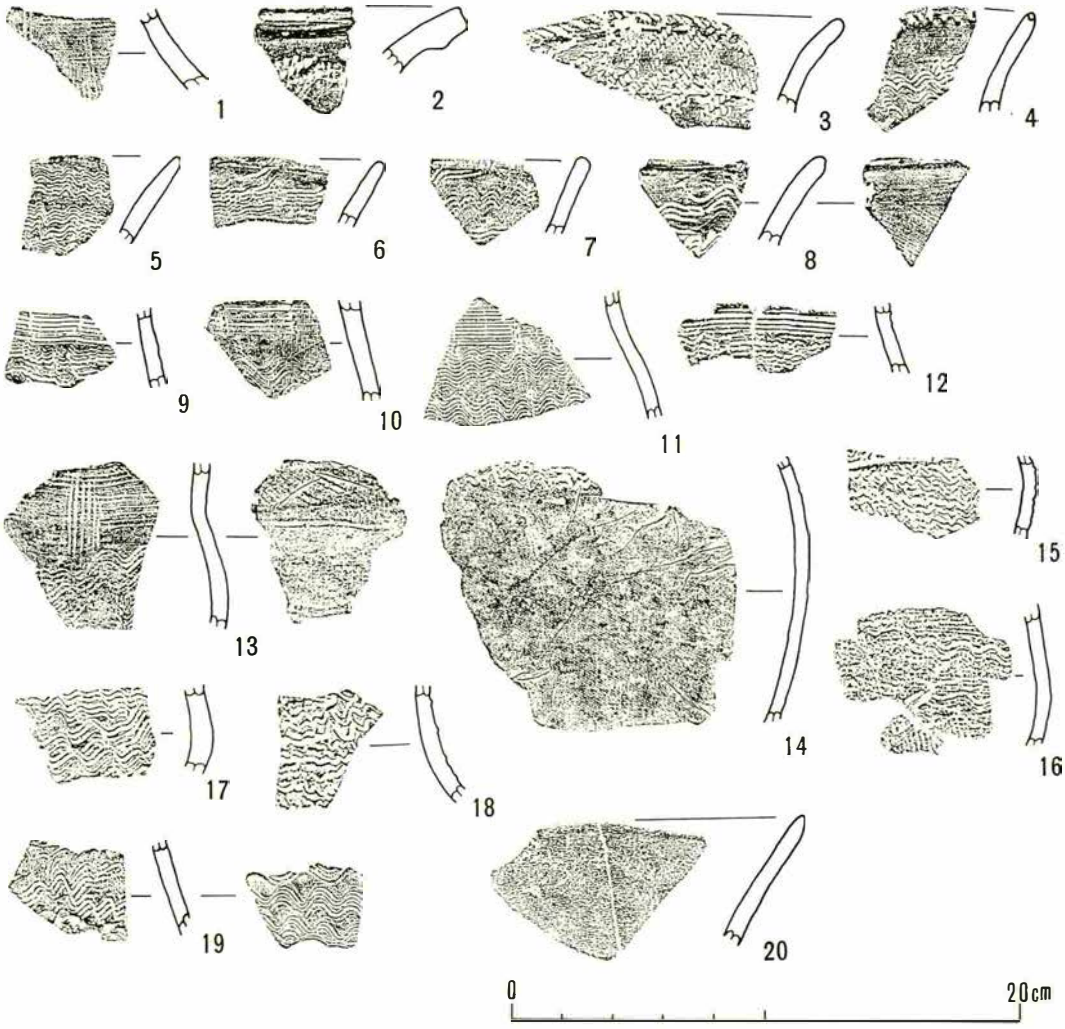
北集落南群にあり、ボックスカルバートによって北西辺の一部を削り取られている。又69号土壙を切っている。住居址の規模は長軸5.2ｍ、短軸4.5ｍ（現存部のみ）で、隅丸方形を呈している。主軸はN―27°―Eの方位である。壁は南20cm、東23cm、北25cmで、壁面はやや外へ傾斜している。床は北から南へゆるやかな勾配をもっているが、全体は平坦である。床は貼床され堅く良好なしまりをしている。炉は北側の柱穴間にあって、土器片を敷いた土器敷炉である。焼土は東西95cm、南北1.05ｍの範囲に広がっている。主柱穴は4本であるが、西へ1度あるいは2度拡張しているので、8～9本の柱穴がある。ピット1は深さ46cm、短径17cm、長径20cm、ピット2は深さ37cm、短径17cm、長径18cm、ピット3は深さ47cm、短径17cm、長径18cm、ピット4は深さ67cm、短径18cm、長径22cm、ピット8は深さ22cm、短径10cm、長径26cm、ピット9は深さ27cm、短径11cm、長径22cm、ピット10は深さ15.5cm、短径23cm、長径25cm、ピット11は深さ24.5cm、短径14cm、長径25cm、ピット12は深さ17cm、短径34cm、長径36cm、ピット13は深さ21.5cm、短径8cm、長径10cmである。当初ピット1～ピット4で建てられていた住

居が、次にピット２、ピット３、ピット10、ピット12の４本柱となり、次にピット２、ピット３、ピット11、ピット13と変化したのであろうか。ピット11とピット13は支柱とする見方もある。ピット６は貯蔵穴である。深さ47㎝、短径66㎝、長径84㎝で、二段に掘られている。上部から高坏脚が出土している。ピット５は梯子受穴である。中から梯子の木材根が出土している。約20㎝程の直径の丸太を半截し半截面を下にして斜めに埋め込まれていた。残存している長さは約50㎝である。丸太面に刻みを入れて階段にしたものであろう。ちなみに、角度は垂直方向より22°住居外へ傾斜している。ピット７は南壁に接しており深さ24㎝、短径36㎝、長径40㎝の方形ピットである。貯蔵穴とすべきであろうか。

出土遺物は、炉内の土器の他に、甕８、鉢２、高坏２等が床面上から出土し、覆土中からは破片が若干出土した。



第76図　25号住居址出土土器（１）

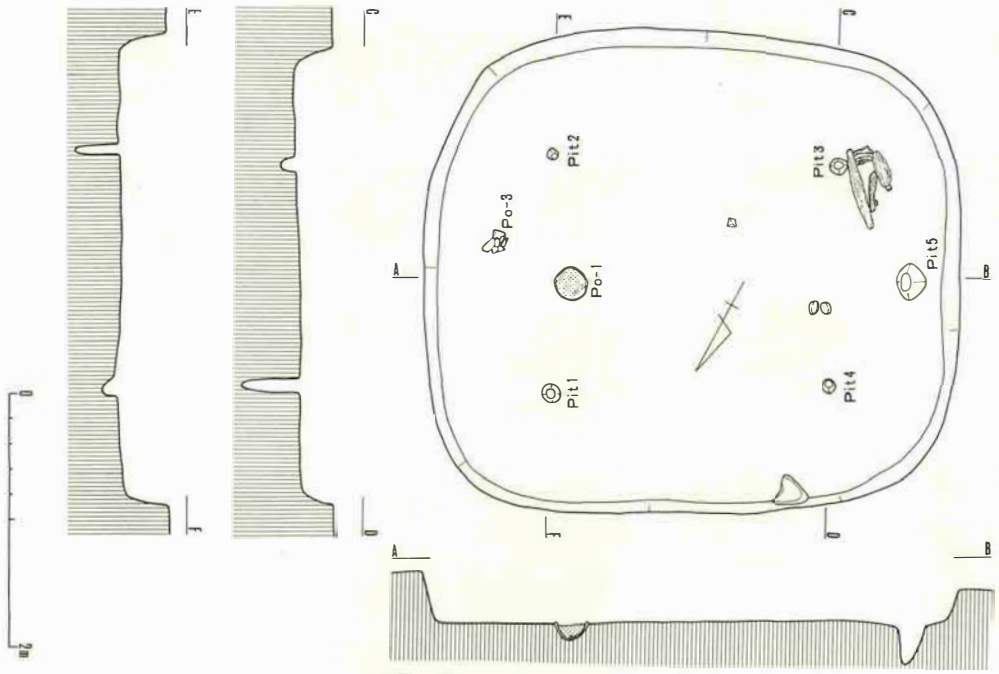


第77図　25号住居址出土土器（２）

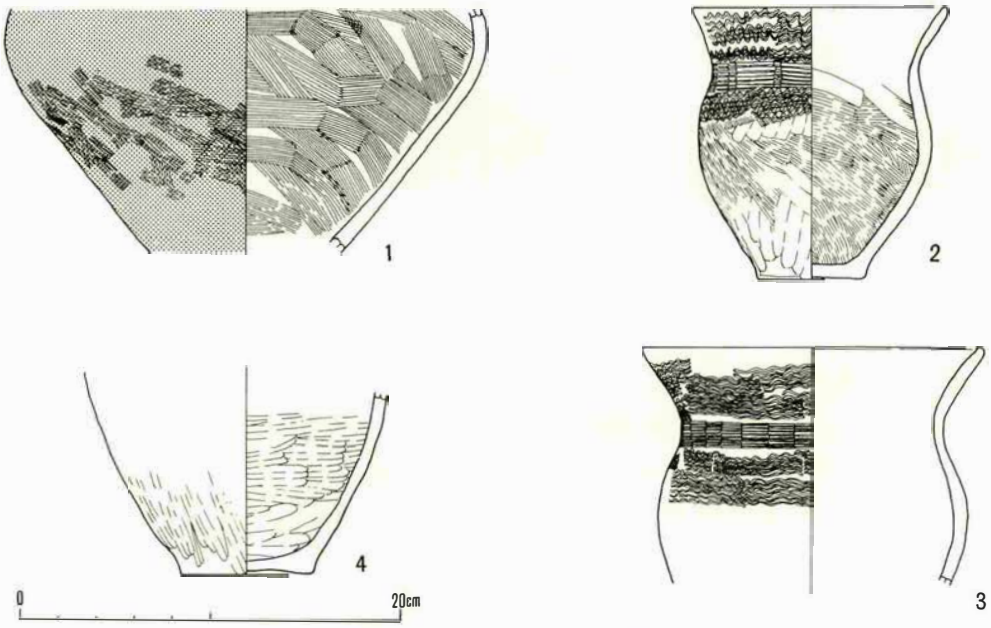
26号住居址（弥生）第78～80図

北集落南群の西端に位置し、他の遺構との切り合は無い。住居址は隅丸方形で長軸 4.29ｍ、短軸 3.81ｍの規模をもち、主軸はＮ－62°－Ｅである。壁は南40cm、北27cm、西35cm、東32cmで、やや外傾している。床は地山を使って堅く良好。炉は北側住穴中央に位置し、埋甕炉である。使用された土器は甕ではなく壷で、直径27cmの胴部下半を使用し、上半は打ち欠かれている。底部は無く、土器上端は床面より若干高い位置に据え付けられている。柱穴は対角線に４本が配置され、ピット１は深さ12cm、短径14cm、長径15cm、ピット２は深さ36cm、短径８cm、長径９cm、ピット３は深さ13cm、短径13cm、長径15cm、ピット４は深さ47cm、短径11cm、長径12cmで、柱穴の平面形は円形にちかい。梯子受穴は主軸線上にあって、深さ59cm、短径24cm、長径29cmの楕円形プランをもち、23°の傾斜がある。

出土遺物は炉に使用された壷胴下半と甕である。ピット３の南西側には炭化材が数本重なって残っているが、性格は不明である。



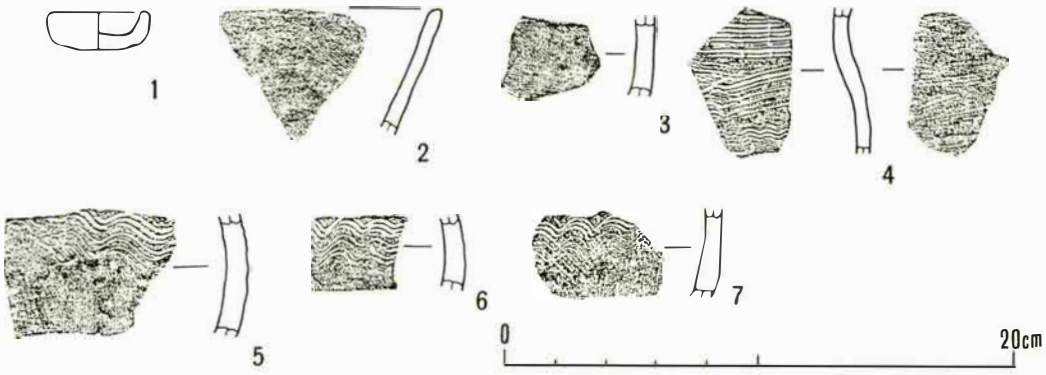
第78図　26号住居址平面図



第79図　26号住居址出土土器（1）

27号住居址（縄文）第81～82図

遺跡調査区のほぼ中央に位置し、4号方形周溝墓、27号土壙、50号土壙、54号土壙などと重複している。従って住居址のプラン及び主軸等については全く不明であり、唯一住居址として決定できたのは石囲炉の検出によってであった。石囲炉は北に頂点を有する五角形を呈し、東西80cm、南北90cmの規模で、南、東、北東の3個の炉石は板状長円礫が良好に残っているが、



第80図　26号住居址出土土器（２）

第81図　27号住居址平面図

北西、西側の炉石は破砕されて炉内に転入している。炉石は南では幅15cm、長さ55cm、厚さ28cmで、東は巾15cm、長さ45cm、厚さ25cm、北東では巾23cm、長さ45cm、厚さ30cmである。

出土遺物は炉中の出土破片を掲載した。いづれも縄文時代中期終末の土器で、曽利Ⅴ式、加曽利ＥⅣ式に属するものである。

28号住居址（弥生）第83～85図

北集落北群のうち最北端に位置する住居で、撹乱による土壙などに接する他、重複等は見られない。住居址は円形に近い隅丸方形で、長軸5.8ｍ、短軸5.1ｍの規模で、主軸はＮ―35°―Ｅの方位を示す。壁は南東で30cm、北西で27cm、南西25cm、北東28cmと比較的高さが残っており、壁面はやや外傾する。床面は貼床で軟弱となっており、貼られている土は木炭と地山ブロックを多量に含む暗褐色土である。炉は北側柱穴中央に位置し、東西56cm、南北82cmの卵形をした皿状ピットに焼土が残っている地床炉である。柱穴は４本で、住居の対角線上に位置し、ピット１は深さ40cm、直径20cm、ピット２は深さ49cm、直径20cm、ピット３は深さ63cm、直径22cm、ピット４は深さ57cm、直径24cmである。各柱穴の平面形はほぼ円形である。梯子受穴は主軸上にあって、南西壁より35cm内側に掘られている。深さ34cm、東西42cm、南北40cmの円形プランであるが、底面は長円形で、その位置も住居中心に寄っているので、約10°の傾斜をもつピットとなっている。貯蔵穴は南西壁中央西寄にあり、東西42cm、南北42cm、深さ27cmである。なお、住居内西側の柱穴中央部に焼土、木炭の層が薄く広がっていたが、これは炉ではない。

出土遺物は少なく、赤彩された高坏、小型土器、その他が若干出土しているだけである。

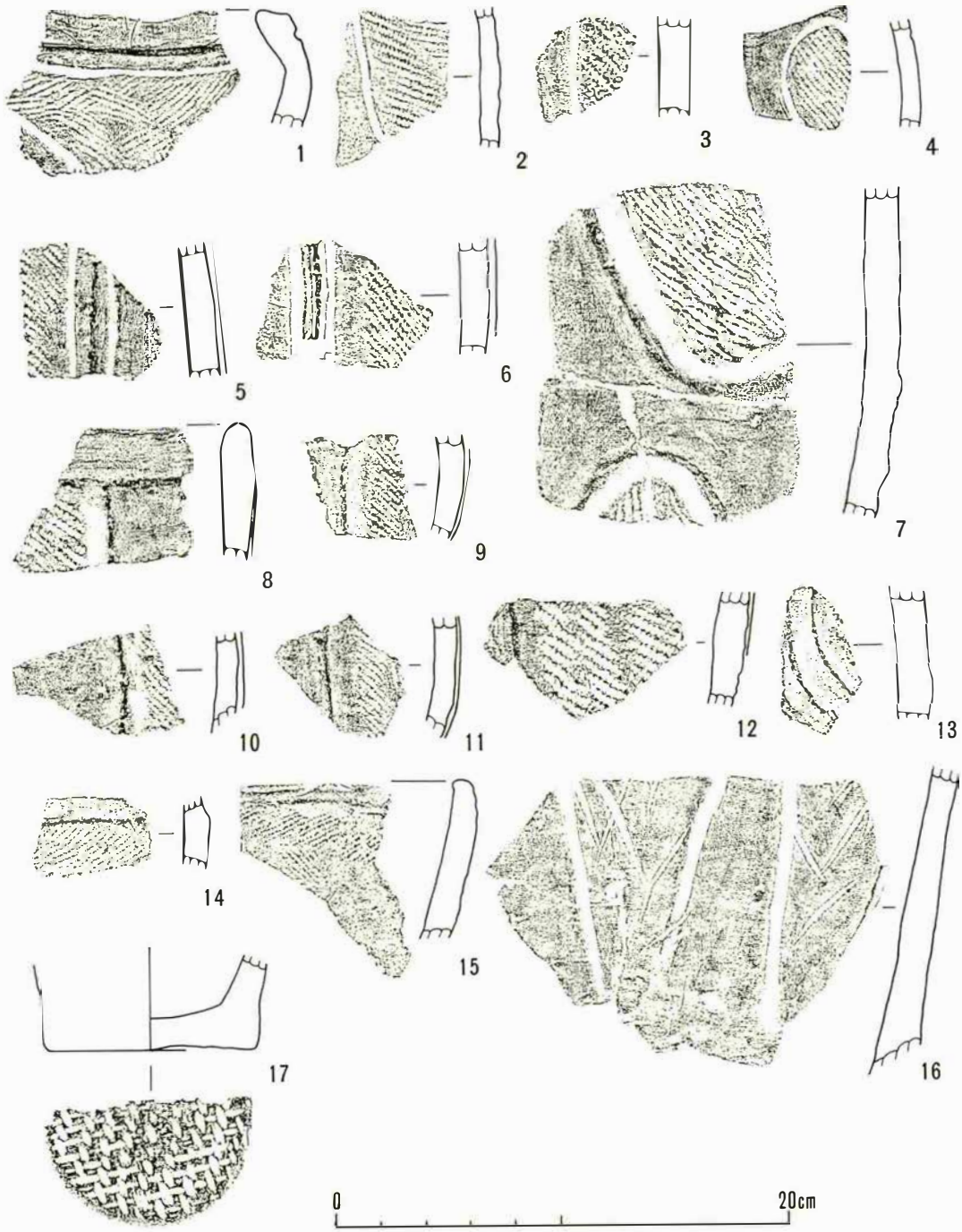
29号住居址（弥生）第86～88図

北集落北群の北東部に位置し、上層と下層の２軒の住居に分けられる。柱穴、炉位置などから判断すると、下層住居を拡張し上層住居が造られたものである。他の遺構との切り合いは、90号土壙を切って造られているだけで、同時期の遺構との重複関係は見られない。住居址は円形に近い隅丸方形で、下層の住居の方が方形に近いプランを持っている。上層、下層の住居を分けて説明する。

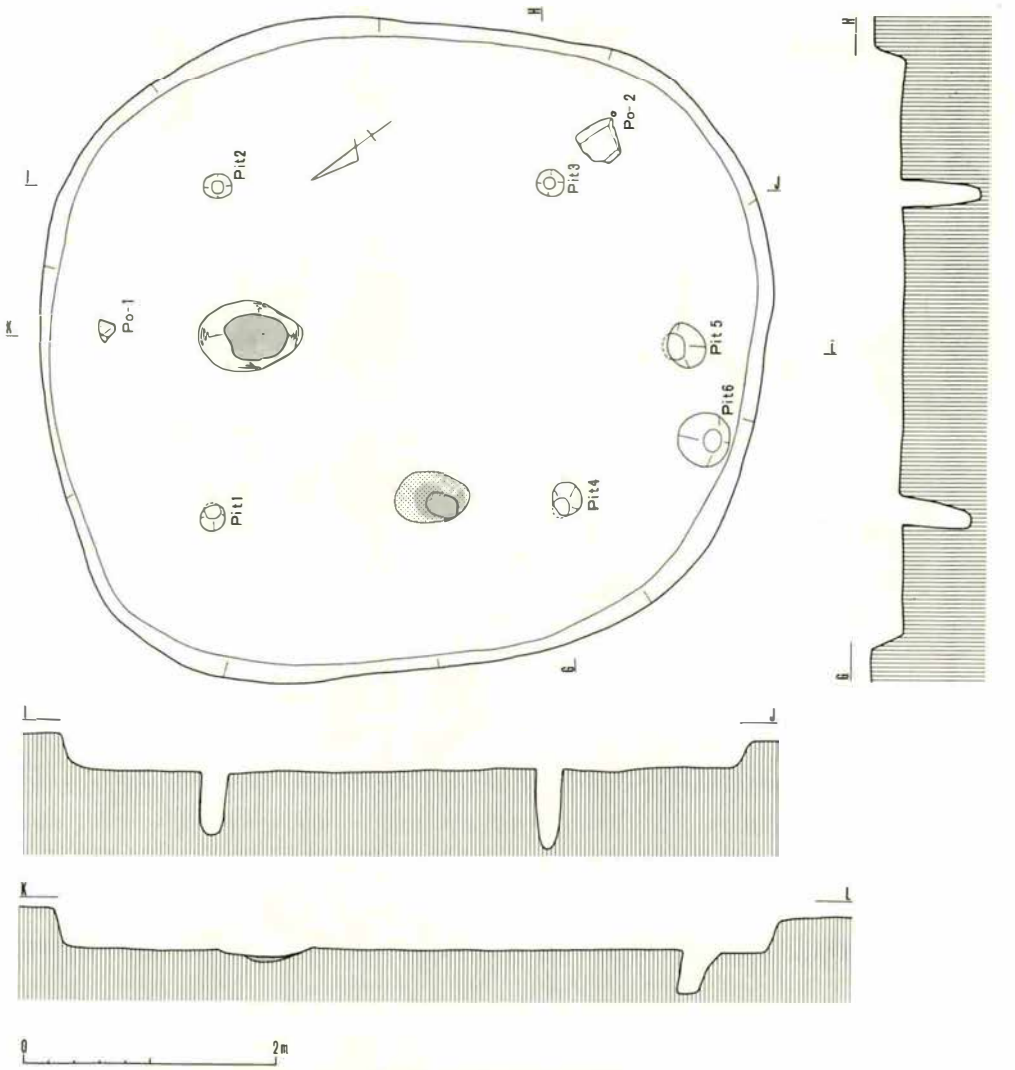
①上層住居

住居の規模は長軸7.3ｍ、短軸6.5ｍで、主軸はＮ―32°―Ｅの方位を示す。壁は南東で40.5cm、北西43cm、南西41cm、北東32cmの高さがあり、壁面は外傾している。床面はほぼ全面に貼床され、黄褐色を呈する砂質土である。炉の周辺は部分的に堅いところもあるが、全体的には軟弱な床と言えよう。炉は住居北側の柱穴中央に位置し、東西1.2ｍ、南北1.5ｍの焼土範囲があるが、その中心に35cm×50cmの皿状ピットがあって、地床炉の核と言えよう。柱は４本主柱で、ピット１は深さ22cm、短径27cm、長径30cm、ピット２は深さ38cm、短径15cm、長径20cm、ピット３は深さ64cm、短径21cm、長径35cm、ピット４は深さ56cm、短径18cm、長径21cm、である。貯蔵穴は住居南壁に接して掘られ、深さ35cm、東西42cm、南北46cmの規模である。梯子受穴は主軸上にあって、南壁より60cm住居内側に位置する。深さ20cm、短径28cm、長径34cm、床面との角度は35°である。

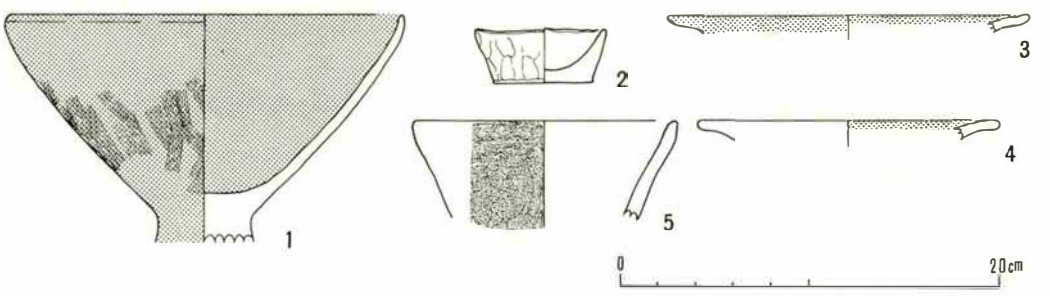
本住居の遺物は柱穴と壁の間に分布し、特に南東コーナーに集中している。



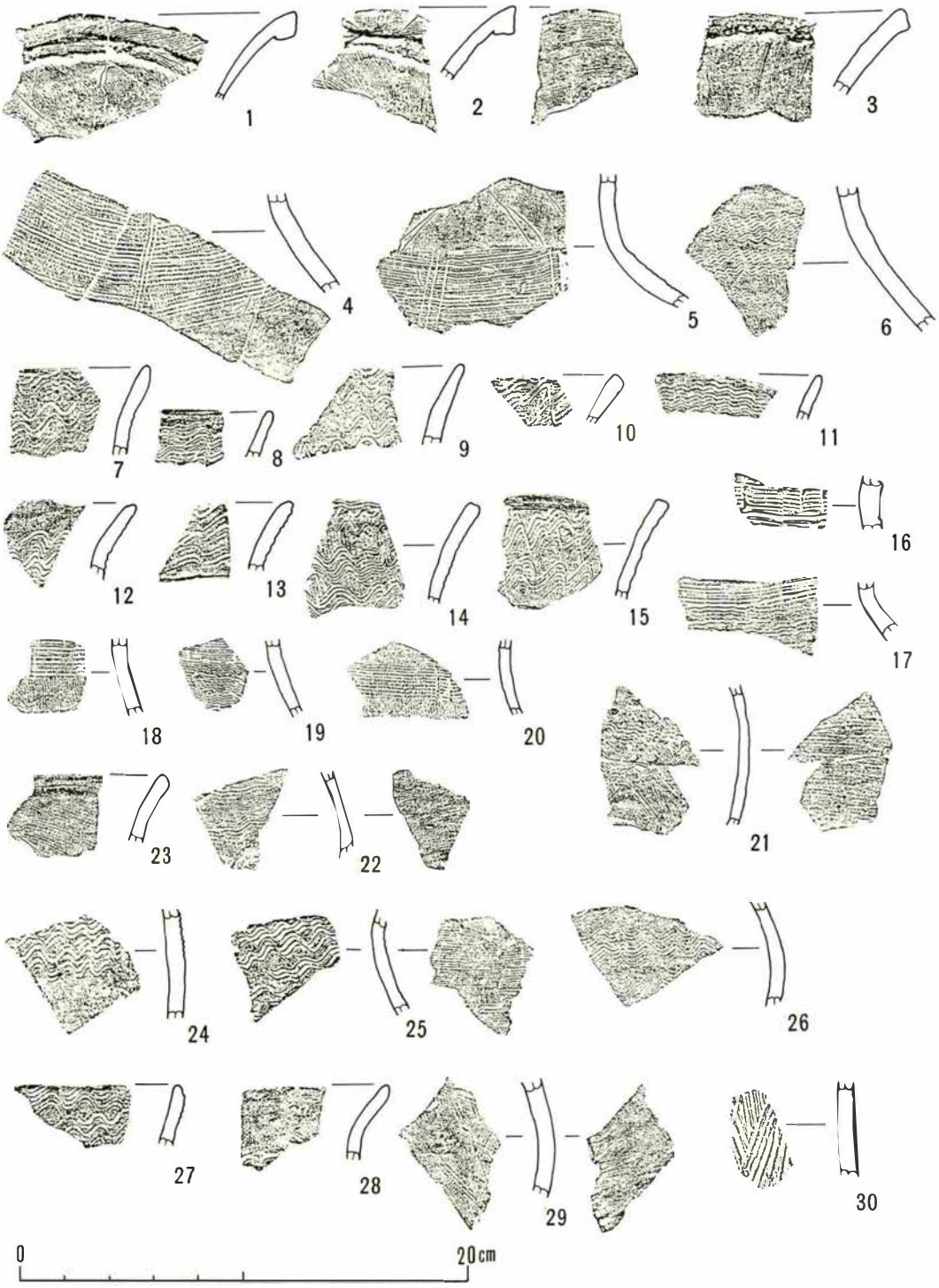
第82図　27号住居址出土土器



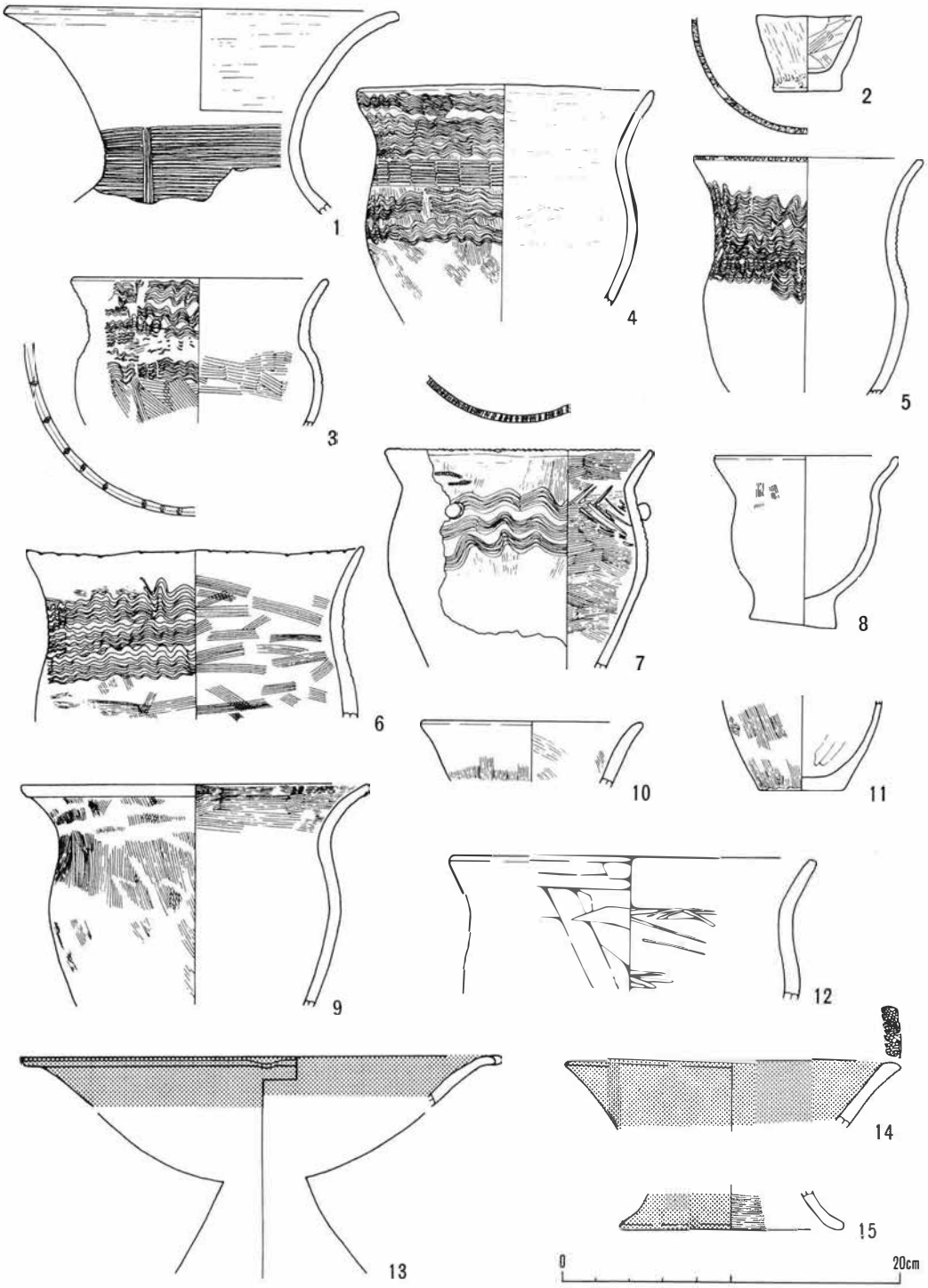
第83図　28号住居址平面図



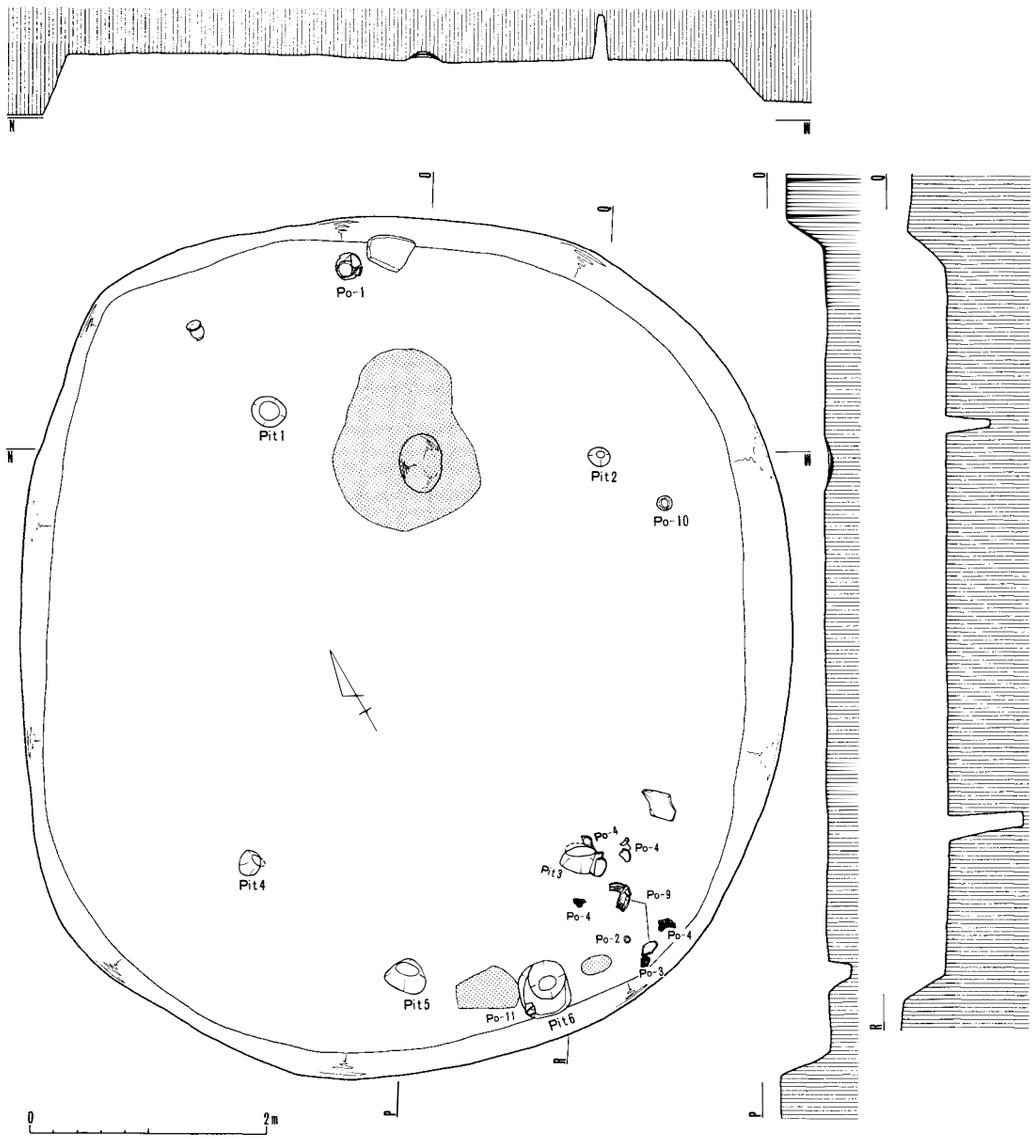
第84図　28号住居址出土土器（1）

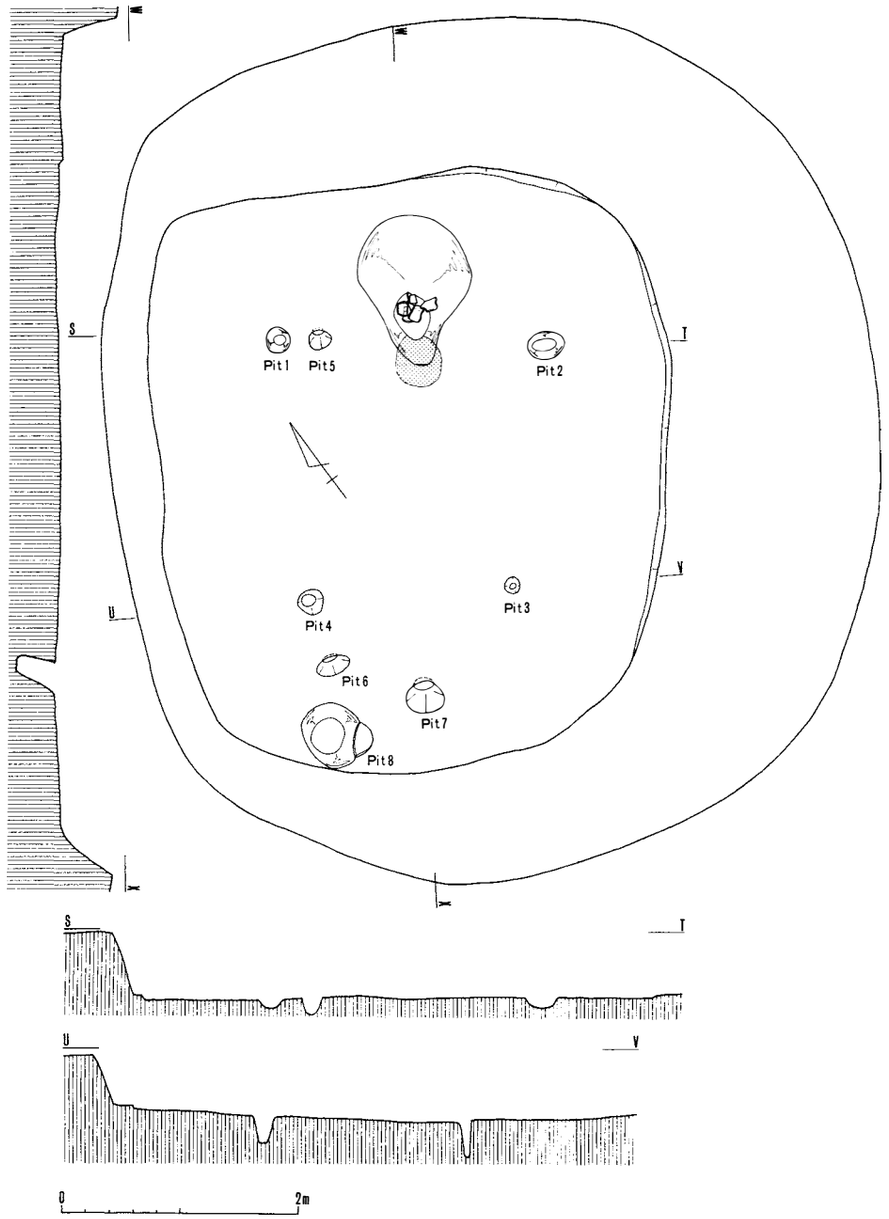


第85図　28号住居址出土土器（２）

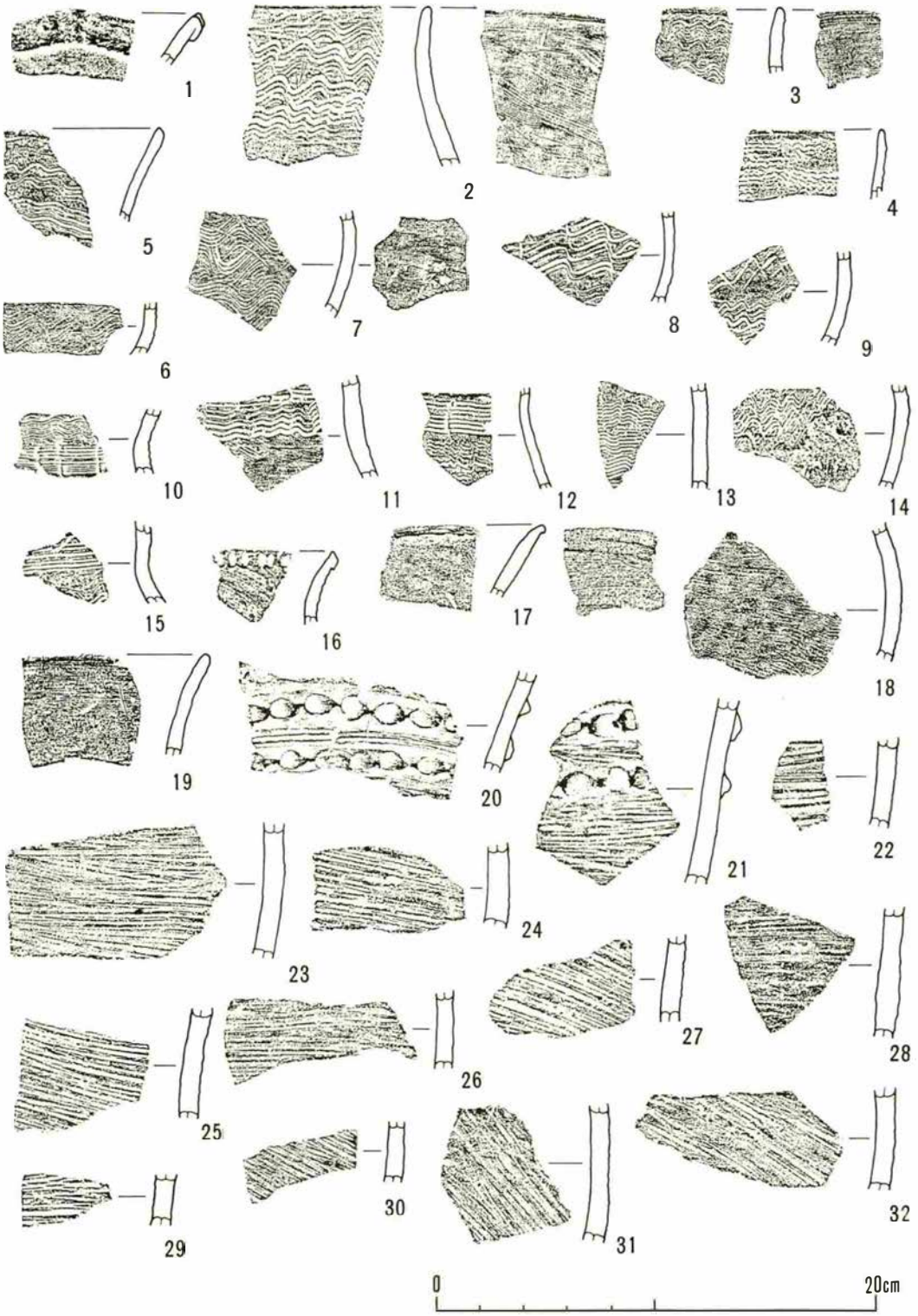


第86図　29号住居址出土土器（１）

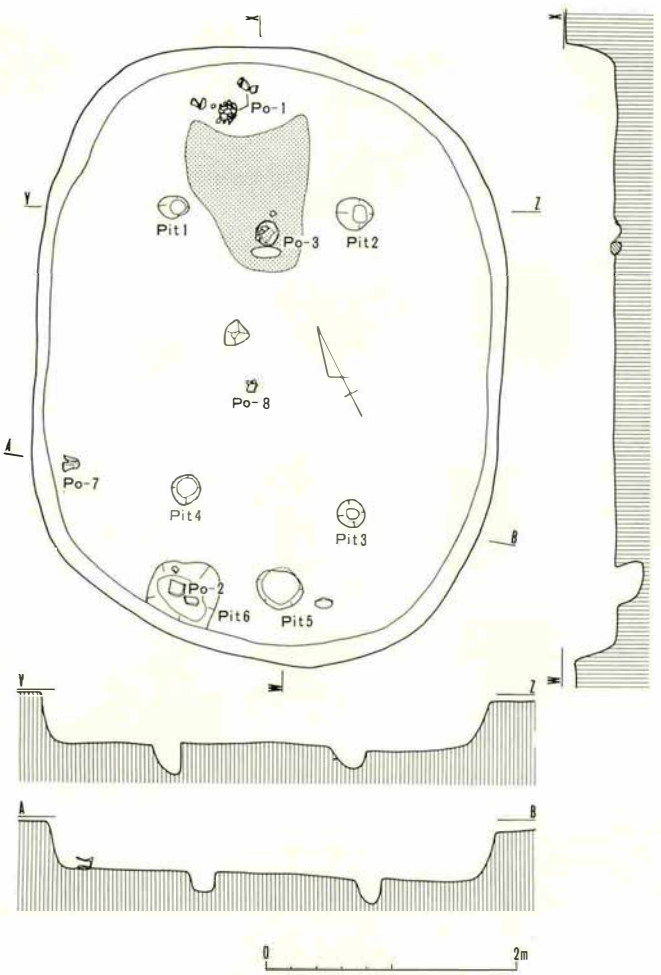




第87図　29号住居址平面図



第88図　29号住居址出土土器（２）



第89図　30号住居址平面図

なお本住居の覆土であるが、レンズ状の堆積を示し、壁際では黒色土と壁の黄褐色砂質土が互層に堆積している。覆土は大きく3層に分かれ、上層は白色小砂粒を多く含む暗褐色粘質土でしまりがない。中層は暗褐色又は灰褐色粘質土と黄褐色砂質ブロックの混土である。下層は灰褐色又は暗褐色粘質土の自然堆積土である。

②下層住居

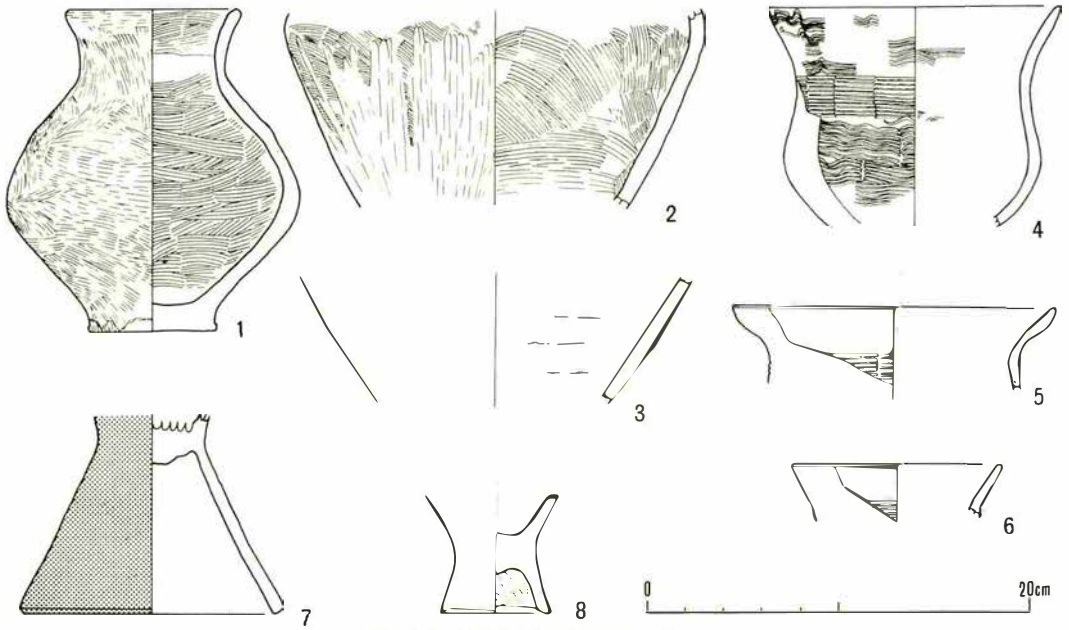
上層住居の内側に位置し、やや中心より西に偏している。住居の規模は短軸4.3m、長軸4.45mの隅丸方形で、主軸は上層住居と同じである。壁は3～5cm程度しか残っていないが、ほぼ垂直である。床面は褐色砂質土の貼床で、炉のまわりが部分的に踏み固められている。炉は北側柱穴間に位置し、上層住居直下にある。土器破片を敷いた皿状の炉で、土器敷炉南側にも焼土が広がっている。柱穴は4本主柱構造をもっており、対角線上に位置する。しかし、北西柱穴は2本あるので、拡張又は建直しが考えられよう。ピット1は深さ6cm、直径20cm、ピット2は深さ8cm、短径24cm、長径32cm、ピット3は深さ33cm、直径12cm、ピット4は深さ23cm、直径22cm、ピット5は深さ48cm、直径18cmである。梯子受穴は主軸上に1箇所あり、西側柱穴線上に1箇所ある。前者は深さ30cm、短径27cm、長径31cmで、垂直方向から30°の角度で傾斜している。後者は深さ50cm、短径15cm、長径30cm、角度は前者とほぼ同角度位である。貯蔵穴は南壁主軸西にあって、深さ22cm、短径55cm、長径62cm、ロート状の掘り込みである。

本住居は、上下の住居との間に更に2枚の貼床が認められている。炉の位置や焼土の在り方などからして、1回の拡張だけではなく、数回の同一場所建直しも考えておかなければならないであろう。

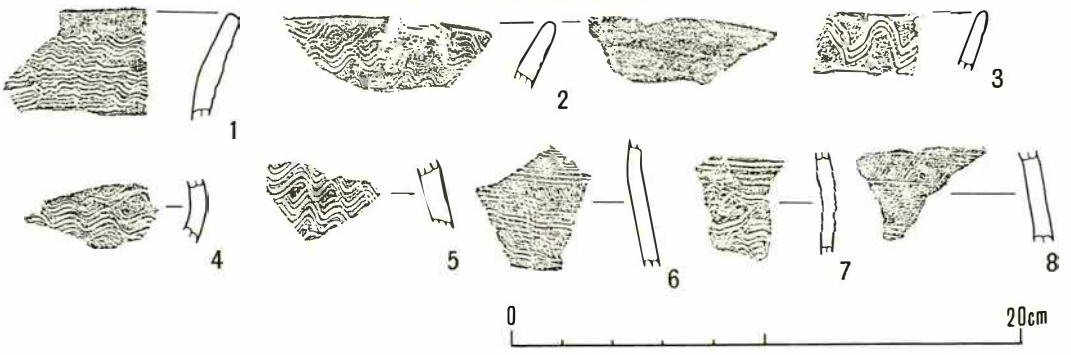
30号住居址（弥生）第89～91図

北集落北群に位置し、壁は31号住居址と接し、住居内には87号土壙、88号土壙がある。住居址は長円形に近い隅丸方形で、長径4.83ｍ、短径3.69ｍ、主軸はＮ―24°―Ｅの方向を示す。壁は南東35cm、北西39cm、南西34cm、北東39cmの高さをもち、壁面はやや外傾している。床面は貼床されており、中央部分を除いて軟弱である。炉は北側柱穴間にあり、南側に枕石を置いた埋甕炉である。枕石は巾10cm、長さ25cmの楕円形を呈し、埋甕は直径20cmである。甕は胴上半と底部が欠損したものを埋め込まれている。焼土、灰の範囲は炉よりも広く南北1.2ｍ、東西90cmに分布している。柱穴は４本で、ピット１は深さ24cm、短径18cm、長径22cm、ピット２は深さ16cm、短径25cm、長径30cm、ピット３は深さ19cm、直径21cm、ピット４は深さ16cm、直径23cmである。主軸上にある梯子受穴は深さ22cm、短径30cm、長径35cmで、垂直より19°傾斜している。貯蔵穴は南壁に接し、主軸より西側にある。深さ33.5cm、短径46cm、長径56cmで断面は台形を呈す。内部より壷形土器の破片が出土している。

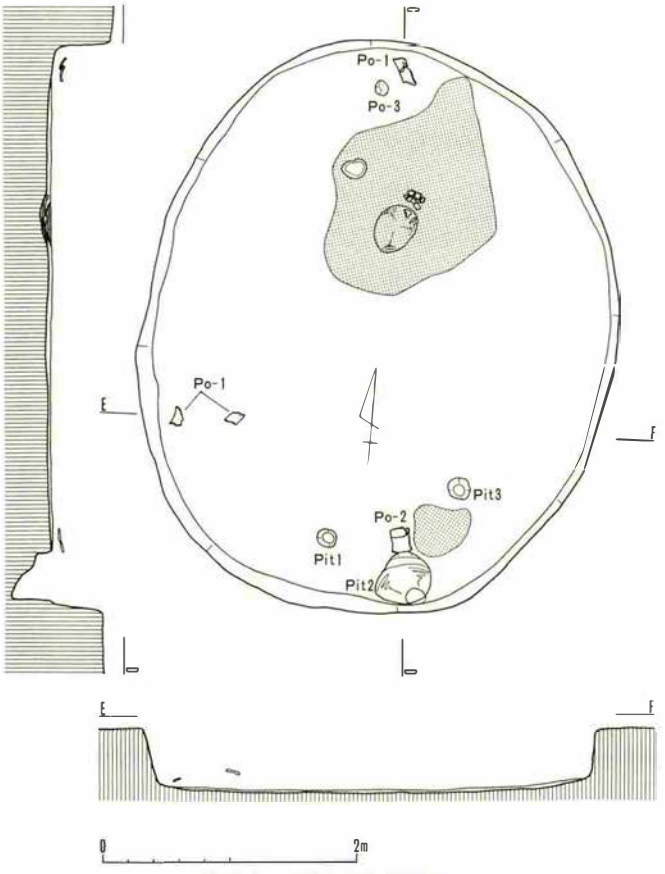
出土遺物はあまり多くなく、壷、甕、高坏破片等が住居内より若干出土する。



第90図　30号住居址出土土器（１）



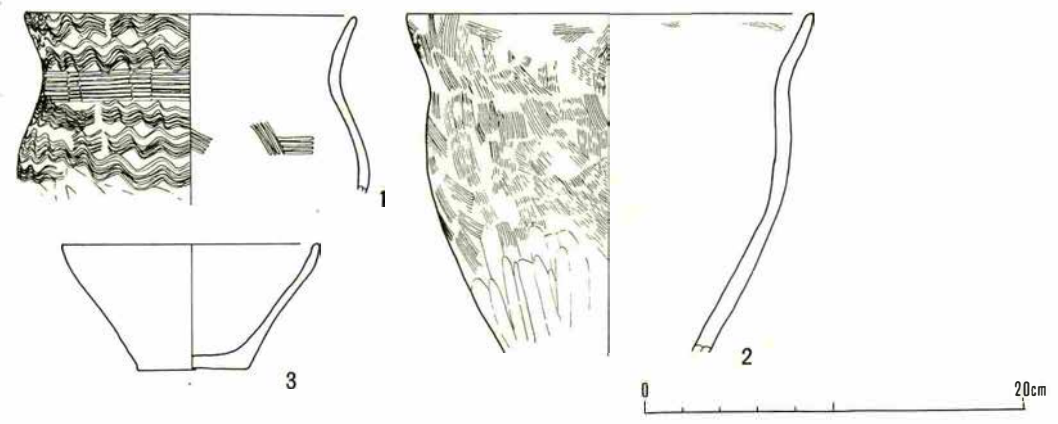
第91図　30号住居址出土土器（２）



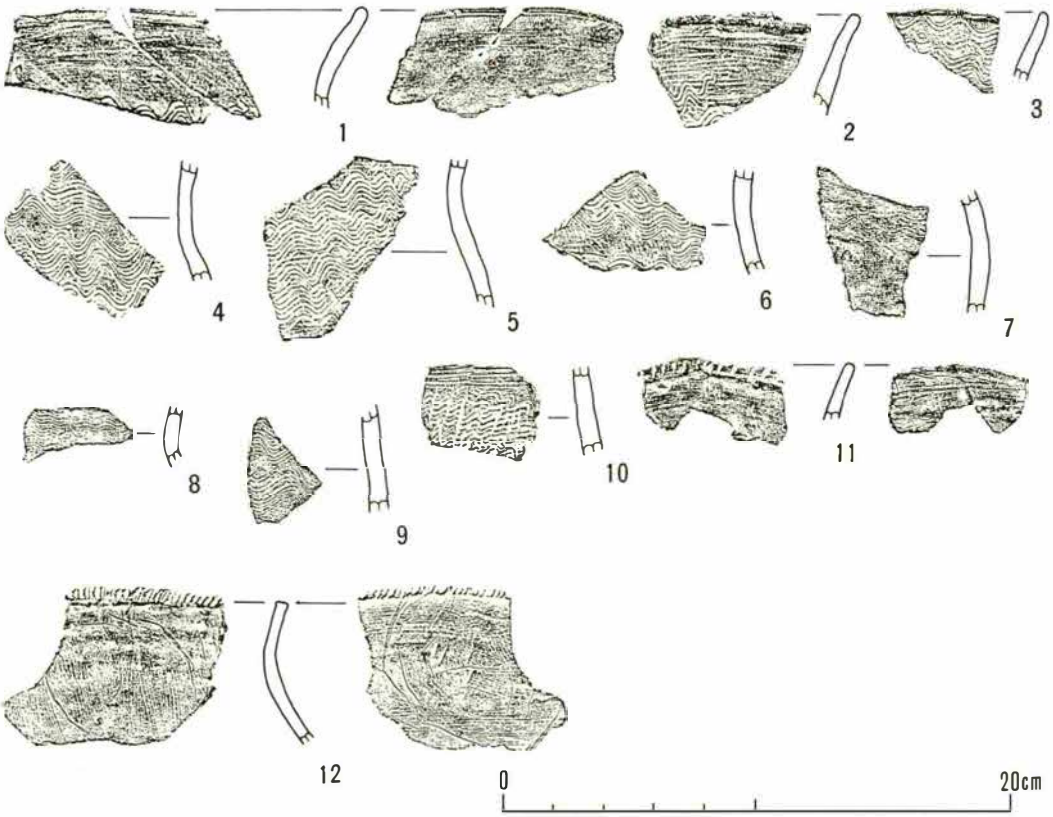
第92図　31号住居址平面図

31号住居址（弥生）第92～94図

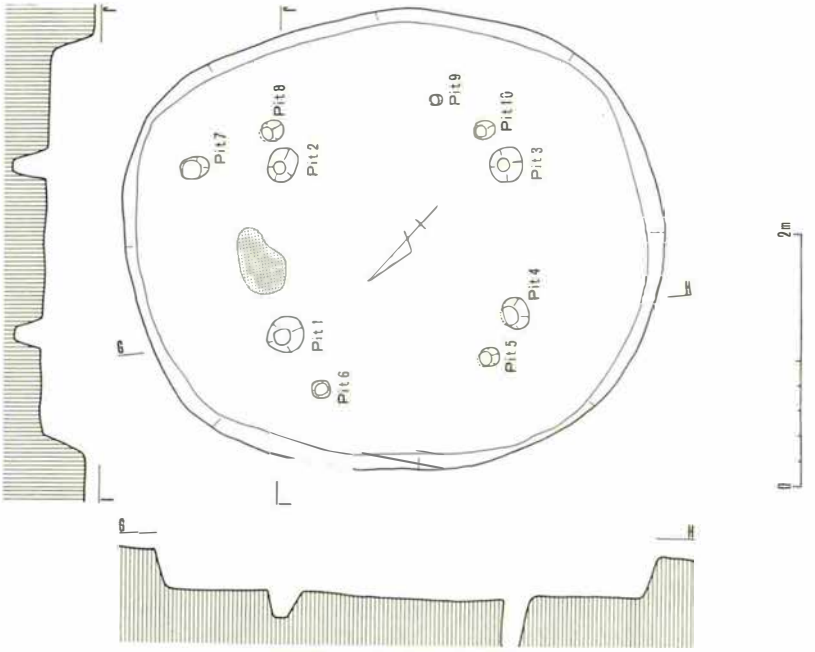
北集落北群に位置し、30号住居址と接し91号土壙、92号土壙を切っている。住居址は楕円形をし、長軸4.48ｍ、短軸3.62ｍで主軸はN—15°—Wの方位を示す。壁は東37cm、西41cm、南39cm、北43cmの高さがあり、壁面はやや外傾している。床面はうすい貼床でしまりがない。炉は北側柱穴間にあって、若干土器片が敷かれるが、炉の中心は南北50cm、東西35cmの範囲で焼土は南北1.8ｍ、東西1.4ｍに広がっている。柱穴は主柱穴4本である。貯蔵穴は南壁中央にあり、東西44cm、南北42cmの円形プランであるが、断面はロート状を呈する。遺物は甕、鉢などが出土している。



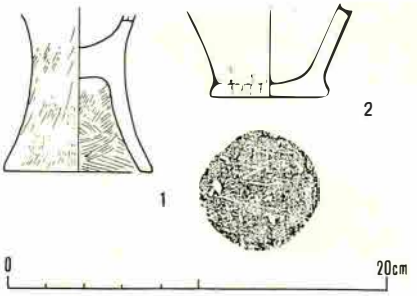
第93図　31号住居址出土土器（1）



第94図　31号住居址出土土器（2）



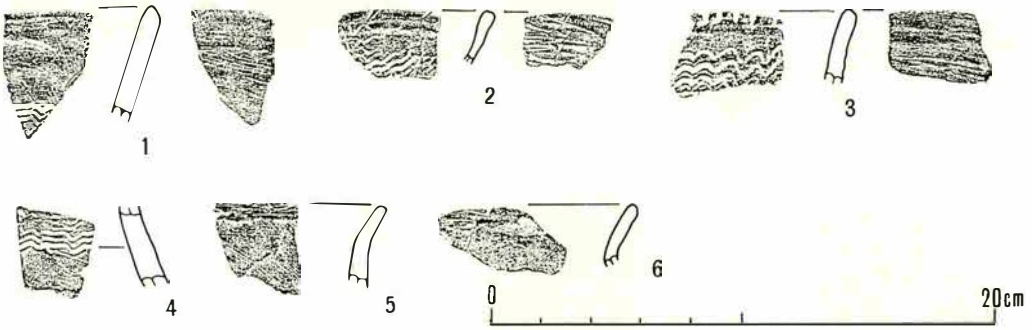
第95図　32号住居址平面図



第96図　32号住居址出土土器（1）

32号住居址（弥生）第95～97図

北集落北群に位置し、他の住居址とは重複していない。比較的小形で楕円形を呈し、長軸4.23ｍ、短軸3.64ｍで、主軸は長軸と一致する。主軸はＮ—38°—Ｅを示す。壁は南東30.5㎝、北西25㎝、南西30.5㎝、北東20㎝の高さがあり、



第97図　32号住居址出土土器（2）

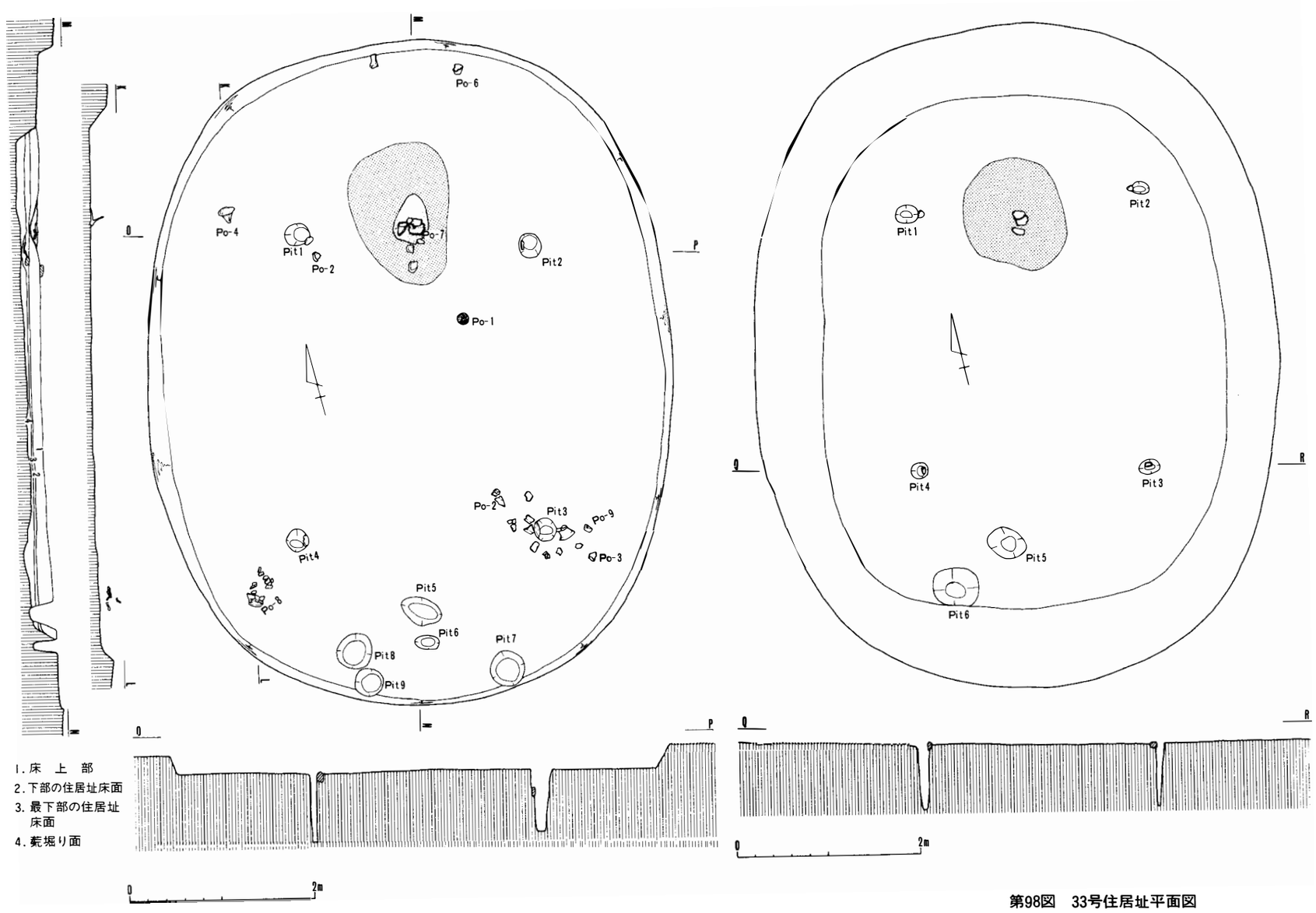
壁面はやや外傾する。床面は地山の黄褐色砂層を使用し、中央部はしまりがあるが、全体には、やや軟弱である。炉は北東側の柱穴間に位置し、地床炉で東西60㎝、南北38㎝の範囲に焼土が分布する。柱穴は全部で10本あるが、このうち８本が主柱穴で、１回建直しされている。残りの２本は支柱穴であろう。ピット１は深さ21㎝、直径29㎝、ピット２は深さ28㎝、短径23㎝、長径27㎝、ピット３は深さ24㎝、直径27㎝、ピット４は深さ41㎝、短径19㎝、長径26㎝、ピット５は深さ25㎝、直径16㎝、ピット６は深さ15㎝、直径14㎝、ピット８は深さ25㎝、直径17㎝、ピット10は深さ23㎝、直径16㎝である。このうち、ピット１～４が１組、ピット５、６、８、10が１組である。どちらが先かは明確ではないが、後者の組のピット５、６が床下より発見されているので、後者がまず建てられ、前者へと建直しがあったと言うことができよう。

33号住居址（弥生）第98～100図

北集落北群中央に位置し、他の住居址や遺構との重複はない。住居は隅丸方形でも楕円形にちかい。住居は上下２層の新旧住居となっており、上層住居から説明する。

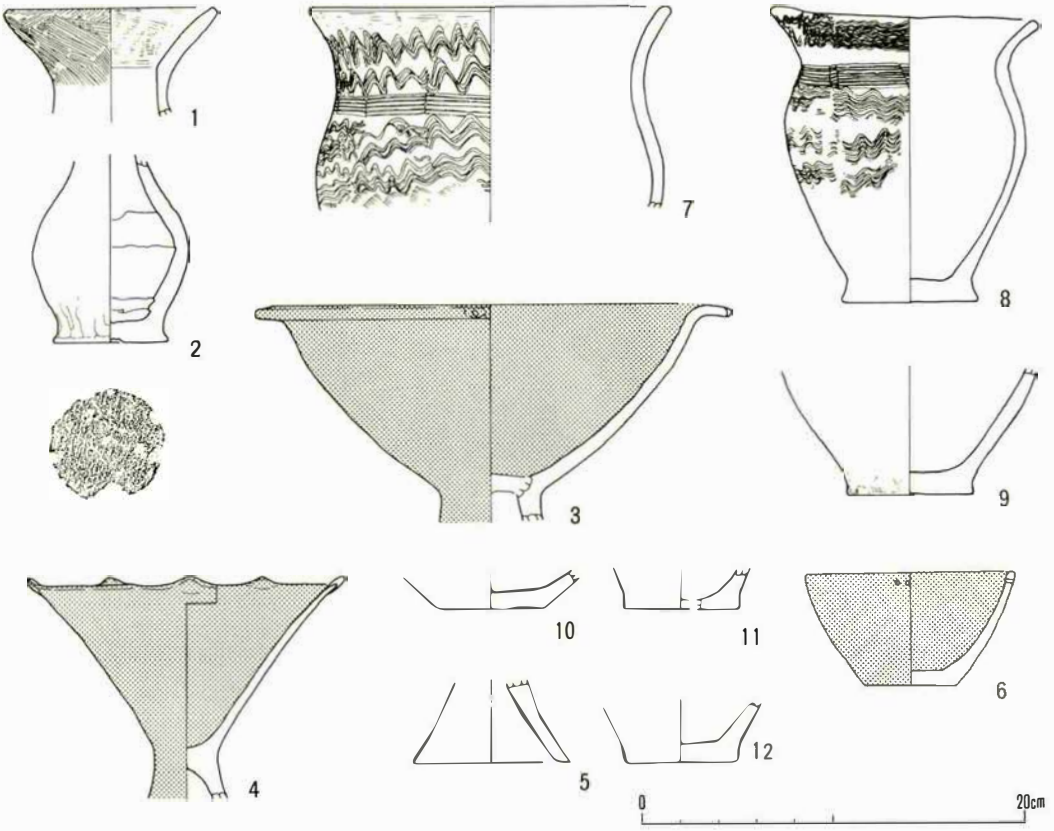
①上層住居

長軸7.2ｍ、短軸5.7ｍで、主軸は長軸と一致し、Ｎ—13°—Ｅの方位を示す。壁高は東で14㎝、西20㎝、南４㎝、北15㎝で、壁面はやや外傾している。床は中央部が貼床で、黄褐色ブロック土で貼られている。貼床は薄いものが４枚ある。最上部は軟弱で、下層に行くにしたがってしまりが良い。炉は最上部では小礫を使った枕石がある土器敷炉で、それより３枚下の床で



1. 床　上　部
2. 下部の住居址床面
3. 最下部の住居址床面
4. 掘り面

第98図　33号住居址平面図



第99図 33号住居址出土土器（1）

は地床炉が存在する。敷かれた土器の下には木炭が10cmの厚さで堆積している。柱穴は4本で、各々に礫が投げ込まれているが、これは柱を保持する為に使用されたものであろう。ピット1は深さ75cm、直径25cm、ピット2は深さ51cm、直径20cm、ピット3は深さ47cm、直径25cm、ピット4は深さ41cm、直径25cmである。入口部に梯子受穴がピット5と6の2本がある。このうち5は、下層住居の梯子受穴と同一である。上層住居の数回の改修時に利用されたものであろう。ピット5は東西45cm、南北29cmで25°の斜角度である。ピット6は東西28cm、南北16cmで7°の斜角度をもつ。貯蔵穴はピット8で、直径38cm、深さ34cmである。南壁に添ってピット7と9の柱穴がある。おそらく、入口部の屋根を支えた柱穴と考えられ、ピット7は深さ29cm、直径38cm、ピット9は、深さ34cm、直径31cmである。

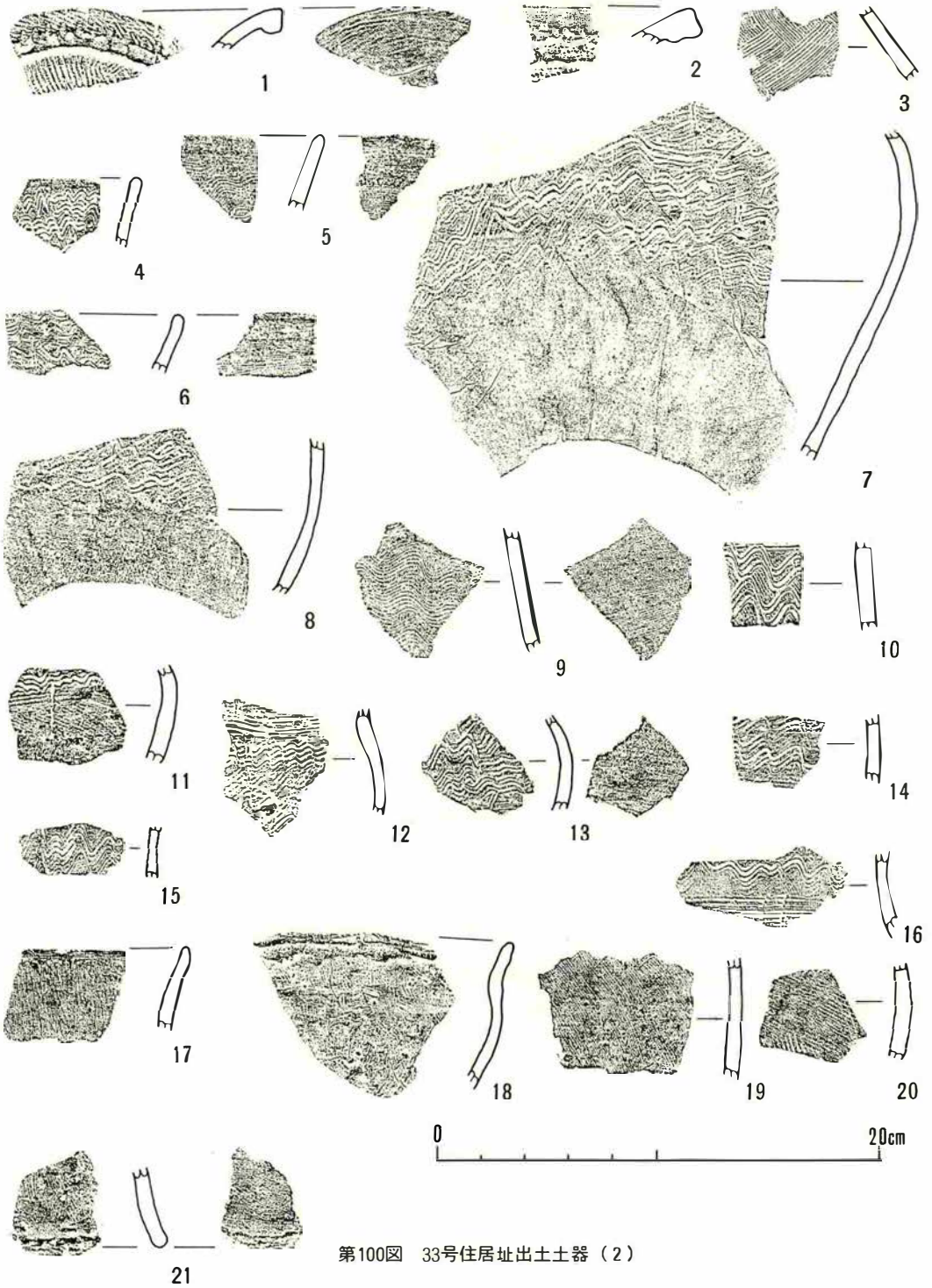
遺物は床面上に高坏、壷、甕、などの破片があった。特に南東柱穴付近に集中している。

②下層住居

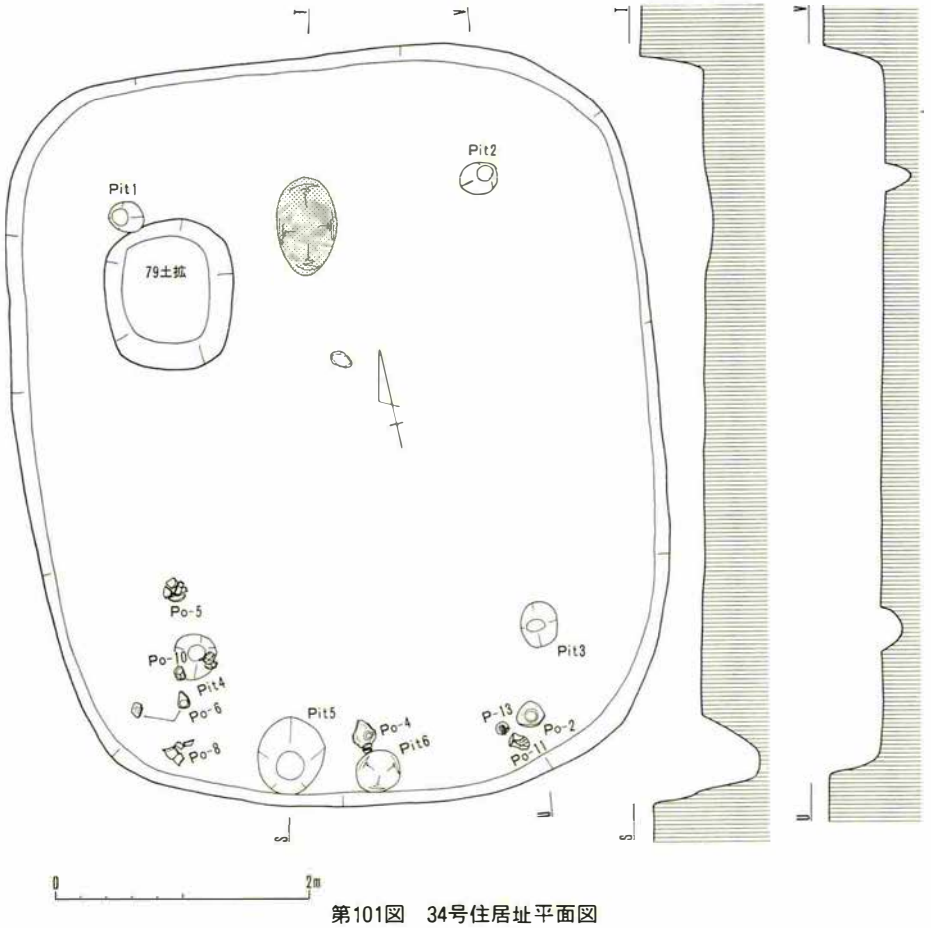
長軸5.5m、短軸4.4mの隅丸方形プランで、現存する壁高は東5cm、西7cm、南15cm、北9cmであるが、上層住居確認面からは各々上層住居の壁高を加えた数値となる。炉は北側柱穴間に位置し、東西1.1m、南北1.18mの範囲に焼土がある。小礫の枕石を南に置いた土器敷炉である。柱穴は上層住居と全く同位置であり、床面が下った分だけ深さ・径が変化している。梯子受穴も同様である。なお貯蔵穴が南壁主軸西側から検出されている。深さ25cm、東西45cm、

南北40㎝である。

本住居は下層住居を埋め立てた後に拡張した住居で、床面の貼床枚数からも、相当長期に居住されたものと思われる。



第100図　33号住居址出土土器（２）



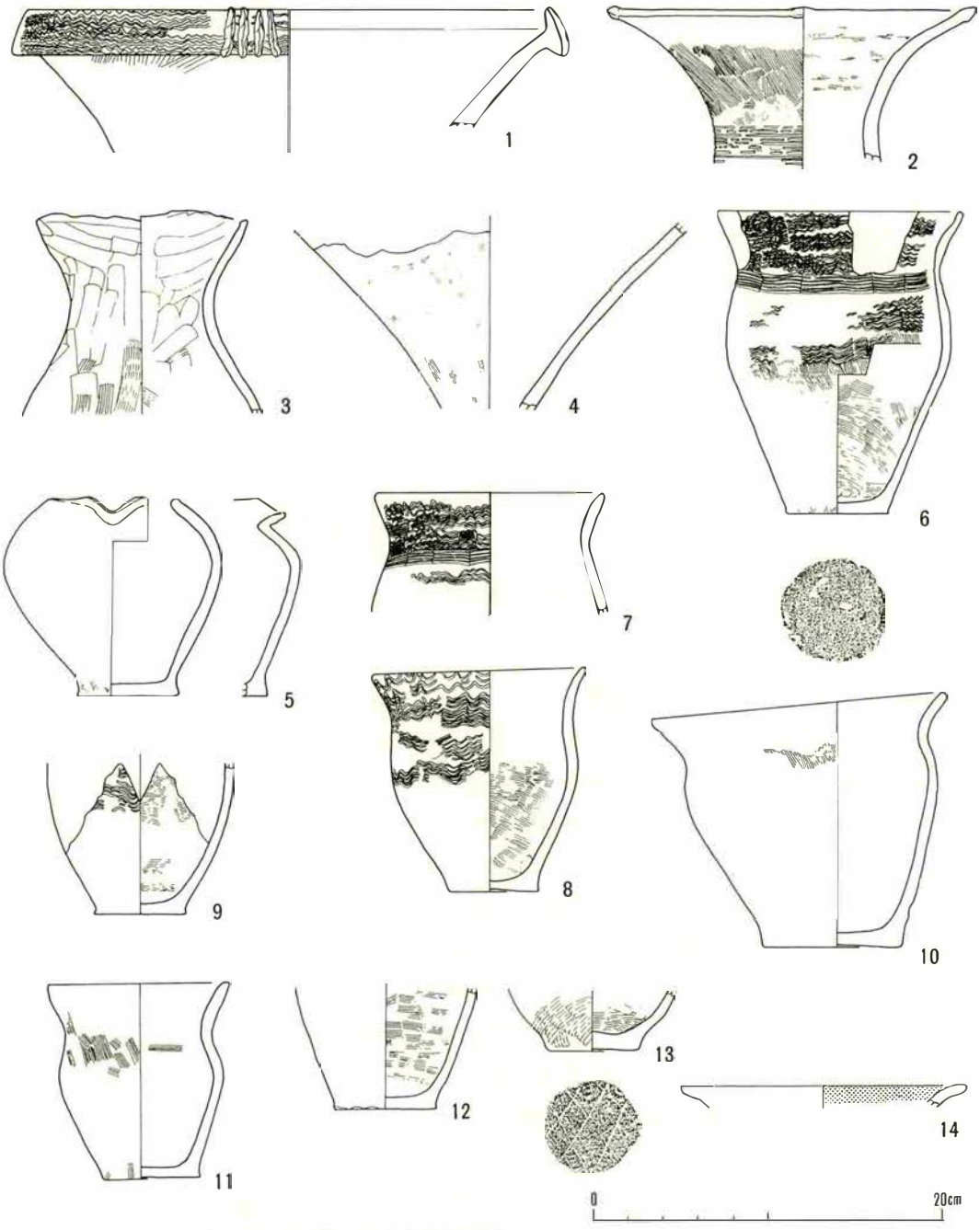
第101図　34号住居址平面図

34号住居址（弥生）第101～第103図

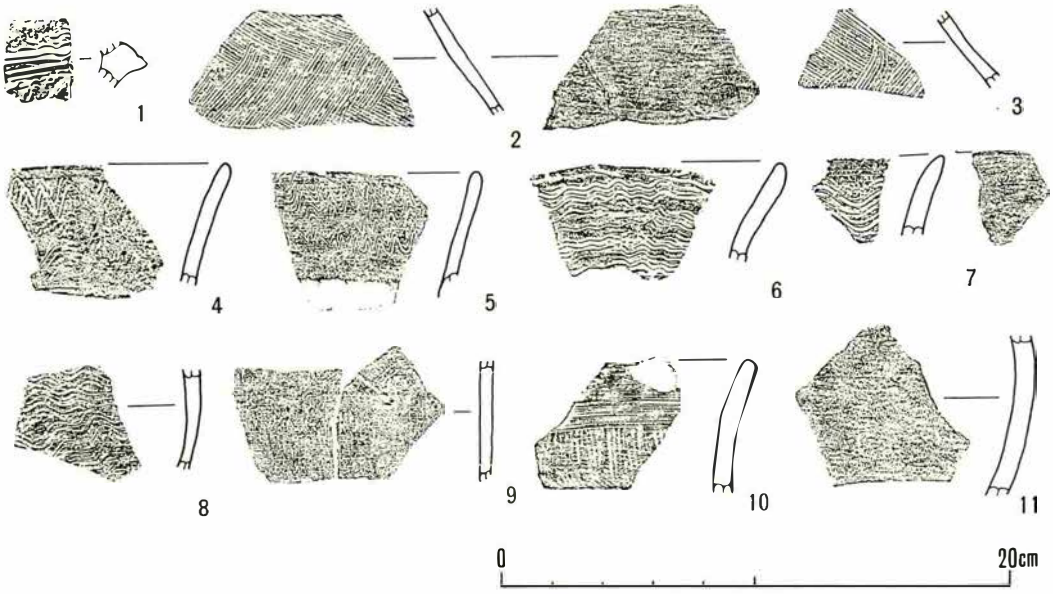
北集落北群中央に位置し、住居址内から79号土壙が検出された他は他の遺構と重複しない。住居址は長軸5.9ｍ、短軸5.1ｍの規模で、主軸は長軸と等しく、N―13°―Eの方位を示す。住居平面形は隅丸方形である。壁は東44cm、西37cm、南35cm、北50cmの高さがあり、壁面はやや外傾している。床面は若干貼床されるが、地山面を基本的な床としており、中央柱間が堅く良好であるのに対し、柱の外側はやや軟弱である。炉は北側柱穴中央部に位置し、浅い皿状の窪みをもつ地床炉である。東西48cm、南北77cmの範囲が焼けている。柱は４本主柱で、ピット１は深さ20cm、短径24cm、長径38cm、ピット２は深さ20cm、短径25cm、長径30cm、ピット３は深さ18cm、短径32cm、長径36cm、ピット４は深さ23cm、短径32cm、長径36cmである。各柱穴は住居の対角線上に位置している。住居南壁に接してピット５とピット６がある。ピット５は深さ48cm、短径52cm、長径60cm、ピット６は深さ６cm、短径32cm、長径35cmである。ピット５が貯蔵穴、ピット６が梯子受穴であろうか。

本住居の遺物は、住居南側、柱穴と壁との間に集中している。出土遺物は壷、甕、片口土器などである。壷の口縁には２種類あって、口唇部がＴ字形を呈し、外面に櫛描波状文を横方向

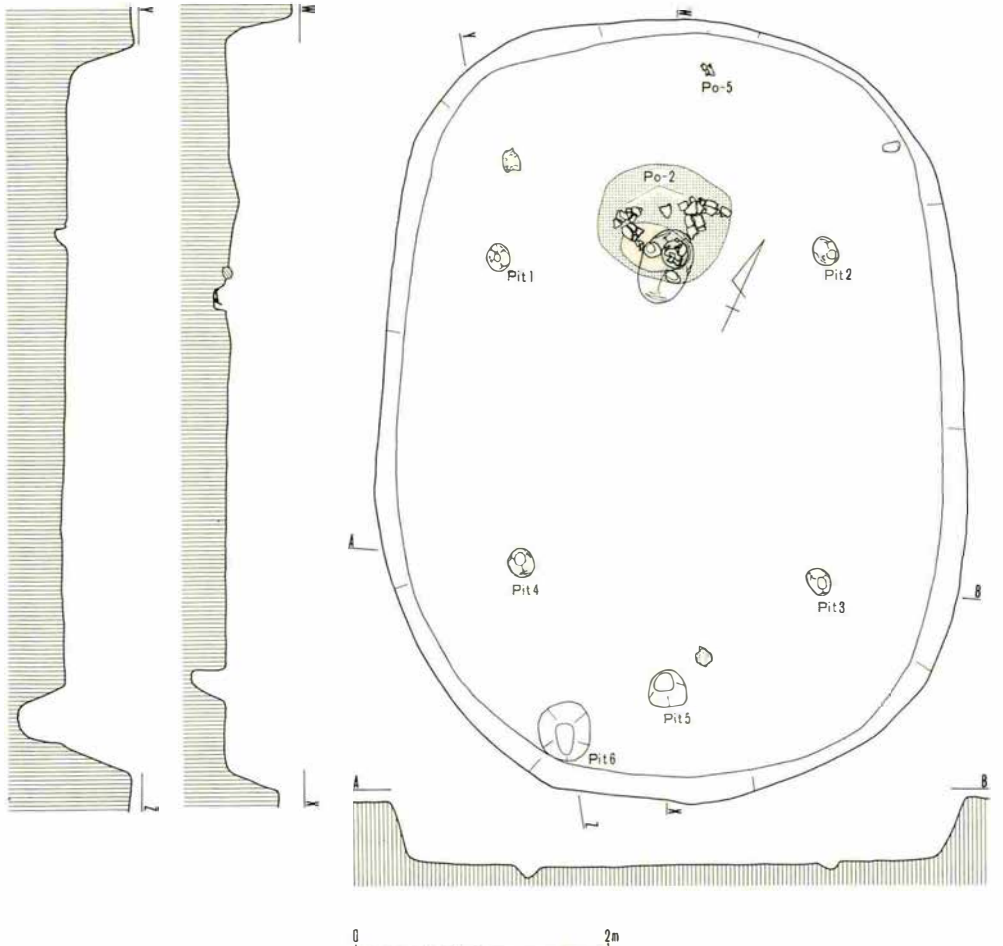
に施したあと、粘土紐を４本縦に貼付るものと、素縁で４ケ所に小突起が付されるもので、内外面刷毛目整形後にヘラで磨いている。頸部は横に平行櫛描文がある。甕は頸部に簾状文を一条施し、口縁部と胴上半に波状文を施すタイプと、胴より上に波状文を全面施すもの、刷毛整形後、ヘラやナデによって整形痕を消しているものなどがある。特殊な遺物として、片口土器がある。口径 7.5 ㎝、器高11.3 ㎝、底径 5.8 ㎝で、全面ヘラ磨きされている。



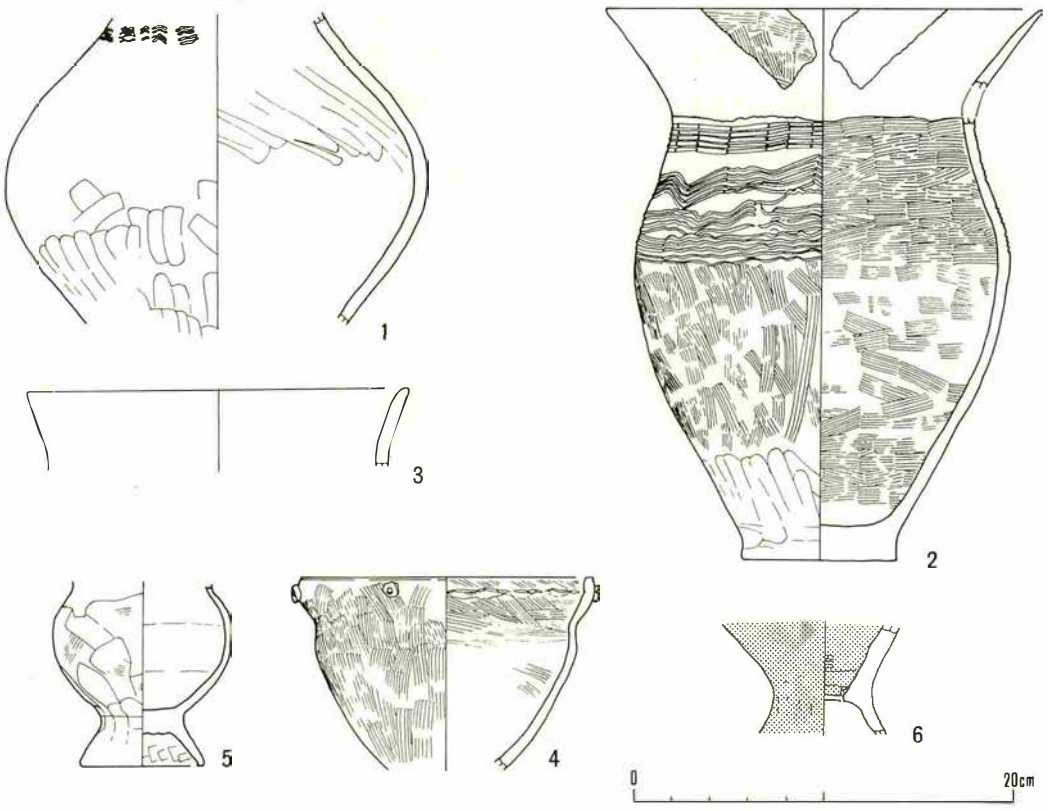
第102図　34号住居址出土土器（１）



第103図　34号住居址出土土器（２）



第104図　35号住居址平面図

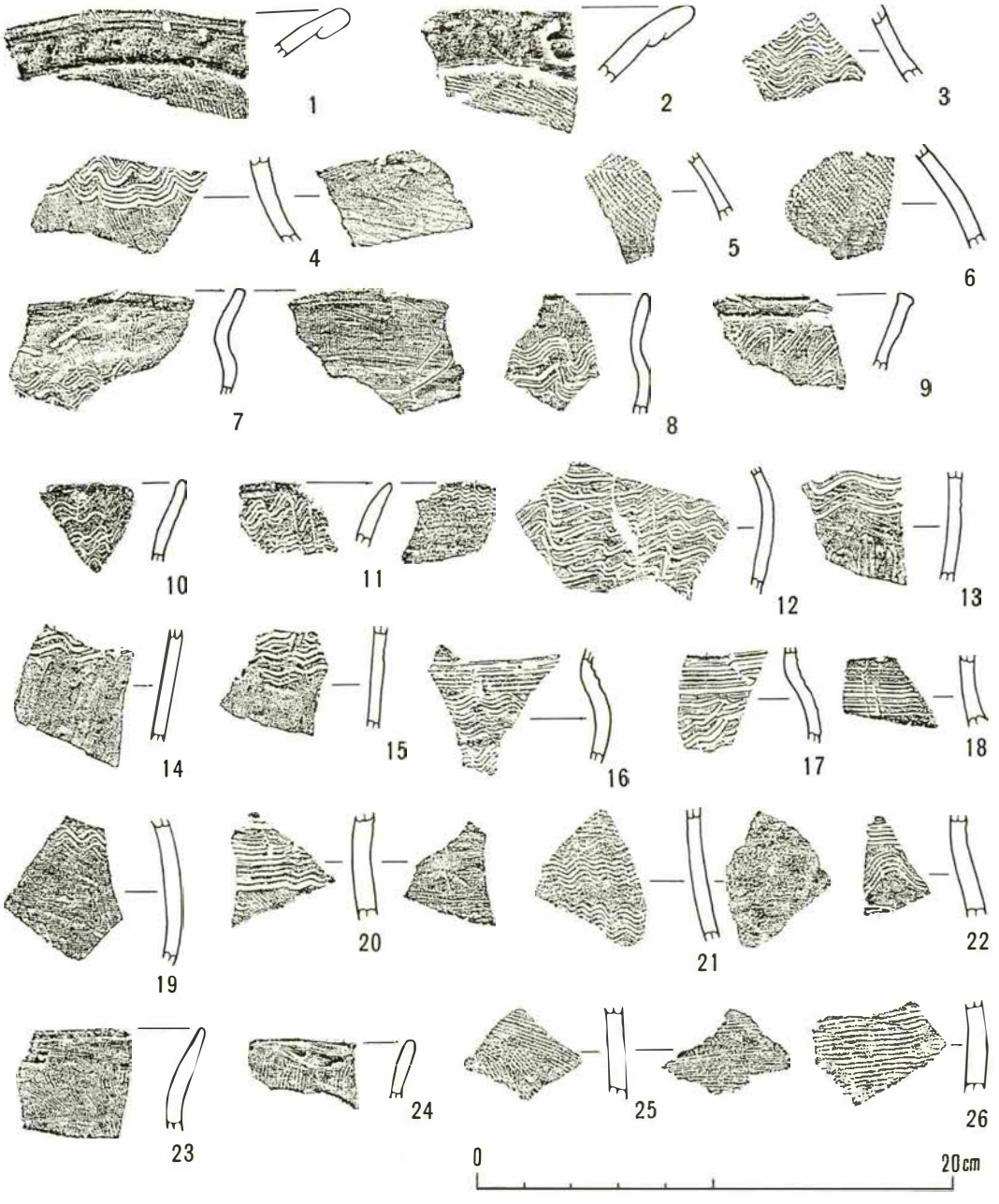


第105図　35号住居址出土土器（１）

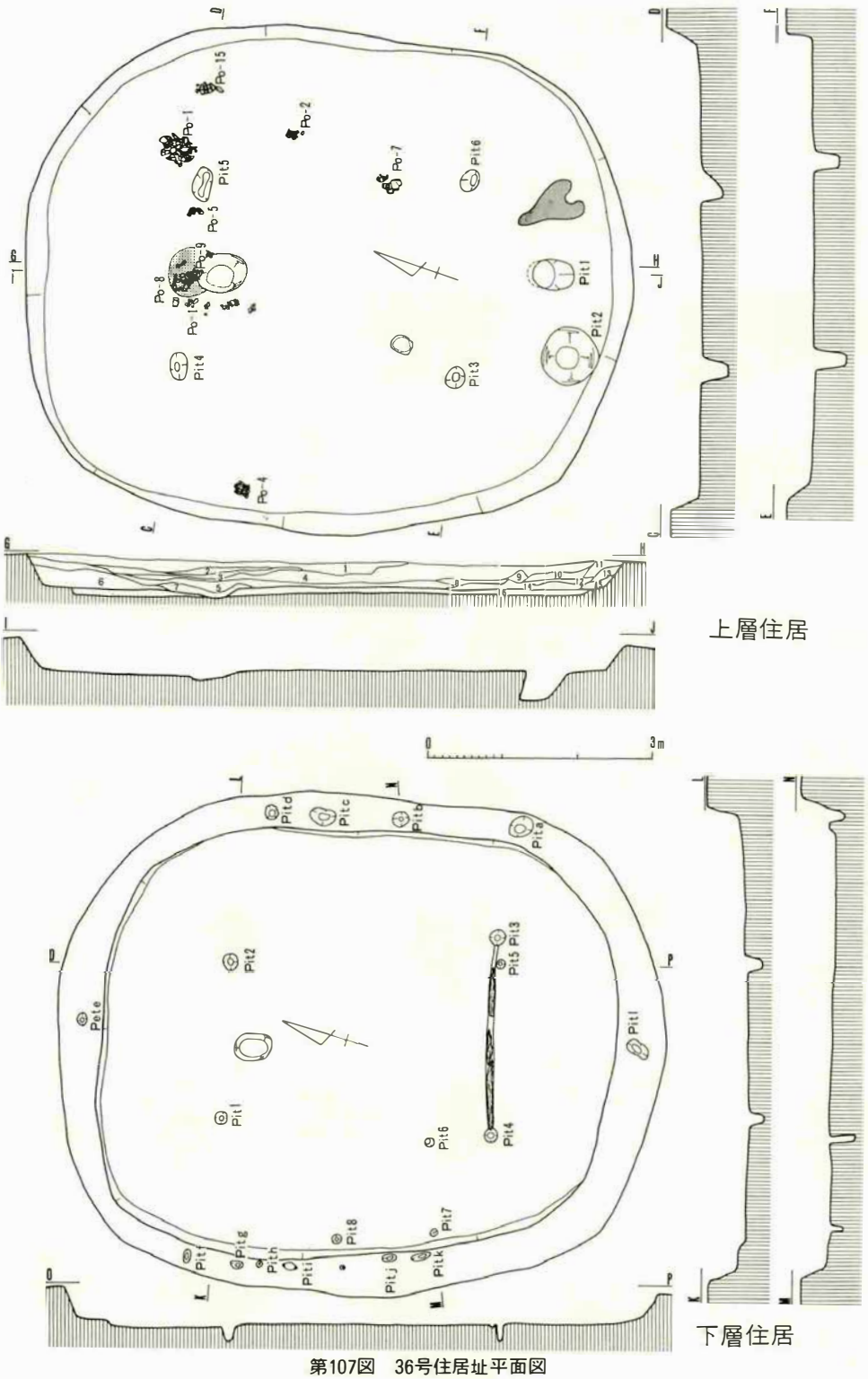
35号住居址（弥生）第104～106図

北集落北群中央に位置し、他の遺構との重複関係はない。住居址の平面形は長円形にちかい隅丸方形で、長軸6.2ｍ、短軸4.62ｍの規模である。主軸は長軸方向にあって、N—23°—Wの方位を示す。壁は北東で46cm、南西で44cm、南東52cm、北西39cmの高さがあり、壁面はやや外傾している。床面は中央部がやや良好であるが、柱穴と壁の間な軟弱である。炉は北西側柱穴中央に位置し、南に小さな枕石のある埋甕炉である。埋甕は破損しており、胴下半が埋められ、他は周辺に散在している。炉の掘り込みは南北60cm、東西40cmで、埋甕は10cm程埋め込まれている。焼土の範囲は東西１ｍ、南北90cmの円形に広がっている。柱穴は４本で、ピット１は深さ９cm、短径17cm、長径22cm、ピット２は深さ９cm、短径18cm、長径23cm、ピット３は深さ５cm、短径17cm、長径22cm、ピット４は深さ11cm、短径20cm、長径23cmである。４本とも深さが５～11cmと浅い穴で、直径も小さいのが特徴であろう。貯蔵穴は南壁に接してあり、主軸より西側にある。東西41cm、深さ36cmで、穴の断面は台形をしている。梯子受穴は主軸上で南壁より約60cm内側に掘られている。東西29cm、南北30cmのおむすび形ピットは、深さ26cm、床面との垂直角度は26°である。出土遺物は少なく、炉内土器の他５点が実測可能な土器で、他は少破片である。１は球胴をした壺形土器で、頸部から上と底部を欠損している。肩部に櫛描波状文がわずかに残り、他はヘラによって整形されている。２は炉内出土の甕であるが、頸部に簾

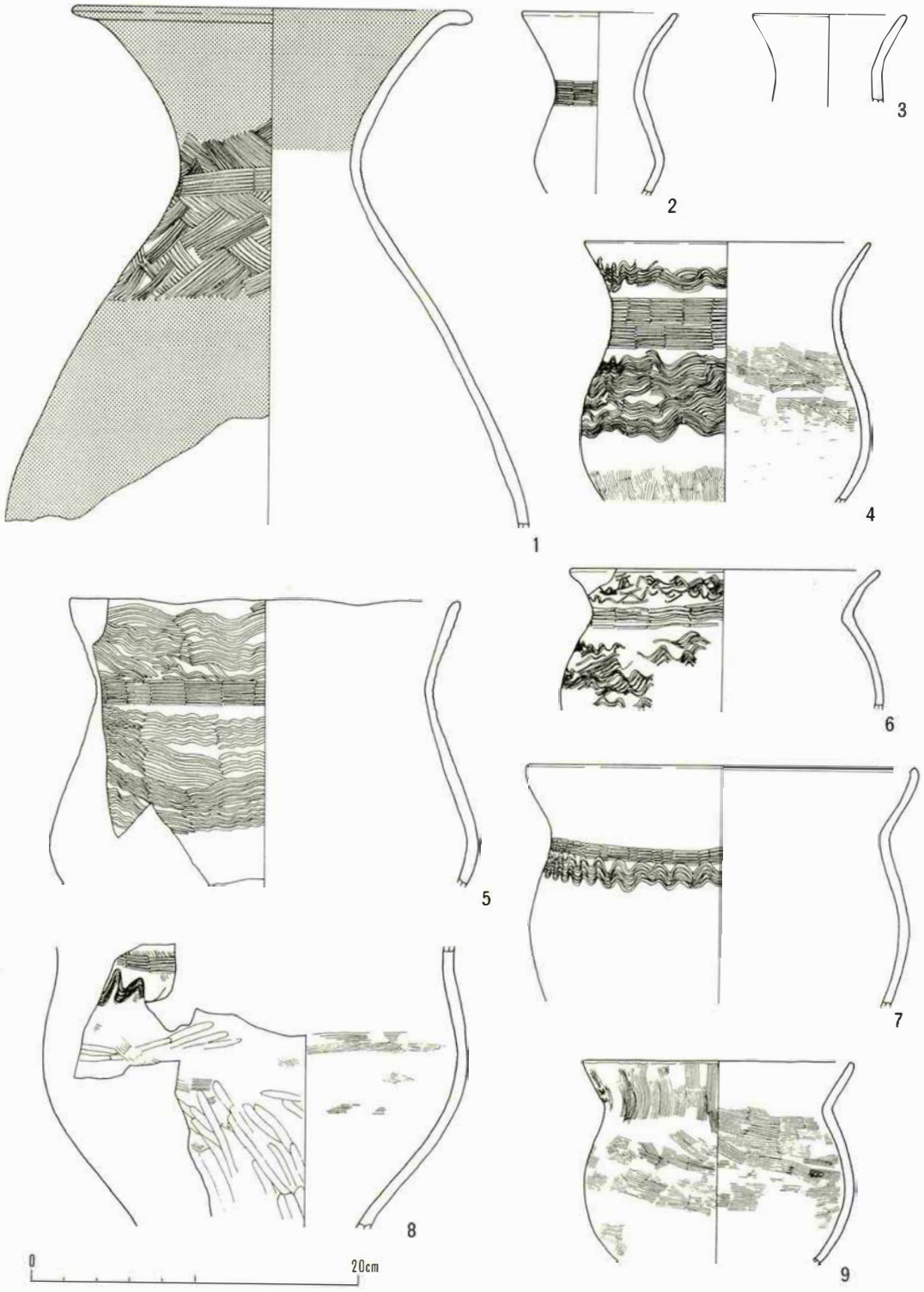
状文が一条巡り、その下に櫛描波状文が三条施文される。胴下半は刷毛目で底部に近いところではヘラ整形がされている。口縁部は刷毛目で、内面も横方向の刷毛目である。5は台付甕である。本遺跡では比較的台付甕が少ないので貴重である。胴部は刷毛整形の後にナデ整形が行なわれ、台部はヘラで整形される。4は甕というより鉢に近い形態で、口唇直下にボタン状貼付文をもつ。内外面とも刷毛目整形される。台付鉢となるかもしれない。6は、器台であろうか。外面赤色、内面も上半分が赤色塗彩される特殊な土器である。



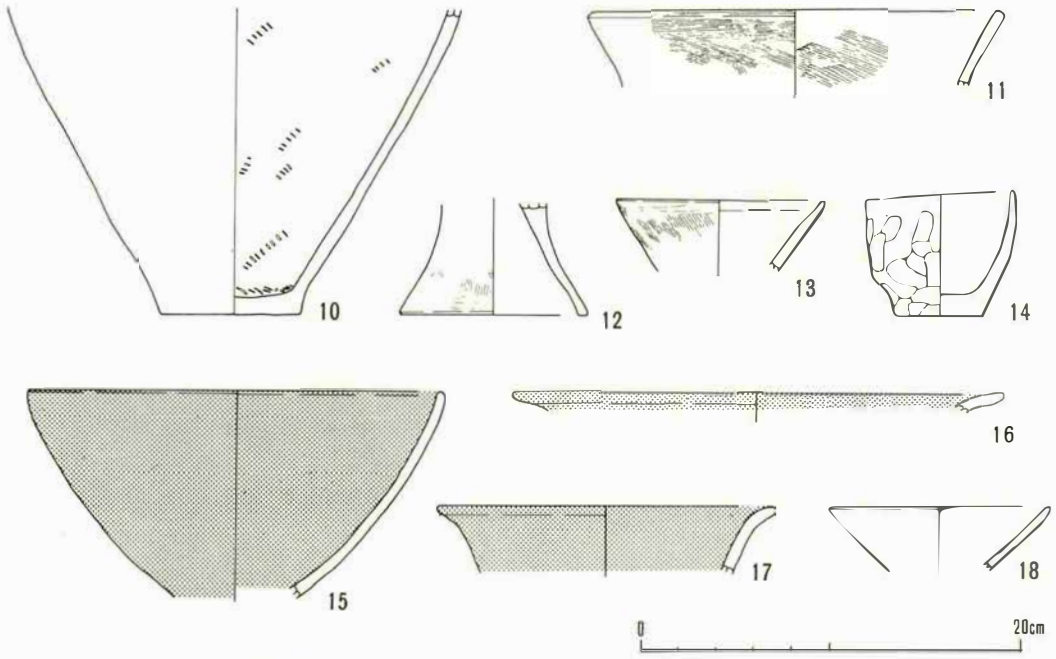
第106図　35号住居址出土土器（2）



第107図　36号住居址平面図



第108図　36号住居址出土土器（1）



第109図　36号住居址出土土器（２）

36号住居址（弥生）第107～110図

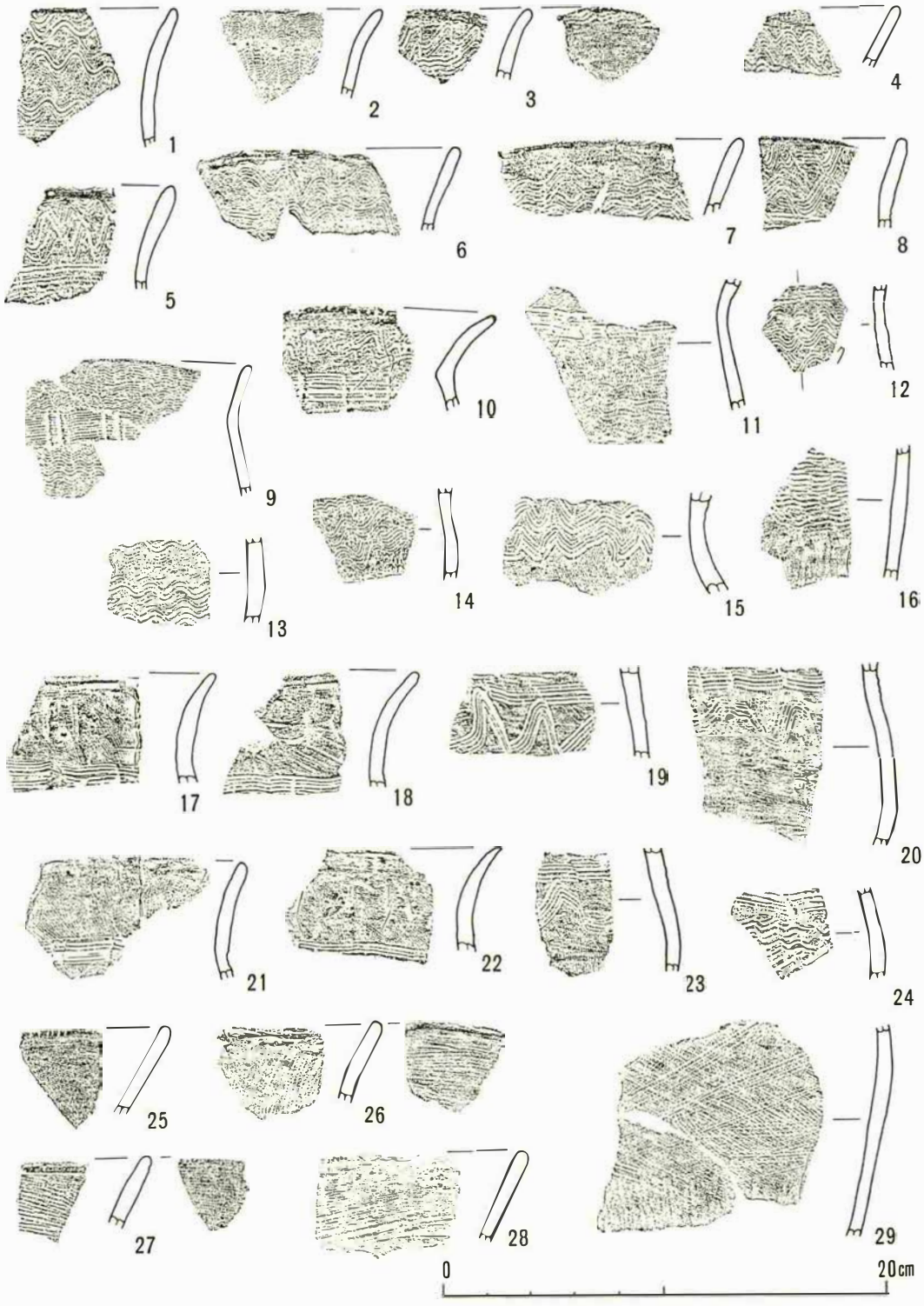
北集落北群中最も南に位置する住居址で、本遺跡中住居面積では最大で、長軸径は20号住居に次ぐ規模である。又、住居下層には古い住居の遺構があり、少なくとも二度の拡張工事が行なわれた住居である。上層住居と下層住居に分けて説明をする。

①上層住居

隅丸方形を呈し、長軸 8.10ｍ、短軸 6.60ｍ。主軸は長軸と同じで、N―19°―Wの方位を示す。壁は東34㎝、西30.5㎝、南34㎝、北42㎝で、壁面はやや外傾斜する。床面は暗褐色砂質土で軟弱である。炉は北側柱穴間にあって、土器片が敷き並べられた土器敷炉である。なお、炉内南東部に12㎝×７㎝の枕石がある。炉の規模は50㎝×30㎝の横長楕円形であろう。柱は４本主柱で、ピット３は深さ43㎝、短径22㎝、長径30㎝、ピット４は深さ36㎝、短径20㎝、長径36㎝、ピット５は深さ28㎝、短径24㎝、長径44㎝、ピット６は深さ32㎝、短径24㎝、長径32㎝である。各柱穴は主軸と直交する方向に長径があり、板状柱が使用されたものと思われる。貯蔵穴はピット２で南壁に接して、深さ39㎝、短径40㎝、長径54㎝で、断面は台形をしている。梯子受穴は主軸上で、南壁より50㎝程内側に造られ、東西40㎝、南北54㎝、垂直より35°傾斜している。遺物は住居北半分より出土している。

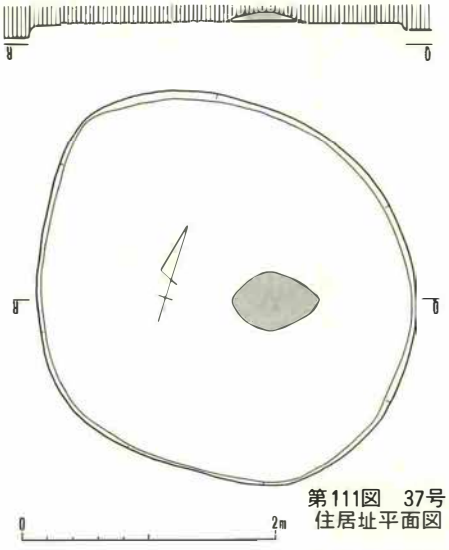
①下層住居

隅丸方形で、長軸 6.86ｍ、短軸 5.62ｍの規模で、主軸はN―15°―Wである。壁はわずかしか残っておらず、東９㎝、西３㎝、南 7.5㎝、北７㎝である。壁面は垂直が若干外傾している程度である。床面は暗褐色粘質土と黄褐色砂質土の混土で、全般的に軟弱である。炉は北側柱穴間に位置し、皿状ピットをもつ地床炉で、規模は34㎝×48㎝である。柱は４本主柱と考えられ、



第110図　36号住居址出土土器（３）

ピット１は深さ15.5㎝、短径24㎝、長径34㎝、ピット２は深さ22㎝、短径20㎝、長径24㎝、ピット３は深さ20㎝、直径22㎝、ピット４は深さ20㎝、直径18㎝である。この他、住居内や、住居周辺部に小柱穴が並んでいる。これらは下層住居に伴うものか、上層に伴うものか不明である。又、南側柱穴間には間仕切溝が検出され、その中より木材が横に埋め込まれてあった。溝の巾は10㎝、深さは５㎝程である。

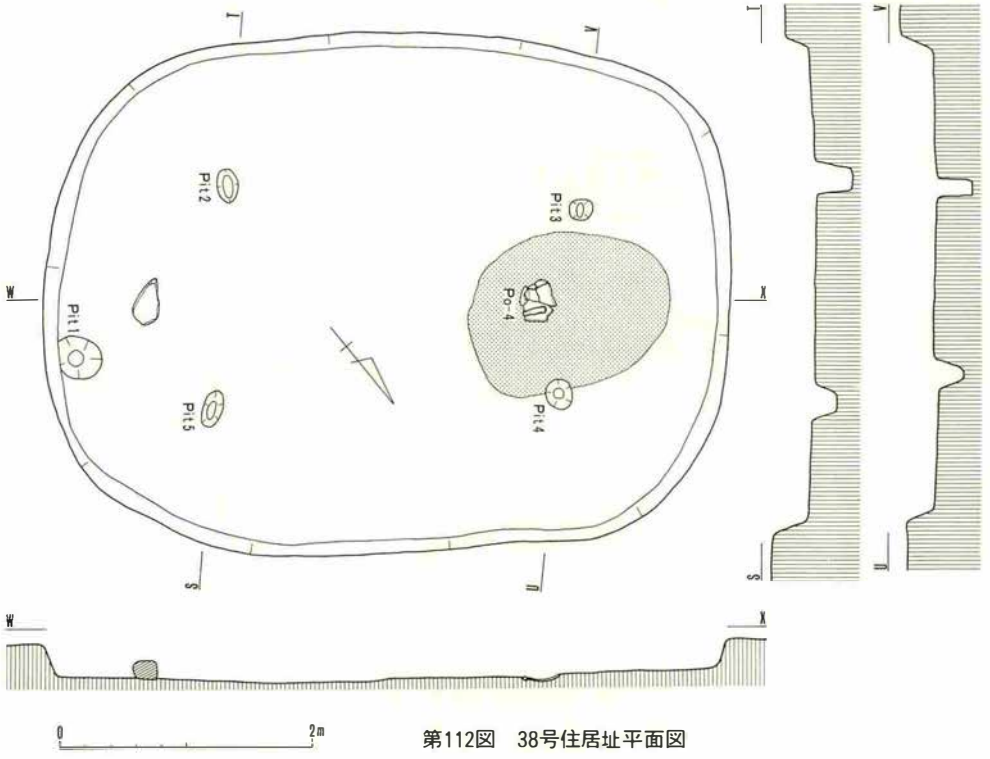


第111図　37号住居址平面図

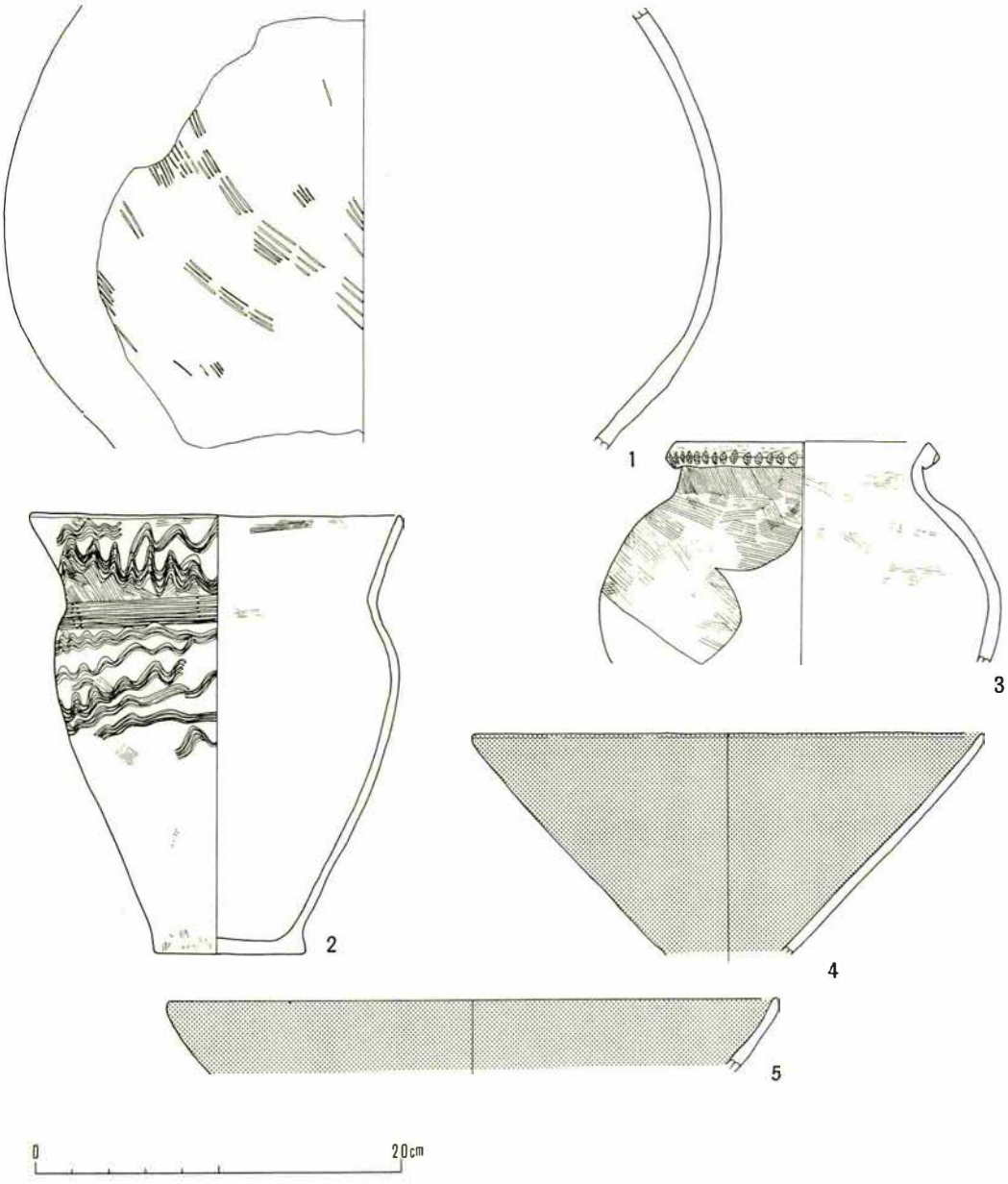
37号住居址（弥生）第111図

北集落北群のうち最も西に位置する住居址で、他の遺構との重複はない。住居址は円形に近いプランをもち、直径３ｍである。主軸をどちらにとるか問題であるが、炉が入口部と反対に位置する例が多いことから、N—72°—Eとした。壁は東10㎝、西７㎝、南4.5㎝、北５㎝で、壁面は外傾している。床面は全体に軟弱でしまりがない。炉は、住居中央よりやや東側に偏しており、地床炉である。焼土範囲は東この他の施設は皆無で、遺物も覆土中から若干の少片が出土しただけで図示できるものはない。

38号住居址（弥生）第112～114図

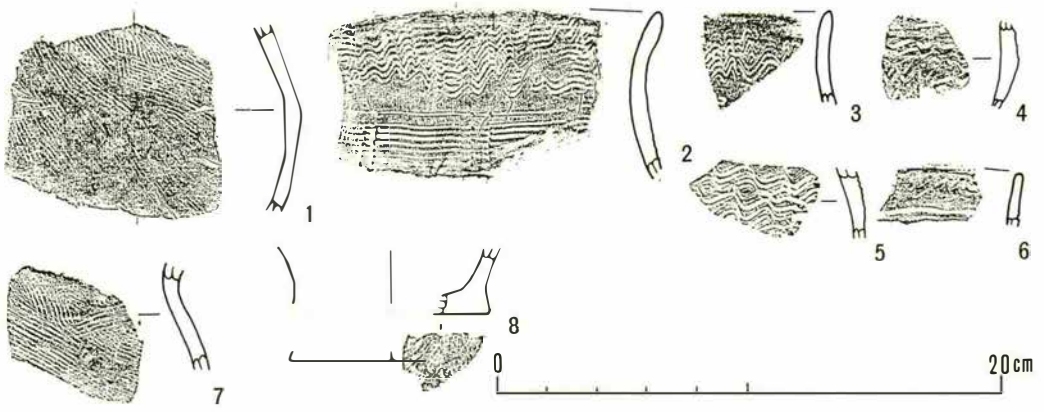


第112図　38号住居址平面図

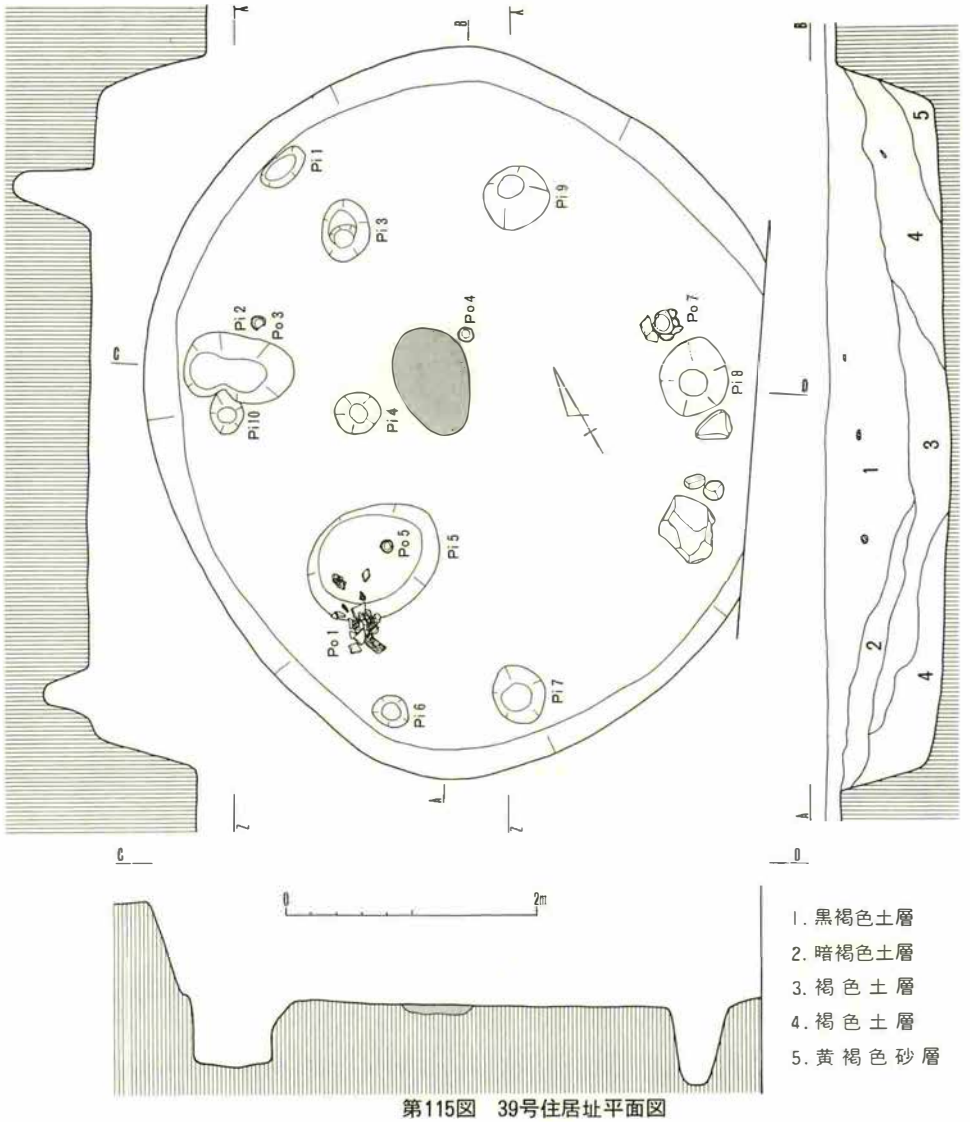


第113図　38号住居址出土土器（1）

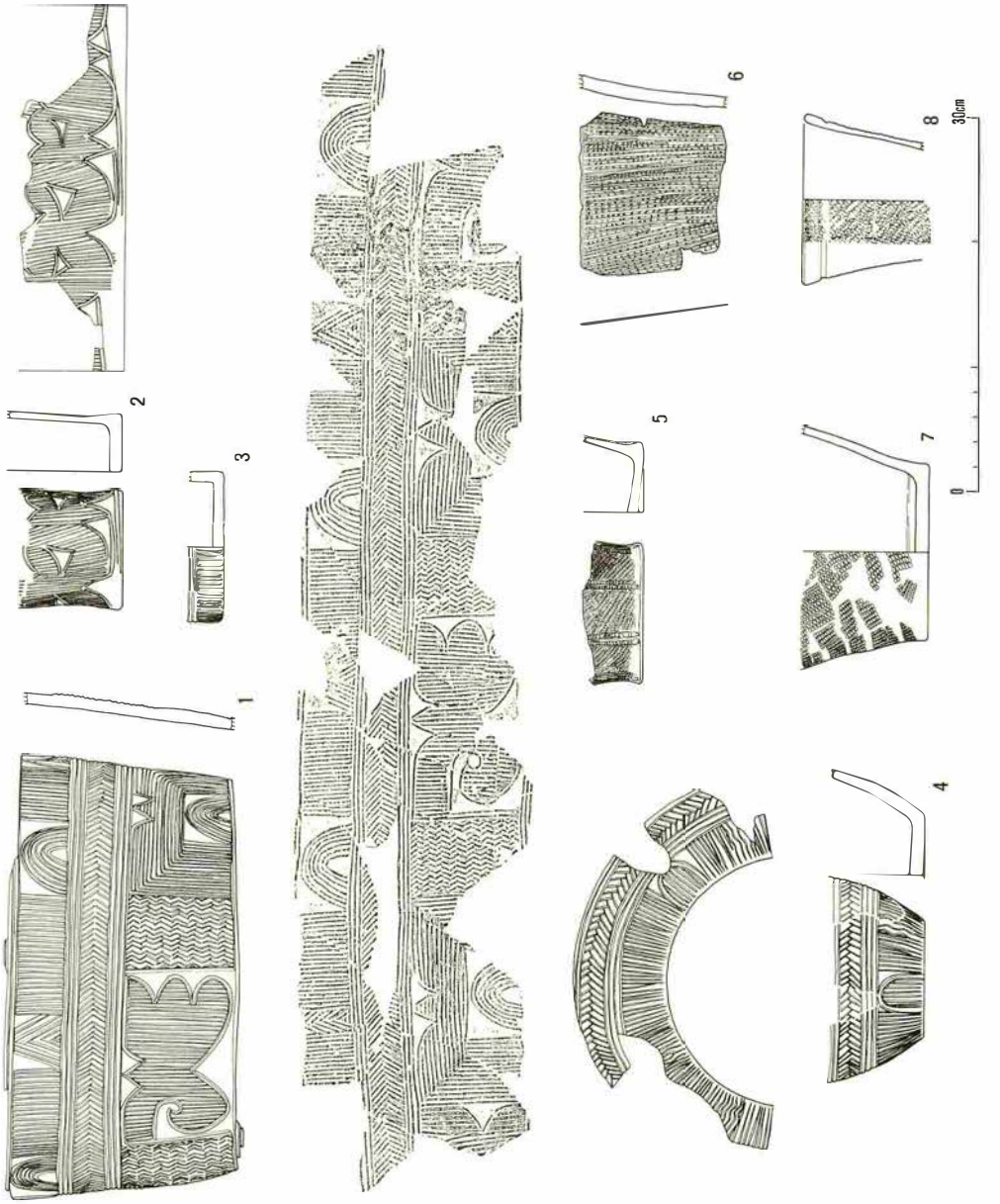
北集落北群の西北端に位置し、他の遺構とは重複しない。住居址は長軸5.46m、短軸4.12mの隅丸方形を呈し、主軸は長軸と一致するN—50°—Wの方位を示す。壁は北東31cm、南西24cm、南東25cm、北西23cmの高さがあり、壁面はやや外傾する。床は全面貼床で、炉の周辺は堅く良好であるが、周辺は軟弱である。炉は北側の柱穴間にあって、焼土は南北1.6m、東西1.3mの範囲に広がっているが、中央に土器が敷かれている。土器は2層に重ねて敷かれ、その下は地床炉となっているので、3回の改修があったことになる。柱は4本主柱で、ピット2は深さ



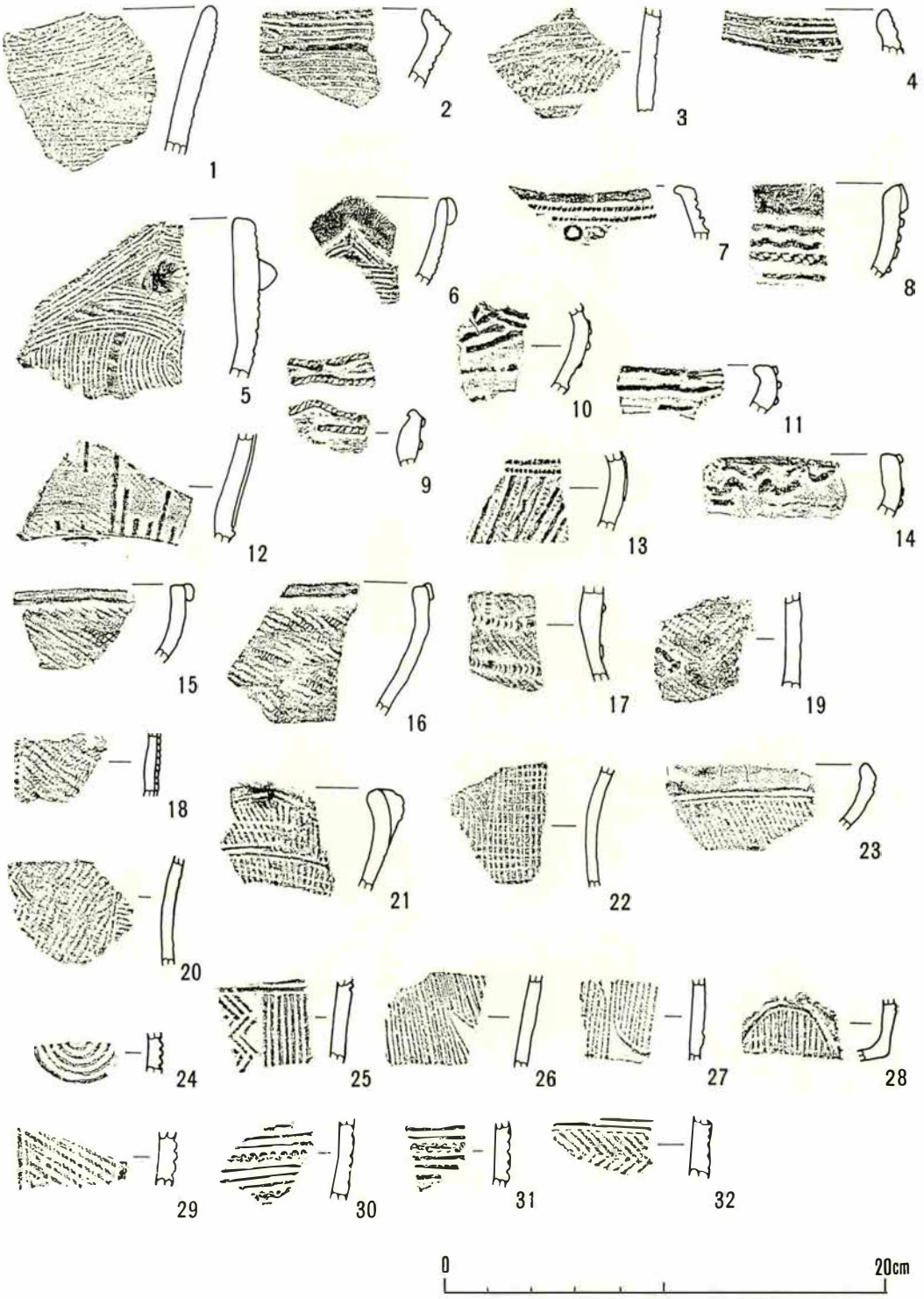
第114図　38号住居址出土土器（2）



第115図　39号住居址平面図



第116図　39号住居址出土土器（1）

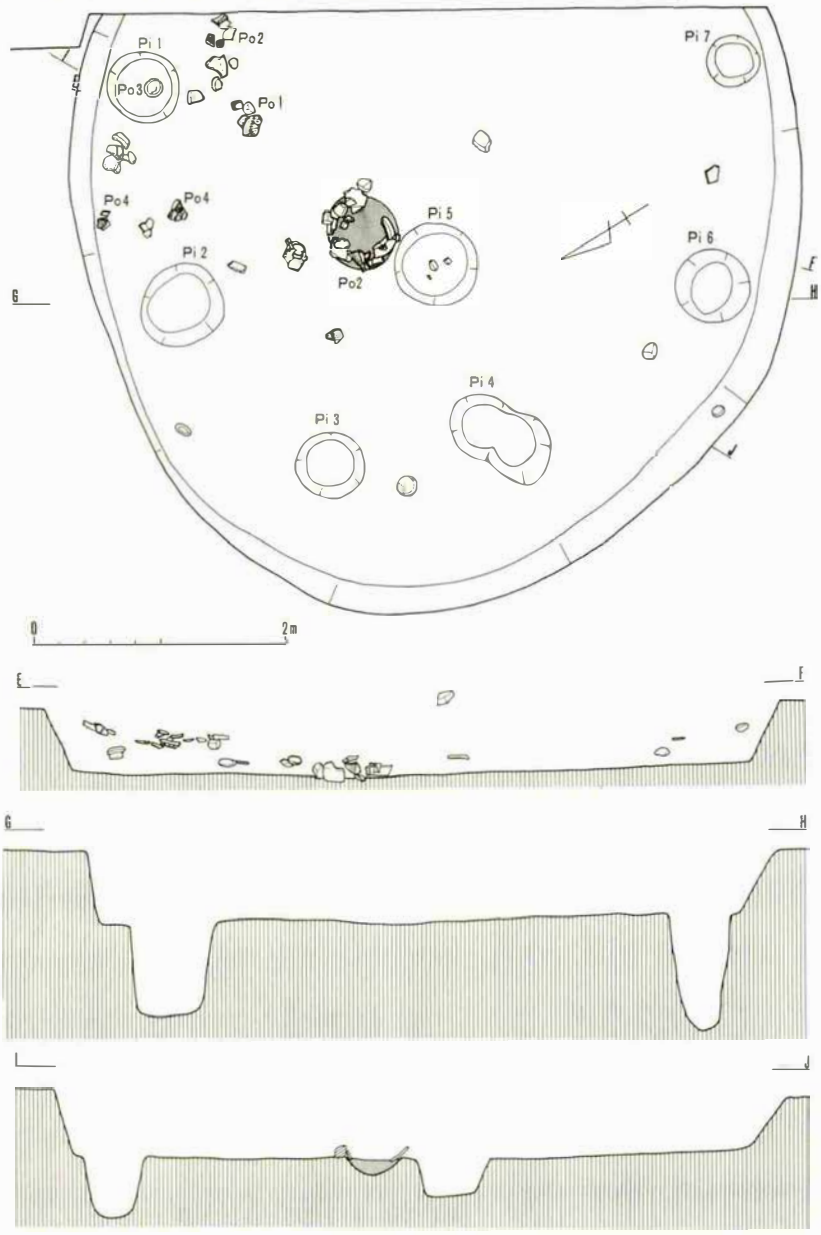


第117図　39号住居址出土土器（２）

30cm、短径16cm、長径25cm、ピット３は深さ27cm、短径16cm、長径20cm、ピット４は深さ20cm、短径20cm、長径24cm、ピット５は深さ20cm、短径15cm、長径30cmである。貯蔵穴は南壁に接して深さ37cm、直径32cmの規模である。

39号住居址（縄文）第115～117図

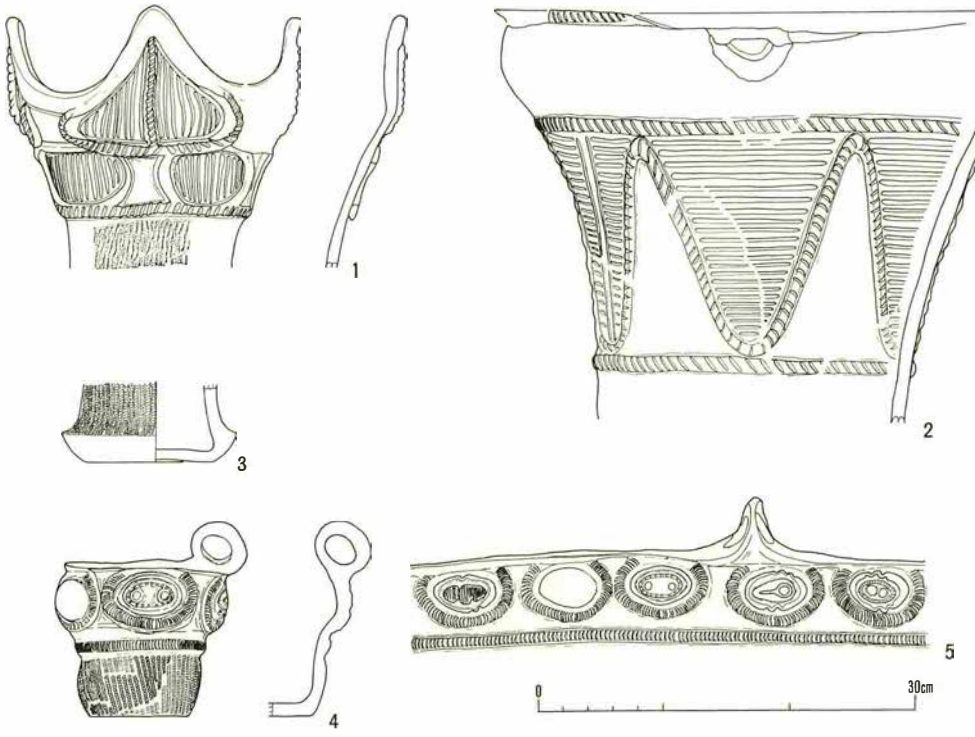
縄文時代住居址としては遺跡の最北部に位置し、属する時代も前期終末～中期初頭である。住居址はほぼ円形をしており、短径5.15ｍ、長径5.6ｍで、主軸はN—19°—Wと思われる。壁は東で86cm、西80cm、南70cm、北83cmと最も深い住居で、壁面は若干傾斜している。炉は住居中央より北に偏在しており、東西60cm、南北90cmの範囲に薄く焼土が広がる地床炉である。柱穴は６本主柱で、その他に小ピットが４本あるが、支柱穴であろうか。ピット２は深さ48cm、短径50cm、長径87cm、ピット３は深さ49cm、短径38cm、長径50cm、ピット５は深さ31cm、短径88cm、長径112cm、ピット７は深さ48cm、短径43cm、長径50cm、ピット８は深さ60cm、短径55cm、長径65cm、ピット９は深さ62cm、直径55cmが主柱穴で、深さ16cmのピット１、深さ44cmのピット４、深さ16cmのピット６、深さ50cmのピット10は支柱穴であろう。この他特別な施設は無く、遺物は床面にちかい部分から出土している。



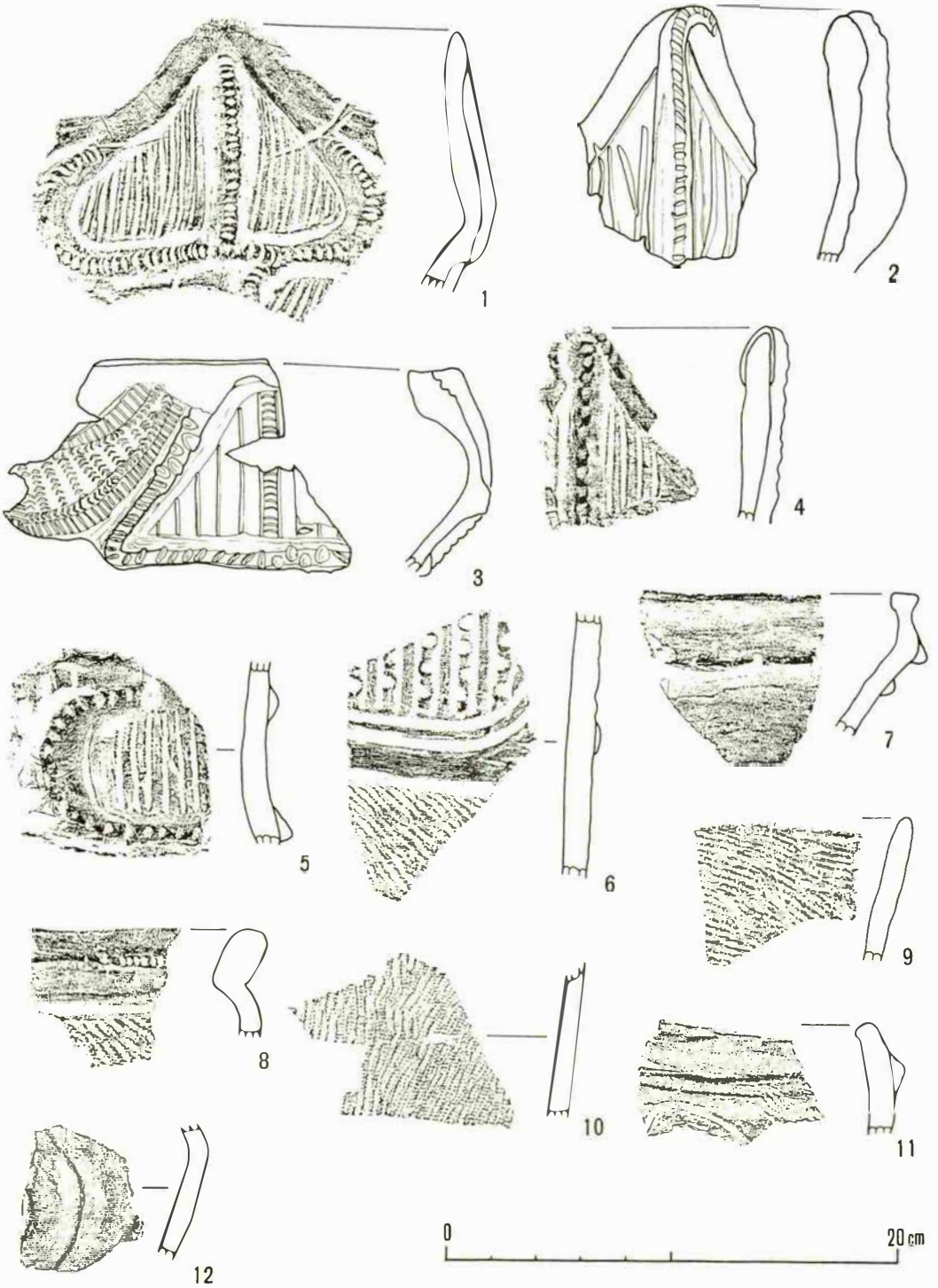
第118図
40号住居址平面図

40号住居址（縄文）第118～120図

39号住居址の南西に位置し、36号住居址と壁を接している。又、南東部は未調査部分があるので、住居址の全体は明らかではない。現存する規模は長径5.8ｍ、短径5.78ｍで不整円形である。壁は東側で51cm、西38cm、南43cm、北52cmの高さがあり、壁面は北側が垂直にちかいが、他は外傾斜している。炉は住居の中央より若干北に寄っており、土器片で囲った特異な土器囲炉である。柱穴は５本検出されている。ピット１は深さ51cm、直径56cm、ピット２は深さ72cm、直径66cm、ピット３は深さ63cm、直径53cm、ピット４は深さ60cm、短径45cm、長径90cm、ピット６は深さ90cm、直径60cm、ピット７は深さ67cm、直径40cmである。ピットはダルマ形プランをしているので長径が短径の倍である。又、ピット５は炉の南にあって深さ35cmと浅く、柱穴に加えることが困難であろう。本住居の出土遺物は、縄文中期中葉に属するもので、関東地方で言う勝坂式の新しい部分であろう。遺物は、住居北東部に集中しており、断面から観察すると、住居がレンズ状に埋没した時、住居北東側に住んでいた人々が不用となった土器片を投げ込んだように見える。このような現象を吹上パターンと呼んでいるが、この住居では大破片はあるものの、一括土器として復元されたものは少ない。



第119図　40号住居址出土土器（１）



第120図　40号住居址出土土器（2）

第２表　縄文時代住居址出土土器観察表
1)口径　2)器高　3)底径　4)胴径

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
7住(21図)					
1. 床　直	深　　鉢	1) 12.4 2) 16.8 3) 6.7 4) 12.6			茶褐色 胎土やや粗め 焼成良好
2. フク土	深　　鉢	1) 25.0 2) 3) 4)	縄文文様	口縁部横ナデ	茶褐色 やや粗い 砂粒多く含む
3.	深　　鉢	1) 2) 3) 15.2 4)		内面、ヘラで調整。外面、胴部に半截竹管による縦位の平行沈線が一周され、その上下に横位の１本の太い沈線が施文。縦位の沈線は上→下へ工具を動かしたと思われる。沈線文帯の下には粘土紐を貼付した文様帯。楕円形を横位に５つ並べ一周。１ケ所だけ楕円の間に楕円の上部を一周させた粘土紐の余った部分を斜めに貼付けてある。 底部ナデ	外面、赤褐色 外面、黒色 胎土、多量の砂 小石混入 焼成　良好
4. 床　直	深　　鉢	1) 2) 3) 14.6 4)			茶褐色 胎土粗く砂粒多く含む 焼成　良
5.	深　　鉢	1) 2) 3) 12.0 4)			茶褐色 赤色粒子 金雲母、黒雲母 砂粒多く含む
6.	深　　鉢	1) 2) 3) 5.6		指圧痕	黒灰褐色、茶褐色 胎土　長石、石英、黒雲母混入

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		4)			
7.	深　　鉢	1) 23.6		口縁部すぐ下に直径約1㎝、	暗褐色
		2)		中心部直径約6㎜位の穴あり。	部分的に、白、茶、
		3)		部分的に煤付着	明茶褐色
		4)			
8.	浅　　鉢	1) 35.5			色調、茶褐色
		2)			焼むらあり
		3)			胎土　粗い
		4)			
9. 床	浅　　鉢	1)			色調　褐色
		2)			胎土　やや粗い
		3) 13.8			焼成　良い
		4)			
10住（30図）					
1.	浅　　鉢	1) 24.2			
		2)			
		3)			
		4)			
2.	深　　鉢	1) 14.5			色調　茶褐色
		2)			胎土　粗め
		3)			焼成　良
		4)			
3.	深　　鉢	1) 10.4			色調　茶褐色
		2)			胎土　長石、石英、
		3)			赤色粒子含む
4.	深　　鉢	1)			色調　暗茶褐色
		2)			胎土　粗く砂粒、石
		3) 12.0			英、金雲母他多く含
					む
13住（37図）					
1.	深　　鉢	1) 27.2		区画文、2単位。更に1単位	色調　褐色
		2) 41.9		を渦巻文様で2単位に分別	胎土　密、白色砂粒
		3) 14.8			含む
		4) 17.0			焼成　良好
2.	深　　鉢	1) 17.6		口縁部厚く、ヘラで丁寧な磨	色調　灰褐色

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		2)		きが施行。外面、口縁部より	胎土　密
		3)		2㎝程下に突起物があり左に	焼成　良
		4)		傾いて付けてある。	
3.	深　　鉢	1) 12.1			色調　赤褐色
		2)			
		3)			
4.	深　　鉢	1) 16.8	円と楕円形の組合	口縁に把手あり、その下に3	色調　暗褐色
		2)	わせで出来ている	㎝程下に小さめの円の突起物、	胎土　砂粒を少量含
		3)	回りに細かい刻み	その中心がくりぬいてある。	む。
		4)	あり	内面丁寧なヘラ磨き	焼成　良
5.	深　　鉢	1) 15.8			色調　暗褐色
		2)			胎土　やや粗く砂粒
		3)			含む
		4)			焼成　良好
6.	深　　鉢	1) 14.2			色調　暗褐色
		2) 21.5			胎土　石英、雲母多
		3) 8.2			く含む
		4)			焼成　もろい感じ
7.	深　　鉢	1)			外　茶褐色
		2)			内　黒褐色
		3) 7.2			胎土　やや粗い
		4)			焼成　良
8.	深　　鉢	1)		指頭痕有。整形、粗雑。胴部	色調　赤褐色
		2)		中央毛虫状貼付文約10㎝有す。	胎土　粗く砂粒小石
		3) 17.5		文様の中央盛り上りに刻みあ	を含む
		4)		り	焼成　良
9.	深　　鉢	1)			色調　茶褐色
		2)			内面　焼むら有り
		3) 15.6			
		4)			
10.	深　　鉢	1) 9.8			暗褐色
		2) 14.0			胎土　雲母、砂粒多
		3) 6.0			く含む
		4)			
11.	深　　鉢	1) 17.3		胴下半は二次焼成	褐色

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		2) 31.4 3) 10.9 4)			胎土　砂粒（石英等）多く含む
12.	手　　捏 小　型　坏	1)　5.6 2)　4.0			褐色 胎土　雲母、石英、粒多く含む 焼成　もろい
13.	手　　捏	1)　8.3 2)　3.5 3) 4)			明褐色 胎土　雲母、石英多く含む
14.（38図）	深　　鉢	1) 20.4 2) 33.2 3) 11.2 4)		口縁に把手1個付く。内面ヘラ磨き。胴下半二次焼成を受けてもろくなっている。	明褐色 胎土　砂粒、石英、雲母を含む
15.	深　　鉢	1) 17.8 2) 27.0 3) 10.6 4)		内面に炭化物付着	茶褐色 胎土　金雲母多量に含む 焼成　良
16.	深　　鉢	1) 2) 3)　9.2 4)		縄文は、横方向に回転。土器の前と後では縄文の回転方向を逆にしている。	赤褐色 内面、灰褐色 胎土　やや密、白色、砂粒、雲母を多量に含む
17.	深　　鉢	1) 12.7 2) 22.7 3)　8.4 4) 15.8			上半、黒褐色 下半　赤褐色 胎土　石英、長石等粒子多く含む 焼成　ややもろい
18.	深　　鉢	1) 25.5 2) 3) 4)			暗褐色 胎土　砂粒含む 焼成　良
19.	小型深鉢	1) 2)		外面　全面縄文	茶褐色 胎土　粗い。砂粒多

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3) 4.1 4)			く含む
20.	有孔鍔付 土　　器	1) 16 2) 11.8 3) 7 4) 13	縄文	内外面研磨	表面に赤色顔料が若干残っている。
23住（67図）					
1. 住居址内 土壙出土	特殊土器	1) 10.7 2) 19.6 3) 8.6 4)	※ 口縁は2単位の波状口縁から成り、波状口縁下はそれぞれ穿あり。底部ほぼ水平	縦に紐のようなものを通すと思われる穿孔された瘤状の粘土貼付けを二単位もつ特殊な土器。この瘤状の粘土貼付けは、2単位共、口縁付近と胴下半部につけられそれぞれ縦に穿孔されており、紐のようなものを通すように作られており、この上下の孔を結ぶように土器表面自体も紐にけずられている　※	黄褐色 胴上部から口縁にかけて朱のようなもので赤色に表裏共に彩色されている。 内面は黒色 胎土　細かな石粒をやや含むが全体的に風化されており器面は弱くなっている。
2. 東土壙	大　　鉢 （浅　鉢）	1) 49.0 2) 3) 4)			茶褐色 胎土　粗く砂粒含む 長石、石英他
3.	深　　鉢	1) 2) 3) 9.4 4)			外面　茶褐色 内面　黄褐色 胎土　粗め
39住（116図）					
1.	深　　鉢	1) 2) 3) 4) 38.4			
2.	深　　鉢	1) 2) 3) 9.2 4) 9.4	半截竹管による縦方向の並行沈線で器面全体を覆っており、その中に連	円筒形に近い器形？	赤褐色

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
			続する孤線文、三角形をモチーフとした文様及び底部近くに連続する波状文が同じ工具で施行。		
3.	深　　鉢	1） 2） 3）11.4			
4.	深　　鉢	1） 2） 3）　9.2		半截竹管による縦位の施文を行い、その後横位の沈線による施文	胎土　雲母片含む 焼成　良好
5.	深　　鉢	1） 2） 3） 4）		地文に原体ＬＲの縄文を横位に施文。原体は２cm程の長さと思われる。	赤褐色 胎土　石英等含む
6.	深　鉢　片	1） 2） 3） 4）		外面　横位の沈線がありその直下より縦位の刺突文を有する沈線施行	外面　暗茶褐色 内面　暗赤褐色 胎土　砂粒含む
7.	深　　鉢	1） 2） 3）14.1 4）	縄文は原体ＬＲの単節縄文で、縄長は２cmほど、節の数７－８ヶ		胎土　石英など粒子混入 焼成　良いが風化されている
8.	深　　鉢	1）13.6 2） 3）			
40住（119図）					
1.	深　　鉢	1）22.9 2） 3） 4）	胴部は縄文によって施文	口縁部は波状で４単位。隆帯によって区画。中をヘラ状工具による施文	赤褐色
2.	深　　鉢	1）40.6 2）		ヘラ状工具により口縁部及び胴部の施文が行われる。文様	灰褐色 部々的に煤付着

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3） 4）		の単位は5単位で隆帯により区画される。把手状のものがいくつかついていたと思われる。	
3.	深　　鉢	1） 2） 3）　9.8 4）			外　赤褐色 内　茶褐色 胎土　砂粒含む
4.	把手付土器	1）14.1 2）12.3 3）　7.8 4）	文様は5単位に区画される。 胴下半部に縄文が施されている。	施文はヘラ状工具による	 胎土　良 焼成　良好

第3表　弥生時代住居址出土土器観察表
1)口径　2)器高　3)底径　4)胴径

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
1住（15図）					
1.	小　型　甕	1) 2) 3)　3.6 4)		ハケの後へら磨き	色　褐色 胎　粗い 焼　良好
2住（15図）					
2.	壷	1) 21.5 2) 41.4 3)　8.7 4) 28.9	口縁部　波状文 頸部　波状櫛目文は8単位。部分的にすり消えている。	口縁　横へラみがき 頸部　横へラ磨き 体部　上を縦のへら磨き 中　横のへら磨き 下半　縦のへら磨き 底部　折り返し、若干はけ目の痕跡 口縁部に折り返しの際の指圧痕が残っている。 整形の順　ハケ目→ヘラ磨き→波状櫛目文（若干の磨き） 内面　頸部　横へラ磨き 体部　ハケ目13単位	内面外面共にやや赤みを帯びた黄褐色 胎土　きめ細かく良好。細かい金雲母含む。 焼成　良好
3.	高　　坏	1) 2) 3) 4)		外面は磨きを施してある	外面　赤色塗彩 脚内面　黄褐色 胎土は緻密
3住（8図）					
1.	壷	1) 22.4	口縁　波状文 頸部下半　波状文4単位。右へ施文	外面　ハケで調整後櫛描波状状文を施す 内面　ハケで調整後へラで更に調整	赤褐色 胎土　白色砂粒、金雲母がみられる 焼成　良好
2.	壷	1) 22.7 2) 3) 4)	口縁　櫛描波状文 頸部　ハケ目	横方向のハケ目の上を縦方向のハケ施こしている	赤褐色 胎土　やや粗め 焼成　良

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
3.	甕	1) 2) 3)　8. 4)　15.1	頸部上半上側の沈線を施文後簾状文を施している 頸部下半は2本の沈線の間に沈線で三角形の区画をつくり出している。	内面　ハケ調整 胴部　最大径以下ではハケ調整後ヘラで調整	外面　淡褐色 内面　黒色(付着物) 胎土　砂粒を多量に含む 焼成　良好
4.	甕	1) 2) 3) 4)　10.		外面　指頭→刷毛目→ヘラけずり→ヘラみがき 内面　輪積明瞭その上に粗いハケ目	明るい茶褐色、内面大半黒色 胎土　金雲母多量含む。石英若干 焼成　良好
5.	甕	1)　17.0 2) 3) 4)　16.1	櫛描波状文、2本単位右→左、2本間に浅い線	上部　ハケ目→ヘラ整型→波状文 体部上半　波状文→ヘラみがき 体部下半　ハケ目→ヘラみがき	黒褐色 胎土　金雲母片多、石英若干 焼成　良好
6.	甕	1) 2) 3)　8.1 4)			外、暗褐色 内、薄茶褐色 底部、茶褐色 胎土　金雲母、黒雲母少量含む
7.	甕	1) 2) 3)　8 4)		底部　ハケ目	淡茶褐色 胎土　砂粒、金雲母少量含む 焼成　良好
8.	甕	1) 2) 3)　6.3 4)		外面　縦方向のハケ目 内面　横方向のハケ目	茶褐色 小石、金雲母含む 焼成　良好
9.	甕	1) 2) 3)　8.2 4)			外側　褐色 内側　暗褐色 砂粒、金雲母、石英含む

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
10.	甕	1) 2) 3) 6.6 4)			外側　暗褐色 内側　黒褐色 焼成　良
11.	高　　坏	1) 17.8 2) 3) 4)		外　斜方向のハケ目→斜方向のヘラけずり、ヘラみがき 内　横ハケ目の上を横ヘラけずり、ヘラみがき	内、外共に赤色塗彩 石英、長石、金雲母多量に含む
12.	高　　坏				茶褐色 石英、長石、砂粒、赤色粒子含む 焼成　良好
4住（11図）					
1.	甕	1) 25.6 2) 3) 4)		外面　ハケ目→ヘラけずり 内面　ヘラで磨かれている為口縁部だけハケ目あり	茶褐色　焼むらあり 胎土　粗い砂粒含む 焼成　良好
2.	甕	1) 27.1 2) 36.5 3) 26.4 4) 9.1	頸部上半　波状文 〃 中　　簾状文 〃 下半　波状文 2～4本単位 胴部　円形貼付け文	外面上部　ハケ目→波状文 頸部中　　ハケ目→簾状文 〃 下　　ハケ目→波状文 胴部中　　斜めハケ目 〃 下　　縦ヘラけずり、ヘラみがき 内面上部　横ハケ目→横ヘラみがき 内面中部　斜めハケ目→横ヘラみがき 内面下　横ヘラみがき。下部に指頭痕あり	外面上半　煤付着著しく黒色 外面下半　明褐色 内面　茶褐色 胎土　緻密良好、雲母、石英含む 焼成　良
3.	甕	1) 2) 3) 4) 24.8	胴上部　櫛描波状文（12本単位） 胴中部　斜横のハケ目 胴下部　縦方向のヘラ磨	外面　ハケ調整後櫛描き波状文。波状文は12本単位で下から上へと施されている。	茶褐色 胎土　やや粗め 焼成　良

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
4.	甕	1) 2) 3) 4) 22.0	胴部上半　櫛描き波状文。単位、4～5本。下→上、左→右へ施文	胴部下半（外面）　縦ヘラ調整 内面　横ヘラ調整	胴上半　黒色 胴下半　明褐色 胎土　緻密、金雲母多し。部分的に煤付着
5.	甕	1) 2) 3) 4) 24.0	胴体上半　簾状文 〃 中　波状文 6～7本単位 上→下、左→右へ施文 胴体下半　ハケ目 ハケ→波状文	内面　ハケ、2種類の工具でハケ調整 上部　7～8本単位、約2㎜ 中部　9～10本単位で巾が1㎜より細かい	茶褐色 胎土　やや粗い 焼成　良好
6.	甕	1) 12 2) 3) 4) 12.5	口縁、肩部、波状文 頸部　簾状文	内、外面共にヘラ磨き。特に内面は赤褐色を程し光沢あり	胴上半　褐色 〃 下半　明褐色 内面　赤褐色 胎土　白色、砂粒含む 焼成　ややあまい感じ
7.	甕	1) 2) 3) 8 4)			淡褐色 胎土　金雲母、石英黒雲母、砂粒含む 内側に煤付着
8.	甑	1) 2) 3) 5.4 4)		表　ヘラけずり	灰褐色 胎土　やや粗い 焼成　良
9.	高　　坏	1) 20.0 2) 3) 4)			明茶褐色 胎土　密 焼成　良好
6住（15図）					
1.	甕	1) 8.8 2) 13.7 3) 5.2		外面及び口縁内面はヘラ磨きが丁寧。 内面は調整雑であるが胴屈曲	口頸部　赤色（顔料塗布による） 胎土　小砂粒多く含

番号	器形	法量	文様	技法	備考
		4) 10.9		部には櫛状工具による調整が施行	む 焼成　良好
2.	大型壺	1) 2) 3) 13.2 4) 45.1		外側　口頸と底部にハケあり。体部にハケが見られるが上からヘラみがきが施されている為不鮮明 内側　ハケ目あり	茶褐色、部分的に焼むらあり。下部に炭化物付着 胎土　やや粗い。砂粒多く含む
3.	壺	1) 16.0 2) 3) 4)		外側　口縁部は横ナデ、頸部へらみがき 内面　頸部上半　ハケ調整の上を波状文。頸部下半よりハケ目	外面　茶褐色 内面　黄褐色、口縁部に赤色塗彩
4.	甕	1) 2) 3) 7.7 4)		内面にハケあり	
5.	鉢	1) 10.5 2) 4.6 3) 4.2 4)		内外面共にヘラみがき。 2孔1単位の小孔を1対有する	内外面共、赤色塗彩（顔料塗布） 胎土　白色小砂粒含む 焼成　良好
6.	台付甕	1) 2) 3) 10.0 4)			
7.	台付甕	1) 2) 3) 13.7 4)		外面　はけあり 台付内面　はけあり	茶、暗褐色 胎土　長石、石英、砂粒含む
8.	甕	1) 2) 3) 5.2 4) 8.9	胴部上半　波状文	外側胴部下半　ヘラ削り 底部　ハケあり 内側　ハケ調整のあと横ヘラ磨きを施してある	茶褐色 胎土　やや粗め 焼成　良
9.	甕	1) 14.3 2)	口縁に刻み目あり 頸部上　波状文	口縁部に刻み目あり	暗褐色、白褐色部分有り

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)	頸部中　簾状文		胎土　砂粒、金雲母
		4) 13	頸部下　波状文		含む
10.	甕	1) 16.0		外面　細かいハケ目	茶褐色
		2)		内面　斜横のハケ目	胎土　やや粗め
		3)			焼成　良
		4) 13.4			
11.	甕	1) 16.2		外面　ハケ目	やや赤い褐色、ター
		2)		内面　ハケとヘラ磨き	ル状の黒色
		3)			胎土　粗い
		4) 14.6			焼成　良
12.(16図)	甕	1) 14.1			暗褐色
		2)			胎土　石英、金雲母
		3)			含む
		4)			
13.	甕	1)		外面　縦ヘラ磨き	外面　暗茶褐色
		2)		内面　横ヘラ磨き	内面　黒褐色
		3) 8.3			胎土　やや密、砂粒
		4)			含む
14.	甕	1)			
		2)			
		3) 7.4			
		4)			
15.	甕	1)			外面　黄褐色
		2)			内面　黒褐色
		3) 5.9			胎土　砂粒多量に含
		4)			む
16.	壺　底　部	1)		外面　縦ヘラみがき	外面　暗褐色
		2)		内面　横ヘラみがき	内面　茶褐色
		3) 8.2			胎土　やや密、金雲
		4)			母、砂粒含む
17.	甕	1)			
		2)			
		3) 9.0			
		4)			
18.	甕	1)		外面　ヘラけずり、底部にハ	茶褐色

番　号	器　形	法　量	文　様	技　法	備　考
		2)		ケ目あり	胎土　粗い
		3) 6.0		内面　ハケ調整	焼成　良好
		4)			
19.	甕	1)		外面　ハケ調整後ヘラ削りが	茶褐色
フク土		2)		施されている。ハケは細かく	胎土　やや粗い
		3) 6.3		磨耗	焼成　良
		4)		内面　ヘラけずり	
20.	甕	1)		外面　ヘラ磨き	褐色
		2)		内面　ハケ調整のあとヘラ磨	胎土　粗い
		3) 8.0		き	焼成　良好
		4)			
21.	甕	1)		外面　ハケ調整の後ヘラ磨き	暗褐色
		2)			胎土　粗い
		3) 6.4			焼成　良好
		4)			
22.	甕	1)		内面　ハケ調整	
		2)			
		3) 8.0			
		4)			
23.	甑	1)		外面　ハケ調整、底部指頭痕	暗茶褐色
		2)		あり	胎土　やや粗い、砂
		3) 6.5		内面　ヘラみがき	粒、長石他含む
		4)			
8住 (25図)					
1.	高　　坏	1)		内外共にヘラみがきが施して	外側　赤色塗彩
フク土		2)		ある。	内側　黒褐色
		3) 12.0		赤色塗布があるようだがほと	胎土　やや密
		4)		んど剥がれている	焼成　良
2.	壺	1)			赤褐色
		2)			胎土　やや密
		3) 4.7			焼成　良
		4)			
3.	甕	1)			黒褐色
		2)			胎土　金雲母、石英、
		3) 8			長石含む

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		4)			焼成　良好
9住					
1.	壺	1)			茶褐色
		2)			胎土　金雲母、長石
		3)　8.8			その他の粒子
		4)			
2.	甕	1)		外側　縦方向のヘラけずり、	外側　暗茶褐色
		2)		底部近くに指頭痕。	内側　黒褐色
		3)　6.9		底部孔は焼成後にあけられた	胎土　金雲母、砂粒
		4) 13.1		もの	含む
3.	甕	1)		外側　口縁部に近い所にハケ	茶褐色
床面直		2)		目	胎土　粗い砂粒多く
		3)		内側　横方向にハケ目	含む
		4) 20.1			焼成　良好
4.	甕	1)			
		2)			
		3)　5.2			
12住（35図）					
1.	壺	1)			灰褐色
		2)			胎土　金、黒雲母、
		3)　8.7			砂粒、赤色粒子含む
		4)			
15住（43図）					
1.	壺	1) 34.0	口縁部　縄文文様	口縁　折り返し部分に指頭痕	茶褐色
		2)	の上に3ケの縦隆	頸部　ハケの上をヘラみがき	胎土　粗い、砂粒多
		3)	帯あり	内面　口縁部縄文、頸部ヘラ	く含む
		4)	内面　口縁部3.5	みがき	焼成　良好
			cm巾位に帯状に縄		
			文		
2.	甕	1)		裾の部分にハケ目、それより	外面　茶褐色
		2)		上は、ヘラ磨き	内面　暗褐色
		3)　7.8		内面　ヘラ磨き	胎土　やや粗い
		4)			焼成　良好
3.	甕	1)		内側　ハケ日	灰褐色
		2)			砂粒、金雲母、石英

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3) 9			含む
		4) 20.7			
4.	甕の底部	1)			灰褐色、暗褐色
		2)			胎土　金雲母、長石
		3) 6.8			赤色粒子含む
		4)			焼成　良好
5.	甕	1)			暗褐色、黒褐色
		2)			長石、石英、金雲母
		3) 7.8			を含む
		4)			焼成　良好
6.	壺	1)			灰褐色、黒褐色、金
		2)			雲母、石英、赤色粒
		3) 7.2			子含む
		4)			焼成　良
7.	甕	1)		内外共にヘラみがき。裾部分	灰褐色
		2)		に指頭痕	胎土　やや粗い
		3) 7.0			焼成　良好
		4)			
16住（47図）					
1.	壺	1)	外面　胴部に縄文	外面　口縁部にハケ目、首部	茶褐色
床　直		2)	文様	がヘラみがき。他全面縄を転	胎土　やや密
		3)	内面　口縁部3 cm	がしている	焼成　良
		4) 17.2	巾に縄文文様	内面　口縁部3 cm位縄文。他	
				はナデ	
				輪積跡あり	
2.	壺	1) 20.0		ヘラみがきあり	灰褐色、淡茶褐色
		2)			胎土　石英
		3)			焼成　良
		4)			
3.	甕	1)		外面　ハケ目、7本単位の櫛	茶褐色
		2)		目	胎土　やや粗い
		3) 17.4			焼成　良
		4)			
4.	高　　坏	1) 18.4		丁寧な横ヘラ磨き	内外共に赤色塗彩
		2)			胎土　緻密砂粒含む

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)			焼成　良
		4)			
5.	高　　坏	1) 19.0		横方向にヘラ磨き	内外共に赤色顔料
		2)			胎土　密
		3)			焼成　良
		4)			
6.	甕	1) 18.0		内面　口縁部ハケ目	外面　褐色
		2)		内外面共に横ナデ、横ヘラ磨	内面　黒褐色
		3)		あり	胎土　密
		4)			焼成　良好
7.	甕	1) 23.8	上部　不揃いの波	胴体上部　縦方向のヘラみが	暗褐色、下の部分灰
		2)	状文	き	褐色
		3)		内面　横方向のヘラみがき	胎土　やや密
		4) 30.3			焼成　良
8.	甕	1) 17.8	頸部上半、下半に	口縁部、胴部上半　ハケ目調	
		2) 25.4	波状文あり	整後波状文	
		3)　7.0		胴部下半　ハケ目調整、ヘラ	
		4) 19.1		磨き（縦方向）裾部分上に向	
				ってハケ目あり	
				内面、口縁部　横方向のヘラ	
				みがき	
				胴体　縦方向のヘラみがき、	
				底部に煤付着	
9.	甕	1)	口縁部、胴部上半	外面　波状文、胴部下半にか	白褐色、一部赤褐色
		2)	に波状文	けて丁寧な縦ヘラ磨き	胎土　密
		3)			焼成　良好
		4)			
17住（50図）					
1.	壺			外面　ヘラ磨き	灰褐色一部に赤褐色
床　面					焼むらあり
					胎土　粗い
					焼成　良
2.	高　　坏	1) 12.8		内外共に横ヘラみがき	内外共に赤色塗彩
床　直		2)			胎土　密
		3)			焼成　良好

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		4）			
3.	甕	1）		ヘラみがき、底部裾部分に刻	黄褐色
		2）		みらしいものが見られる	胎土　粗め
		3）　6.4			焼成　良、焼むらあり
		4）			
4.	手　　捏	1）		外側　指頭痕あり	外側　赤褐色、焼むらあり
床		2）			
		3）　4.0			内側　茶褐色
		4）			脚部内側一部　暗褐色
					胎土　粗い
5.	甕	1）19.8	口縁　押圧文	口縁　棒状工具による浅い押	外　暗褐色
		2）	頸部上半　櫛描波	圧	内　明褐色
		3）17.1	状文4段（少しゆ	胴体上半　波状文と簾状文	胎土　多量の白色粒
		4）	るやかな波）	胴体下半　ヘラ磨き	若干の雲母を含む
			頸部中　一連止め	内側　頸部上半　指圧痕、全	焼成　良好
			簾状文	体に丁寧な横ヘラ磨き、下方	
			頸部下半　櫛描波	に一部縦ヘラ磨き	
			状文3段14㎜巾6		
			本		
			胴部下半　丁寧な		
			縦ヘラ磨き		
6.	甕	1）		外面　底部にはけ調整、ヘラ	外面　灰褐色
		2）		磨きも施されている	内面　茶褐色
		3）　6.6		内面　ヘラ調整	胎土　粗い
		4）			焼成　良好
7.	甕	1）			白褐色
		2）			胎土　石英含む。内側に煤が付着
		3）　5.8			
		4）			焼成　良好
8.	甕	1）			黒褐色
		2）			胎土　石英含む
		3）　5.1			焼成　良
		4）			
18住（54図）					

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
1.	高　　坏	1）12.0		外面上半　櫛状工具による調	内外共に赤色塗彩
		2）		整	胎土　金雲母多く含
		3）		下半　ヘラ磨き	む
		4）		内面　櫛状工具による調整	焼成　良好
2.	壺	1）	櫛描き波状文見ら	内面　輪積痕が見られる	灰褐色
		2）	れるが不明瞭		胎土　砂粒多く含む
		3）			焼成　良好
		4）			下半に一部煤付着
3.	甕	1）24.2	頸部上半　波状文	外面下部　丁寧なヘラ磨き	淡褐色
炉内土器		2）29.2	〃 中　　簾状文	〃 上部　ハケによる調整の	胎土　密、精選され
		3）　8.4	〃 下半　波状文	あと施文	ている
		4）23.4	胴部　籠目櫛描文	内面　丁寧なヘラ磨き	焼成　良
			あり		
4.	甕	1）	櫛描き波状文、単	内外面　雑なヘラ磨きあり	暗褐色
		2）	位８本		胎土　砂粒、金雲母
		3）	簾状文　単位５本		多量に含む
		4）10.7			焼成　良
5.	甕	1）	簾状文	外面　ハケ目調整後簾状文	黄褐色
炉内土器		2）	櫛描文　７本単位	内面　丁寧なヘラ磨き、わず	胎土　やや密
		3）		かにハケが残る	焼成　良好
		4）			
6.	甕	1）24.2	口唇に波状文１本	外面　ハケ調整後文様施文	赤褐色
フク土		2）	頸部上半　波状文	内面　極めて丁寧なヘラ磨き	外面　煤付着
		3）	〃 中　　簾状文		胎土　密
		4）23.4	胴部　櫛描文共に		焼成　良好
			７本単位		
7.	甕	1）17.2		底部裾は折り返してあり、指	灰褐色
		2）18.6		頭痕が部分的にみられる	外面上半部煤付着
		3）　7.2		外面　ヘラ磨き、ヘラけずり	胎土　密
		4）14.6		は不明瞭	焼成　良好
8.	甑	1）14.0		外面上半　横ナデ	外面上半　赤褐色
		2）　9.6		〃 下半　縦のへら磨き	〃 下半　黄褐色
		3）　4.4		底部　指頭痕	内面上半　黄褐色
		4）		内面上半　横ナデ	内外面下半　煤付着
				〃 下半　横のヘラ磨き	胎土　砂粒含む

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
					焼成　良好
19住（57図）					
1.	高　　坏	1）22.8 2） 3） 4）			内外面共灰褐色 胎土　やや密 内面下　一部焼むら
2. 炉　内	甕	1） 2） 3） 4）		外面　ハケ目 内面　横方向のハケ目あり	外面　茶褐色 内面　灰褐色一部黒褐色 胎土　粗い 焼成　良好
3.	壺	1） 2） 3）　8.2 4）		外面　縦ハケ調整後ヘラ磨き 内面　横ハケ調整後ヘラ磨き	外面　明茶褐色 内面上部　茶褐色 〃　底部　灰褐色一部黒変 胎土　粗い
4.	甕	1）15.4 2） 3） 4）	胴部上半　櫛描波状文	外面　ハケ調整→波状文→縦方向のヘラ磨き 内面　ハケ調整→横ヘラ磨き	茶褐色 胎土　粗い砂粒含む 焼成　良好
5. 床　面	甕	1） 2） 3）　8.8 4）		外面　縦ハケ調整後ヘラ磨き 内面　横ハケ調整後ヘラ磨き モミ痕あり	外面　茶褐色 内面　灰褐色一部黒変 胎土　やや粗め 焼成　良
6.	甕	1） 2） 3）　6.0 4）		外面　ハケ調整 内面　ハケ調整の後横ヘラ磨き 底部　ヘラ調整	茶褐色 胎土　やや粗い 焼成　良好
20住（60図）					
1.	壺		口唇、口縁、内面共縄文 口唇円形貼付文は5単位 頸部下半　縄文	丁字口縁部　ハケ調整の上を縄文、指頭痕 頸部上　ハケ目→縦ヘラけずり、ヘラ磨き 頸部下半　ハケ目→縄文	外面　明褐色 内面　赤褐色共に班状黒色有り 内面　頸部口縁部に煤。周回する頸部に

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
					て受け二次焼熱 胎土　緻密、長石、金雲母多く含む 焼成　良
2.	壺	1）11 2）15.5 3）　5.9 4）11.5	口唇部（T字口縁） 櫛描波状文４本 頸部　櫛描波状文 単位、４本	口唇下面　指頭痕 頸部上半　指頭痕→ヘラけずり 頸部下半　波状 胴部全体　縦ヘラけずり、ヘラ磨き 胴部下端　指頭痕→ハケ目→ヘラ磨き 内面　口縁、ハケ目→横ヘラけずり→ヘラ磨き 頸部　ハケ目 胴部　輪積の跡あり 〃　下半　ハケ目	黄褐色、胴部黒色、赤色の部分あり 胎土　緻密、金雲母片若干 焼成　良好
3.	壺	1）22 2） 3） 4）	口縁部　波状文	T字口縁 口縁部　波状、口縁下にハケ目あり	茶褐色 胎土　やや粗い 焼成　良好
4.	甕	1） 2） 3）10.0 4）		外面　全体にヘラ磨き、底部に棒状工具による調整 内面　はけ調整	茶褐色 胎土　やや粗い、砂粒含む 焼成　良好
5.	甕	1）29.1 2）37 3）　9.2 4）29.2	口縁部　波状文２本 頸部上半　波状文６本 頸部中　簾状文 〃　下半　波状文８本 簾状文→上下の波状文 波状文　右→左	胴部上半　ハケ目→櫛描文 胴部中　ハケ目 胴部下半　縦ヘラけずり→ヘラ磨き 底部　指頭痕あり 内面頸部　斜横ヘラ磨き 内面胴部　横ヘラ磨き	明褐色、黒色班点あり 胎土　緻密、小石、石英、長石、金雲母若干含む 焼成　良好

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
			下→上		
6.	甕	1）18.5	頸部　櫛描波状文	外面胴部上半　ハケ目の上を	暗褐色
		2）28.8	4本単位で左→右	波状文	内外面共、黒色炭化
		3）　4.3	へ、上→下へ	外面胴部下半　縦ヘラみがき	物が見られる
		4）19.1		内面頸部上半　ハケ目	胴下半　一部黄褐色
				内面胴部　ヘラ磨き	胎土　白色砂粒多量
					金雲母少々含む
					焼成　良好
7.	甑	1）14.3		外面口縁　横ハケ目	明茶褐色
		2）　9.7		〃　胴上部　斜横ハケ目	一部二次焼熱うける
		3）　4.9		〃　胴下半　縦ヘラけずり、	胎土　良好、細石英
		4）		縦ヘラ磨き	長石若干含む
				外面底部　ハケ目	焼成　良好
				内面口縁部　指頭痕→ハケ目	
				→ヘラ磨き	
				内面胴部　ハケ目→粗くヘラ	
				仕上げ。内面に2条の炭化帯	
				あり	
21住（63図）					
1.	小　形　甕	1）13.5	ハケ目	口縁部　ヘラによる刻み、横	茶褐色
		2）14.0	櫛描波状文	方向のヘラ磨き、上をヨコナ	粗い、砂粒含む
		3）　7.6		デ	焼成　　好
		4）12.5		頸部　無節縄文あり	
				胴部　ハケ目あり、不鮮明	
2.	甕	1）14.6	櫛描波状文	口縁部　ヨコナデ	暗褐色
		2）	ハケ目	頸部　ハケ目の上を櫛描波状	やや粗い
		3）		文	焼成　良好
		4）14.1		胴部　ハケの上をヘラ削り	
3.	甕	1）15.8	ヘラ削り	内、外共に、ヘラ調整後ハケ	茶褐色
		2）	ハケ目	目が施されている	やや粗い
		3）			焼成　良好
		4）13.6			
4.	甕	1）	ハケ目	外　ハケ調整	黄褐色
		2）	ヘラ削り	内　ヘラ削り	やや密
		3）　5.8		底部　不定形なハケ目あり	焼成　良好

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		4)			
5.	甕	1)	ハケ目	不鮮明だがハケ目あり	茶褐色
		2)			やや粗い
		3) 6.2			焼成　良好
		4)			
6.	甕	1) 14.0	ハケ目	内外ともハケ目整形	内　茶褐色
		2)			外　黒褐色
		3)			やや粗い
		4)			焼成　良好
7.	小　形　甕	1)	ハケ目	内、外ともハケ調整、不鮮明	内　黒褐色
		2)		である。	外　灰褐色
		3) 5.9			やや粗い
		4)			焼成　良好
8.	小　形　甕	1)	ヘラ削り	内　ハケ調整	内　赤褐色
		2)	ハケ目	外　ヘラ削り	外　灰褐色（焼むら
		3) 4.4			あり）
		4) 5.6			やや密
					焼成　良好
9.	器　　台	1)	ヘラ磨き	内　ヘラ調整、ハケ目あり	外　赤色塗彩
		2)	ハケ目	外　上部、横方向ヘラ磨き	内　一部赤色塗彩、
		3)		下部、縦方向ヘラ磨き	他褐色
		4)			粗い
					焼成　良好
					破片　35住より出土
10.	碗	1) 15.0	ヘラみがき	口縁部にヘラで斜線状に刻み	赤色塗彩
		2) 7.2		模様あり	緻密（金雲母含む）
		3) 6.0		他部横ナデ、ヘラ磨き	焼成　良好
		4)			
24住（73図）					
1.	大　　壺	1)	ハケ目	内外ともハケ調整	茶褐色
		2)		外　ハケ目の上をヘラ磨き	粗い（砂粒含む）
		3)			焼成　良好
		4) 54.4			
2.	大　　壺	1)	ヘラ削り	内　ヘラ削り	茶褐色
		2)	ハケ目	外　ハケ目調整	粗い（砂粒含む）

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)			焼成　良好
		4) 58.0			
3.	小　形　甕	1)	櫛描T字文	頸部　横方向15本単位、縦方	茶褐色（焼むら）
		2)	ヘラ磨き	向8本単位の櫛描T字文。他	やや粗い
		3)　4.6	ハケ目	部はハケ整形の上をヘラ磨き	焼成　良好
		4)　9.4			
4.	壺	1)	ヘラ磨き	縦方向のヘラ磨き	茶褐色（外）
		2)		底部荒削りの跡あり	暗褐色（内）
		3)　7.7			粗い（砂粒含む）
		4)			焼成　良好
5.	甕	1)	ヘラ磨き	外　縦方向のヘラ磨き	茶褐色（一部焼むら
		2)		内　横方向のヘラ磨き	あり）
		3)　5.4			やや粗い
		4)			焼成　良好
6.	甕	1)	ハケ目	ハケ目、調整	茶褐色
		2)		底部に木葉痕あり	粗（砂粒含む）
		3)　7.8			焼成　良好
		4)			
25住（76図）					
1.	甕	1) 22.4	ハケ目	内、外とも横方向のハケ目調	茶褐色（一部焼むら
		2)		整	あり）
		3)			やや粗い
		4) 23.0			焼成　良好
2.	甕	1) 13.2	ハケ目	外、細いハケが縦方向、内、	暗褐色（焼むら）
		2) 13.4	ヘラ磨き	ハケが横方向に施され、その	やや粗い
		3)		上を磨きが施されている	焼成　良好
		4) 11.2			
3.	小　形　甕	1) 14.4	ハケ目	内、外ともハケ調整	外　茶褐色
		2)			内　暗褐色
		3)			やや粗い
		4) 13.5			焼成良好
4.	甕	1) 16.6	ハケ目	外、頸部を境に上部は8本単	茶褐色
		2)		位のハケ目、左上→右下に。	やや粗い
		3)		下部はより大きなハケ目が施	焼成　良好
		4) 17.2		されている	

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
				内　2種の工具からなっており、横方向にハケ目が施されている	
5.	小　形　甕	1) 13.8 2) 14.1 3)　5.5 4) 11.9	櫛描波状文 簾状文 ヘラ磨き	口縁部及び胴部に櫛描波状文 右→左、8～9本単位 頸部　簾状文右→左、8～9本単位 内、横方向に磨きが施されている	暗褐色 やや粗い 焼成　良好
6.	高坏(脚部)	1) 2) 3) 15.0 4)	ヘラみがき ハケ目	外　ヘラ磨きの上を赤色塗彩 内　全面ハケで調整、その上を若干ヘラで磨いている 脚と坏の接合部は手でなでてある	外　赤色塗彩 内　薄茶褐色 やや密（細い砂、鉄さび色粒子含む） 焼成　良好
7.	甕	1) 2) 3)　7.2 4)	ヘラ磨き ハケ目	外　ヘラ磨き 内　横方向にハケ調整、底部に指頭痕あり	茶褐色 やや粗い 焼成　良好
8.	甕	1) 2) 3)　7.4 4)	ヘラけずり ヘラ磨き	外　縦方向ヘラけずり 内　ヘラ磨き	黄褐色 やや密 焼成　良好
9.	甕	1) 2) 3)　7.0 4)	ヘラ磨き ハケ目	外　縦方向に細いハケ調整 内　ヘラ磨き、底部に籾跡あり	灰褐色 粗い 焼成　良好
10.	鉢	1) 11.0 2) 3) 4)	ヘラけずり ハケ目	外　部分的にハケ目があり、その上をヘラ調整	外　灰褐色 内　濃褐色 やや密（細い砂粒含む） 焼成　良好
11.	鉢	1) 10.0 2) 3)	ヘラけずり ハケ目	外　一部分ハケ目があり他はヘラけずり 内　横方向のハケ目調整	茶褐色 やや密（砂粒含む） 焼成　良好

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		4) 9.1			
12.	高　　坏	1) 24.0	ヘラみがき	内、外面共ヘラ磨き。その上	赤色塗彩
	（口縁部）	2)		を赤色塗彩	やや密（砂粒含む）
		3)			焼成　良好
		4)			
26住（79図）					
1.	壺	1)	ヘラみがき	外　斜位にハケをかけた後ヘ	外　上部、赤色塗彩
		2)	ハケ目	ラ整形	下部は赤褐色
		3)		内　横、斜方向へのハケ目外	内　部分的に炭化物
		4) 25.4		面に比較して工具の巾が広い	付着
					やや粗い、砂粒含む
					焼成　良好
2.	小　形　甕	1) 13.4	櫛描波状文	口縁部　波状文、頸部　簾状	
		2) 14.25	簾状文	文、胴部上を波状文、中をハ	
		3) 5.7	ハケ目	ケ目調整した上からヘラで調	
		4) 12.3	ヘラ削り	整	
				内　ハケ目調整	
				文様の単位７本	
3.	甕	1) 18.0	櫛描波状文	口縁部　波状文、頸部　簾状	茶褐色、焼むらあり
		2)	簾状文	文、胴部上を波状文、下部は	やや粗い
		3)	ヘラ磨き	ヘラ磨き。９本の単位で文様	焼成　良好
		4)		を施しているが、波状文は６	
				～８本単位しか残っていない	
4.	甕	1)	ヘラ削り	内、外面共細い	外　茶褐色
		2)		ヘラ削り	内　暗褐色
		3) 7.0			やや粗い
		4)			焼成　良好
28住（84図）					
1.	高　　坏	1) 20.9	ヘラみがき	外　縦方向のハケ目の後横方	
	（現存部1/2）	2)	ハケ目	向にヘラみがき	
		3)		内　全面横方向のヘラみがき	
		4)		内、外面共　赤色塗彩、部分	
				的にカーボン付着	
2.	手づくね	1) 7.0	指頭痕	小形手づくね土器	赤褐色
		2) 2.9	ヘラ整形	底部　ヘラ整形	やや粗い

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)		内面　ヘラ整形	焼成　良好
		4)			
3.	高　　坏	1) 19.0	ヘラ磨き	ヘラ磨きの上を赤色塗彩されている。内、外面とも	赤色塗彩
	(口縁部)	2)			密
		3)			焼成　良好
		4)			
4.	高　　坏	1) 16.0	ヘラ磨き	内　ヘラ磨きの上を赤色塗彩	内　赤色塗彩
	(口縁部)	2)		外　ヘラ磨き	外　暗褐色
		3)			やや密
		4)			焼成　良好
5.	鉢	1) 14.0	ヘラ磨き	内、外ともヘラ磨き	内　白茶褐色
		2)			外　暗褐色
		3)			
		4)			
29住 (86図)					
1.	壺	1) 23.6	T字文	縦方向にハケ目、その上をヘラ磨き、頸部に横方向に10本単位、縦方向に3本の櫛描T字文	赤褐色
		2)	ヘラ磨き		やや粗い
		3)	ハケ目		焼成　良好
		4)			
2.	手づくね	1)　6.2	ヘラ磨き	内、外ともヘラ磨き	茶褐色
		2)　4.6		内面　ハケ目一部あり	粗い
		3)　4.0		口縁部　横ハケ整形	焼成　良好
		4)		底部　ヘラ磨きの為寄せ土有り	
3.	甕	1) 15.2	櫛描波状文	外　ハケ整形、10本単位	薄茶褐色
		2)	ハケ目	口縁部→胴張出部、櫛描波状文、左廻り方向の7本単位	やや粗い(砂粒含む)
		3)	ヘラ磨き		焼成　良好
		4) 14.6		内　ヘラ磨き、胴部に一部ハケ整形されている。14本単位	
4.	甕	1) 17.8	櫛描波状文	外　ハケ整形の上を口縁部→胴張出部	赤褐色すす付着
		2)	簾状文		やや粗い(砂粒含む)
		3)	ハケ目	波状→簾状→波状の順で文様が施されている	焼成　良好
		4) 16.3	ヘラ磨き	内　ヘラ整形	
5. 炉　下	甕	1) 13.6	櫛描波状文	口唇部　ハケらしき工具で刻	薄茶褐色(すす付着)

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		2）	ヘラ削り	み	やや粗い
		3）	口唇刻み文	頸部　6㎝巾、櫛描波状文	焼成　良好
		4）12.0		下部はヘラ削り、すす付着	
				内はヘラ整形	
6.	甕	1）20.0	ハケ目	外　口唇部にハケによる刻み、	薄茶褐色（一部焼むらあり）
		2）	櫛描波状文	ハケ整形の上を頸部だけ5本	
		3）	口唇刻み文	単位の左→右方向に櫛描波状	やや密
		4）19.0		文	焼成　良好
				内　ハケ整形の上をヘラ磨き、	
				7～8本単位	
7. 炉　内	甕	1）16.0	ハケ目	口唇部にハケによる刻み	外　黒褐色
		2）	櫛描波状文	外　ハケ整形の上をヘラ磨き、	内　黄褐色
		3）	口唇刻み文	胴張出部に櫛描波状文、左→	やや密
		4）15.5		右方向に4本単位	焼成　良好
				頸部にボタン状の貼付文あり	
				4個と思う	
				内　ハケ整形、7～8本単位	
				頸部にヘラ状工具でくの字状	
				の沈線がみられる	
8.	甕	1）10.9	ハケ目	外　頸部にハケの痕がみられ	内　赤茶褐色
		2）10.0	ヘラ磨き	るが、上をヘラ磨きが施され	外　すす付着、黒褐色
		3）5.1		ている。	
		4）8.5		内　ヘラ削り、ヘラ磨き	やや粗い(砂粒含む)
					焼成　良好
9.	甕	1）20.6	ハケ目	外　全面ハケ整形の後、頸部	赤褐色
		2）	ヘラ磨き	より上と胴部をヘラ磨き	やや粗い(砂粒含む)
		3）		内　ヘラ磨きをした後ハケ目	焼成　良好
		4）17.2		を施し、頸部を再度、ヘラで	
				ハケ目を消している	
				口縁は内から外へ折返し、ふ	
				くらみあり	
				ハケ単位、外、不明、内面、	
				18本位	
10.	壺	1）13.4	ハケ目	ハケ整形の後ヘラ磨き	赤色塗彩（但し内面剥離）
		2）	ヘラ磨き		

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)			密
		4)			焼成　良好
11.	甕	1)	ハケ目	外　ハケ整形の後ヘラ磨き	内　赤褐色
		2)	ヘラ磨き	内　ヘラ磨き	外　褐色
		3)　5.0	ヘラ削り	底部　ヘラ削り	粗い
		4)			焼成　良好
12. 炉　下	甕	1) 21.8	ヘラけずり	外　ヘラ削り	黄褐色
		2)		内　棒状の削り跡が何本かある	外　焼むらあり
		3)			やや密
		4)			焼成　良好
13.	高坏(坏部)	1) 28.5	ヘラ磨き	口縁部に受口があり破片にて数が確認できない	赤色塗彩
		2)			やや密（雲母含む）
		3)		内外面　ヘラ磨き、その上を赤色塗彩されている	焼成　良好
		4)			
14.	壺（口縁）	1) 19.8	ヘラ磨き	内外面　ヘラ磨きの上を赤色塗彩	赤色塗彩
		2)			密
		3)			焼成　良好
		4)			
15.	高坏(坏部)	1)	ヘラ磨き	外　ヘラ磨きの上を赤色塗彩	外　赤色塗彩
		2)	ハケ目	内　粗雑な整形、ハケ目が施されている	内　黄褐色
		3) 13.3			やや粗い
		4)			焼成　良好
30住（90図）					
1.	壺	1)　9.2	ハケ目	外　口縁部から頸部にかけて縦方向のハケ整形。胴部から底部は斜め方向のハケ整形。胴張出部は指頭ナデの様である。	褐色、一部暗褐色
		2) 16.9			粗い（5～8㎜大の小礫含む）
		3) 15.2			
		4)　6.8			焼成　良好
				内　全体ハケ整形	
2.	甕	1)	ハケ目	外　斜め方向ハケ整形の上をヘラ磨き	外　暗褐色
		2)	ヘラ磨き		内　灰褐色
		3)		内　ハケ整形	粗い（小礫、雲母含）
		4) 22.0			焼成　良好
3.	甕	1)	ヘラ磨き	外は丁寧なヘラ磨き	褐色
		2)		内は整形、粗雑輪積痕が見える	粗い（砂粒含む）

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)			焼成　良好
		4)			
4.	小　形　甕	1) 15.2	櫛描波状文	外　口縁部　櫛描波状文	茶褐色、焼むら有
		2)	簾状文	〃　頸部　簾状文	やや粗い
		3)	ヘラ磨き	〃　胴部　櫛描波状文	焼成　良好
		4)	ハケ目	内　ハケ目の上を横ナデのヘラ磨きが施されている	
				外　文様11本単位	
5.	甕　（壷）	1) 17.0	ヘラ磨き	ヘラ整形で頸部に簾状文有。	黄褐色
		2)	簾状文	但し小片にて不明	粗い（砂粒含む）
		3)			焼成　良好
		4)			
6.	甕	1) 11.0	ハケ目	ハケ目整形で頸部に簾状文あり	暗褐色
		2)	簾状文		密（砂粒含む）
		3)		但し小片にて不鮮明	焼成　良好
		4)			
7.	高坏(脚部)	1)	ヘラ磨き	外　縦方向ヘラ磨きの上を赤色塗彩	外　赤色塗彩
		2)			内　黄褐色
		3) 13.8		内　横方向ヘラ磨き整形	密（石英粒子含む）
		4)			焼成　良好
8.	高　　坏	1)	ヘラ削り	外　縦方向のヘラけずり	薄赤茶褐色
		2)	ハケ目	内　脚内は粗雑な整形でヘラ整形。杯内面はヘラ削り。ハケを利用した痕も若干あり	粗い（砂粒含む）
		3)			焼成　良好
		4)			
31住（93図）					
1.	甕	1) 17.4	櫛描波状文	外　ヘラ磨きをした上に頸部に簾状文を施し、その後口縁部と胴部に櫛描波状文を施している。7本単位	外　黄褐色（焼むら有）
		2)	簾状文		内　白灰褐色
		3)	ヘラみがき		やや粗い
		4) 18.5	ハケ目	内　ハケ整形の上をヘラみがき	焼成　良好
2.	甕	1) 21.6	ハケ目	外　上部をハケ整形	茶褐色（焼むらあり）
		2)	ヘラ削り	下部をヘラ削り	粗い
		3)	ヘラ磨き	内　ヘラで磨かれている	焼成　良好
		4) 19.2			

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
3.	鉢	1) 13.7 2) 6.6 3) 5.8 4)	ヘラ磨き	内、外面共ヘラ磨き	灰褐色 やや粗い 焼成　良好
32住（96図）					
1.	高　　坏	1) 2) 3) 7.8 4)	ハケ目	外面、脚部内面にハケ目整形	暗茶褐色 やや粗い 焼成　良好
2.	甕	1) 2) 3) 6.3 4)	ヘラ磨き	内、外面ともヘラ整形	黒褐色（外） 薄茶褐色（内） やや粗い 焼成　良好
33住（99図）					
1.	壺	1) 11.2 2) 3) 4)	ハケ目	内　外面ともハケ目整形 口唇部にもハケ目整形有	薄茶褐色 粗い（砂粒含む） 焼成　良好
2.	小　形　甕	1) 2) 3) 6.0 4) 8.2	ヘラ磨き	外　横方向にヘラ磨き 内　粗雑な整形、輪積の痕跡が見られる。 底部　櫛けずり跡あり	灰褐色 やや粗い 焼成　良好
3.	高坏(坏部)	1) 25.3 2) 3) 4)	ヘラ磨き	内、外とも横方向のヘラ磨き、その上に赤色塗彩。口唇部にボタン状の突起有り。現存部では3個であるが、位置からして5個かもしれない	内、外、赤色塗彩 やや密 焼成　良好
4.	高坏(坏部)	1) 16.7 2) 3) 4)	ヘラ磨き	外　縦方向のヘラ整形 内　横方向のヘラ整形、その上に内外とも赤色塗彩 口唇部に5単位の小突起がつけられている	赤色塗彩 やや密(金雲母含む) 焼成　良好
5.	高坏(脚部)	1) 2) 3) 8.4	ハケ目 ヘラ磨き	内、外面ともハケ目整形のあと、ヘラ磨きが施されている。 脚部内面ハケ目が残っている	茶褐色 焼成　良好

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		4)			
6.	鉢	1) 11.0	ヘラ磨き	全面・底部までもが丁寧なヘ	赤色塗彩
		2) 5.8		ラ磨き。底部外面以外は全面	密（細かい砂粒含む）
		3) 4.8		赤色塗彩がしてある	底部、赤褐色
		4)		口唇直下に2つの小孔がある。	焼成　良好
				対称したもう一方は欠損して	
				いる	
7. 炉	甕	1) 19.2	ハケ目	外　ハケ整形の後頸部に簾状	茶褐色
		2)	櫛描波状文	文その上下口縁部、胴中部ま	やや粗い
		3)	簾状文	で櫛描波状文、5本単位	焼成　良好
		4) 18.4	ヘラ磨き	内　横方向ヘラ磨き2㎜巾位	
8.	甕	1) 14.2	ヘラ磨き	外　縦方向のヘラ磨きの後頸	外　赤褐色
		2) 15.0	櫛描波状文	部に簾状文、更に口縁部と胴	内　上部　暗茶褐色
		3) 7.2	簾状文	上部に櫛描波状文が施してあ	下部　黒褐色
		4) 12.6		る	焼成　良好
				櫛の単位、簾状文8、波状文	
				6で施文は時計廻りである	
9.	甕	1)	ハケ目	外　ハケ目の上を縦方向にヘ	赤茶褐色
		2)	ヘラ磨き	ラ磨き	やや粗い
		3) 6.6		内　斜め方向にヘラ磨き	焼成　良好
		4)			
10.	甕（底部）	1)			
		2)			
		3) 5.6			
		4)			
11.	甕（底部）	1)			暗褐色
		2)			
		3)			
		4)			
12. 下層フク土	甕（底部）	1)			外　暗褐色
		2)			内　茶褐色
		3) 6.0			やや粗い
		4)			焼成　良好
34住（102図）					
1.	壺（口縁部）	1) 30.2	ハケ目	外　T字口縁でその口唇部に	茶褐色

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		2)	波状文	不揃いな波状文が施してある。	やや密
		3)	ヘラ磨き	4本の縦状隆帯付着	焼成　良好
		4)		他　口縁部、ハケ整形	
				但し剥離して不鮮明	
				内　ヘラ磨き	
2.	壺(口縁部)	1) 21.0	ハケ目	口唇部に四方に4つの突起が	外　赤褐色
		2)	ヘラ磨き	つく	内　茶褐色
		3)	櫛描文	外　ハケ整形されているが、	頸部黒いすす有
		4)		口縁と頸部以外は、後ヘラ磨	やや粗い(砂粒含む)
				きを施している。頸部に横方	焼成　良好
				向の櫛描文が9本単位である。	
				ハケの単位15本	
				内　ハケ整形の後ヘラ磨き	
3.	甕	1)	ヘラ削り	口縁部　横ヘラ削り	
		2)	ハケ目	胴部　縦ヘラ削りの後下部ハ	
		3)		ケ整形	
		4)		内面　ハケ整形後ヘラ削り	
				全体的に粗雑な整形	
4.	壺	1)	ハケ目	外　ハケ目の後をヘラ磨き整	黄褐色（薄茶）
		2)	ヘラ磨き	形	やや密
		3)		内　ヘラ磨き	焼成　良好
		4)			
5.	注口土器	1)　7.3	ヘラ磨き	上部　横方向ヘラ磨き	茶褐色（焼むらあり）
	(片口)	2) 11.3	ハケ目	下部　縦方向ヘラ磨き	やや密
		3)　5.9		底部付近に少々ハケ目有り	焼成　良好
		4) 12.4		内　ヘラ磨き	
6.	甕	1) 13.8	ハケ目	全体ハケ整形後、頸部に簾状	暗褐色
		2) 17.3	櫛描波状文	文右→左へ、前後口縁部と胴	やや粗め
		3)　7.8	簾状文	上部へ櫛描波状文、胴下部は	焼成　良好
		4) 12.8	ヘラ磨き	ヘラ磨きが施されている	
				内　ハケ整形の上をヘラ磨き	
7.	甕	1) 13.3	ヘラ磨き	ヘラ整形の上を頸部簾状文、	暗褐色
		2)	櫛描波状文	口縁部、胴上部、櫛描波状文	やや粗い
		3)	簾状文		焼成　良好
		4)			

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
8.	小　形　甕	1) 12.4	ハケ目	外　ヘラ整形の後、口縁部から胴上部まで乱れた櫛描波状文	外　暗褐色
		2) 12.6	ヘラ磨き		内　茶褐色
		3)　5.2	波状文		やや粗い
		4) 10.8		内　左→右へハケ整形、その上をヘラ磨き	焼成　良好
9.	甕	1)		外　ヘラ整形の後、胴部に櫛描波状文、6 本単位	外　黒褐色 すす付着
		2)			内　赤褐色
		3)　5.2		内　全面ハケ整形した後ヘラで磨いている	やや粗い
		4) 10.5			焼成　良好
				ハケ単位 8 本	
10.	小　形　甕	1)	ハケ目	外　ハケ整形したあとヘラ磨き整形	茶褐色
		2)	ヘラ磨き		やや密
		3)		内　ヘラ磨き整形、器形、粗雑（歪）	焼成　良好
		4)			
11.	小　形　甕	1) 10.4	ハケ目	内外面ともハケ整形の後ヘラ磨きがされている。ハケ目若干残っている	暗褐色
		2) 11.2	ヘラ磨き		やや粗い
		3)　5.5			焼成　良好
		4)　9.4			
12.	甕	1)	ヘラ磨き	外　ヘラにより縦方向に磨かれている	黒褐色
		2)	ハケ目		やや密
		3)　5.9		内　ハケによる整形後ヘラ磨きを行っている	焼成　良好
		4)			
				ハケ目は部分的に消えている	
13.	甕	1)	ヘラ磨き	外　4 本単位くらいの短いハケ目整形	外　薄茶褐色
		2)	ハケ目		内　黄褐色
		3)　5.4		内　ヘラ整形の後、ハケ目が横方向に施されている	やや粗い
		4)			焼成　良好
14.	高坏(口縁)	1) 16.4	ヘラ磨き	内外面ともヘラ磨き	外　黄褐色
		2)		内面のみ赤色塗彩	内　赤色塗彩
		3)			やや密
		4)			焼成　良好
35住（105図）					
1.	壺	1)	ヘラ削り	外　頸部にわずかに波状文、胴部ヘラ削りにヘラ磨き	灰褐色（焼むら有）
		2)	ヘラ磨き		やや粗い(砂粒多含)

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)	櫛描波状文	内　胴上部にヘラ削り、下部	焼成　良好
		4) 22.0		ヘラ磨き	
2. 炉　内	甕	1) 23.0	ハケ目	外　全面ハケ整形の後胴下部	赤褐色
		2) 29.0	ヘラ削り	はヘラ削り。頸部は簾状文そ	やや粗い
		3)　8.2	櫛描波状文	の下胴張出部まで櫛描波状文	焼成　良好
		4) 19.7	簾状文	5本単位で三段右→左へ	
				底部　やや厚くヘラ整形	
3.	甕	1) 20.0	ヘラ磨き	内、外面ともヘラ磨き	黒褐色
		2)			粗い
		3)			焼成　良好
		4)			
4.	甕	1) 15.0	ヘラ磨き	外　縦方向、ハケ整形	暗褐色、一部黒褐色
		2)	ハケ目	頸部は下からハケ目	やや粗い（砂粒含）
		3)		内　横斜め方向へハケ整形の	焼成　良好
		4) 14.0		後ヘラ磨き	
				口縁部　折返しがはっきり出	
				ている	
				外　口唇部にボタン状突起が	
				7～8ケ約1㎝のものがつい	
				ている。真中がへこんでいる	
5.	台付甕	1)	ハケ目	外　ハケ整形の後ナデ、一部	白褐色
		2)	ヘラ磨き	ヘラ磨き	やや粗い（砂粒含）
		3)　6.7		底部のくびれ部に指頭痕あり	焼成　良好
		4)　9.3		内　横ヘラナデ、輪積痕が残	
				っている。脚部ヘラナデ痕あ	
				り	
				全体的に薄く粗雑な作りであ	
				る	
6.	器　台	1)	ヘラ磨き	外　上部は横ヘラ磨き	赤色塗彩
		2)	ハケ目	〃　下部は縦ヘラ磨き	粗い
		3)		内　ハケ目の上をヘラ整形	焼成　良好
		4)			21住より破片出土
36住（108図）					
1.	壺	1) 24.8	ヘラ磨き	内、外、全面ヘラ磨き、頸部	赤色塗彩
		2)	簾状文	7本単位の簾状文。その上下	やや密（金雲母含）

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)	籠目櫛描文	に籠目状に櫛描文が施されて	焼成　良好
		4) 32.5		いる	
				外面全体及び内面頸部に赤色	
				塗彩されている	
2.	壺	1)　9.5	ヘラ磨き	全体がヘラで整形	外　薄茶褐色
		2)	簾状文	頸部に簾状文10本単位で左廻	内　赤褐色
		3)		りで施文されている	内縁口縁部すす付着
		4)　8.0			やや粗い(砂粒含む)
					焼成　良好
3.	壺	1)　9.4	ヘラ磨き	内、外面とも縦方向のヘラ磨	茶褐色
		2)		き	やや粗い
		3)			焼成　良好
		4)			
4.	甕	1) 17.4	簾状文	外　ハケ整形の上を頸部、簾	黄褐色
		2)	櫛描波状文	状文7本単位で2段、右→左	やや粗い
		3)	ハケ目	その上下に櫛描波状文、外下	焼成　良好
		4) 17.6	ヘラ磨き	部にハケ目痕が残っている	
				内　ハケ整形の上ヘラで整形	
5.	甕	1) 24.0	ハケ目	外　ハケ目の上をヘラで磨き	暗褐色
		2)	ヘラ磨き	頸部8本単位の簾状文を右か	やや粗い
		3)	櫛描波状文	ら左方向、口縁部と胴中部ま	焼成　良好
		4) 26.4	簾状文	で櫛描波状文5～6本単位	
				内　ヘラ磨きで上部か横方向、	
				下部、縦方向になっている	
6.	甕	1) 19.0	ヘラ磨き	外　ヘラ整形の上を頸部に簾	暗褐色
		2)	櫛描波状文	状文、その上下に櫛描波状文、	やや粗い(砂粒含む)
		3)	簾状文	但し文様が乱雑である	焼成　良好
		4) 19.8		内　ヘラ磨き	
7.	甕	1) 23.6	ヘラ磨き	外　ヘラ整形の後頸部に簾状	黄褐色。内面一部黒
		2)	簾状文	文、5本単位で右→左方向に	色となっている
		3)	櫛描波状文	施文。そのすぐ下に一段5本	粗い(石の粒子含む)
		4) 23.2		単位の櫛描波状文が左→右方	焼成　良好
				向に施文	
				外面雑	
8.	甕	1)	ハケ目	外　ハケ目の上をヘラ磨き、	褐色

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		2)	ヘラ磨き	頸部に簾状文、すぐ下に櫛描	やや粗い(砂粒含む)
		3)	簾状文	波状文が一段施文	焼成　良好
		4) 26.0	櫛描波状文	内　ハケ整形の上をヘラ磨き	
9.	甕	1) 16.6	ハケ目	内、外面ともハケ目が施され	部分的、赤褐色と灰
		2)	ヘラ磨き	ている	茶褐色、一部すす付
		3)		部分的にハケ目の上からヘラ	着
		4) 16.4		で磨いている	やや粗い(砂粒含む)
				ハケで単位9本	焼成　良好
10.(109図)	壺	1)	ヘラ磨き	外　縦方向、ヘラ磨き	灰褐色
		2)		内　ヘラ磨き、4～5単位の	やや粗い
		3) 7.4		櫛目が所々に残存する	焼成　良好
		4)			
11.	甕	1) 22.0	ハケ目	内、外面ともに細かいハケ目	茶褐色、焼むらあり
		2)			やや粗い(砂粒含む)
		3)			焼成　良好
		4)			
12.	高坏(脚部)	1)	ハケ目	外　ハケ整形の上をヘラ磨き、	茶褐色
		2)	ヘラ磨き	内　ヘラで横ナデ	やや粗い(砂粒含む)
		3) 10.0			焼成　良好
		4)			
13.	壺(口縁部)	1) 11.0	ハケ目	内、外ともハケ整形の上をヘ	外　茶褐色、一部焼
		2)	ヘラ磨き	ラ磨き	むら
		3)		内　ほとんどハケ目みえず	内　暗褐色
		4)			やや粗い
					焼成　良好
14.	手づくね	1) 7.9	ハケ整形	外　ハケ整形の上を指頭でな	暗褐色
		2) 6.4	ヘラ磨き	であげ	粗い（砂粒含む）
		3) 4.8	指頭痕	内　ハケ整形の上をヘラ磨き	焼成　良好
		4)			
15.	高坏(坏部)	1) 21.8	ヘラ磨き	内外面ともヘラ磨きしたあと	赤色塗彩
		2)		を赤色塗彩	やや密
		3)		横方向	焼成　良好
		4)			
16.	高坏(坏部)	1) 26.0	ヘラ磨き	内、外ともにヘラ整形のあと	赤色塗彩
		2)		赤色塗彩	密

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3)			焼成　良好
		4)			
17.	高坏(坏部)	1) 18.0	ヘラ磨き	内、外ともにヘラ磨きのあと	赤色塗彩
		2)		赤色塗彩	やや密
		3)			焼成　良好
		4)			
18.	高坏（脚）	1) 11.4	ヘラ磨き	外　縦方向のヘラ磨き	黄褐色
		2)		内　横方向のヘラ磨き	やや粗い(砂粒含)
		3)			焼成　良好
		4)			
38住(113図)					
1.	壺	1)	ハケ目	外　ハケ目の上をヘラ磨き、	茶褐色
		2)	ヘラ磨き	巾広のハケ目	粗い（砂粒多含）
		3)		内　ヘラ磨き	焼成　良好
		4) 39.4			
2.	甕	1) 20.4	櫛描波状文	外　ハケ整形のあとヘラ磨き	外　暗褐色
		2) 24.0	簾状文	頸部、簾状文、右→左へ7本	内　茶褐色
		3)　8.4	ハケ目	単位。口縁部と胴上部櫛描波	やや粗い
		4) 18.8	ヘラ磨き	状文5本単位、かなり乱線で	焼成　良好
				ある	
				内　ハケ目の上をヘラ磨き、	
				横方向である	
				外　胴下部にカーボン付着	
3.	壺	1) 13.8	ハケ目	外　ハケ整形のあとヘラ磨き	茶褐色
		2)	T字口縁部、刻み	ハケ目かなり残存	やや粗い
		3)	目	T字口縁でハケによる刻み目	焼成　良好
		4) 21.8	ヘラ磨き	が一円にある	
				内面　ハケ整形のあとヘラ磨	
				き。剥離が激しく単位不明	
4. 炉　内	高坏(坏部)	1) 28.0	ヘラ磨き	外は縦方向ヘラ磨き	赤色塗彩
		2)		内は横方向ヘラ磨き	密
		3)		その上に内外面とも赤色塗彩	焼成　良好
		4)		されている	
5. 炉　下	高　　坏	1) 33.6	ヘラ磨き	内外面ともにヘラ磨き、その	赤色塗彩
	(坏部口縁)	2)		上を赤色塗彩されている	密

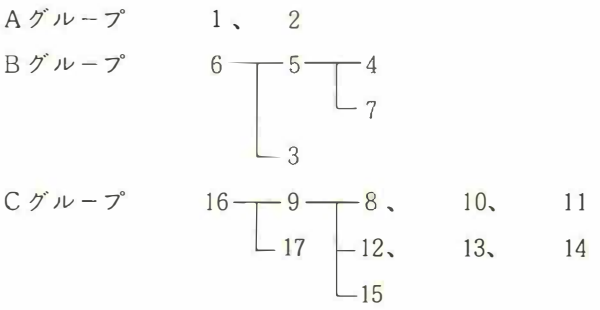
番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
		3) 4)			焼成　良好

第2節　　周溝墓

この遺跡を特徴づける遺構として方形・円形周溝墓群がある。県下で弥生時代後期の周溝墓群がこれだけまとまって検出された例は無く、甲府盆地低部の集落と墓域の関係を知る上で重要な遺跡と考えられている。

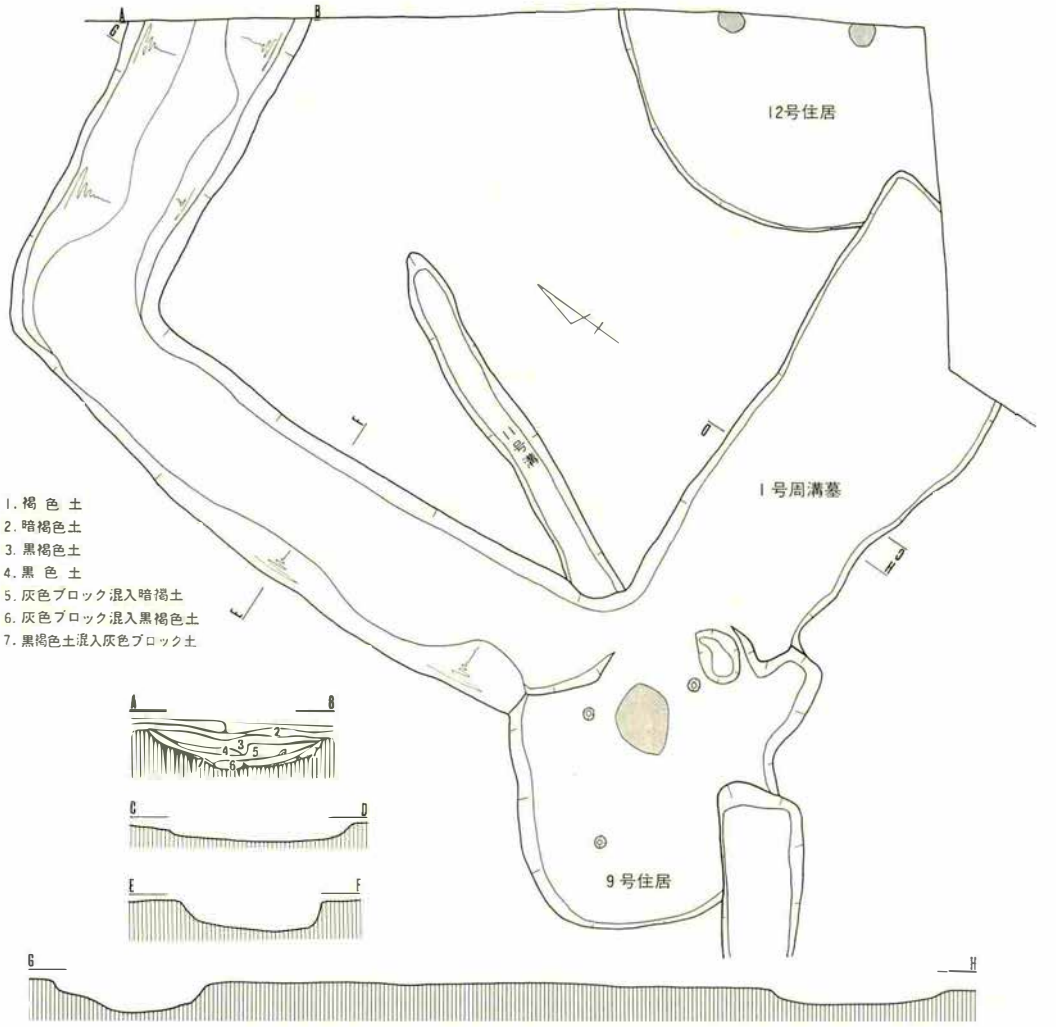
前述したように周溝墓の大部分は、弥生時代集落の南集落と北集落の中間に位置し、2つの集落の間に楔を打ち込んだような状態を呈している。即ち、墓域をはさんで集落が対立することになろう。南集落中には、1号と2号方形周溝墓が住居と切りあいながら存在する。しかも、1号も2号周溝墓も他の周溝墓と重復したり近接することなく、極て独立性が高い。このことは、最初に方形周溝墓が造られ始めたが、集落全体の人口増に伴って、墓域と決めた部分を縮少し、居住地へと振り向けた可能性がある。南北の集落は東西に走行するV字溝で区切られているが、このV字溝が掘られる前に、方形周溝墓群のうちいくつかはすでに築造されていた可能性のあることが想定できる。それは、6号周溝墓とV字溝は切り合うものの、3号周溝、7号周溝墓を避けて造られているようである。

中央の周溝墓群の在り方は、6号周溝墓、16号周溝墓という幅広の溝をもつ大型周溝墓を核として、その周囲に、6号周溝墓には3号と5号周溝墓という中クラスの周溝墓があり、16号周溝墓には9号・17号周溝墓が近接しており、更にその周辺に7ｍ前後の周溝墓が集合している様子がうかがえる。これを図示すると、次のようになる。



特にCグループの10、13、14は円形周溝墓又はそれに類似した形であって、グループ内の特別な位置を示すものであろう。

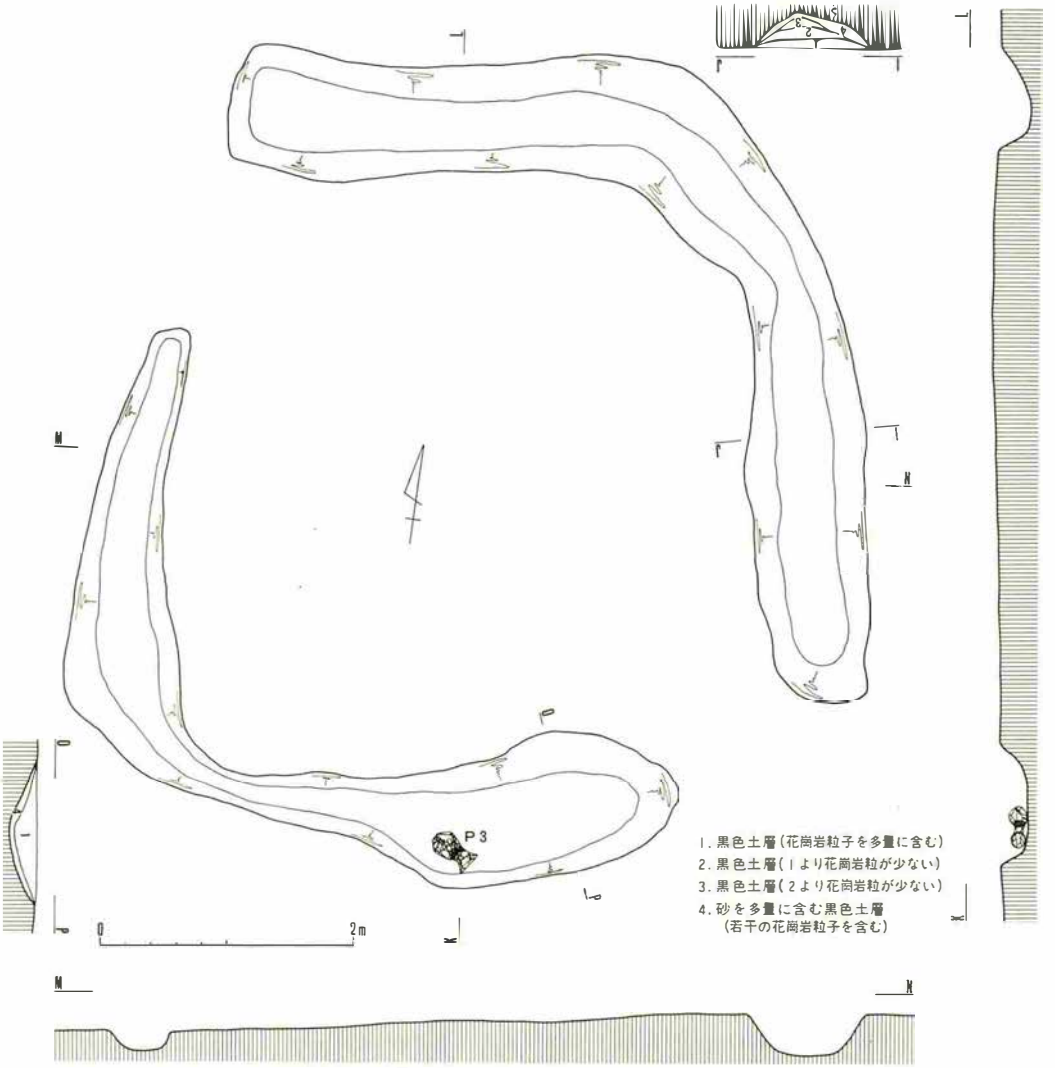
周溝墓の主体部はほとんどが検出されていない。しかし、9号方形周溝墓は、台状部の掘り下げを行っている途中、黒褐色土中に50㎝×1ｍの土壙状のものが検出されている。8号周溝、15号周溝も主体部と思われるものが存在するが遺物の出土はない。



第121図　1号周溝墓平面図

1号周溝墓　　第 121 ・ 124 図

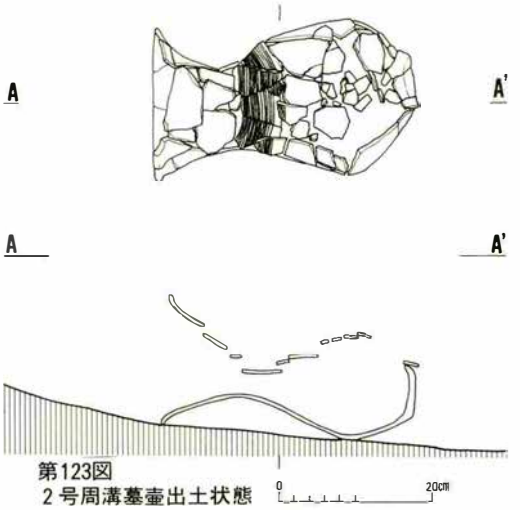
本遺跡最南部に位置し、規模が判明している方形周溝墓では最大のものである。周辺に周溝墓は存在せず、独立していると思われる。9号住居、12号住居と重複しているが、12号住居を切り、9号住居に切られる関係である。西辺の方位はほぼ北を向く（N－　－W）で、各溝の規模は、西辺長13.8ｍ、最大巾2.4ｍ、深さ45㎝、南辺長推定10ｍ、最大巾3.2ｍ、深さ20㎝、北辺現存長7ｍ、巾2.6ｍ、深さ50㎝である。土橋は南東隅に1ケ所と思われる。主体部は検出されなかった。なお、出土遺物は溝覆土中より高坏等が出土している。本周溝は南辺が最も幅広で、北辺は狭く、溝の立ち上りも、台状部側が直立にちかく、外側は緩く傾斜している。溝の覆土もレンズ状の堆積によって、自然に埋め立てられている。



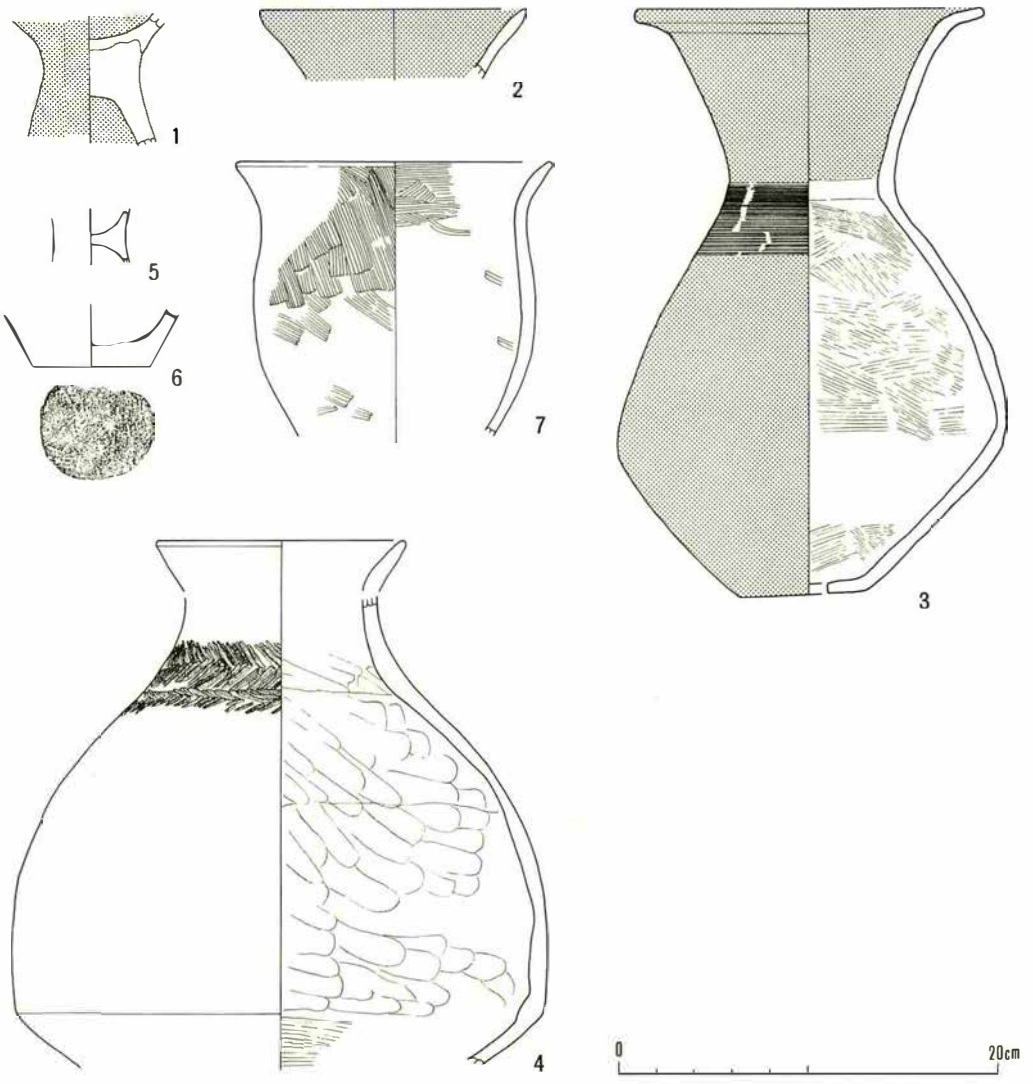
第122図　2号周溝墓平面図

2号周溝墓　　第 122 ・ 124 図

南集落が孤状に並ぶ中心に位置し、L形溝が2つ組み合った方形周溝墓である。他の遺構と重複せず独立している。規模は東西 6.2ｍ、南北 6.5 ｍで、溝の幅及び深さは東で95㎝、35㎝、西90㎝、15㎝、南 1.35ｍ、北 1.30ｍである。土橋は東南と北西に1ケ所づつあり、主体部は検出されなかったが、南側溝の最大幅部分より壷形土器1点が出土している。本周溝墓に伴うものである。



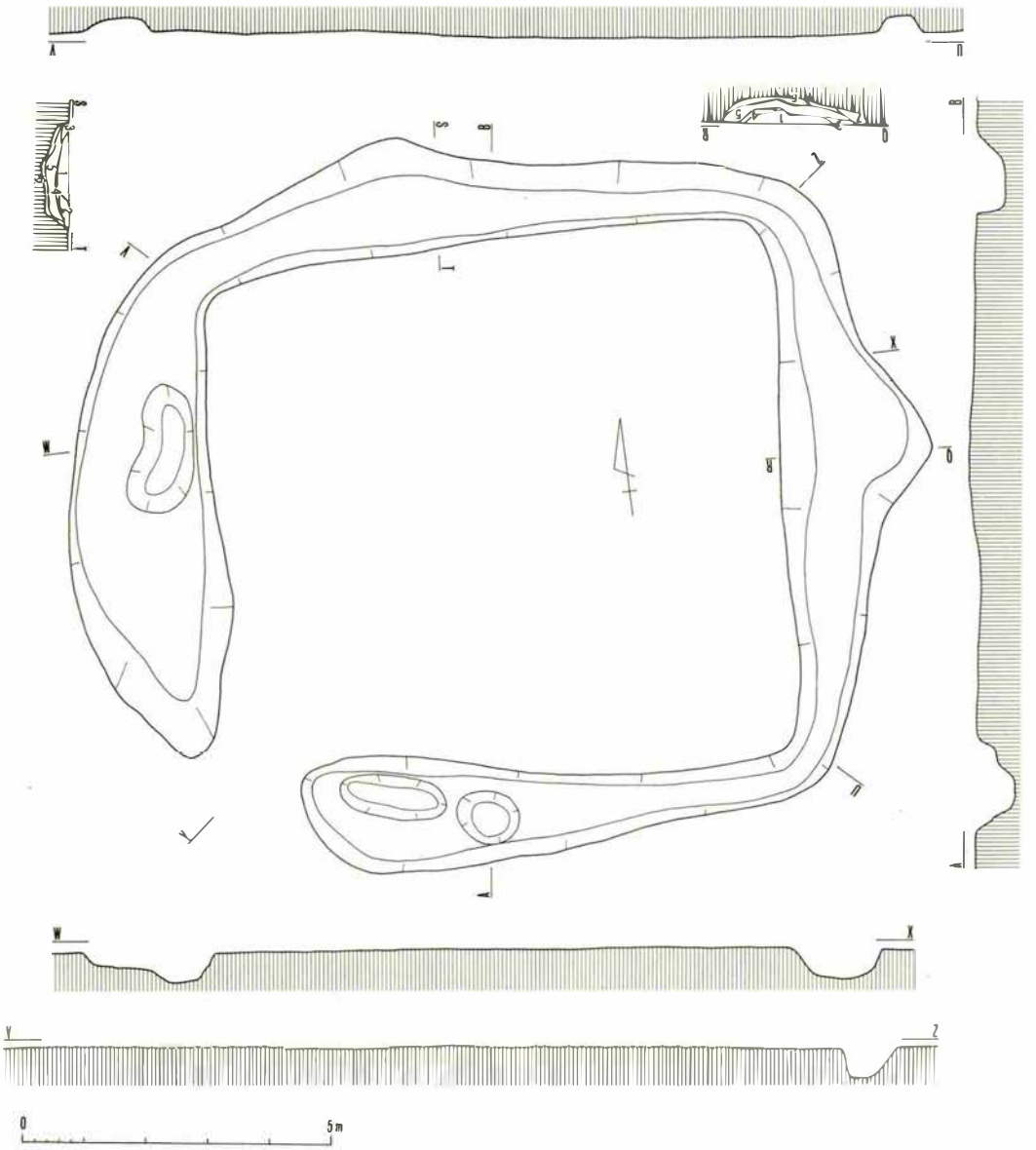
第123図
2号周溝墓壷出土状態



第124図　1、2、3号周溝墓出土土器

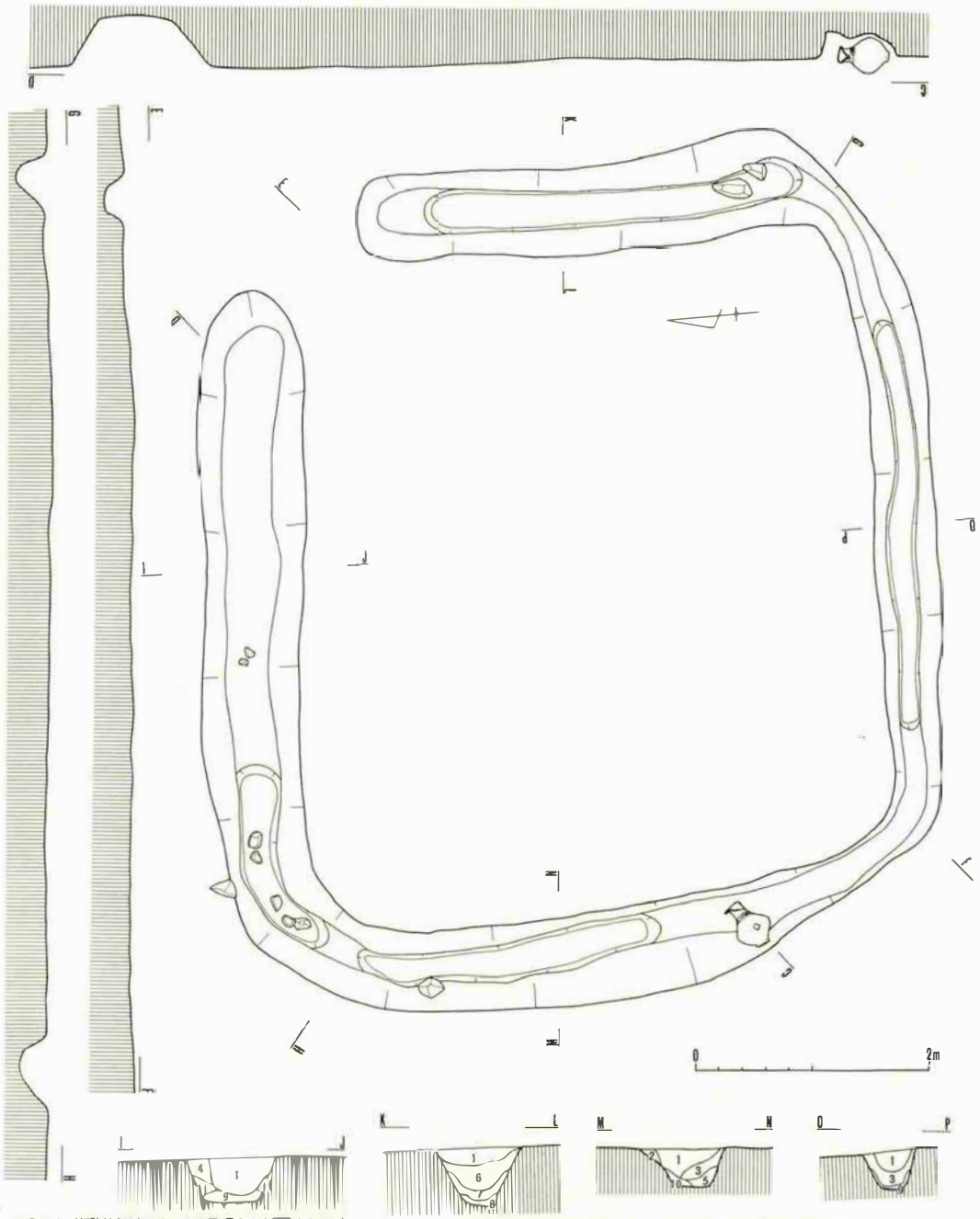
3号周溝墓　　第 124 ・ 125 図

遺跡のほぼ中央に位置し、周溝墓群最南にある。南側はＶ字溝である12溝が走り、12溝の支溝が３号周溝墓南東コーナーに接して止まる。台状部の方位はＮ－5°－Ｅで、規模は東西 13.8ｍ、南北 11.8ｍである。各辺の溝の長さは東10ｍ、西 8.4ｍ、南 8.6ｍ、北 10.6ｍで、各溝の最大幅及び深さは、東 2.5ｍ、50cm、西 2.6ｍ、50cm、南 1.9ｍ、64cm、北 1.9ｍ、45cmで、西辺中央には巾80cm、長さ２ｍの土壙があり、南辺にも巾70cm、長さ 1.8ｍと直径１ｍの土壙がある。どちらも遺構に伴うものであろう。土橋は南西隅に造られている。主体部は検出されておらず、台状部は９ｍ×8.7ｍのほぼ正方形を呈し、溝の立ち上りも内側が垂直にちかい掘り方となっている。出土遺物は、西側溝中央部より壷形土器の大破片が出土している。



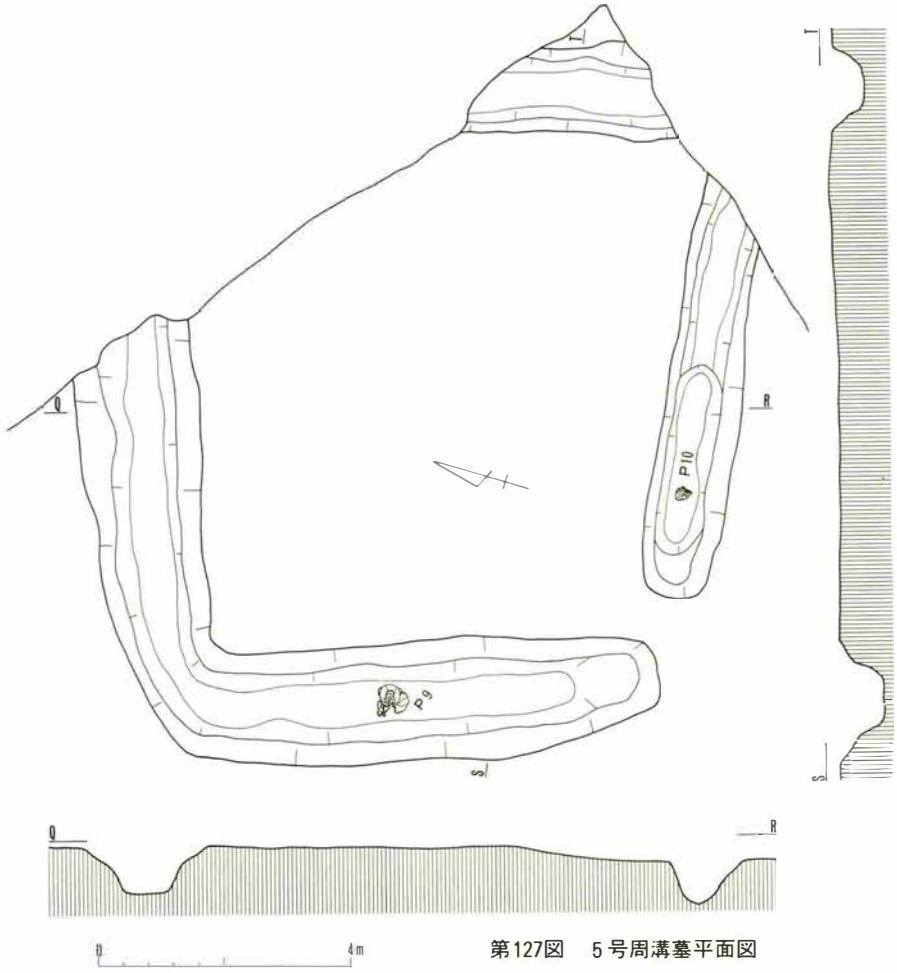
1. 暗褐色粘質土（粘性が非常に強い。白色小砂粒を多量に含む）
2. 暗褐色土混入黄褐色土（白色小砂粒は1層よりかなり少ない。3層より若干暗い）
3. 黄褐色土層（固くしまって粘性は1程ではないが強い）
4. 黄褐色土混入黒褐色土層（5層より若干明るいが粘性などほとんど変わらない）
5. 黒褐色土層（灰褐色土をブロック状に含む。粘性は非常に強い）
6. 黒褐色土混入灰褐色土層（灰褐色土を多量に含む地山漸移層）
7. 黒褐色土混入灰褐色土層（6層と比較すると黒褐色土の量は非常に少ない、一見掘りすぎのようにも思われる）

第125図　3号周溝墓平面図



1. 黒褐色土（細砂粒微量混入均一な土層、柔らかく粘性ややあり）
2. 黒褐色土層（柔らかく、褐色土多く混入）
3. 黒色土層（黒色土ベースに酸化した褐色土ブロック斑状に混入、白色砂粒若干混入）
4. 緻密黒色土層（褐色土若干混入、しまりあり）
5. 黒色土層（漆黒色で白色砂ブロック若干混入、粘性つよし）
6. 黒褐色土層（緻密な黒褐色土ベースに褐色土砂ブロック、酸化土ブロック多し）
7. 暗褐色土層（黒褐色土ベースに白色砂ブロック多量混入）
8. 黒色土層（黒味つよく粘性あり、酸化土ブロック多し）←湧水層
9. 暗褐色土層（黒褐色土ベースに、白色砂ブロック多量混入 粘性つよし）
10. 褐色土層（緻密でしまりのある土層、この部分の壁は全てこの土層で古い遺構の覆土であろう）
11. 褐色土層（砂質土層で黒褐色部混入、しまり、粘性つよし）

第126図　4号周溝墓平面図



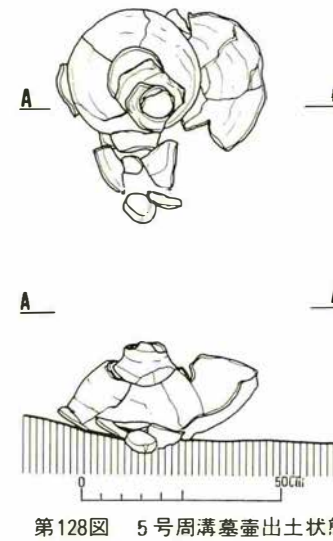
第127図　5号周溝墓平面図

4号周溝墓
第 126 ・ 129 図

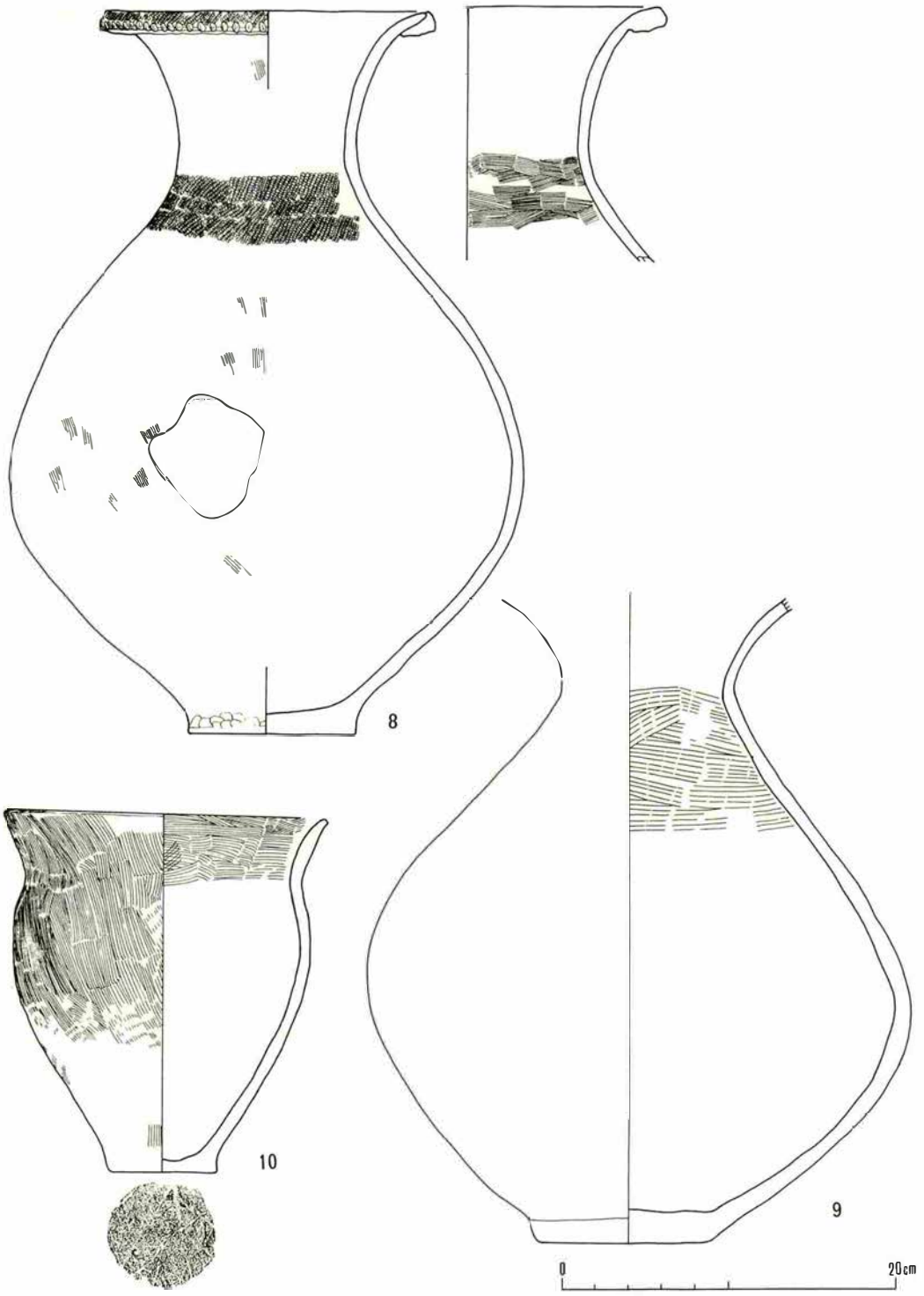
中央の周溝墓群南端に位置した方形周溝墓で7号周溝墓と一部接している。縄文時代の27号住居や数多くの土壙群と重複して造られているが、周溝を埋めている土が黒褐色土であるため、検出は容易であった。台状部の方位はN－4°－Wで、ほぼ北を向いている。東辺の溝は、長さ4.2ｍ、巾80㎝で、更にその内部に巾30㎝、長さ3.25ｍの溝がある。西辺溝は長さ5.5ｍ、巾80㎝で、溝中央部に巾35㎝、長さ2.65ｍの浅い溝がある。南辺の溝は、長さ約6ｍ、巾50㎝で、溝中央に巾25㎝、長さ3.5ｍの細長い溝をもつ。北辺溝は、長さ5.8ｍ、巾85㎝で、北西隅には巾35㎝、長さ1.7ｍの細い溝がある。この周溝墓には、主体部が確認されていないが、西辺溝中より胴部を穿孔した壷が出土している。

5号周溝墓　　第 127 ～ 129 図

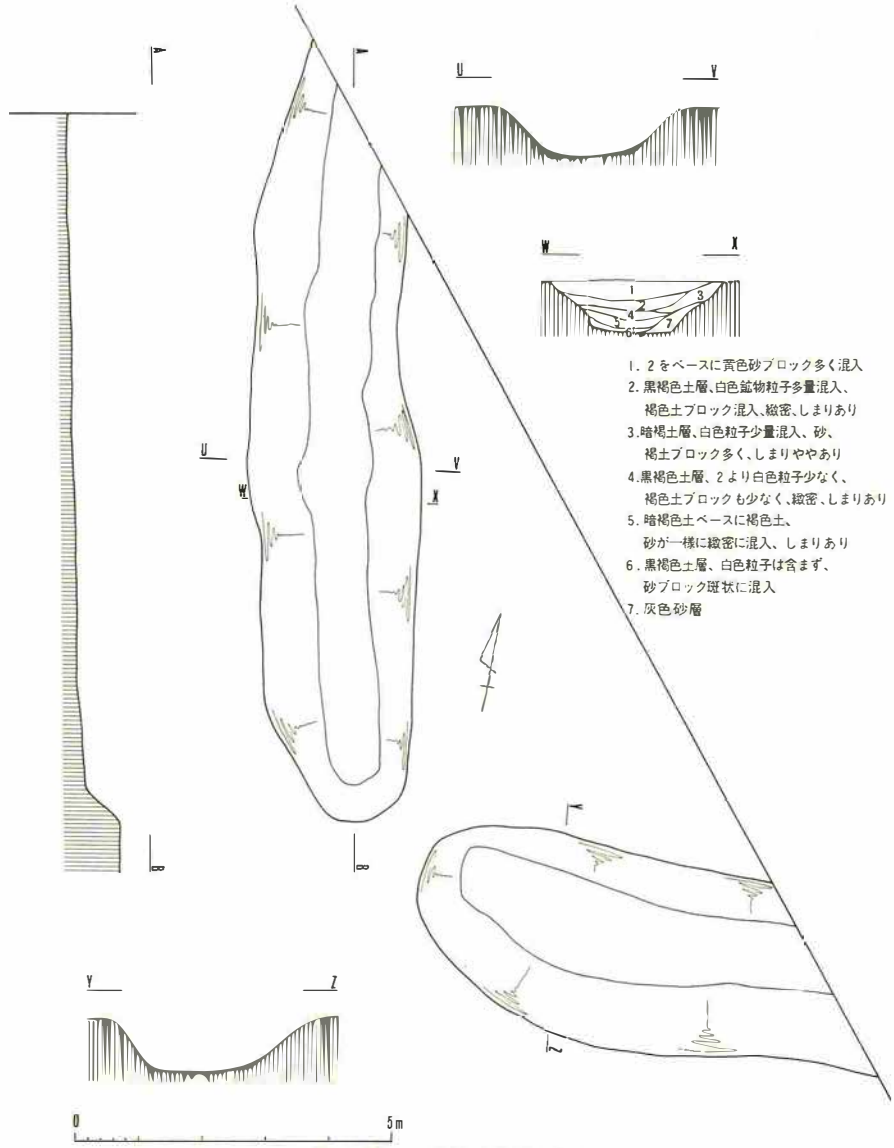
周溝墓群南西部に位置し、17号溝、15号土壙、32、33号土壙と重復する。西辺溝の方位はN－30°－Wを示す。東西10.7ｍ、南北10.4ｍの規模で、各辺の現存する長さは、東溝7ｍ、西溝7ｍ、南溝8ｍ、北3.6ｍである。北東、南東コーナーが攪乱を受けているので正確な辺長は不明である。方台部の規模は、南北8ｍ、東西7.4ｍで、台上に主



第128図　5号周溝墓壷出土状態



第129図　4、5号周溝墓出土土器



第130図　6号周溝墓平面図

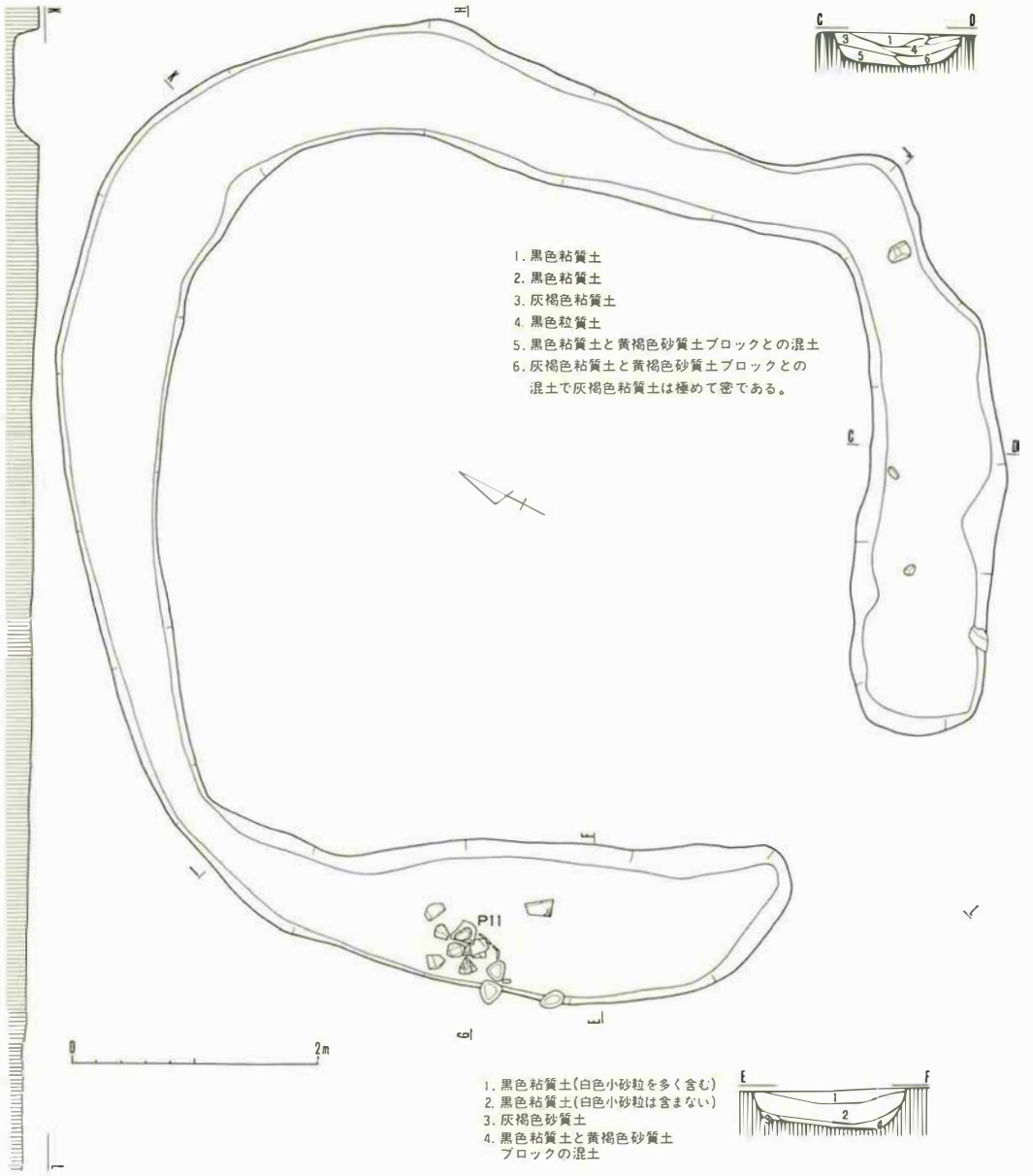
体部は確認されていない。各辺の溝の幅及び深さは、東で1.2 m、深さ70cm、西で1.95 m、深さ66cm、南で1.25 m、深さ73cm、北1.95 m、深さ73cmである。土橋は南西隅に1ケ所である。出土遺物は西溝中より壷1個、南溝中より甕1個が、底面に接して出土した。なお、溝中の舟底状ピットは、南溝土橋近くにあって、長さ3.6 m、巾70cm、深さ20cmで、甕はこの底より出土した。

6号周溝墓　　第130図

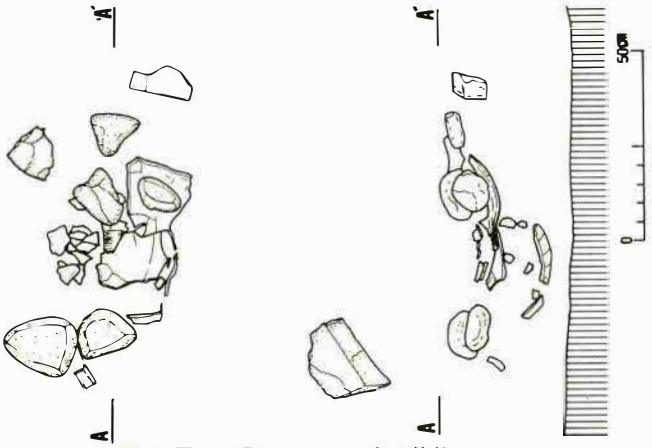
周溝墓群の東部に位置し、大部分が調査区域外にある。12号溝（V字溝）と重復し、断面から12号溝が古く、6号周溝墓が新しい。6号周溝墓は検出された溝から方形を呈すると考えられ、残存する西辺溝の方位はN－9°－W、土橋は南西に1箇所である。西溝の現存長及び幅、深さは12 m、2.8 m、79cm、南溝は6.2 m、3.05 m、89cmである。

7号周溝墓　第131・132・136図

12溝V字溝の東に位置し、4号周溝墓に接して造られ、13溝に切られる。方形周溝墓であるが、形は台状部がほぼ方形を呈するものの、溝の幅に変化があって凹凸が激しい。規模は、東西8ｍ、南北7.7ｍで、台状部は、東西5.5ｍ、南北5.7ｍである。西辺溝の方位はN－23°－

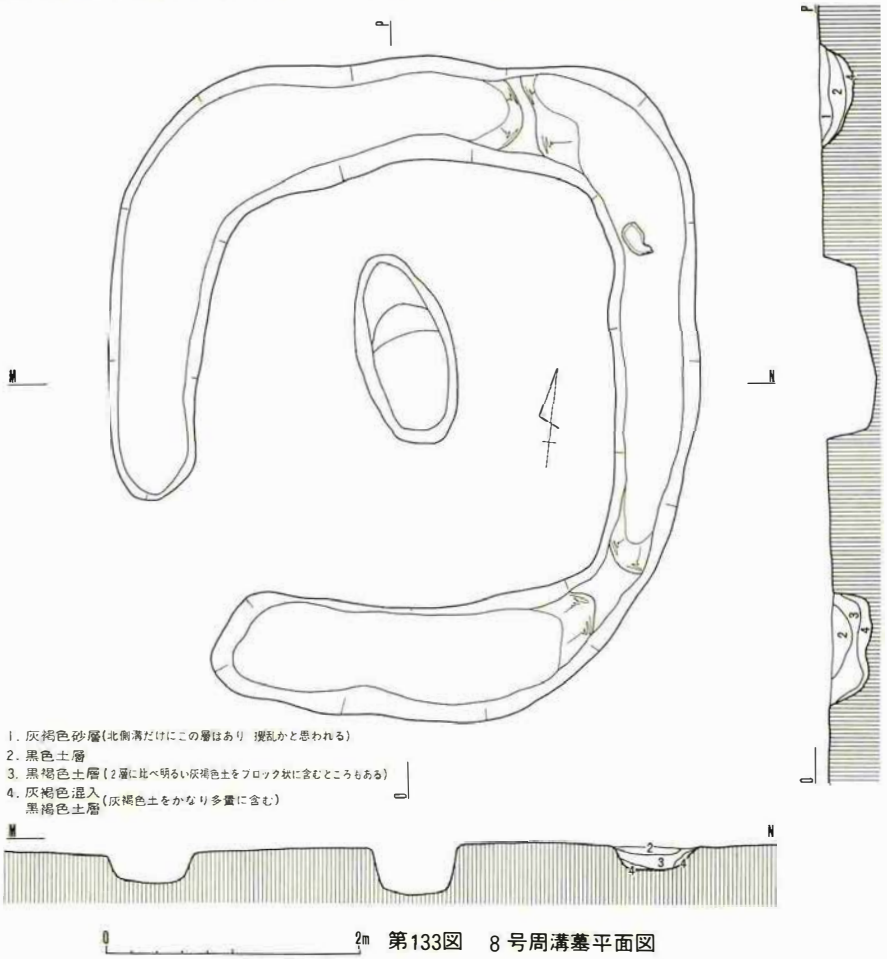


第131図　7号周溝墓平面図

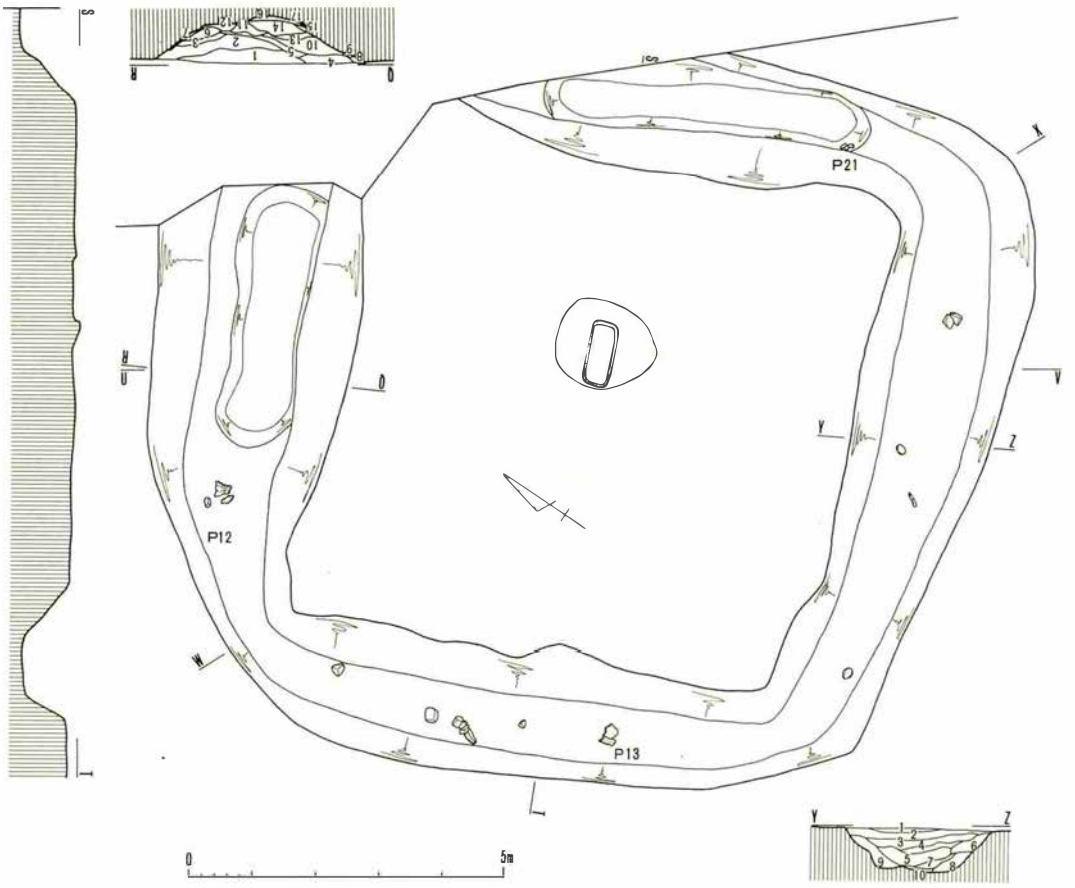


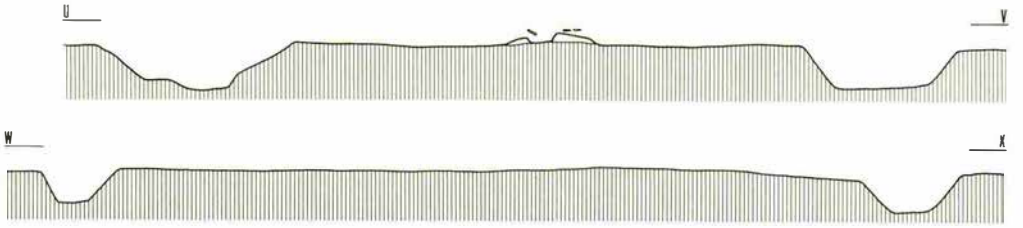
第132図　7号周溝墓土器出土状態

Wを示している。各辺の長さは東6.5ｍ、巾95cm、深さ20cm、西5ｍ、巾1.3ｍ、深さ34cm、南4.7ｍ、巾1.15m、深さ30cm、北6ｍ、巾90cm、深さ25cmである。橋は南西偶に1箇所で、主体部は不明、遺物は西溝中より甕破片が出土している。



第133図　8号周溝墓平面図





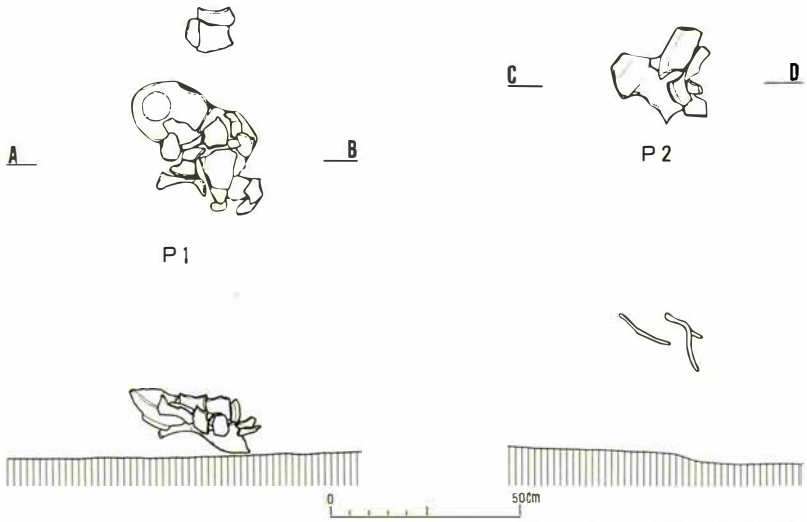
Q－R土層

1. 黒色土層
2. 黒褐色土層
3. 褐 色 土
4. 白色砂層
5. 褐 色 土
6. 黒褐色土
7. 黒褐色土
8. 黒褐色土
9. 灰色砂層
10. 黒色土層
11. 黒褐色土
12. 白色砂層
13. 褐 色 土
14. 灰色砂層
15. 白色砂層
16. 黒色土層
17. 白色砂層

Y－Z土層

1. 黒褐色土層
2. 黒色土層
3. 褐 色 土
4. 黒褐色土層
5. 黒褐色土層
6. 褐 色 土
7. 黒色土層
8. 灰色砂層
9. 褐 色 土
10. 黒褐色土＋砂のまじりあう土層

第134図　9号周溝墓平面図



第135図　9号周溝墓土器出土状態

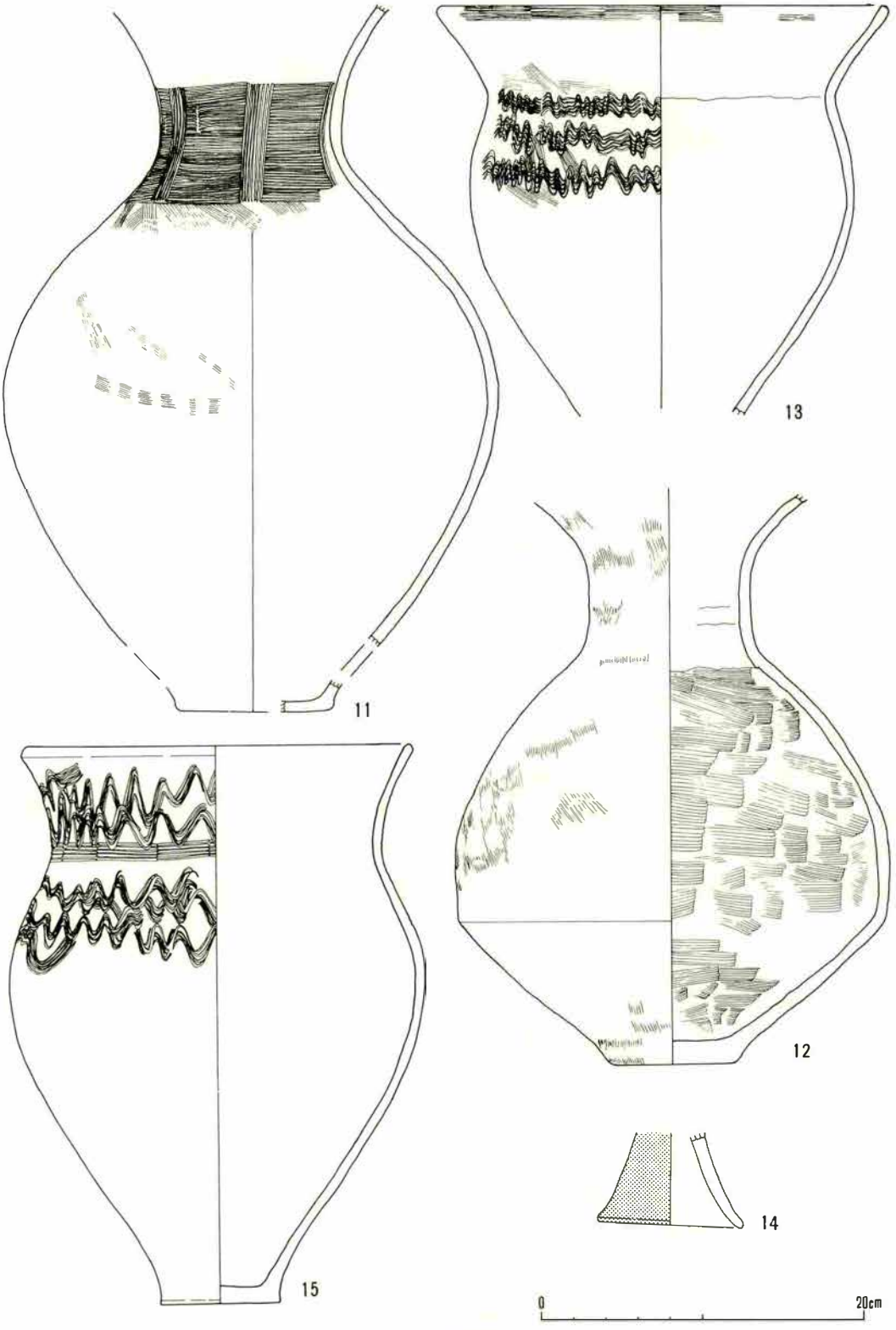
8号周溝墓　　第133図

周溝墓群北東側に位置し、10号周溝墓と接している。方形周溝墓で、方位はN－5°－Wを示し、東西4.7ｍ、南北5.2ｍの規模である。方台部は、東西3.3ｍ、南北3.5ｍのほぼ正方形を呈し、土橋は南西偶に1箇所ある。各辺の溝の長さ、幅、深さは次の通りである。東4.5ｍ、70cm、20cm、西3.3ｍ、80cm、25cm、南3.1ｍ、90cm、25cmで、東南隅及び北東部に溝が浅い部分がある。出土遺物で一括品はない。主体部は長さ1.5ｍ、巾75cm、深さ35cmで、内部から遺物は出土しなかった。

9号周溝墓　　第134～137図

周溝墓群北東部に位置し、北東隅が地区外のため未調査となっている。本周溝墓は、東西13.4m、南北11.8ｍの規模をもつ方形周溝墓で、台状部は、南北8ｍ、東西8ｍのほぼ正方形を呈する。各辺の現存する長さは及び幅、深さは東で10.6m、2.4ｍ、70cm、西で8ｍ、3.2ｍ、78cm、南10.2m、1.9ｍ、60cm、北で9.6ｍ、2ｍ、80cmである。西辺溝の方位がN－28°－Wで、方台部中央より発見された主体部は、主軸と直交する方向に長軸を持つ。主体部は東西1ｍ、南北50cmの長方形で、深さ30cm程である。内部より出土遺物は無い。土橋は未調査地区に存在すると思われ、北東隅に位置するであろう。溝中に舟底形ピットが2箇所に見られ、北溝中のピットは長さ4.2ｍ、巾1.1ｍ、深さ10cm、東溝中のピットは長さ5.2ｍ、巾1ｍ、深さ20cmで東溝からは第137図21が出土している。なお溝中からは壷2個、甕1個体の一括土器が出土している。

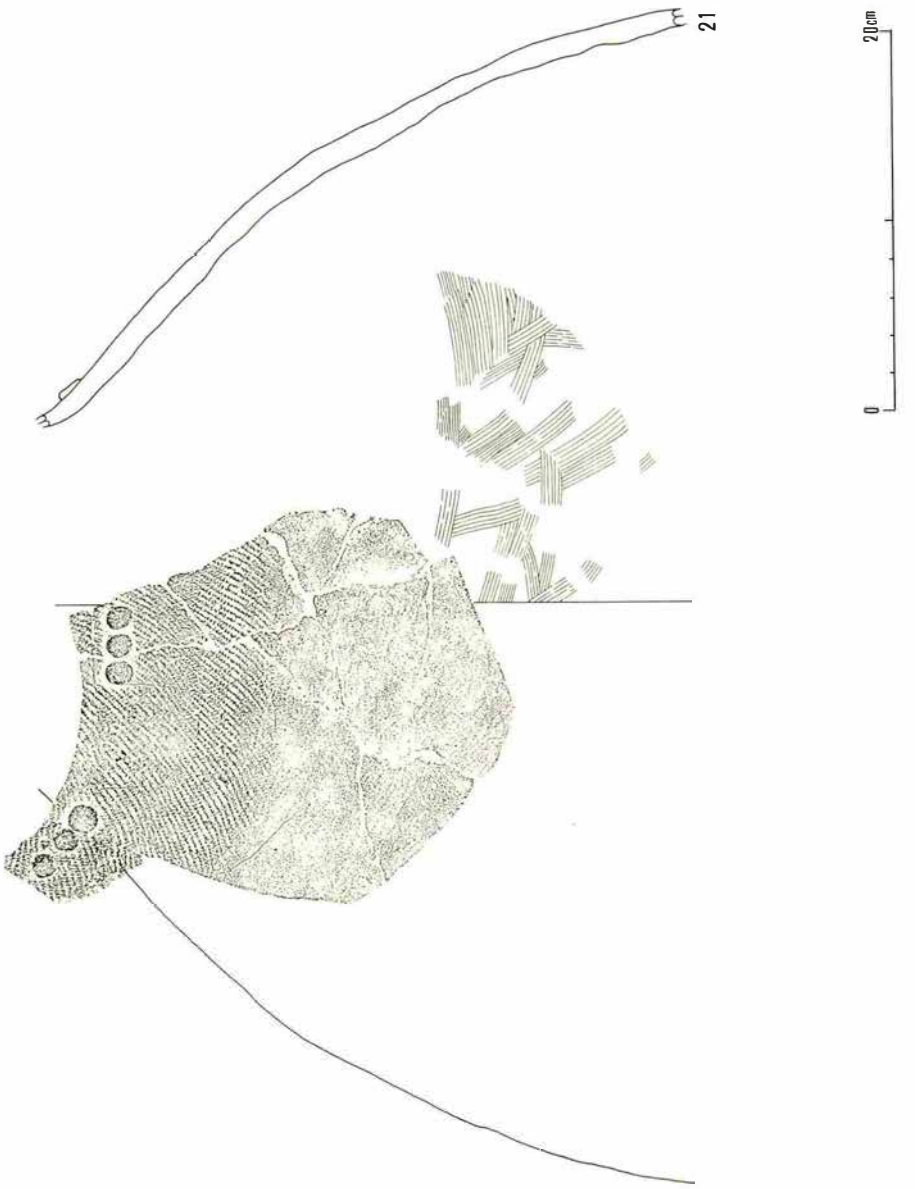
本周溝墓は、発掘作業中に確認するのに手間取った。それは、土層に黒色土層が厚く堆積しており、周溝部のプランがなかなか把握できなかった。ところが、掘り下げがすすむと黒色土中に黄灰色の島状に変色する区域が現われ、更に広がっていった。最上部の黄灰色砂質土を取り除くと、黒色土中に長方形の黄灰色砂質土が残る部分があり、同時に周溝外縁部も検出された。従って、方形周溝墓であると断定し、中央の長方形黄灰色部を主体部と考えることにした。



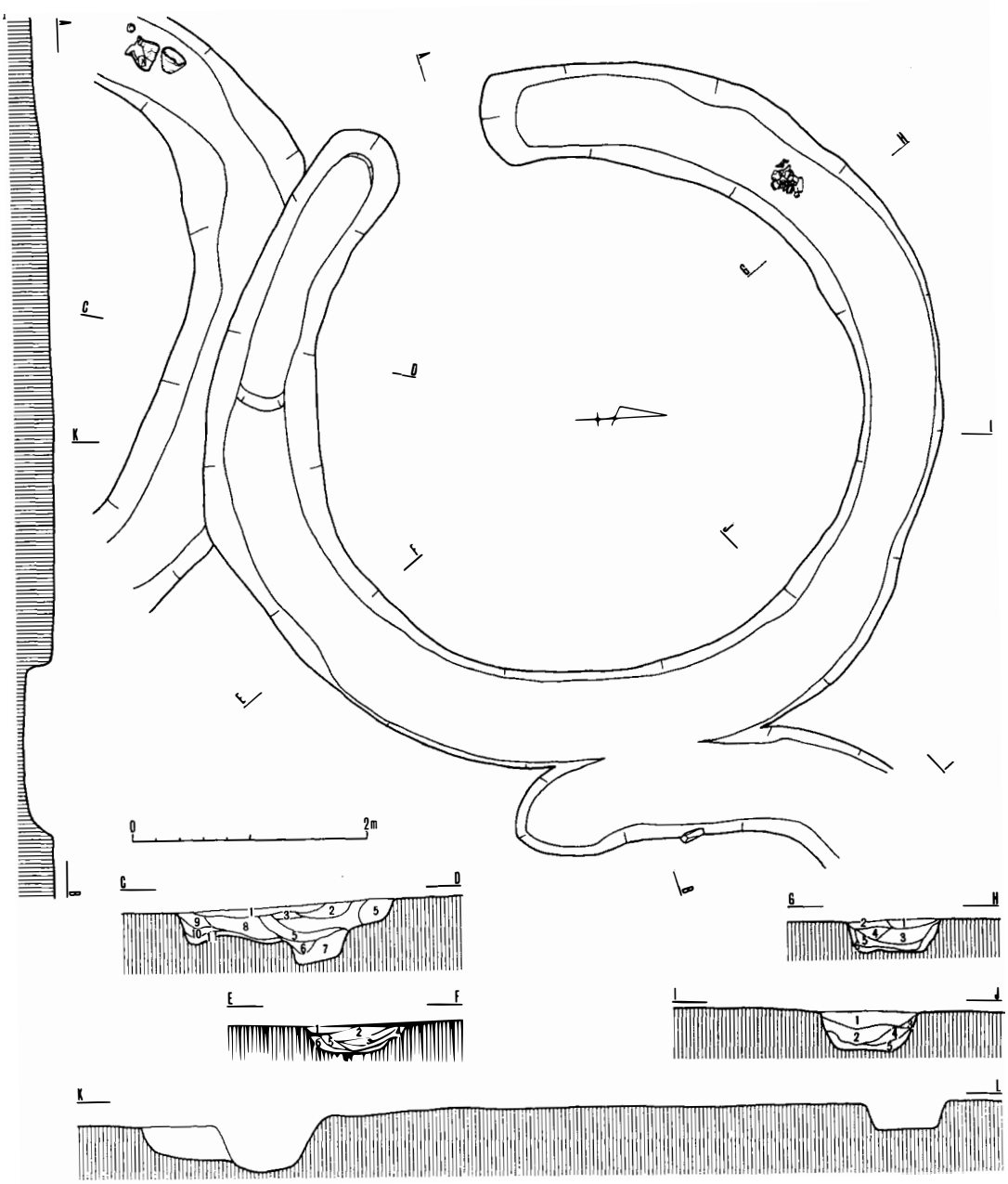
第136図　7、9、11号周溝墓出土土器

周溝内の土層も、黄灰色、黒色土、褐色土などが互層となり、断面観察でも、台状部から流れ出た土砂が溝を埋めたことが分る。

本周溝墓はマウンドを持ち、マウンドを一定程度盛り上げた後に主体部の土壙を掘って遺体を埋葬し、更に盛土したものであろう。主体部の無い周溝墓も、こうした構築方法によったものと推定され、後世に盛土が削平されてしまったものであろう。



第137図　9号周溝墓出土土器



E－F 土層説明

1. 黒色土層
2. 黒褐色土層
3. 暗灰褐色土層
4. 黄褐色土（地山）
5. 暗黒褐色土層
6. 黒褐色土層

C－D 土層説明

1. 黒色土層
2. 砂質黒褐色土層
3. 灰褐色土層
4. 暗灰褐色土層
5. 黒褐色土層
6. 暗黒褐色土層
7. 黒褐色土層
8. 黒褐色土層
9. 黄褐色土層
10. 黒褐色土層
11. 黒褐色土層

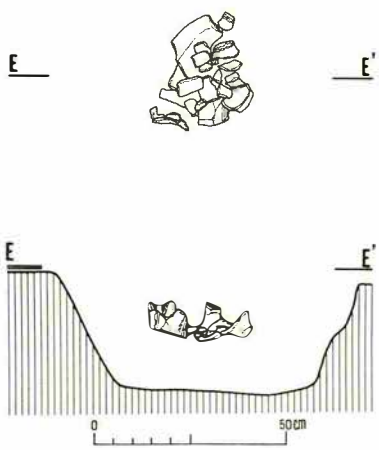
I－J 土層説明

1. 黒色土層
2. 暗黒褐色土層
3. 暗黒褐色土層
4. 黒褐色土層
5. 黒褐色土層

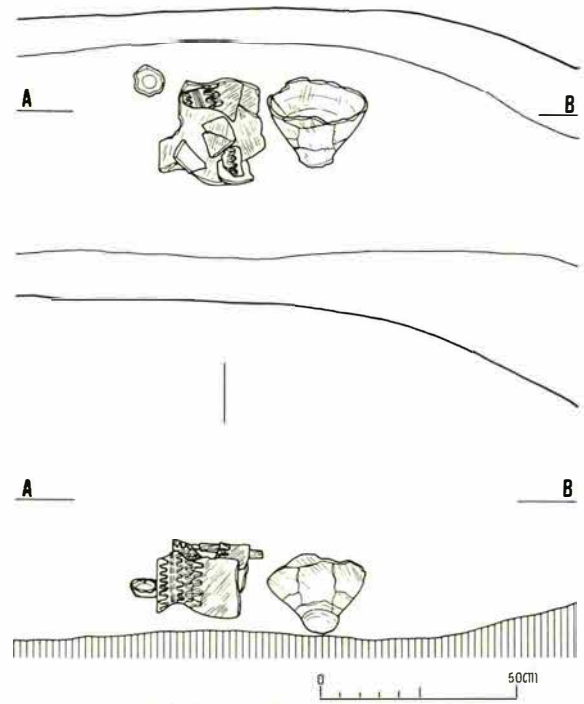
G－H 土層説明

1. 黒色土層
2. 1層より褐色がかった色調を呈す
3. 黒褐色土層
4. 3層より淡い色調を呈す
5. 黒褐色土層
6. 黒褐色土層

第138図　10号周溝墓平面図



第139図　10号周溝墓土器出土状態



第140図　11号周溝墓土器出土状態

10号周溝墓　　第 138 ・ 139 図

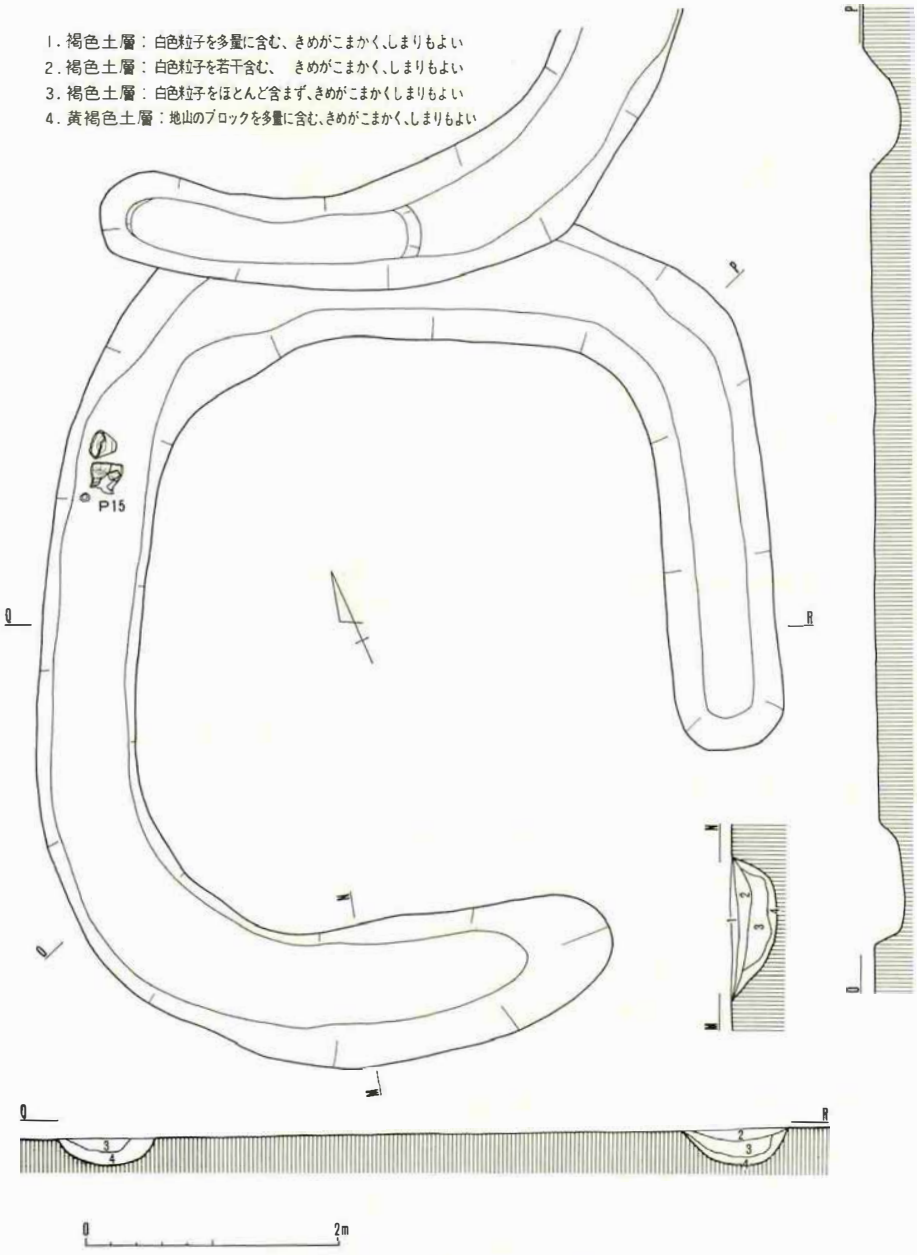
9号方形周溝墓の南に位置する円形周溝墓で、美しい円を描き、土橋は南西方向に設けられる。東西径 6.1 m、南北径 6.3 m、台状部の東西径 4.35 m、南北径 4.65 mで、土橋の幅は80cmである。溝の幅と深さは、東で80cm、27cm、西80cm、35cm、南1 m、1 m、北70cm、22cmで、土橋南の溝に舟底形ピットがある。ピットの長さは 2.2 m、巾35cm、深さ15cmである。主体部は不明。11号周溝墓と8号周溝墓の溝が本遺構の溝と重複する。出土遺物は、溝内北西部より甕が出土しているが、覆土中である。

11号周溝墓　　第 136 ・ 140 ・ 141 図

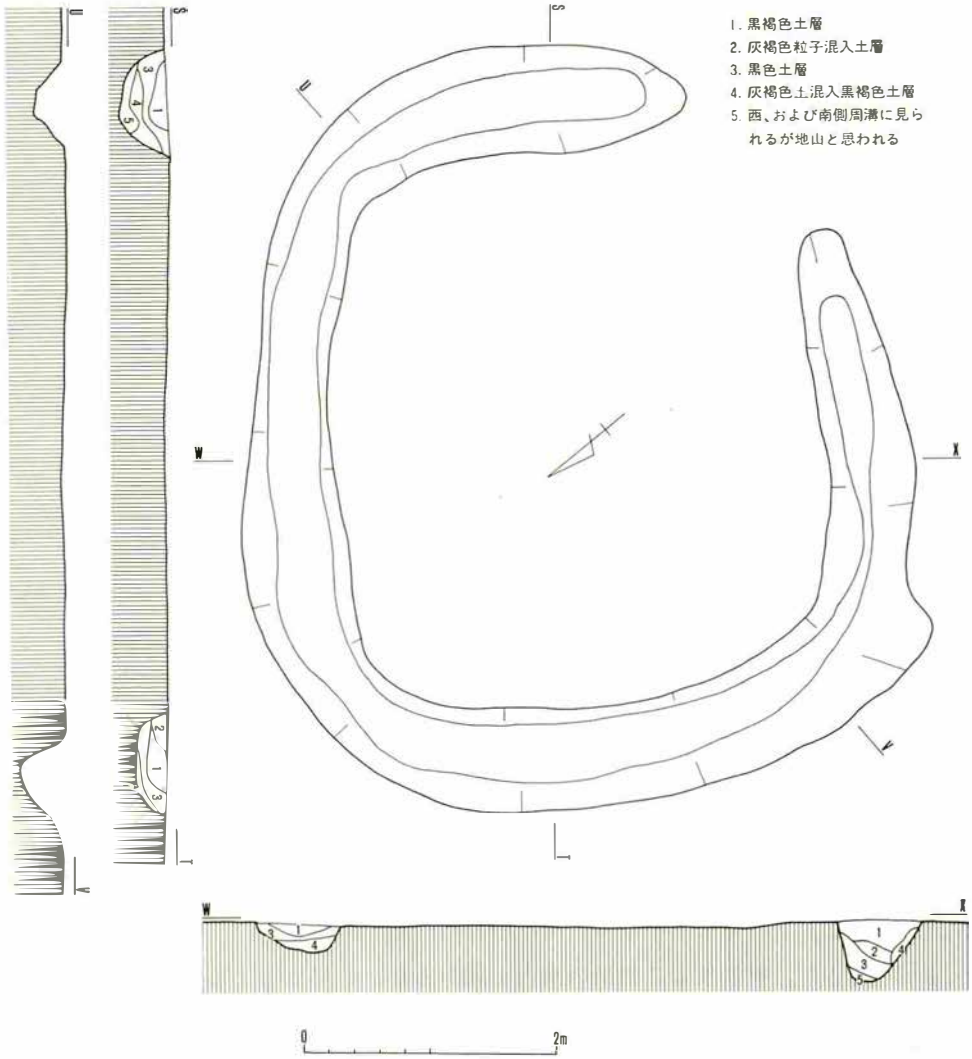
周溝墓群中央部に位置し、10号周溝墓と重複している。方形を呈し、東西 5.8 m、南北 6.9 mの規模をもち、台状部は東西 4.2 m、南北 4.65 mの隅丸方形で、西辺溝の方位は、N－17°－Eを示す。各辺の長さ、幅、深さは次のとおりである。東 3.8 m、90cm、30 m、西 5.6 m、75cm、22cm、南 4.1 m、1.14 m、20cm、北 5.1 m、1 m、25cm。溝の断面は舟底状で、台状部側の方が直立に近い角度で立ち上っている。覆土は褐色土で、溝北西部から甕が1個出土している。土橋は南東隅に1箇所あり、幅は 1.5 m である。主体部は検出できず、盛土状態も不明であった。

12号周溝墓　　第 142 図

周溝墓群北側に位置し、13号周溝墓及び14号周溝墓と1つのグループを形成している。若干長方形の周溝墓で、東西 6 m、南北 5.2 m で、台状部は東西 4.4 m、南北 3.8 m の規模である。溝の太さはほぼ一定しているが、西南の隅で外側に若干広がっている。各辺の溝・長さ、巾、



第141図　11号周溝墓平面図



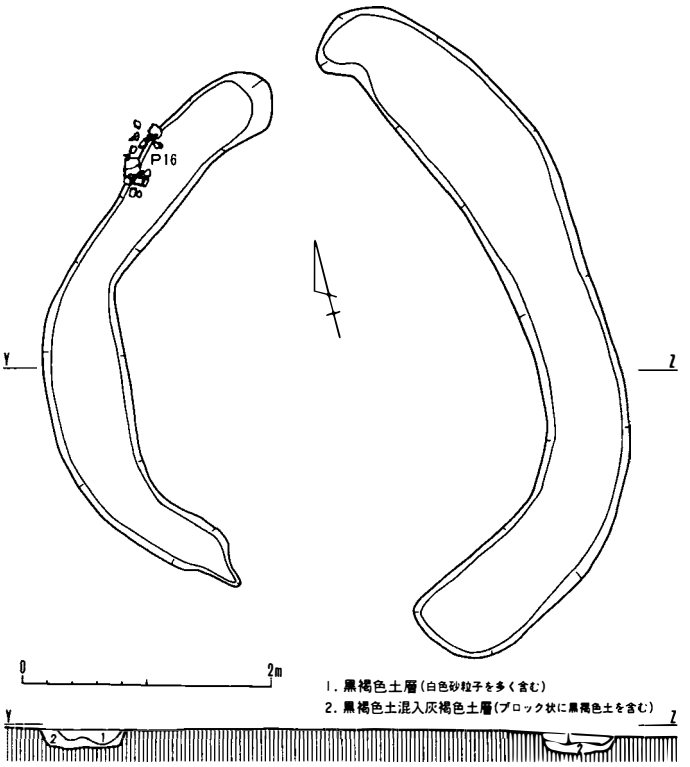
第142図　12号周溝墓平面図

深さは次のとおりである。東溝は3ｍ、8.5ｍ、深さ35㎝、西溝は4.5ｍ、80㎝、35㎝、南溝は3.7ｍ、70㎝、50㎝、北溝は5.2ｍ、巾75㎝、20㎝である。西辺溝の方位はＮ－33°－Ｅを示している。土橋は南隅にあって、幅は1.4ｍである。主体部は無く、台状部の盛土も確認されていない。各溝はレンズ状に土が堆積しており、長時間かかって埋没したことがうかがわれる。出土品は少なく、覆土中から土器片などが出土している。

13号周溝墓　第143・148図

周溝墓のほぼ中央に位置し、12号周溝墓、14号周溝墓と近接し、同一グループを形成する。Ｌ字形の溝を向い合せに組み合せた方形周溝墓で、土橋が2箇所存在する。周溝は相当に歪ん

でおり、一見すると円形周溝墓のような様相もあるが、各溝はL字形を意識して造られており、方形周溝墓としてよいであろう。土橋は南と北の隅に1箇所づつあり、北は45cm、南は1.4ｍの幅がある。東の溝の長さは全長で約6.3ｍ、西溝は49ｍで、各々の幅、深さは、東で65～85cm、15cm、西で40cm～70cm、15cmである。台状部には主体部が無く、溝中にも舟底型ピットはない。西溝の北側に甕一括が出土している。土橋と土橋を結ぶ線の方位はＮ－6°－Ｗである。



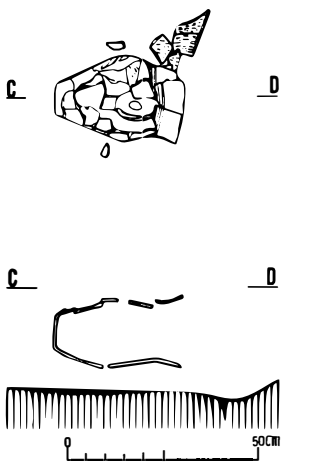
第143図　13号周溝墓平面図

甕は底部を欠き、土器の歪みが激しいもので口縁は波うっている。内外面共にナデ整形され、文様は付けられていない。

14号周溝墓　第144・145・148図

周溝墓群中北側に位置し、12号周溝墓、13号周溝墓と同一グループに属する。プランは不整形で、溝は巾約70cmで、深さ10～20cmであるが、東側には2箇所の溝内土壙があり、1箇所には甕が横位に置かれた状態で出土している。この部分の溝は幅が広く、土器出土部分で巾1.3ｍ、もう一箇所の舟底形ピット部分で巾1ｍ、深さ30cmである。台状部は卵形をしており、主体部は検出されていないが、不整形土壙が台状部に2基ある。おそらく本遺構とは別の時期であろう。

土橋は南東部に1ケ所あり、巾1.2ｍの間隔がある。溝中より出土した甕は、ほぼ完形に復元できたもので、頸部には簾状文、胴部には刷毛目が籠目状に施されたものである。又この甕は、溝底面より若干浮いている。

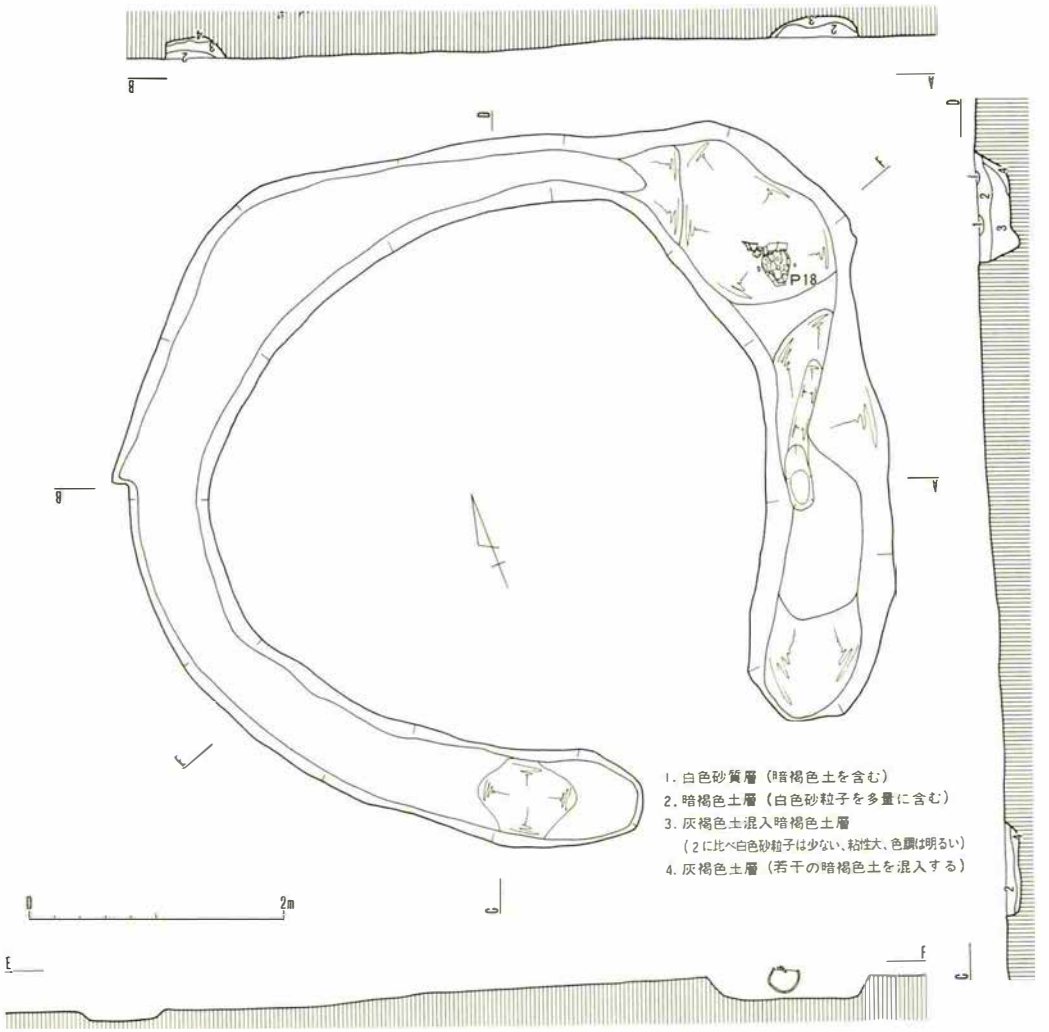


第144図　14号周溝墓土器出土状態

15号周溝墓　第146図

周溝墓群中最も西の低い箇所にあり、他の周溝墓と離れている。又、最も小型のものとして注目してよいものであろう。

西辺溝の方向を主軸とすればＮ－39°－Ｗの方位を示す方形周溝墓で、規模は東西3.7ｍ、南



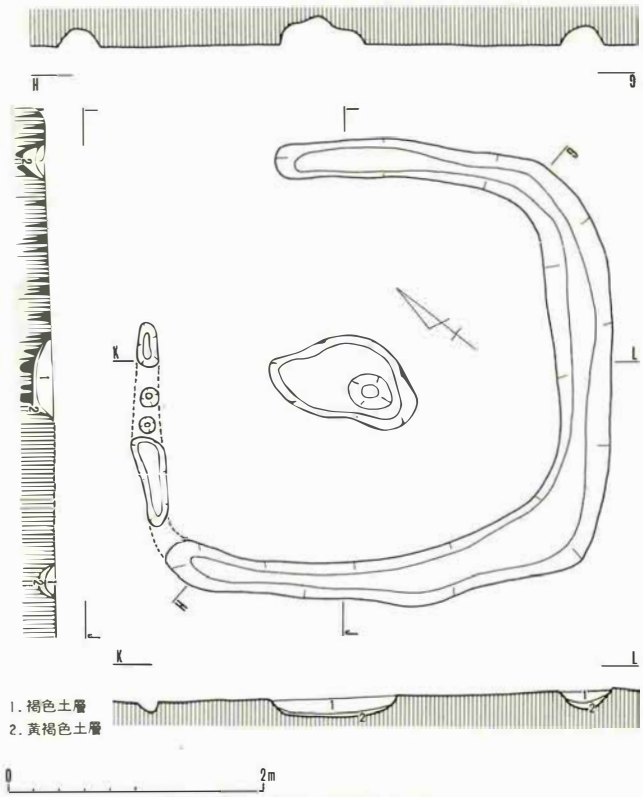
第145図　14号周溝墓平面図

北3.8ｍのほぼ正方形で、台状部は東西３ｍ、南北3.1ｍである。各辺の溝の長さ、巾、深さは、東辺で2.3ｍ、巾30cm、深さ20cm、西辺で3.4ｍ、巾30cm、深さ15cm、南辺で3.2ｍ、巾45cm、深さ16cm、北辺で２ｍ、巾25cm、深さ10cmである。ただし、北辺溝は極て浅く、点列状に小ピットが連続し、かろうじて溝とみなすことができる。

土橋は北側の隅に１箇所あって、溝と溝との巾は1.6ｍの間隔がある。主体部は台状部中央に位置し、長軸は110cm、短軸66cm、深さ16cmであるが、遺物は無い。又、土壙内に小ピット（直径25cm）がある。出土遺物は小破片が若干あるのみである。

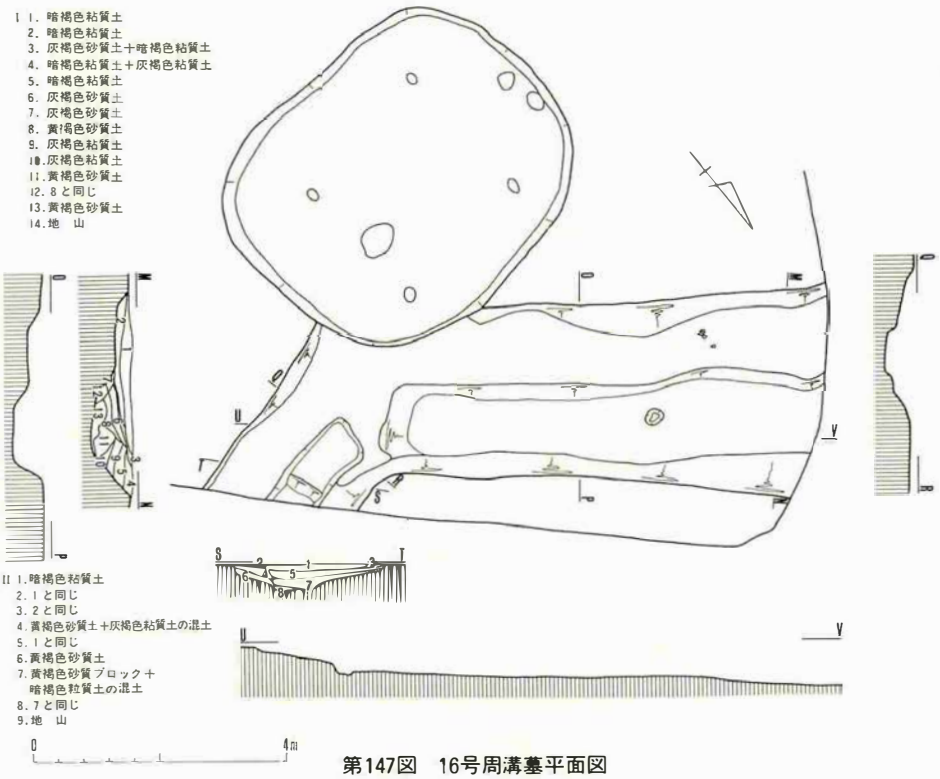
16号周溝墓　第147・148図

周溝墓群北西部に位置し、21号住居と重複する。21号住居が埋没した16号周溝墓の溝を切って構築されているようである。又、この周溝の大部分は調査地区外にあって、その詳細は不明であるが方形周溝墓であろう。現存する溝はＬの字に曲っており、発掘区に沿った方向で８ｍ



第146図　15号周溝墓平面図

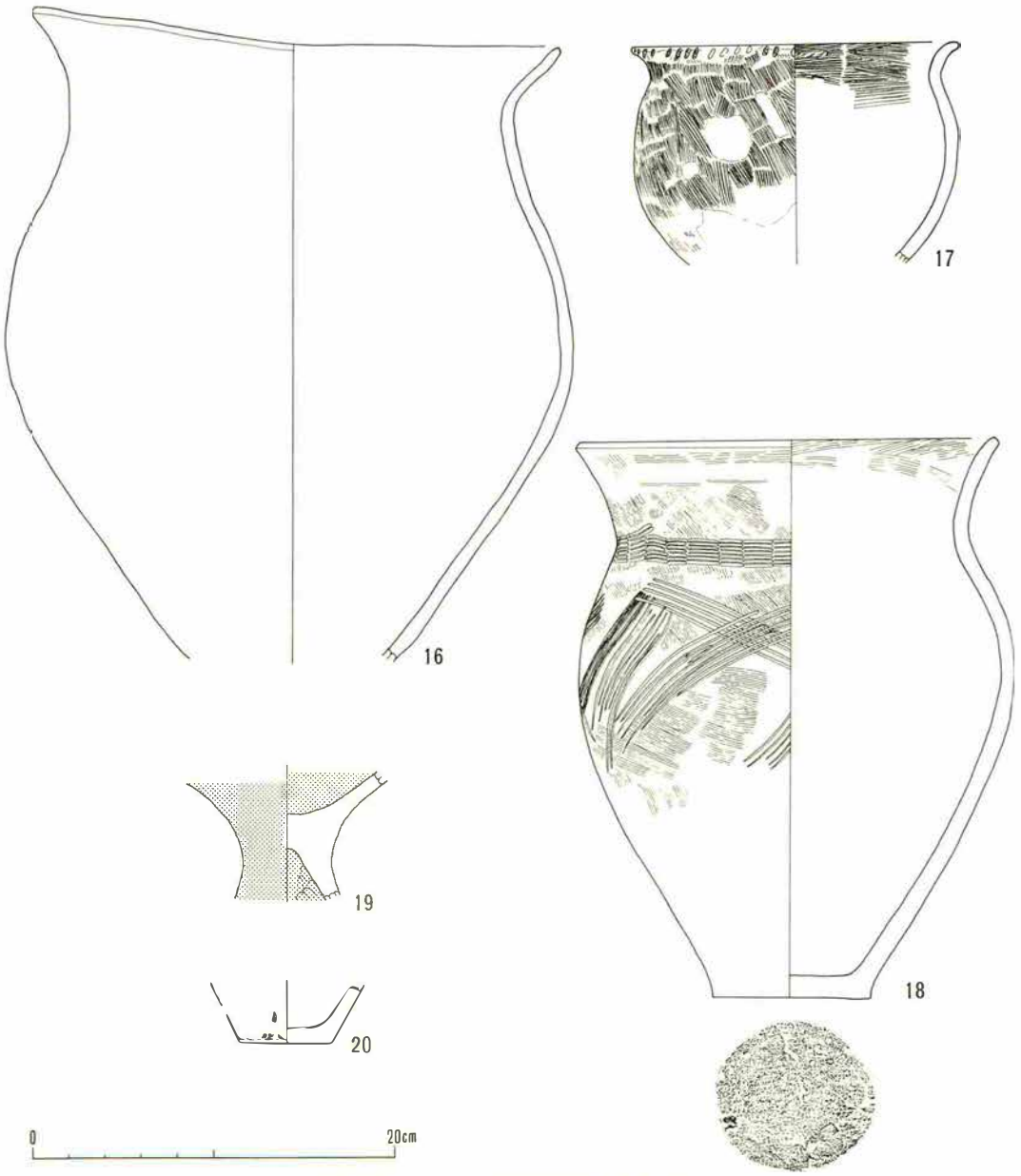
東側へ曲って３ｍが確認された。溝の巾は北側で3.5ｍ、深さ70㎝、東側で2.6ｍ、深さ40㎝である。溝の巾で３ｍを超えるものは本周溝だけで、６号周溝より規模が大きいと考えられる。又、溝は２段及至３段に掘り込まれ、西側溝中には、巾1.2ｍ、深さ10㎝の溝が台状部側にあり南側の溝中にも巾70㎝、深さ10㎝の溝が台状部に沿って掘られている。溝は北側に深くなっており、屈曲部が最も浅く20㎝である。溝中の覆土はレンズ状の堆積をしているが、完全に埋った時点で１回掘り直しをしたと考えられ、下層溝より立ち上る面が上層にまで達している。覆土中の出土遺物は高坏、甕破片がある。



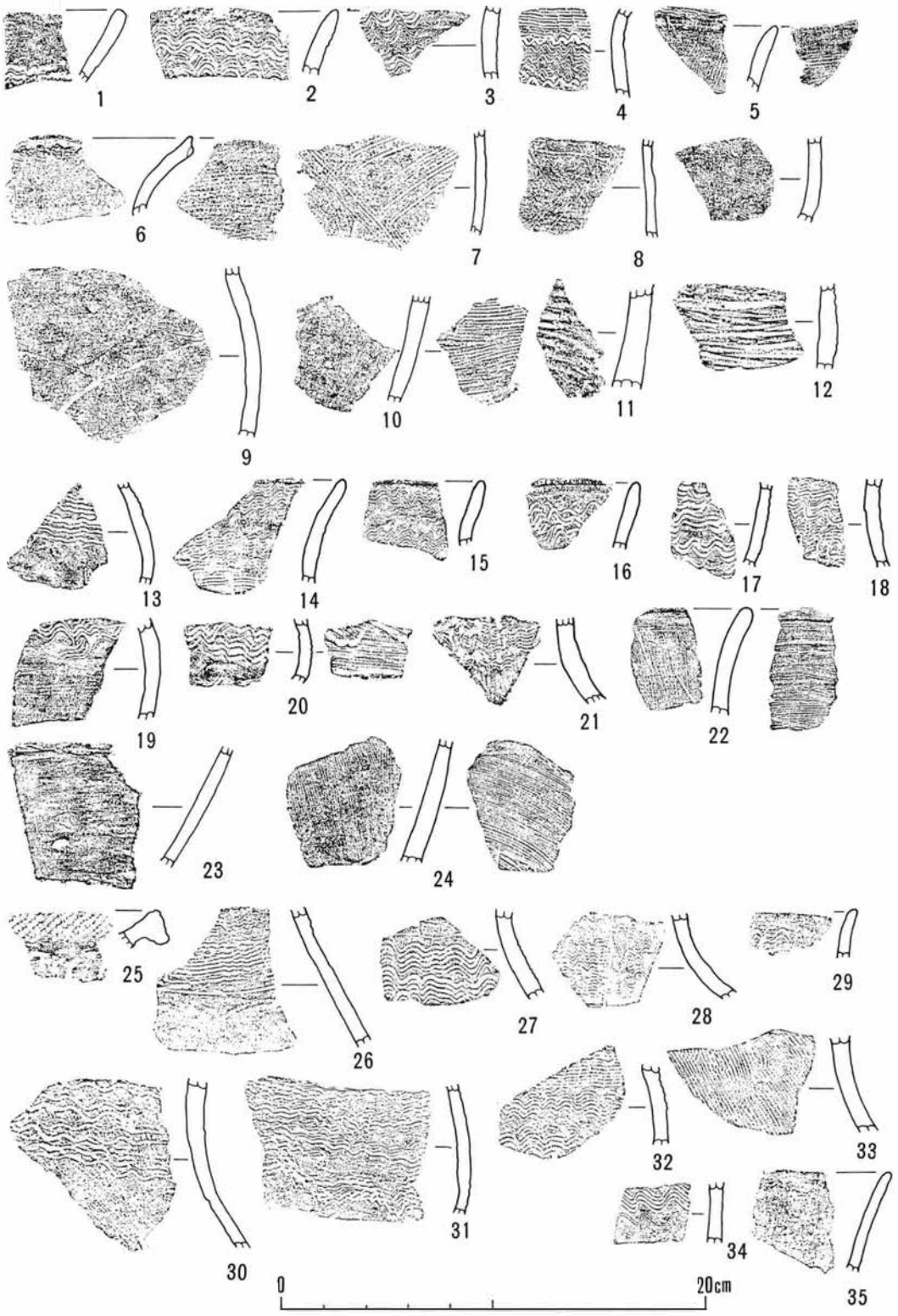
第147図　16号周溝墓平面図

17号周溝墓　第153図

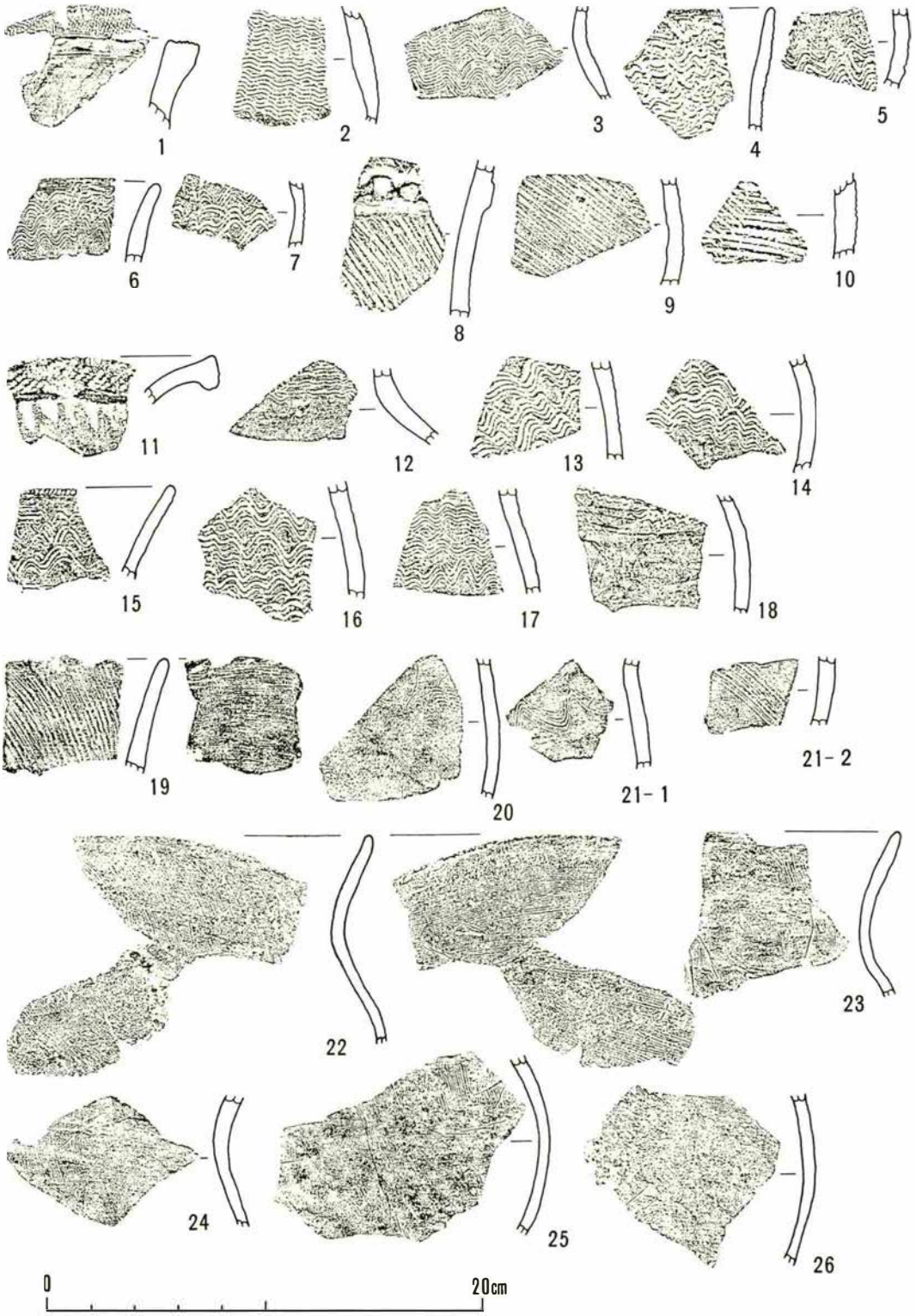
周溝墓群最北部に位置し、その大部分が調査地区外に存在している。調査区内にはL字形の溝が検出されただけであるので、方形周溝墓として確定できるかどうか分らないが、周溝墓群が分布する範囲から見ると、この遺構も周溝墓区域に含まれるであろう。溝の巾と深さは、北側で3ｍ、深さ30㎝、東側で1.4ｍ、深さ1.5ｍである。溝は台状部側が立っており、外側は緩傾斜である。出土遺物は覆土中からもほとんど採集されていない。



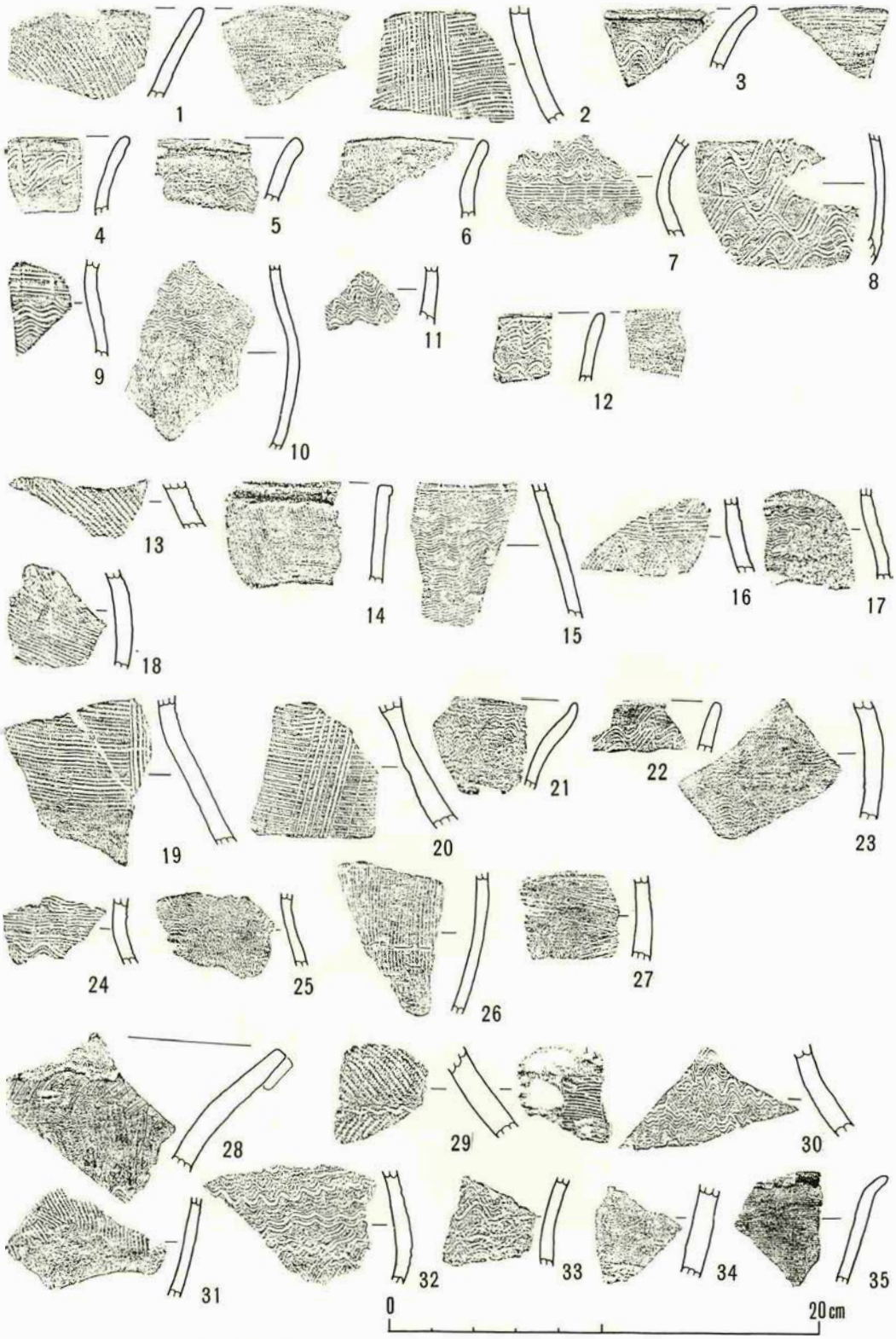
第148図　13、14、16号周溝墓出土土器



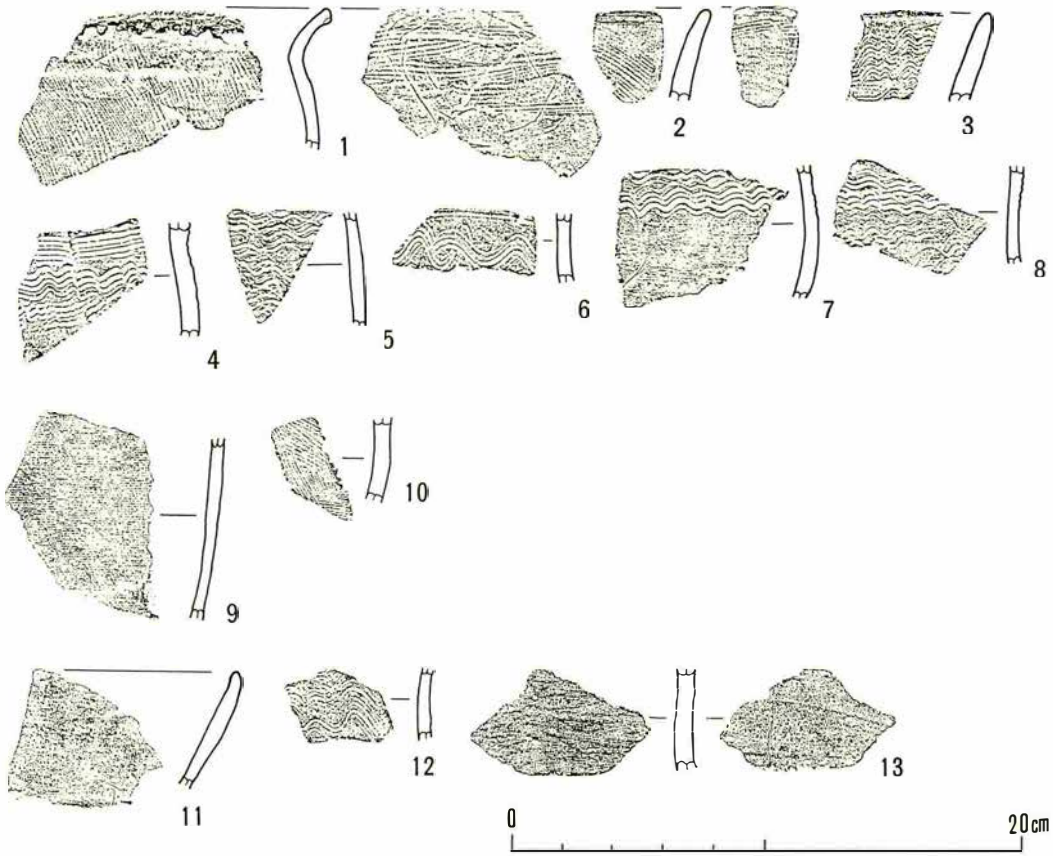
第149図　1（1～12）、3（13～24）、5（25～35）号周溝墓出土土器



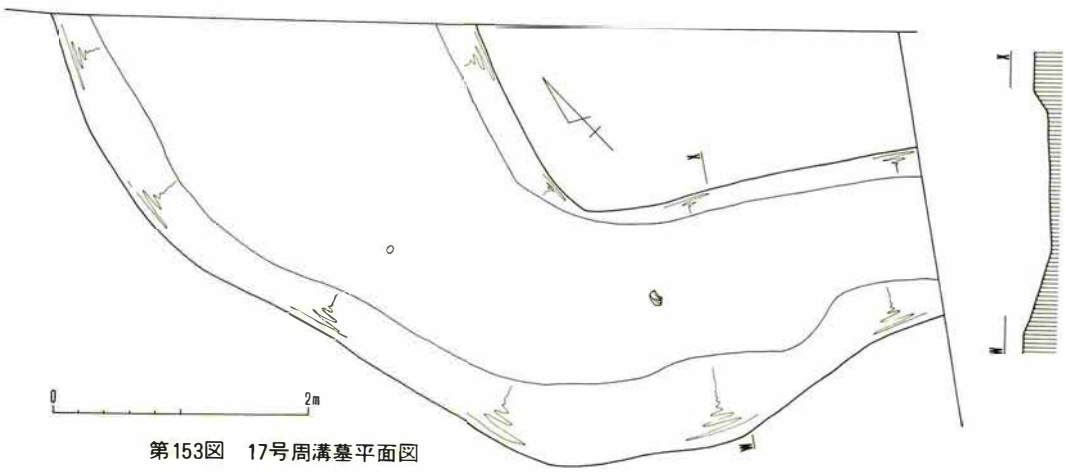
第150図　6（1～10）、7（11～18）、8（19～21）、9（22～26）号周溝墓出土土器



第151図　9（1～12）、10(10～15)、11(16～24)、13(25～32)号周溝墓出土土器



第152図　14(1～8)、15(9～10)、16(11～13)号周溝墓出土土器



第153図　17号周溝墓平面図

周溝墓出土遺物について

各周溝墓から土器が出土するものと、出土しないものがあり、溝底面に接して出土する場合と、覆土中に存在するものがある。

これは次のように分けられる。

- 溝底面出土－2、5、9、11、13、14
- 覆土中出土－1、3、4、7、9、10

なお、出土遺物の内容は次の第4表のとおりである。

第3節　柱列・溝（第154～164図）

本遺跡から検出された柱列は2基で、掘立柱建物址は発見されていない。溝は15本検出されている。このうち12溝は弥生時代のV字溝で、集落を区画する為の溝であるが、6溝、13溝は弥生時代の遺構でありながら性格は不明である。

その他の溝は時期も近世に掘られたものもあるようで、弥生時代水田址に伴う溝はないようである。

挿図として掲載したものについて、順次説明する。

柱列

1号柱列（第154図）

発堀区の最も北西部に位置し、85号土壙と重復する。柱列は南北に並び、北から6本の柱が、1.15m、0.4m、0.95m、1.2mの間隔で並んでいる。6本のうち中央の4本が2本づつの組合せになっており、柱列の南には長径1.1m、短径0.9m、深さ20cmの土壙がある。

2号柱列は39号住居址西側に位置し、2本の柱穴がほぼ南北に並ぶ。柱穴の直径は30cm～35cmで、深さは50cmである。この2本の柱穴底部には柱根が残っており、どちらも南東方向に傾斜して柱根が検出されている。

溝

13号溝（第154図）

12号溝の南側に位置し、4号方形周溝墓の西側の溝を切っている。長さ5.5m、巾55cm～45cm、深さは40cmを最深とし、西側は浅くなる。出土遺物は弥生時代の土器片及び縄文時代の中期末葉の土器片等が多量に出土している。

2、3、5、7号溝（第155図）

1号方形周溝墓の北側に集中してあり、2号、3号溝は平行して掘られ、5号は2本と直交する。2号溝はU字形になって、5号住居と重復し、3号住居は西側へ先端が曲る。2号溝は巾60cm、3号溝は40cm、5号溝は25cmである。7号溝は5号住居の南側から逆L字形に伸びた溝で、長さ4m、深さ40cmを測る。これらの溝の性格は不明、時代も明らかではなく、中世以降と考えられる。

第4表　周溝墓出土土器観察表

No.	遺　構	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
1	1周溝 (124図)	高　　坏	1) 2) 3) 4)	ヘラ磨き	外面、ヘラ磨きの後赤色塗彩 杯部、内面、ヘラ磨きの後を 赤色塗彩。 脚部、内面、ヘラ磨き。	外面、杯部、内面が 赤色塗彩 脚部、内面黄褐色密 焼成良好
2	1周溝	高坏(坏部)	1) 14.2 2) 3) 4)	ヘラ磨き	内、外面ともヘラ磨き。その 後、赤色塗彩。	赤色塗彩 密（砂粒少々含む） 焼成良好
3	2周溝 (124図)	壺	1) 18.2 2) 30.8 3) 6.5 4) 20.2	ヘラ磨き ハケ目	外、頸部に7本単位3段の横、 ハケ目、その他の部分ヘラ磨 きの後を赤色塗彩。 内、口縁部ヘラ磨き。その後、 赤色塗彩。 頸部より下部はハケ目、底部 穿孔跡あり。	赤色塗彩 やや密 焼成良好
4	3周溝 (124図)	壺	1) 2) 3) 4) 28.2	ヘラ磨き 綾杉状の刺穴文 ハケ目	外、頸部、綾杉状の刺穴文が 施されている。その他の部分 ヘラ磨き。内輪積跡あり、整 形は指でなでてある。	茶褐色 やや粗い 焼成良好
5	3周溝	高　　坏	1) 2) 3) 4)	ヘラ磨き	内、外面ともヘラ磨き	茶褐色 粗い 焼成良好
6	3周溝	甕	1) 2) 3) 6.2 4)	ヘラ磨き ハケ目	外面、ハケ整形の後をヘラ磨 き。 内面ヘラ磨き。	外、暗灰褐色 内、黄褐色 やや粗い 焼成良好
7	3周溝	甕	1) 16.9 2) 3) 4) 15.1	ヘラ磨き ハケ目	外、上部は縦方向に、下部は 斜め方向にハケ目が施されて いる。 内、頸部を境にして、上部は 横方向のハケ目が、胴部はヘ ラ磨きが施されている。	外、赤褐色 内、暗褐色 やや粗い 焼成良好

No.	遺構	器形	法量	文様	技法	備考
8	4周溝 (129図)	壺	1) 19.5 2) 43.1 3) 10.0 4) 21.1	縄文 口唇折返し部刻み文 ハケ目 ヘラ磨き	外、T字口縁であり、口縁の折返し部分に縄文、刻み目があり、刻み内にハケ目あり、頸部に単位2㎝巾のものが3段にわたり施文。他は全体に縦方向にハケ目、その後ヘラで磨いている。 内面は、頸部に横方向のハケ目がみられる。他はヘラ磨き。 底部近くは指頭痕らしきあとあり。	赤褐色 やや密 焼成良好
9	5周溝 (129図)	壺	1) 2) 3) 10.7 4) 32.8	ハケ目 ヘラ磨き	外、内ともハケ整形のあとヘラ磨きと思われる。 外は、その後赤色塗彩跡あり、但し剥離の為不明。 内、頸部にハケ目跡あり。	赤色塗彩(剥離)がひどく部分的のみ密。 焼成良好
10	5周溝	甕	1) 19.4 2) 21.4 3) 6.6 4) 17.8	ハケ目 ヘラ磨き	外面、胴中部まで上から縦方向にハケ目整形、下部は縦方向のヘラ磨きが施されている。 内面、口縁部、横方向にハケ目整形、頸部は横方向のヘラ磨き、胴部は縦方向のヘラ磨きが施されている。 底部、木葉痕	黄褐色 上部黒変 やや粗い 焼成良好
11	7周溝 (136図)	甕	1) 2) 3) 4) 30.8	櫛描T字文 ハケ目 ヘラ磨き	外面、頸部に櫛描T字文8本単位と思われる。施文されている。その他の部分はハケ整形の上をヘラ磨き。 内面は全体の表面が剥離していて不鮮明。	茶褐色 やや密 焼成良好
12	9周溝 (136図)	壺	1) 2) 3) 8.3 4) 27.0	ハケ目 ヘラ磨き	外、全体にハケ整形の上をヘラ磨き。 内、輪積痕が頸部にみられる。 口縁部ハケ整形の上をヘラ磨き、胴部ハケ目整形、	茶褐色 粗い(砂粒含む) 焼成良好

No.	遺　構	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
					全体的に磨耗と破損にて不鮮明。	
13	9周溝	甕	1）28.2 2） 3） 4）24.0	ハケ目 ヘラ磨き 櫛描波状文 ヘラ削り	外、口唇部にまでハケ目あり 全面、ハケ整形の上をヘラ磨き、頸部張部迄波状文、6本単位の3段。	黄褐色 やや密 焼成良好
14	9周溝	高坏(脚部)	1） 2） 3）9.0 4）	ヘラ磨き	内、口唇部に少々ハケ目あり、他部は横方向ヘラ削り整形 外面、ヘラ磨きの後を赤色塗彩、脚部内面、ヘラ磨き。	外、赤色塗彩 内、黄褐色 やや密 焼成良好
15	11周溝 (136図)	甕	1）23.8 2）34.9 3）7.5 4）25.5	ヘラ磨き 櫛描波状文 簾状文	外、全体ヘラ磨きの後頸部に簾状文5本単位、その上下(口縁部と胴上部）に櫛描波状文4～5本単位、右から左方向に移動、振幅は大きく重複しあっている。 内、ヘラ磨き、上部横方向、下部斜位方向。	黒褐色 やや粗い 焼成良好
16	13周溝 (148図)	甕	1）26.2 2） 3） 4）30.8	ヘラ磨き ハケ目	口唇部にハケ目少々あり、 外、口縁部、ハケ整形の上をヘラ磨き横方向に。胴上部、横斜方向にヘラ磨き。下部、縦方向にヘラ磨き。 内、全面横方向のヘラ磨き。	薄茶褐色（一部すす付着） 粗い 焼成良好
17	14周溝 (148図)	甕	1）16.0 2） 3） 4）17.8	口唇部刻み文 ハケ目 ヘラ磨き	外、口唇部に櫛による刻み目が施されている。他は全体ハケ目整形。 内、口縁部、ハケ整形。胴部、ハケ目の上をヘラ磨きされている。	茶褐色（すす付着） やや粗い 焼成良好
18	14周溝	甕	1）23.5 2）30.8 3）8.7 4）24.0	ハケ目 簾状文 籠目櫛描文	外、頸部に7本単位の簾状文胴部に太い籠目櫛描文らしきあり。その他はハケ整形、下部はヘラ磨き。 内、口縁部ハケ目、その他ヘ	茶褐色（焼むら） やや粗い 焼成良好

No.	遺　構	器　型	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
					ラ磨き。	
19	16周溝 (148図)	高　　坏	1) 2) 3) 4)	ヘラ磨き ヘラ削り	内、外面ともヘラ磨き、その上を赤色塗彩　脚部、内部にヘラ削り跡少々あり。	赤色塗彩 やや粗い 焼成良好
20	16周溝	甕	1) 2) 3)　5.0 4)	ヘラ磨き ハケ目	外、ハケ目整形の後ヘラ磨き 内、ヘラ磨き	茶褐色 粗い 焼成良好
21	9周溝 (137図)	壺	1) 2) 3) 4) 60.4	ハケ目 縄文 ヘラ磨き	外、頸部、縄文施文した上にボタン状貼付（直径1.2㎝）数個、下部はヘラ磨き。 内、ハケ目あり、剥離が多く不鮮明	茶褐色 焼むらあり 粗い 焼成良好

6号溝　（第156図）

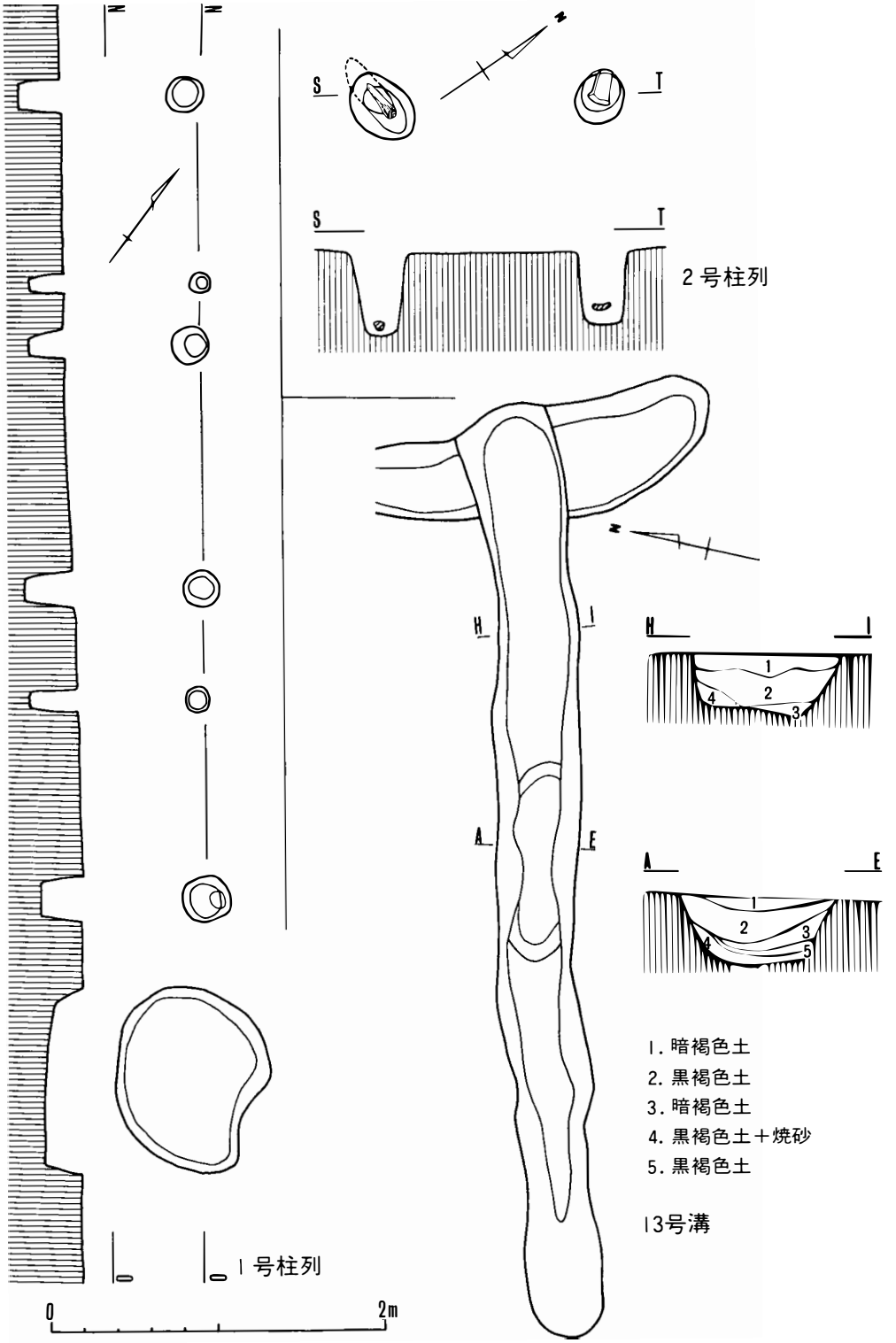
2号方形周溝墓北東側に位置し、東西に伸びている。長さ13.4ｍ、巾45㎝、深さは　東が浅く西側が深い。中央部で45㎝の深さがあり、断面は逆台形を呈する。覆土中より縄文中期、弥生時代の土器片が出土している。

12号溝　（第157図）

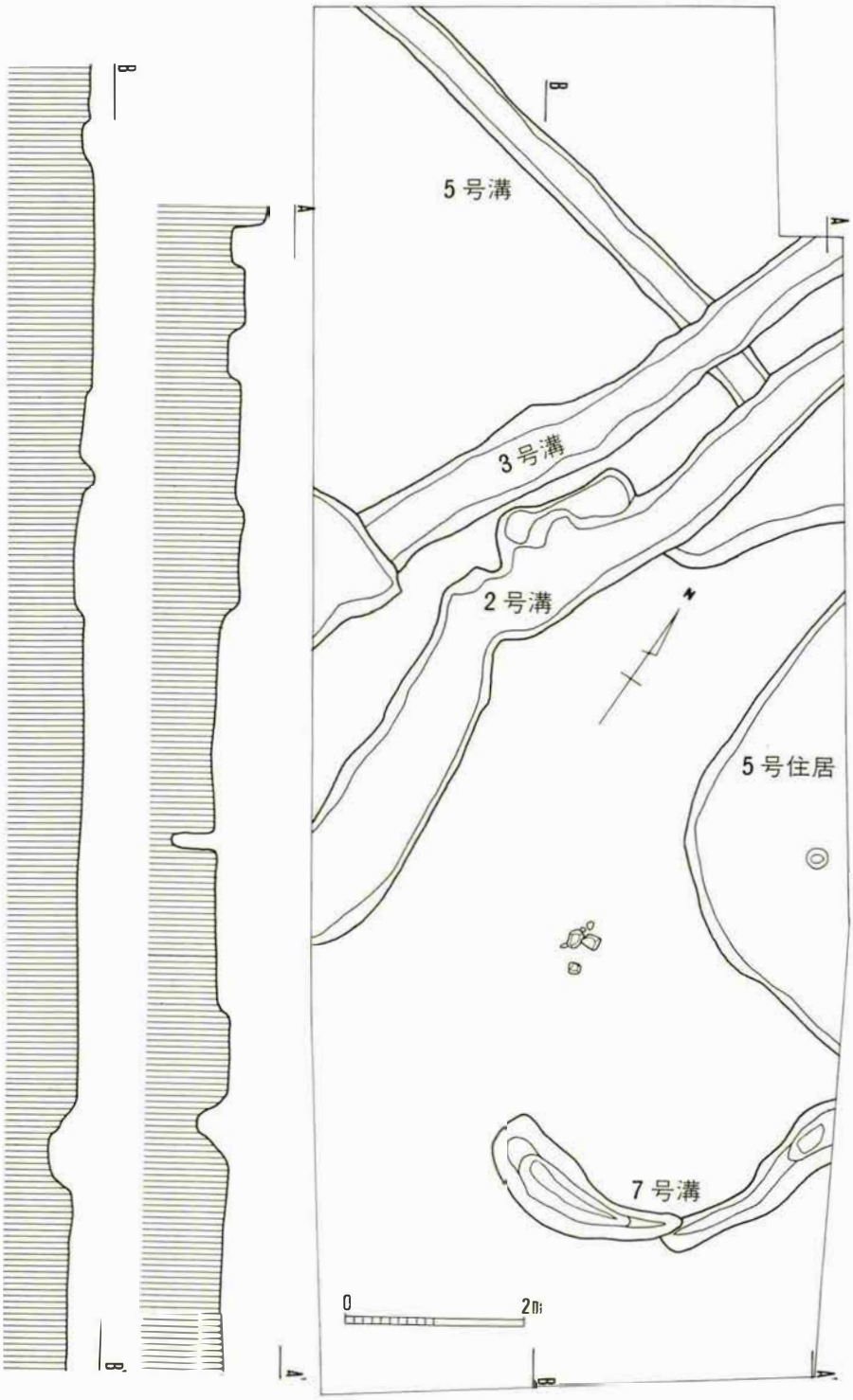
所謂Ｖ字溝で、弥生時代の南集落と北集落を分割している溝である。溝の巾は東側で、2.1ｍ、中央付近で２ｍ、西端で２ｍである。中央部よりやや西側が二又に分かれているが、３号周溝墓に接して止まっている。又、このすぐ西側では巾１ｍと最も狭くなっている。溝は直線ではなく、７号周溝墓の北側で、これを避けるように曲っている。溝中からは炭化木材、腐敗木、土器、焼土、灰、礫などが出土しており、住居群とほぼ同時期に埋没したことが想定できる。

14・15号溝　（第158図）

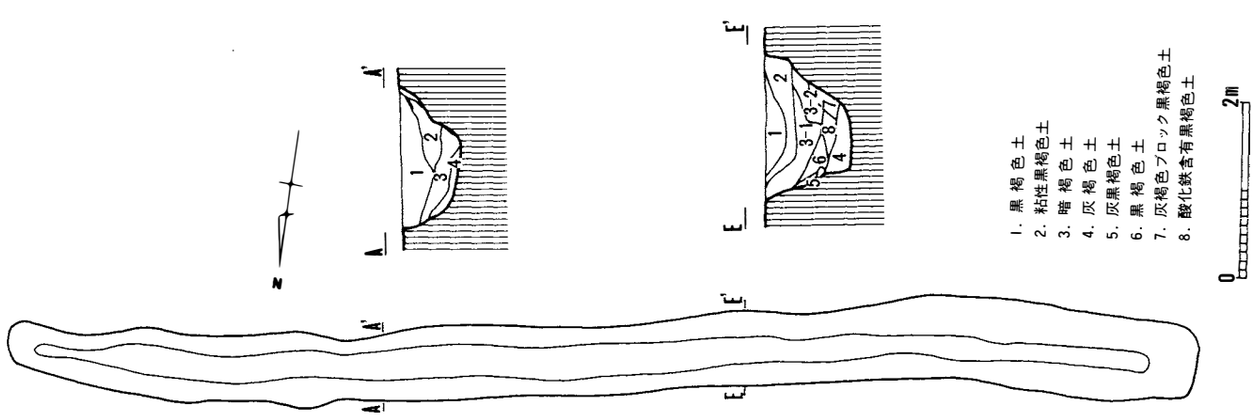
５号方形周溝墓台状部北側にあって、東西に２本並行して走る。15号土壙と重復している。断面土層から４号溝が古く、５号溝が新しい。14号溝の長さ5.3ｍ、巾80㎝、深さ50㎝、15号溝の長さ6.4ｍ、巾1.1ｍ、深さ30㎝である。



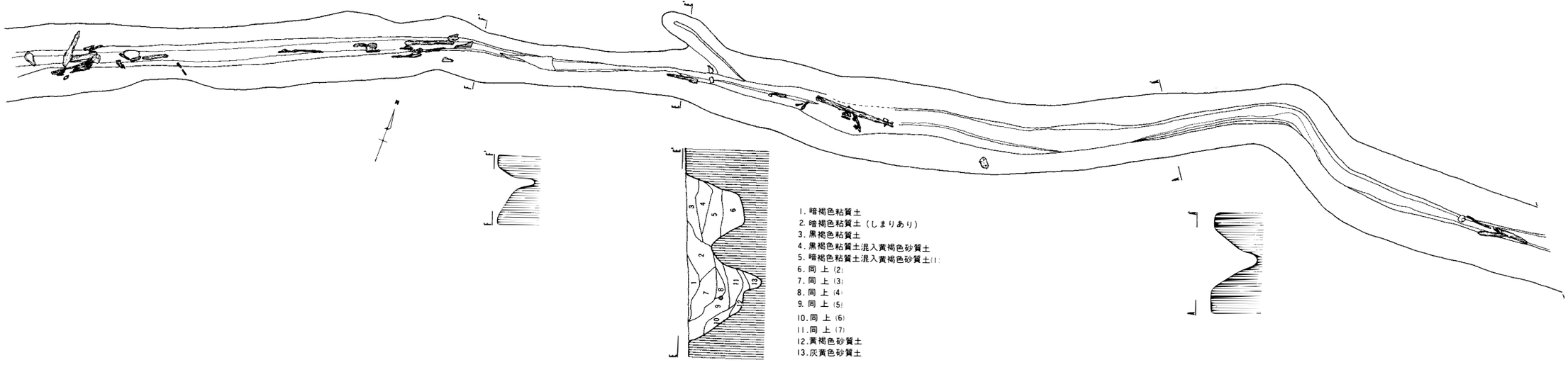
第154図　1 、 2 号柱列、13号溝平面図



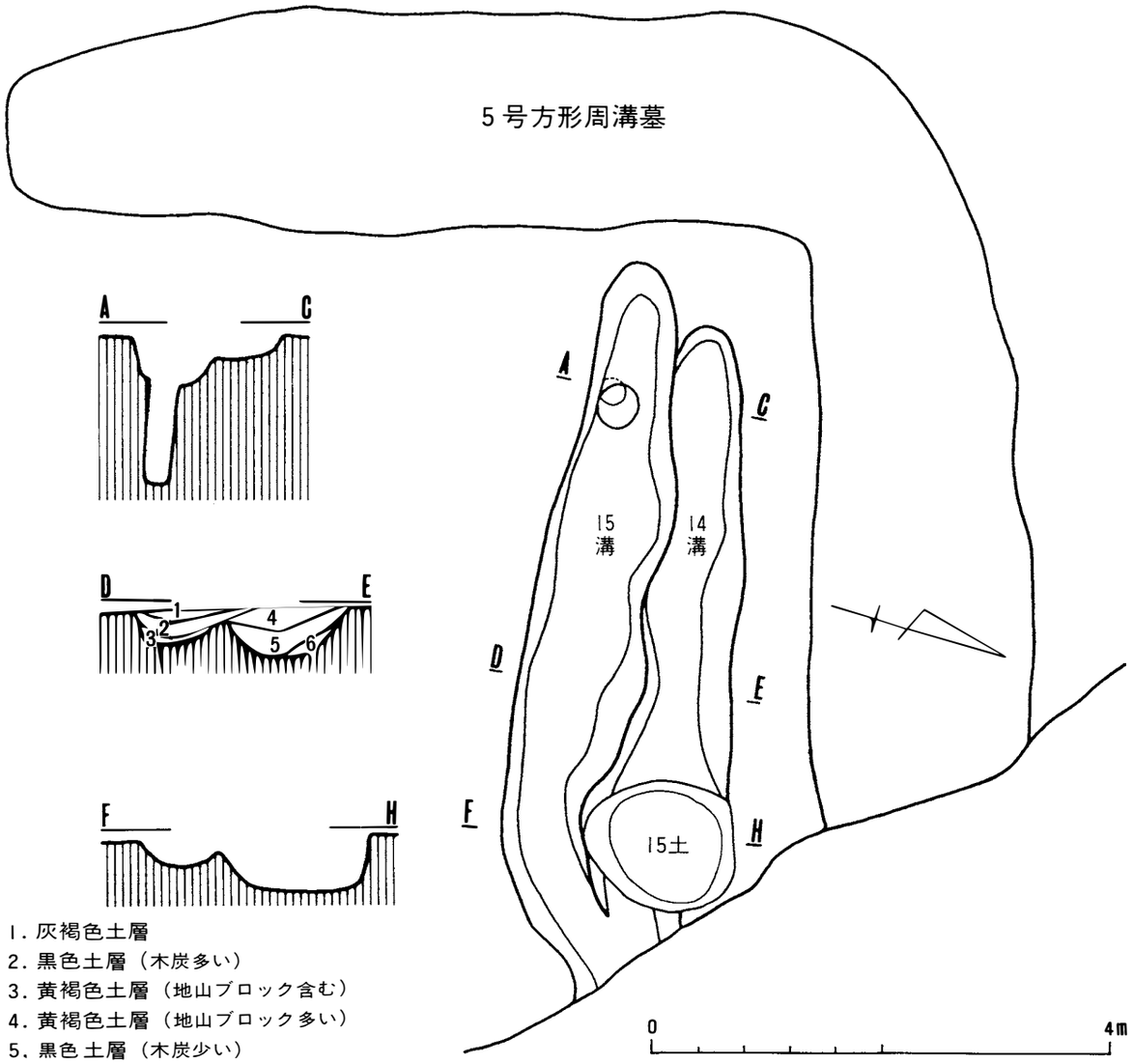
第155図　2、3、5、7号溝平面図



第156図　6号溝実測図



第157図　12号溝実測図

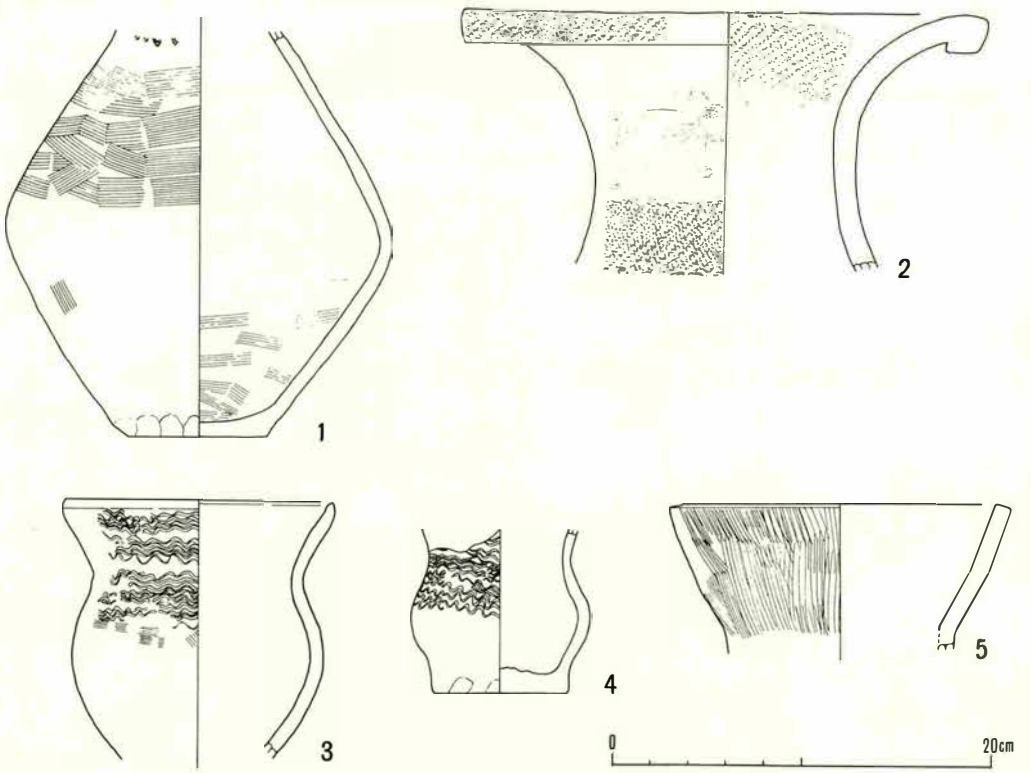


第158図　14、15号溝実測図

第5表　12溝出土土器観察表

1)口径　2)器高　3)底径　4)胴径

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
1.	壺	1) 2) 3)　7.5 4)　20.0	櫛描波状文 ハケ目 ヘラ磨き	外　頸部に若干波状が残っている。胴上部がハケ目、下部はヘラ整形 内　ハケ目の上をヘラ整形	褐色
2.	壺(口縁部)	1)　27.7 2) 3) 4)	ヘラ磨き 縄文	口唇、口縁共に丁寧な縄文の 外の頸部も同様縄文。他はヘラ磨き	褐色 やや粗い(砂粒含む) 焼成　良好
3.	甕	1)　14.0 2) 3) 4)	ヘラ磨き ハケ目 櫛描波状文	外　ハケ整形した上を口縁部から胴上部まで櫛描波状文、3本単位であるが不揃い 下部は、縦方向のヘラみがき	灰褐色 やや密 焼成　良好
4.	甕	1) 2) 3)　7.0 4)　9.5	ヘラ磨き 櫛描波状文	外　全面をヘラ磨き 頸部から胴上部まで櫛描波状文。底部に近い。下部に指頭痕あり 内　全面ヘラ磨き	暗褐色 粗い（砂粒含む） 焼成　良好
5.	壺(口縁部)	1)　18.0 2) 3) 4)	ハケ目 ヘラ磨き	外　ハケ目整形 内　ヘラ磨き 両面　縦方向に	茶褐色 やや粗い 焼成　良好



第159図　12溝出土土器

第４節　特殊遺構（第 160 ～ 164 図）

特殊遺構と命名したものは、発掘調査中に単独埋甕が出土したり、集石遺構を伴う土壙であったり、土器を多く含む土壙、又は多量の遺物が出土するが、遺構が不定形であり、住居と考えられないものなどであって、調査中に随時命名した為に不統一である。従って土壙の中にも特殊な遺物を出土させる例もある。ここでは、現地で特殊遺構としたものを取り上げて説明する。

特殊１号遺構（第 160 図）

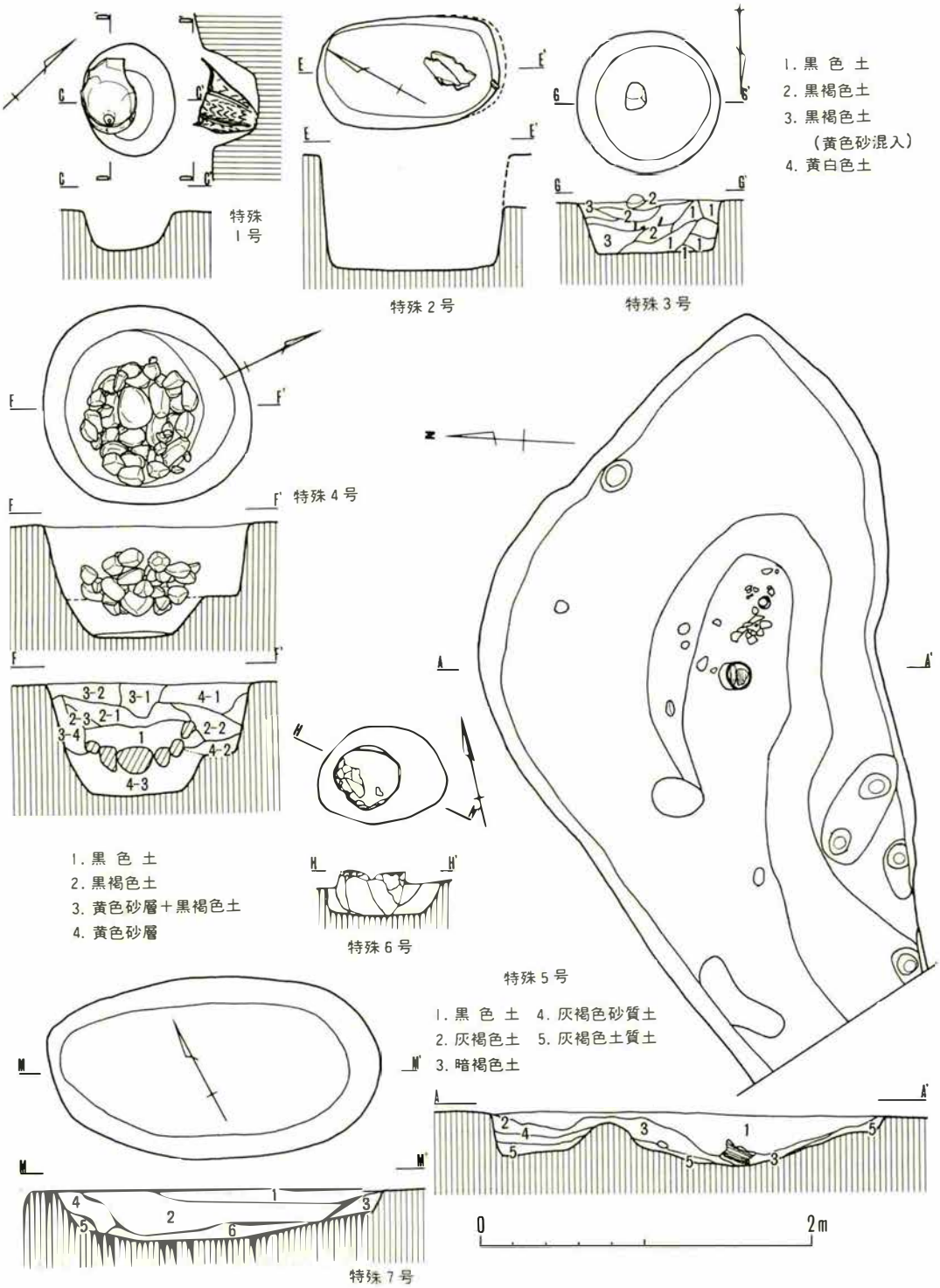
縄文中期後半の曽利Ｖ式土器が、小土壙内から正位で出土したもので、底部穿孔されている。胴部上半は耕作か、弥生時代の攪乱によって破損している。１号方形周溝墓の北側に位置する。

特殊２号遺構（第 160 図）

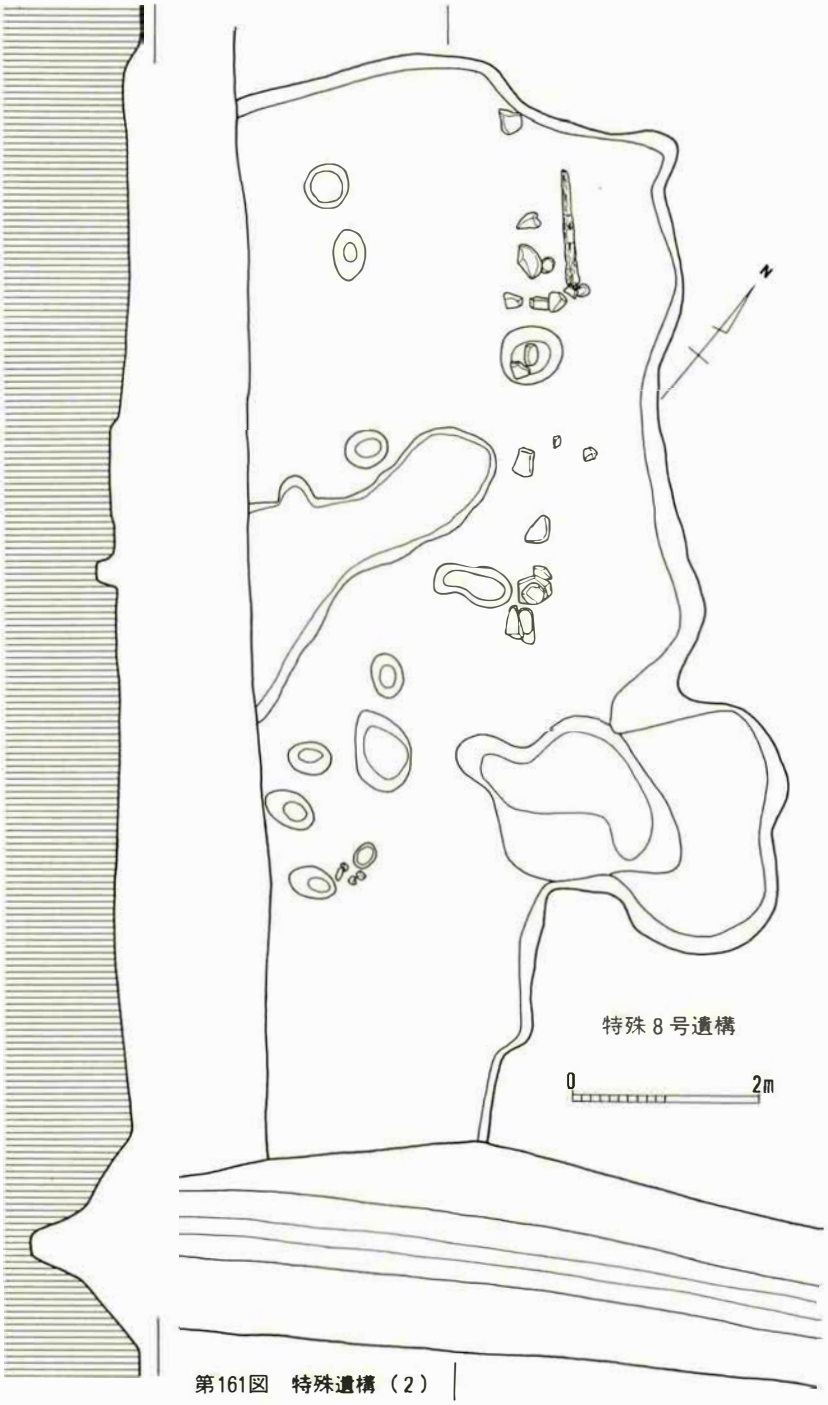
18号住居の南側に位置し、長径 1.1 ｍ、短径65㎝、深さ70㎝の土壙内より縄文中期後半の曽利Ｖ式土器及び加曽利Ｅ４式土器が重なりあって出土している。曽利式と加曽利Ｅ式の終末期の土器の伴出関係を示す良好な遺構である。

特殊３号構（第 160 図）

17号住居北側に位置する円形土壙で、土壙確認面中央に小礫が置かれている。土層は、レン


特殊
1号
特殊2号
特殊3号
1. 黒 色 土
2. 黒褐色土
3. 黒褐色土
（黄色砂混入）
4. 黄白色土
特殊4号
1. 黒 色 土
2. 黒褐色土
3. 黄色砂層＋黒褐色土
4. 黄色砂層
特殊6号
特殊5号
1. 黒 色 土
2. 灰褐色土
3. 暗褐色土
4. 灰褐色砂質土
5. 灰褐色土質土
0
2m
特殊7号
1. 暗褐色、黄褐色砂質ブロック土
2. 暗褐色粘質土
3. 黄褐色砂質土と2の混土
4. 1と同じ
5. 4と同じ
6. 3と同じ

第160図　特殊遺構（1）



第161図　特殊遺構（２）

ズ状堆積をしており、ブロック状に土が投げ込まれた状態を呈する。

特殊４号遺構（第160図）

直径1.25mの円形土壙中央に、礫が鍋底状に並べられている。礫の範囲は直径70cm、厚さ40cmで、礫層より上は漆黒色の土層で埋められている。土壙は２段に掘り込まれているので、礫群は上層土壙に伴うものであろう。

特殊５号遺構（第160図）

12号溝西端の南に位置し、不整形をした皿状の土壙である。土壙中央より弥生時代の甕が出土している他、覆土中には焼土やカーボン等が含まれている。長径4.5ｍ、短径2.3ｍの規模である。

特殊６号遺構（第160図）

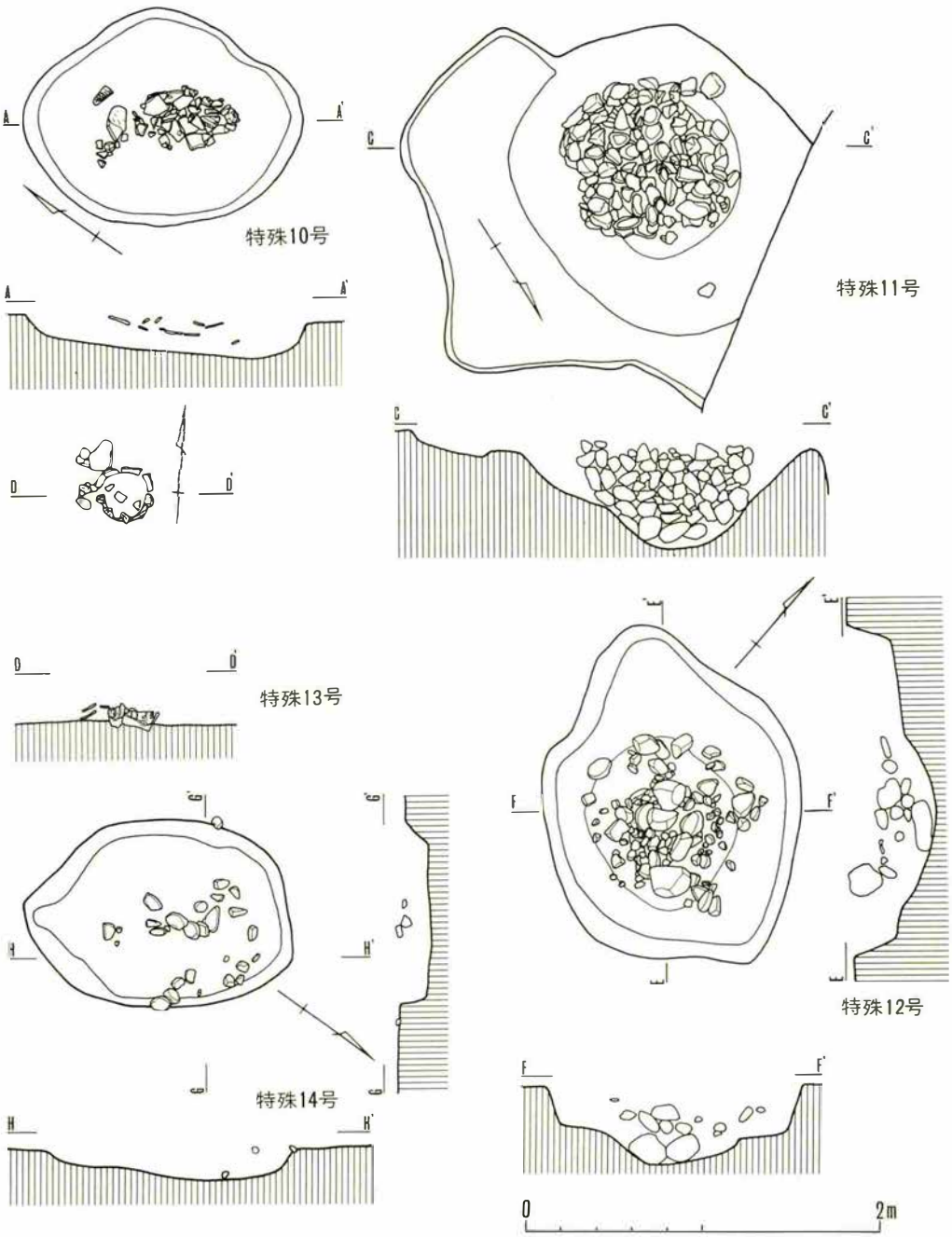
４、５、７号周溝墓の間に位置し、長径80cm、短径60cm、深さ20cmの土壙中央に、弥生時代壷形土器が正位で埋められていた。

特殊７号遺構（第 160 図）

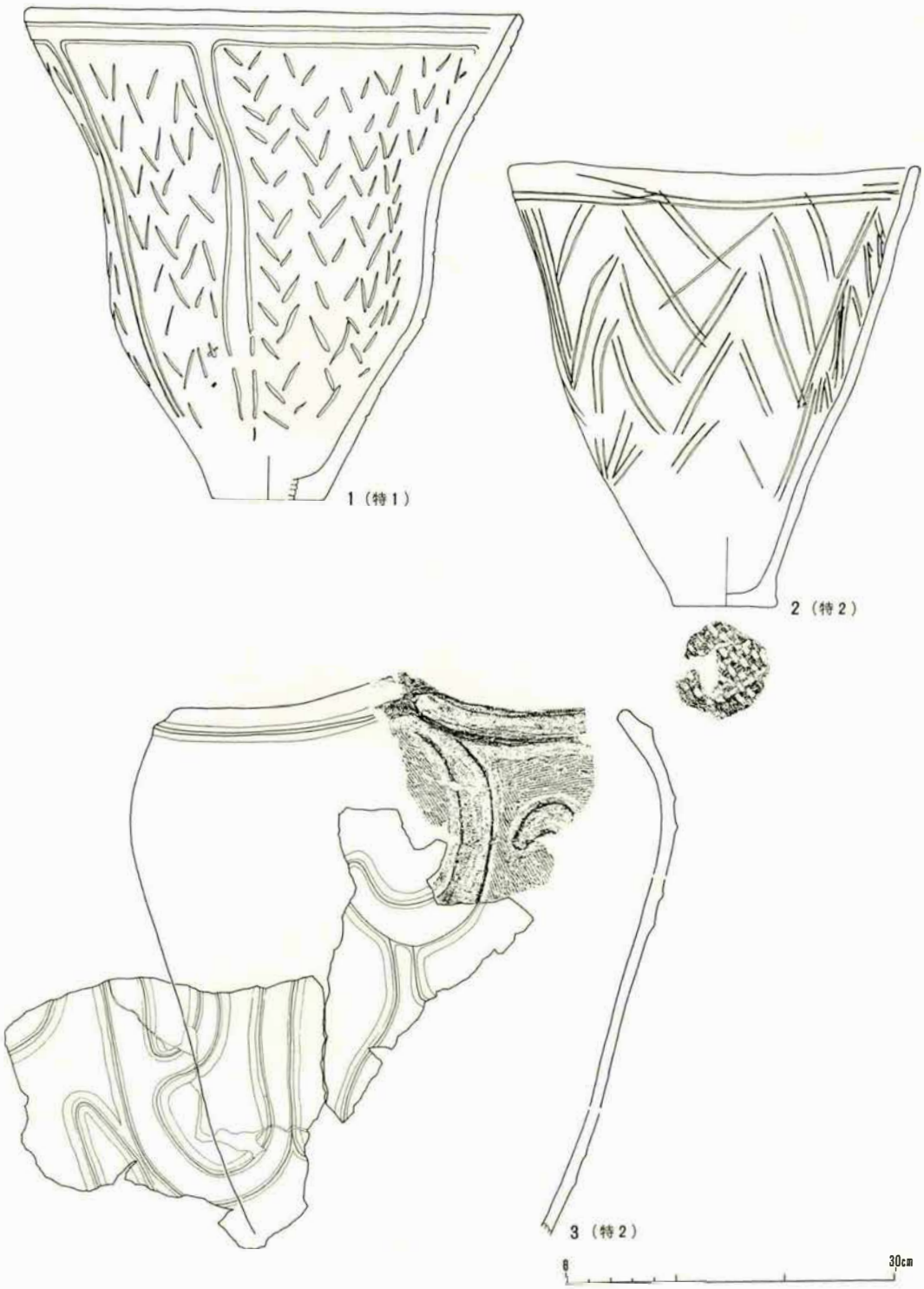
８号周溝墓の南にある長径２ｍ、短径 1.1ｍの長円形土壙で、深さは30㎝の皿状底面をもつ、この中より、ガラス玉７、環状銅製品が出土している。

特殊８号遺構（第 161 図）

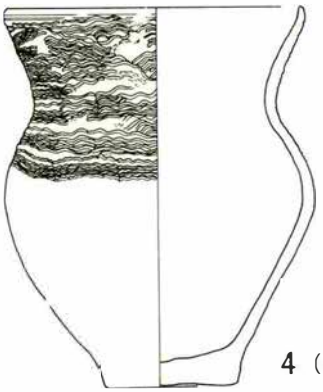
12号溝西端北側の不整形遺構で、半分は未調査区に含まれる。長径10ｍ、巾５ｍで、西側に



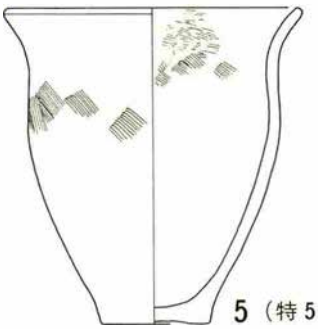
第162図　特殊遺構（３）



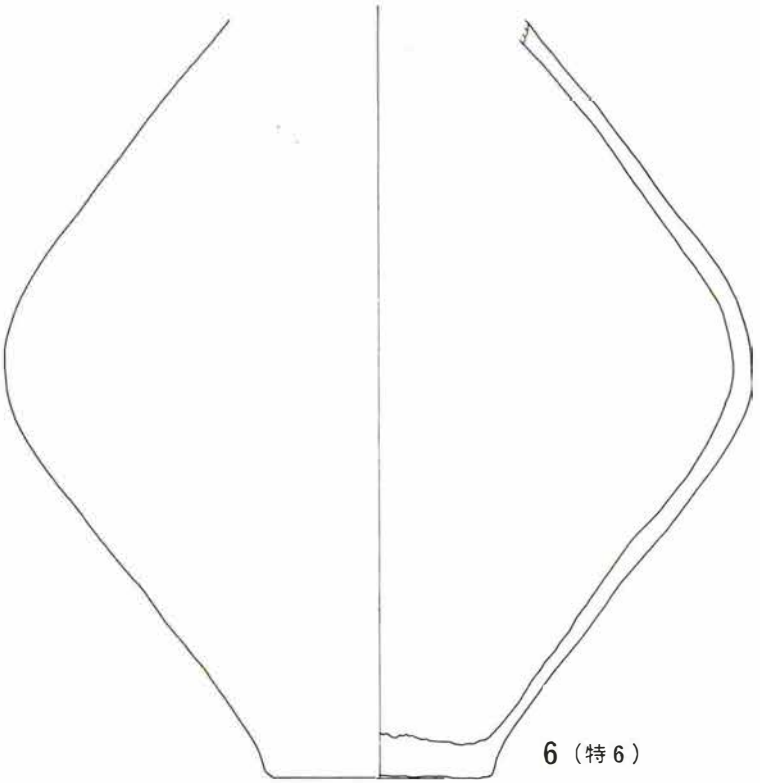
第163図　特殊遺構出土土器（1）



4（特5）



5（特5）



6（特6）

7（特7）

第164図　特殊遺構出土土器（2）

第６表　特殊遺構出土土器（第163・164・184図）

1)口径　2)器高　3)底径　4)胴径

番　号	器　形	法　量	文　　様	技　　法	備　　考
1. 特１	甕	1）44.5 2）50.0 3）10.0 4）　—	ヘラ磨き 逆ハの字文 沈線	内外全面をヘラ整形した上を 外、口唇直下に一周沈線１本 全体を５区画に区分し、区画 内に逆ハの字文を施す ハの字の工具は上→下に動かす。底部穿孔の可能性もある	赤褐色 やや粗い（細い砂粒含む）
2. 特２	甕	1）37.4 2）39.5 3）　9.6 4）	綾杉文	外　胴部全体に大きな綾杉状に沈線文様 底部、網代文様	
3. 特２	甕	1）42.0 2） 3） 4）	縄目文		
4. 特５Ｐ１	甕	1）15.5 2）19.8 3）　7.0 4）16.3	櫛描波状文 ヘラ磨き	口唇部　ヘラ工具で整形した時の細い沈線痕がある 口縁部から胴上部まで櫛描波状文が施されている。中部→下部はヘラ整形されている 内　ヘラ整形	黄褐色 密 焼成　良好
5. 特５Ｐ２	甕	1）15.8 2）16.7 3）　5.8 4）13.3	ハケ目 ヘラ磨き	内、外面ともハケ目の上をヘラ磨き整形	茶褐色、焼むらあり やや粗い 焼成　良好
6. 特６	大　型　壺	1） 2） 3）12.0 4）39.2	ヘラ磨き	内、外面ともにヘラ磨き 内面　剥離多い	灰褐色、焼むらあり やや粗い 焼成　良好
7. 特８	小　　鉢	1）　6.0 2） 3） 4）			薄茶褐色 焼成　良好
324.特13	深　　鉢	1）32	粘土紐貼付・条線		薄茶褐色・焼成良

向って段々深くなるような皿状遺構である。この中には、礫、腐敗木、土器、石器などが投げ込まれたように出土し、特に小型手捏土器等も出土することから、祭祀的遺構とも考えられる。

特殊10号遺構（第162図）

6号周溝墓西側に位置し、長径1.5ｍ、短径1ｍの楕円形土壙中より縄文中期後半の土器片が一括出土した。

特殊11号遺構（第162図）

20号住居南壁に接して発見された集礫土壙である。土壙直径1.3ｍ、集礫は約1ｍの直径、深さ50cmの半球状に固まり、ほぼ土壙を埋めている。中から縄文前期、中期の土器片が出土している。

特殊12号遺構（第162図）

25号住居東側にあって、長径1.8ｍ、短径1.5ｍの皿状土壙内より、礫がまとまって出土している。

特殊13号遺構（第162図）

20号住居北側にある縄文中期単独埋甕で、土壙規模は不明。

特殊14号遺構（第162図）

3号周溝墓と14号周溝墓の中間に位置し、長径1.5ｍ、短径1ｍの円形土壙である。覆土中に小礫、土器片等を含む。

第5節　土壙（第165～184図）

土壙数は、ナンバーを付したものだけで95基ある。このうち4基が欠番となっているので実数91基であるが、この他にナンバーを付けなかった掘り込みもあって、実数は100基をこえるであろう。なお、土壙群は遺跡中央部に最も集中しており、特に縄文中期後半の遺構が多い。弥生時代のものは墓壙・蔵骨壷などが主で、周溝墓群に接した地域に多い。このうち特筆すべき土壙を取り上げて説明し、他は第7表の一覧表を参考にしてもらいたい。

4号土壙

直径1.7ｍ、深さ90㎝の円形土壙で、底面は更に直径80㎝、深さ5㎝の掘り込みがある。土層断面を見ると、レンズ状堆積をしているが、壁寄と中央部の堆積状態が大きく異なり、特に下の掘り込みは二次的に掘られたように見える。おそらく、この遺構は井戸址であろう。

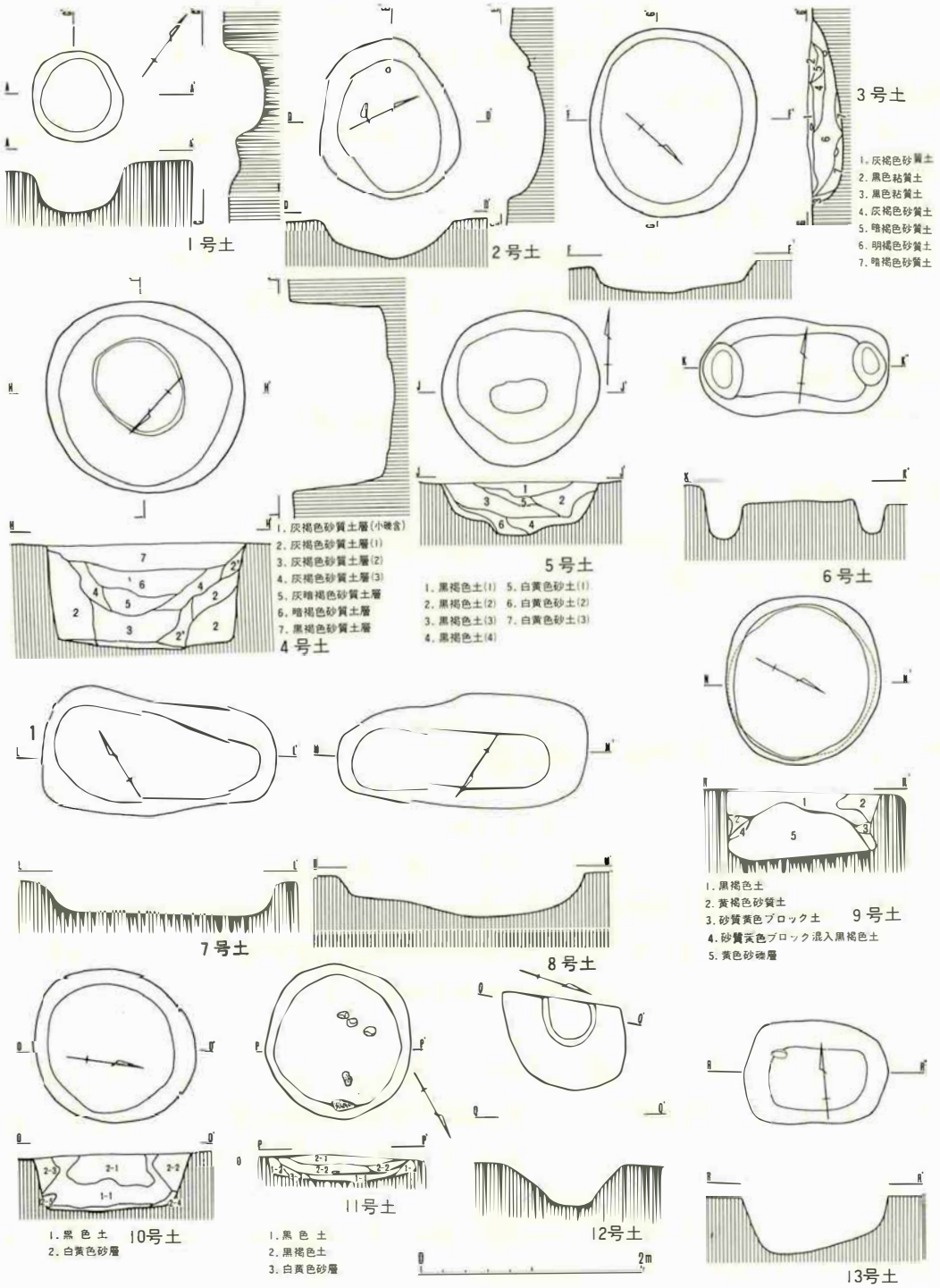
9号土壙

直径1.4ｍの円形土壙で、深さ60㎝。土壙内の底面を覆う土は、黄色砂礫層であるが、一時に埋められたような状態である。

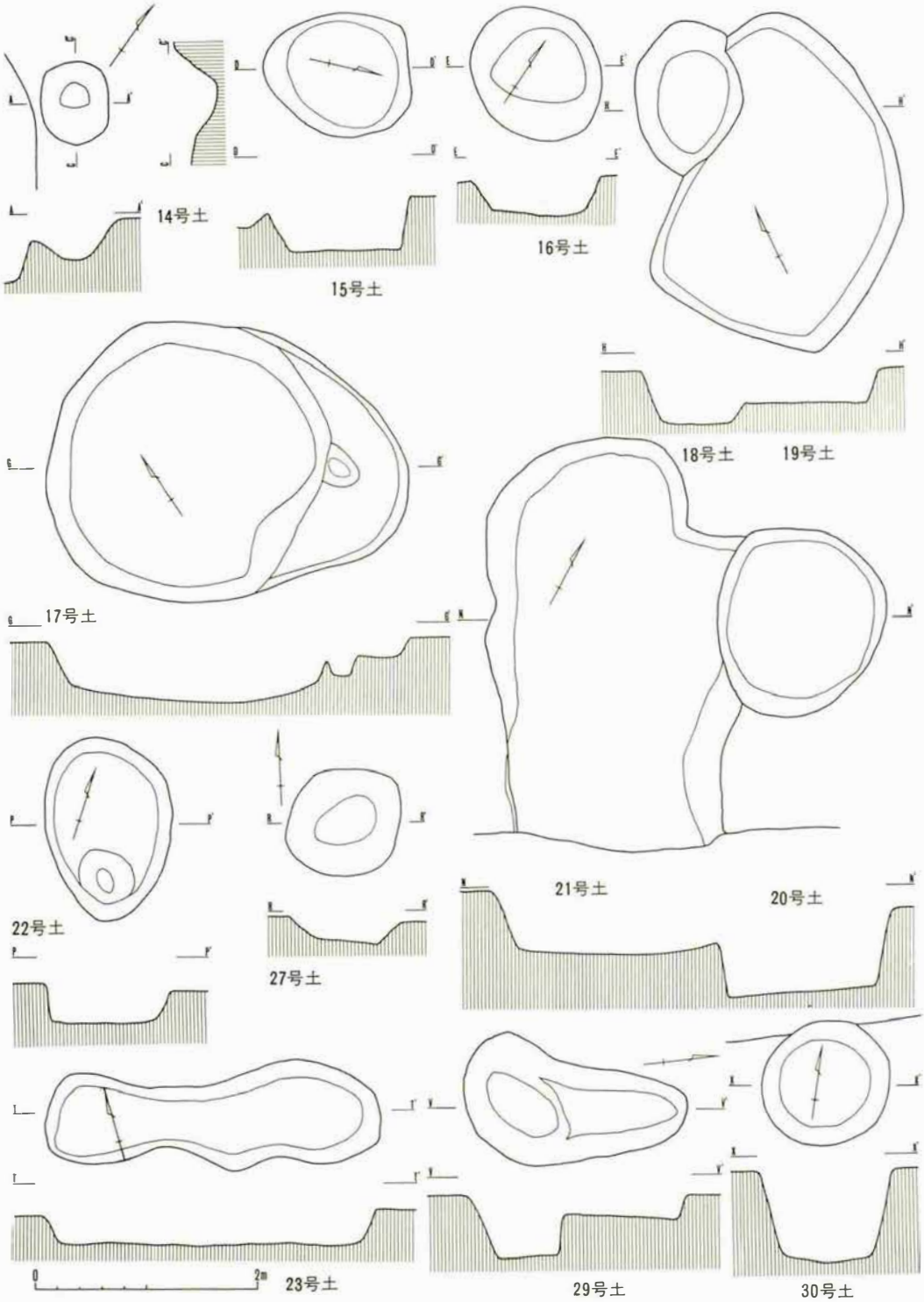
10号土壙

直径1.4ｍの円形土壙で、深さ50㎝、上層覆土中央に白黄色砂質土があり、下層は黒色土である。何か埋めて、凹地になったところに砂質土が入れられたものであろう。

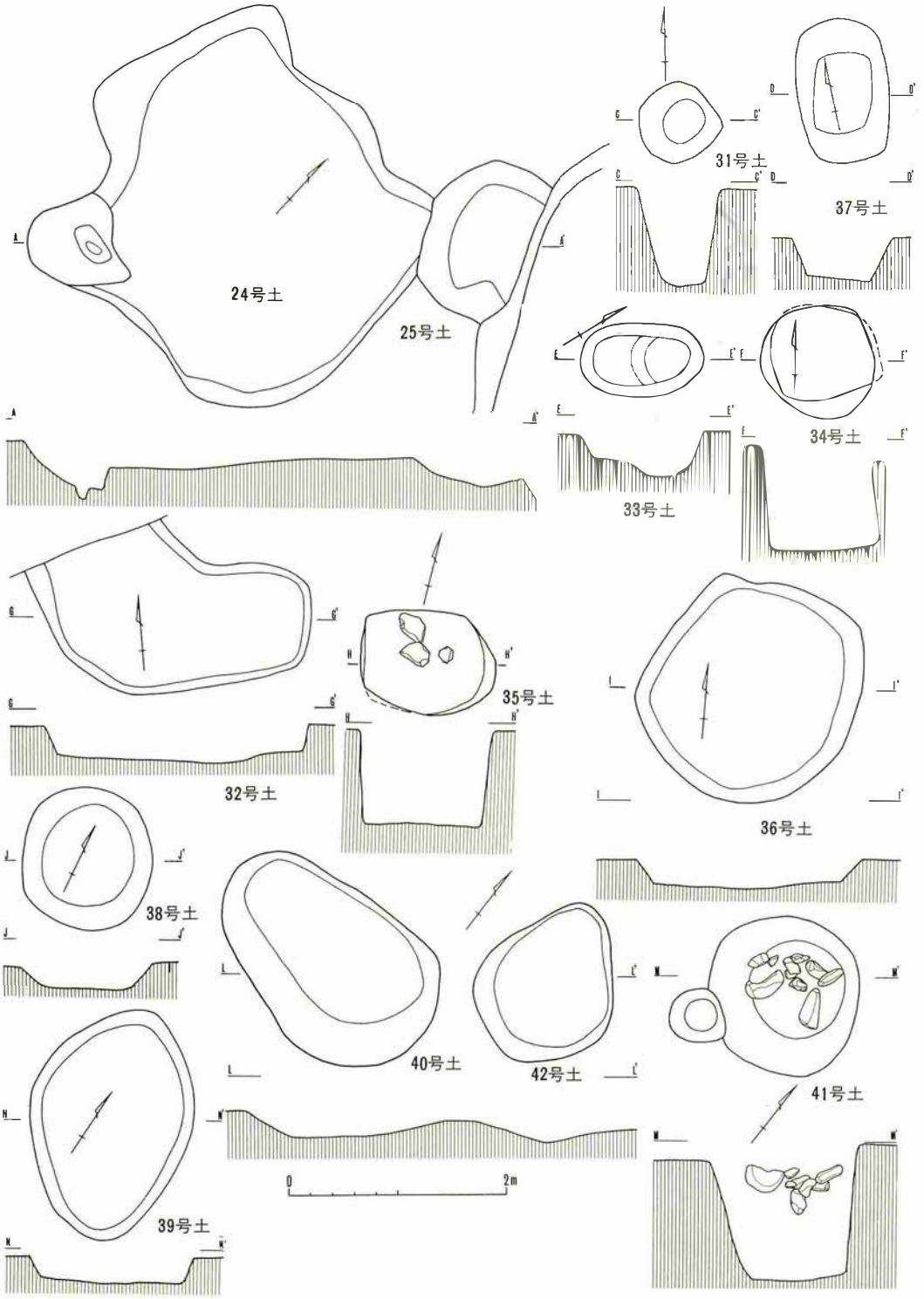
17号土壙



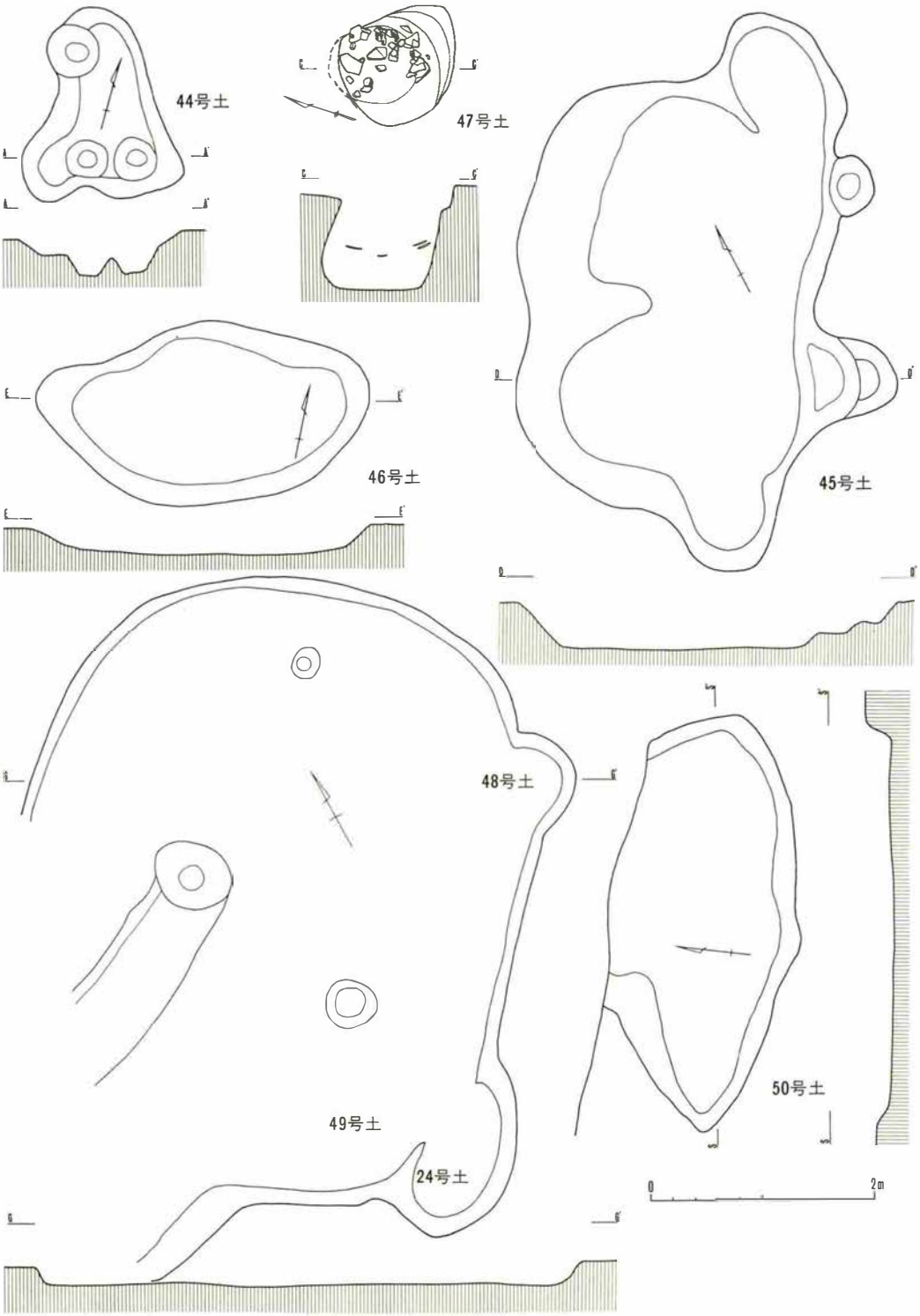
第165図　土壙実測図（1）



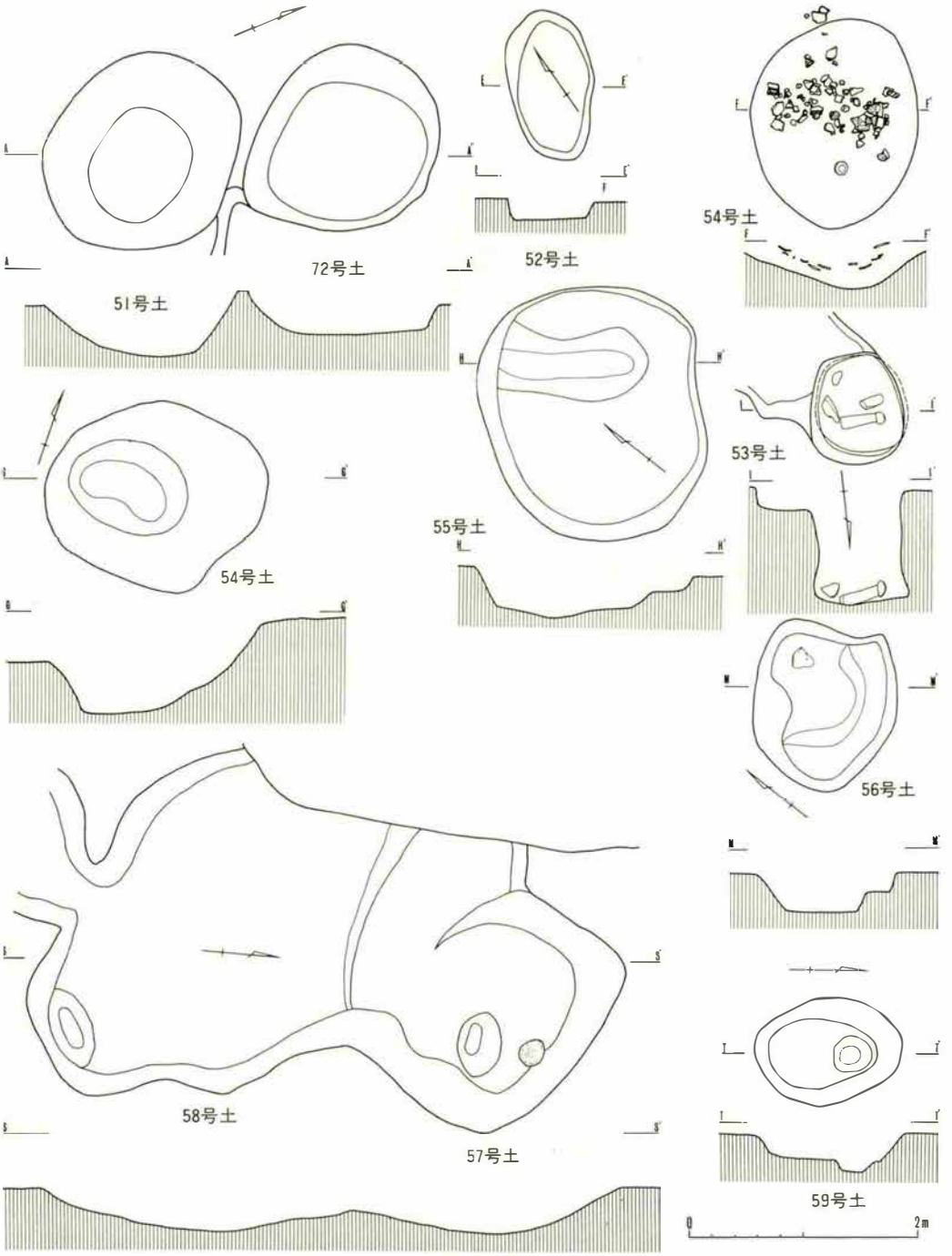
第166図　土壙実測図（２）



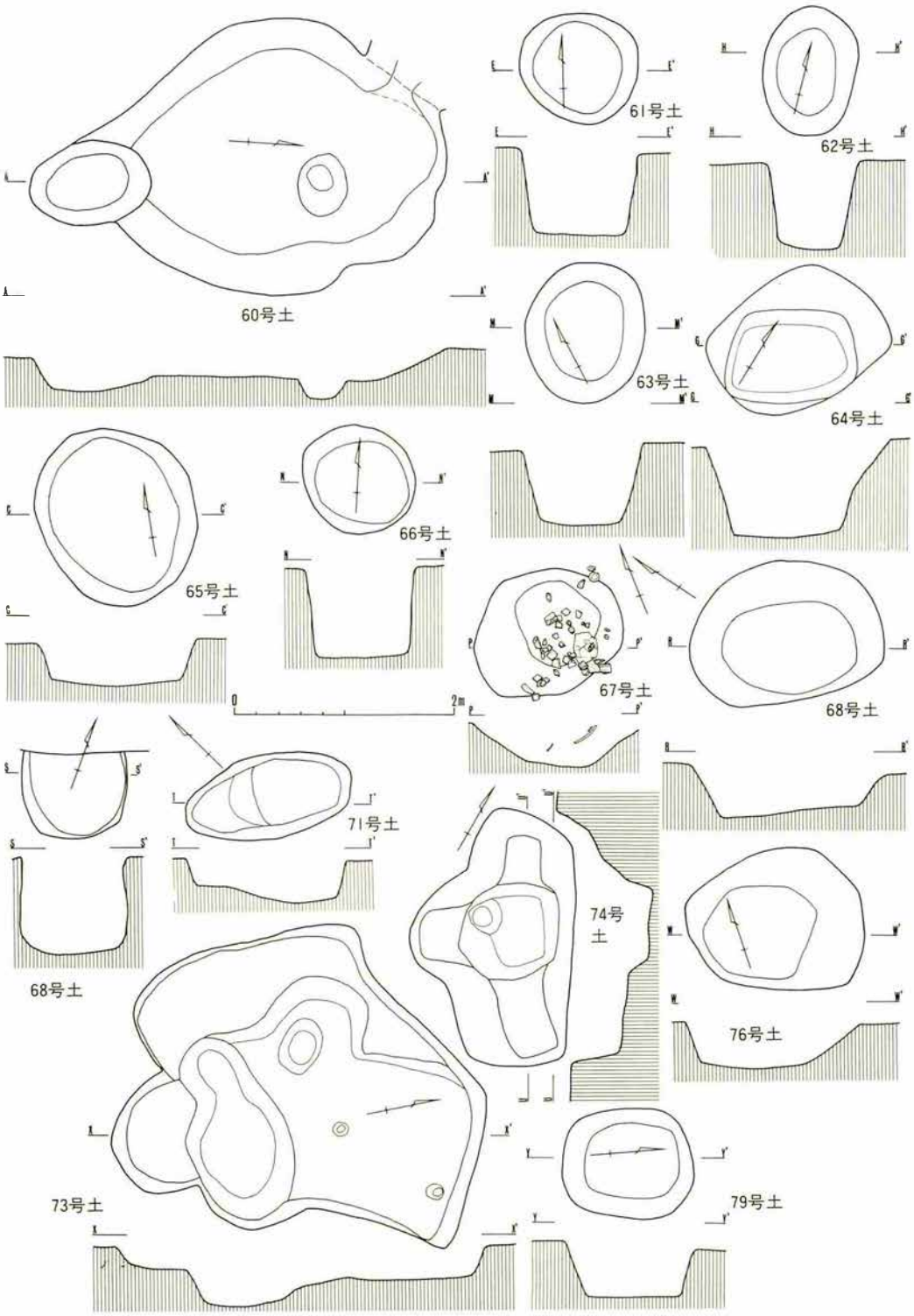
第167図　土壙実測図（３）



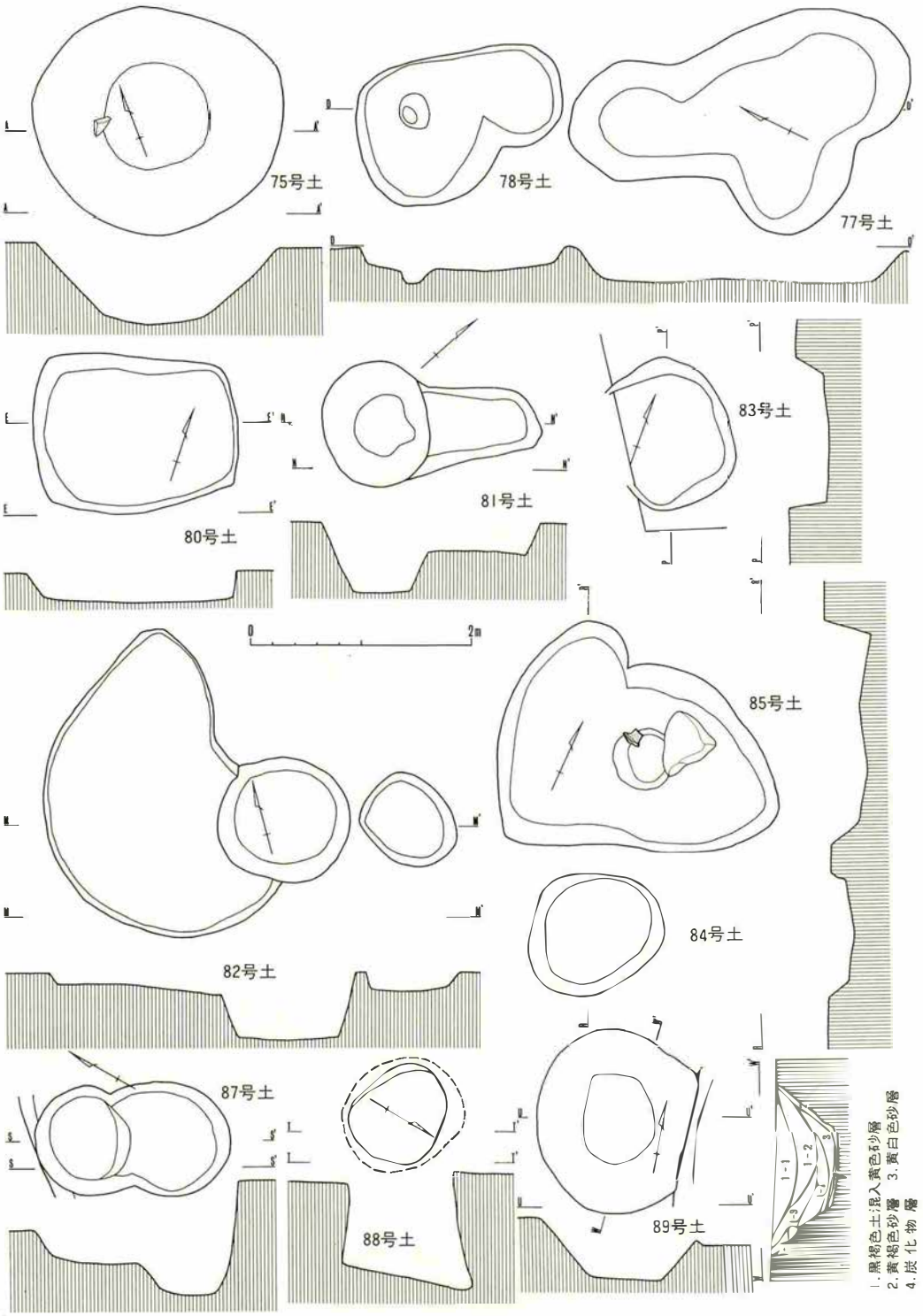
第168図　土壙実測図（4）



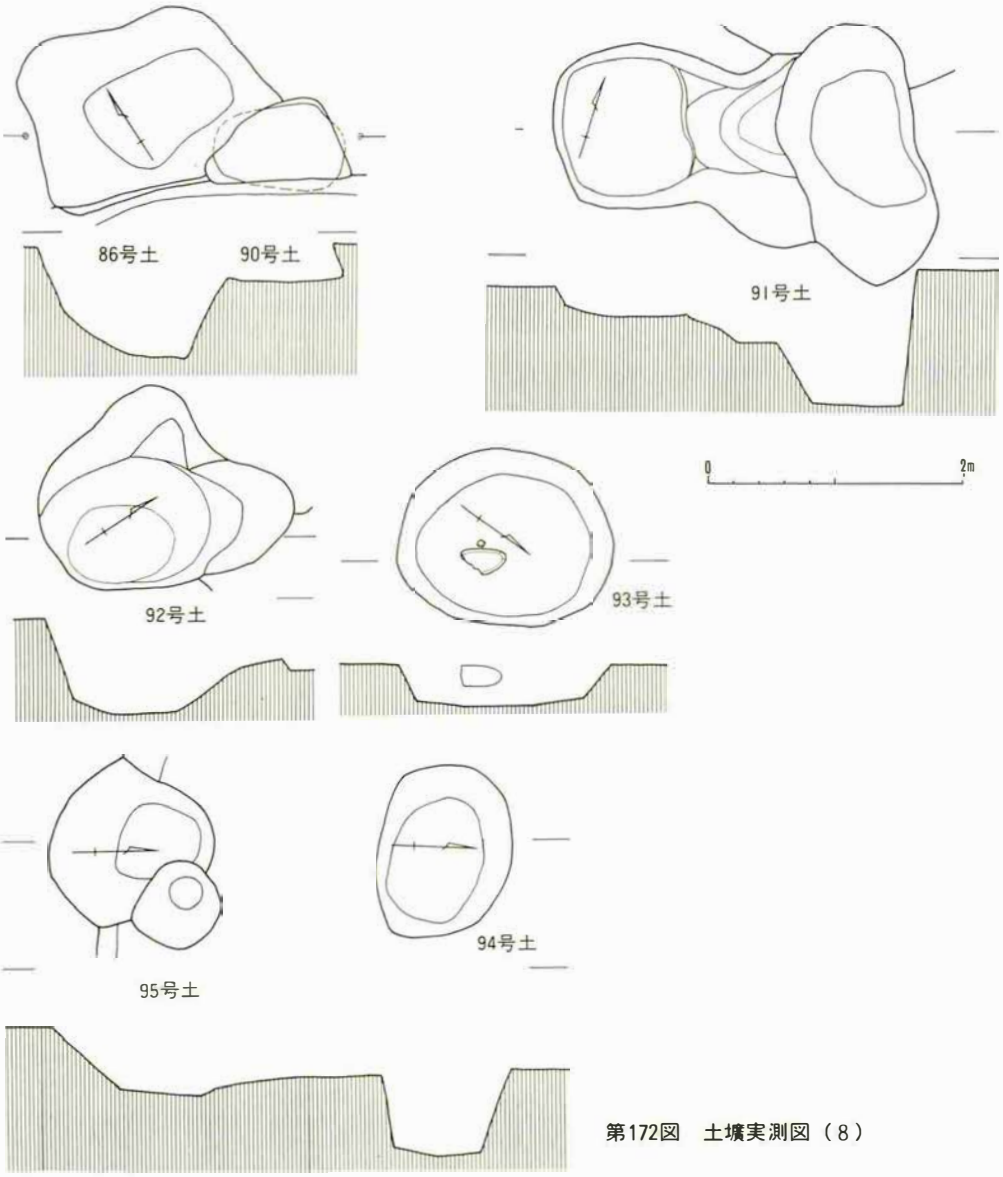
第169図　土壙実測図（５）



第170図　土壙実測図（6）



第171図　土壙実測図（7）



第172図　土壙実測図（８）

長径3.3ｍ、短径2.5ｍの卵形で、２段に落ち込み、深さは55cmある。底面は皿状に窪んでいる。

20号土壙

12号溝の北側で、21号土壙と切り合っている。直径1.7ｍ、深さ75cmの円形土壙である。

35号土壙

長径1.2ｍ、短径95cmの土壙で、深さは90cm程あり、断面は方形を呈する。覆土中に礫が3個投入されている。

41号土壙

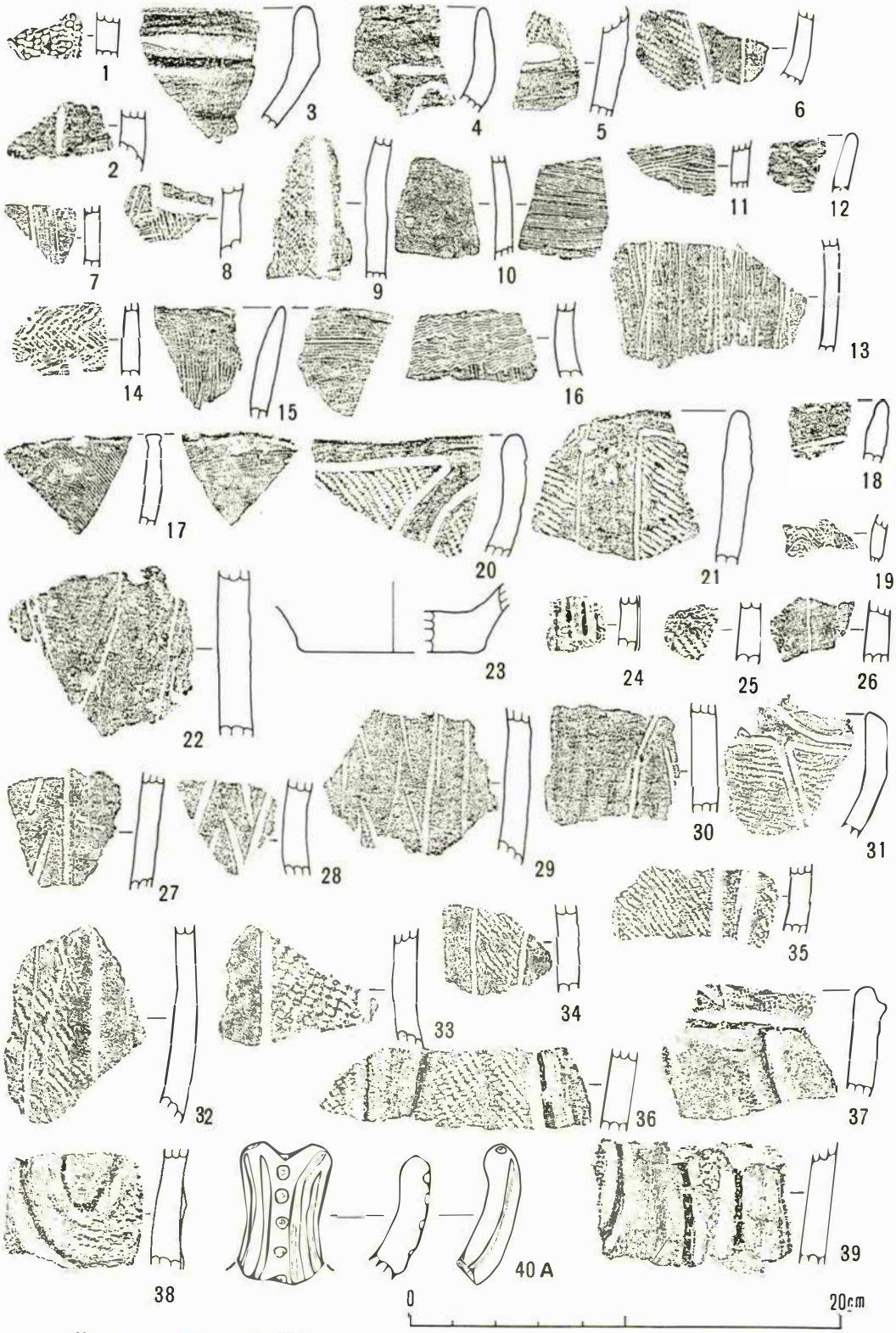
直径1.4ｍ、底径85cmの円形土壙で、深さは1.2ｍ程ある。土壙上面に石皿、磨石等が10個

第７表　金の尾遺跡土壙一覧表

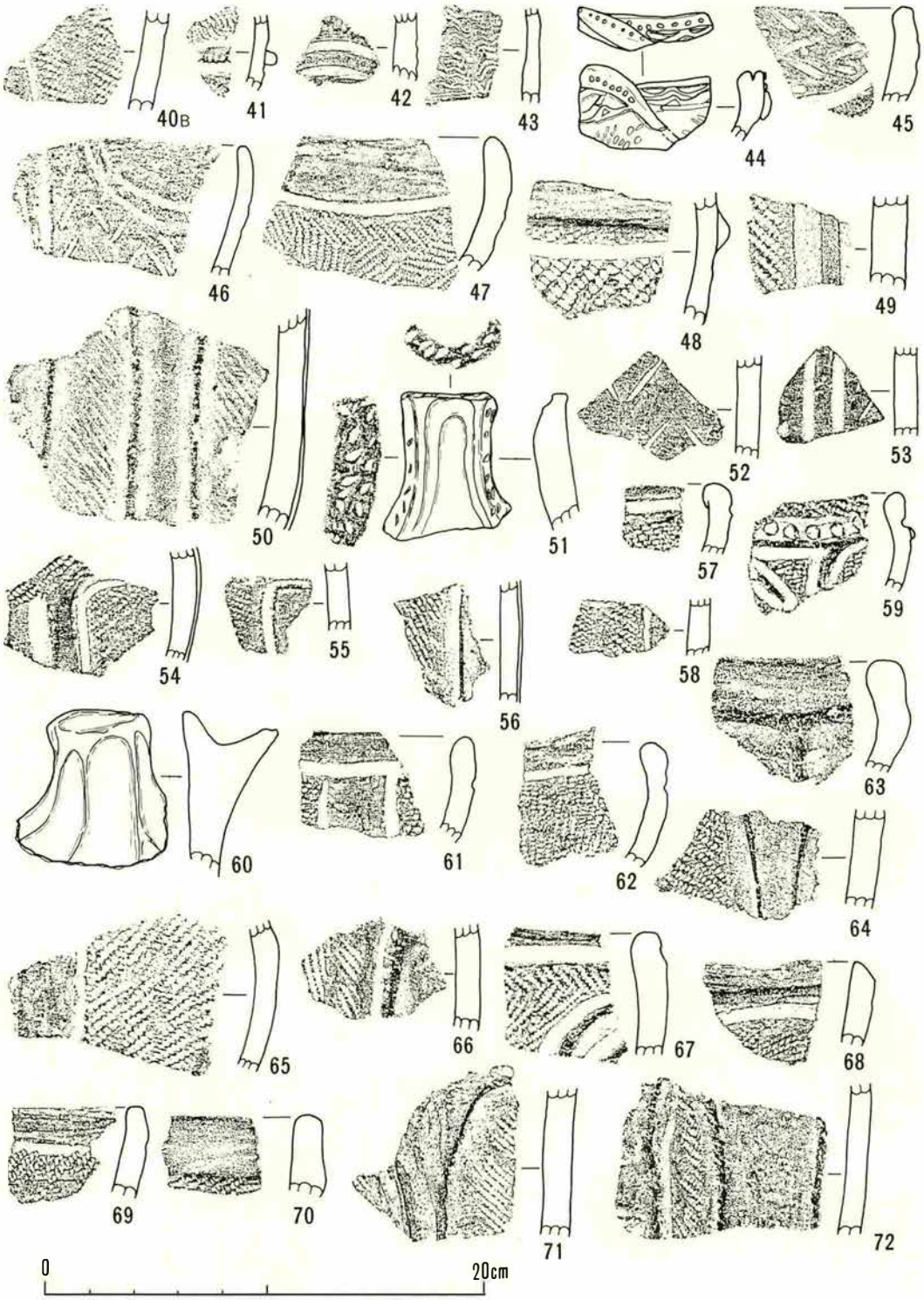
No.	形	規模（長径×短径×深さ）	時　期	遺物	
				土器片	石　器
1	円　形	80 × 79 × 42	縄中後半	3	
2	楕円形	142 × 124 × 32			
3	隅丸方形	167 × 147 × 28			
4	円　形	174 × 169 × 93			
5	円　形	142 × 137 × 46		2	1
6	楕円形	167 × 85 × 15	縄中後半		
7	楕円形	207 × 101 × 27	縄中後半		
8	楕円形	221 × 101 × 36			
9	円　形	149 × 135 × 59	縄中後半・弥	6	
10	円　形	145 × 127 × 50	弥中	1	
11	円　形	129 × 136 × 24	縄中後半・弥後	6	
12	長円形	104 × 79 × 39			
13	楕円形	128 × 90 × 50			
14	隅丸方形	76 × 62 × 38	縄中後半	3	
15	隅丸方形	131 × 112 × 51			
16	円　形	120 × 117 × 34		4	
17	楕円形	325 × 247 × 57	縄中後半	14	
18	楕円形	138 × 97 × 48	縄中後半	4	
19	不整形	287 × 197 × 31	縄中後半	7	
20	隅丸方形	170 × 152 × 73	縄中後半	9	
21	不整形	368 × 206 × 56	縄中後半～後初	5	
22	楕円形	167 × 116 × 36	縄中後半	2	1
23	不整形	301 × 86 × 31	縄中後半	6	
24	楕円形	157 × 84 × 24			
25	隅丸方形	142 × 102 × 38	縄中後半	3	
26					
27	隅丸方形	112 × 99 × 22	縄前未・中後	3	1
28			縄前未・中後	2	
29	不整形	203 × 94 × 58	縄前未・中後	6	
30	円　形	108 × 112 × 89	縄中後半	7	
31	円　形	74 × 76 × 90	縄中後半	7	
32	不整形	256 × 139 × 30	縄中後半	3	
33	楕円形	112 × 68 × 40	縄中中頃	5	

No.	形	規模（長径×短径×深さ）	時　期	遺物	
				土器片	石　器
34	円　形	103 × 102 × 96		1	
35	楕　円　形	124 × 94 × 86	縄中後半		
36	隅　丸　方　形	208 × 188 × 27			
37	楕　円　形	132 × 83 × 27			
38	円　形	130 × 117 × 22			
39	楕　円　形	219 × 148 × 25			
40	楕　円　形	227 × 144 × 25	縄中後半	6	
41	隅　丸　方　形	145 × 129 × 118	縄中後半	13	5
42	不　整　形	129 × 155 × 21	縄中後半	4	
43			縄中後半	3	
44	不　整　形	155 × 98 × 40	縄中後半	8	
45	不　整　形	504 × 273 × 40	縄中後半	5	2
46	不　整　形	298 × 163 × 27	縄中後半・後初	4	
47	不　整　形	120 × 104 × 93	縄中後半	20	1
48	不　整　形	92 × 50 × 20	縄中後半	6	
49	不　整　形	565 × 458 × 20	縄中後半	20	
50	不　整　形	373 × 169 × 25	縄中後半	3	
51	隅　丸　方　形	182 × 157 × 46	縄中後半	5	
52	楕　円　形	130 × 74 × 18	縄中後半	6	1
53	隅　丸　方　形	96 × 85 × 97	縄中後半	14	1
54	不　整　形	188 × 161 × 78			
55	隅　丸　方　形	221 × 189 × 43	縄中後半	4	
56	不　整　形	153 × 134 × 34	縄中後半	4	
57	不　整　形	228 × 207 × 34	縄後初頭	4	1
58	不　整　形	246 × 247 × 38	縄中後半	3	
59	楕　円　形	127 × 94 × 31	縄前末・中後	2	
60	不　整　形	327 × 250 × 46	縄中後半	6	
61	円　形	108 × 100 × 78			
62	隅　丸　方　形	117 × 83 × 73			
63	円　形	127 × 108 × 73	縄中後半	3	
64	隅　丸　方　形	151 × 116 × 81			
65	円　形	141 × 161 × 43			
66	円　形	98 × 96 × 84	縄前末	2	
67	円　形	132 × 112 × 40			
68	楕　円　形	91 × 77 × 86	縄中中頃	1	

No.	形	規模（長径×短径×深さ）	時　期	遺物	
				土器片	石　器
69	楕　円　形	175 × 128 × 47			
70			縄中後半・後前	7	
71	楕　円　形	154 × 77 × 37	縄中後半	5	
72	隅丸方形	183 × 153 × 35			
73	不　整　形	340 × 288 × 54	縄中後半	8	
74	不　整　形	237 × 146 × 86	縄中後半	5	
75	円　　形	217 × 203 × 73	縄中後半	16	1
76	隅丸方形	162 × 141 × 42	縄後初頭	5	
77	不　整　形	298 × 162 × 33	縄後初頭	7	
78	不　整　形	187 × 123 × 21			
79	隅丸方形	117 × 101 × 50			
80	楕　円　形	181 × 141 × 28	縄後	1	
81	不　整　形	197 × 97 × 59		2	
82	不　整　形	272 × 271 × 60			
83	隅丸方形	135 × 95 × 35			
84	隅丸方形	123 × 104 × 23			
85	不　整　形	258 × 199 × 46	縄前後半	2	
86	不　整　形	182 × 132 × 79	縄中中頃・中後半	3	
87	不　整　形	174 × 93 × 102			
88	円　　形	90 × 84 × 100			
89	円　　形	166 × 140·× 56			
90	不　整　形	113 × 62 × 31			
91	不　整　形	283 × 154 × 92			
92	不　整　形	200 × 159 × 80	縄中中頃	5	
93	隅丸方形	171 × 139 × 35	縄中後半・後初	4	
94	隅丸方形	137 × 105 × 69			
95	不　整　形	126 × 124 × 56			

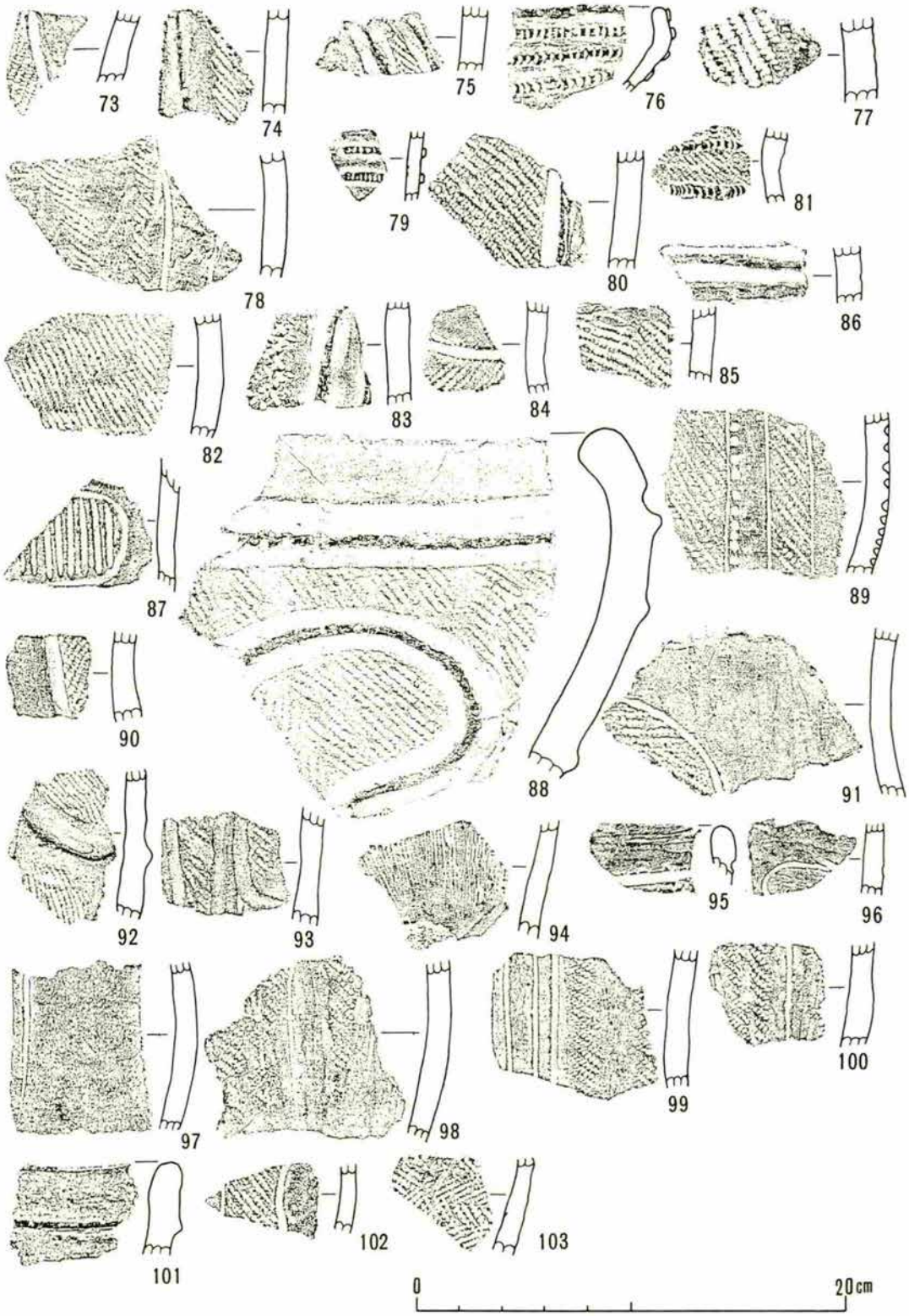


第173図　土壙出土土器（1）　1（1～3）、5（4～5）、6（6）、9（7～12）、10(13)、11(14～19)、14(20～22)、16(23～26)、17(27～40A）号土壙

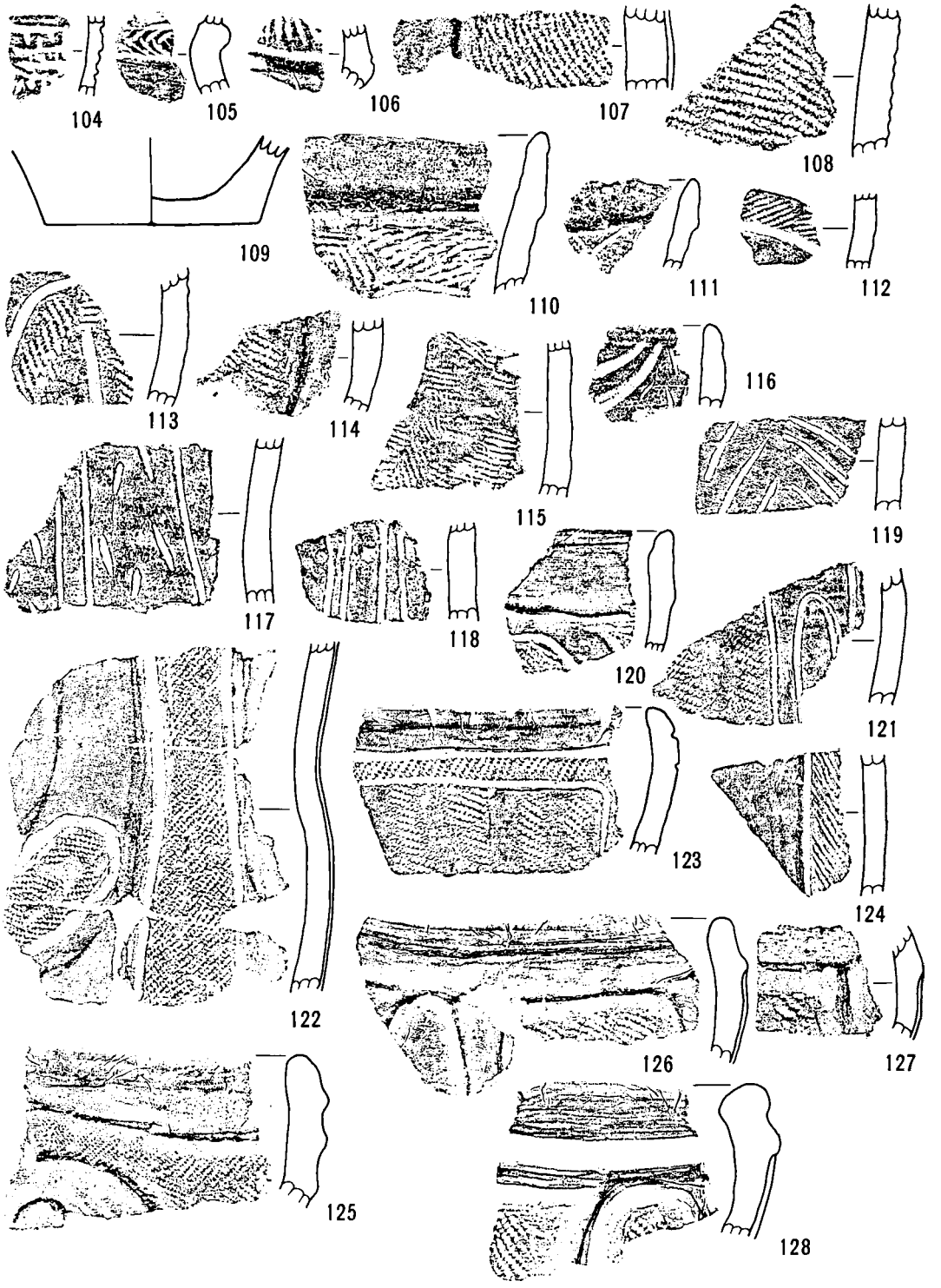


第174図　土壙出土土器（２）

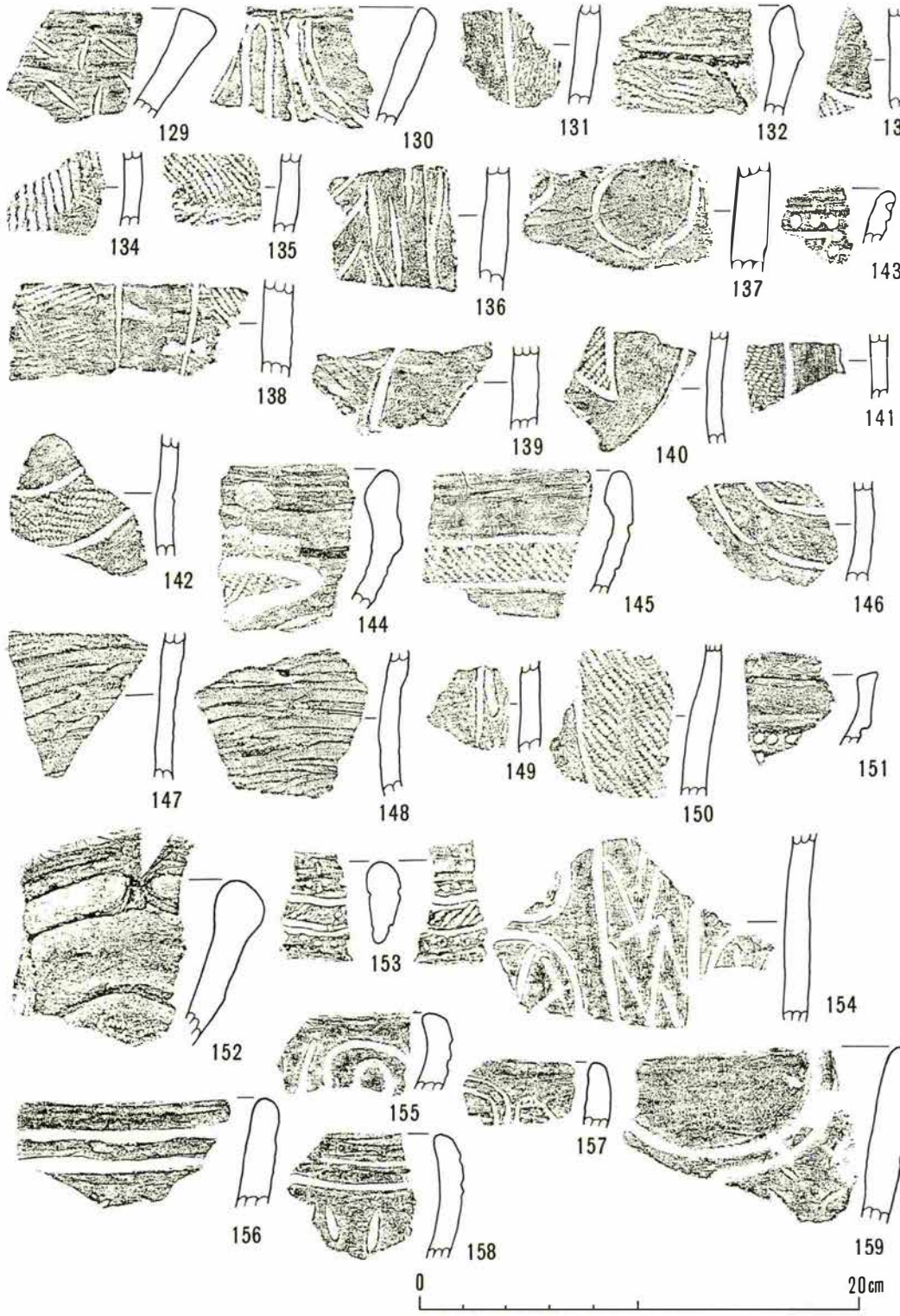
18(40B～43)、19(44～50)、20(51～59)、
21(60～64)、22(65・66)、23(67～72)土壙



第175図　土壙出土土器（3）　25(73～75)、27(76～78)、28(79、80)、29(81～86)、30(87～93)、31(94～100)、32(101～103)号土壙

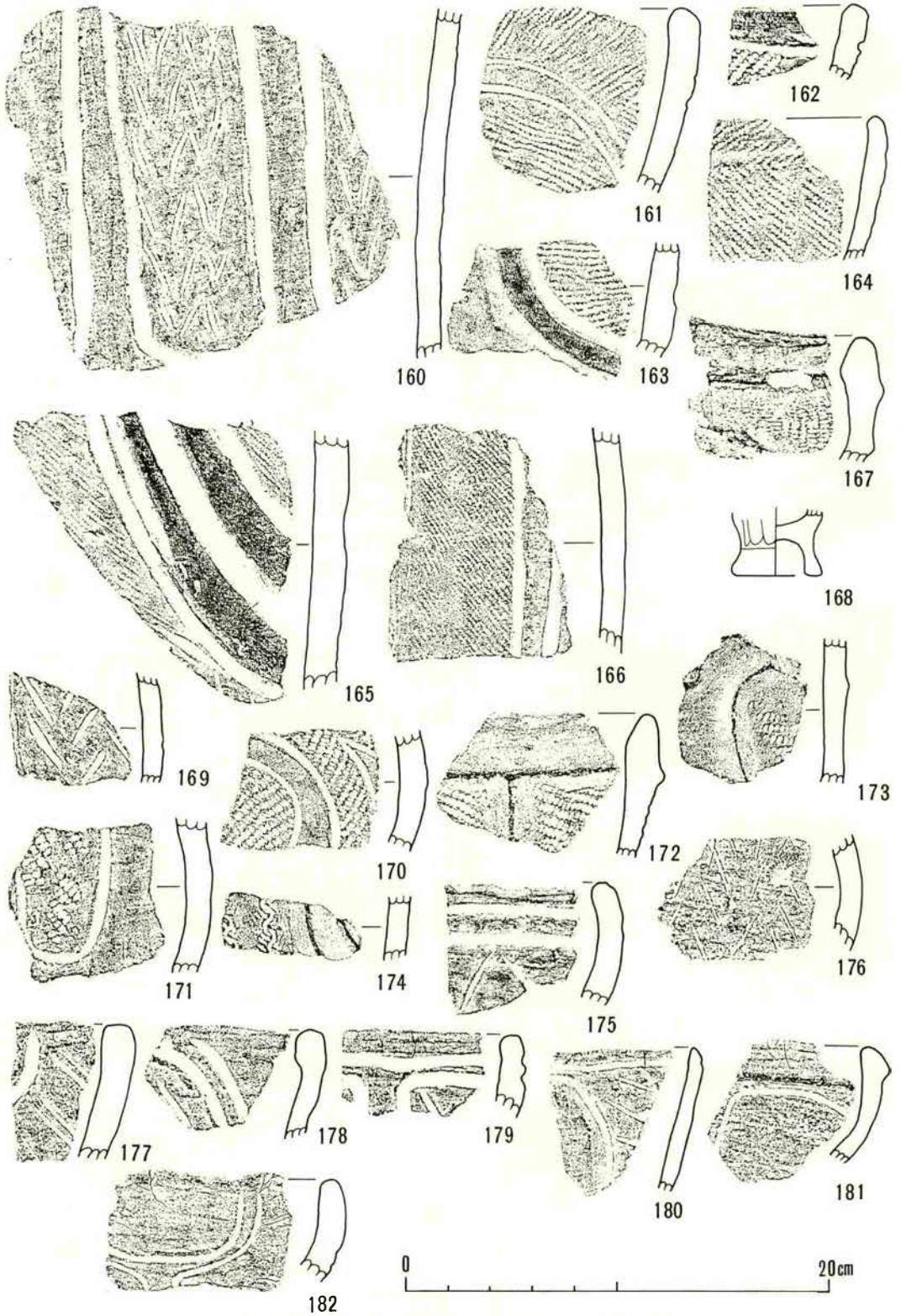


第176図　土壙出土土器（4）　33(104～108)、34(109)、40(110～115)、41(116～128)号土壙

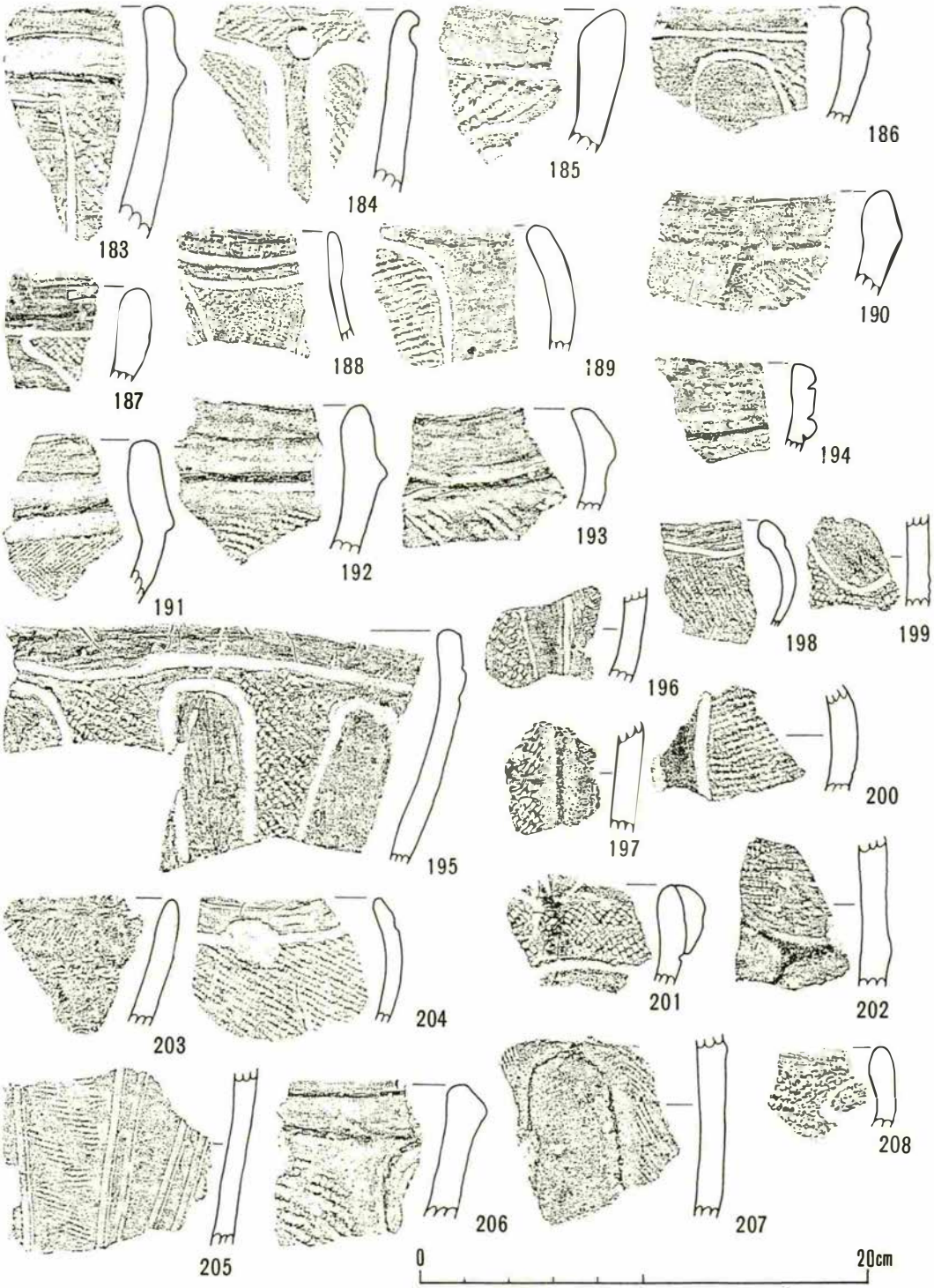


第177図　土壙出土土器（５）

42(129～132)、43(133～135)、44(136～143)、45(144～148)、
46(149～152)、47(153～159)号土壙

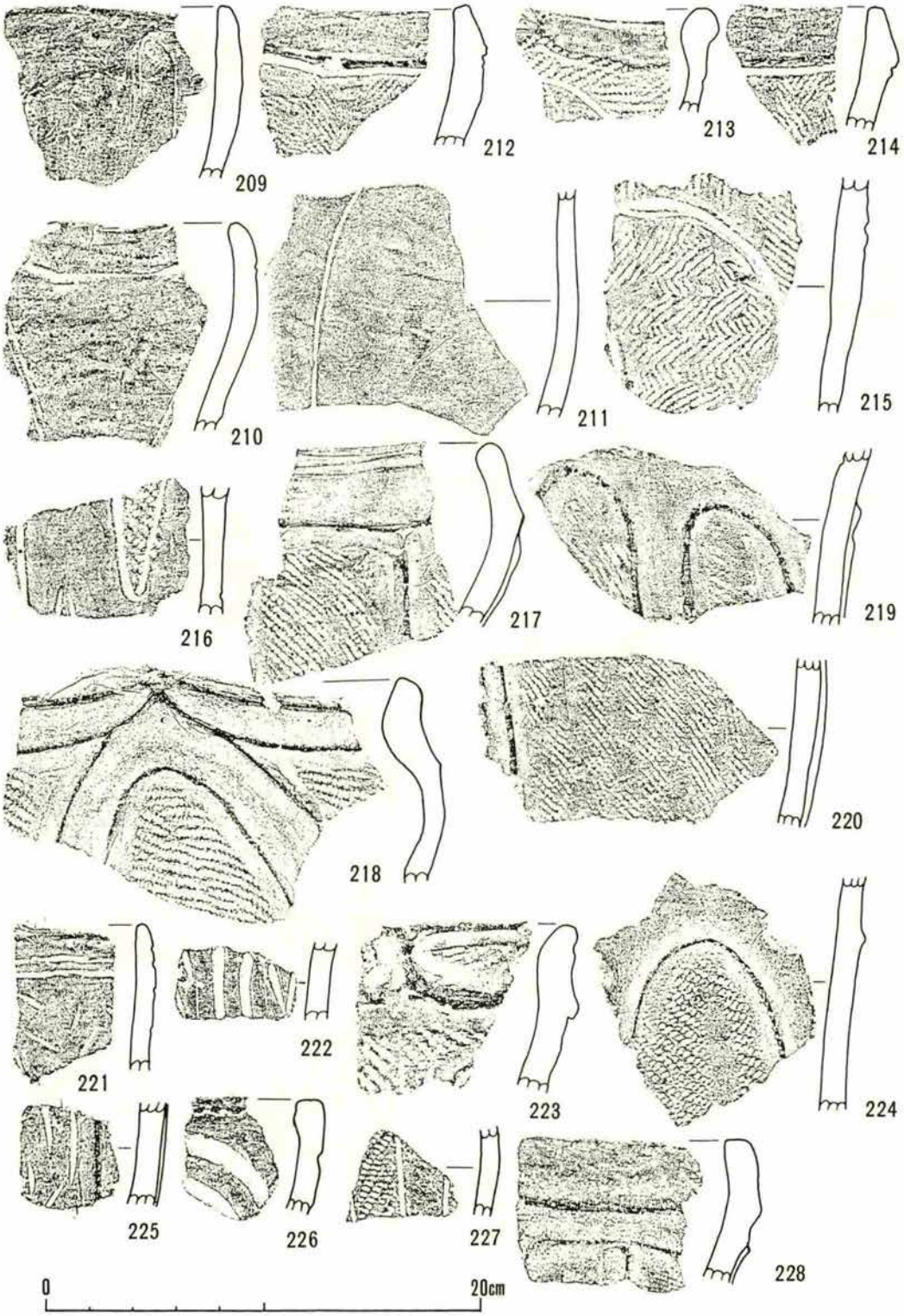


第178図　土壙出土土器（6）　47(160～168)、48(169～174)、49(175～182)号土壙



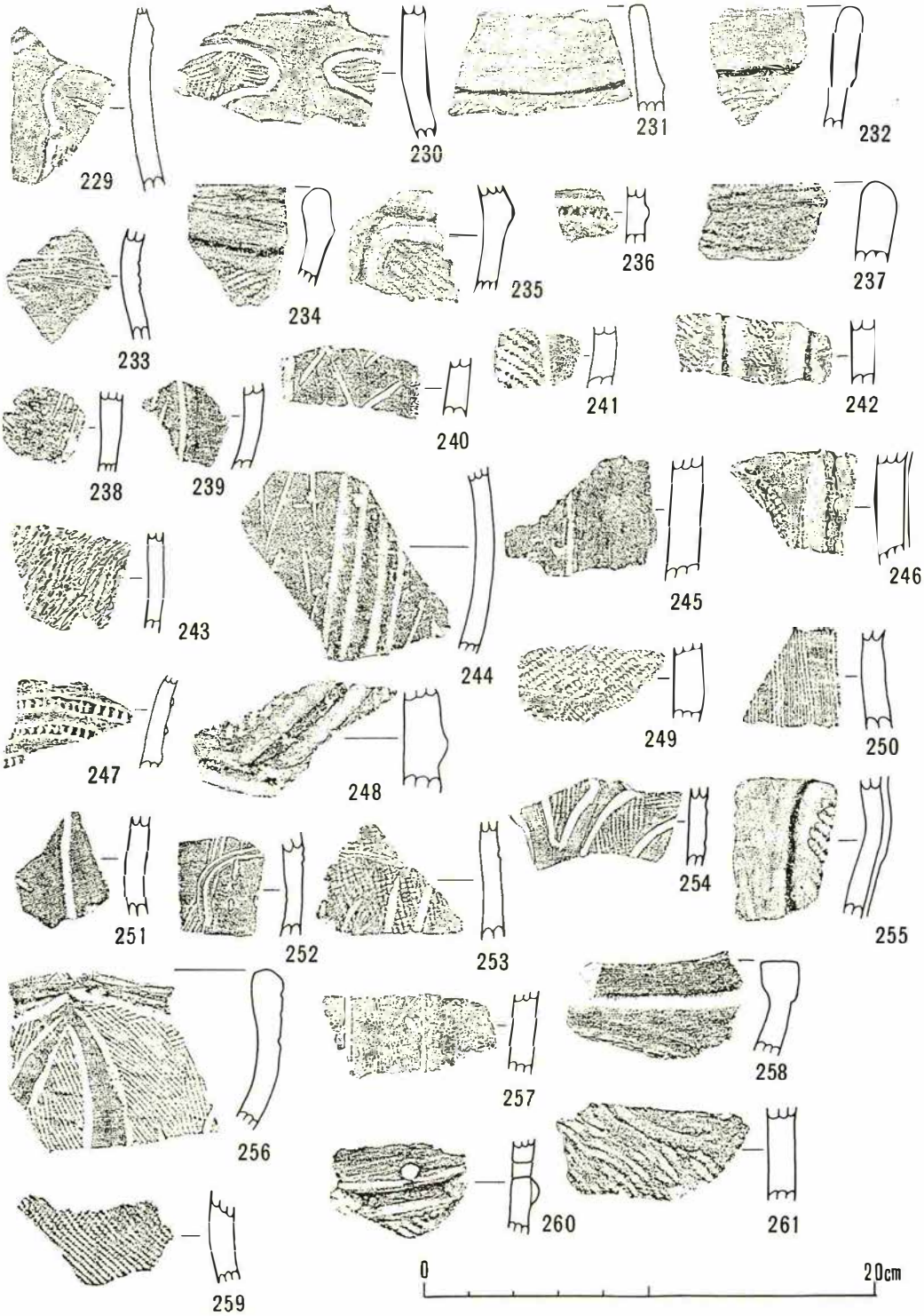
第179図　土壙出土土器（7）

49(183～194)、50(195～197)、51(198～202)、52(203～208)号土壙



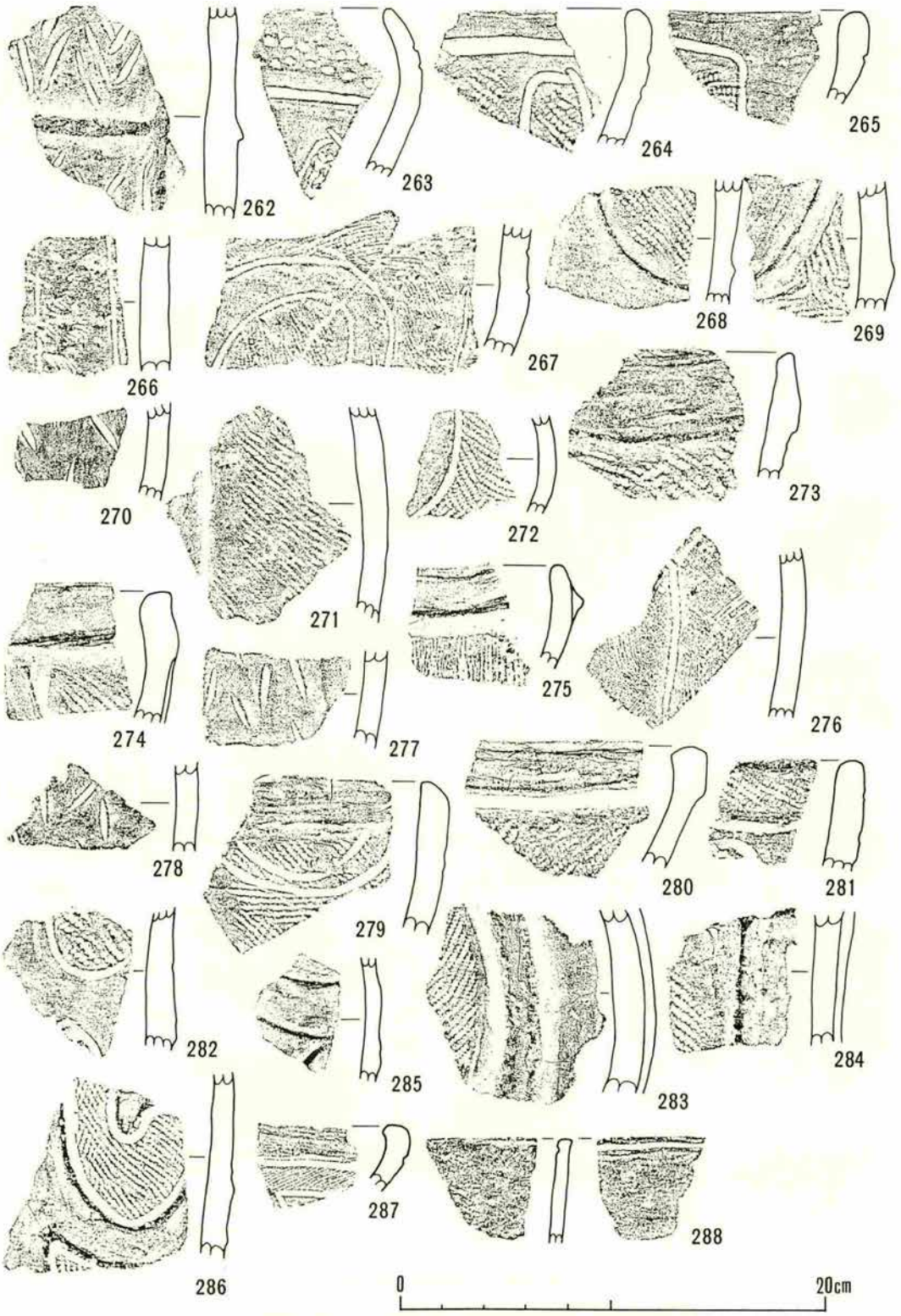
第180図　土壙出土土器（8）

53(209～220)、55(221～224)、56(225～228)号土壙

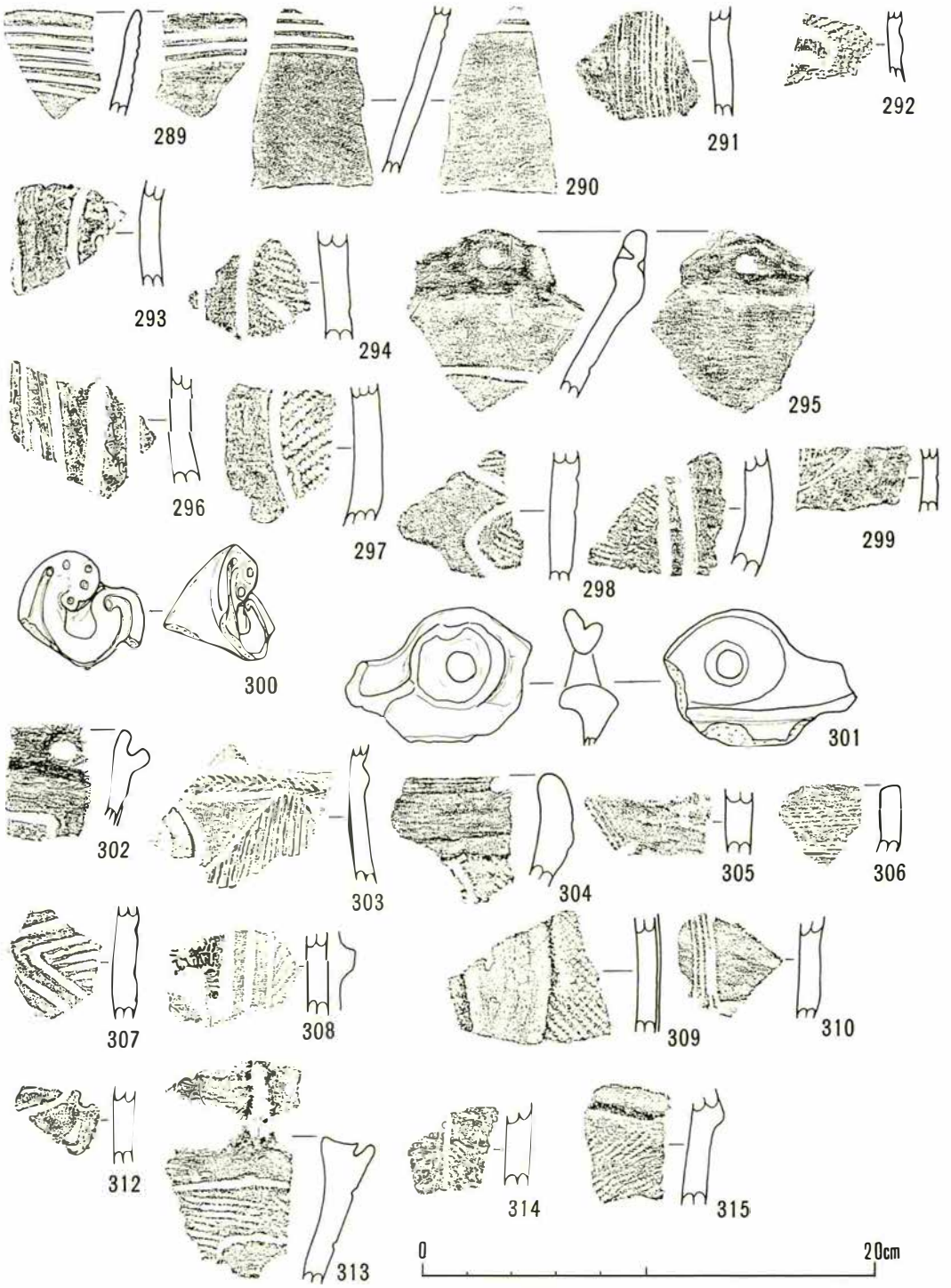


第181図　土壙出土土器（9）

57(229～232)、58(233～235)、59(236～237)、60(238～243)、
63(244～246)、66(247～248)、68(249)、70(250～256)、
71(257～261)号土壙

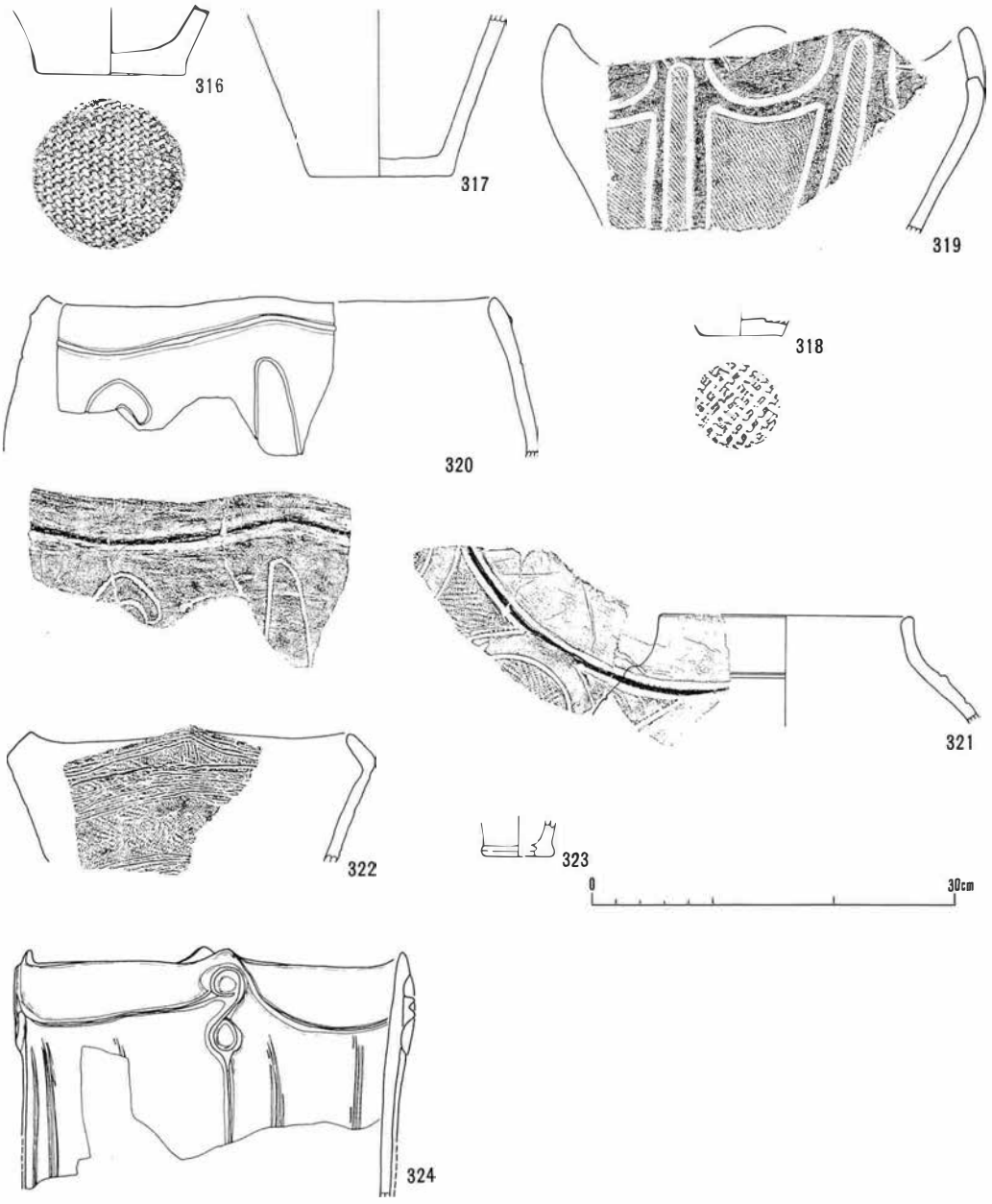


第182図　土壙出土土器（10）　73(262～269)、74(270～274)、75(275～288)号土壙

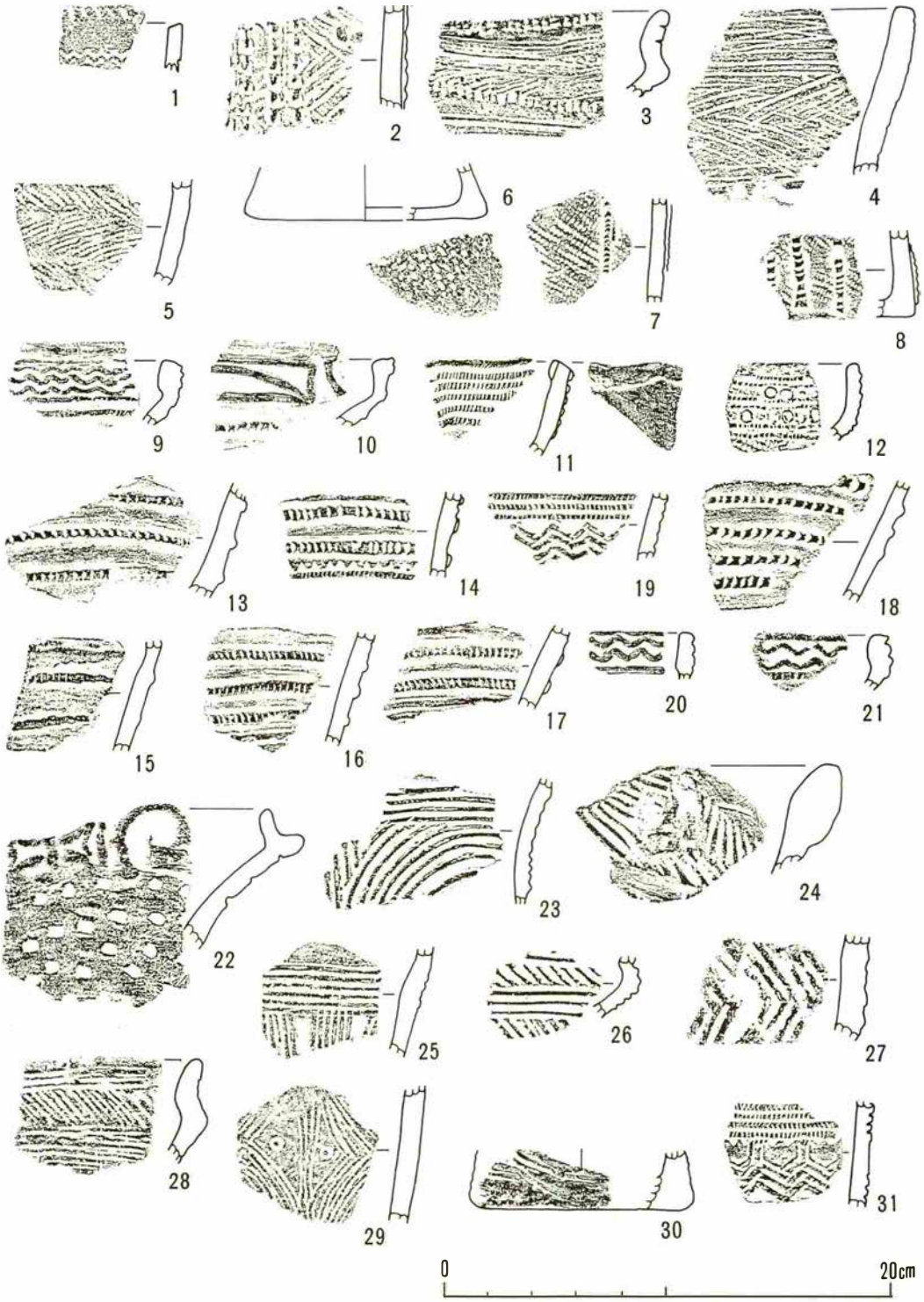


75(289 ,290)　76(291～295)　77(296～302)　80(303)
86(304～306)　92(307～310)　93(312～315)号土壙

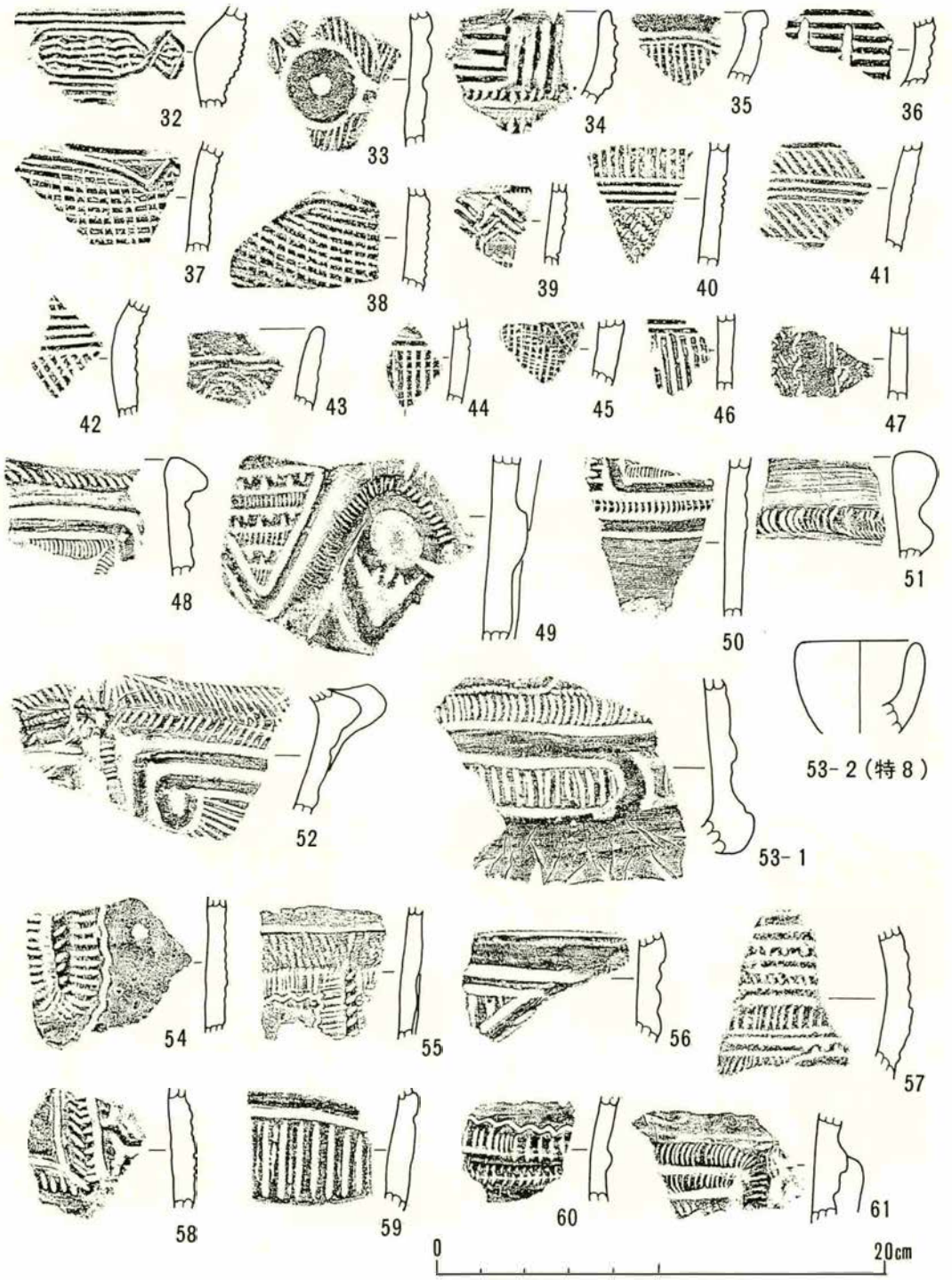
第183図　土壙出土土器（11）



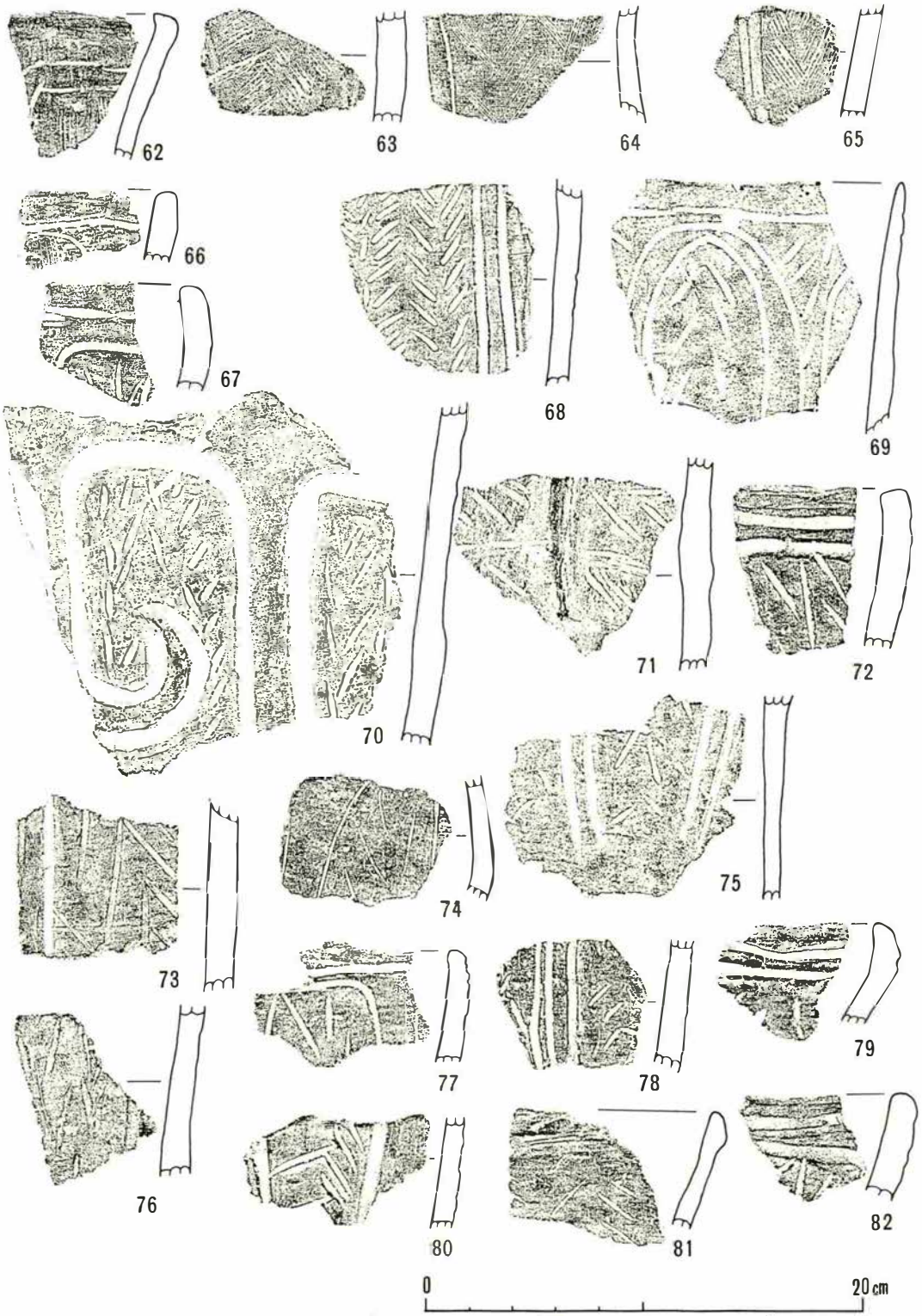
第184図　土壙出土土器（12）　47(316～319)、53(320)、85(322・323)土壙
特13(324)



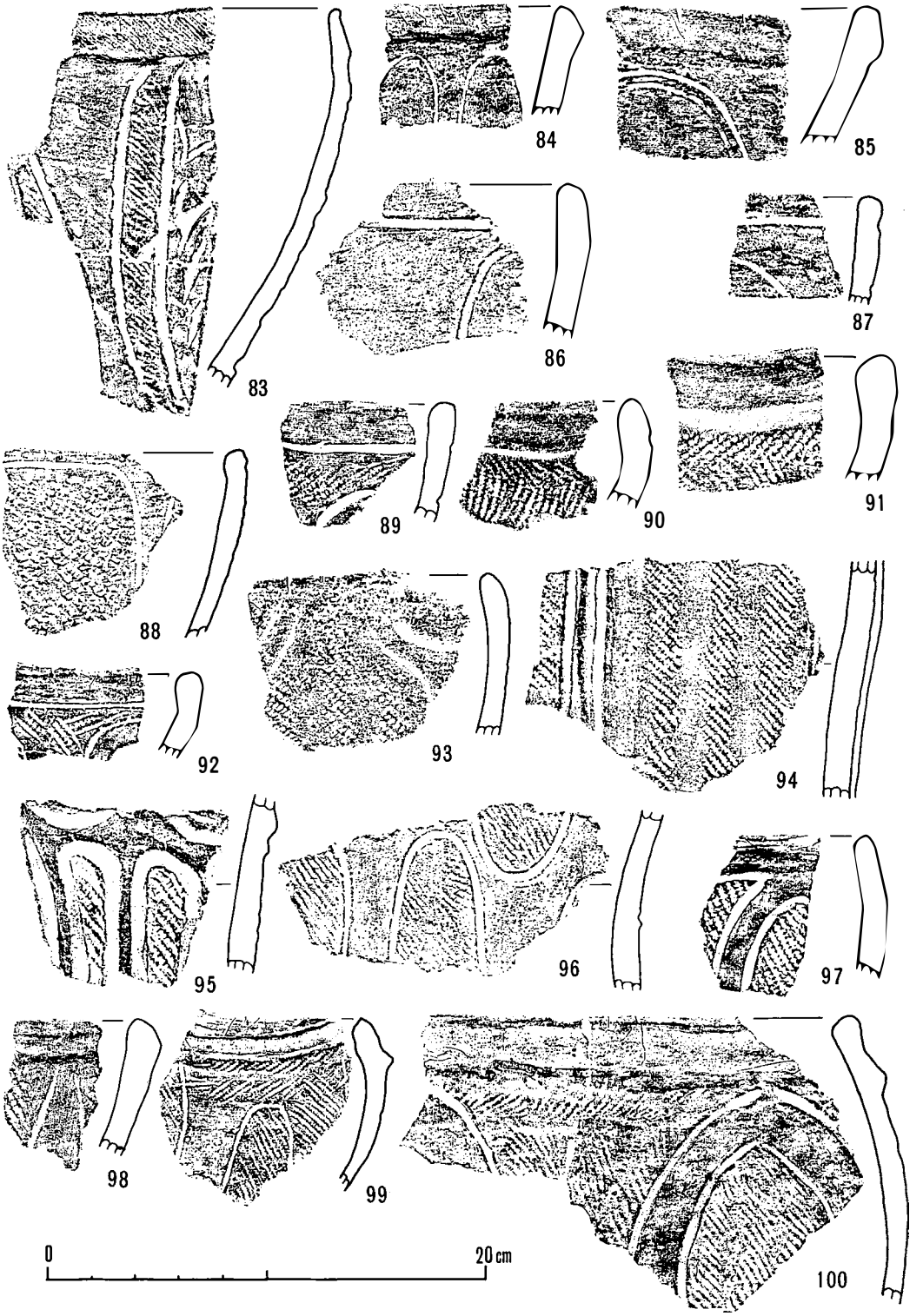
第185図　グリッド等出土土器１（縄文早前期）



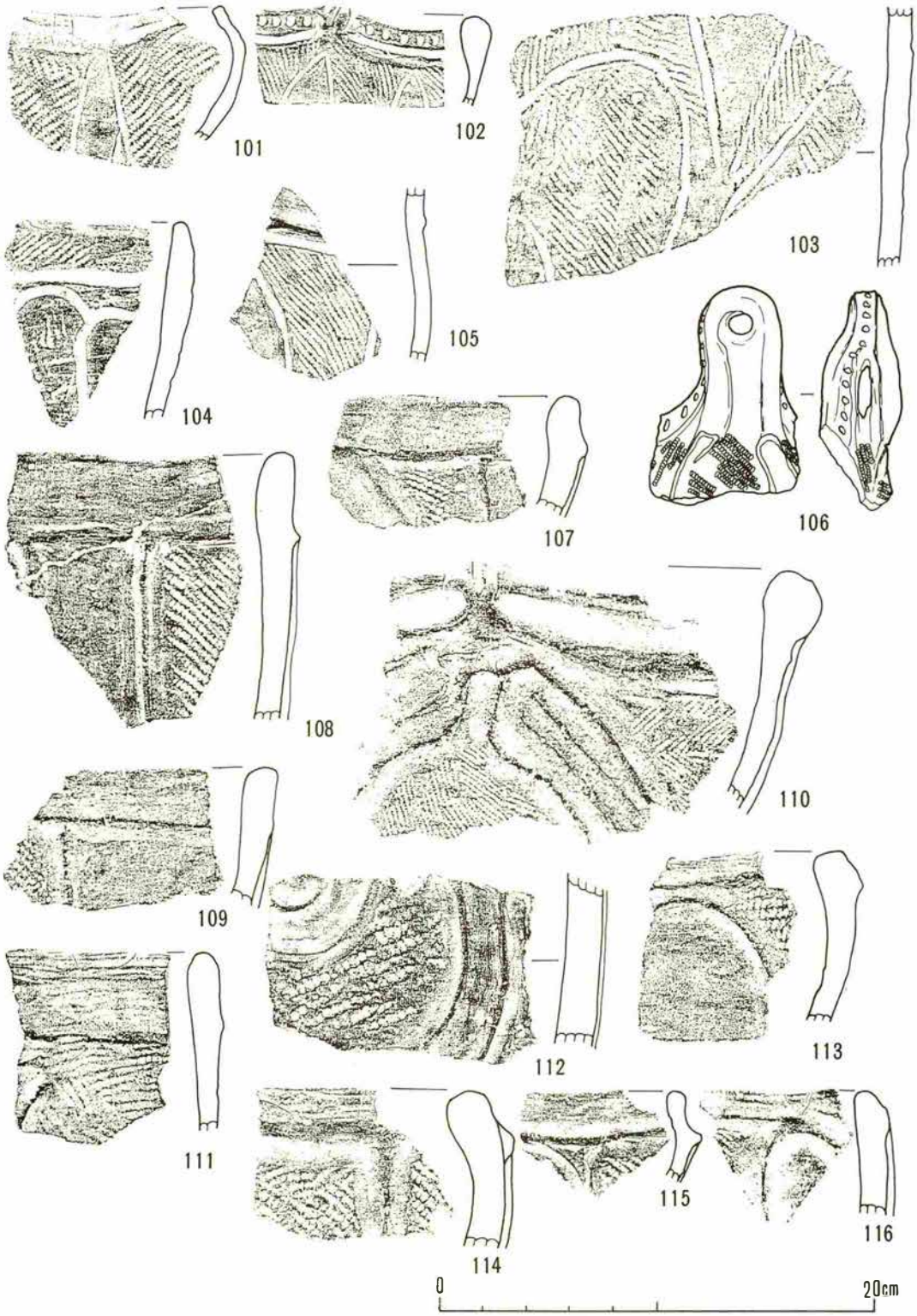
第186図　グリッド等出土土器２（縄文中期１）



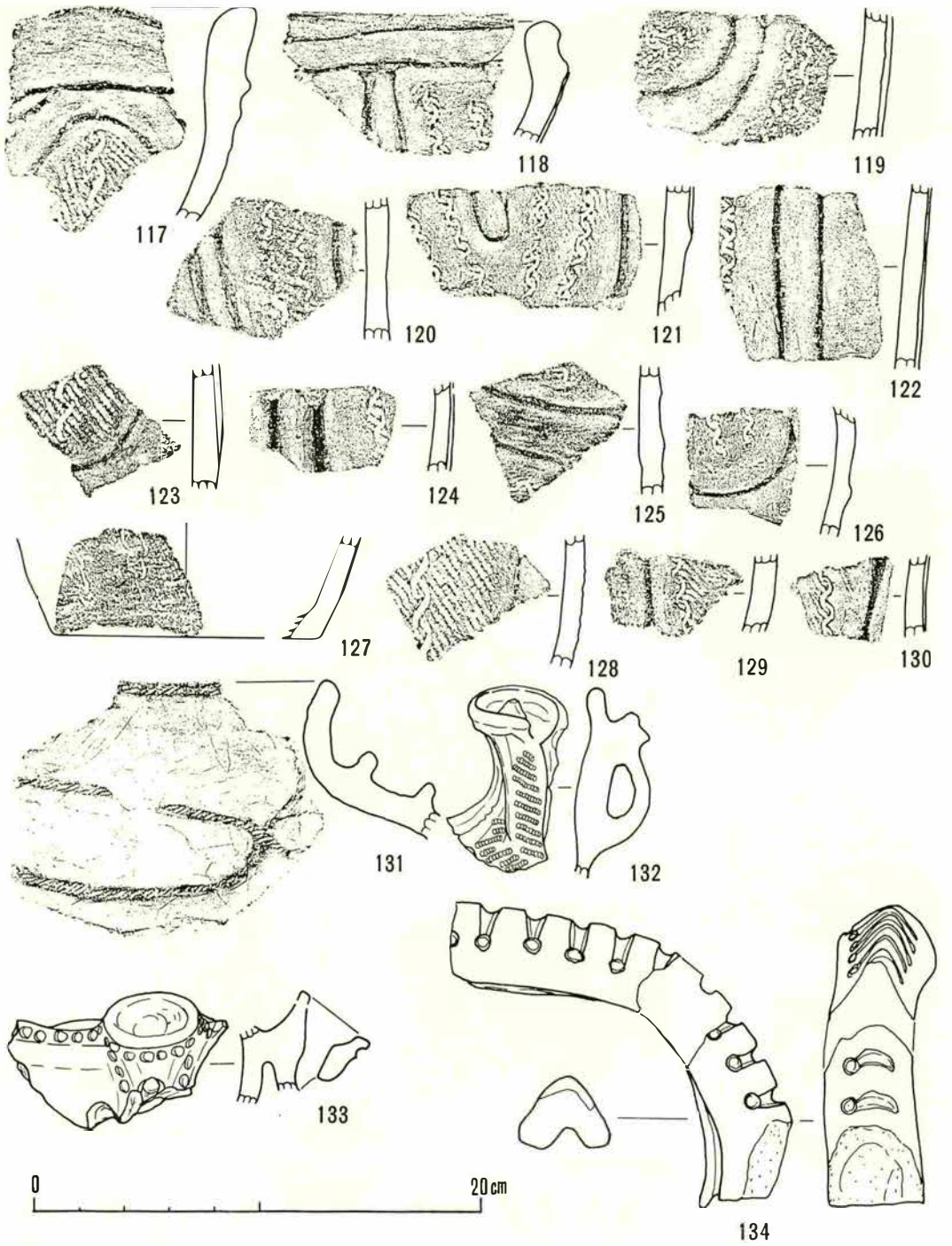
第187図　グリッド等出土土器３（縄文中期２）



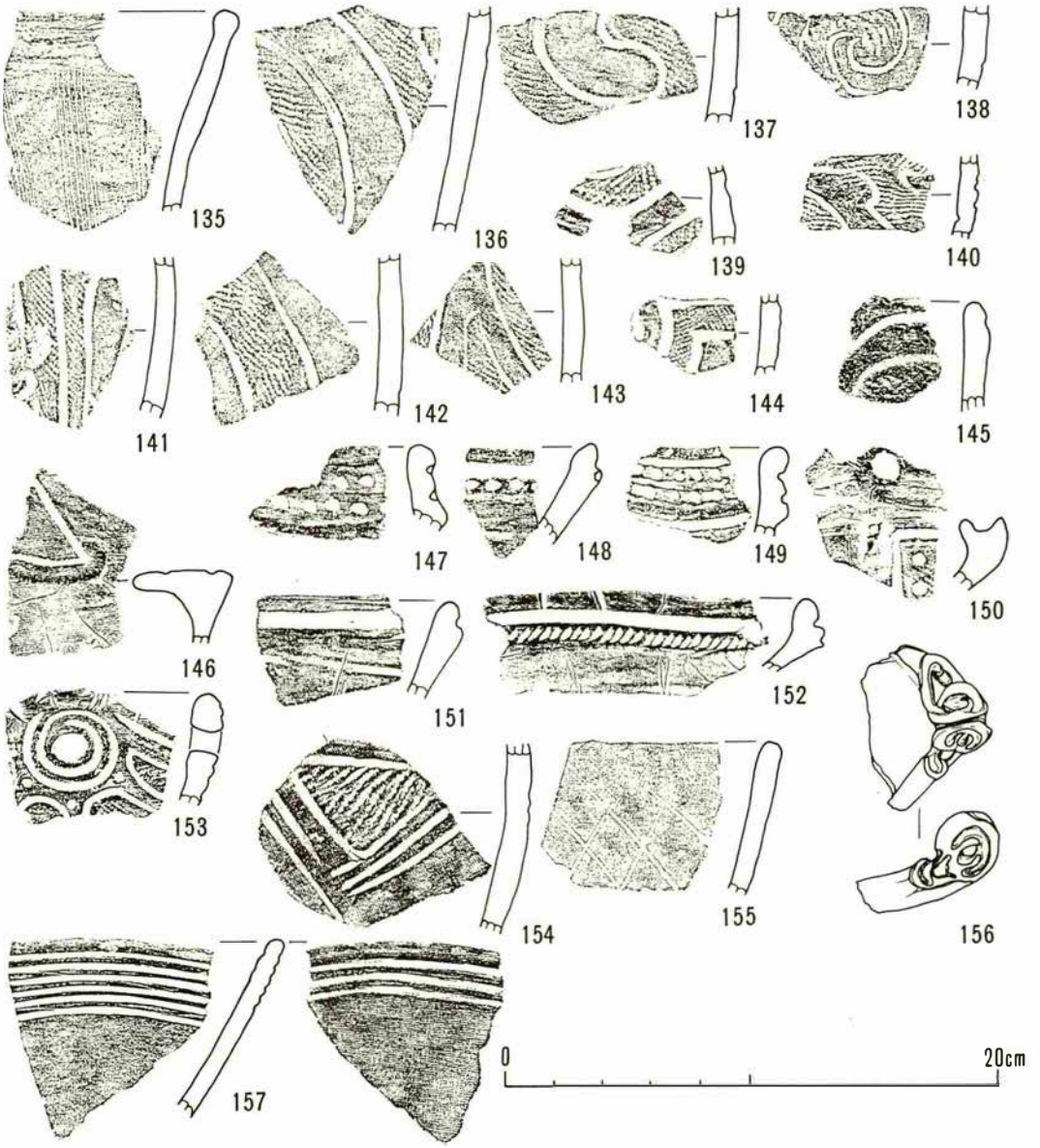
第188図　グリッド等出土土器４（縄文中期３）



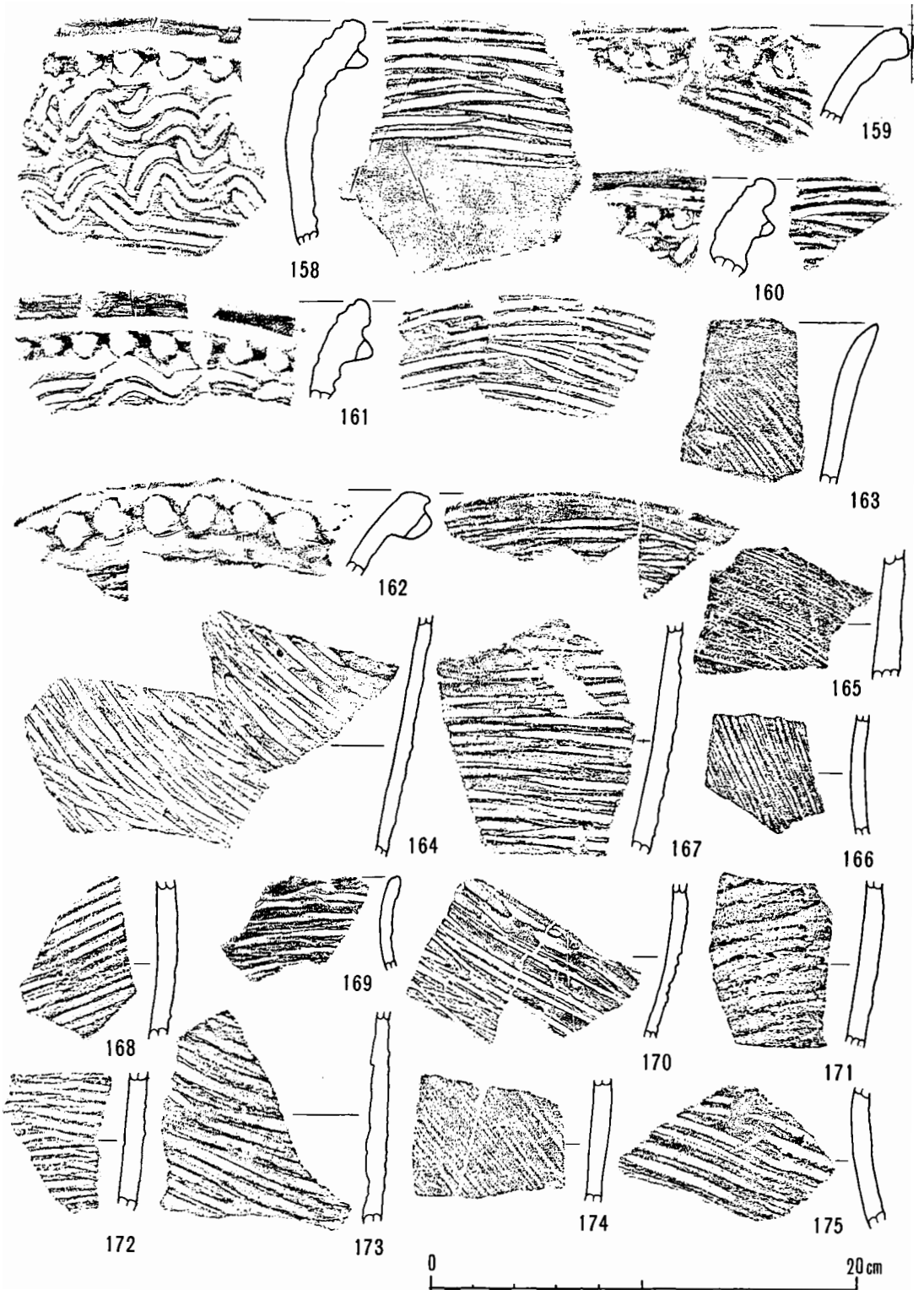
第189図　グリッド等出土土器５（縄文中期４）



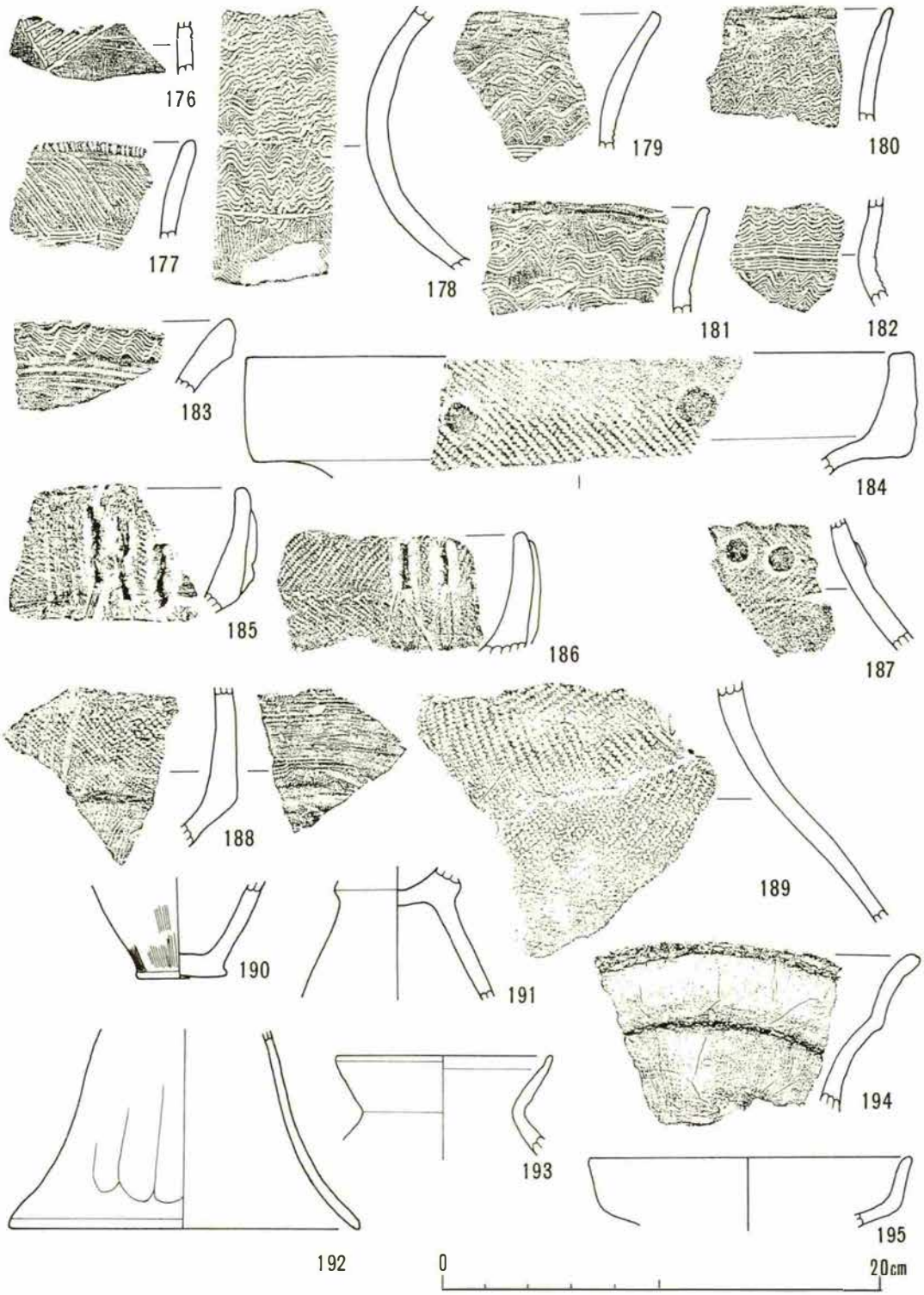
第190 図 グリッド等出土土器 6 （縄文中期 5 ）



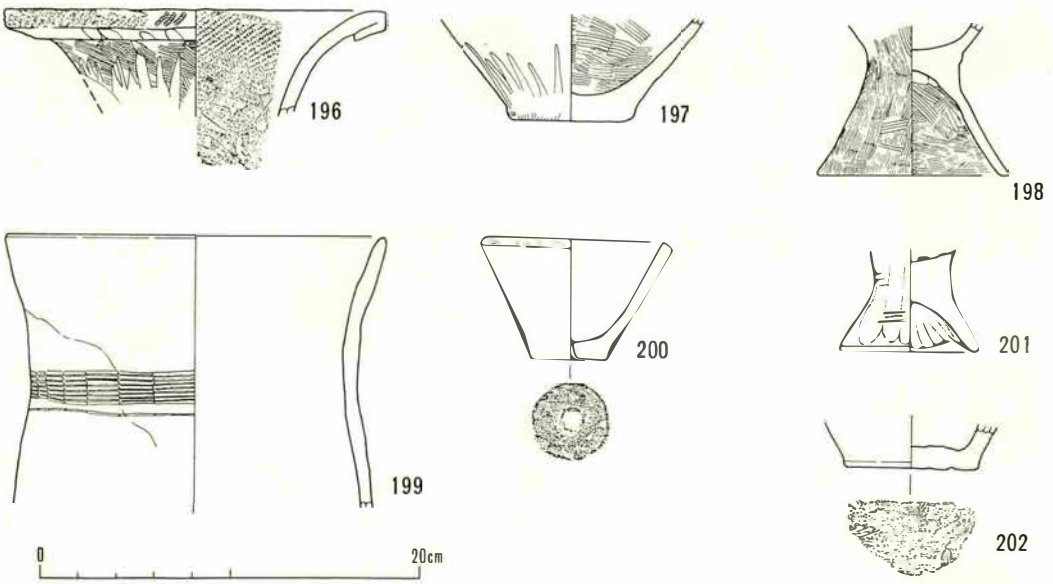
第191図　グリッド等出土土器７（縄文中期６～後期）



第192図　グリッド等出土土器８（弥生中期）



第193図　グリッド等出土土器９（弥生後期～土師）



第194図　グリッド等出土土器10

投げ込まれていた。

47号土壙

直径１ｍ、深さ95㎝の土壙で、土壙覆土中位に縄文中期の土器片が堆積している。

53号土壙

直径80㎝、深さ95㎝の土壙で、底面より石棒完形品、石皿破片等が出土した。祭祀的な遺構であろうか。

54号土壙

縄文中期終末の土器が土壙覆土にレンズ状堆積をしている。下層も若干土器は含まれるが、中層部に最も多いことから、埋設中途で土器が投げこまれたものであろう。

67号土壙

直径1.3ｍの皿状土壙で、深さ40㎝程である。縄文中期の土器片が南縁から中央にかけてレンズ状に堆積している。

74号土壙

特異な形をした土壙で、一辺80㎝の方形土壙の北・南・西方向に方形突出部をもっている。全体の規模は南北2.3ｍ、東西1.5ｍである。

85号土壙

不整形な土壙で、中央に板状の石と縄文土器片がある。

88号土壙

口径95㎝、底径1.1ｍのフラスコ状土壙で、底面は傾斜している。

89号土壙

28号住居に接して検出された土壙で、土はレンズ状の堆積をしている。土壙は直径1.6ｍ、

第8表　グリッド等出土土器出土位置一覧表

図面番号	No.	出土遺構	図面番号	No.	出土遺構	図面番号	No.	出土遺構	図面番号	No.	出土遺構
185	1	29住	（縄文中期1）	34	12溝		67	330＋10W-1		100	54土壙
グリッド出土土器（縄文早前期）	2	14溝		35	328＋84E-5		68	12溝E-6	189	101	54土壙
	3	330＋36E-4		36	12溝		69	表採	グリッド出土土器（縄文中期4）	102	54土壙
	4	329＋84E6		37	12溝		70	47土壙		103	53土壙
	5	表採		38	12溝		71	49土壙		104	3周溝
	6	329＋4E6		39	特10		72	12溝		105	54土壙
	7	329＋68E-4		40	8溝		73	53土壙		106	表採
	8	12溝W-5		41	330＋48E-1		74	329＋84E-1		107	12溝
	9	329＋44W-2		42	330＋48E-4		75	53土壙		108	特8
	10	329＋86W-3		43	表採		76	グリッド		109	330W溝
	11	329＋32E-370		44	330＋48E-3		77	329＋84E-1		110	330＋8E-2
	12	表採		45	12溝		78	330＋28W-1		111	特8
	13	329＋86W-3		46	12溝		79			112	特8
	14	3方形		47	329＋48W-3		80	329＋80E-4		113	329＋80E-4
	15	12溝		48	330＋56E-2		81	グリッド		114	15溝
	16	329+80E-470		49	330＋60E-2		82	329＋80E-4		115	8溝
	17	表採		50	330＋60E-3	188	83	330＋16W-1		116	329＋84E-6
	18	12溝W4		51	329＋00W-3	グリッド出土土器（縄文中期3）	84	330＋24W-2	190	117	330＋24W-2
	19	329＋68E-4		52	330＋60E-2		85	3周溝	グリッド出土土器（縄文中期5）	118	5周溝
	20	321＋68E-6		53	330＋60E-1		86	3周溝		119	12溝E-6
	21	特8		54	329＋00W-3		87	特2		120	49土壙
	22	330＋52		55	330＋64E-2		88	表採		121	21土壙
	23	12溝		56	329＋00W-3		89	12溝		122	49土壙
	24	12溝		57	329＋44W-2		90	13溝		123	329＋84E-1
	25	330＋80E-1		58	329＋96W-2		91	3周溝		124	49土壙
	26	12溝		59	329＋48W-3		92	63土壙		125	グリッド
	27	330＋60E-1		60	8溝		93	表採		126	329＋76
	28	329＋60クロ		61	1集石		94	329＋92E-2		127	12溝
	29	329＋40W-3	187	62	12溝W-5		95	グリッド		128	48土壙
	30	329＋48E-1	グリッド出土土器（縄文中期2）	63	表採		96	23住B		129	49土壙
	31	表採		64	〃		97	329＋68E		130	49土壙
186	32	3溝		65	12溝W-2		98	3周溝		131	329＋64W-3
グリッド出土土器	33	336＋46E-2		66	12溝		99	329＋80E-4		132	53土壙

図面番号	No.	出土遺構	図面番号	No.	出土遺構	図面番号	No.	出土遺構	図面番号	No.	出土遺構
	133	47 土壙		150	329＋40 E - 6		168	330＋80 E		185	329＋60 E - 5
	134	330＋24W - 2		151	特 8		169	330＋60 E - 2		186	329+56E-370
191	135	表採		152	特 8		170	330＋80		187	329＋48 E - 4
グリッド出土土器（縄文中～後期）	136	12 溝		153	15 溝		171	12 溝		188	表採
	137	12 溝		154	表採		172	表採		189	12 溝
	138	12 溝		155	〃		173	330＋80 E		190	グリッド
	139	329＋96W - 5		156	329＋40W - 3		174	特 3		191	12 溝
	140	表採	192	157	329＋44W - 3		175	330＋60 E - 2		192	12 溝
	141	328＋84 E - 5	グリッド出土土器（弥生中期）	158	グリッド	193	176	330＋20W - 4		193	329＋96W - 2
	142	12 溝		159	330＋60 E - 2	グリッド出土土器（弥生後～土師）	177	3 周溝		194	グリッド
	143	328＋92W - 1		160	330＋80		178	12 溝W - 1		195	329＋60
	144	13 溝		161	グリッド		179	10 溝	194	196	320＋8 E
	145	表採		162	グリッド		180	12 溝		197	329＋44W2
	146	329＋40W - 3		163	特 3		181	10 溝		198	表採
	147	329＋80 E - 4		164	330＋80 E		182	330＋80		199	370＋16W
	148	329＋68 E - 1		165	表採		183	11 溝		200	329＋52W4
	149	329＋80		166	12 溝		184	329+56W- 20		201	330＋80
				167	330＋80 E					202	表採

深さ50cm、底径80cmの皿状土壙である。

90号土壙

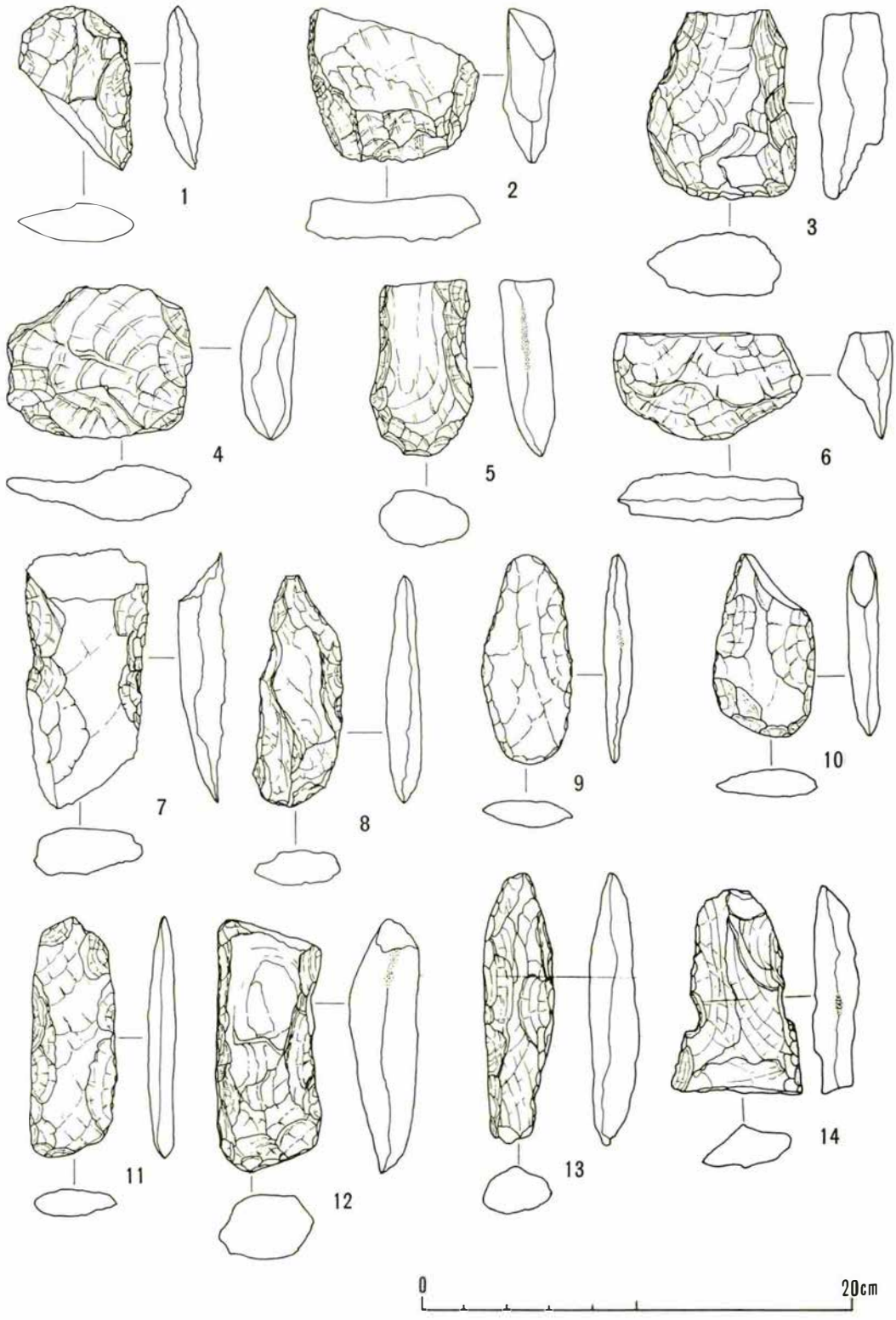
86号土壙と切り合うもので、29号住居の北側に位置する。口径より底径の方が広く、浅いフラスコ状を呈する。

91号土壙

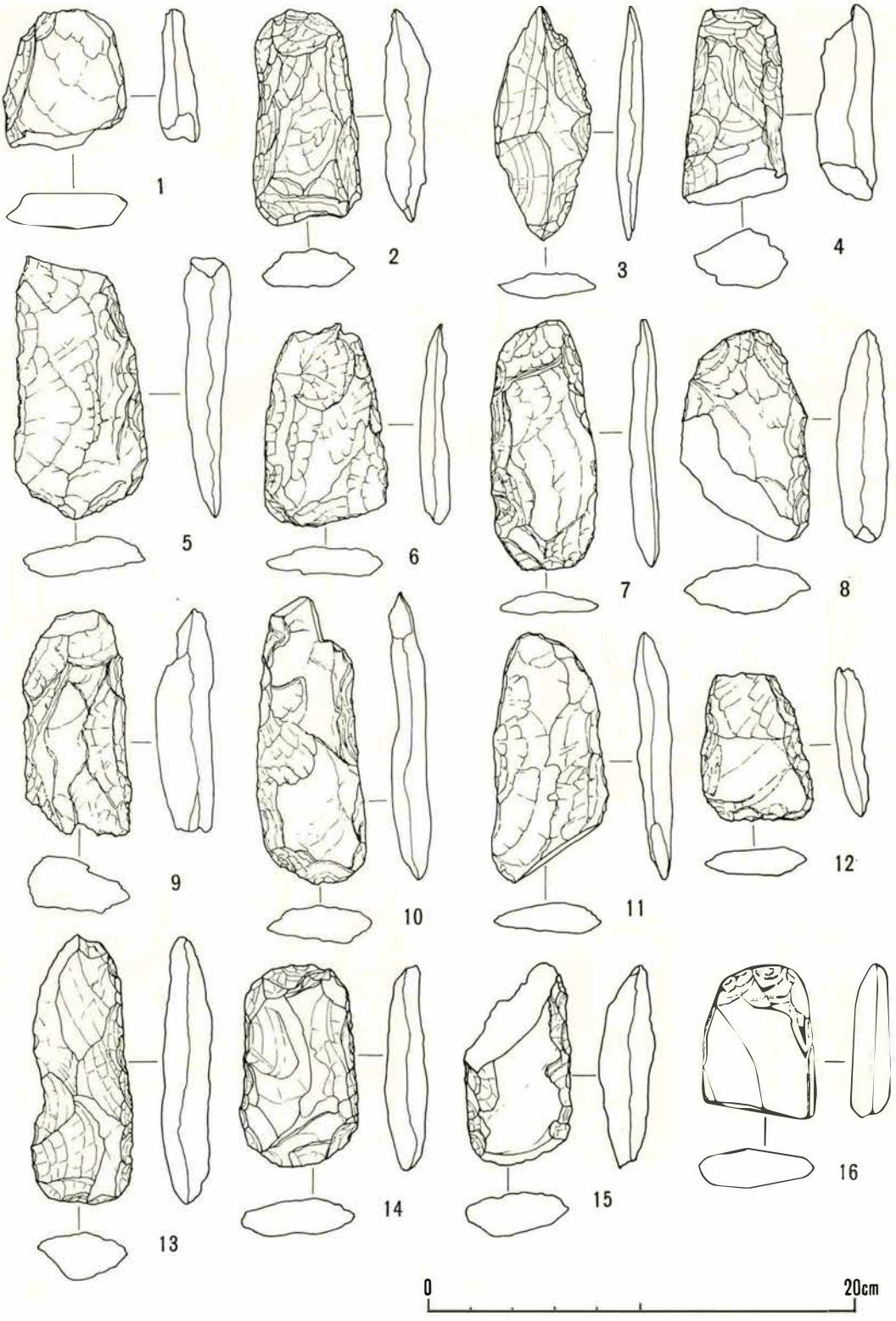
3基の土壙を含めたものである。浅い部分は、一辺1.6ｍの方形プランであり、最も深い部分は、長径2.5ｍ、短径1.3ｍ、深さ1.4ｍの長円形土壙である。

93号土壙

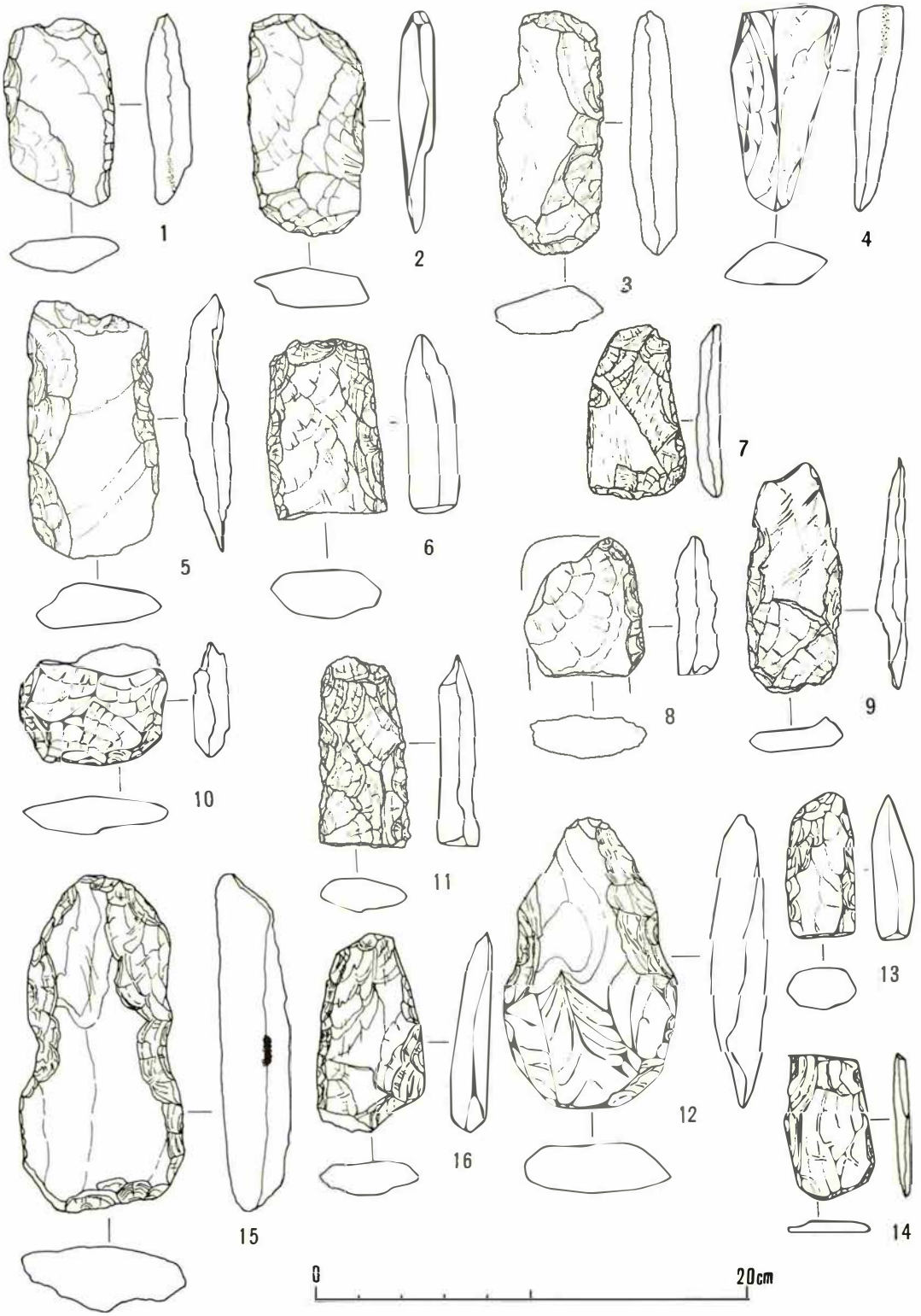
長径2.2ｍ、短径1.75ｍのタライ状土壙で、中央覆土中に40cm程の礫がある。



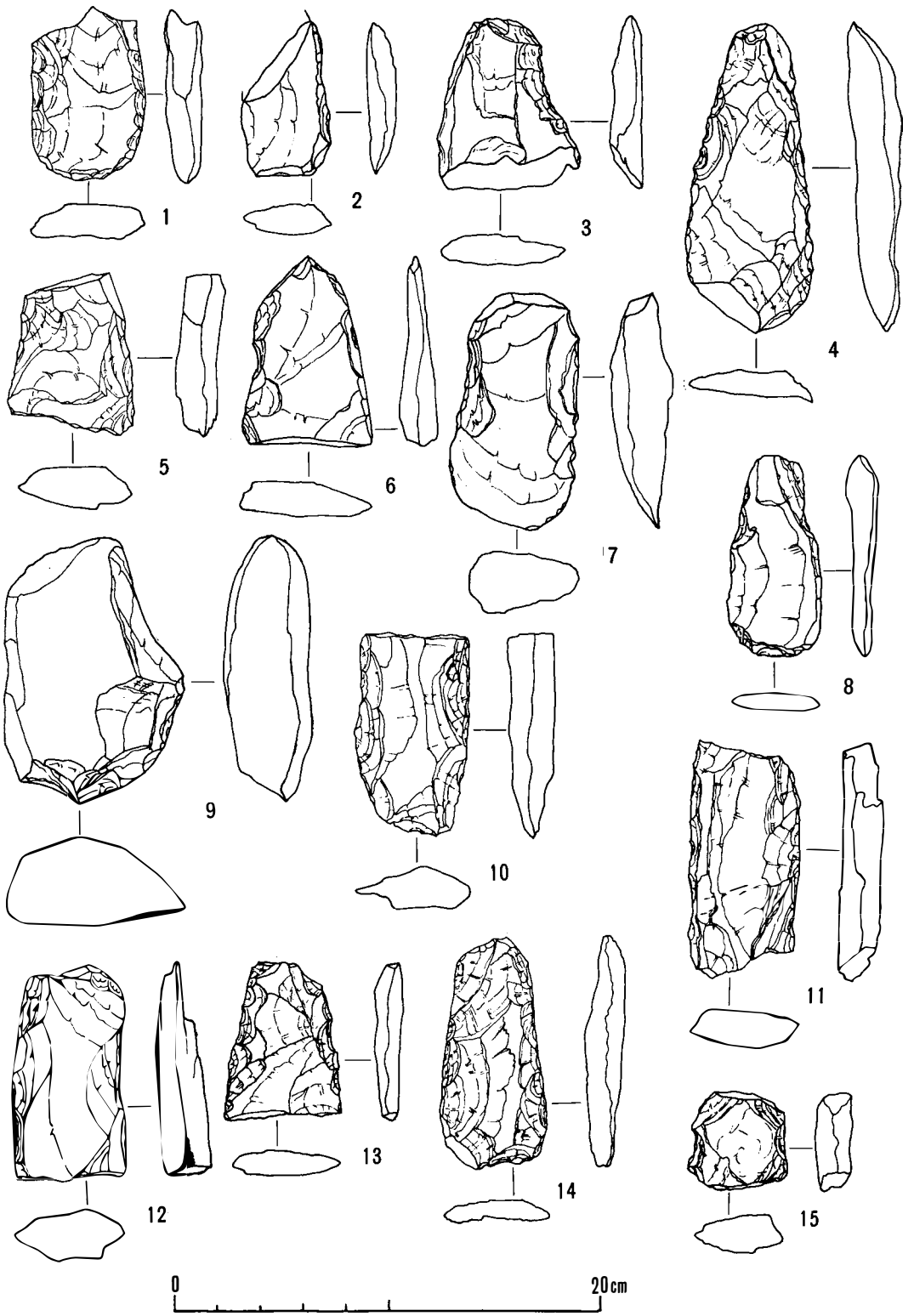
第195図　住居出土石器（1）



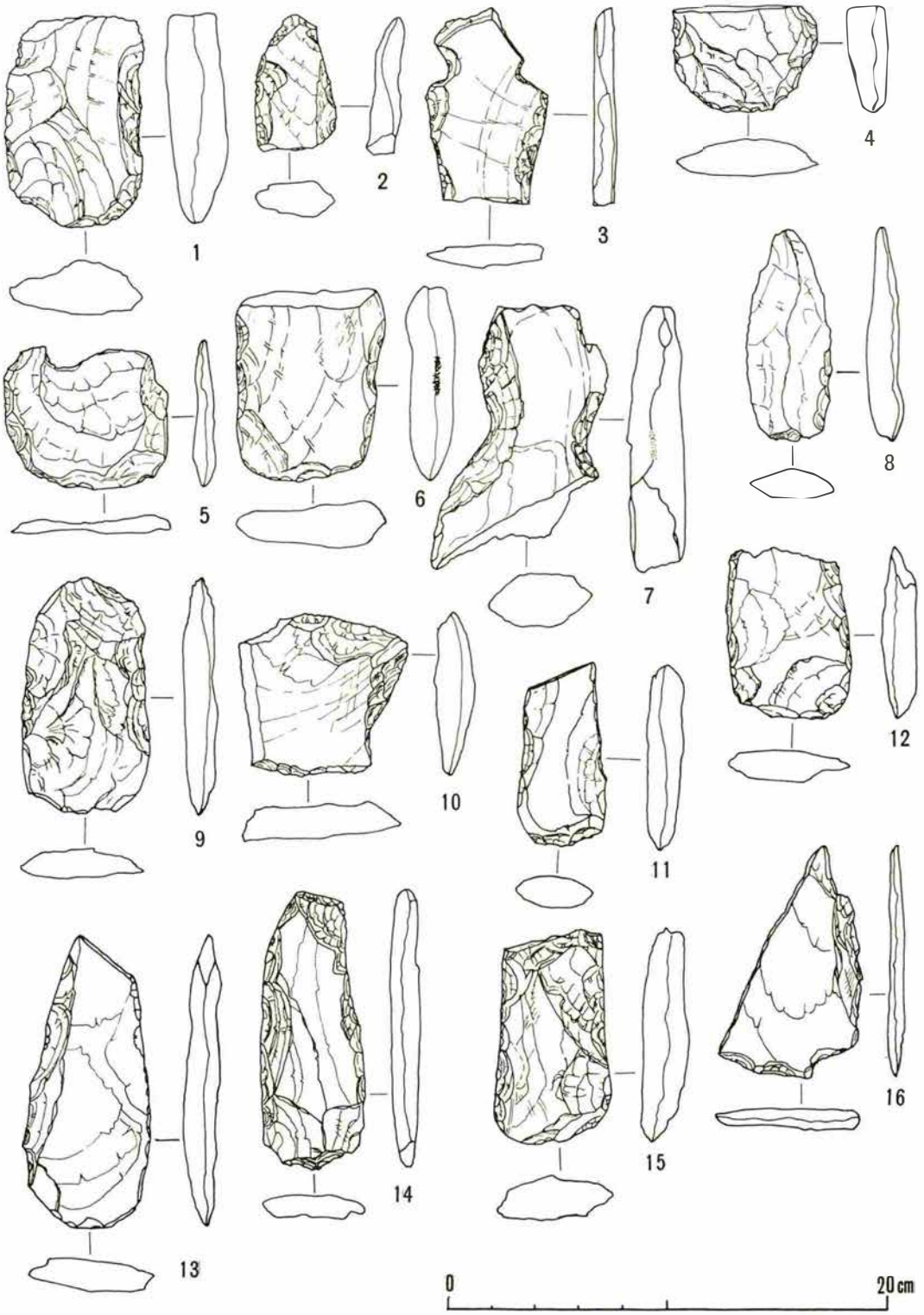
第196図　住居出土石器（２）



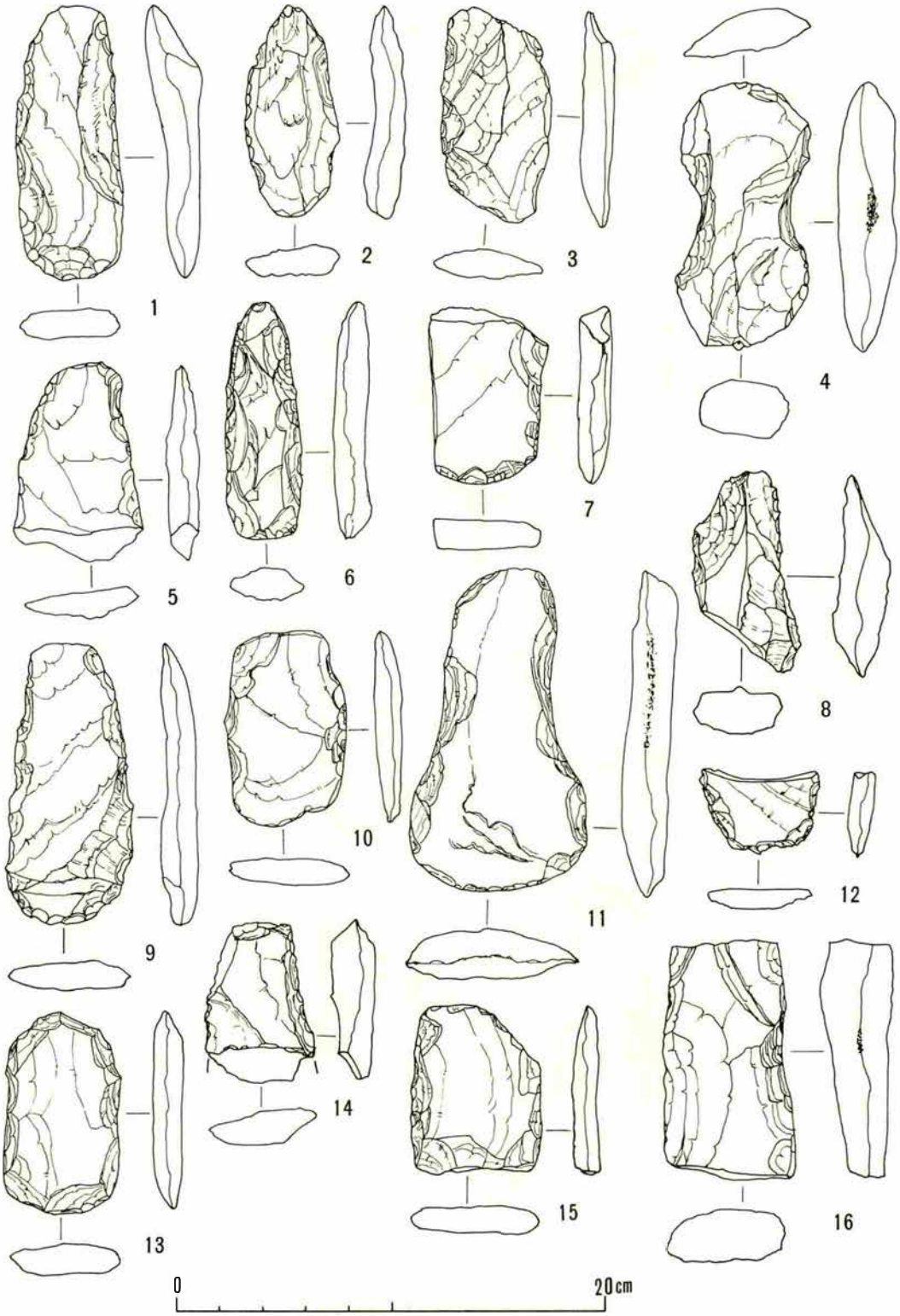
第197図　住居出土石器（３）



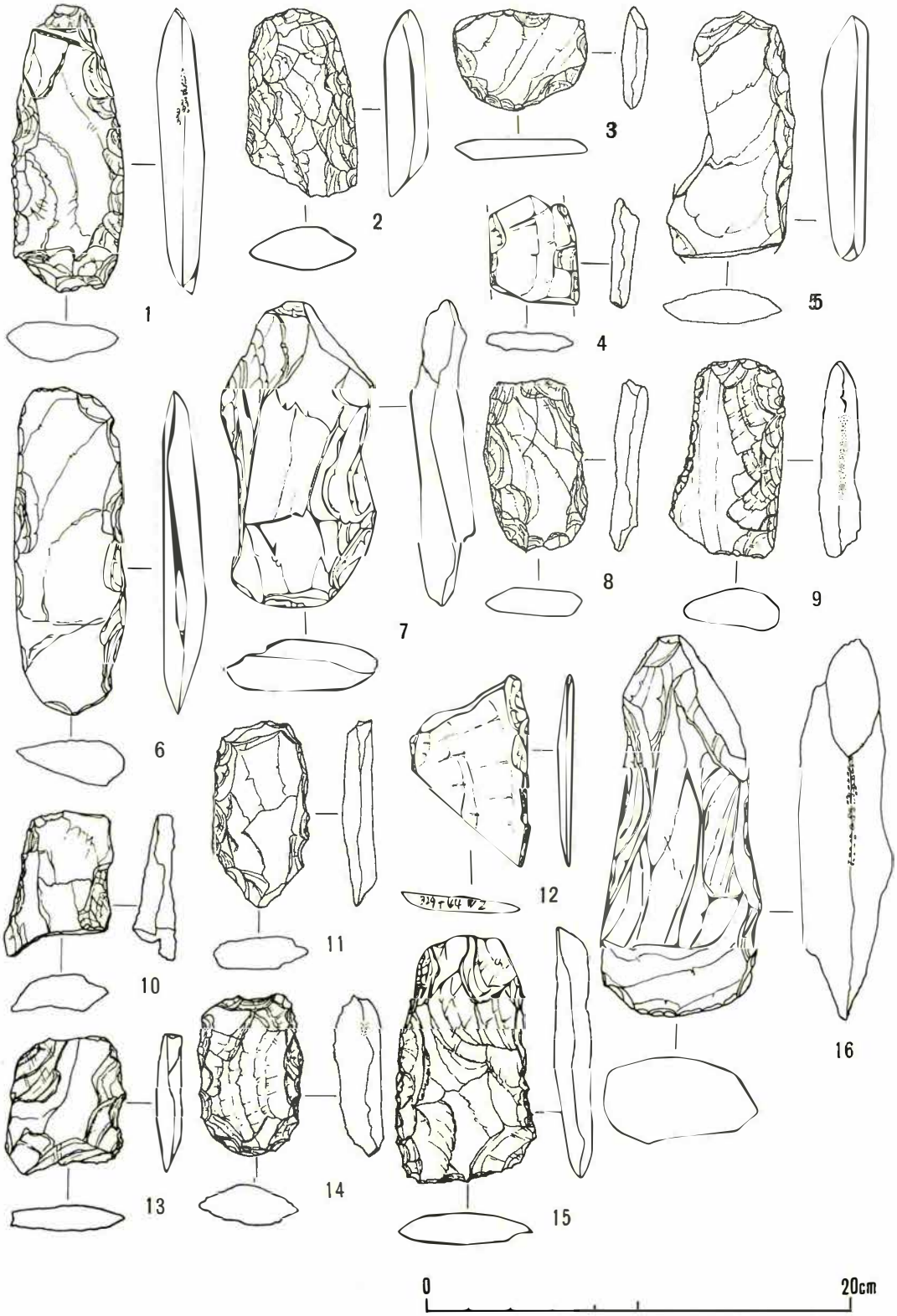
第198図　住居、その他、出土石器（４）



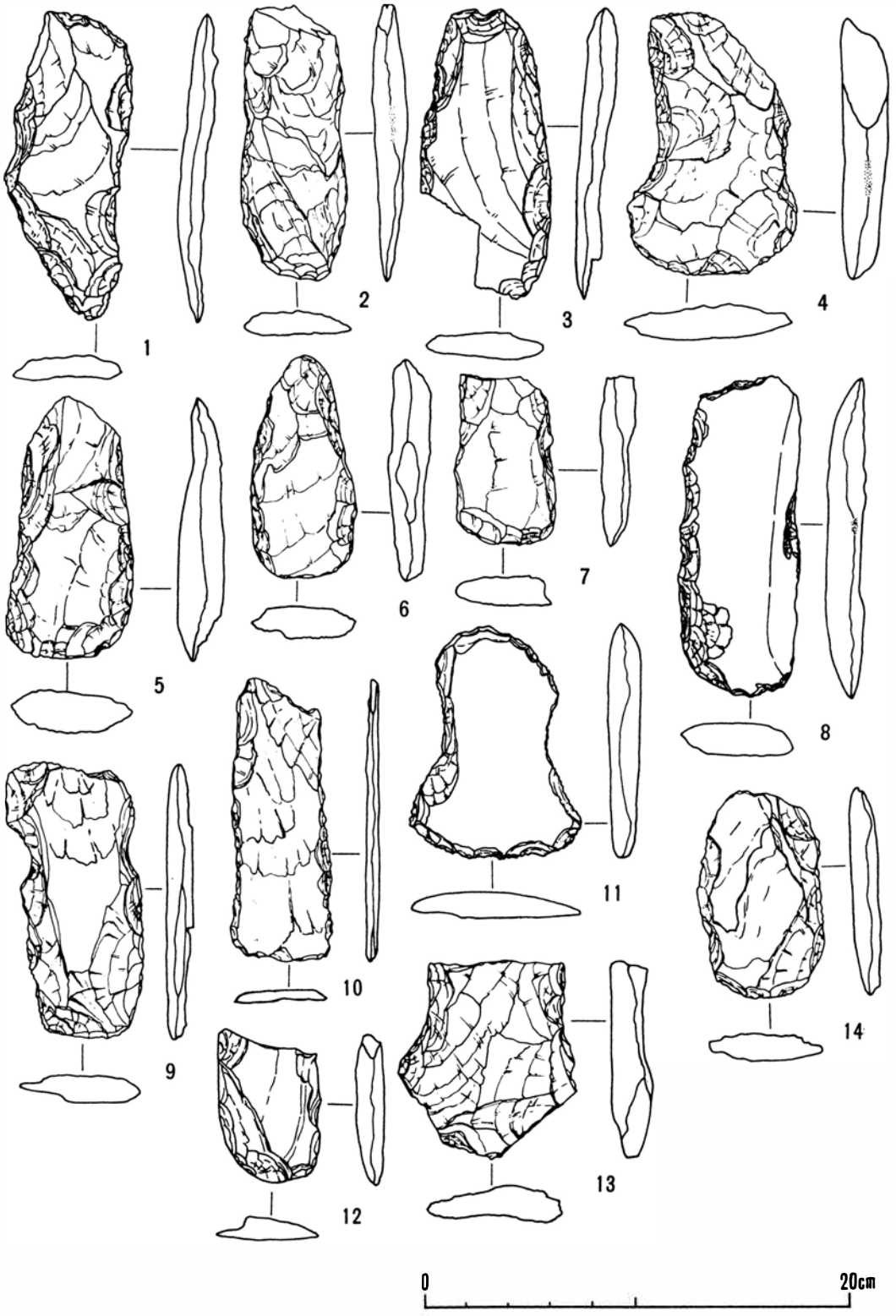
第199図　その他、出土石器（５）



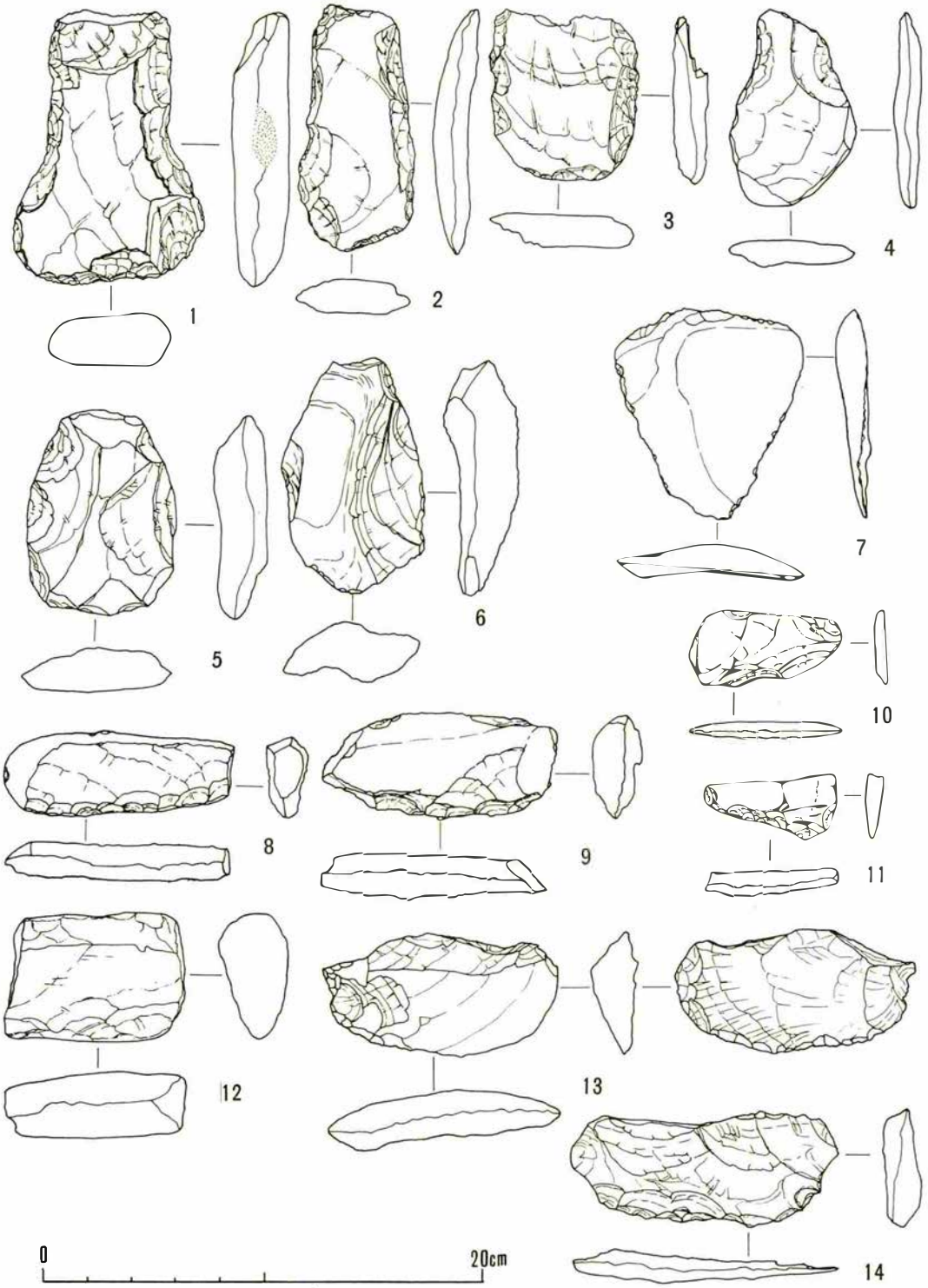
第200図　その他、出土石器（６）



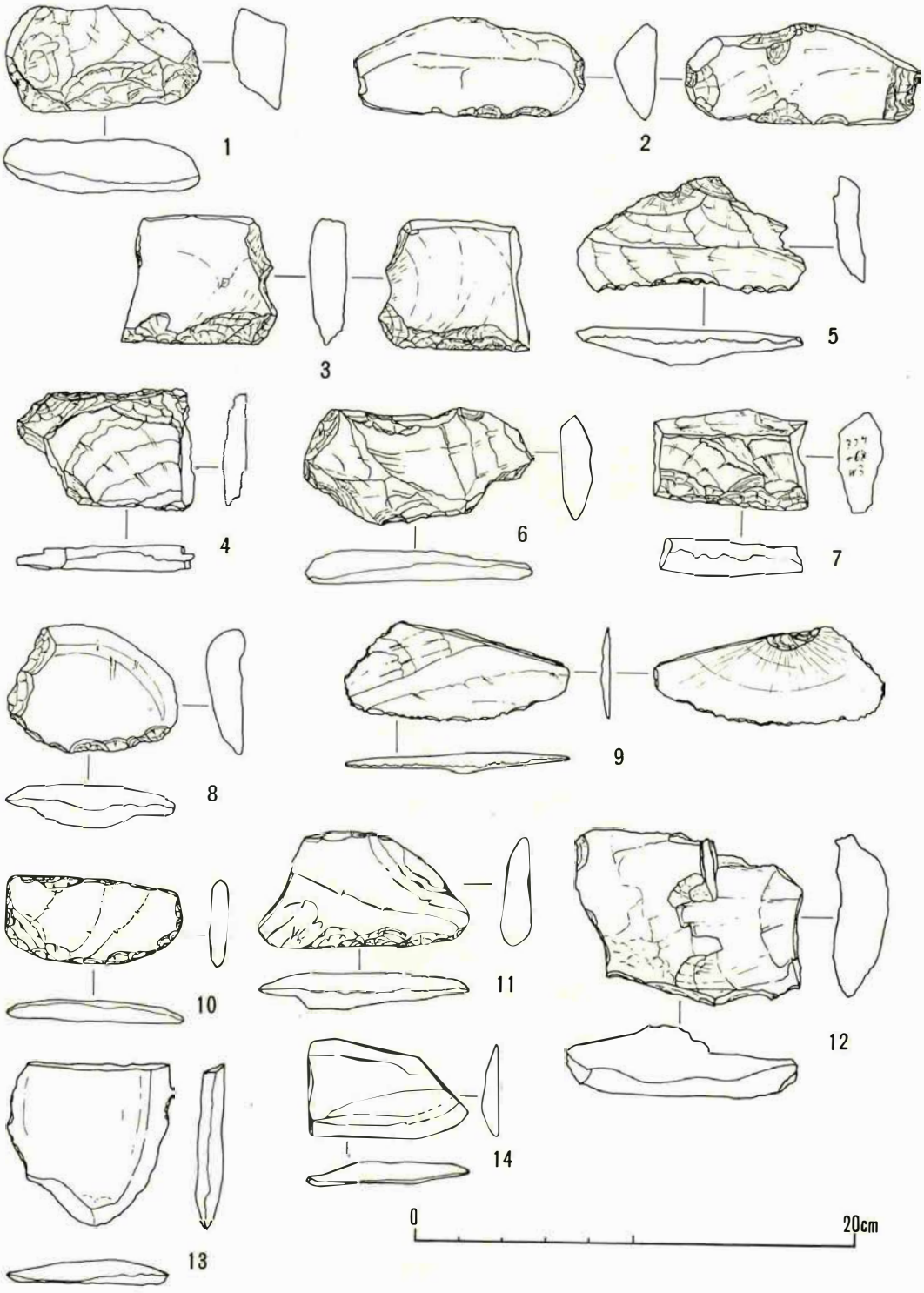
第201図　その他、出土石器（7）



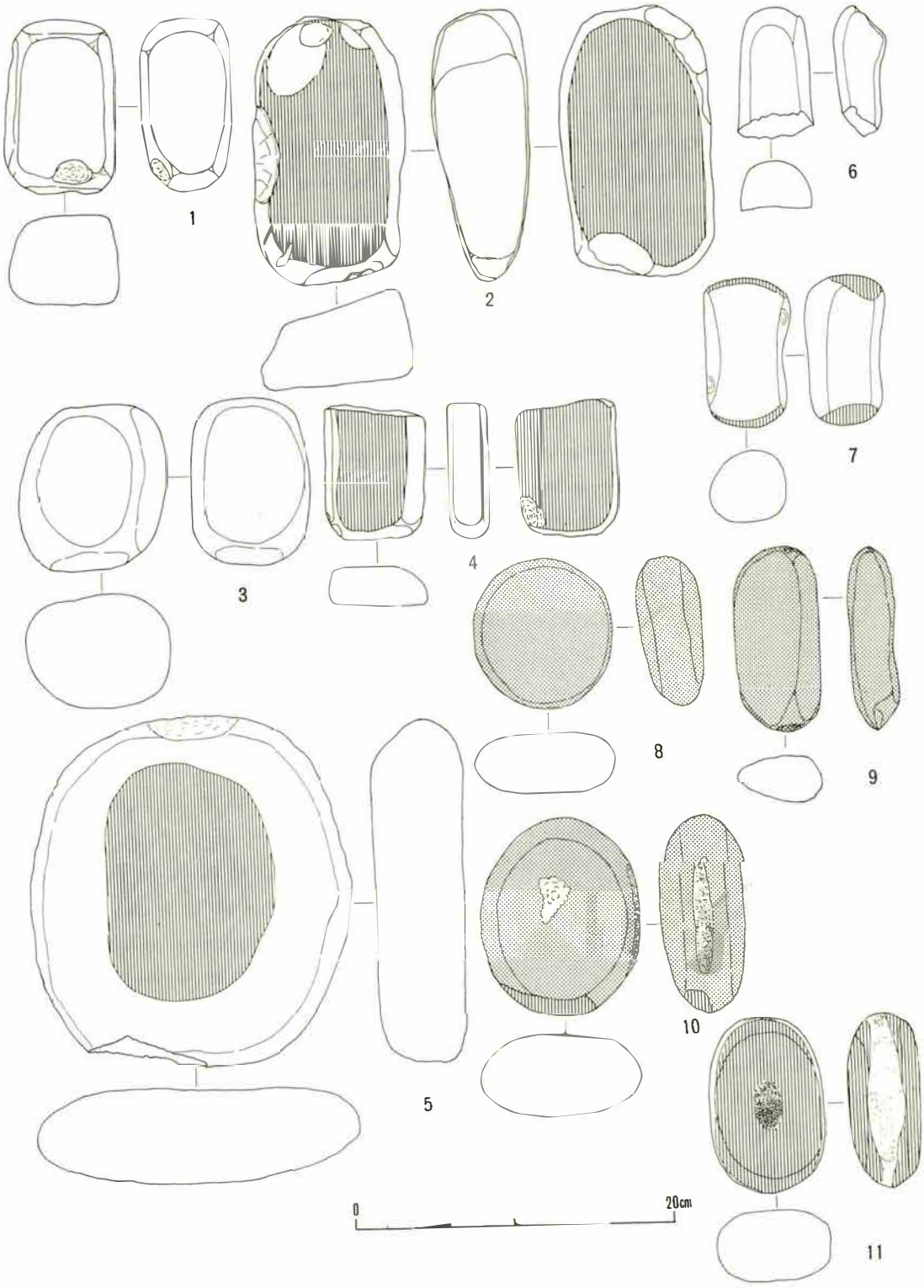
第202図　その他、出土石器（８）



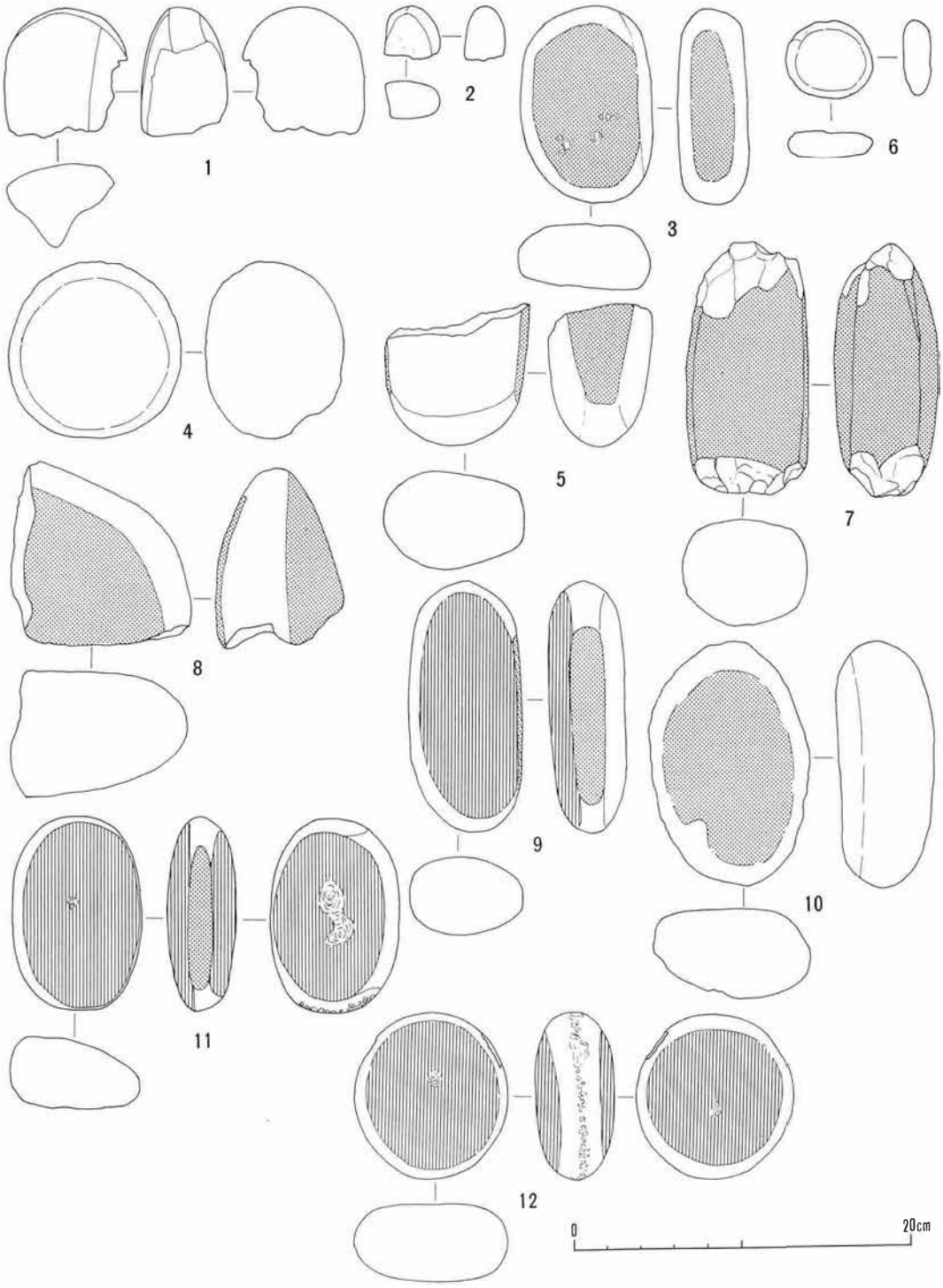
第203図　その他、出土石器（9）



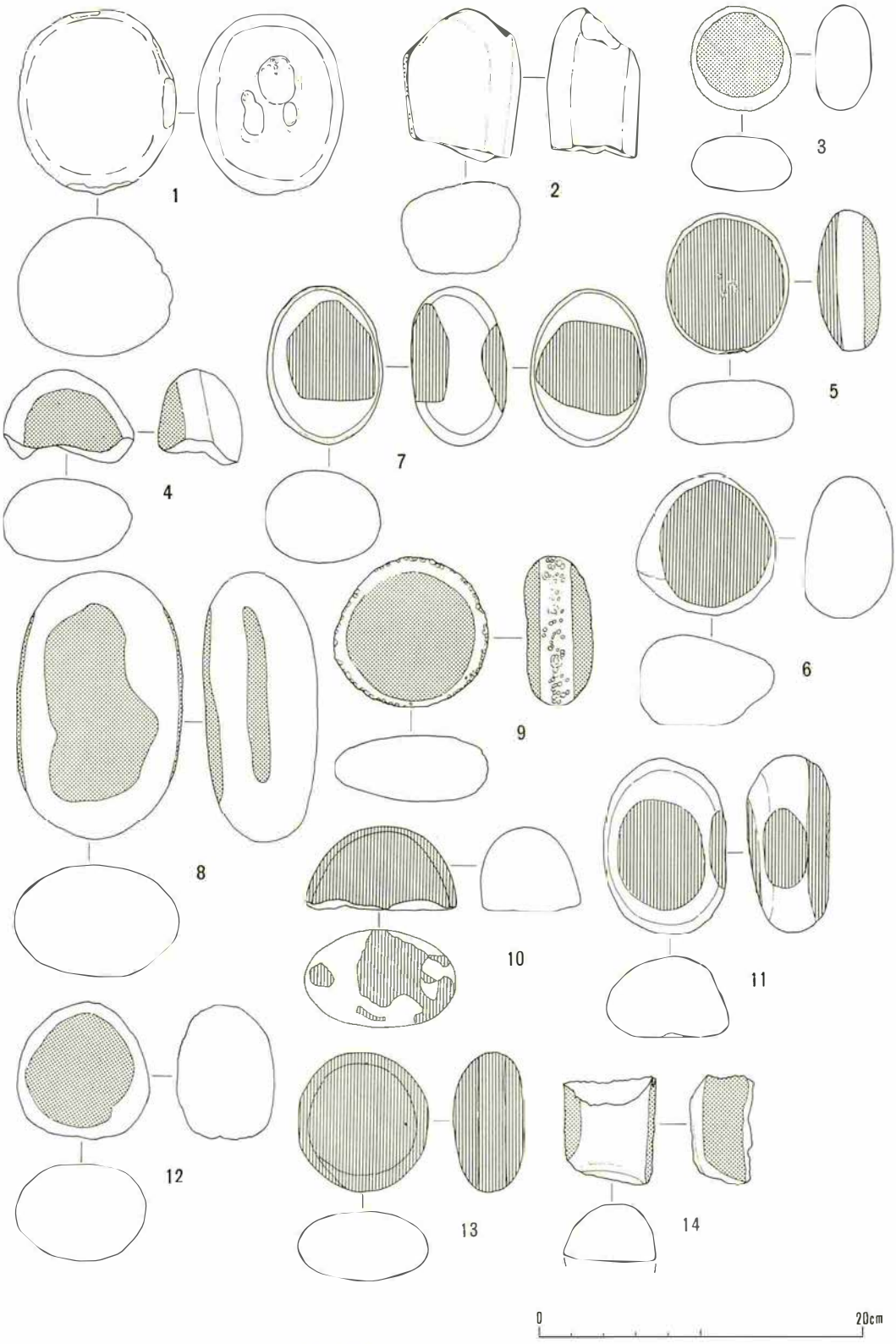
第204図　その他、出土石器（10）



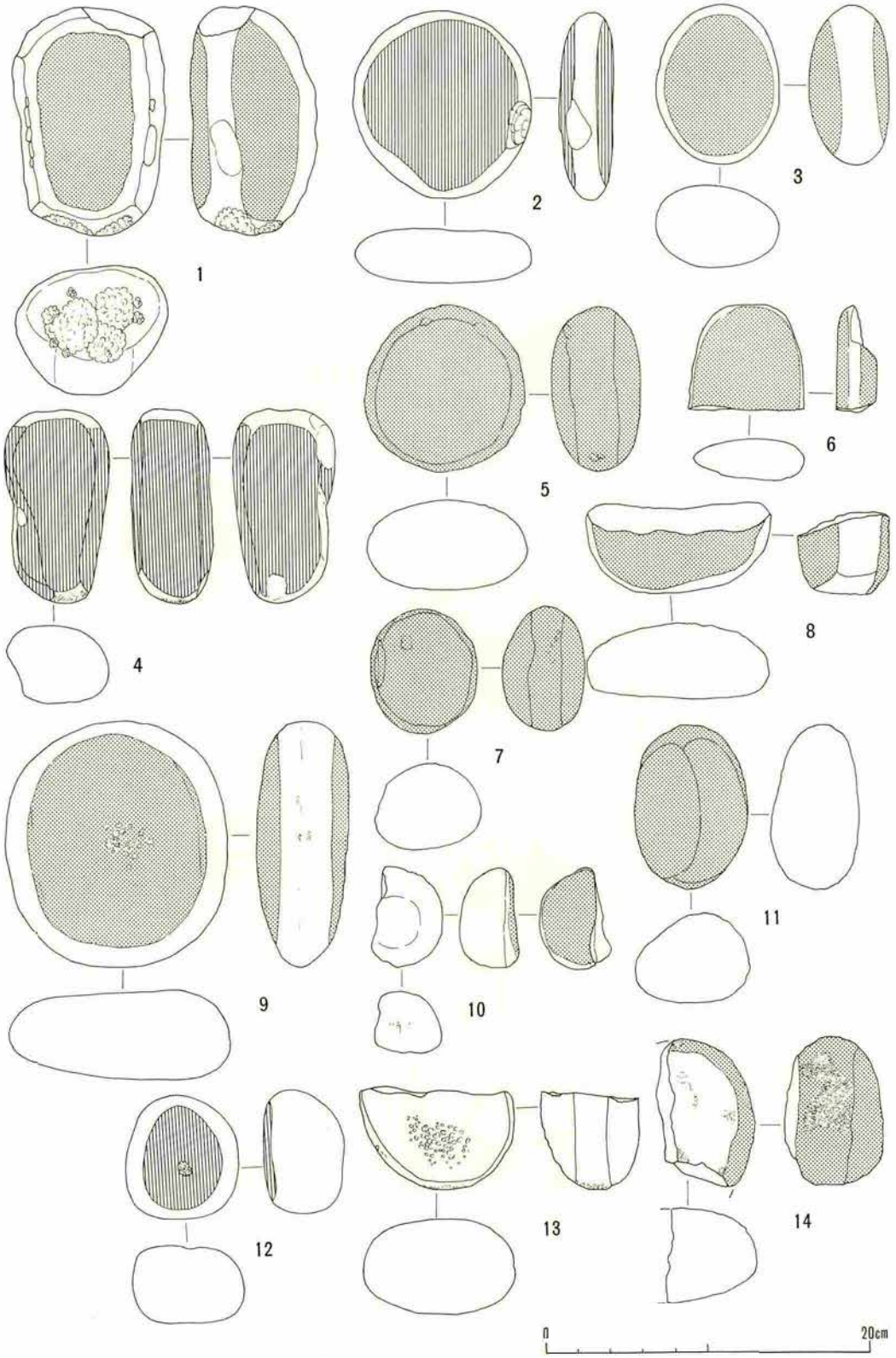
第205図　その他、出土石器（11）



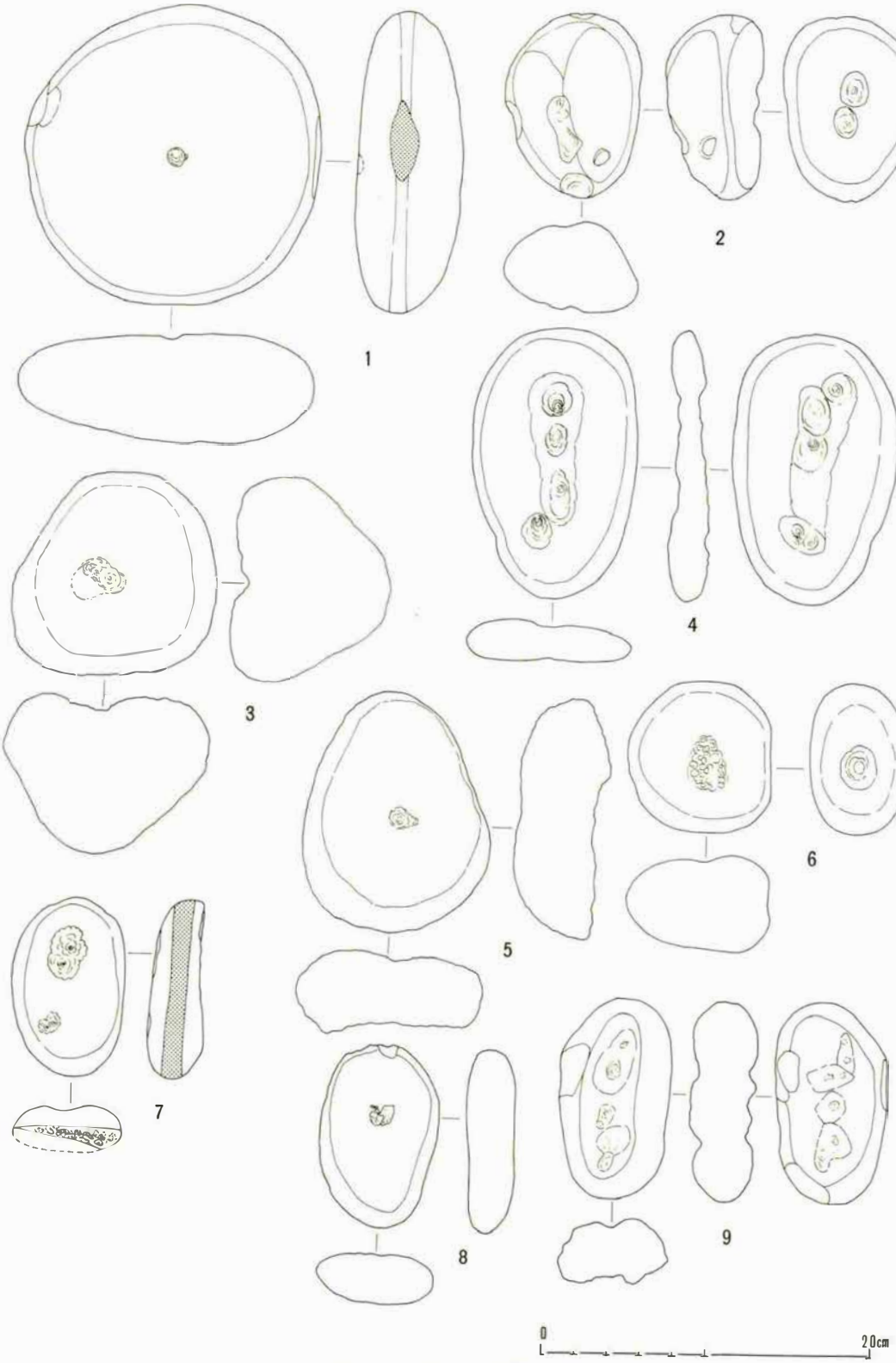
第206図　その他、出土石器（12）



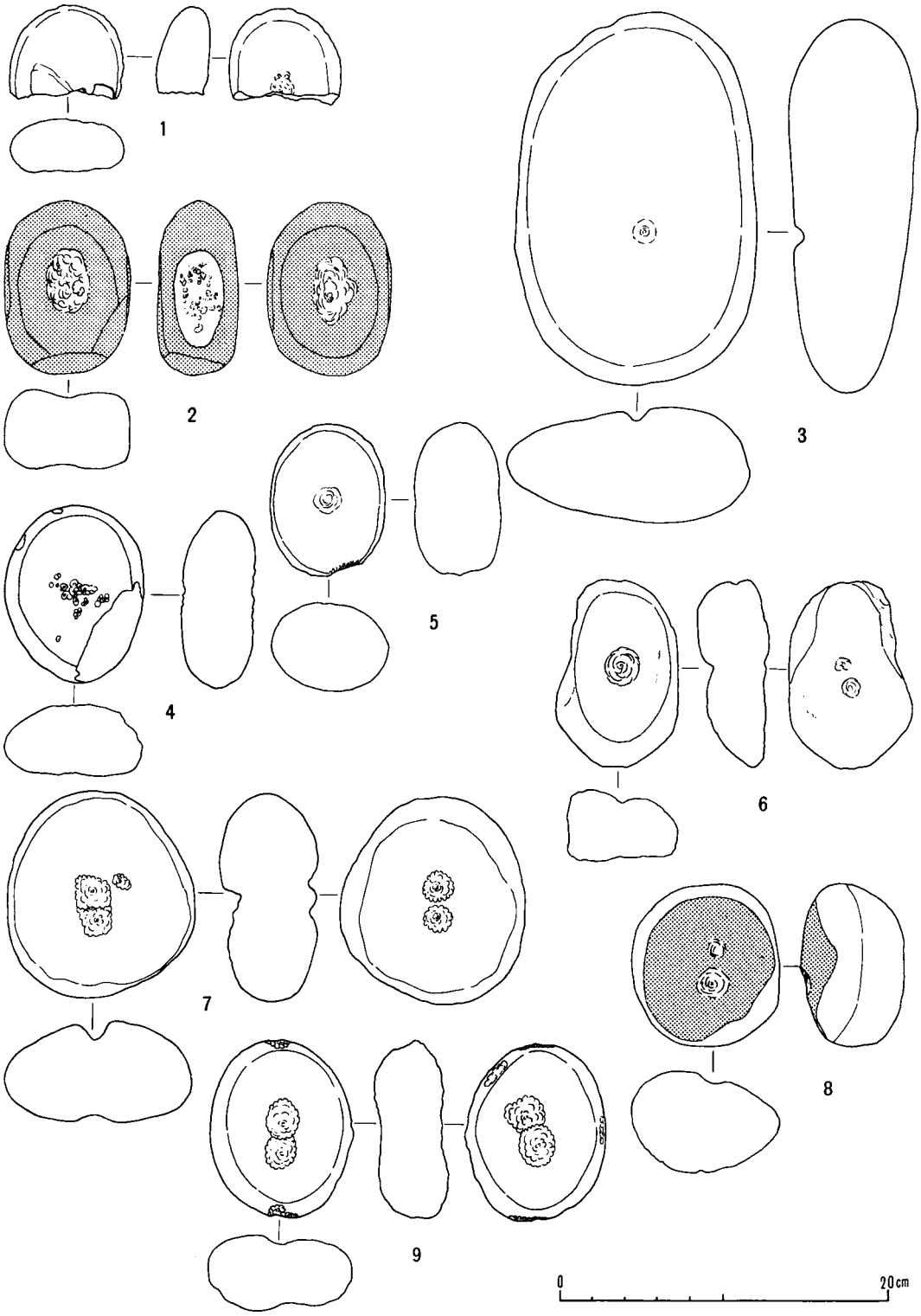
第207図　その他、出土石器（13）



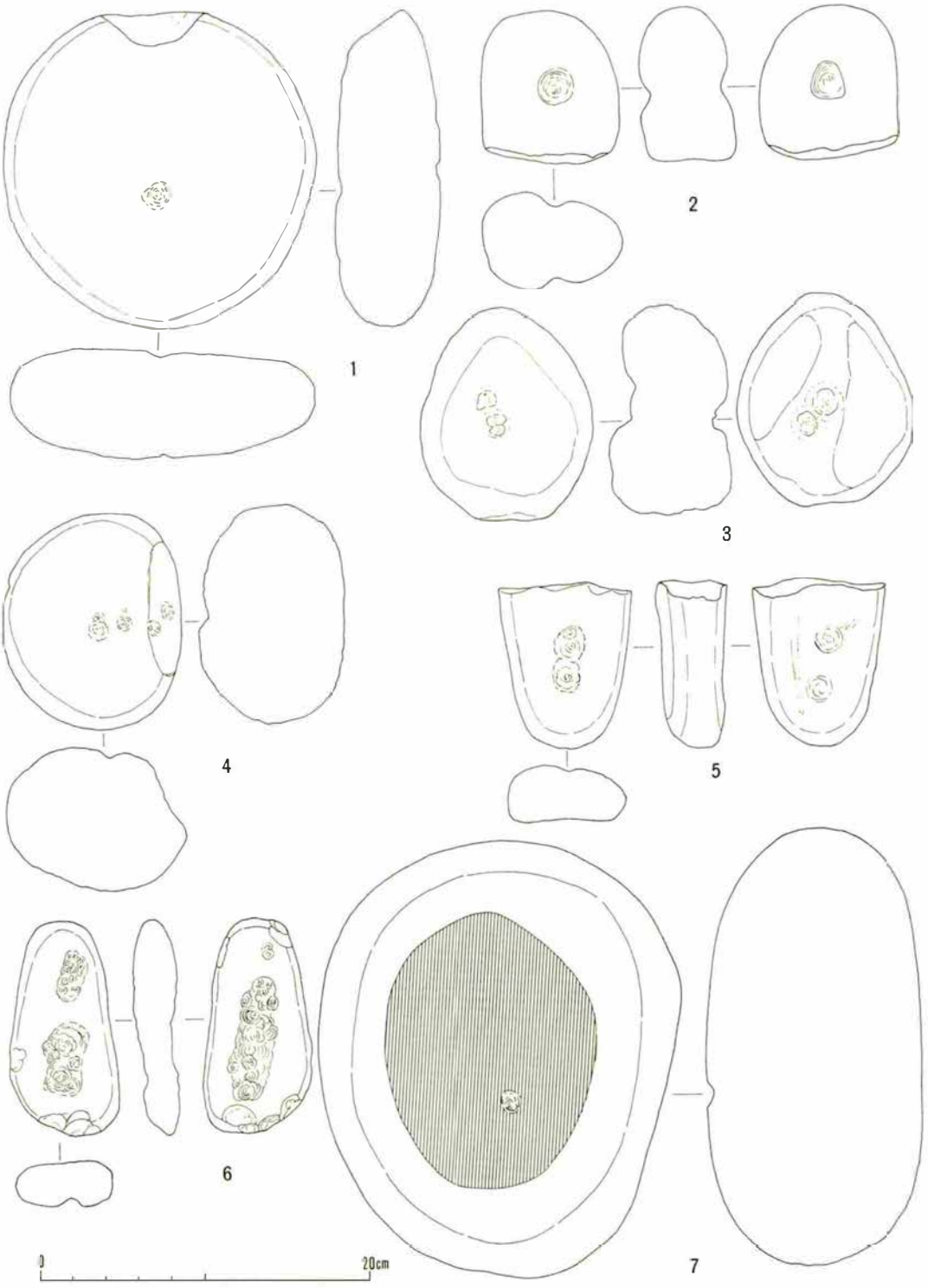
第208図　その他、出土石器（14）



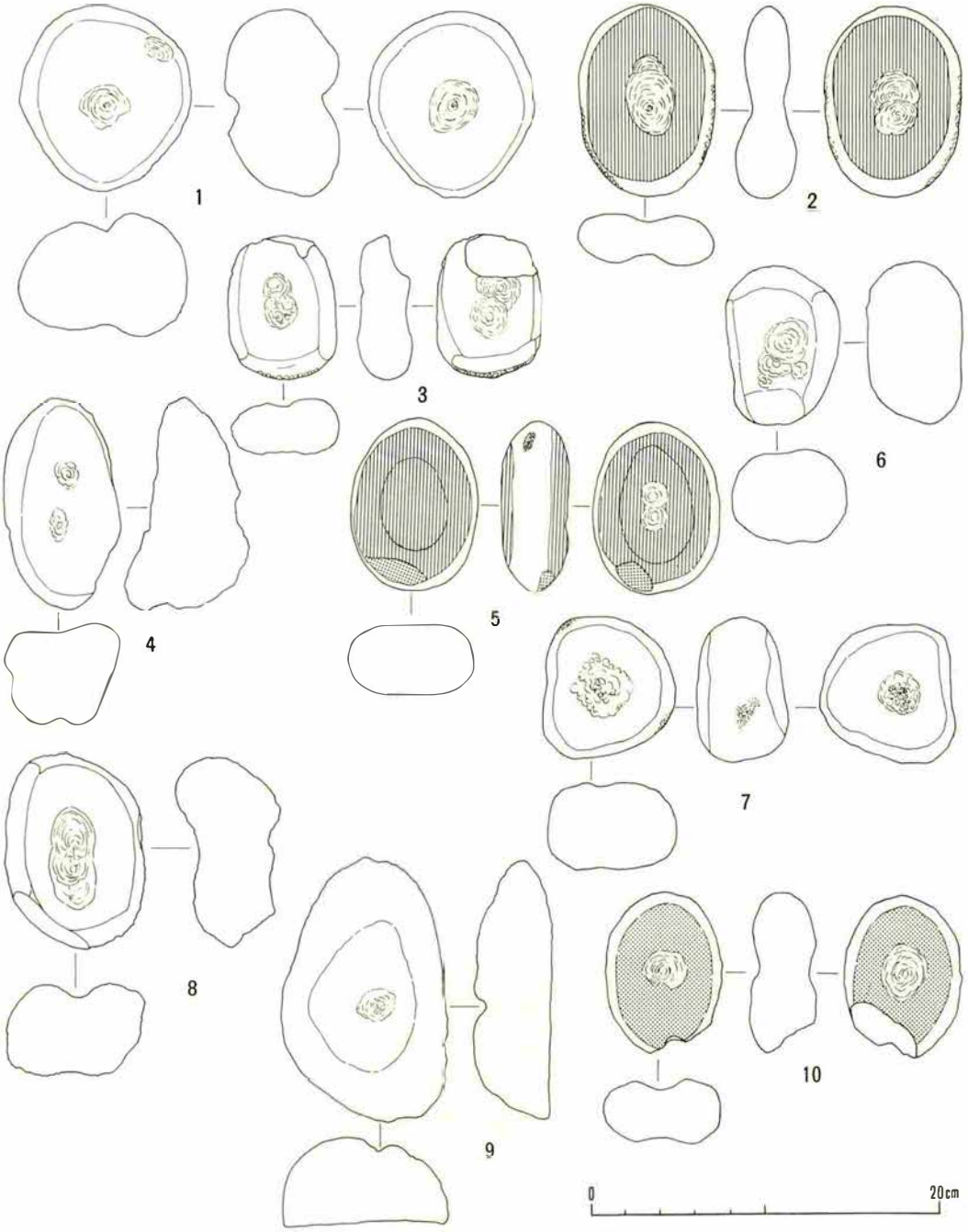
第209図　その他、出土石器（15）



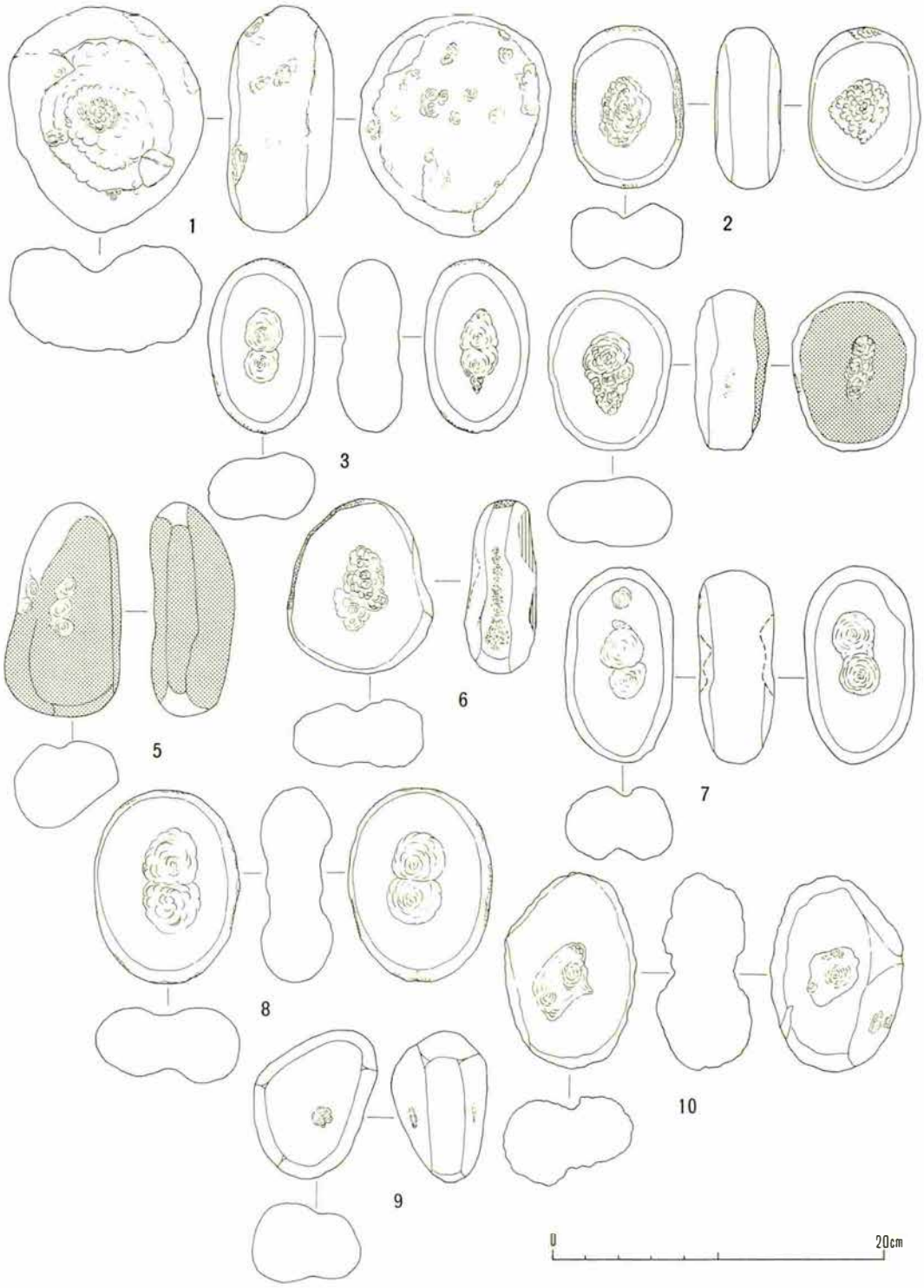
第210図　その他、出土石器（16）



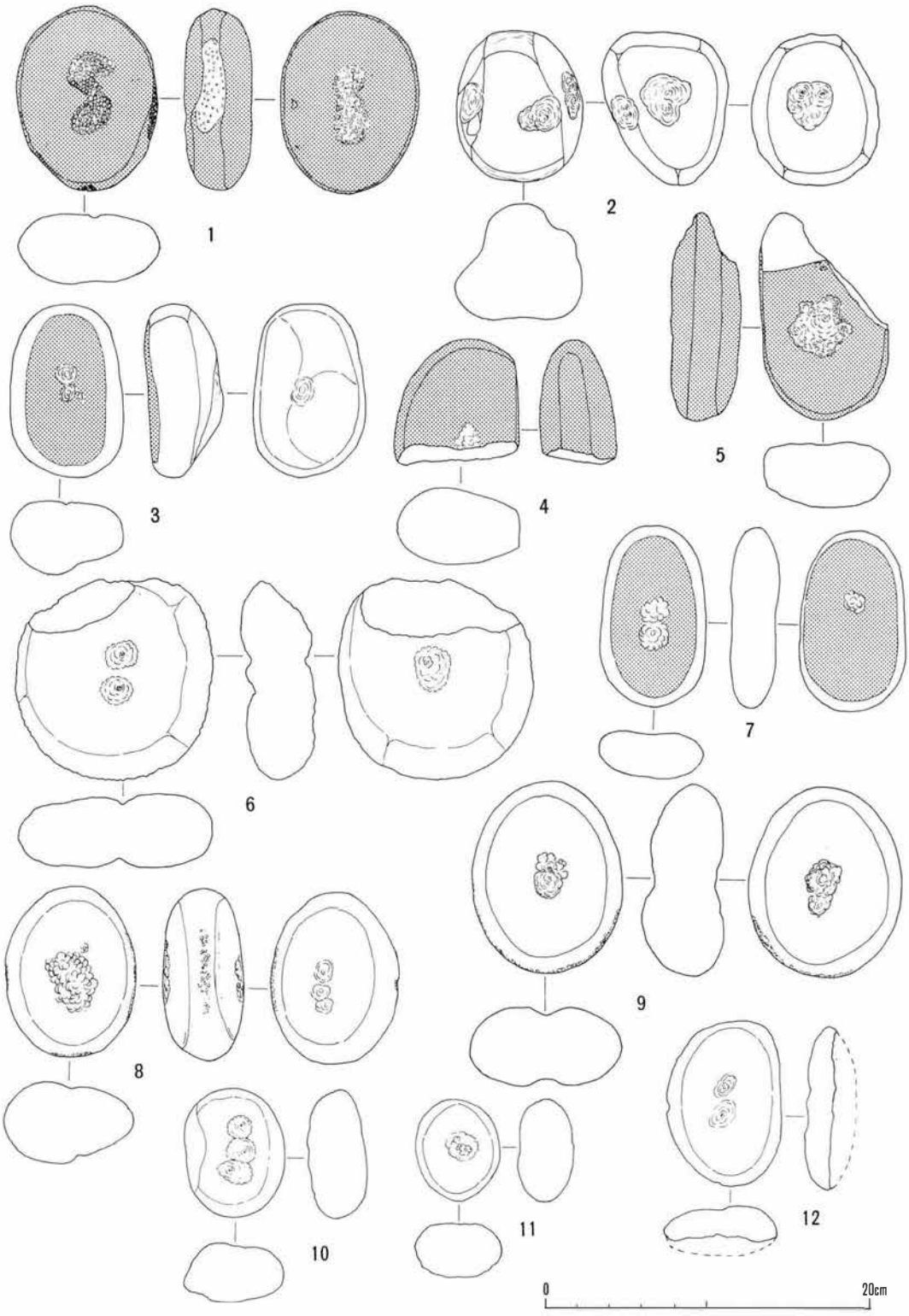
第211図　その他、出土石器（17）



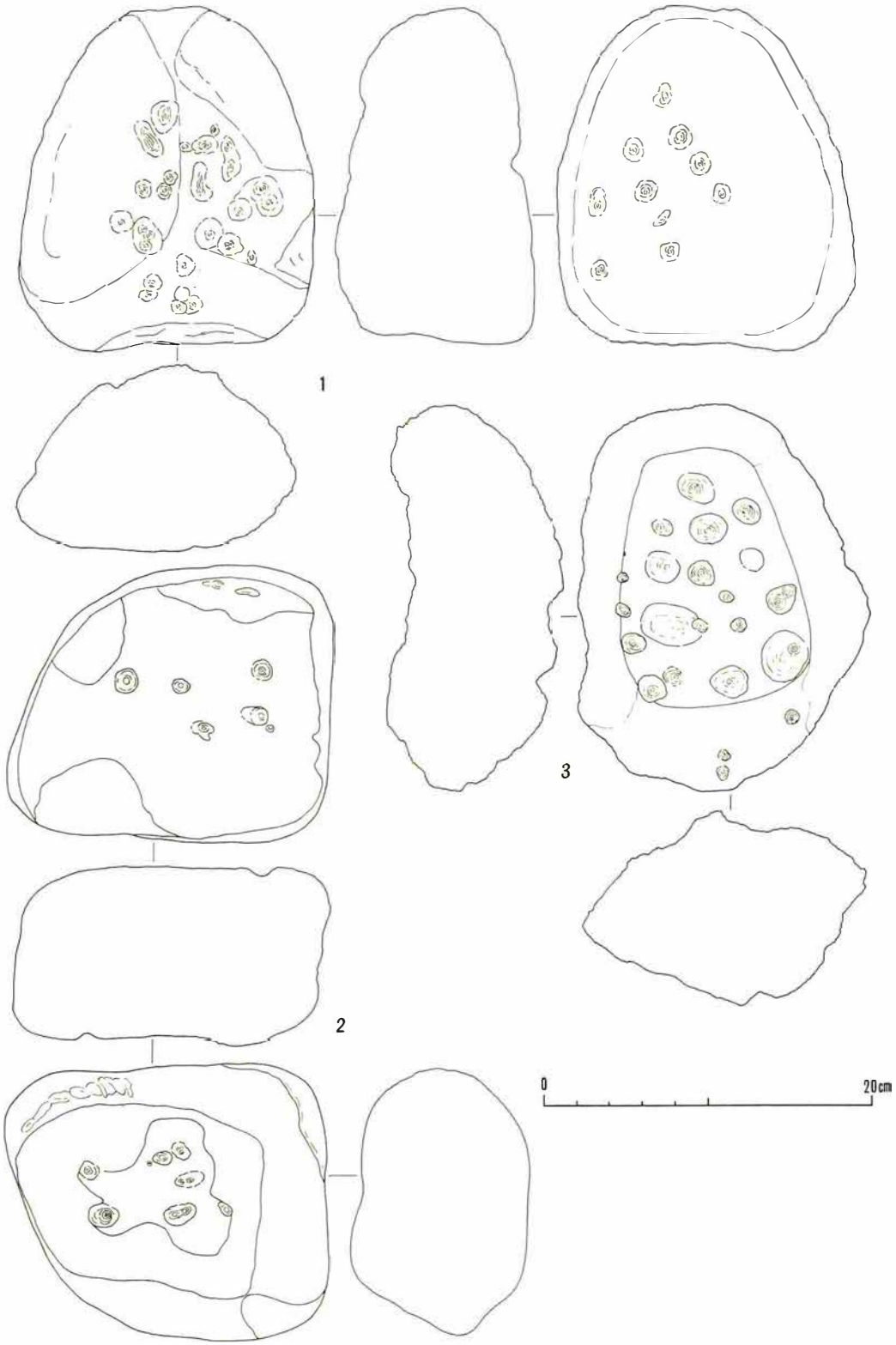
第212図　その他、出土石器（18）



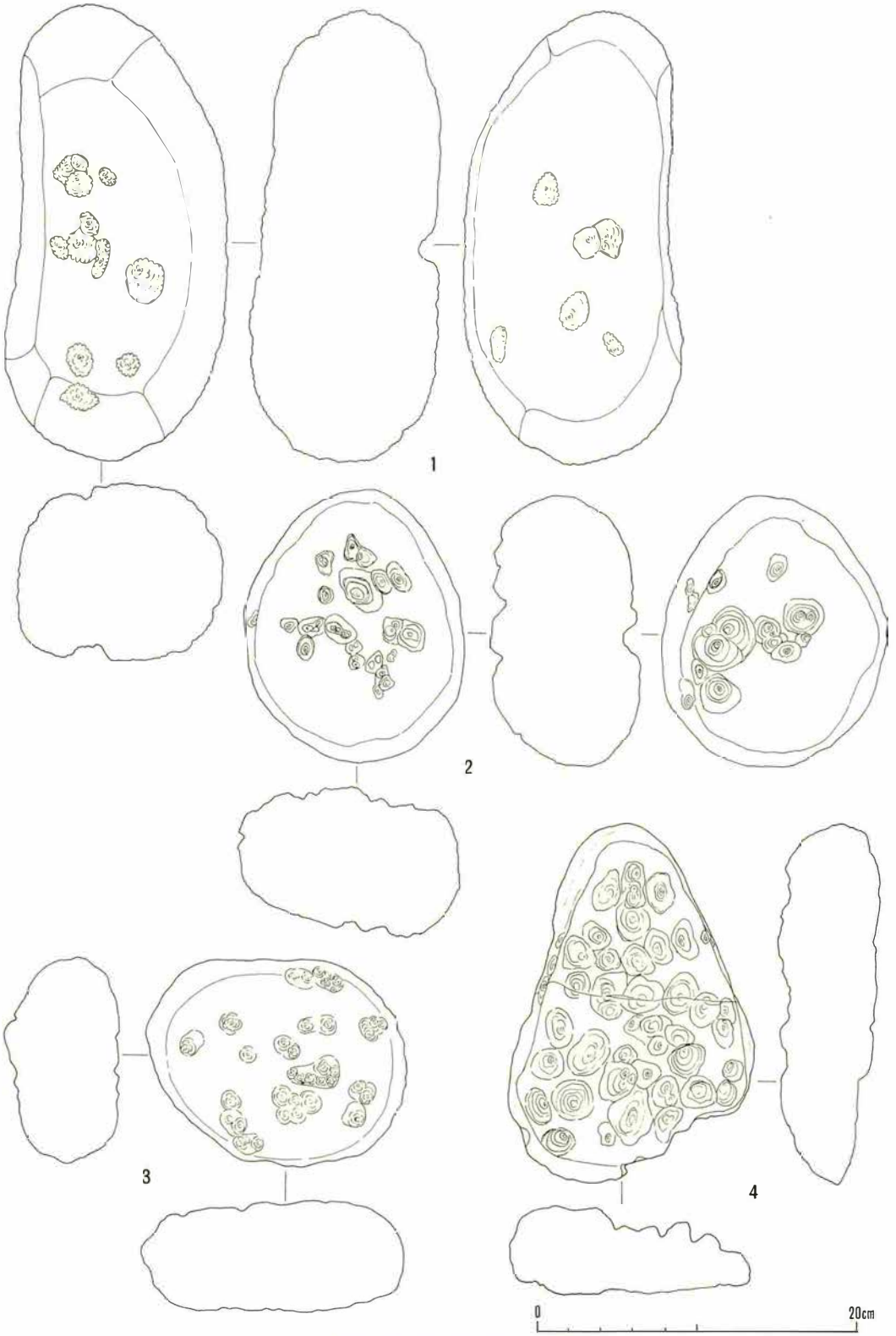
第213図　その他、出土石器（19）



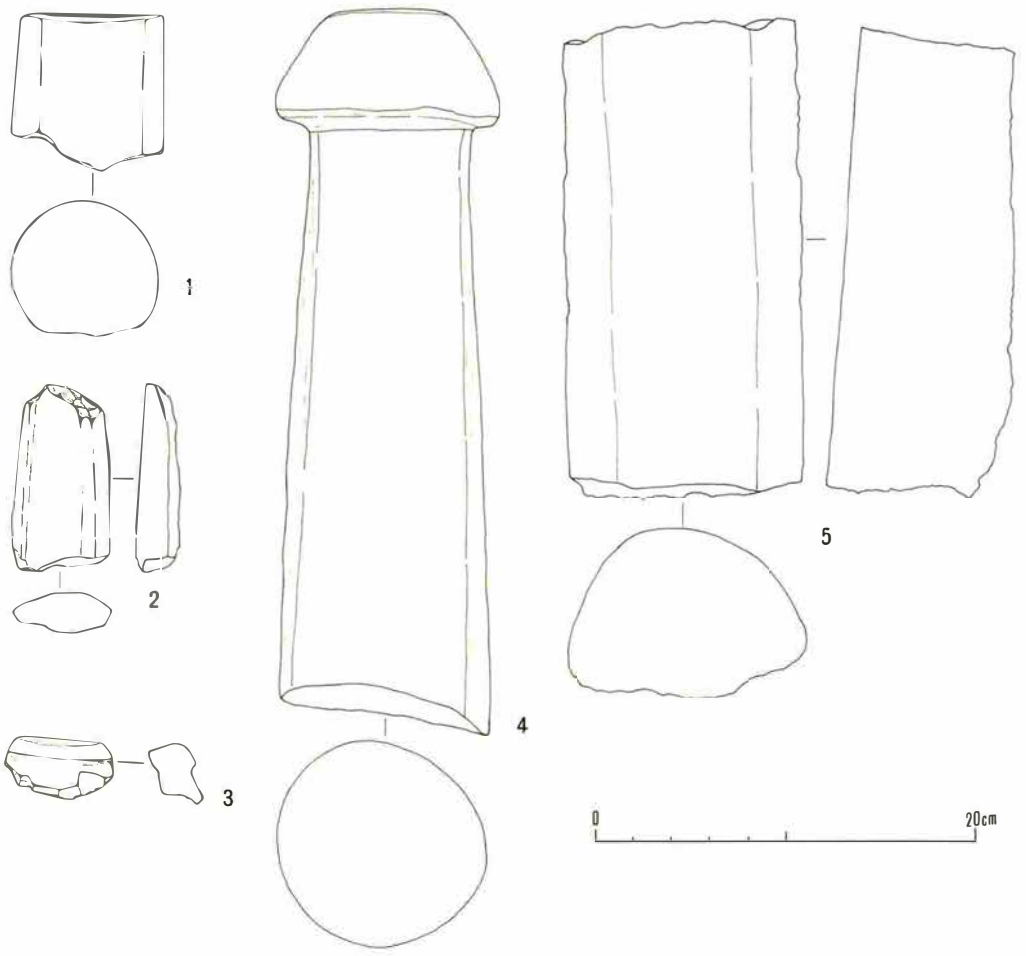
第214図　その他、出土石器（20）



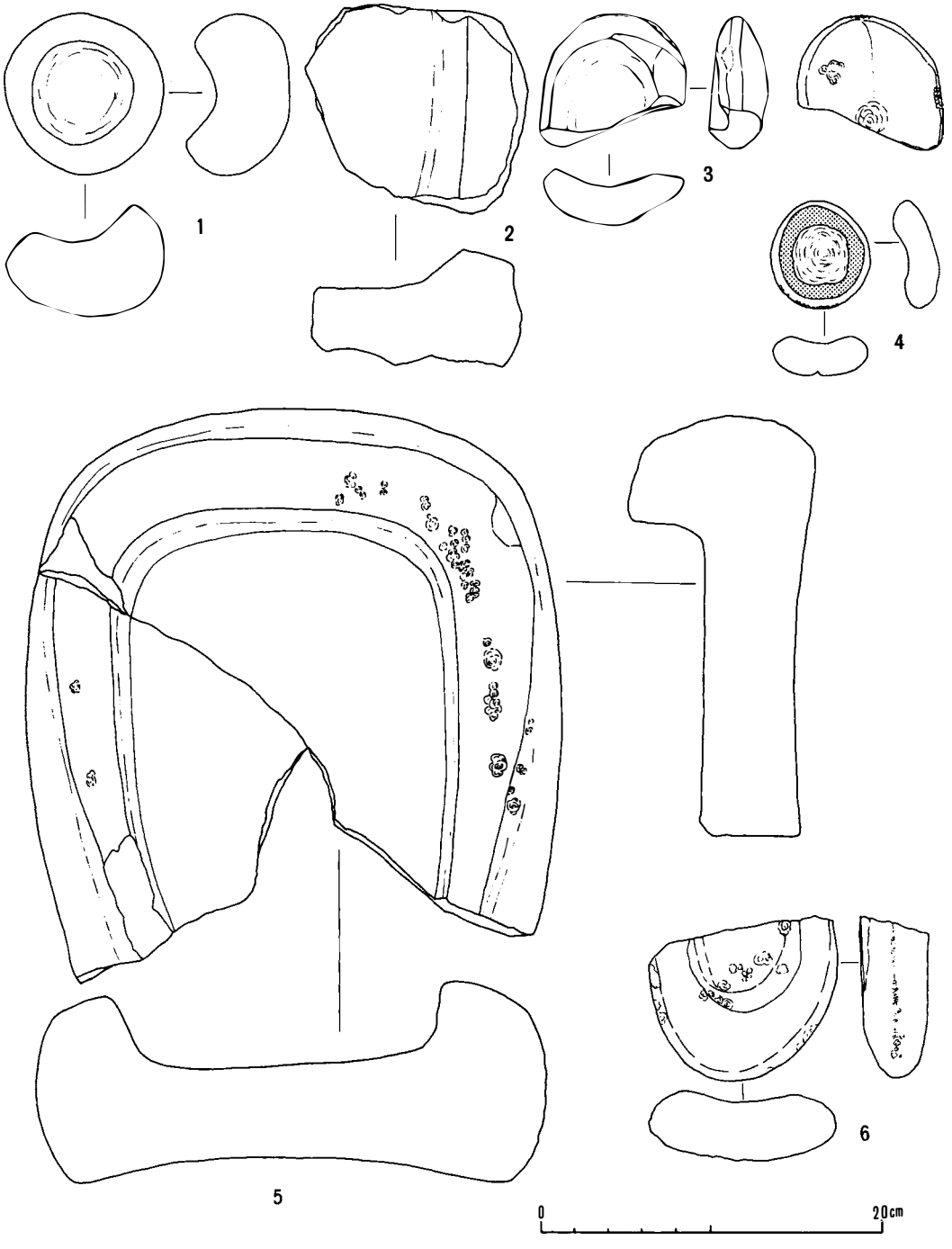
第215図　その他、出土石器（21）



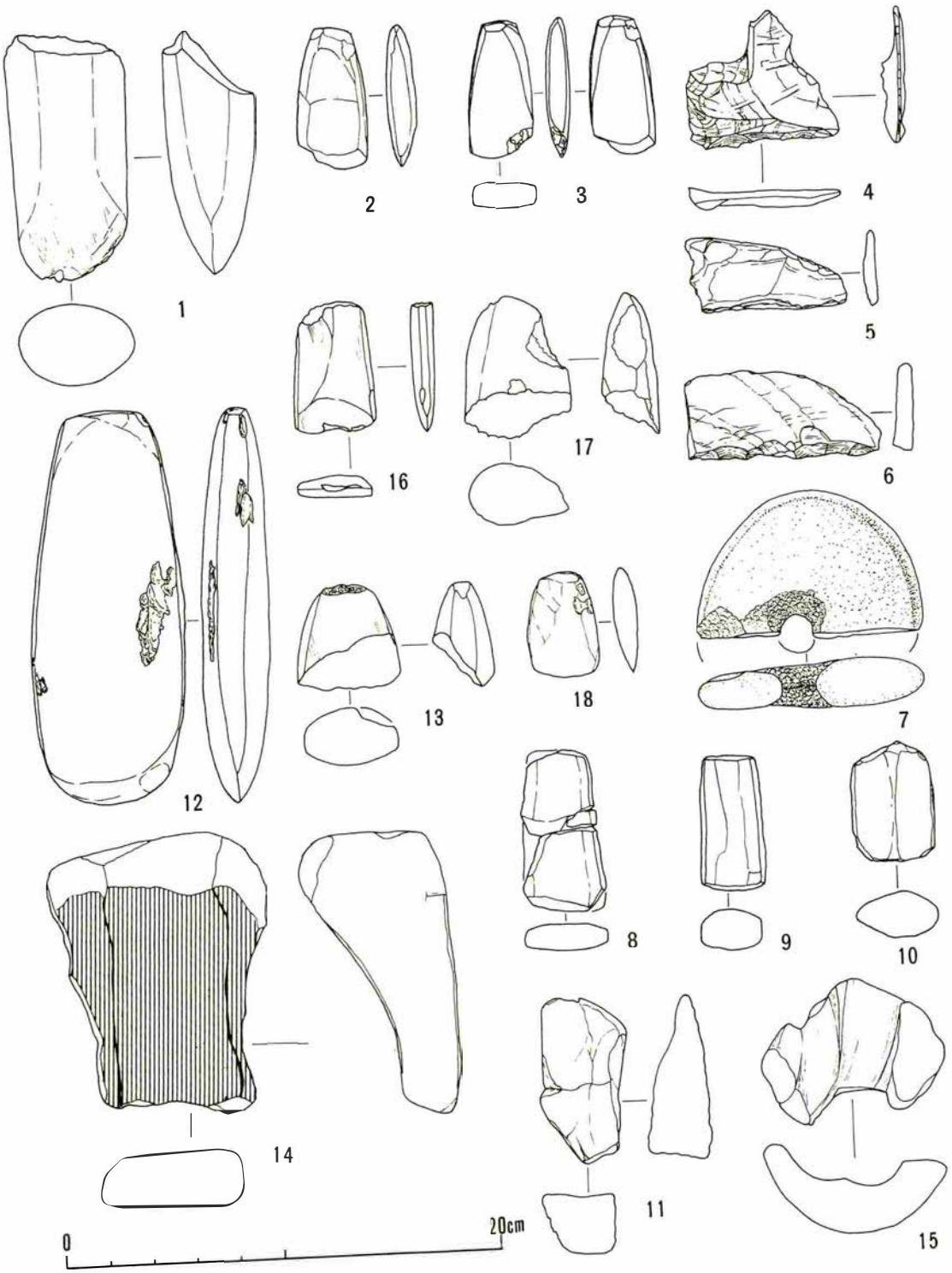
第216図　その他、出土石器（22）



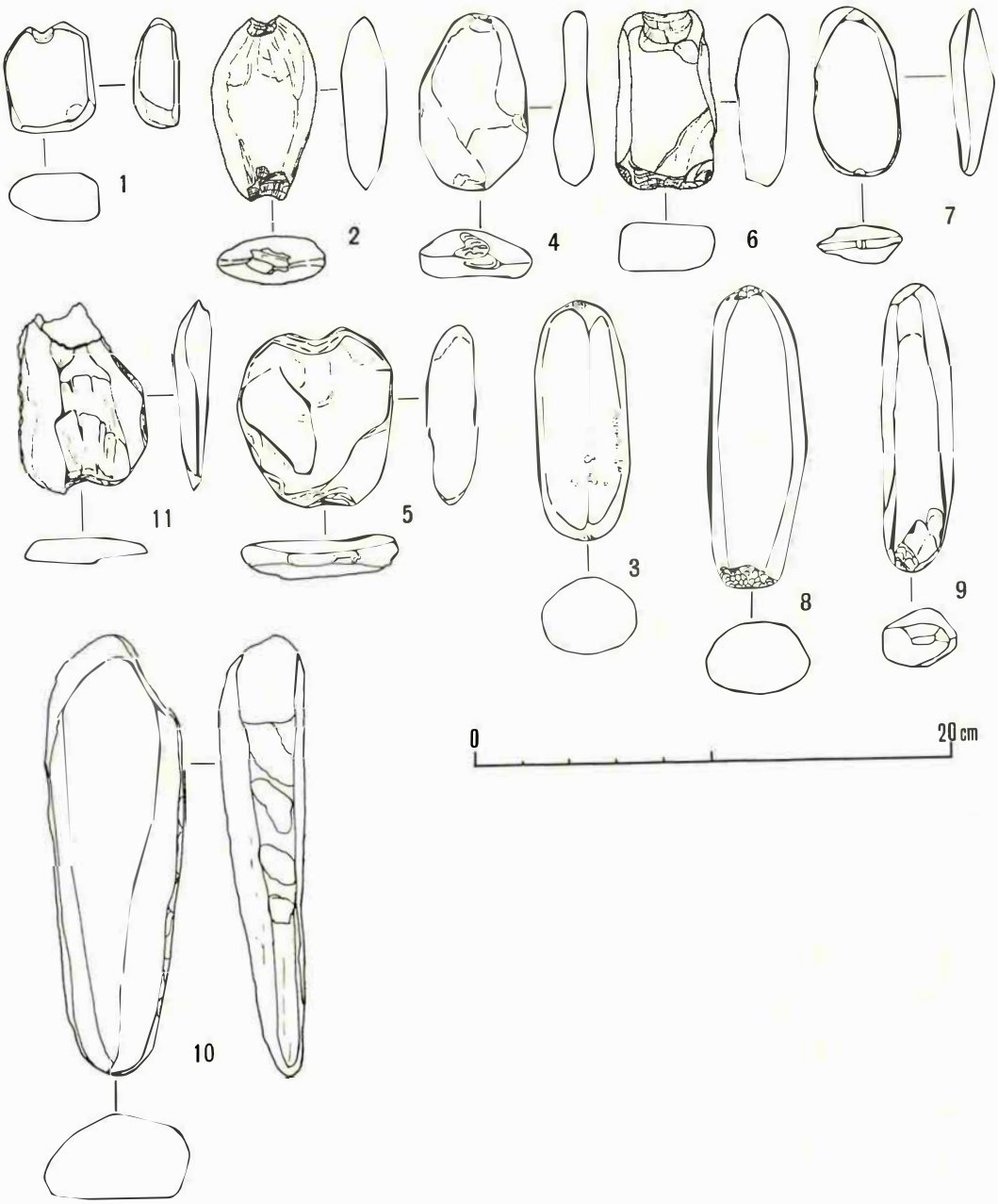
第217図　その他、出土石器（23）



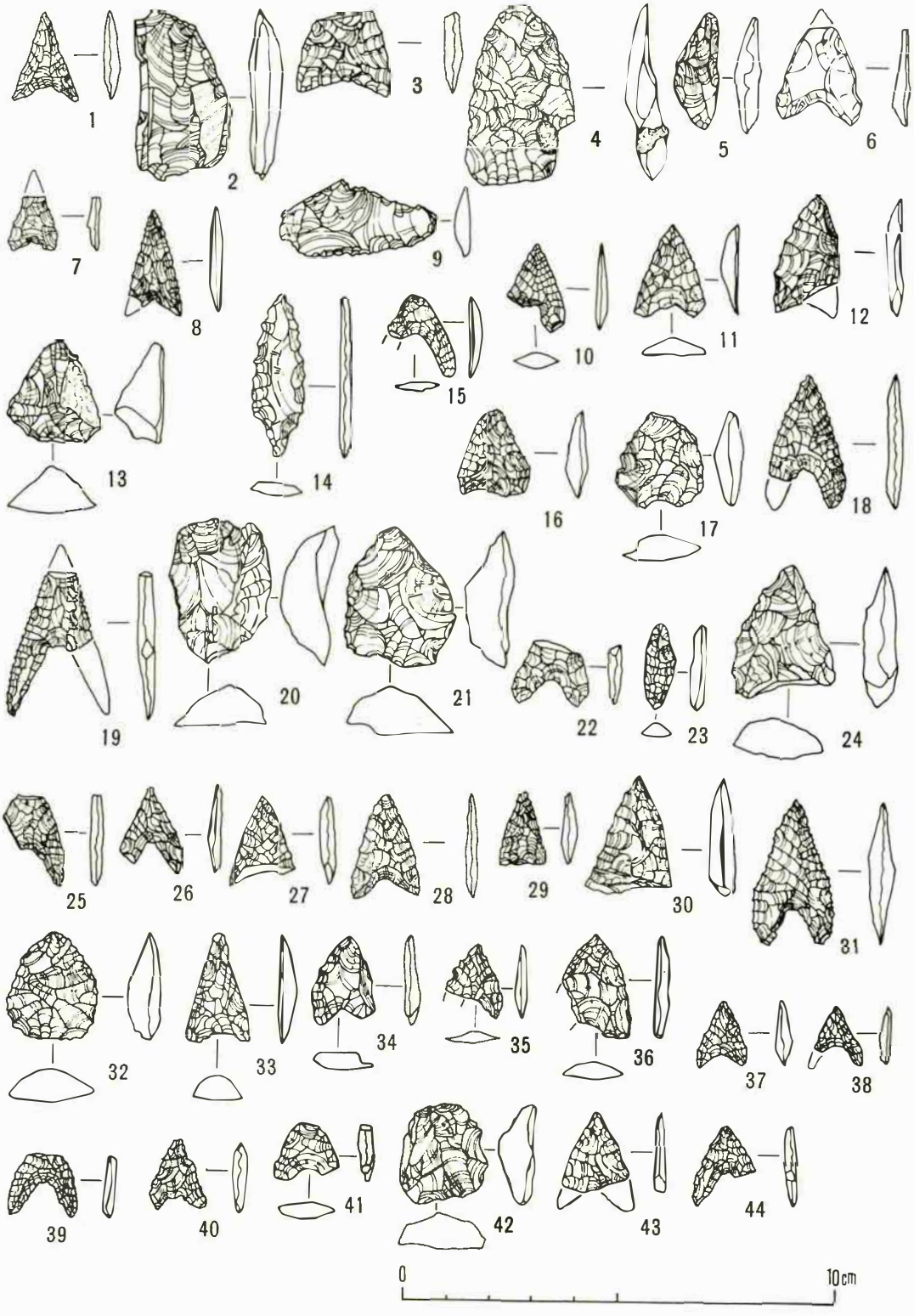
第218図　その他、出土土器（24）



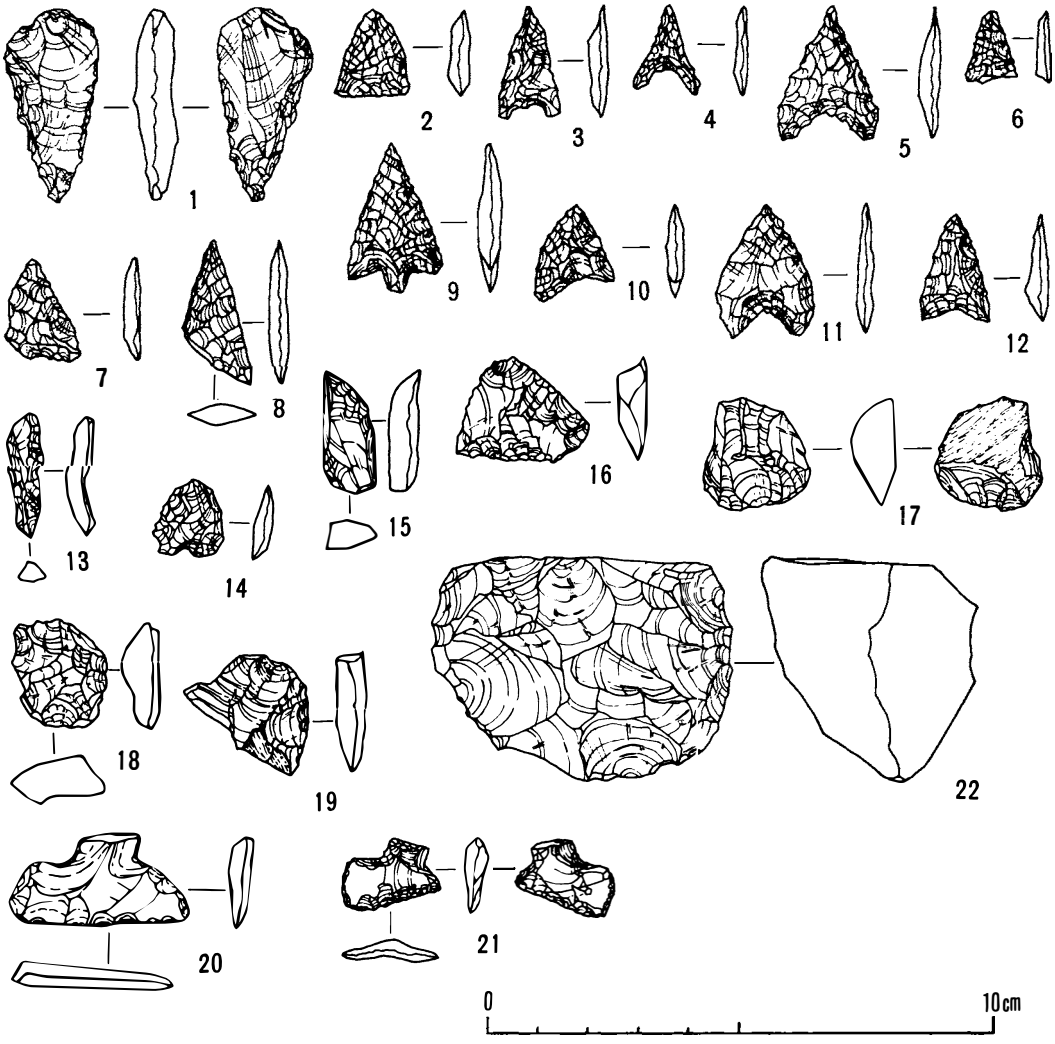
第219図　磨製石斧、砥石他（25）



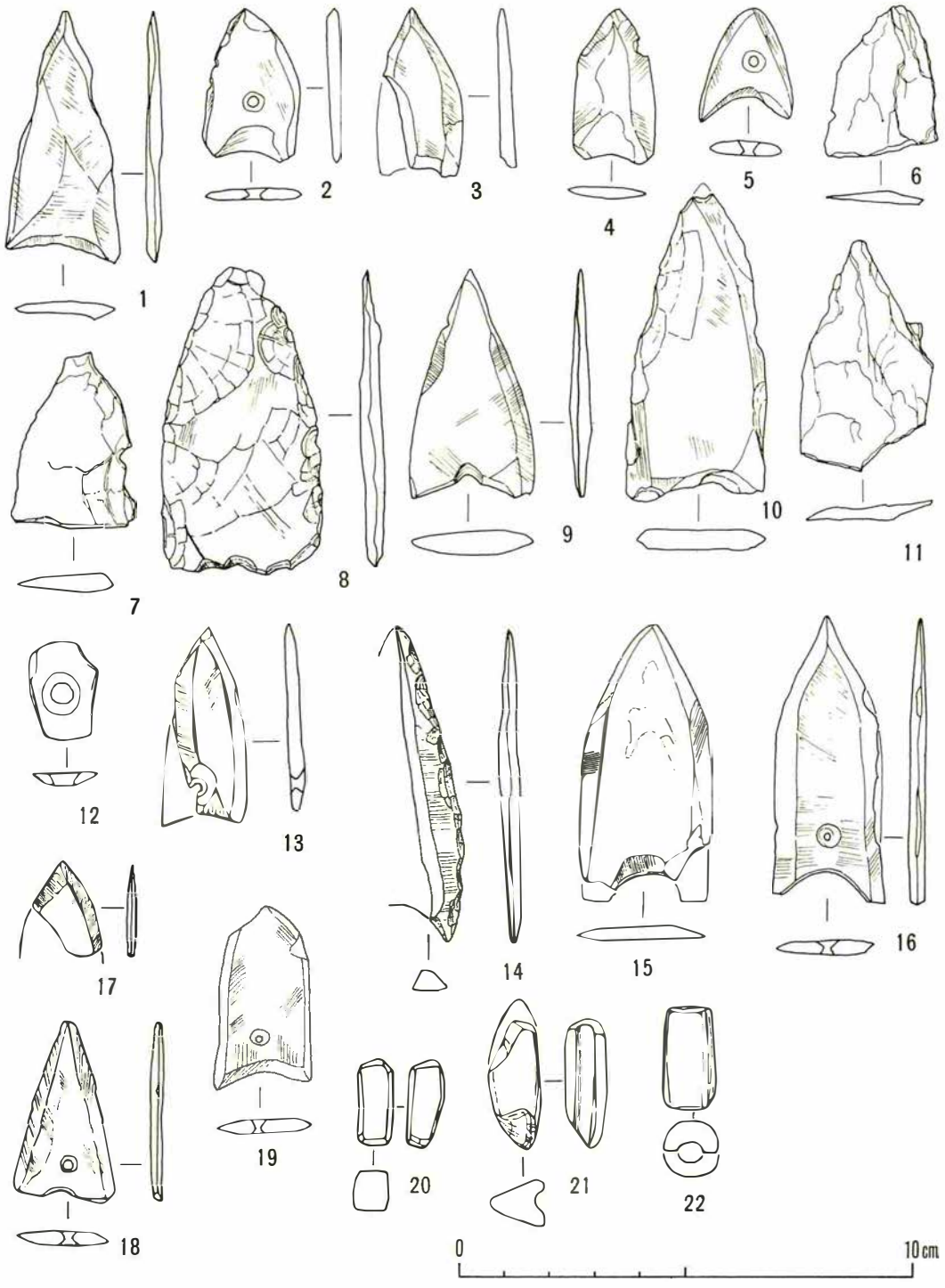
第220図　石錘、棒状石器（26）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
0
10cm

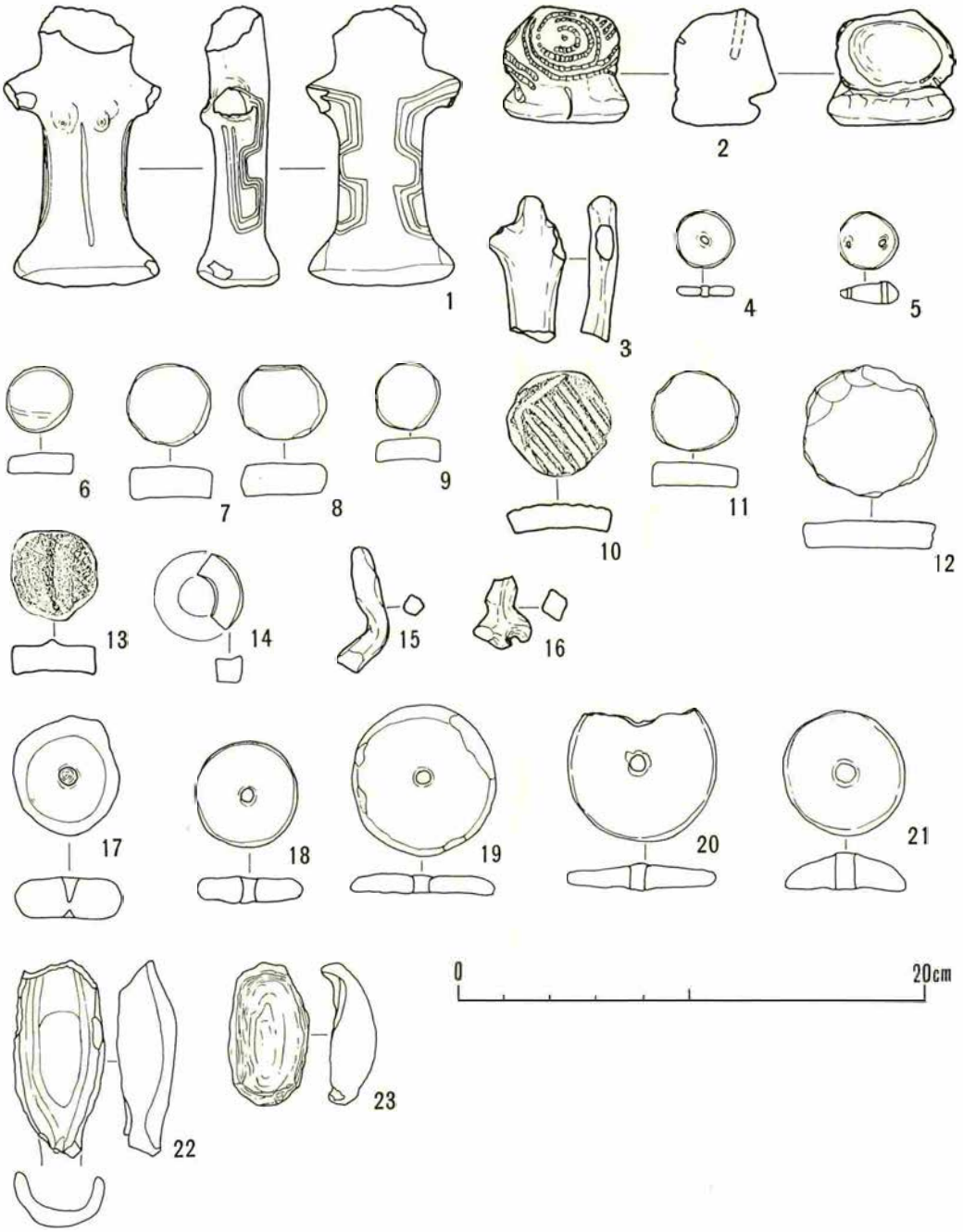
第221図　石鏃他（27）



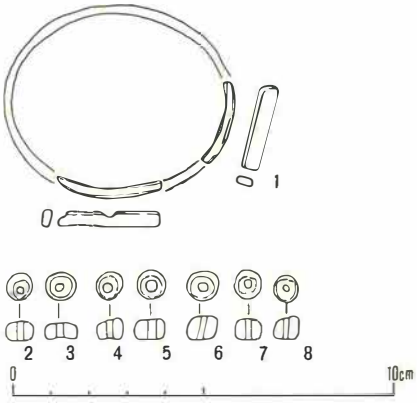
第222図　石鏃他（28）



第223図　石鏃他（29）



第224図　土偶他



第225図　銅製品、ガラス玉

第9表　石器等一覧表

※材質記号の註は表末に記載してある。

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
195	1	1住	S－2	打製石斧	7.7	5.3	1.5	S	短冊形
	2	2住		打製石斧	6.4	8.2	2.3	SST	短冊形
	3	3住	床面下	打製石斧	8.8	6.8	3.2	mH	短冊形
	4	3住	床面下	打製石斧	7.1	8.5	2.5	S	撥形
	5	4住		打製石斧	8.2	4.8	2.6	mH	短冊形
	6	6住	フク土	打製石斧	4.9	8.5	1.9	砂質粘板岩	短冊形
	7	7住		打製石斧	11.8	5.0	2.1	SST	短冊形
	8	7住	クロ	打製石斧	10.8	4.0	1.6	mH	短冊形
	9	7住	フク土	打製石斧	9.7	4.2	1.3	mH	短冊形
	10	8住		打製石斧	8.6	4.6	1.5	mH	短冊形
	11	8住		打製石斧	11.2	4.1	1.2	mH	短冊形
	12	10住		打製石斧	11.8	4.9	3.1	mH	短冊形
	13	10住		打製石斧	12.5	3.3	2.3	mH	短冊形
	14	10住	2 pit	打製石斧	11.2	6.1	2.1	SST	分胴形
196	1	10住		打製石斧	5.8	5.7	1.8	mH	短冊形、下部欠
	2	10住		打製石斧	9.9	4.9	2.2	S	短冊形、下部欠
	3	10住		打製石斧	10.9	4.5	1.3	mH	尖頭形、完形
	4	10住	S－2	打製石斧	9.0	4.9	2.6	S	短冊形、下部欠
	5	13住	S－37	打製石斧	12.2	6.2	2.2	mH	短冊形、頭部欠
	6	13住	S－30	打製石斧	9.5	5.8	1.4	S	短冊形
	7	13住	S－64	打製石斧	11.7	5.0	1.4	mH	短冊形、完形
	8	13住	S－35	打製石斧	9.8	6.0	2.3	mH	短冊形、下部欠
	9	13住	S－51	打製石斧	10.5	5.0	2.7	S	短冊形、頭部欠
	10	13住	S－44	打製石斧	13.4	5.0	1.8	mH	短冊形
	11	13住	S－47	打製石斧	11.7	5.5	1.8	mH	短冊形
	12	13住	床	打製石斧	6.9	5.1	2.4	S	撥形
	13	13住	S－38	打製石斧	12.5	4.6	2.5	SST	短冊形、完形
	14	13住	S－65	打製石斧	9.4	5.6	1.9	mH	短冊形、完形
	15	13住	S－26	打製石斧	9.4	5.1	2.6	mH	短冊形、上部欠
	16	13住	S－24	打製石斧	7.2	5.4	1.9	mH	短冊形、下部欠
197	1	13住	S－55	打製石斧	8.7	5.0	2.0	SST	短冊形、下部欠
	2	13住	S－49	打製石斧	10.3	5.3	1.7	S	短冊形、完形
	3	13住	床	打製石斧	11.3	4.9	2.2	S	短冊形

番号		遺構	No	器種	法量 cm			材質	備考
図面					長	巾	厚		
197	4	13住	S－2	打製石斧	9.5	4.6	2.2	mH	撥形
	5	13住	S－58	打製石斧	11.9	5.8	2.1	SST	短冊形、完形
	6	16住	S－87	打製石斧	8.3	5.4	2.5	S	短冊形、下部欠
	7	21住	S－11	打製石斧	8.0	4.5	1.2	砂質粘板岩	短冊形
	8	23住		打製石斧	6.5	5.4	1.9	D	短冊形
	9	23住		打製石斧	10.7	4.3	1.5	mH	短冊形
	10	23住		打製石斧	5.4	6.6	1.7	S	短冊形
	11	24住	S－1	打製石斧	8.9	4.1	1.9	S	短冊形
	12	30住	S－1	打製石斧	13.4	8.0	2.6	mH	尖頭形
	13	33住	最下位	打製石斧	6.8	3.3	1.9	H	短冊形
	14	34住	S－2	打製石斧	6.6	4.0	0.6	S	短冊形、頭部欠
	15	35住	S－4	打製石斧	15.5	7.7	3.3	mH	分胴形
	16	35住	S－5	打製石斧	9.1	5.0	1.9	mH	撥形
198	1	40住	炉内	打製石斧	8.0	5.3	1.8	mH	短冊形、頭部欠
	2	1号方形		打製石斧	7.2	4.1	1.4	H	短冊形、頭部欠
	3	3号方形		打製石斧	8.1	6.8	1.6	SST	短冊形、下部欠
	4	3号方形		打製石斧	14.4	5.9	2.5	SST	短冊形
	5	6号方形		打製石斧	7.6	5.9	2.4	mH	撥形、　頭部欠
	6	9号方形		打製石斧	8.8	6.1	1.8	S	撥形
	7	9号方形		打製石斧	10.0	5.7	2.8	H	短冊形
	8	9号方形		打製石斧	9.4	4.4	1.6	mH	短冊形
	9	16号方形		打製石斧	12.3	8.4	4.0	泥岩	撥形
	10	16号方形		打製石斧	9.5	5.5	2.4	H	短冊形、頭部欠
	11	16号方形		打製石斧	11.0	5.2	2.1	H	短冊形
	12	16号方形		打製石斧	10.0	5.2	2.3	H	短冊形、頭部欠
	13	16号方形		打製石斧	7.3	5.5	1.4	S	短冊形、下部欠
	14	7号溝		打製石斧	10.8	5.0	2.0	mH	短冊形
	15	10号溝		打製石斧	4.0	4.7	1.7	S	分胴型、上下部欠
199	1	10号溝		打製石斧	9.6	6.5	2.8	SST	短冊形
	2	10号溝		打製石斧	6.2	4.3	1.0	S	撥形
	3	12号溝	E－6	打製石斧	9.0	5.0	7.0	S	分胴型（石さじ）
	4	12号溝	E－3.4	打製石斧	5.0	6.6	1.9	S	短冊形
	5	5号土壙	フク土	打製石斧	6.8	7.5	1.1	S	短冊形
	6	22土農		打製石斧	8.9	6.9	2.3	mH	短冊形
	7	45土農		打製石斧	12.2	7.9	2.7	mH	分胴形

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
199	8	52土壙		打製石斧	9.8	3.9	1.7	mH	短冊形
	9	53土壙		打製石斧	10.8	5.8	1.6	mH	短冊形
	10	75土壙		打製石斧	7.4	7.1	1.7	mH	撥形
	11	329+36	E－1	打製石斧	8.5	4.1	1.7	mH	短冊形、頭部欠
	12	特8	フク土	打製石斧	7.8	5.7	1.6	SST	短冊形
	13	330+80E	南拡張部	打製石斧	13.4	5.8	1.6	H	短冊形
	14	329+72	W3	打製石斧	12.8	4.8	1.9	S	短冊形
	15	330+66	E－2	打製石斧	5.5	2.1	9.8	S	短冊形、頭部欠
	16	329+48	E－1	打製石斧	5.6	10.7	1.0	S	横刃形
200	1	330+32	E－2	打製石斧	12.6	5.0	2.5	SST	短冊形
	2	330+60	E－2	打製石斧	9.8	4.4	2.0	mH	短冊形
	3	329+32	E－3	打製石斧	9.8	5.3	1.5	S	短冊形
	4	329+48	W5	打製石斧	12.4	6.1	2.8	S	分銅形
	5	329+72	E4	打製石斧	9.1	5.9	1.5	mH	短冊形、刃部欠
	6	329+60	W4	打製石斧	10.9	3.5	1.6	SST	短冊形
	7	329+60	E3	打製石斧	8.1	5.6	1.6	SST	短冊形、頭部欠
	8	330+44	E3	打製石斧	9.3	5.2	2.6	mH	短冊形、刃部欠
	9	328+92	W6	打製石斧	12.9	5.9	1.8	SST	短冊形
	10	329+96	W1	打製石斧	9.0	5.6	1.3	S	短冊形
	11	329+96	E3	打製石斧	14.9	8.3	2.5	mH	銅形
	12	329+60	E1	打製石斧	3.9	5.5	1.3	S	短冊形、頭部欠
	13	329+88	E3	打製石斧	9.3	5.5	1.3	mH	短冊形
	14	329+00	W3	打製石斧	7.3	5.0	2.1	SST	短冊形、刃部欠
	15	329+88	E3	打製石斧	7.9	6.0	1.4	S	短冊形
	16	329+64	E3	打製石斧	11.0	5.9	3.4	mH	短冊形　頭部刃部欠
201	1	330+56	E3	打製石斧	13.5	5.3	2.0	SST	短冊形
	2	330+40	W－1	打製石斧	8.8	5.2	2.2	SST	短冊形、刃部欠
	3	330+68	E－4	打製石斧	4.2	6.4	1.2	SST	短冊形、頭部欠
	4	329+44	E－3	打製石斧	5.0	4.4	1.3	SST	短冊形、頭部・刃部欠
	5	329+68	E－6	打製石斧	11.6	5.8	2.4	H	短冊形、刃部欠
	6	329+04	W4	打製石斧	15.3	5.1	2.2	mH	短冊形
	7	329+96	W－2	打製石斧	15.4	7.1	2.7	H	短冊形
	8	330+24	W－3	打製石斧	8.0	4.8	1.6	S	短冊形
	9	330+60	E－2	打製石斧	9.2	5.1	2.0	SST	短冊形、刃部欠
	10	330+60	E－2	打製石斧	6.9	5.0	2.0	H	短冊形、刃部欠

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
201	11	330+68	E－4	打製石斧	8.8	4.5	1.6	S	短冊形
	12	329+44	W－2	打製石斧	8.8	6.4	1.0	S	短冊形、頭部・刃部欠
	13	330+8	W－3	打製石斧	6.8	5.6	1.2	S	短冊形、頭部・刃部欠
	14	330+8	E－1	打製石斧	7.7	4.9	2.3	H	短冊形
	15	330+8	W－1	打製石斧	11.8	6.7	1.8	mH	短冊形
	16	329+52	E－4	打製石斧	17.8	7.5	4.4	mH	短冊形
202	1	330+16	W－1	打製石斧	14.4	5.8	1.8	S	短冊形
	2	330+20	E－3	打製石斧	12.8	5.0	1.6	mH	短冊形
	3	330+16	W－2	打製石斧	13.5	6.2	1.9	SST	短冊形、刃部欠
	4	330+36	W－1	打製石斧	12.3	8.0	2.4	T	分銅形
	5	330+56	E－4	打製石斧	12.1	6.0	2.0	S	短冊形
	6	330+56	E－3	打製石斧	10.5	4.7	1.9	H	短冊形
	7	330+52	E－4	打製石斧	7.9	4.7	1.7	mH	短冊形、頭部欠
	8	330+04	E－6	打製石斧	9.9	5.6	1.9	SST	短冊形
	9	329+76	W－3	打製石斧	12.8	6.5	1.2	S	分銅形
	10	328+96	W－4	打製石斧	13.1	4.8	0.5	S	短冊形
	11	329+96	W－2	打製石斧	10.9	8.7	1.6	S	分銅形
	12	表採		打製石斧	7.1	4.9	1.1	mH	短冊形、頭部欠
	13	330+64	E－2	打製石斧	9.3	8.3	2.4	T	分銅形、頭部・刃部欠
	14	330+4	W－5	打製石斧	9.7	5.9	0.8	S	短冊形
203	1	330+04		打製石斧	12.4	8.7	2.7	H	分銅形
	2	329+64	EL	打製石斧	11.2	5.3	2.1	S	短冊形
	3	G		打製石斧	7.6	6.8	1.7	T	短冊形、頭部欠
	4	329+16	W－4	打製石斧	8.8	5.6	1.2	S	短冊形
	5	表採		打製石斧	9.3	6.7	2.5	mH	短冊形
	6	329+16	W－5	打製石斧	10.7	6.6	3.4	mH	短冊形
	7	7住	フク土	打製石斧	9.5	8.4	1.2	SST	挟形
	8	7住		打製石斧	3.9	10.2	1.5	mH	横刃形
	9	7住	フク土	打製石斧	4.9	10.5	1.8	mH	横刃形
	10	36住	S－7	打製石斧	3.4	6.9	0.5	mH	横刃形
	11	36住	498	打製石斧	3.0	6.0	0.9	mH	横刃形
	12	13住		打製石斧	5.8	8.3	3.1	H	横刃形
	13	13住	S－23	打製石斧	5.6	10.7	2.1	S	横刃形
	14	32住	S－2	打製石斧	5.3	12.0	1.8	S	横刃形
204	1	13住	S－34	打製石斧	4.9	8.9	2.4	SST	横刃形

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
204	2	21住		打製石斧	4.4	10.5	1.85	砂岩	横刃形
	3	35住		打製石斧	5.8	7.0	1.7	H	横刃形
	4	45土壙		打製石斧	5.5	8.1	1.2	S	横刃形
	5	330+44	E－3	打製石斧	5.2	10.4	1.8	SST	横刃形
	6	329+04	E－5	打製石斧	5.3	10.4	1.5	H	横刃形
	7	329+68	W－3	打製石斧	4.5	7.0	2.0	mH	横刃形
	8	10溝		打製石斧	5.7	7.7	1.9	H	横刃形
	9	329+76	W－3	打製石斧	4.5	10.4	1.0	S	横刃形
	10	329+86	W－3	打製石斧	4.1	8.0	0.9	S	横刃形
	11	329+52	W－2	打製石斧	5.2	9.6	1.5	mH	横刃形
	12	330+44	E－1	打製石斧	7.9	10.4	2.4	mH	横刃形
	13	特5		打製石斧	7.4	7.5	1.4	mH	横刃形
	14	特11		打製石斧	4.6	7.4	1.0		横刃形
205	1	1住	S－1	すり石	10.75	6.8	5.6	カコウ岩質	
	2	4住		すり石	16.7	9.5	6.0	An	
	3	8住		すり石	10.2	9.2	7.4	An	
	4	9住		磨製石器	8.2	6.4	2.7	An	床面直
	5	20住	S－10	すり石	21.9	20.1	5.5	An	
	6	21住		すり石	8.2	4.8	3.4	S	
	7	21住	S－2	すり石	9.4	5.4	5.0	An	
	8	23住		すり石	9.3	8.6	4.0	An	全面みがき
	9	23住	B	すり石	11.5	5.3	3.0	mH	
	10	23住		すり石	12.4	10.0	5.3	An	
	11	23住		磨製石器	11.0	7.0	4.5	An	全体は磨石、側縁はスリ、頂部は打痕がみられる
206	1	29住		すり石	7.8	7.2	5.1	An	
	2	29住	S－6	すり石	3.2	3.4	2.4	泥岩	
	3	33住	S－5	すり石	11.8	8.0	4.4	D	
	4	36住		すり石	10.5	10.2	8.2	D	
	5	38住	63	すり石	8.5	8.7	6.3	An	
	6	57土壙		すり石	4.5	5.1	1.5	D	
	7	12溝	E－3.4	すり石	15.0	7.4	6.1	An	
	8	12溝	E－3.4	すり石	10.8	10.5	7.5	An	
	9	特8		すり石	14.3	6.9	4.8	An	フク土
	10	12溝	E－5.6	すり石	14.6	9.55	6.0	D	
	11	41土壙		すり石、凹石	11.4	7.7	4.0	An	

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
206	12	27土壙		すり石	10.0	9.5	4.8	An	
207	1	12溝	S－2	丸石	14.5	9.7	9.05	An	
	2	49土壙		すり石	9.6	7.4	5.7	An	
	3	12溝		丸石	6.5	6.2	3.5	D	フク土
	4	12溝		すり石	5.0	8.0	5.2	D	
	5	12溝	E－1	すり石	8.7	7.7	3.9	An	
	6	12溝		すり石	8.8	8.2	8.7	An	
	7	329＋16	W－	すり石	9.8	7.2	6.0	An	
	8	330＋00	E－6	すり石	16.7	10.4	7.3	An	
	9	330＋60	W－4	すり石	9.3	9.6	4.1	An	
	10	329＋60	E－1	すり石	5.2	9.5	6.3	カコウ岩類	
	11	329＋04	E－5	すり石、凹石	10.8	7.7	5.1	An	裏面に凹1ケ所
	12	329＋60	E－1	すり石	8.6	8.0	6.0	D	クロ土
	13	329＋84	E－1	すり石	8.7	8.2	4.4	SST	
	14	329＋80	E－2	すり石	6.8	5.8	3.9	An	
208	1	329＋44	E－3	すり石、凹石	14.1	9.3	7.7	D	クロ土
	2	329＋04	W－5	すり石	11.5	11.1	3.3	An	
	3	6方形		すり石	9.9	7.7	5.1	An	
	4	329＋80	E－2	すり石	12.0	6.5	4.9	An	
	5	9方形		すり石	10.3	10.0	5.6	An	
	6	7方形		すり石	6.5	7.0	2.5	An	
	7	9方形		すり石	7.5	6.6	5.3	カコウ岩類	
	8	329＋08	W－3	すり石	5.3	11.4	4.6	An	
	9	329＋88	W－1	すり石	16.1	13.6	5.7	An	クロ土
	10	特5		すり石	6.15	4.5	3.8	D	
	11	329＋64	E－6	すり石	10.2	7.0	5.5	D	クロ土
	12	15溝		凹石	7.7	7.0	5.0	アプライト？	
	13	329＋08	W－3	すり石	6.1	9.6	6.0	An	
	14	7方形		すり石	9.2	7.0	5.9	An	
209	1	3住	S－1	凹石	18.4	18.1	6.6	An	
	2	4住		凹石	11.2	8.3	6.0	An	
	3	10住		凹石	12.5	12.5	9.7	D	
	4	24住	S－2	多孔石	16.5	10.1	2.6	An	
	5	10住		凹石	14.7	11.7	5.8	D	
	6	13住		凹石	9.3	8.7	6.0	An	

番号		遺構	No.	器種	法量 cm			材質	備考
図面					長	巾	厚		
209	7	25住	S－2	多孔石	10.9	6.9	3.4	安山岩質凝灰角礫岩	
	8	29住	S－9	すり石	11.2	7.5	3.2	An	
	9	29住	S－8	凹石	12.5	6.8	4.1	D	
210	1	47土壙		凹石	5.8	6.7	3.2	An	
	2	特8		すり石、凹石	10.5	7.7	5.1	An	全面にすり跡
	3	特8		凹石	22.6	15.0	7.9	An	
	4	7住		凹石	10.8	8.4	4.5	An	クロ土
	5	12溝		凹石	9.2	7.0	5.3	An	
	6	329+64	E－4	凹石	11.3	7.5	4.3	D	
	7	15溝		凹石	12.6	11.4	6.0	An	
	8	特8		凹石	9.8	9.1	6.2	An	フク土
	9	329+64	E－6	凹石	10.9	8.7	4.6	An	クロ土
211	1	20住	S－9	凹石	19.1	19.0	6.5	An	裏面凹部1ケ所
	2	13住		凹石	9.4	8.5	5.8	D	
	3	13住	S－23	凹石	12.9	10.7	7.3	D	
	4	13住		凹石	13.2	10.9	8.8	D	床直
	5	35住	S－3	凹石	10.1	8.2	4.4	SST	
	6	35住	S－5	凹石	13.0	6.8	2.8	An	
	7	36住	S－23	凹石	26.7	22.3	13.3	カコウ岩類	
212	1	329+00	W－3	凹石	10.7	9.8	6.5	An	クロ土
	2	329+72	W－3	凹石	10.9	7.8	3.4	An	クロ土
	3	328+96	W－5	凹石	8.3	6.2	3.2	An	ベルト
	4	329+48	E－1	凹石	12.2	6.6	7.2	D	
	5	329+80	E－3	すり石	9.9	7.3	4.0	An	
	6	329+80	E－1	凹石	9.0	6.6	6.4	An	
	7	329+80	E－1	凹石	9.2	7.4	5.1	An	
	8	330+60		凹石	11.1	8.0	6.0	D	
	9	12溝		凹石	15.2	9.7	4.5	D	
	10	329+84	W－3	凹石	9.2	6.8	3.8	D	
213	1	329+52	E－6	凹石、多孔石	13.5	11.2	6.5	D	
	2	330+88	E－4	凹石	9.8	6.6	3.9	An	
	3	329+12	E－1	凹石	10.5	6.4	4.0	An	
	4	329+92	E－3	凹石	9.7	7.4	4.4	An	
	5	329+80	E－4	すり石、凹石	12.9	7.2	5.2	An	クロ土
	6	329+96	E－5	凹石	10.5	8.8	4.3	An	

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
213	7	329+04	W－4	凹石	12.8	6.6	4.5	An	
	8	329+48	E－2	凹石	11.8	8.8	4.3	An	クロ土
	9	330+8	E－3	凹石	9.05	7.5	5.9	D	
	10	12溝		凹石	11.8	7.9	5.8	D	
214	1	329+92	E－1	凹石	11.2	8.7	4.3	An	
	2	330+8	E－3	凹石	9.4	7.7	7.7	An	
	3	328+88	E－6	凹石	10.6	7.0	4.9	An	
	4	329+48	E－2	すり石	7.8	7.7	4.8	An	クロ土
	5	329+36	E－2	凹石	12.8	7.9	4.	D	クロ土
	6	329+60	E－1	凹石	12.4	12.2	4.7	An	
	7	329+48	E－2	すり石	11.1	6.6	3.0	An	クロ土
	8	328+80	E－4	凹石	10.4	8.0	5.0	An	
	9	330+44	E－1	凹石	11.7	9.3	5.1	An	
	10	329+76	E－4	凹石	8.0	6.3	3.7	D	
	11	329+00	W－3	すり石	6.4	5.3	3.4	An	クロ土
	12	329+92	E－6	凹石	10.3	7.0	1.8	An	
215	1	10住		多孔石	21.1	18.2	12.3	D	
	2	10住		凹石	19.5	17.0	11.0	An	
	3	41土壙		多孔石	17.5	23.5	12.0	D	
216	1	41土壙		多孔石	28.2	13.8	11.9	D	
	2	329+92	EL	多孔石	17.8	14.0	9.3	D	
	3	6方形		多孔石	16.3	12.9	7.3	D	
	4	329+96	W－2	多孔石	22.4	15.4	6.2	D	クロ土
217	1	8住		石棒	8.2	8.0	8.0	An	
	2	329+68	W－3	石棒破片	9.8	5.2	2.4		クロ土
	3	329+60	E－2	石棒頭部	3.1	5.7	3.0	An	
	4	53土壙		石棒	38.0	11.0	11.0	D	
	5	36住		石棒	25.1	12.6	9.8	An	
218	1	3住	S－3	凹石	9.5	9.2	6.1	D	
	2	3住	S－2	石皿	12.0	13.2	6.8	An	
	3	329+80	E－3	すり石	7.8	8.5	3.4	An	
	4	330+8	E－3	凹石	6.5	5.8	1.8	D	
	5	41土壙		石皿	33.6	31.6	10.9	An	裏面も石皿として使用
		330+36	E－1						
	6	20住		石皿	8.8	10.9	3.9	An	

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
219	1	13住	S－42	磨製石斧	11.4	5.6	4.1	SST	頭部欠
	2	20住	S－1	磨製石斧	6.4	3.1	1.4	塩基性岩(？)	刃部欠
	3	20住	S－1	磨製石斧	6.4	3.0	1.2	〃	刃部欠
	4	20住		打製横刃形石斧	6.2	6.8	1.1	H	
	5	17住		打製横刃形石斧	3.5	7.2	0.7	S	石包丁
	6	17住		打製横刃形石斧	4.0	8.8	1.0	H	石包丁
	7	17住		環状石斧	6.9	10.2	2.2	An	
	8	18住	S－4	砥石	7.3	3.8	1.2	SST	
	9	20住	S－2	砥石	6.2	3.0	1.9	カコウ岩	
	10	20住	S－3	砥石	5.5	3.7	2.0	SST	
	11	8住		軽石	7.7	4.0	3.0	An	
	12	330＋00	E－8 S－1	磨製石斧	18.1	7.0	3.1	緑色岩	ハマグリ刃
	13	23住		磨製石斧	4.8	4.8	2.7	Gs	刃部欠
	14	33住	S－7	砥石	12.1	10.1	7.3	カコウ岩類	
	15	25住	S－3	砥石	6.5	8.3	2.3	D	
	16	23住		磨製石斧	6.0	3.7	1.0	S	頭部欠
	17	330＋20	E－2	磨製石斧	6.5	4.9	2.7	Gs	刃部欠
	18	グリット	北西側	磨製石斧	4.8	3.2	1.1	塩基性岩(？)	
220	1	13住	S－93	石錘	4.6	3.7	1.9	An	
	2	33住	S－1	石錘	7.7	4.4	2.0	細粒砂岩	
	3	3方形		棒状石器	10.1	4.1	3.2	An	
	4	53土壙		石錘	7.4	4.8	2.0	S	
	5	80土壙		石錘	7.5	6.6	2.2	S	
	6	329＋16	W－4	石錘	7.5	4.2	2.2	S	
	7	329＋80	E－2	おもり	7.0	3.7	1.9	S	46ｇ
	8	329＋48	W－5	棒状石器	12.7	4.2	3.0	H	
	9	329＋92	S－3	棒状石器	12.0	3.0	2.5	SST	
	10	329＋88	W－1	たたき石	18.3	5.6	3.5	H	
	11	330＋4	W－3	石錘	7.9	5.4	1.5	S	
221	1	2住	S－6	石鏃	2.2	1.9	0.4	チャート	
	2	6住		石鏃	4.0	2.3	0.8	黒曜石	ピエスエスキューユ
	3	9住	S－7	石鏃	2.0	2.2	0.4	黒曜石	
	4	13住	S－63	石鏃	4.2	2.6	1.0	黒曜石	
	5	13住	S－61	石鏃	2.7	1.0	0.5	黒曜石	
	6	14住	1220	石鏃	2.7	1.9	0.4	An	

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
221	7	16住下層	69	石鏃	1.3	1.1	0.3	黒曜石	
	8	16住		石鏃	2.5	1.2	0.3	黒曜石	
	9	25住		石鏃	1.8	3.6	0.4	黒曜石	
	10	25住		石鏃	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	11	26住	フク土	石鏃	2.1	1.7	0.4	黒曜石	
	12	26住		石鏃	2.7	1.5	0.3	黒曜石	
	13	26住	フク土	石鏃	2.4	2.2	1.1	黒曜石	
	14	32住	S－3	石鏃	3.8	1.2	0.3	チャート(?)	
	15	33住	S－3	石鏃	1.9	1.6	0.3	黒曜石	
	16	35住	S－2	石鏃	2.0	1.7	0.5	黒曜石	
	17	36住		石鏃	2.2	2.0	0.7	黒曜石	
	18	39住	S－3	石鏃	3.1	1.8	0.3	黒曜石	
	19	39住	S－3	石鏃	3.4	2.1	0.5	黒曜石	
	20	39住		石鏃	3.4	2.4	1.3	黒曜石	裏剥離なし・ピエス
	21	39住		石鏃	3.2	2.5	1.2	黒曜石	裏剥離石鏃未製品
	22	39住	フク土	石鏃	1.4	1.8	0.3	黒曜石	
	23	39住	S－11	石鏃	2.0	0.7	0.4	黒曜石	
	24	40住		石鏃	3.2	2.4	0.9	黒曜石	裏剥離有り
	25	4周溝		石鏃	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	26	4周溝		石鏃	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	27	5周溝		石鏃	2.0	1.8	0.4	黒曜石	
	28	5周溝		石鏃	2.5	1.6	0.3	黒曜石	
	29	5周溝		石鏃	1.7	1.1	0.4	黒曜石	
	30	9周溝		石鏃	2.3	2.0	0.7	黒曜石	
	31	2土壙		石鏃	3.4	1.9	0.6	黒曜石	
	32	74土壙		石鏃	2.5	2.1	0.8	黒曜石	
	33	特8		石鏃	2.6	1.5	0.4	黒曜石	
	34	特8		石鏃	2.1	1.4	0.3	黒曜石	
	35	特8		石鏃	1.7	1.3	0.3	黒曜石	
	36	特8		石鏃	2.4	1.6	0.3	黒曜石	
	37	特8		石鏃	1.6	1.3	0.3	黒曜石	
	38	特8		石鏃	11.4	5.6	4.1	SST	頭部欠
	39	特8		石鏃	6.5	3.1	1.4	珪質岩	刃部欠
	40	特8		石鏃	6.7	3.0	1.2	蛇紋岩	刃部欠
	41	特8		石鏃	6.4	6.8	1.1	H	

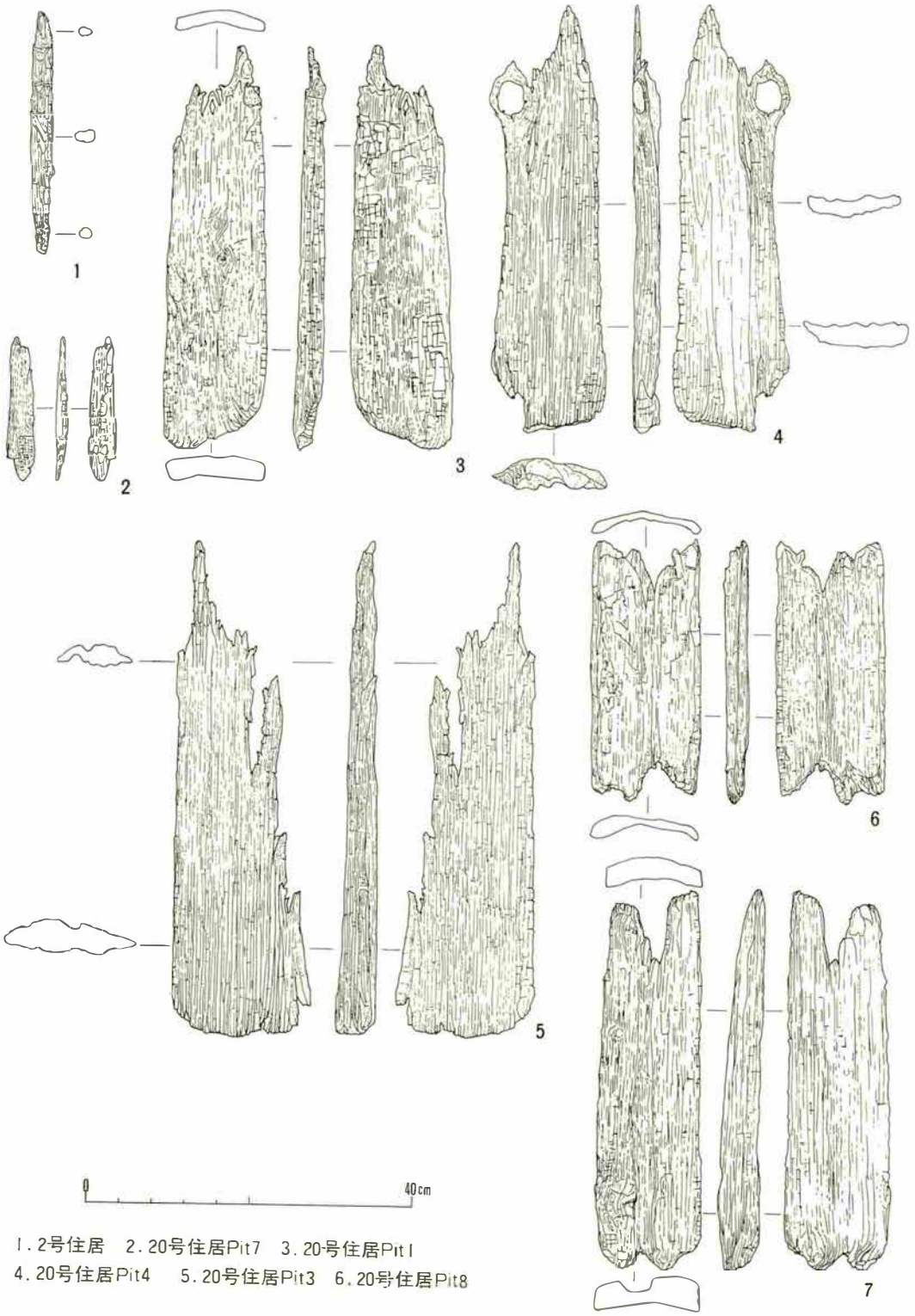
番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
221	42	特8		石鏃	2.4	2.1	0.8	黒曜石	ピエスエスキューユ
	43	特8		石鏃	1.9	1.6	0.3	黒曜石	
	44	特8		石鏃	1.8	1.4	0.3	黒曜石	
222	1	10溝		石鏃	3.9	1.9	0.8	黒曜石	
	2	12溝 329＋80	W－2	石鏃	1.7	1.5	0.4	黒曜石	
	3	320＋20	W－4	石鏃	2.3	1.3	0.4	黒曜石	
	4	330＋68	E－5	石鏃	1.8	1.3	0.3	黒曜石	
	5	329＋68	W－5	石鏃	2.7	2.0	0.4	黒曜石	
	6	329＋68	W－4	石鏃	1.5	1.0	0.3	黒曜石	
	7	330＋60	E－2	石鏃	2.0	1.5	0.3	黒曜石	
	8	329＋16	W－4	石鏃	2.8	1.3	0.4	黒曜石	
	9	329＋70	W－5	石鏃	2.9	1.9	0.5	黒曜石	
	10	329＋80	W－3	石鏃	1.9	1.6	0.4	黒曜石	
	11	329＋84	E－1	石鏃	2.7	1.9	0.3	黒曜石	
	12	330＋16	W－4	石鏃	2.1	1.4	0.5	チャート	
	13	329＋68	W－2	石鏃	2.4	0.7	0.5	黒曜石	
	14	329＋64	W－3	石鏃	1.5	1.5	0.4	黒曜石	
	15	G		石鏃	2.4	1.0	0.6		
	16	330＋00	E－5	石鏃	2.0	2.7	0.6	黒曜石	
	17	329＋64	W－3	石鏃	2.2	2.2	0.9	黒曜石	
	18	329＋60	W－4	石鏃	2.2	1.9	0.8	黒曜石	裏面剥離あり・ピエス
	19	329＋64	W－3	石鏃	2.4	2.5	0.6	黒曜石	
	20	7住	CP中	石鏃	3.6	7.0	0.8	S	
	21	20住		石鏃	2.9	3.8	0.9	チャート	
	22	特7		打製横刃形石斧	4.4	6.0	4.2	黒曜石	横刃形
223	1	4住	S－11	磨製石鏃	5.6	2.5	0.4	S	
	2	6住	S－2	磨製石鏃	3.4	2.2	0.3	S	
	3	8住	床	磨製石鏃	3.7	1.8	0.3	雲母片岩	
	4	8住	7-S-1	磨製石鏃	3.3	1.9	0.2	S	
	5	16住	S－1	磨製石鏃	2.6	2.1	0.3	S－1	
	6	17住	床	石鏃未製品	3.5	2.5	0.3	床	
	7	17住	床	石鏃未製品	3.9	2.7	0.4	床	
	8	17住	床	磨製石鏃	6.8	3.6	0.5	床	
	9	18住	S－1	磨製石鏃	5.0	2.7	0.6	S－1	
	10	18住	S－2	磨製石鏃	6.8	3.1	4.0	S－2	

番号 図面		遺構	No.	器種	法量 cm 長	巾	厚	材質	備考
223	11	18住	S－3	石鏃未製品	5.0	3.0	5.0	雲母片岩	
	12	18住	S－6	玉	2.1	1.5	3.0	〃	
	13	38住	7S－4	磨製石鏃	4.4	1.6	3.0	S	
	14	19住	床	磨製石鏃	7.1	1.0	0.5	S	左⅔欠
	15	1号溝	S－1	磨製石鏃	5.9	2.9	0.3	雲母片岩	
	16	特8		磨製石鏃	6.3	2.5	0.3	S	
	17	18	S－6	磨製石鏃	2.1	1.6	0.2	S	刃部のみ
	18	10溝		磨製石鏃	4.0	2.2	0.3	S	
	19	10溝		磨製石鏃	4.0	2.2	0.3	S	
	20	3住		石製品	1.9	0.9	0.9	滑石	
	21	13住	27		2.8	1.2	1.0	コハク	
	22	5周溝			2.2	1.1	1.2	滑石	
224	1	17住		土偶	11.9	6.7	3.6		頭部及腕部欠
	2	13土壙		？土偶	4.9	5.4	4.3		
	3	5周溝		？	6.2	3.4	1.6		
	4	1住	P－15	土製有孔円盤	2.4	2.4	0.5		
	5	3周溝		土製有孔円盤	2.4	2.5	0.9		
	6	表採		縄文土製円盤	2.7	2.8	0.9		
	7	28土		土製円盤	3.4	3.6	1.4		
	8	7住		縄文土器口縁土製円盤	3.1	3.6	1.4		
	9	7住		土製円盤	2.8	2.8	1.0		
	10	7住	フク土	土製円盤	4.3	4.4	1.2		
	11	13住	P 14	土製円盤	3.4	3.7	1.1		
	12	20住	86	縄文土器片	5.5	5.6	1.2		
	13	329＋72	W－2	土製円盤	3.8	3.6	1.5		
	14	9住	フク土	耳飾	3.3	1.9	1.1		黒色表面に赤彩痕有り
	15	18住	P－5	用途不明	5.2	2.0	0.8		黄褐色土製粘土紐
	16	24住		甑底部？	2.9	1.8	1.2		不明土製品
	17	10住	SI	石製紡錘車	5.0	1.5	1.8	安山岩	
	18	16住	88	土製紡錘車	4.5	1.4	1.2		
	19	25住	P－13	土製紡錘車	6.4	1.2	0.8		
	20	25住	P－12	土製紡錘車	5.7	2.2	1.2		
	21	33住	P－262	土製紡錘車	5.2	1.1	1.6		
	22	12溝	E－1	土製スプーン	8.3	1.8	2.5		
	23	330＋00	Eミゾ	土製スプーン	6.0	1.4	2.3		

番号		遺構	No.	器種	法量 cm			材質	備考
図面					長	巾	厚		
225	1	特7		銅製品				銅	
	2	不明		ガラス玉	0.8	0.7	0.5	ガラス	
	3	不明		ガラス玉	0.8	0.8	0.5	ガラス	
	4	不明		ガラス玉	0.7	0.7	0.6	ガラス	
	5	不明		ガラス玉	0.7	0.8	0.5	ガラス	
	6	不明		ガラス玉	0.8	0.8	0.6	ガラス	
	7	不明		ガラス玉	0.8	0.7	0.5	ガラス	
	8	不明		ガラス玉	0.7	0.7	0.6	ガラス	

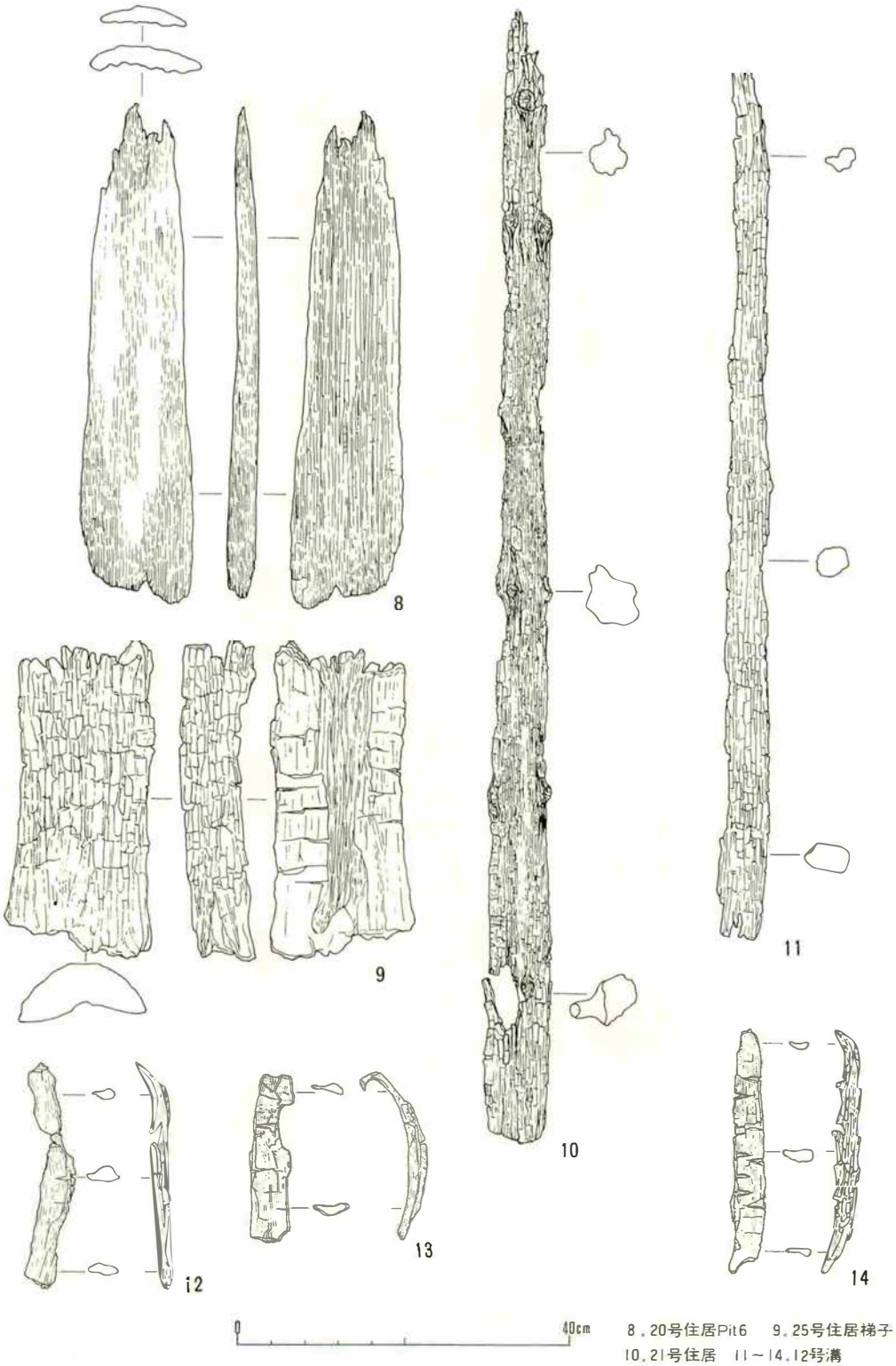
〔註〕石材の材質略記号は次のとおりである。

mH, eH	点紋粘板岩
H	ホルンヘルス
An	安山岩
D	デイサイト
DT	デイサイト質凝灰岩
S	粘板岩
SST	砂岩
GS	緑色岩
T	凝灰岩



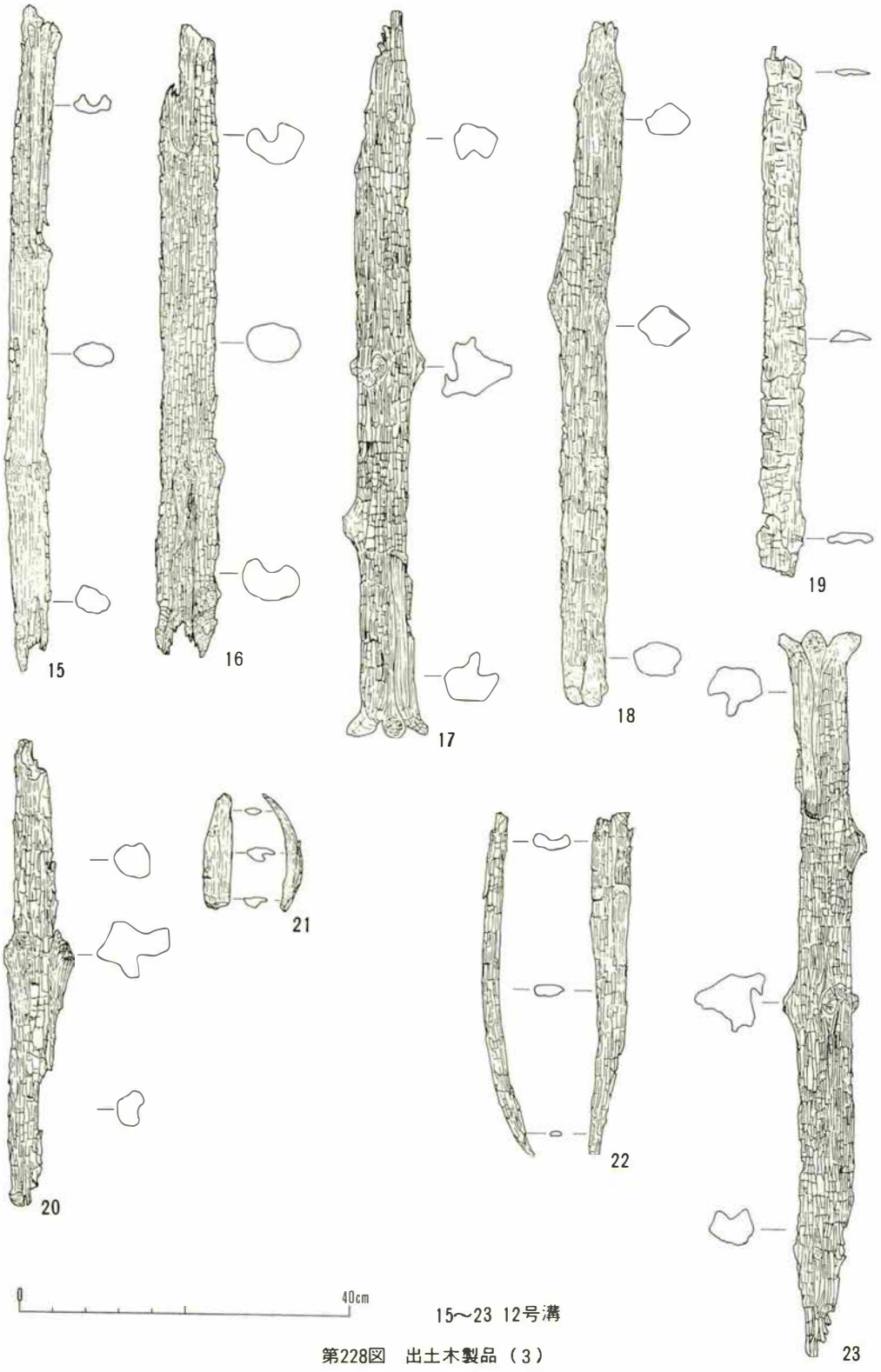
1．2号住居　2．20号住居Pit7　3．20号住居Pit1
4．20号住居Pit4　5．20号住居Pit3　6．20号住居Pit8

第226図　出土木製品（1）



8，20号住居Pit6　9，25号住居梯子
10，21号住居　11～14，12号溝

第227図　出土木製品（2）



15～23 12号溝

第228図　出土木製品（3）

第10表　金の尾遺跡遺構出土遺物内訳

遺構	土器（弥生）											土器（縄文）			石器											特殊遺物					
住居	甕	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	碗	器台	甑	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鏃	打製鏃	石棒	その他	土偶	土製紡錘車	耳飾り	メンコ	土製有孔円盤	玉
1 住	1														1			1												1	
2 住		1			1										1			1					1								
3 住	8	2			2										2				2		1										
4 住	7				1				1						1				1			1									
5 住																															
6 住	16	3	1			2			1						1							1	1								
7 住												8	1		4	2			1						石匙 1				3		
8 住	1	1			1										2			1				2		1	軽石 1						
9 住	2	1							1								1						1					1				
10 住												3	1		7				3	1					紡錘車 1						
11 住																															
12 住		1																													
13 住												17		手捏 2	17	3	1		4				2		石錘 1				1		
14 住	2																						1					1			
15 住	5	2																							1		1				
16 住	5	2			2										1							1	2								
17 住	4	1			1				1	1						2						2	1		環状斧 1	1					
18 住	5	1			1				1													4	1		砥 軽 1						1
19 住	4	1			1																	1									
20 住	3	3							1							1	2	1	1		1				砥 2 匙 2						
21 住	8						1	1							1	1		2													

遺構	土器（弥生）											土器（縄文）			石器											特殊遺物					
住居	甕	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	鬲	器台	甑	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鏃	打製鏃	石棒	その他		土偶	紡錘車製土	耳飾り	メンコ	土製有孔円盤	玉
22 住																															
23 住												2		1	3		3	3													
24 住	6	5													1					1											
25 住	8		2		2															1			2		砥 1			2			
26 住	3	1																					3								
27 住																															
28 住			1		3					1																					
29 住	9	3			2					1								2	1	1											
30 住	5	1			2										1																
31 住	2		1																												
32 住	1				1											1							1								
33 住	7	1	1		3										1			1					1		砥 1	錘 1		1				
34 住	9	3			1						注口(片口) 1				1																
35 住	3	1				1		1							2	1			2				1								
36 住	7	5			5					1						2		1	1				1	1							
37 住																															
38 住	1	2			2													1				1									
39 住												8											6								
40 住												4			1								1								
計	132	41	6		31	3	1	2	6	4	1	42	2	3	48	13	7	14	16	4	2	13	26			1	4	2	4	1	1

第10表　特殊遺構遺物点数

遺構	土器（弥生）											（縄文）			石器											特殊遺物					
特遺	甕	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	椀	器台	甑	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鏃	打製鏃	石棒	その他	銅製品					
特 1												1																		
特 2												2																		
特 3																														
特 4																														
特 5																1		1												
特 6																														
特 7																1										1				
特 8																		1	3			1	12							
特 9																														
特 10																														
特 11																1														
特 12																														
特 13												1																		
計												4				3		2	3			1	12			1				

第10表　方形周溝墓遺物点数

遺構	土器（弥生）											（縄文）			石器											特殊遺物						
周溝	甕	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	碗	器台	甑	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製斧	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鏃	打製鏃	石棒	その他	土製有孔円盤						
1 周					2										1																	
2 周		1																													
3 周	2	1			1										2									1		1					
4 周		1																				2									
5 周	1	1																				3									
6 周															1			1		1											
7 周	1																	2													
8 周																															
9 周	1	2			1										3			2				1									
10 周																															
11 周	1																														
12 周																															
13 周	1																														
14 周	2																														
15 周																															
16 周	1				1										5																
計	10	6			5										12			5		1		6		1		1					

第10表　溝出土遺物点数

遺構	土器（弥生）											（縄文）			石器											特殊遺物						
溝	甕	壺	鉢	坏	高坏	台付甕	碗	器台	甑	手捏	その他	深鉢	浅鉢	その他	打製品	横刃	磨製斧	すり石	凹石	多孔石	石皿	磨製鏃	打製鏃	石棒	その他	土製スプーン					
1																						1									
2																															
3																															
4																															
5																															
6																															
7															1																
8																															
9																															
10															3	1						2	1								
11																															
12	2	3													2			6	3				1	丸石2		1					
13																															
14																															
15																			2												
計	2	3													6	1		6	5			2	2	2		1					

第Ⅳ章　ま　と　め

第１節　縄文時代

1.　本遺跡から出土した縄文時代の遺物で、最も古いものは、押型文土器である。第185図１に示したもので、口唇部に斜方向の刻みがあり、口縁部の下には無文部１㎝をあけて山形押型文が横方向に施文されている。１片のみであり、破片周囲は磨滅していることから、調査区域外からの流入品とも考えられよう。

縄文前期では、諸磯ｂ・ｃ式、十三菩提式の土器が見られ、このうち遺構に伴うのは、十三菩提式である。39号住居址出土土器は、半截竹管により集合沈線が施される一群と、縄文地文だけの一群、縄文地文に結節浮線文が貼付けられるもの、細粘土紐が平行状又は波状に貼付けられるものなどがある。これらの一群のうち集合沈線文は、十三菩提式土器群中でも比較的新らしい時期に属するものであろうか。この時期の一括資料は、東八代郡境川村の小黒坂南遺跡群で発見され報告されている。

なお第229図１、２の底部には特殊な敷物の圧痕が見られる。この点については第２節で詳述する。

五領ケ台式土器はその大部分が破片であり、器形の明確なものは無いが、集合沈線文が施されたものを主体とし、古手に属している。

中期中葉の遺物は豊富で、７号、13号、40号住居である。この３軒の住居は藤内Ⅱ式に属し、１モメントの集落の一部と思われる。７号住と13号住居が２軒で１単位となり、40号住居は、１軒のみか、あるいは未調査区の住居と１単位になっていたと思われ、自然提防末端の両側に広場をはさんで占地していることが分る。

23、27号住居は縄文中期終末の曽利Ⅴ式土器が出土する。23号住居は住居のプランが不明であるが、完形筒形土器出土、地床炉などから住居址としたものであるが、方形石囲炉をもつ27号住居とは炉の形態が大きく異なるという相違を見せる。しかし、この周辺には数多くの土壙が造られ、覆土中からも多量の土器が出土するなど、中期終末の遺跡として特徴的な傾向を示す。

土器で特筆すべき例がある。第70図44～52、第190図117～130の結節縄文が施された土器である。この土器の時期は中期終末であり、本県では初見であろう。このような文様は、長野県伊那谷で発達するものであり、彼我の関係を示しているのであろうか。だとすれば、八ケ岳山麓のルートを想定するより、南アルプス横断ルートを考えなければならない。

なお、曽利Ⅴ式と加曽利ＥⅣ式の関係であるが、この点について、最近米田明訓氏が本県八ケ岳山麓の柳坪遺跡で述べている。曽利式土器終末が加曽利Ｅ終末との時点まで併行するのか論議になったこともあるが、少なくとも中部では称名寺式直前まで曽利式は継続するものと思ってよかろう。第188図83は曽利Ｅ式の折衷形式と言うべきもので、八の字文と縄文が沈線間に交互に施文されている。しかし、このような例は多いわけではない。第164図２、３の特２

号土壙出土土器２個は、両型式伴出の最も良好なセットと言える。

後期の称名寺式・堀の内式土器等は極めてわずかであるが出土している。

2. 石器は、縄文～弥生時代のものをあわせて図にしたが、第196図12は偏平蛤刃磨製石斧の未成品である。製作工程を知る上で貴重な資料と言えよう。本遺跡では打製石斧の量が多く、磨石、凹石、多孔石なども多い。これに対して石皿、石棒等が少ないが、こうした傾向は、八ケ岳山麓の縄文中期の遺跡の特徴をもっており、諏訪湖盆地、伊那谷等とは異なった生産活動によって生計を営んでいたものと思われる。即ち金の尾遺跡は八ケ岳タイプの縄文時代中期集落と言うことができよう。

第２節　底部圧痕

底部圧痕（第229図、図版48、49）

39号住居跡出土土器のうち２点に、以下に示す特殊な底部圧痕が認められたので記しておく。いずれも条が同心円状を呈する圧痕であり、中期後葉以降に多くみられる網代痕とは明らかに別のものである。同心円状を呈し、かつ非常に密に編まれているところから、カゴ底圧痕と考えられる。

第229図中の1.2は本住居跡出土で、3は釈迦堂遺跡群Ｓ－１区23号住居跡（五領ケ台式期）から出土したものを参考のため載せることとした。以下に個々の資料について記すことにする。なお、文中のタテ・ヨコは、カゴの形態を考慮し、中央から放射状に広がる条をタテ条、それに同心円状に絡む条をヨコ条とする。

1. 底部は完存している。底径9.0㎝を計る。底部は中央が約2.5㎜凹んでいるが、周縁部を12.3㎜の幅で調整した痕跡があり、製作時にはこの凹みはさらに深いものであったと考えられる。

圧痕は拓本ではほとんど判らないが、モデリング陽像では詳細な部分まで観察することができる。図版49の１－ｂ’（図版中の番号は第229図中の番号に対応し、ａは実物、ｂ・ｂ’はモデリング陽像を示す。以下、図版を略す。）では部分的ではあるがタテ条、ヨコ条ともに認められる。同心円の中心から20㎜前後の部分によく残っており、その部分でのタテ条は２㎜ほどの間隔、ヨコ条は１～1.5㎜の幅のものがほとんど隙間なく詰まっているようにみられる。また、別の部分ではタテ条は全くみられないが、ヨコ条のみが１㎝の間に５本確認できる。つまり、ここでのヨコ条の間隔は約２㎜ということになる。しかし、北陸地方でのカゴ底圧痕例をみてもこのような目の細かいつくりのものは存在しない。渡辺誠氏によれば、石川県野々市町御経塚遺跡の編布圧痕は目の細かいものであるが、タテ糸、ヨコ糸ともに２㎜前後の太さのものが存在するということである。本資料はカゴと編布の違いはあるものの、それと同様か、あるいはさらに細かいつくりと考えられる。

本資料は、モデリング陽像からもタテ条に対しヨコ条が同心円状に絡んでいることは明らかであり、カゴ底圧痕と考えられるが、その編み方については後述する。ただ、このように目の細かいつくりであれば、条に使用される材も繊維以外には考えられず、カゴというより、袋の

ような柔軟な編物を想定すべきであるかもしれない。

2. 底部は一部欠損している。底径11.5cmを計る。底面は1㎜凹んでいる。1と同様の調整が周縁部になされており、その幅は約20㎜である。従って、圧痕は中央部にのみ残っているが極めて不鮮明である。タテ条およびカゴ底中央は全く残っていないが、ヨコ条の間隔は2～2.5㎜程度と推定される。また、ヨコ条のうち一目一目が明らかな部分が一部残存しており、タテ条は2㎜程度の太さとなろう。なお、ヨコ条は4周以上存在する。

3. 底部はほぼ完存。底径14.4cmを計る。カゴ底中央は残存していないが、一部にタテ条らしき圧痕があり、約1㎜の太さである。ヨコ条はかなり密に詰まっており、1cmの間に4条存在し、太さは2㎜程度と推定される。

カゴ底中央部らしき部分を中心とした直径約6cmには圧痕がほとんどなく、そこから外側に急に条間の詰まった同心円状圧痕がみられるようになる。その境の部分には、一部ではあるが、放射状ではなく明らかに縦横の条が直交した圧痕（3－b'）が確認される。網代痕である。同心円状の圧痕はこの部分より外側となる。この同心円部分も一目一目の状況をみると、ヨコ条に対するタテ条の角度がほぼ直交するもので、少なくともモジリ編みとは考えられない。これも網代編みの可能性が強い。従って、本資料は中央部の直径6cm部分を網代編みにしたのちその外側で材を割るか、新たに加えるかして、それらをタテ条として同心円状の網代編みにしたものと思われる。6cmの部分を境として急に条間の詰まった圧痕がみられるのは上記の編み方によるものであろう。本資料もまたタテ条の太さは1と同様であり、小型の丁寧なつくりのものであろう。なお、ヨコ条は16周以上存在する。

以上のように3点の資料の概要を記したが、いずれも中央部には同心円状の圧痕がみられない。これは、3で示したように、ある程度中央部を網代編みにしたのち、それぞれの材を割るか、新たに加えるかしてタテ条とし、そこにヨコ条を新たに同心円状に絡ませる。あるいはタテ条の一本をヨコ条としてスタートさせるなどの方法でカゴが編まれたと考えられる。その編み方も、既報告のカゴ底圧痕にみられる、2本1単位でヨコ条をなすモジリ編みではなく、同心円部分も1本超え・1本潜りの網代編みと考えられる。

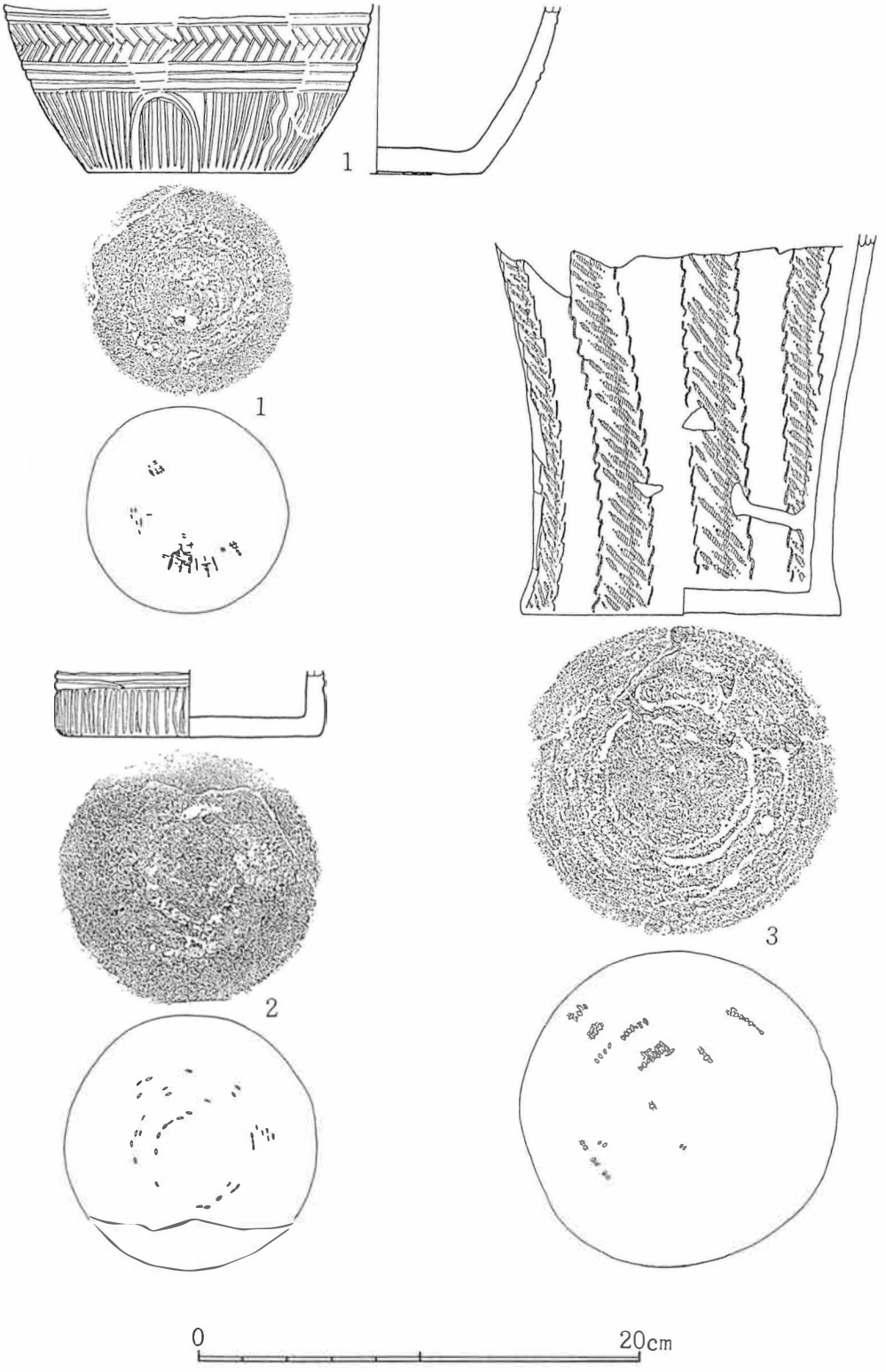
タテ条、ヨコ条ともにその材は非常に細いものであり、竹や蔓などは考えにくい。おそらく繊維であろう。また、繊維のような柔軟な材であればこそ、このような緻密なカゴを作ることが可能であったと考えられる。

なお、山梨県内では前期末～中期初頭の類例が本資料を含めて8点確認されているが、これについては別稿にまとめてある。また、最近では福井県浜貝塚で該期の編物実物が出土しているのに加え、石川県真脇遺跡から該期のカゴの実物が出土したことを記しておく。

（長沢宏昌）

参考文献

長沢宏昌　1987　「縄文時代前期末～中期初頭の土器底部みられる編物痕について」
『研究紀要』3号　p1～p14　山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター　山梨県中道町



第229図　土器底部圧痕

森川昌和　1979　「縄と編物」『鳥浜貝塚』　p 143 ～ p 145　福井県教育委員会　福井
山本直人　1986　「底部圧痕・編物・縄」『真脇遺跡』p 248 ～ p 260　能都町教育委員会　石川県能都町
渡辺　誠　1983　「編布およびカゴ底圧痕について」『野々市町御経塚遺跡』　p 339 ～ p 346　野々市町教育委員会　石川県野々市町

第3節　弥生時代（第230 ～ 235図）

土器

住居址及び周溝墓中より出土した一括土器を、文様構成、器形から分類すると次のように分けることができよう。

壷形土器

1類：頸部に櫛状工具によってT字文、又は平行直線文、格子目文が施行されるもので、1、2は外面全部と内面は頸部より上に赤色の塗彩が行なわれる。胴部は算盤玉形を呈し、胴最大径は中央よりやや下に位置する。頸部はくの字に屈曲し、斜め上方に広がって口縁を形成するが、口唇は水平に外反する。3 ～ 5はT字文が頸部に施されるが、赤彩はない。頸部も孤状を描いて外反口縁となる。6は口唇に4ケ所の突起が見られる。

2類　a：7、9は頸部と口唇部に櫛描波状文が施されるもので、8、10とは口縁部の形態が異なる。

b：8はT字形の口縁をもち、口縁部には波状文の上に4本の粘状文の上に4本の粘土紐が、恐らく4単位で貼付けられる。

c：10は口唇部が折り返し口縁となっているもので、頸部、口唇部に波状文が施される。

d：11は素縁の口唇部と、口縁内側に波状文が施される。

この他に、波状文の下に沈線による三角区画を連続させ、その中を斜線、格子目で充鎮させるものが破片等で出ている。

3類：頸部に簾状文が施される壷で、その他の文様を有するものと無いものの2種類に分けられる。

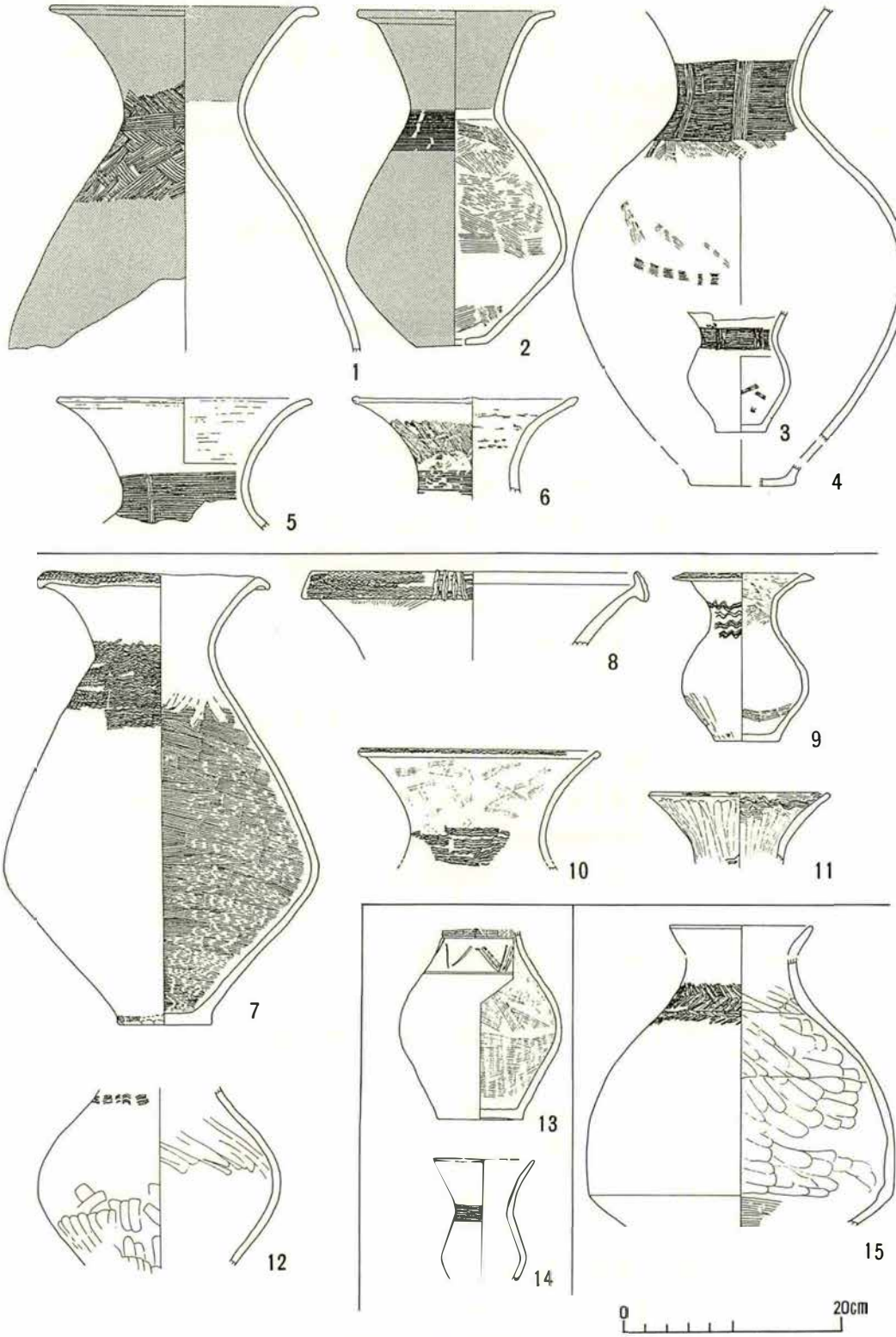
a：頸部簾状文の下に横線をめぐらし、その間を鋸歯状区画に沈線で区画したものである。2類eと近い関係が想定されよう。

b：頸部に簾状文が施文されるだけのものである。

4類：胴部が大きく膨らみ、胴下方部が最大径となって、くの字に折れて底部に達する。口縁は欠損して不明であるが、図示した状態よりも大きく外反するであろう。頸部に櫛歯状工具で綾杉状の刺突文を施す。

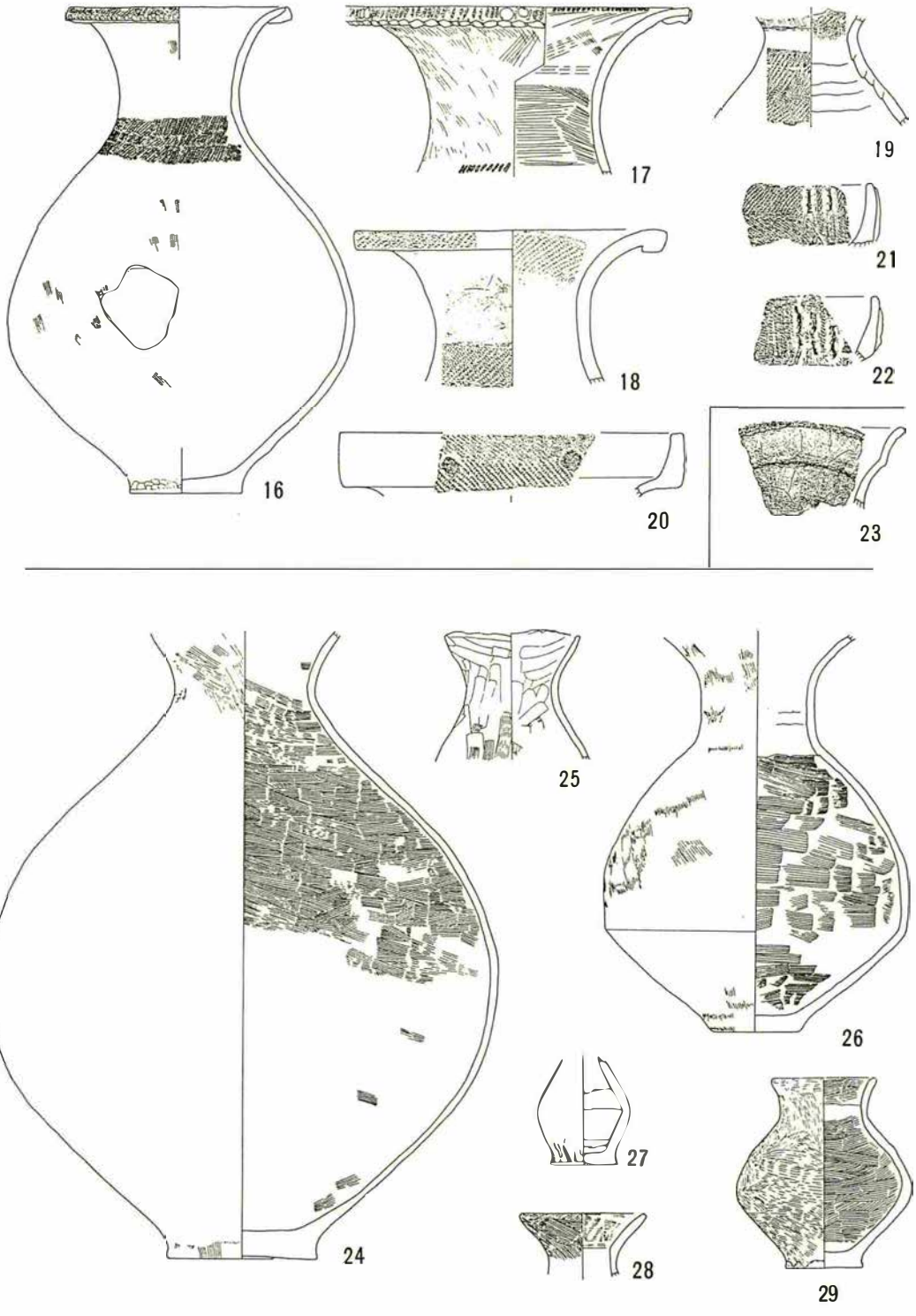
5類　a：16～22で、縄文を施文されたものを一括している。16～18は頸部から半円を描いて外反した口縁の先端は折り返され、その端部及び内面などに縄文が施される。頸部も縄文である。

b：20～22で、直立した口縁外面に縄文が施文され、円形貼付文、棒状貼付文か施されるもの

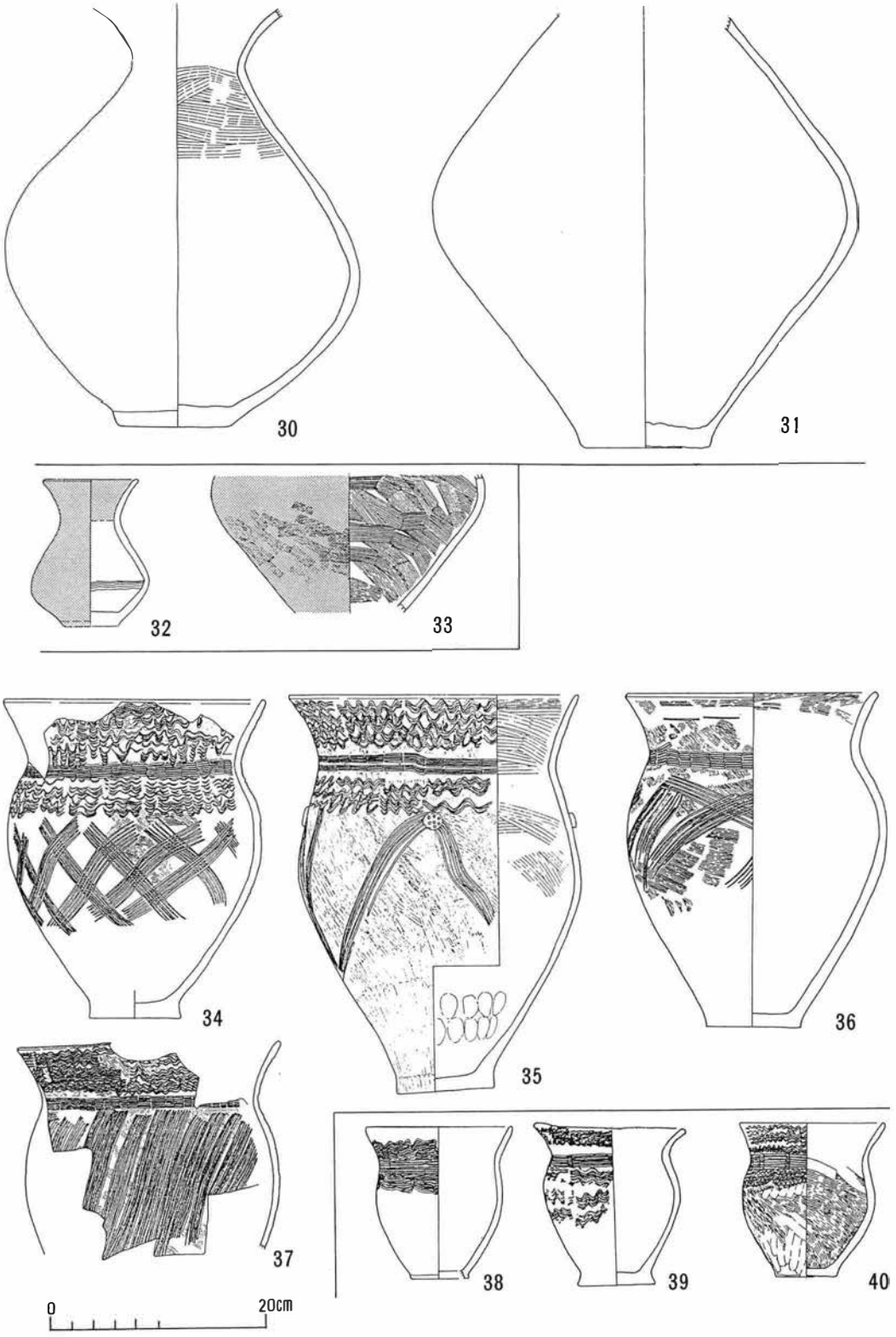


第230図　弥生土器分類図（1）

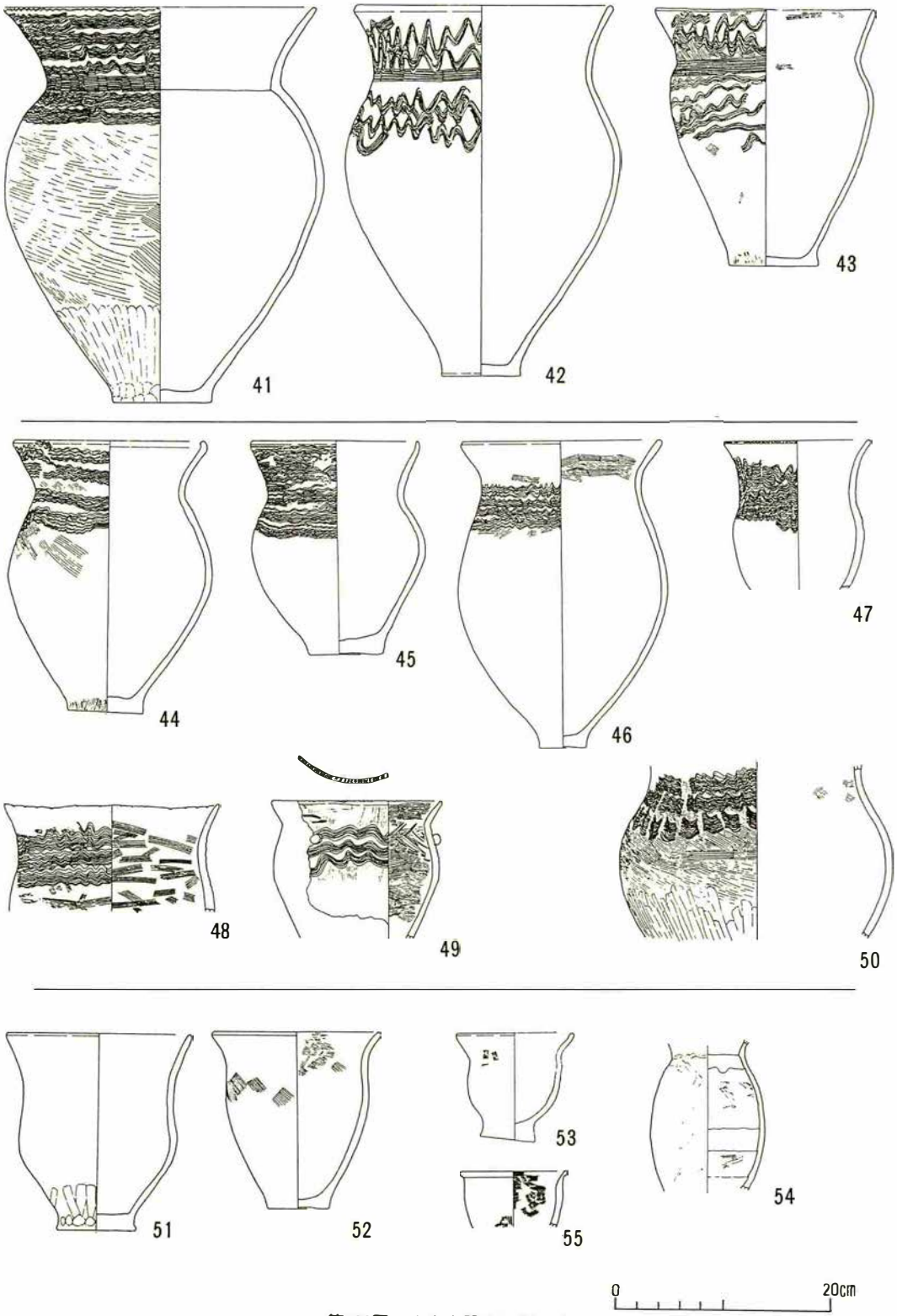
1～6壷1類、7～12壷2類、13、14壷3類、15壷4類



第231図　弥生土器分類図（２）
16～22壷５類、24～33壷６類

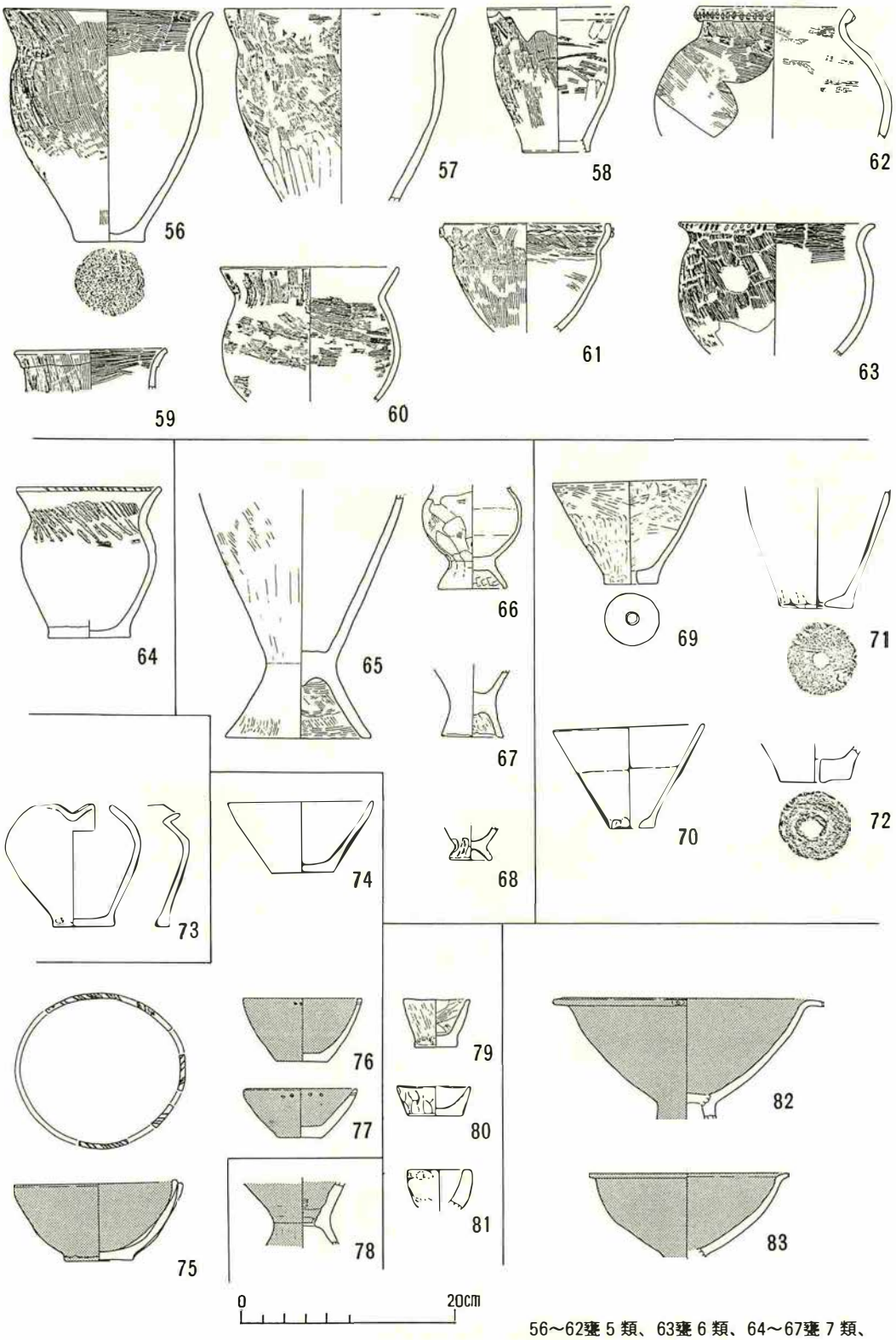


第232図　弥生土器分類図（３）　32、33第７類、34～37甕１類、38～43甕２類



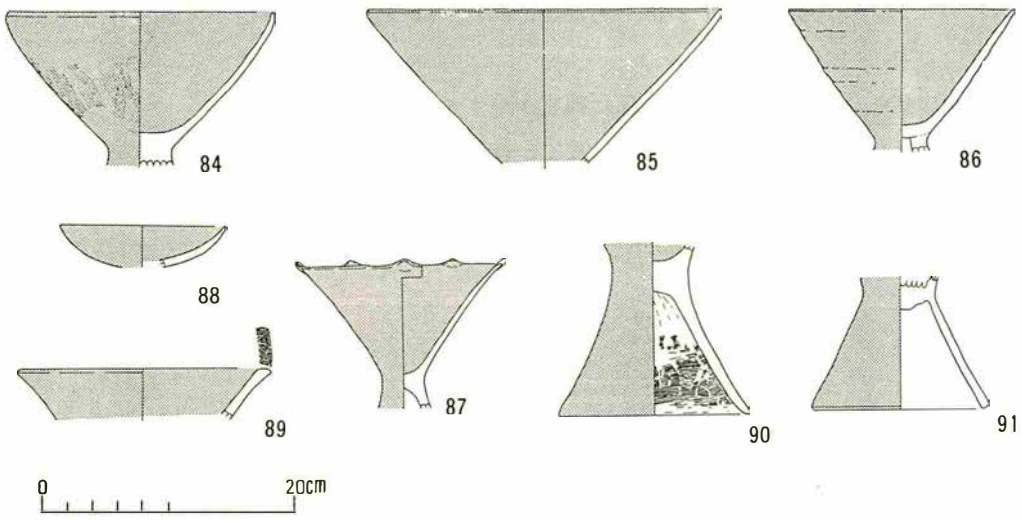
第233図　弥生土器分類図（4）

44～50甕 3 類、51～55甕 4 類



56～62甕５類、63甕６類、64～67甕７類、
68～71甑、72片口土器、73～76坏、鉢、
77器台、78～80手捏土器

第234図　弥生土器分類図（５）



第235図　弥生土器分類図（6）

である。これらは球状の胴部となろう。

6類　a：24～27、30、31で、無文の土器を一括している。刷毛目整形後にヘラで磨いて刷毛目をほとんど消している。25はやや整形が荒い。又、24、30は球胴を呈し、26は胴下半に稜をもって屈曲する。31は最大径が胴中央部に位置するものである。

b：28、29で、内外面に刷毛目が残っているものである。

7類：32、33で赤色塗彩された壷である。33は胴部上半が無いので、ここに含めるかどうか分らない。

甕形土器

甕は大きく8類に分けることができる。

1類：頸部に簾状文があり、胴部に格子目文かその退化した文様をもつものである。34は口縁と胴部上半に波状文が施される点では35と同じであるが、35は格子目文ではなく斜線が左右交互に施され、円形貼付文が付けられる。36は波状文を持たず、37は口縁のみ波状文が施されるなど、バラエティーがある。

2類：38～43で、頸部の簾状文をはさみ、口縁部と胴部下半に波状文が施される。これらの波状文は簾状文を境に、口縁部は下から上へ、胴部は上から下へと施文される傾向がある。

3類：44～50で、波状文が胴部より上半に施文されるものである。46～49は口縁部まで波状文が施文されていないが、47、48、49は、口唇部に刻みがある。50は波状文帯の下に平行単線文が施されるが、こうした文様はあまり多くない。

4類：無文系の甕を一括している。形は51～53が深鉢形で、54は頸部が明瞭にくびれている。55は浅鉢形であろうか。

5類：56～62で、刷毛目整形痕が内外面に残るもので、形は深鉢形と推定される。

a：56～58、縦方向に刷毛目が施され、内面は横に刷毛目整形が行なわれる。深鉢形である。

b：59は口縁が折り返されている特異な甕で、あまり類例はない。

ｃ：60～63は胴部が球形を呈する甕であるが、62、63は口唇部に刻み目が付けられるものである。

6類：64の1点のみで、口唇及び頸部に縄文が施されたものである。

7類：65～68の台付甕である。完形品はなく、球胴をもつ64と、直線的に広がる63などがあるが、組成上は量が少ない。

甑

ａ、69、70の鉢形を呈するもの

ｂ、71の深鉢形を呈するものがある。

片口土器

無頸壷形の一部口唇が外に開いた片口土器であり、他にはない。

鉢形土器

赤色塗彩された鉢のうち、口縁部に穴の穿たれたものが76、77である。75は口唇部に刻みが施された楕円形をしている。74は無彩である。

器台形土器

78は高坏のように見えるが、坏と脚の接合部には穴があいており、器台と言えよう。

小型土器

79～81は手捏の小型土器である。

高坏

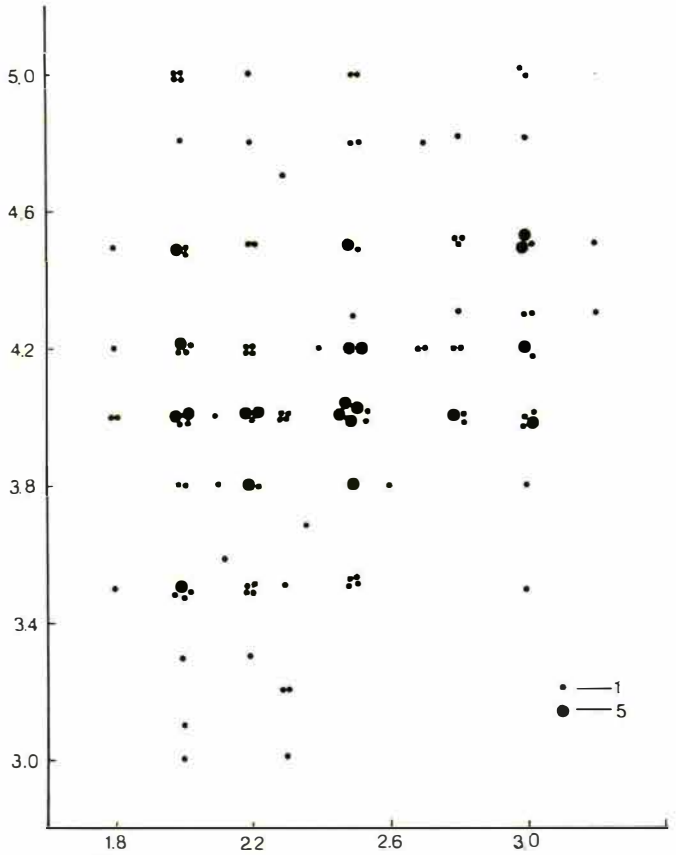
82、83は坏体部が碗形をしており、口唇が外反して水平になる。82は4ケ所に突部がある。84は碗形坏部の口縁が先端で直立するものである。85、86は直線的に外傾した坏体部をもつもので、87は口唇部に5ケ所の突起をもつ。88は皿状の坏である。89は口唇部に細かい縄文が見られる。90、91は高坏脚部で、直線的台形を呈している。

これらの土器を見ると、いくつかの特徴を認みることができよう。まず、信州系の土器群とどのような関係にあるかである。壷形土器1類は長野県の北信地方に分布する弥生時代後期中頃の箱清水式土器と共通性の高いもので、壷3類の14も同じである。壷3類13は、箱清水式の前段階の吉田式に比定されよう。壷2類ａの口縁は河内地方の第Ⅲ、Ⅲ様式に見られる口縁部と類似しており、（佐原真編『弥生土器Ⅰ』） この地域からの関接的、直接的影響を想定できる。壷5類ａは口縁部に特徴のある土器で、静岡県伊場式、徳光式などに見られる壷口縁と近似する。同5類ｂは関東南部地域に見られる弥生式土器と類似するものであろう。壷6類は静岡県東部地域に多い目黒身式、尾ノ上式などと類似するものであろうか。長野県岡谷市橋原遺跡の壷Ｂ類中に同じようなものがあり、こうした無文の土器は各地で一般的に使用されているかもしれない。7類は箱清水系土器であろう。

甕は1類～3類は箱清水系土器で、4類も同じ系統に含まれるかもしれない。岡谷市橋原遺跡甕Ｅ類中にも見られる。甕5類ｃは、あるいは台付甕の体部であるかもしれない。甕6類は関東系の土器であろうか。甕7類は台付甕であるが、この器種は少ない。信州系の後期土器群にはあまり台付甕が多くないので、この台付甕は 駿豆系か関東系かということになろうか。

坏、鉢、高坏等は北信地方の箱清水式の影響を受けたものが多い。

これらの土器の編年的位置は弥生時代後期に含まれると思われる。後期でも中頃に中心を置くもので、壷2類e及び3類a、甕1類は後期前半に多く、壷5類bは、後期後半に位置するであろうから、金の尾遺跡の集落及び周溝墓は、後期中頃に営まれたもので、短期間に居住され、廃絶されたものと推定されよう。



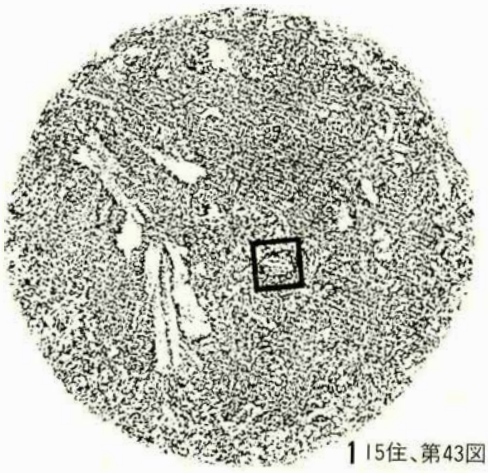
第236図　金の尾遺跡16号住居址出土炭化米粒長規模分布図

第4節　16号住居出土炭化米について

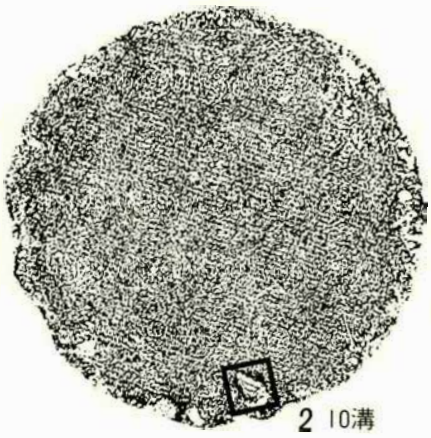
本住居は火災にあって住居上屋が崩壊した後、炭化材等が攪乱されることなく人工的に埋め立てられた可能性のあるもので、住居内から完形土器が出土しないこと、炭化米等が出土することから、祭祀儀礼的行事を経て埋没したことが想定される。つまり、不慮の火災による住居廃棄ではなく、土器等を搬出した後に火を放ったものであるが、その目的は不明である。なお近在の住居も火災を受けた様子があるので、移動する為に集落を焼いた可能性もあろう。

さて、本住居出土の炭化米は、住居中央部の炭化材の間に、炭等に混って分布していた。米は灰や炭の小片と混っており、纏まっていたものではないが、分布地域は中央部である。従って、米は壷や袋に入れられて床面上に置かれていたものではなく、皿に小量盛られていたか、袋に小量詰められて、屋根裏等に置かれていたものが、住居上屋の崩壊とともに床に落ちて散らばったものと思われる。この灰の中を分析していないので、米以外の植物遺体があるかどうか不明である。

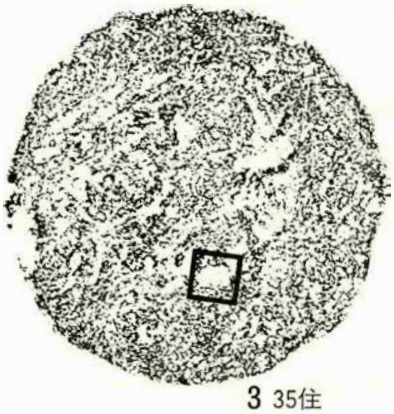
第236図は、本住居の出土炭化米中200粒を任意に選びその法量を計測したものをまとめた表である。なお次表は長野県岡谷市橋原遺跡出土炭化米と比べてある。



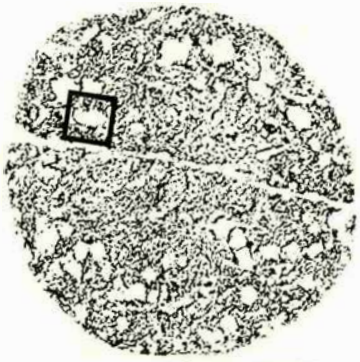
1 15住、第43図 No. 3



2 10溝



3 35住

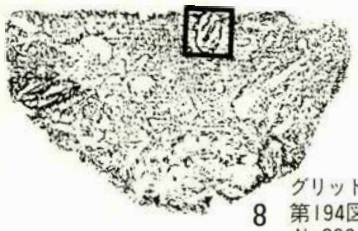


4 17住、第50図 No. 6

5 グリッド

6
19住、第57図 No. 5

7
25住
第76図
No. 9



8 グリッド
第194図
No. 202

9 グリッド、第194図 No. 198

第237図　土器底部モミ圧痕

遺構名	粒数	粒長				平均粒長		(100粒) 重さ
		最大長	最大幅	最小長	細小幅	長	幅	
		mm	mm	mm	mm			
金の尾16号住	200	5.1	3.2	3.0	1.8	4.26	2.44	0.65 g
橋原59号住	1000	5.6	3.5	3.4	1.9	4.58	2.72	
〃 64号住	100	5.4	3.2	3.0	1.9	4.45	2.65	0.66 g
〃 58号住	100	5.3	3.2	3.7	1.8	4.53	2.59	
〃 10号住	100	5.3	3.2	3.7	1.8	4.38	2.54	

橋原59、64号住居は後Ⅰ期、58号住居は後Ⅱ期、10号住居は後Ⅸ期で、平均値の長さ割る幅の比は、金の尾16住居が1.74、橋原59号が1.68、同64号が1.68、同58号は1.75、同10号が1.72である。橋原遺跡では、短粒から長粒へと移行していることが分かるが、金の尾は橋原58とほぼ同じ数値であり、長粒化している。米粒の法量で最も集中しているのは、粒長4.0㎜、粒幅2.8㎜のもので、22個があり、ここを中心に大小のバラツキが見られるが、上記の金の尾平均値は北九州板付遺跡出土炭化米の長、幅の比が1.74であり、弥生時代の代表的米粒に近いものであることが分る。なお第237図に示したようにモミ圧痕が若干検出されている。これらは次のような法量を示している。

1. 7㎜×4㎜　　2. 8㎜×4㎜
3. 6㎜×4㎜　　4. 6.5㎜×3㎜
5. 7㎜×3㎜　　6. 5㎜×3㎜
7a. 6㎜×3㎜　　7b. 6㎜×4㎜
8. 7㎜×4㎜　　9. 6㎜×4㎜

これらは炭化米よりも大きいが、本米の米粒がこの程度あったのであろうか。

第5節　弥生時代住居について

1. 本遺跡は県下で最も大きな弥生時代後期の集落である。しかし33軒の住居は短期間に建てられたと言ってもいくつかの類型に分けられそうである。

1類　(1～3)住居の規模は小さく、プランも隅丸方形に近い形。住居内施設は、中央部の壁もあまり高くない。

2類　(4.5)方形プランをもつものである。長軸、短軸比が1：1前後を示す。炉は北側柱穴を結んだ線上に位置するか、上方に突き出す位置にある。

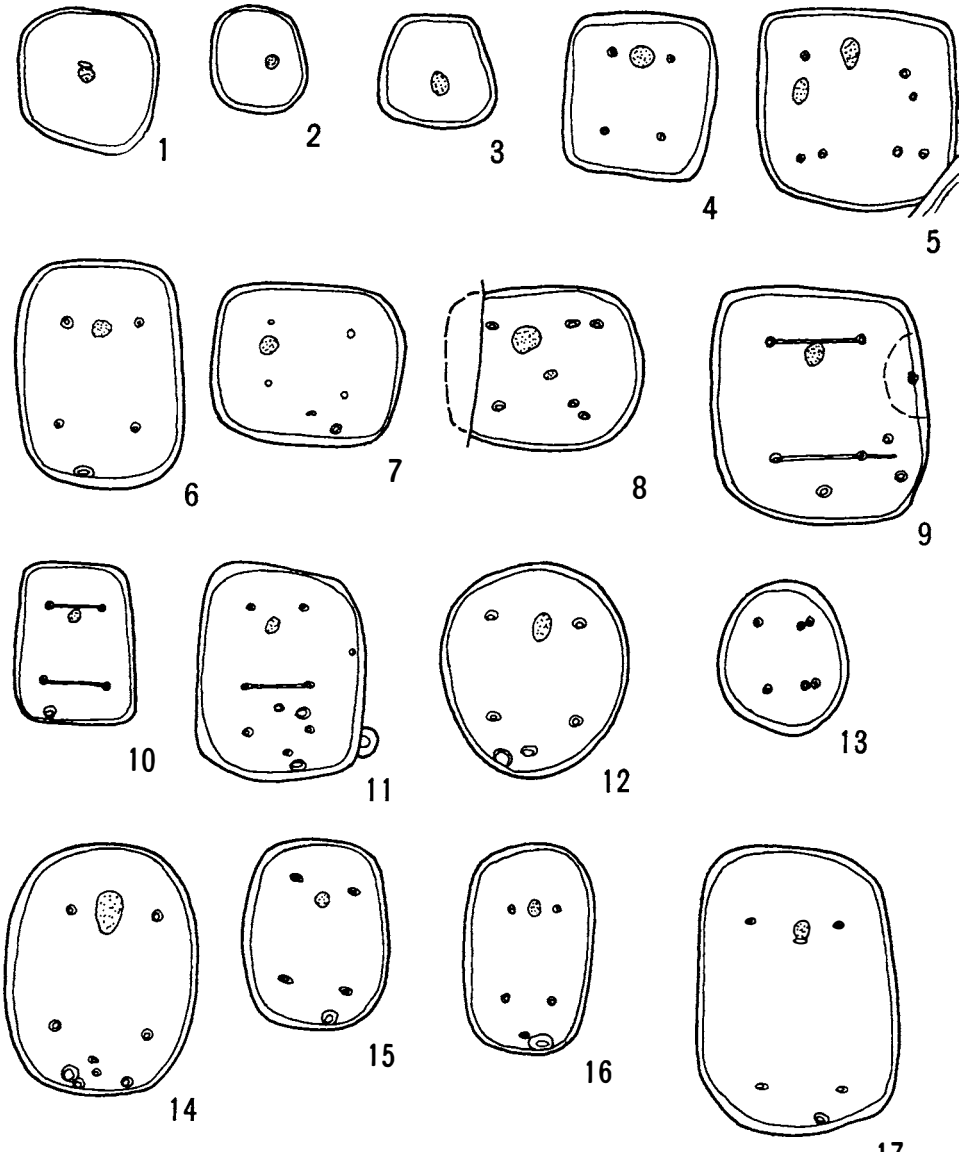
3類　(6～8)長方形プランをもつもので、長軸、短軸比が1：1.3前後を示す。縦長タイプと横長タイプがあり、横長タイプには、炉が北側と西側にある2タイプがある。柱穴4本で炉は柱穴間線上か住居内側に位置する。貯蔵穴、梯子受穴等の有無がある。

4類　(9～11)3類に近い長方形のプランを持つものが多い。住居内柱穴を結ぶ間仕切溝があるもので、炉は柱穴を結ぶ線より住居内側に位置し、貯蔵穴、梯子受穴をもつものが多い。

5類　（12.13）楕円形プランを有するもので、中には不整円形のものがある。

6類　（14.15）胴張り隅丸長方形で、炉は柱穴間線上に位置するか、内側にある。貯蔵穴、梯子受穴を持つものも多い。

7類　（16.17）隅丸長方形で、胴は張らない。3類の長大なもので、3類を拡張した住居が、これになる場合が多い。長軸、短軸比は1：1.5である。

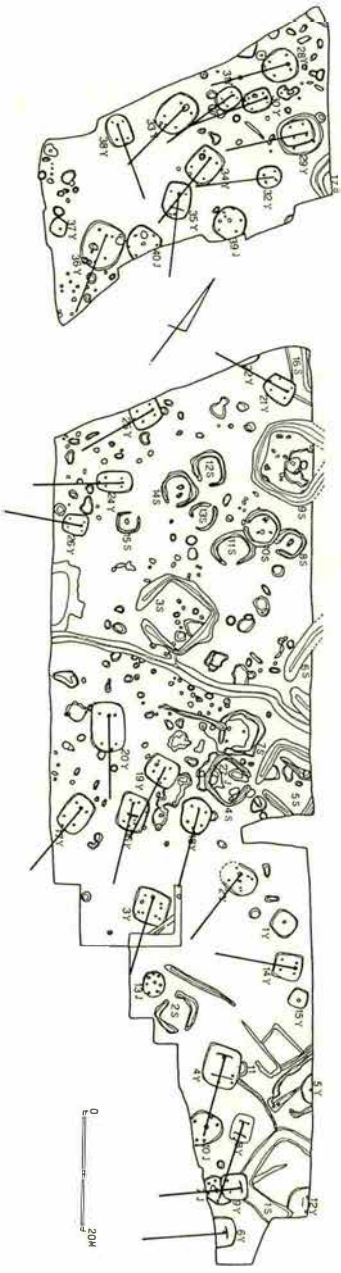


1類（1～3）　2類（4、5）　3類（6～8）　4類（9～11）
5類（12、13）　6類（14、15）　7類（16、17）

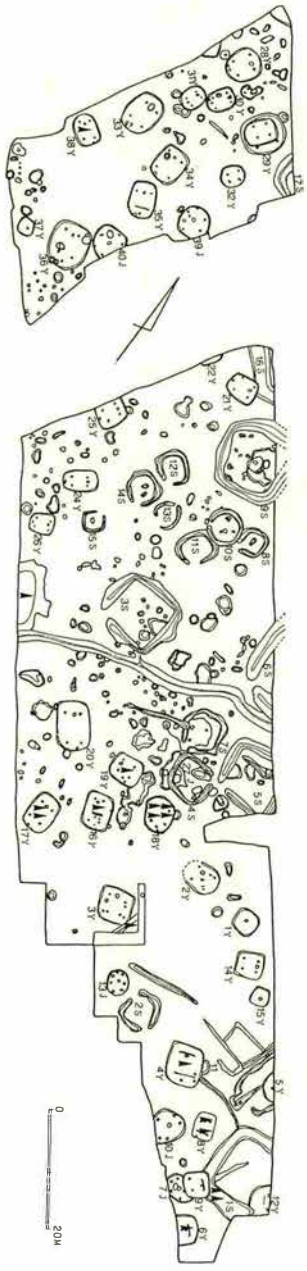
第238図　金の尾遺跡弥生時代住居址分類

金の尾遺跡住居址分類表

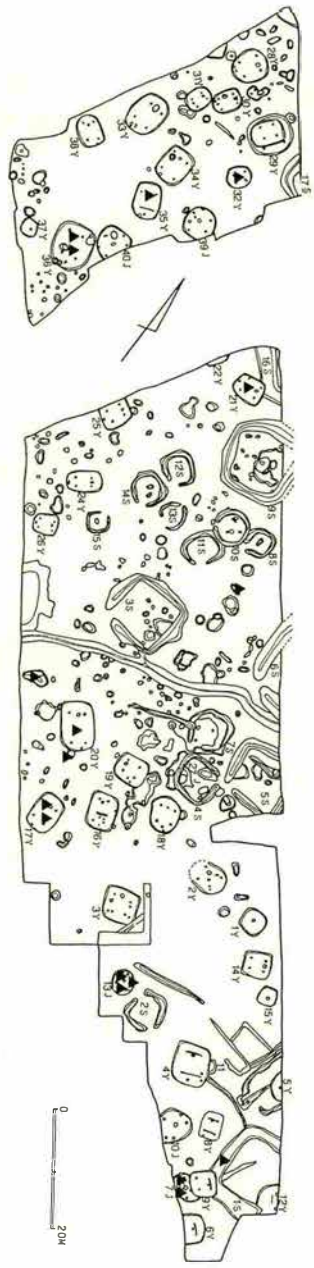
種類	住居	規模		柱	炉位置			炉形態			梯子受穴	貯蔵穴	溝
	No.	長軸×短軸	長軸：短軸	主柱穴	柱内	線上	柱外	埋甕	石囲	地床			
1	1	4×3.8m	1.05：1							○			
1	15	3.5×3.3	1.06：1							○			
1	37	3.1×2.4	1.29：1							○			
2	3	5.8×5.7	1.02：1	6			○		○				
2	9	4.6×4.1	1.12：1	3		○				○			○
2	14	4.7×4.4	1.07：1	4		○				○			
3	2	5.8×4.2	1.38：1	5	○					○	○		
3	17	6.6×4.8	1.38：1	4		○			○			○	
3	19	5.6×4.6	1.22：1	4		○		○			○	○	
3	25	5.0×3.8	1.32：1	4		○		土器敷			○	○	
3	26	4.4×3.2	1.38：1	4	○			○			○		
3	34	6.2×5.0	1.24：1	4		○				○	○	○	
4	4	6.8×6.0	1.13：1	4	○				○		○		○
4	6	5.2×3.6	1.44：1	2	○					○			○
4	8	4.6×3.1	1.48：1	4	○					○		○	○
4	16	6.2×4.8	1.29：1	旧4 新5	○					○	2組 ○	2組 ○	○
4	35	6.2×4.2	1.48：1	4		○		○			○	○	○
5	5？	不明		1									
5	12？	不明											
5	18	6.4×5.0	1.28：1	4		○		○			○	○	
5	21	5.2×4.5	1.16：1	4	○					○	○	○	
5	28	6.2×5.2	1.07：1	4		○				○	○	○	
5	29(上)	7.3×6.6	1.11：1	4						○	○	○	
5	32	4.4×3.8	1.16：1	4						○			
6	22	不明											
6	29(下)	5.4×3.8	1.42：1	4	○			土器敷			○	○	
6	30	5.0×3.4	1.47：1	4	○			○			○	○	
6	31	4.7×3.4	1.38：1	4	○							○	
6	33	7.2×5.0	1.44：1	4		○		土器敷			○	●	
6	36	(上)7.9×6.4	1.23：1	(上)4 (下)4	○			土器敷		○	○	○	○
6	38	5.5×3.9	1.41：1	4	○			土器敷		○		○	
7	20	8.4×5.8	1.45：1	新5 旧4		○		○		○		○	
7	24	6.1×3.5	1.74：1	4				土器敷			○	○	



第239図　弥生時代住居入口方向



第240図　磨製石鏃分布図



第241図　横刃型石器分布図

各住居をこの類型に従って分類すると次表のようになる。

1類は3軒で、ほぼ正方形を呈するものが多く、2類は3軒で、南群集落の南側に分布する。3類は6軒あり、南群集落中に3軒、北群集落中に3軒あるので、一般的なプランと言えよう。4類は5軒中南群が属しており、北群集落には35号住居1軒である。特に南群集落中南に3軒が片寄っており、これらが同一時期に造られた可能性も高い。5類は遺跡の北側、北集落の中に多く、一つの傾向をもつものである。6類は北集落中北群に集中し、北集落の特徴となる住居プランである。7類は南北集落に各1軒づつあるが、長軸対短軸比は6群に近い数値を示す。

2. 住居群の構成

すでに数回述べた事であるが、住居群は中央のV字溝によって南北の2群に分けられることが知られている。第239図に各住居の入口方向を線で示したが、この方向を見ると、各住居が適当な入口方向を示しているのではなく、規則制が認められよう。即ち、V字溝より南の集落では、6、9号住居が南西方向、4、8号住居は南南東方向、3、16、18号住居が南南東方向、17、19号住居が、南方向で一致する。2、14号住居の周辺には、入口方向の不明な1、5号住居があり、各々に1軒づつ伴うのかもしれない。

北群は24、26号住居が西南西に入口をもち、28、29、30、32号住居が南西に向いている。この4軒は中央で2軒づつに分けられるかもしれない。31、33、34号住居の3軒は南に入口があり、35、38号住居の2軒は南東に向く。36、25号住居は24、26号住居の入口方向と合わせて観察すると、右回りの渦巻状に西にふれているので、この4軒は弧状に並ぶ組となるかもしれない。こうした入口部からみた住居の組み合せは、土器群等の型式分類されたもの及び住居類型と対比することによって更に関係が明らかになるであろう。

こうした点から、2集落はV字溝を間にした、全く生活観の異なる集落であったことが分り20号住居と26号住居は90°以上の入口方向の差がある。南北集落の住居群入口方向が向いているその前方には、何があったのであろうか。南集落の南西側はかつて低湿地であったろうが、現在は砂層しか認められない為、弥生時代以後のある時期に水田等が釜無川の氾濫で流出してしまったものであろう。

おわりに

甲府盆地の低地部に位置する縄文・弥生時代遺跡として代表的な本遺跡は、昭和53年度に調査して以来、実に10年目にしてようやく報告書として公表する運びとなった。この間、新たに弥生時代の遺跡として、中巨摩郡甲西町住吉遺跡などが発掘調査されているが、遺跡の一部であって、全体の範囲や集落内容は不明である。こうしたことから、本遺跡は甲府盆地の弥生時代遺跡を知る上で、最も重要な遺跡として評価して良いであろう。

発掘で検出された遺跡は、縄文時代住居8軒、弥生時代住居32軒、弥生時代周溝墓17基、そのほか土壙・特殊遺構・溝などがあり、特に弥生時代集落はV字溝によって南北2群の集落に

分かれている。又、両集落群の中間には周溝墓群が存在し、墓域を形成しているなど、集落遺跡としても研究すべき対象であろう。

遺跡のうち、縄文時代では中期中葉の土器群が一括で発見され、同一集落に関係することが想定されるが、弥生時代では、後期後半の土器群が使用上の組成を想定するに充分な資料が発見され、編年上の位置・近隣地域との対比が今後の研究課題として残された。磨製石鏃・打製石包丁・環状石器・ガラス玉・銅製品などの弥生時代の遺物についても、土器の研究と合わせて対比していかなければならないだろう。

本遺跡の発掘調査から整理・報告書作成に至るまで協力を戴いた日本道路公団東京第二建設局・敷島町・双葉町教育委員会、およびこの事業に参加協力された皆様にお礼申し上げます。

金の尾・無名墳（きつね塚）発掘調査、整理事業参加者名簿

調　査　員

伊藤恒彦　米田明訓　長沢宏昌　小林義典　宮沢公雄

整　理　員

石田真功　日原喜昭　渡辺儀訓　森幸彦　村木功　山本茂樹　四角啓二
上野一恵　中島弓子　中村由美　滝田幸子　舛見みつる　引地愛　内藤千里
雨宮美紀　岡野明美智　岩間信雄　稲葉さとみ　古屋直美　石川操　若尾悦子
松野和美　内藤真千子　広瀬勝子　古屋満喜子　弦間文代　井上義彦　深味義博
石川等　玄間千鶴　後藤良美　若尾澄子　小笠原睦子　名取洋子　土肥正治

補　助　員

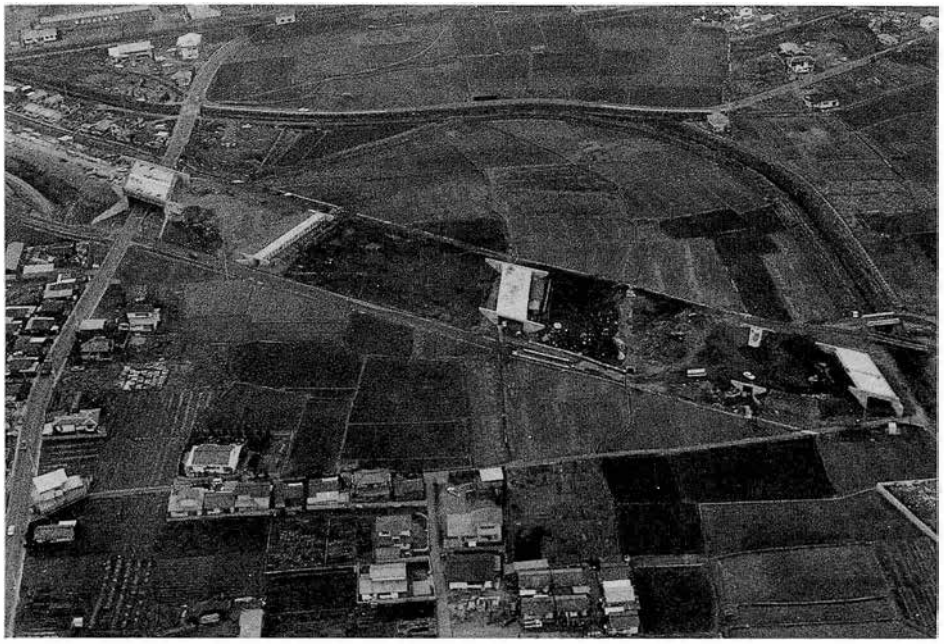
村木功　森幸彦　渡辺儀訓　日原喜明　青木和明　矢野慎一　清水比呂之
山本直人　多田たきみ　樫山和枝　本所重子　石川久明　四角啓二

作　業　員

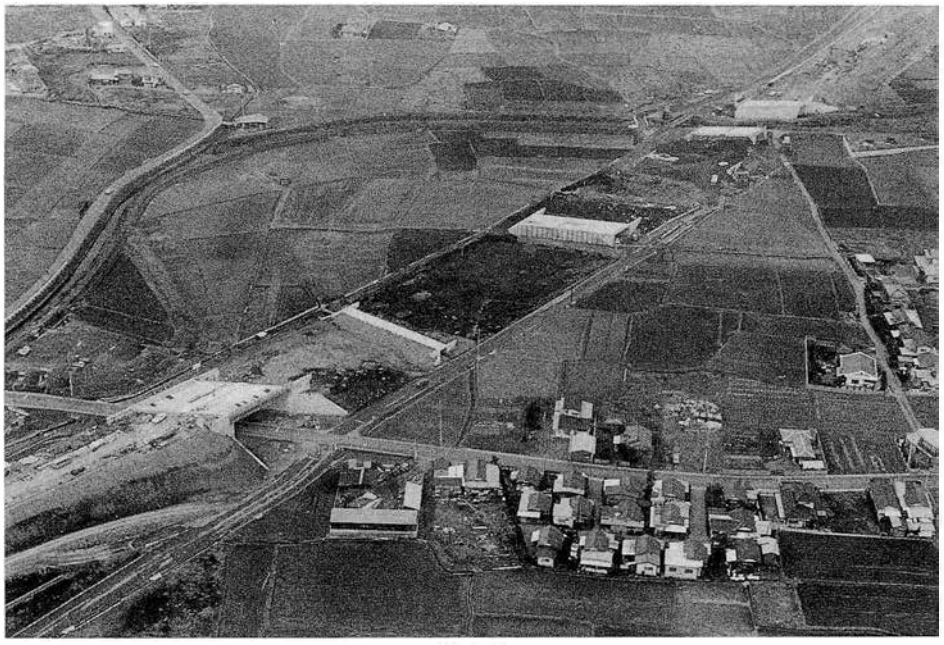
三浦正宏　山田康雄　小林すず代　籾山昭之　大野雪子　長田春江　仲田せい子
湊勉　保坂栄子　飯窪すえじ　堤好子　若尾澄子　強矢あき子　岡田牧子
保坂洋子　長田楽子　長田しげる　高野和恵　秋山つね子　久保田昭一
飯窪しげ子　古松明彦　丸山秀樹　池田敏政　石田真功　矢原慎治　四角啓二
保延清美　保延とし江　保延元枝　石橋とも代　保延福子　榛原寿子　佐藤隆子
臼井たまき　中根君子　小林たつ子　石川けさ代　平塚けさ子　芦沢五月
長田きよ子　三井千恵子　槌屋君子　長田幹江　保坂紀子　飯窪さかえ　大木涛子
小林さよ子　高山きく代　野崎とし子　小林たけ子　長田喜久恵　石川まさみ
小泉きみ江　賀々美美智子　石川君江　栗原和嘉代　石川かつよ　阿部はるの
輿石みつ子　大木せつ子　大木加つ子　輿石かつ代　輿石マツエ　大木敬子
大沢紀子　石川多恵子　芦沢好子　芦沢節子　芦沢知都世　赤沢久子　大木米子
栗原悦子　栗原たね子　赤沢やす子　石川和子　宮本俊之　殿岡秀子　清水春雄
荻原敏之　村岡昭彦　大島千秋　門田文裕　横山なな代　高木守夫　津田考範
内藤きみ　飯沼芳子　小泉きよ子　長田きみ子

図版1　金の尾遺跡発掘調査前全景

図版2



① 全景



② 全景

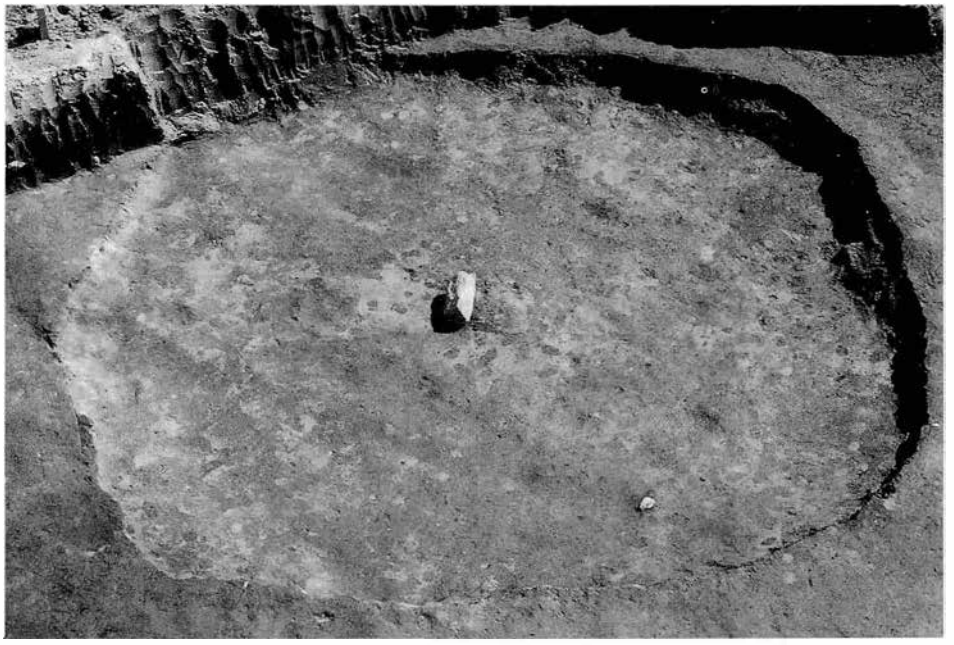
① 全景

② 全景

図版4

①全景

②全景

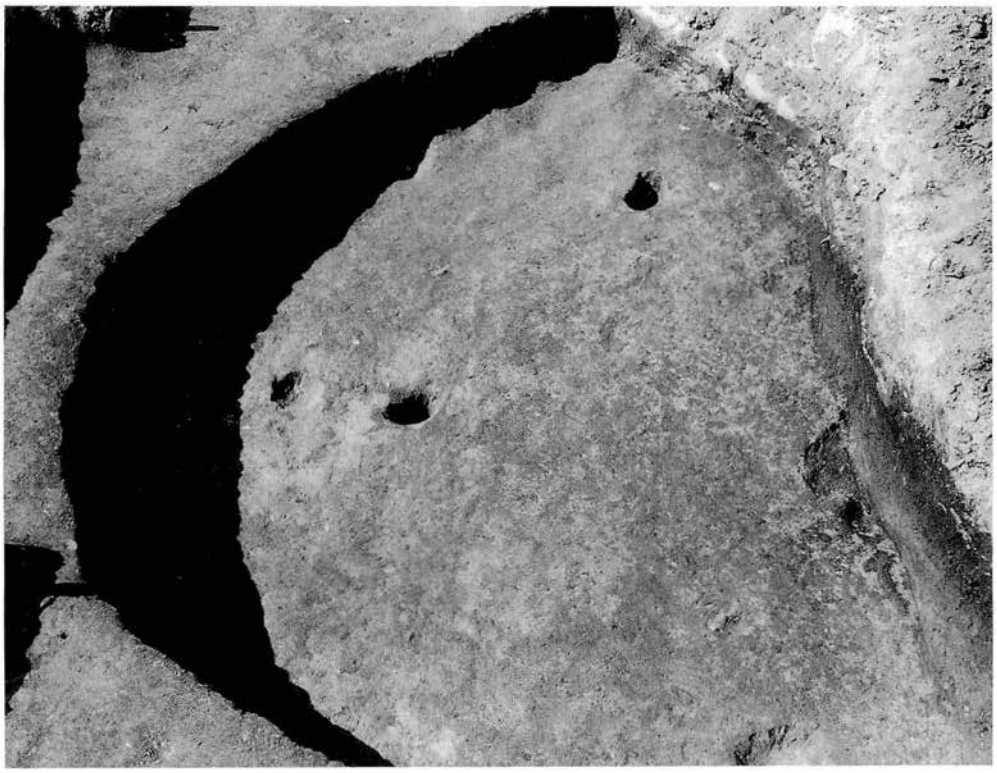


①1号住居址

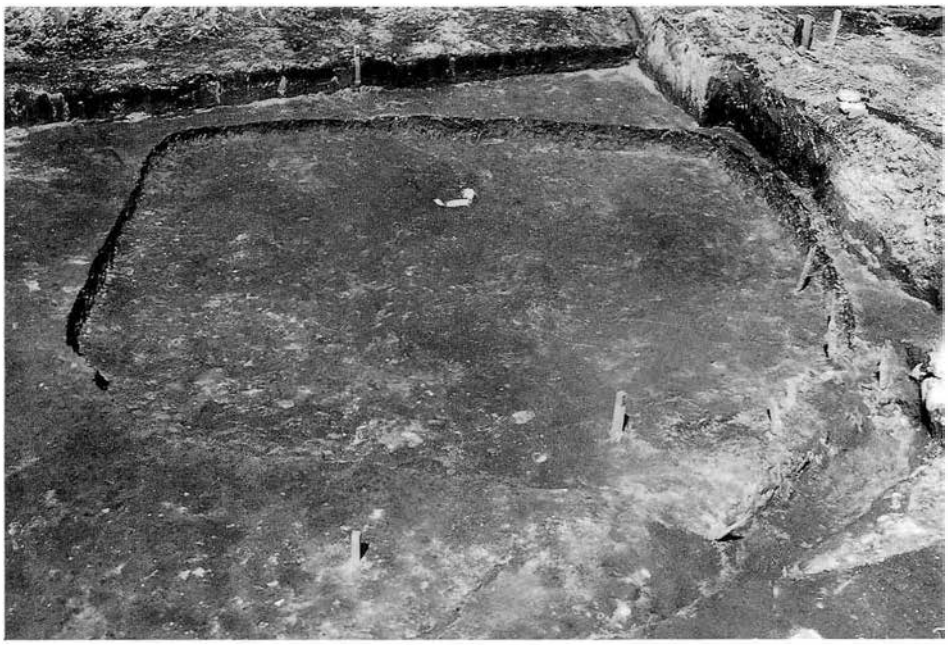
②2号住居址

図版6

① 2 号住居址土器出土状態

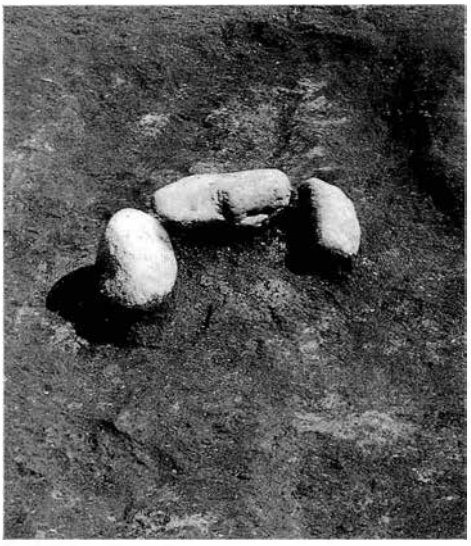


② 2 号住居址



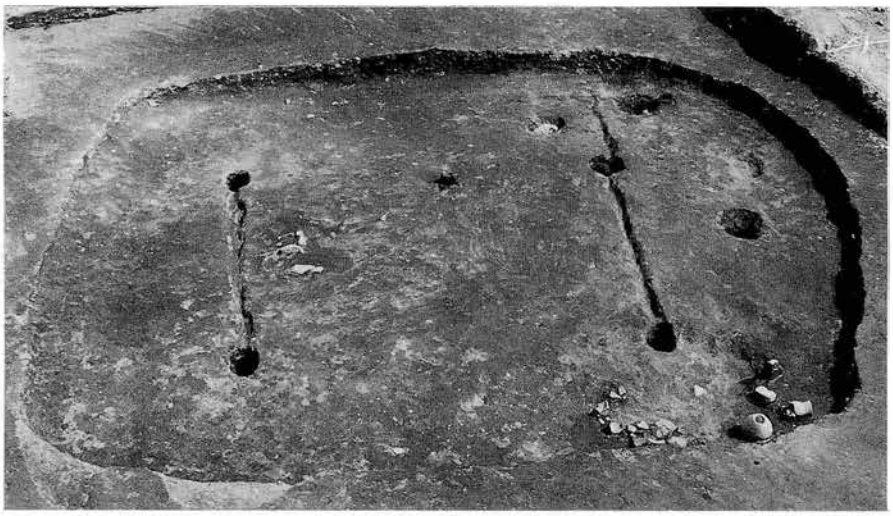
① 3 号住居址

② 3 号住居址土器出土状態



③ 3 号住居址炉

図版8

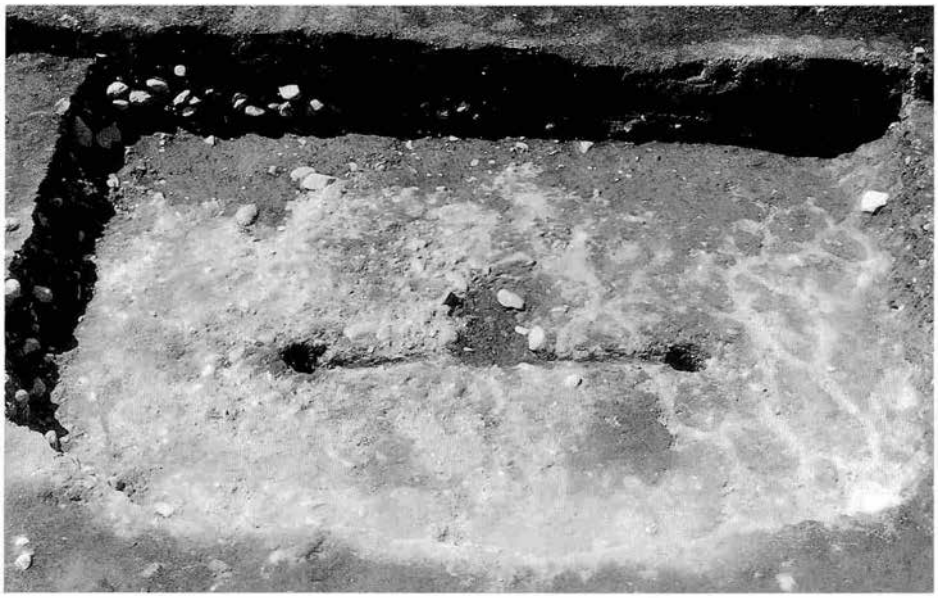


①4号住居址

②4号住居址
土器出土状態

③4号住居址炉

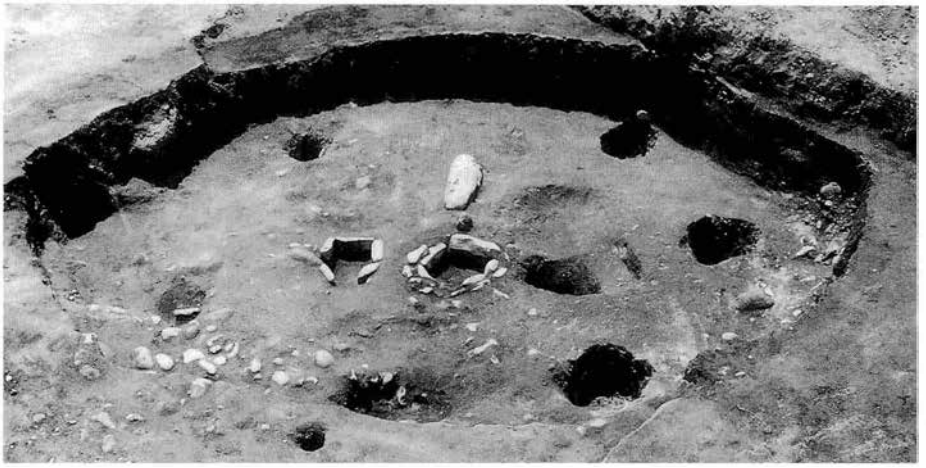
①
5号住居址



②
6号住居址

③6号住居址
出土土器

図版10

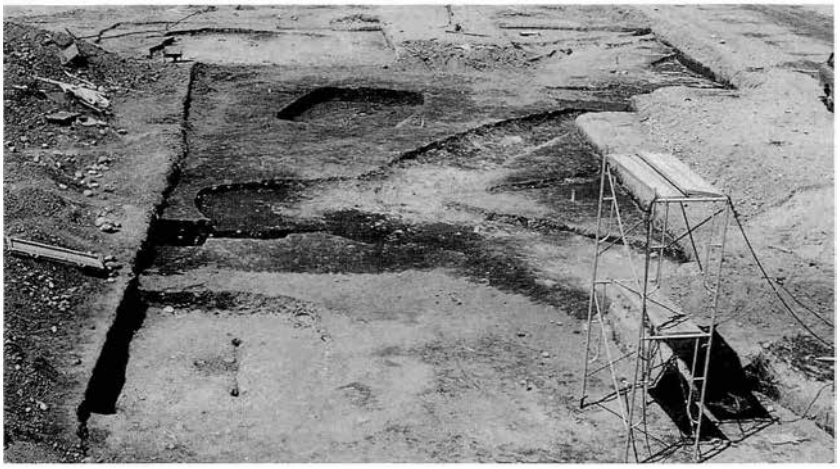


①7号住居址

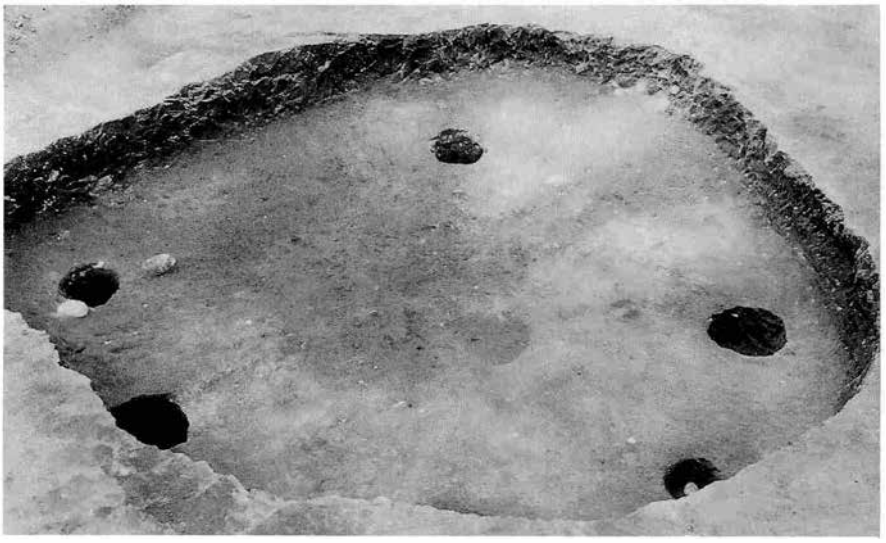
②7号
住居址炉

③8号住居址

① 8号住居址炉

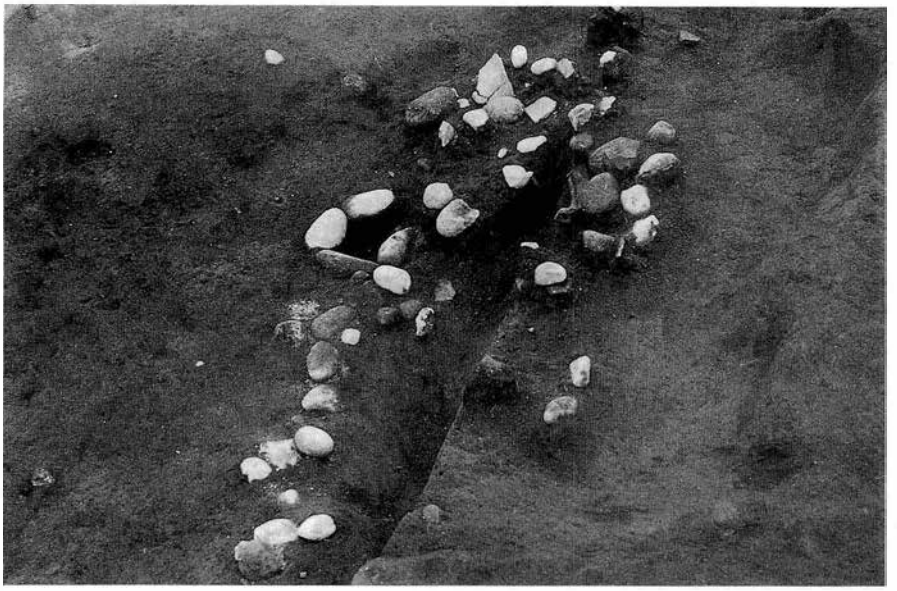


② 9号住居址遠景

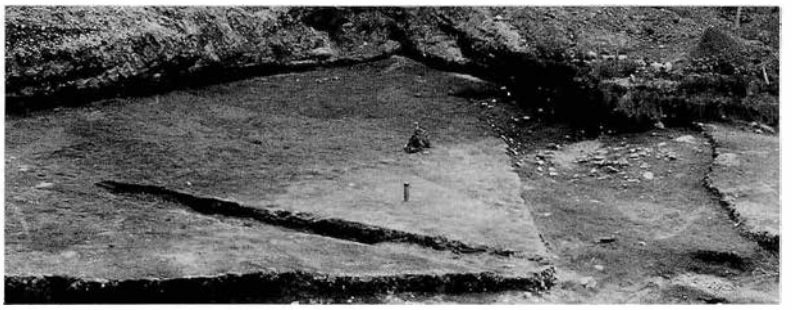


③10号住居址

図版12



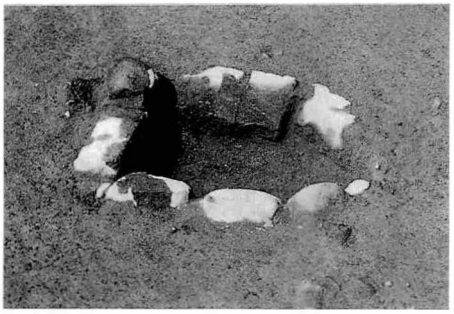
①11号住居址



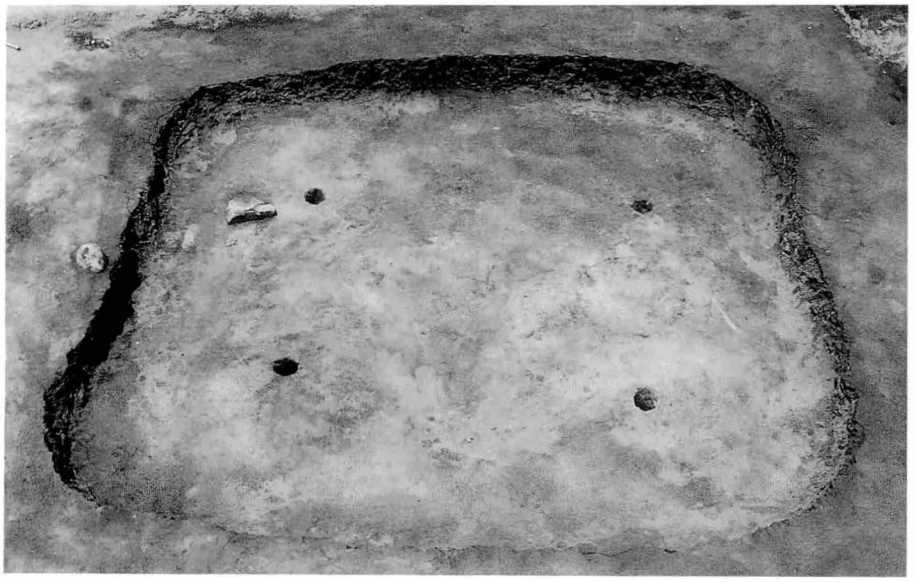
②12号住居址

③13号住居址

①13号住居址
土器出土状態



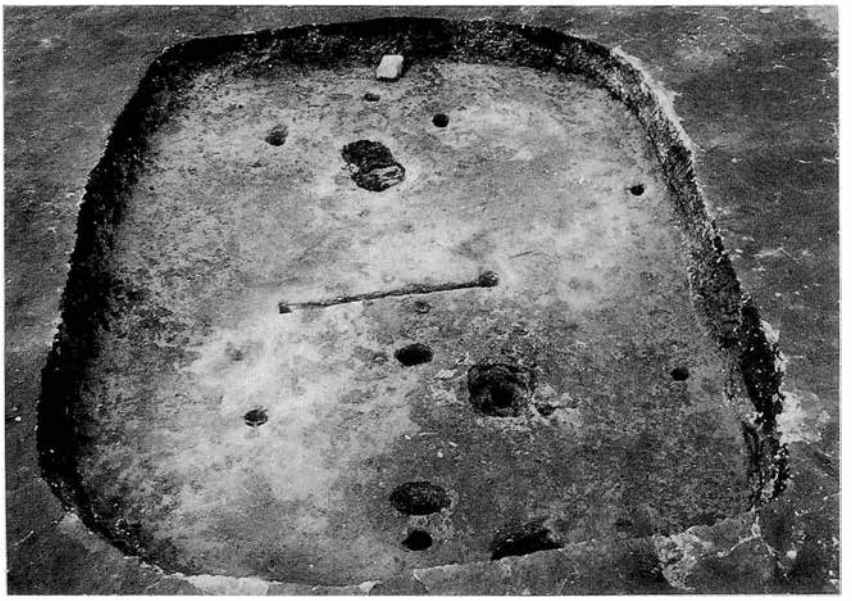
②13号住居址炉



③14号住居址

図版14

①15号住居址

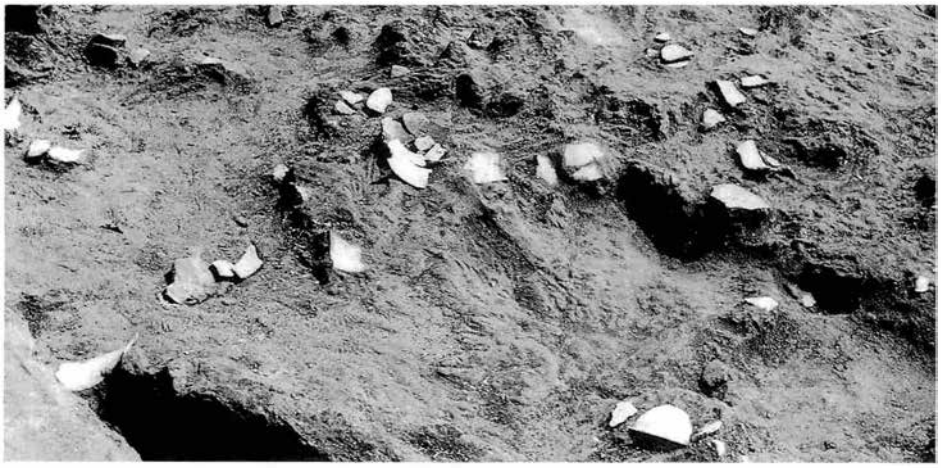


②16号住居址

③16号住居址

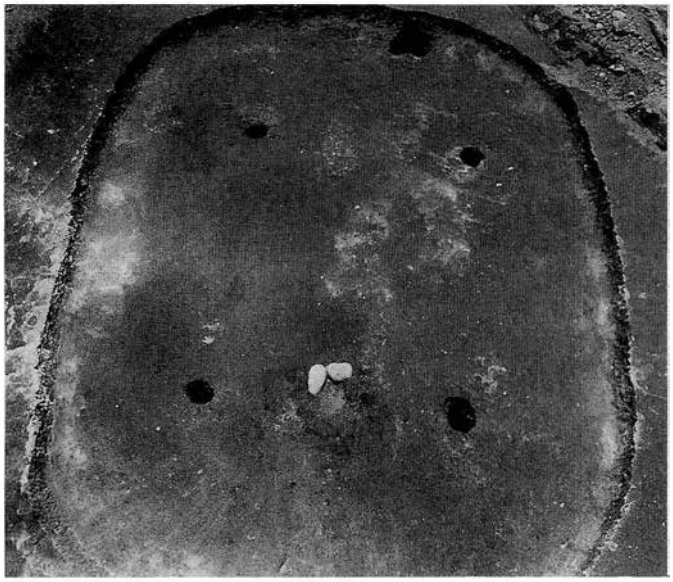
①16号住居址

② 16号住居址柱根出土状態



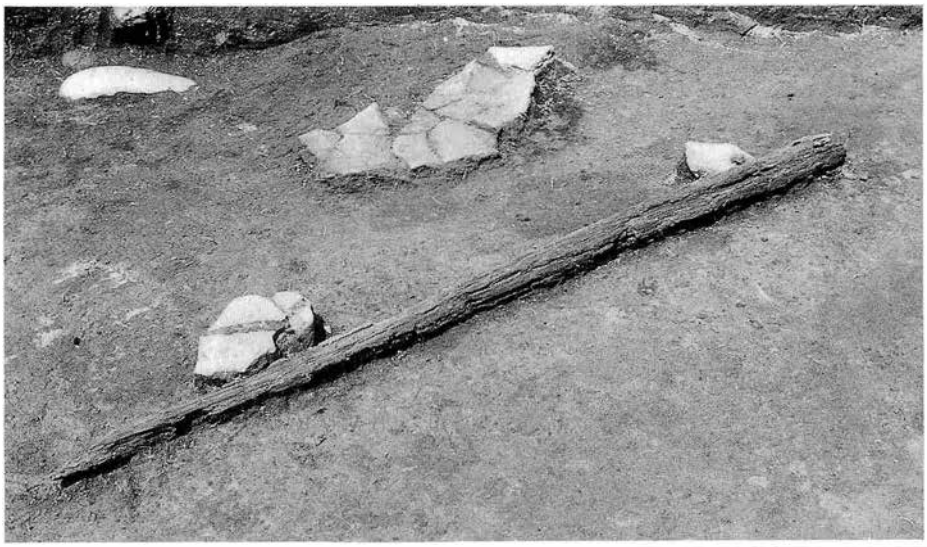
③16号住居址土器出土状態

図版16



①17号住居址

②17号住居址出土土偶



③17号住居址遺物出土状態

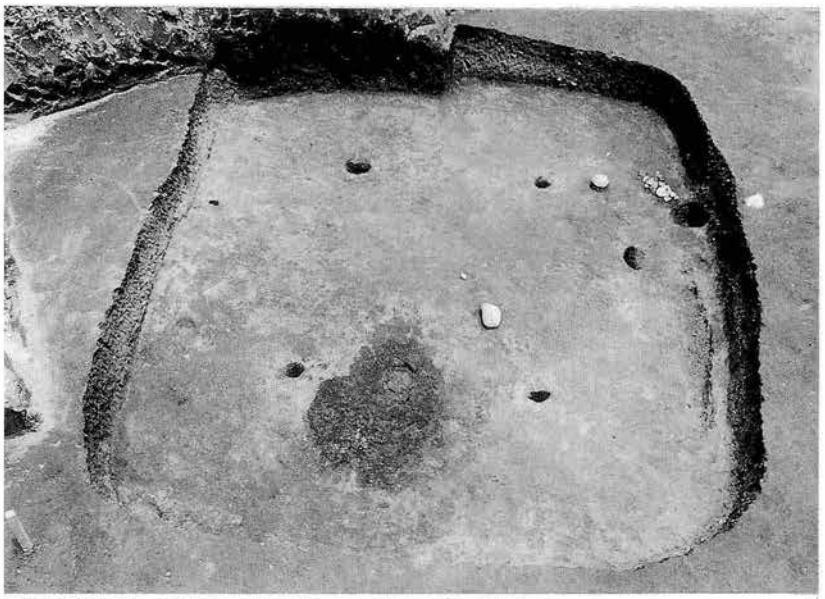
①18号住居址

②18号住居址出土土器

③18号住居址埋甕炉

④18号住居址
作業風景

図版18



①19号住居址

②19号住居址炉

③20号住居址

① 20号住居址

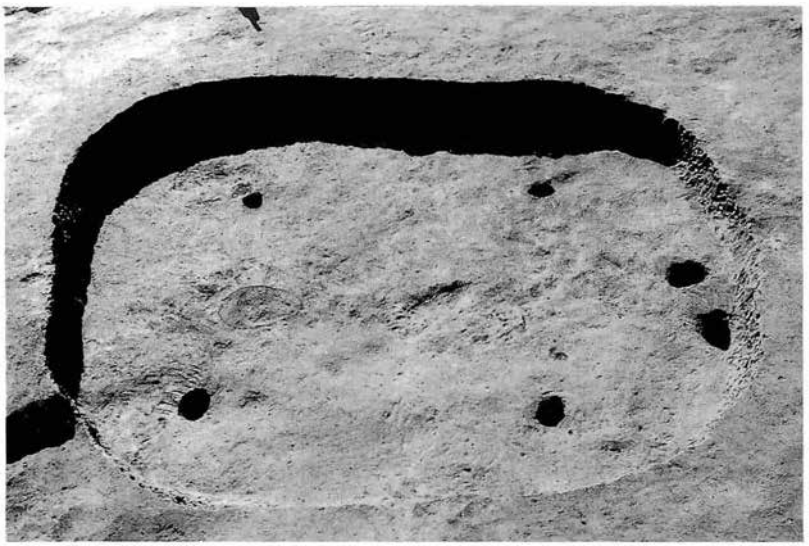
②

③

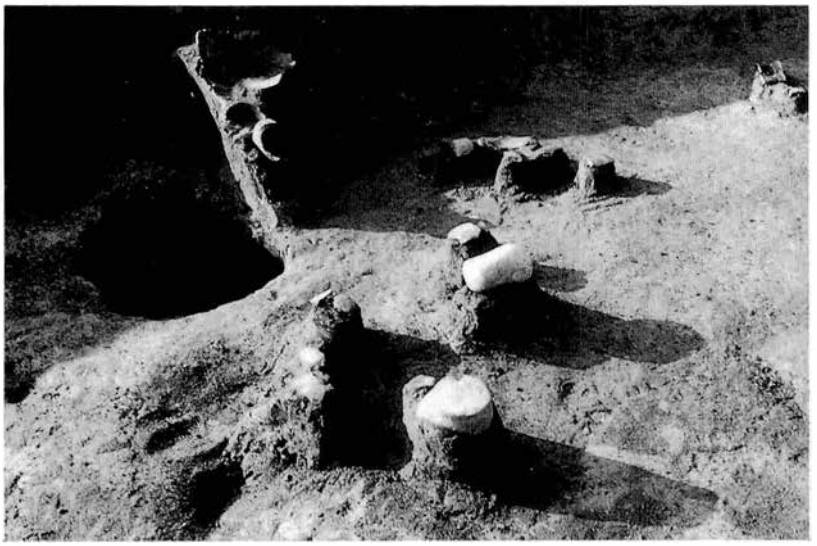
④

20号住居址柱根遺存状態

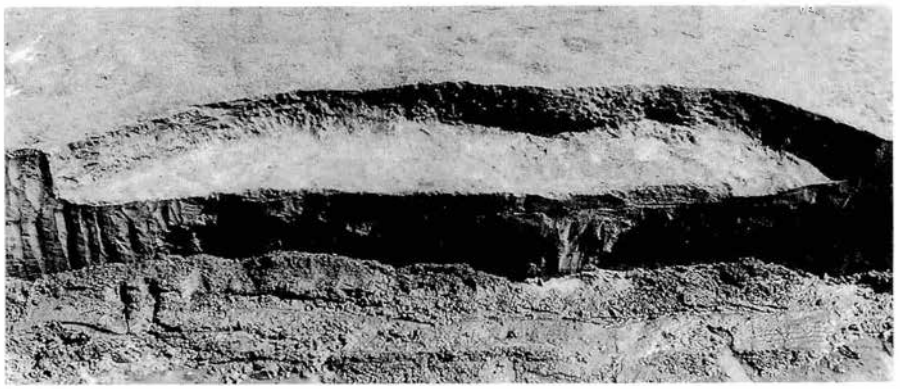
図版20



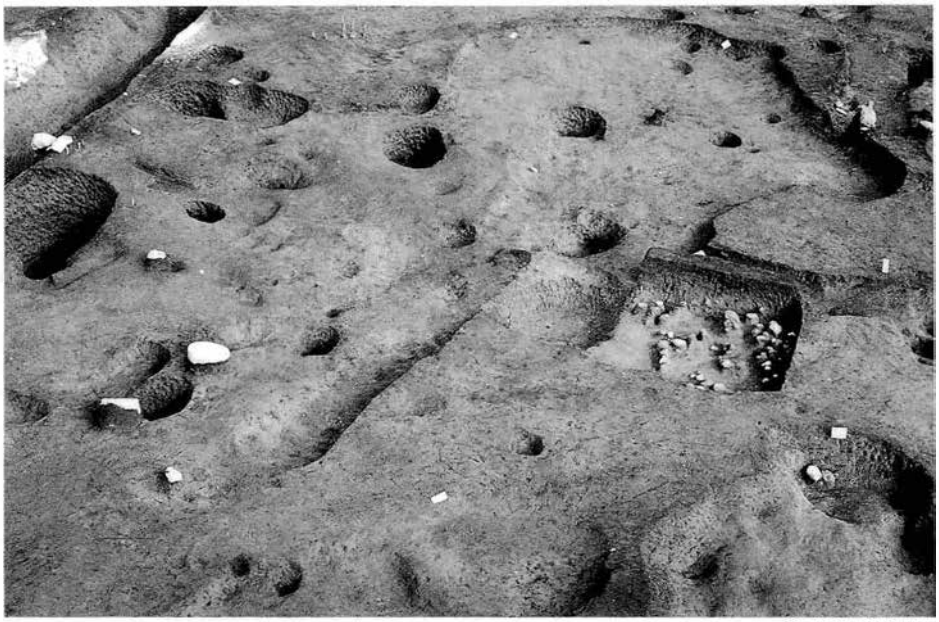
①21号住居址



②21号住居址
土器出土状態

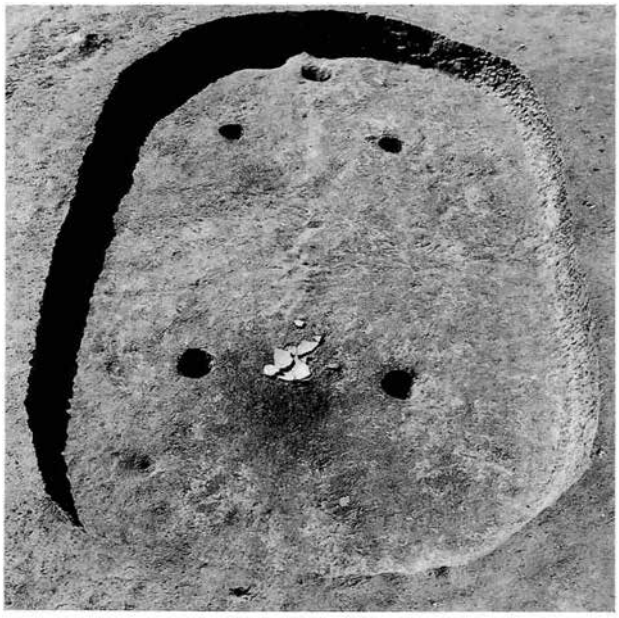


③22号住居址



① 23号住居址

② 23号住居址出土土器



③ 24号住居址

④ 24号住居址出土土器

24号住居址土器出土状態

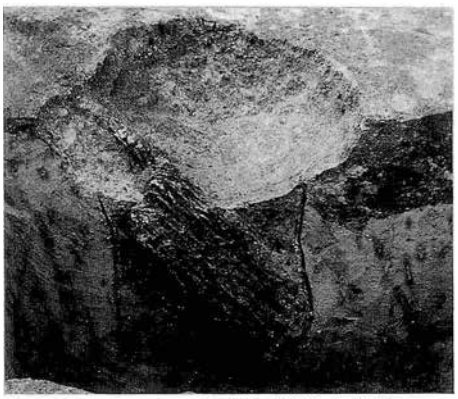
図版22

①25号住居址

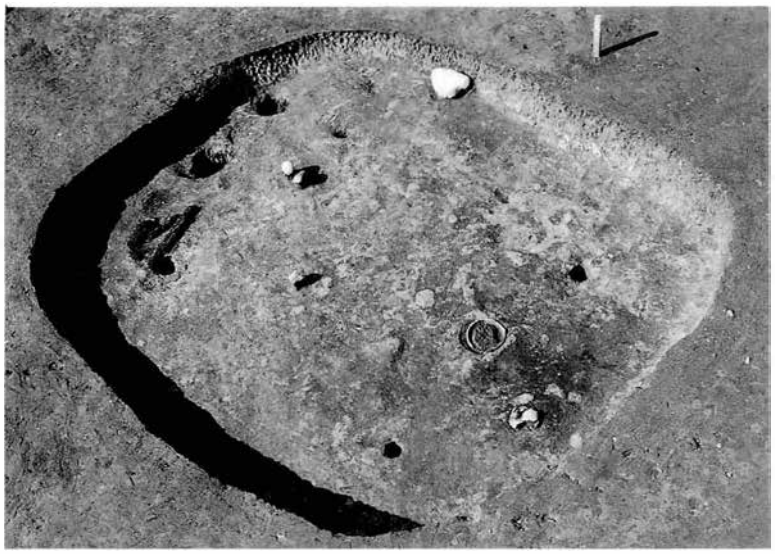
②25号住居址土器出土状態

③25号住居址紡錘車出土状態

④25号住居址
出土土器



⑤25号住居址梯子材遺存状態

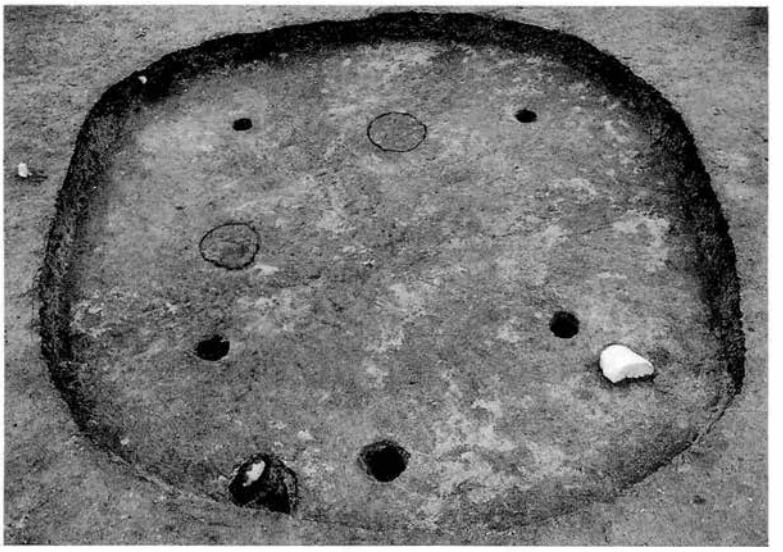


① 26号住居址

② 27号住居址

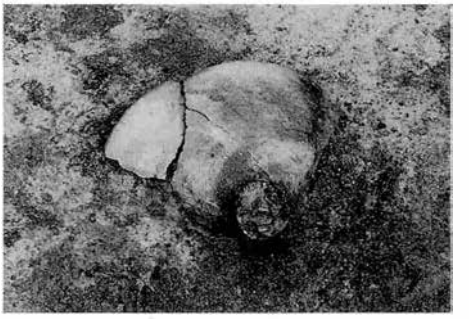
③ 27号住居址炉

図版24

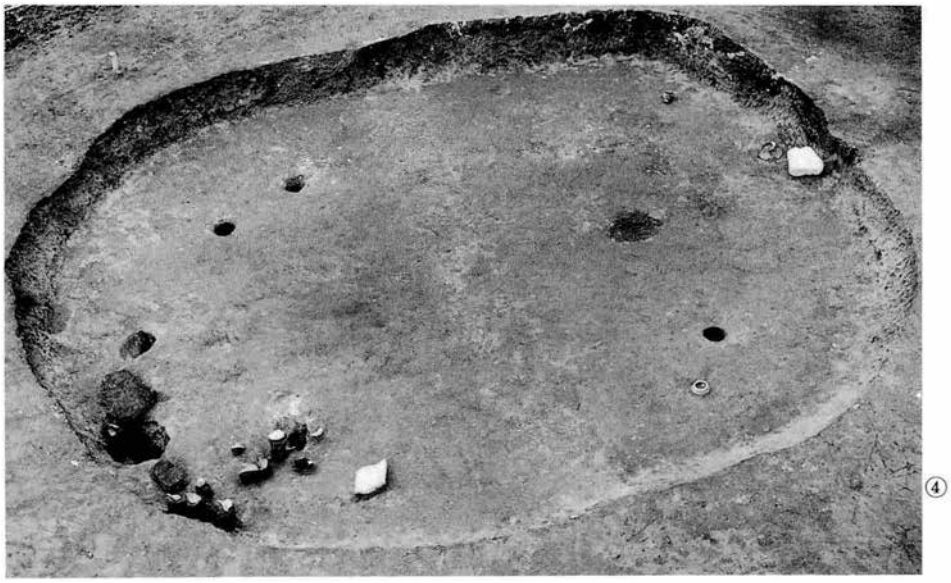


① 28号住居址

② 28号住居址
土器出土状態

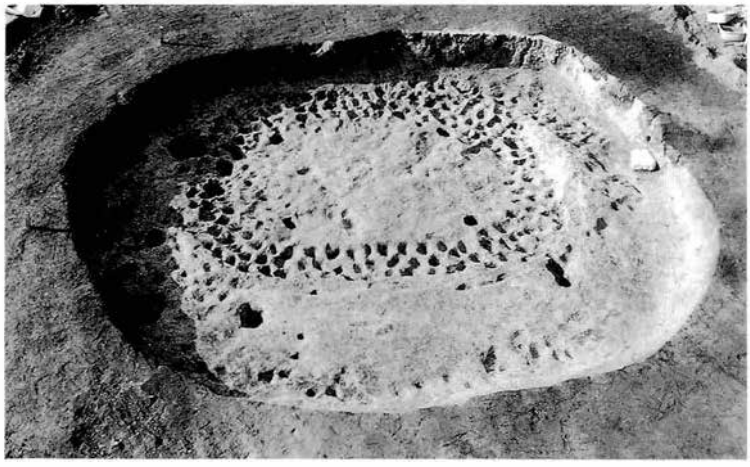


③ 28号住居址



④ 29号住居址
（上層）

①29号住居址
（下層）

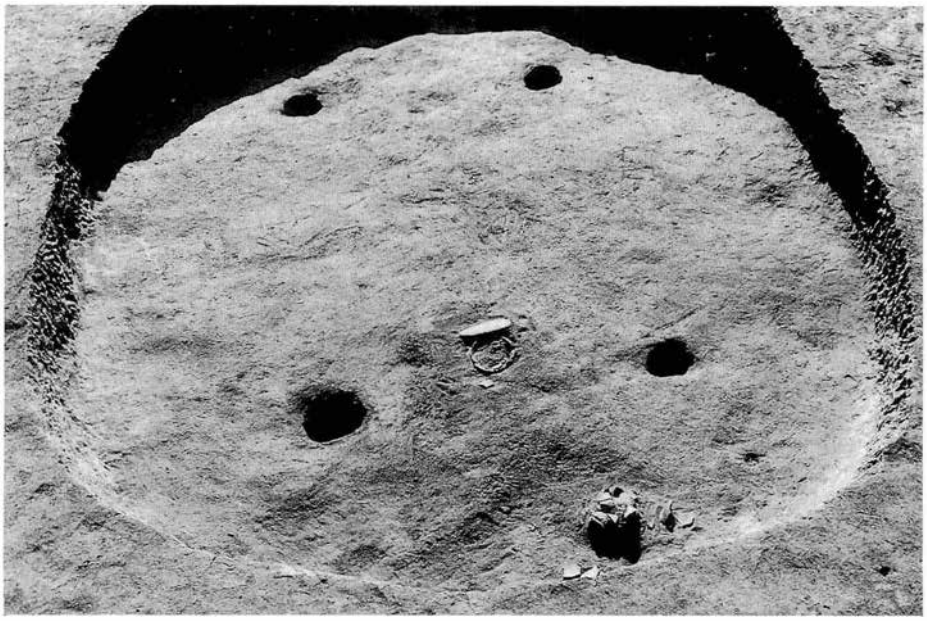


② 29号住居址（床下）

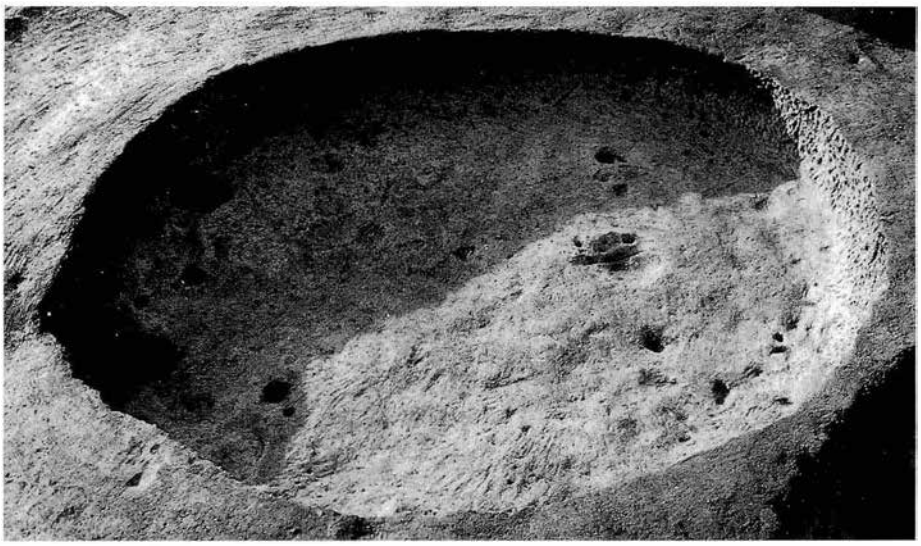
③ 29号住居址
土器出土状態

④29号住居址出土土器

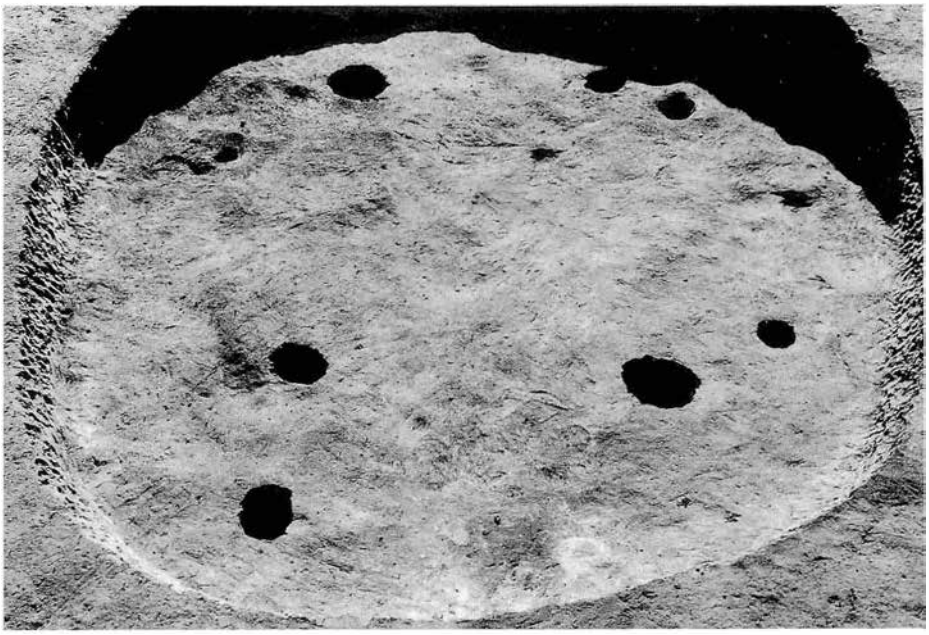
図版26



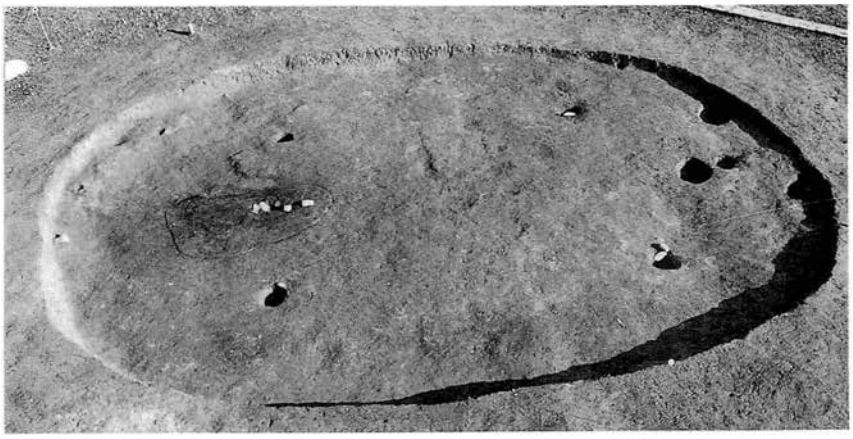
①
30号住居址



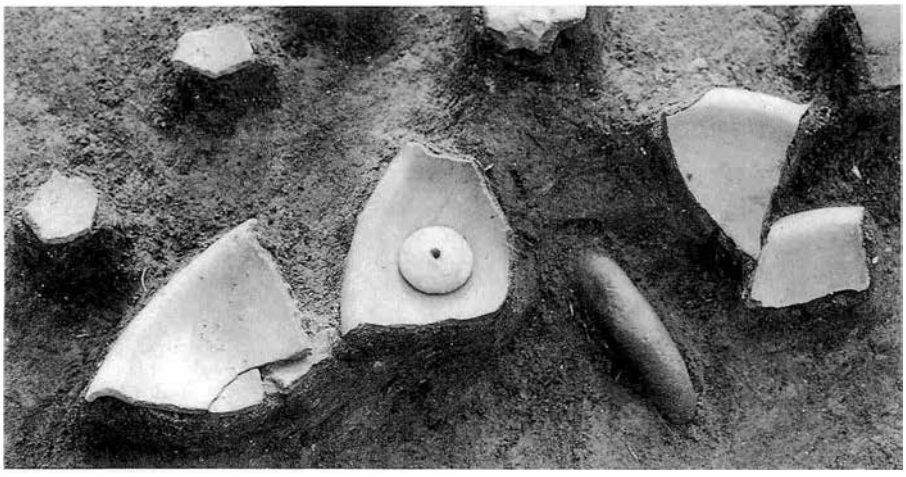
②
31号住居址



①
32号住居址

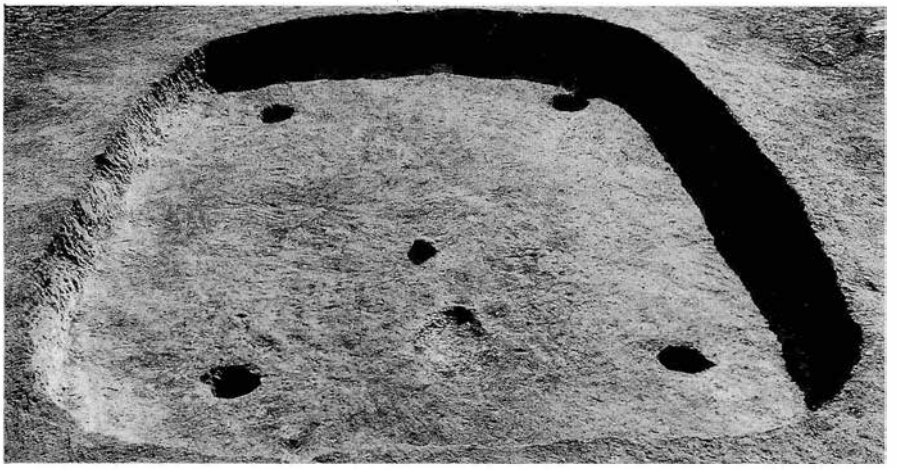


②33号住居址

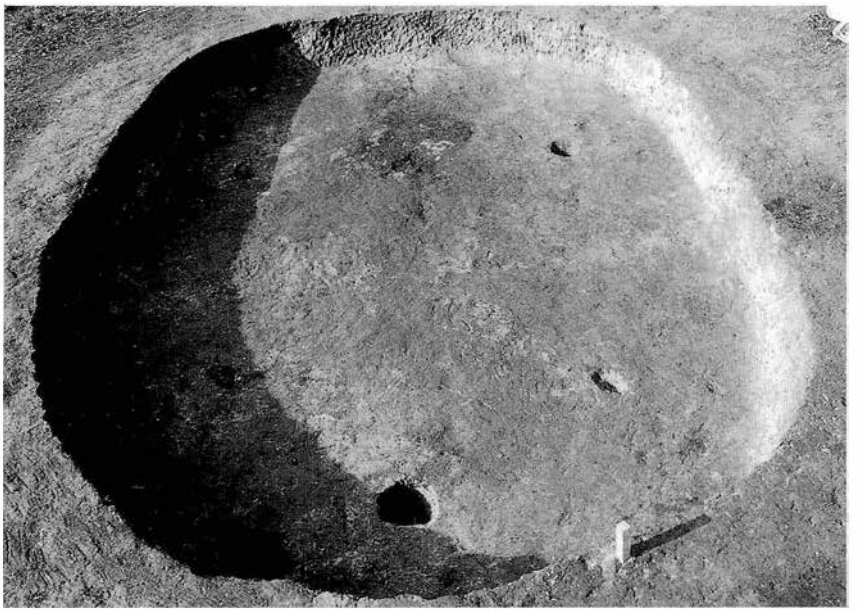


③ 33号住居址
土器出土状態

図版28

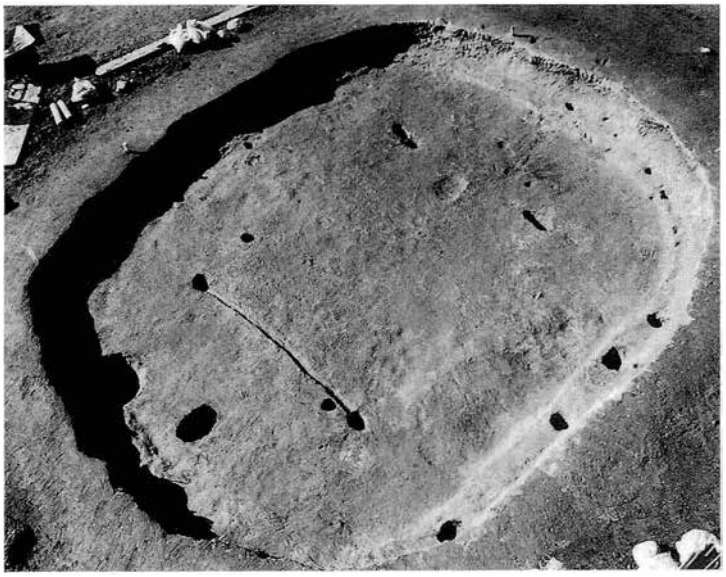


① 34号住居址

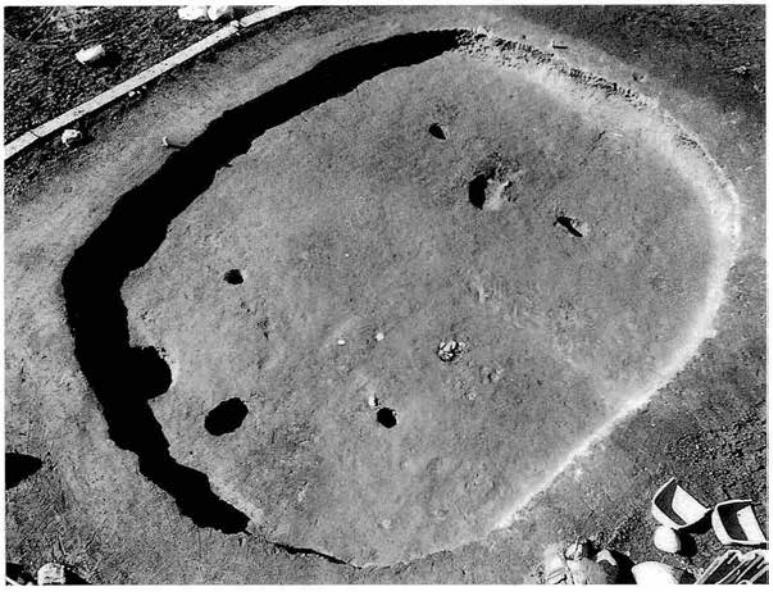


② 35号住居址

③ 35号住居址
土器出土状態



①35号住居址（下層）

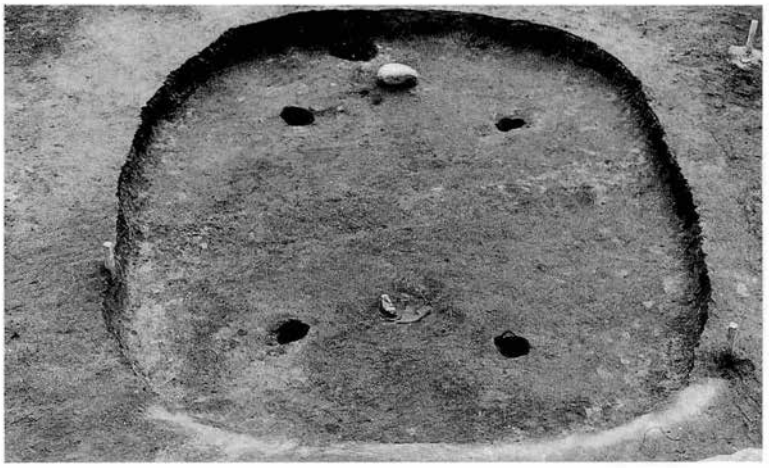


② 36号住居址

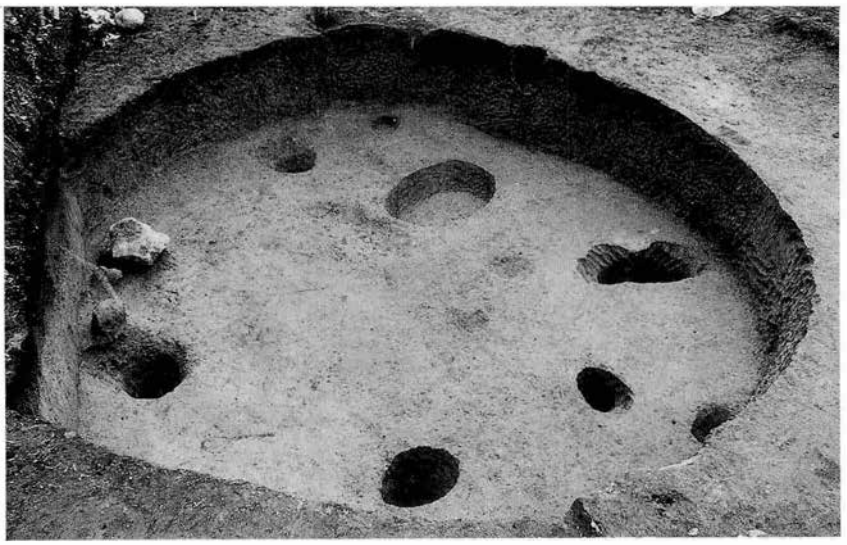
③ 36号住居址土器出土状態

図版30

① 37号住居址



② 38号住居址



③ 39号住居址

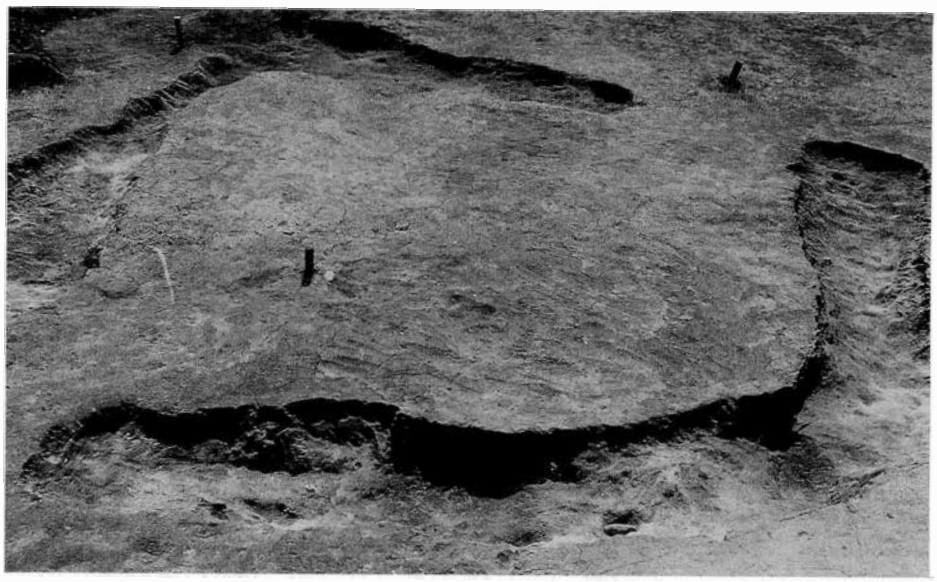
①39号住居址土器出土状態

②40号住居址

③40号住居址土器出土状態

図版32

① 1号周溝墓

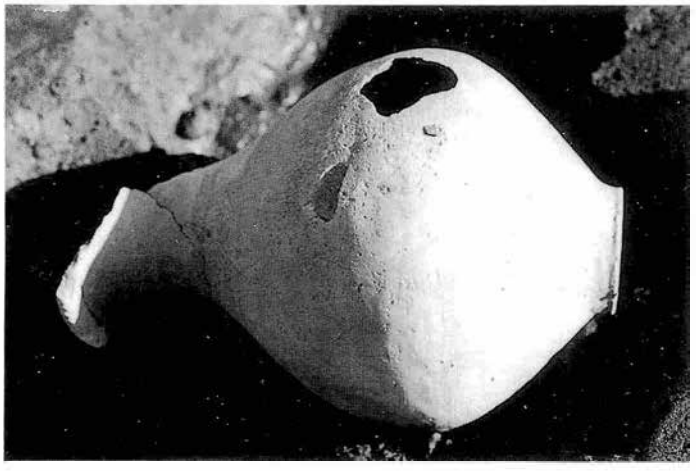


② 2号周溝墓

③2号周溝墓土器出土状態

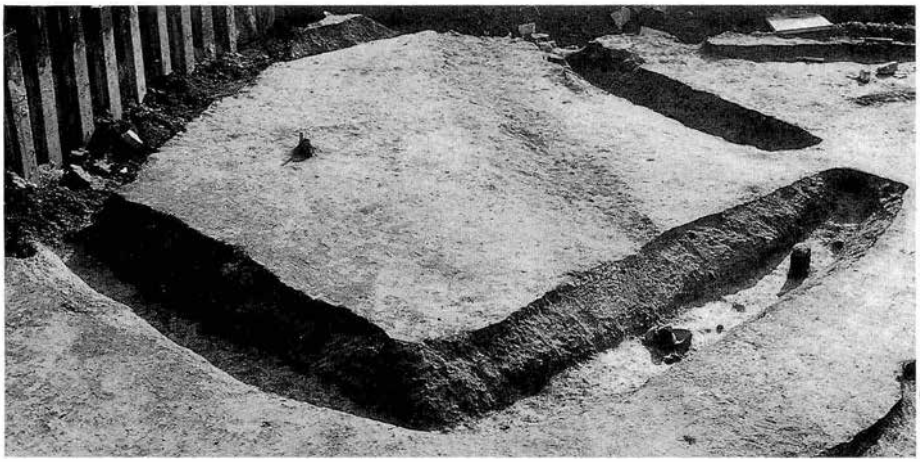
① 3 号周溝墓

② 4 号周溝墓

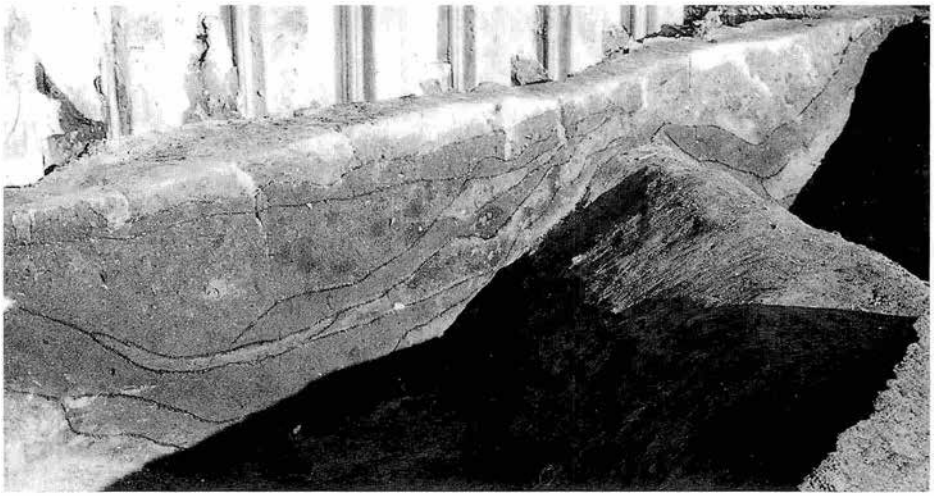


③ 4 号周溝墓土器出土状態

図版34

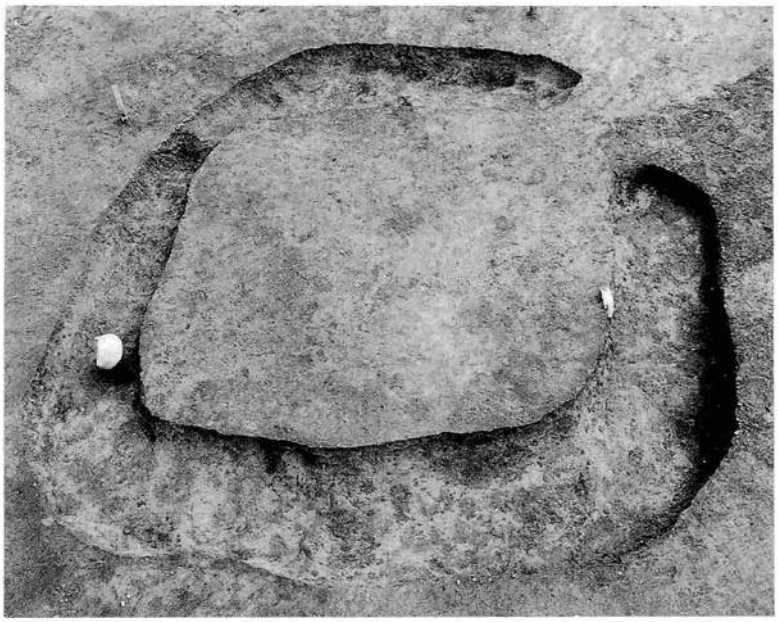


①5号周溝墓



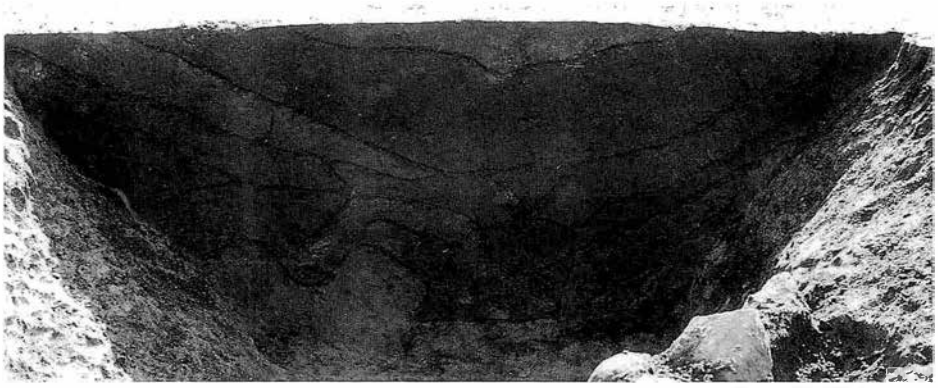
②
6号周溝墓

③7号周溝墓



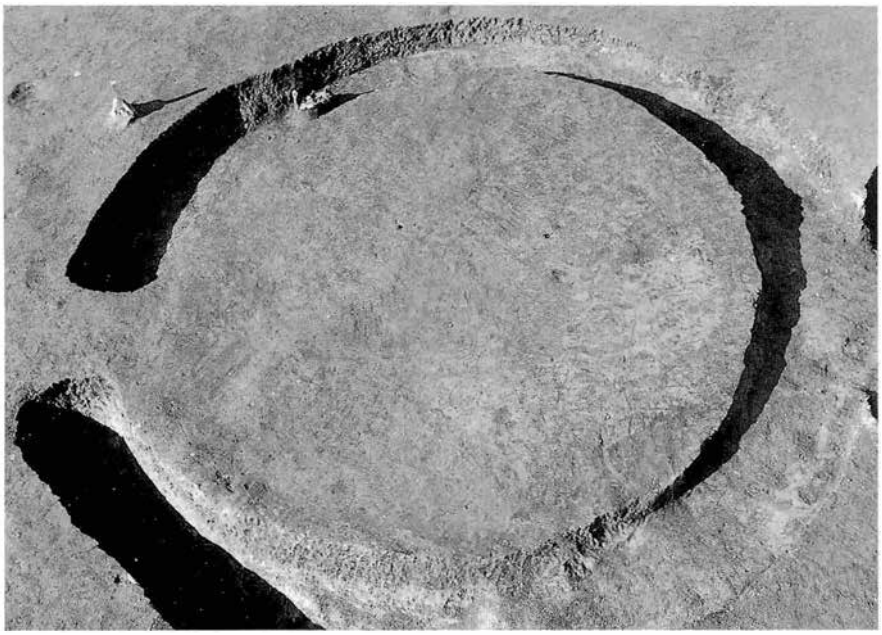
①8号周溝墓

②9号周溝墓

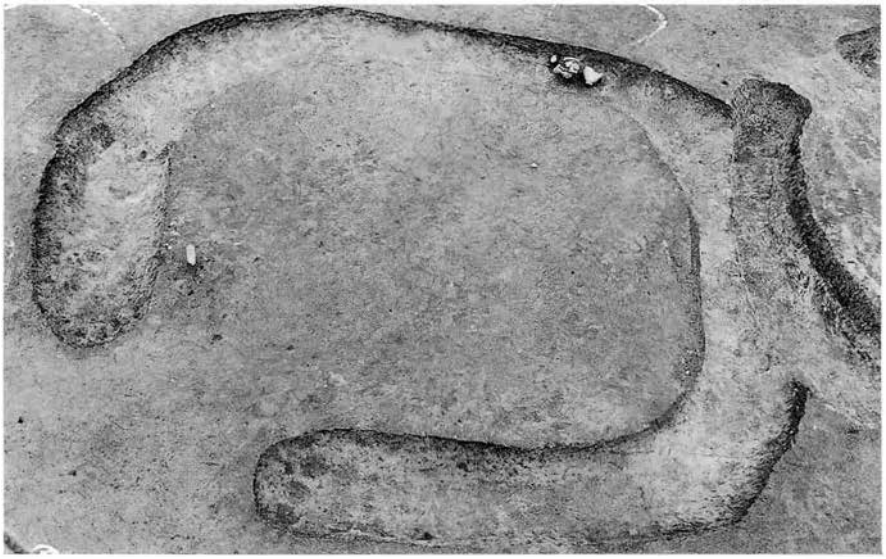


③9号周溝墓・セクション

図版36

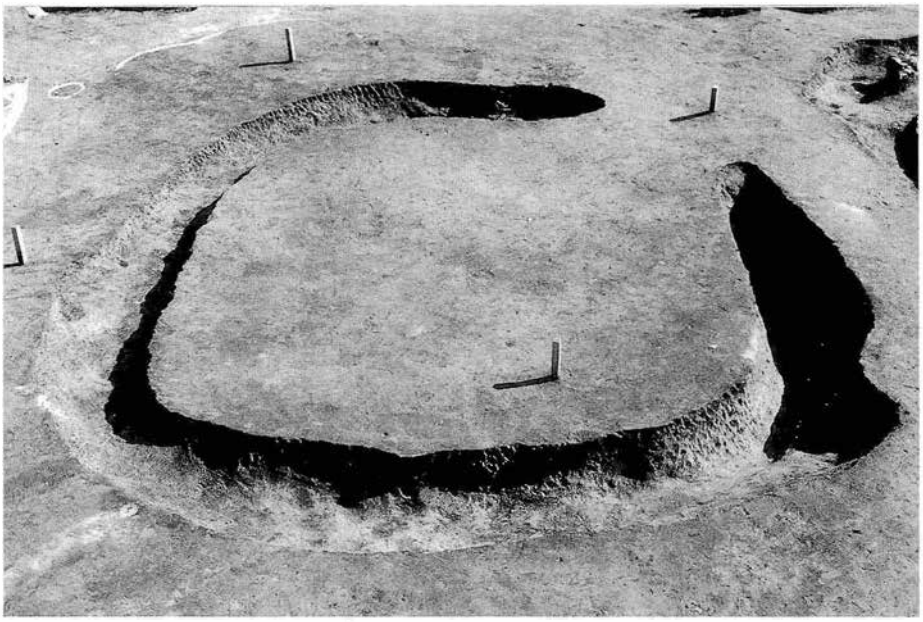


①10号周溝墓



②11号周溝墓

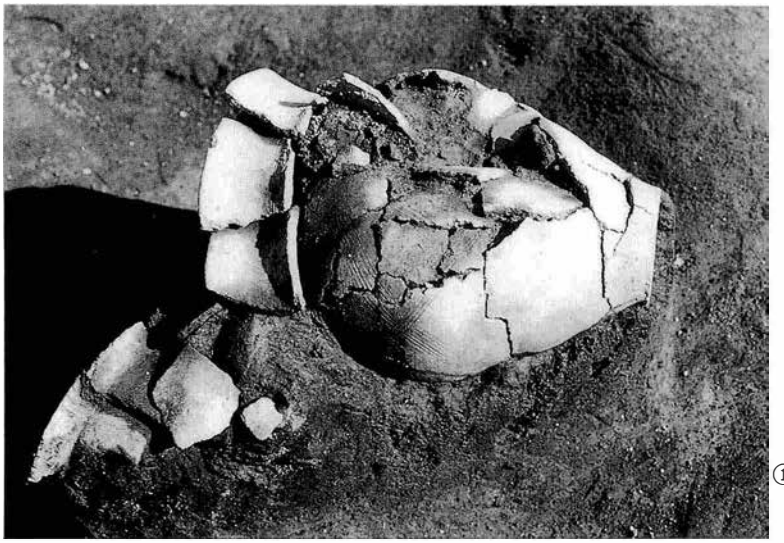
③11号周溝墓土器出土状態



①12号周溝墓

②13、14号周溝墓

図版38



①14号周溝墓土器出土状態

②15号周溝墓

① 特殊遺構 1　土器出土状態

② 特殊遺構 2

③ 特殊遺構 4

図版40

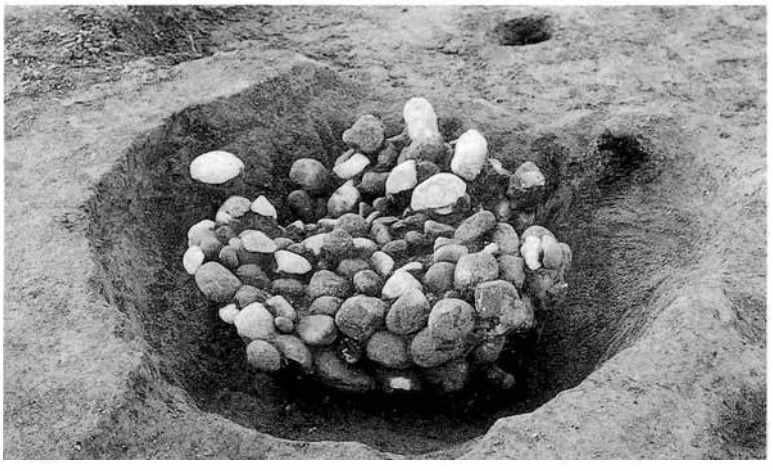
① 特殊遺構 5

② 特殊遺構 6　土器出土状態

③ 特殊遺構 7

① 特殊遺構 8

② 特殊遺構10
土器出土状態

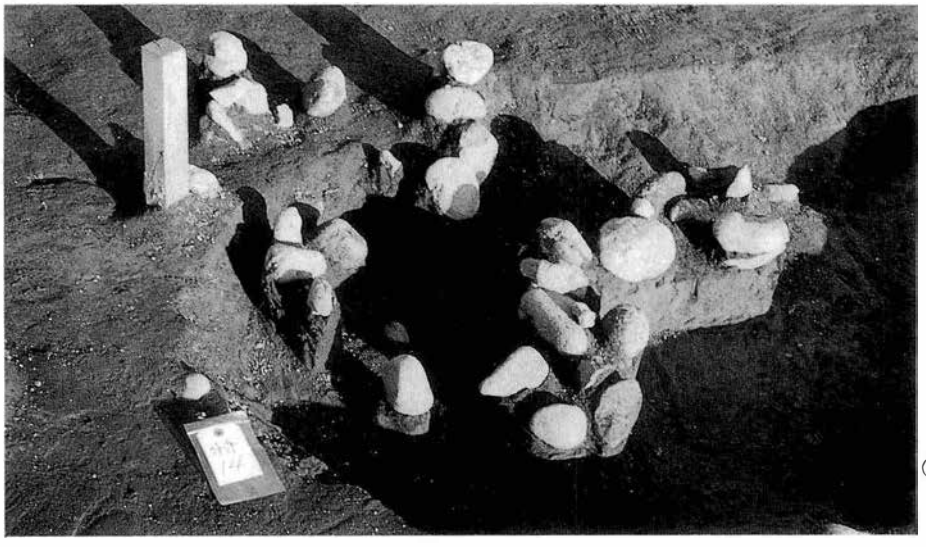


③ 特殊遺構11

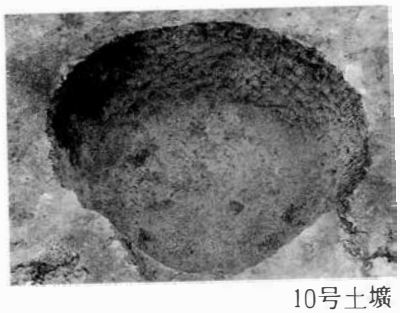
図版42

①特殊遺構12

②特殊遺構13
土器出土状態

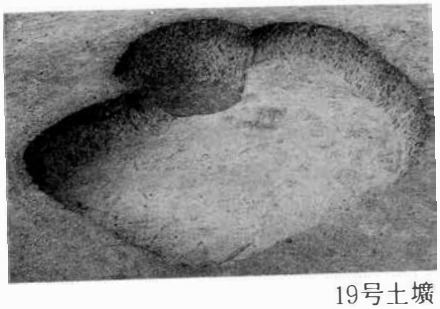


③特殊遺構14



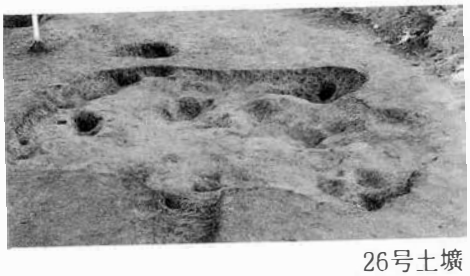
10号土壙

4号土壙

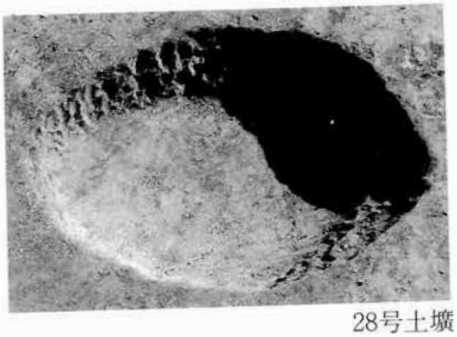


19号土壙

25号土壙



26号土壙



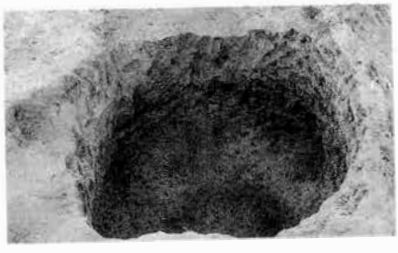
28号土壙

29号土壙

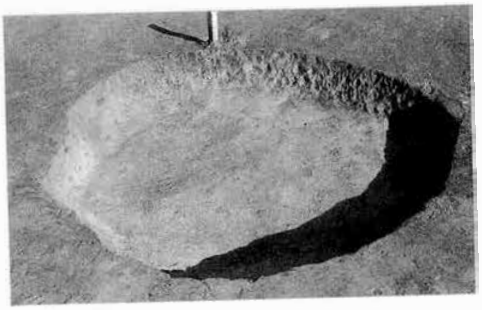
30号土壙

31号土壙

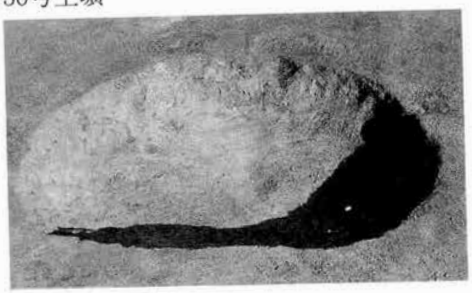
43号土壙



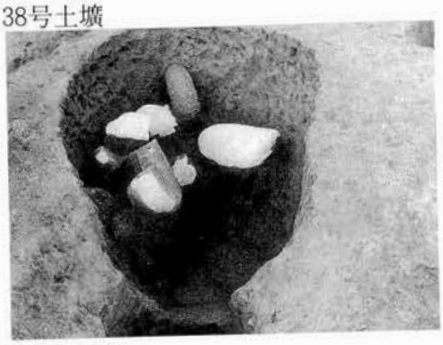
図版44 土壙（2）


36号土壙

37号土壙


38号土壙

39号土壙

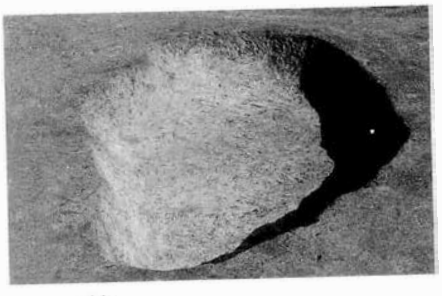

41号土壙

41、53、67号土壙

42号土壙

43号土壙

45号土壙


46号土壙

47号土壙

50号土壙

51、72号土壙

53号土壙

54号土壙

55号土壙

57号土壙

58号土壙

60号土壙

59号土壙

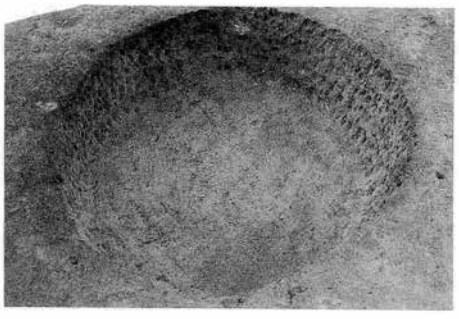
図版46 土壙（4）

61号土壙

62号土壙

63号土壙

64号土壙



65号土壙

66号土壙

67号土壙

68号土壙

73号土壙

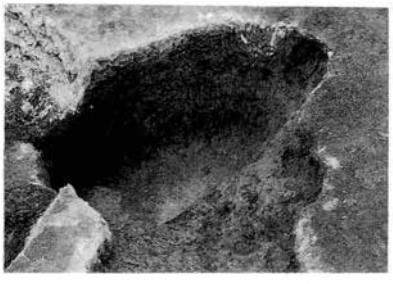
74号土壙

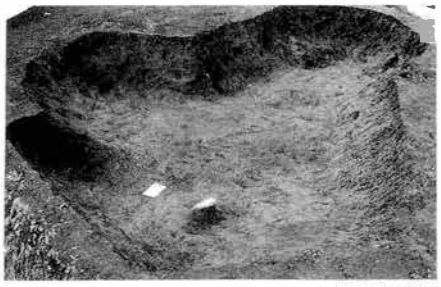
75号土壙

78号土壙

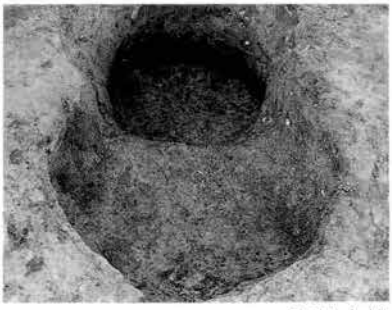
86、90号土壙

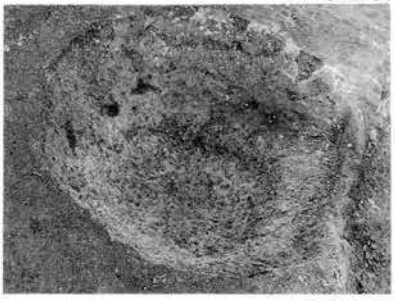
88号土壙


91号土壙


77号土壙

85号土壙


87号土壙


89号土壙

93号土壙

図版48　住居址出土土器

2 号住居

3 号住居

4 号住居

6 号住居

7 号住居

13号住居

16号住

18号住

20号住

20号住

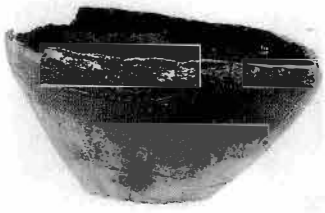
21号住

23号住

24号住

図版50　住居址出土土器

25号住



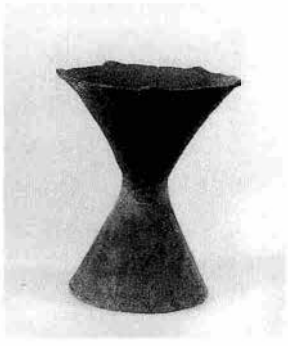
26号住

28号住

29号住

30号住

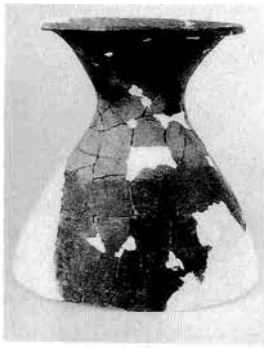
31号住



33号住

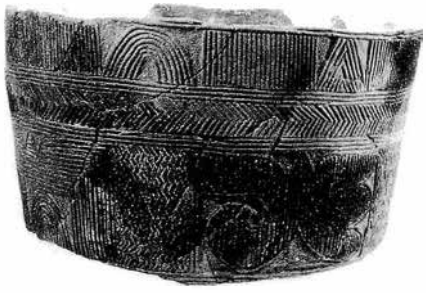
34号住

35号住



36号住

38号住



39号住

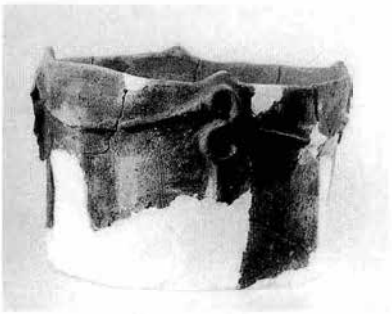
40号住

特1号土壙

特2号土壙

特5号土壙

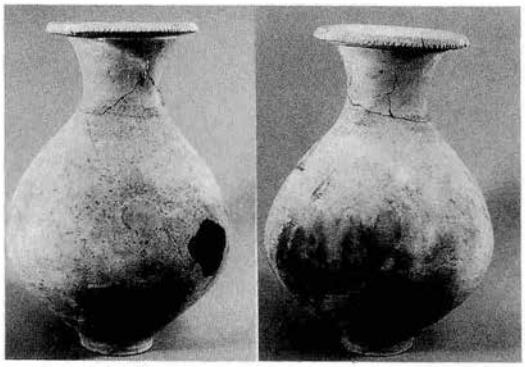
特6号土壙



特13号土壙

2周溝

3周溝



9周溝

9周溝

5周溝

5周溝

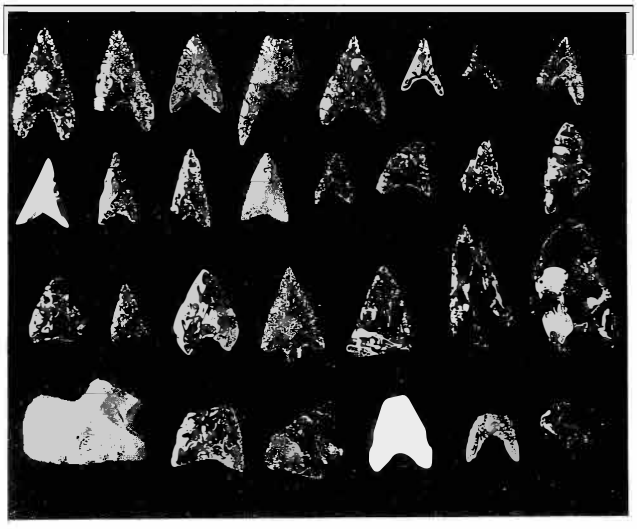
7周溝

9周溝

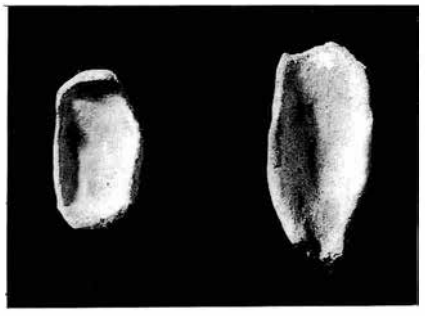
11周溝

11周溝

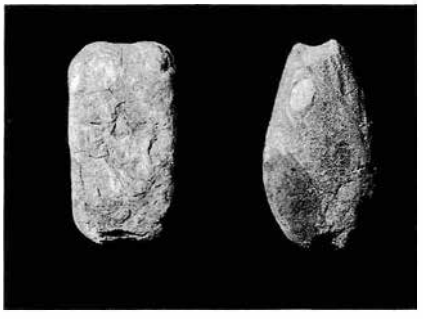
図版53 石鏃・土偶・ガラス玉他



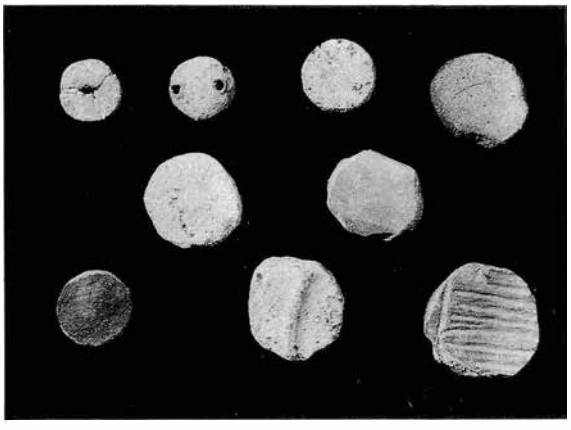
石鏃



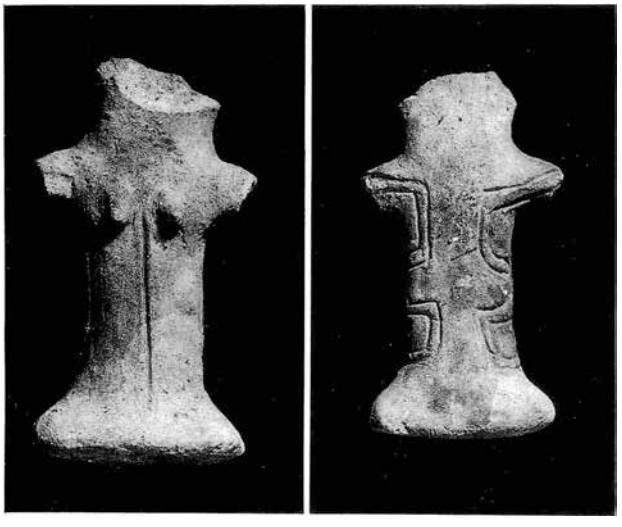
土製スプーン



石錘

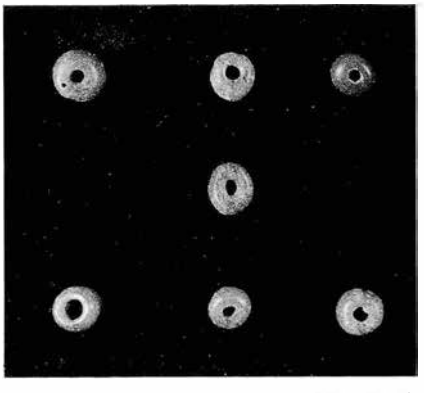


土製円盤



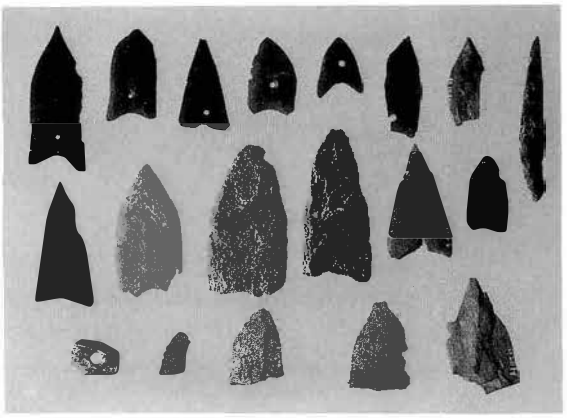
土偶（表）

土偶（裏）

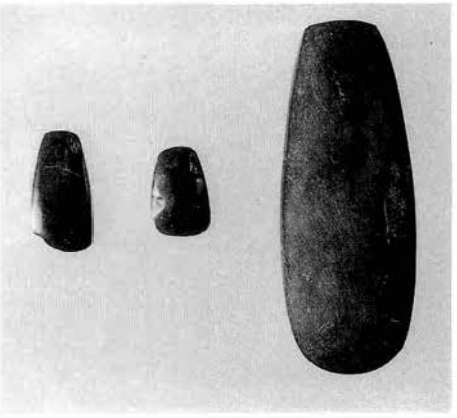


ガラス玉

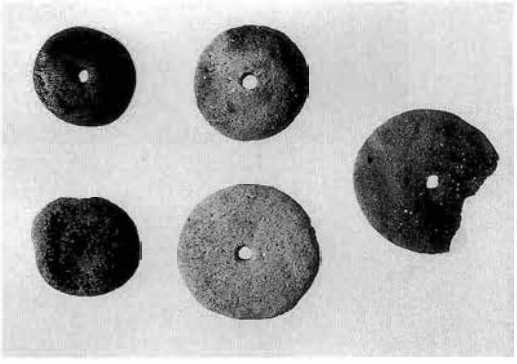
図版54 磨製石鏃・紡錘車・打製石包丁・砥石・環状石器



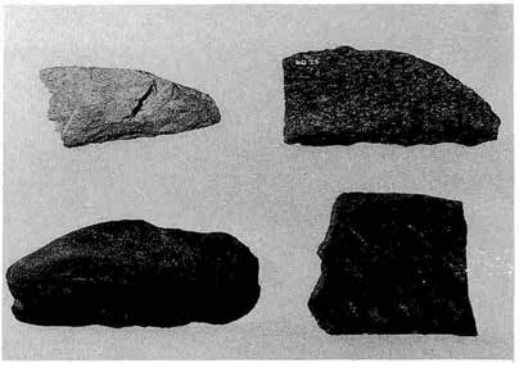
磨製石鏃他



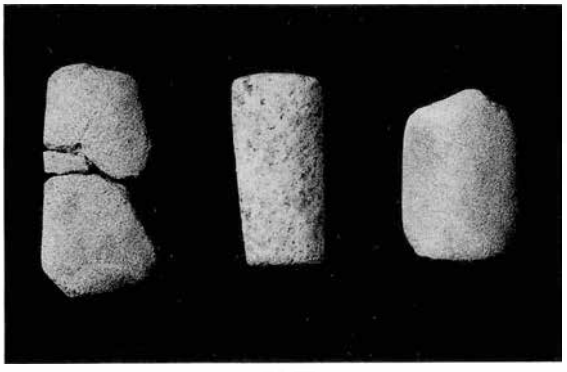
磨製石斧



紡錘車



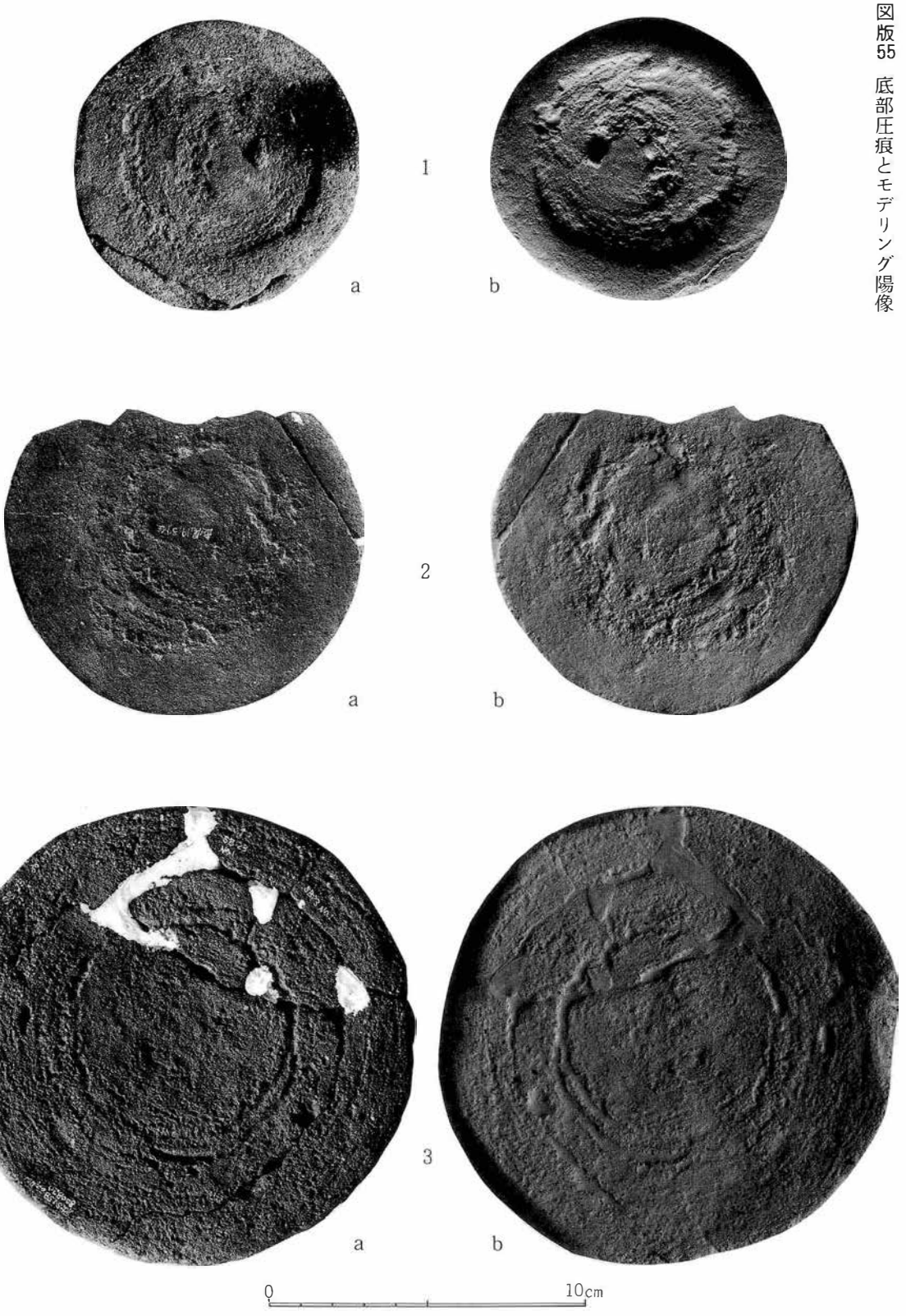
打製石包丁



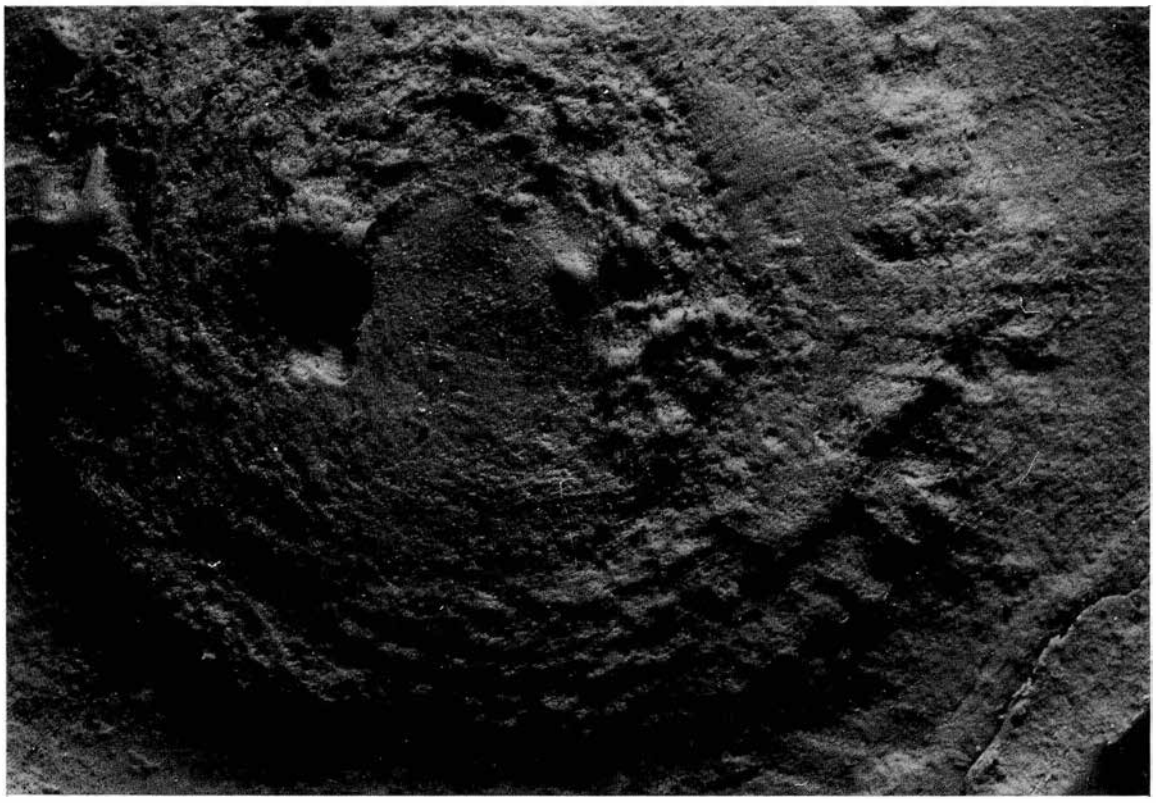
砥石

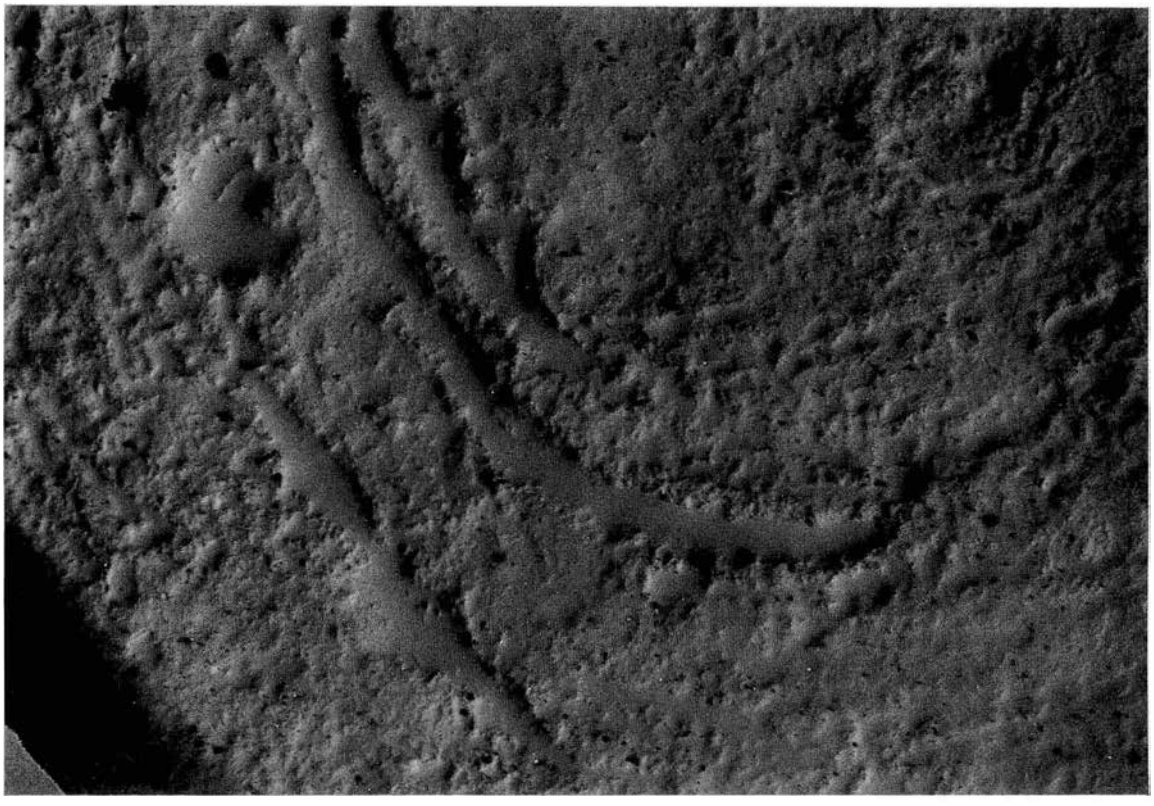
環状石器

図版55　底部圧痕とモデリング陽像



図版56　同拡大（部分2倍―上1b・下3b）





無名墳（きつね塚）

第Ⅰ章　調査経過

第1節　調査に至る経過

1977. 5. 31　発掘届の提出
1978. 5. 10　道路公団と県教育委員会で契約の締結
1978. 12. 15　発掘着手
1979. 3. 5　発掘終了
1979. 3. 12　遺物発見通知の提出
1979. 3. 20　道路公団に経費精算書を提出
1979. 4. 11　経費精算について了承

第2節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査主任　末木　健　県教育庁文化課文化財主事
　　新津　健　同上
調査員、補助員、作業員、整理員は金の尾遺跡と同じである。

第Ⅱ章　遺跡概要

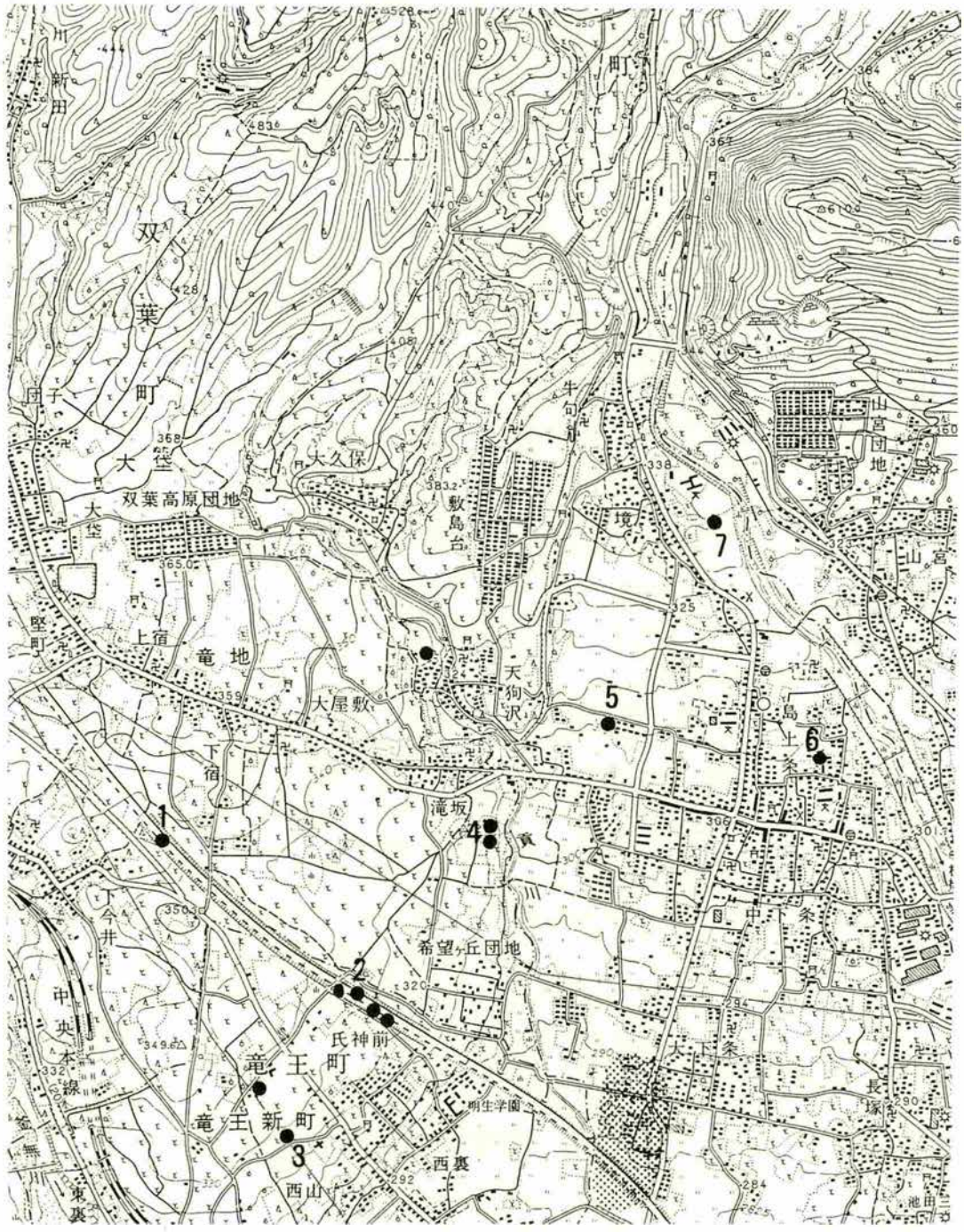
第1節　遺跡位置

甲府盆地北西部、茅ケ岳から南へ伸びた低位段丘の赤坂台地は、甲府盆地底部より約40～50m高い緩傾斜の丘陵である。西側は南アルプスや八ケ岳の雨水を集めて流れる釜無川に削られて急崖となっており、東から南はゆるやかに盆地へと傾斜している。この台地上の古墳群は、このゆるやかな斜面に分布しており、第1図のような古墳群のうち、3、4などが現存する。

本墳は北巨摩郡双葉町下今井に在って、標高330mの小丘頂上に立地している

第2節　地理的・歴史的環境

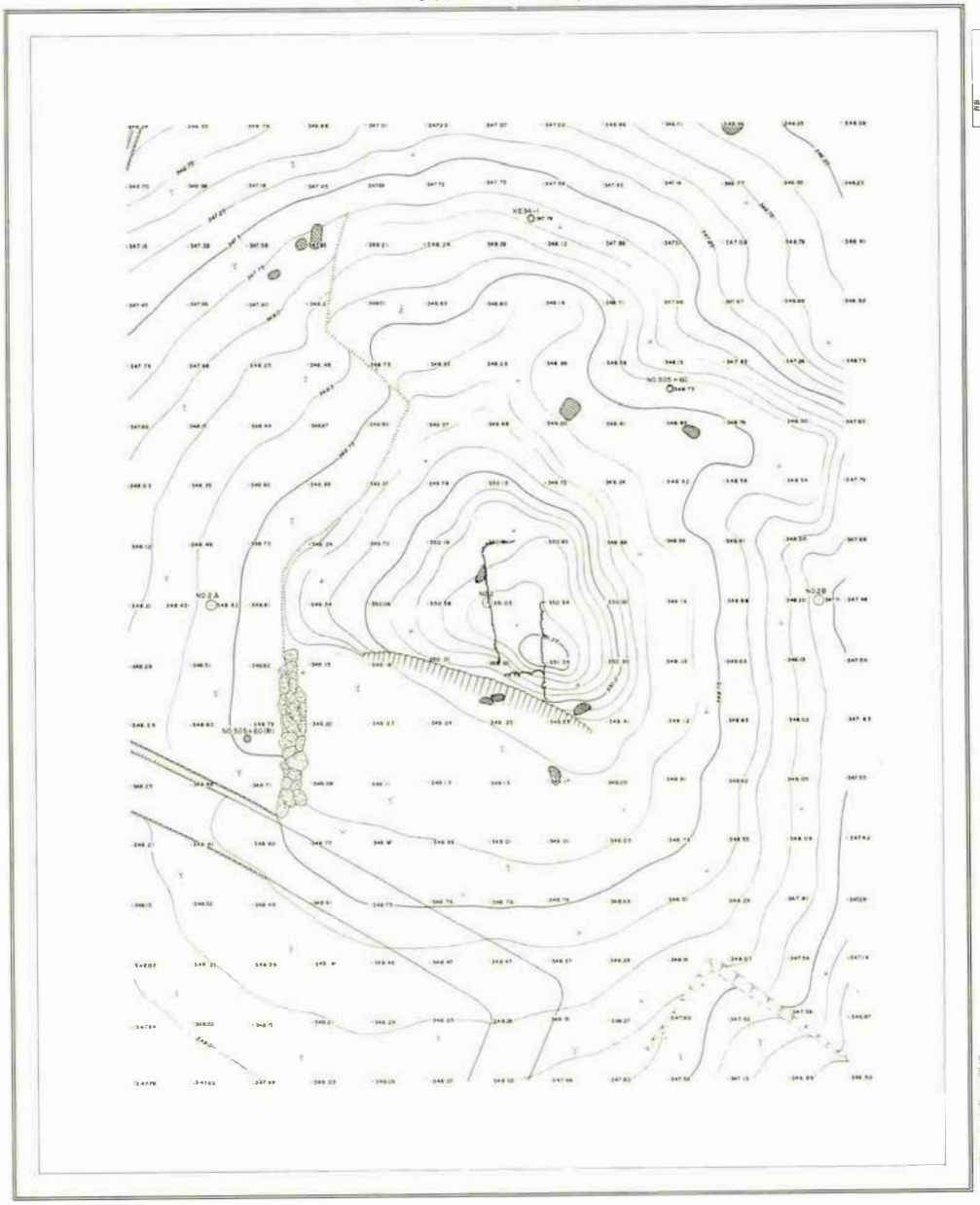
甲府盆地西部には秩父山地西部の水を集めて流れ出す荒川があり、その名が示すとおり、盆地中央部にたびたび水害をもたらした暴れ河川である。この流域には、県下の後期古墳を二分するような、大規模な古墳や古墳群が発達している。特に、甲府市湯村にある万寿森古墳、加牟那塚古墳、敷島町大塚、双葉町二ツ塚などは、石室規模が8mを超えるなど注目すべき勢力の存在を想定させる。荒川をはさんで二分される古墳群が同一豪族か別なのかは今後の検討材料であるが、特に、すでに発掘調査を実施した二ツ塚古墳群は中央道建設に伴って、馬具、武具など秀逸な遺物が出土している点で、本墳を考える上で重要な資料である。



1. 無名墳（きつね塚）　2. 二ツ塚古墳群　3. 竜王狐塚　4. 往生塚　5. 大塚古墳

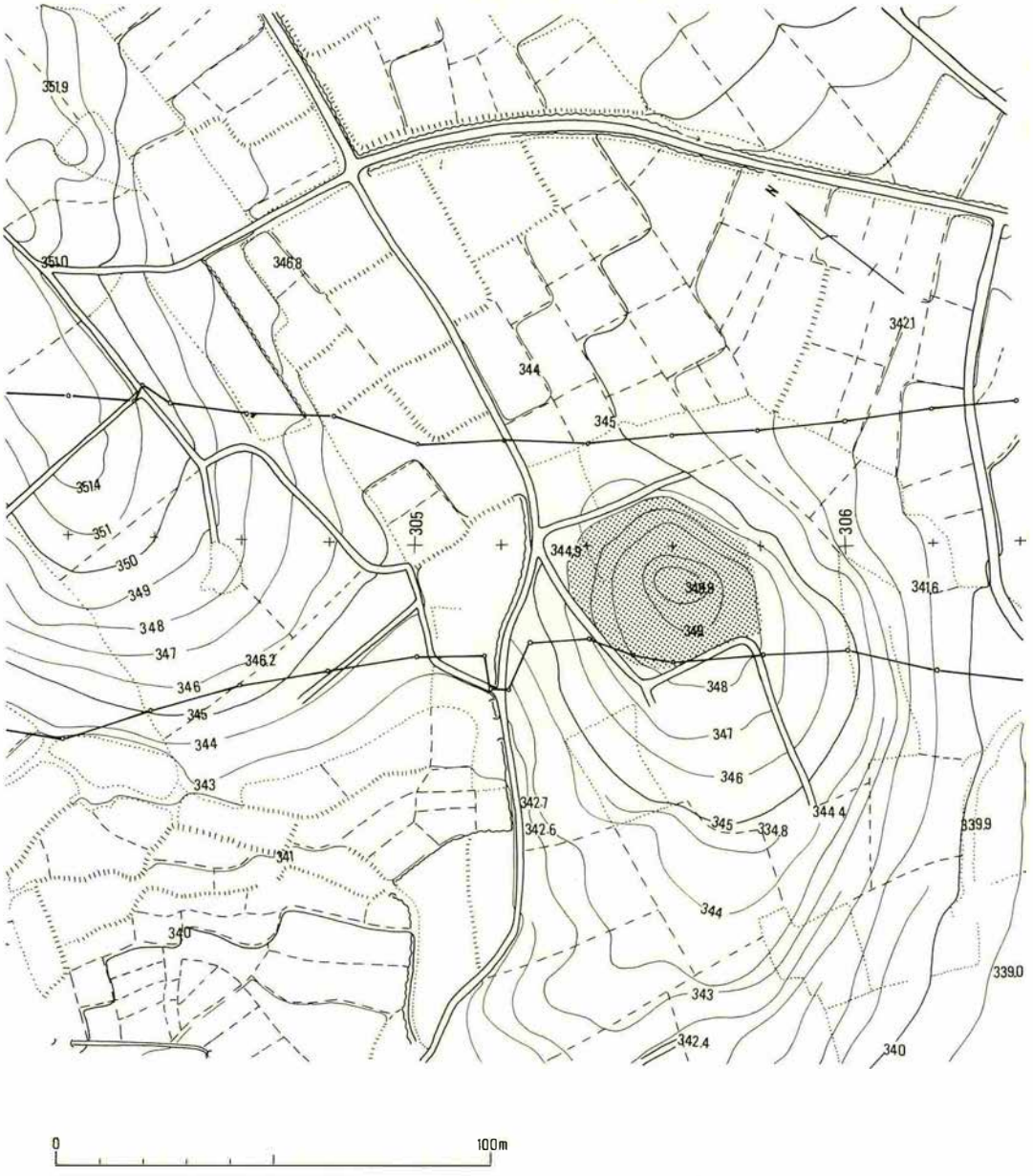
第１図　無名墳（きつね塚）位置図

無名墳現況平面図



山梨県教育委員会

第２図　無名墳（きつね塚）現況図



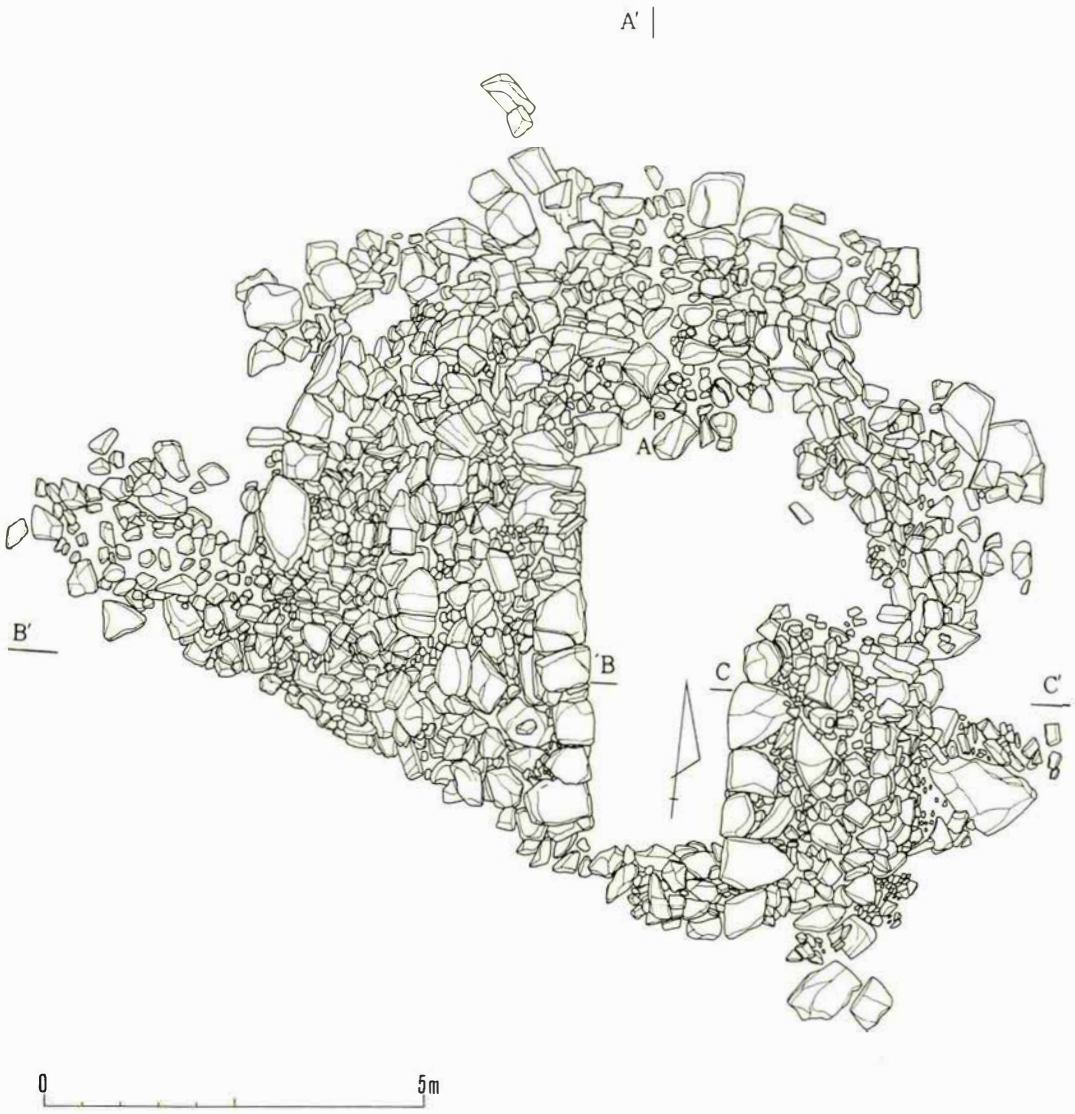
第３図　無名墳（きつね塚古墳）周辺地形図

第 III 章　古墳の概要

第１節　墳　丘

赤坂台上の起状は、標高の高い350 m～360 mあたりでは、比較的なだらかな傾斜であるが、台端部、特に西側の傾斜をもつ面では、小丘が目立ち、凹凸が各所に見られる。本墳の立地する小丘も、直径70～80 m、周囲からの高さ９ mの丘で、更にすぐ西にも細長い丘が並ぶ。

本墳は調査前には雑木や葛の密生した雑種地で、立入りが困難な程であった。地表には挙大か

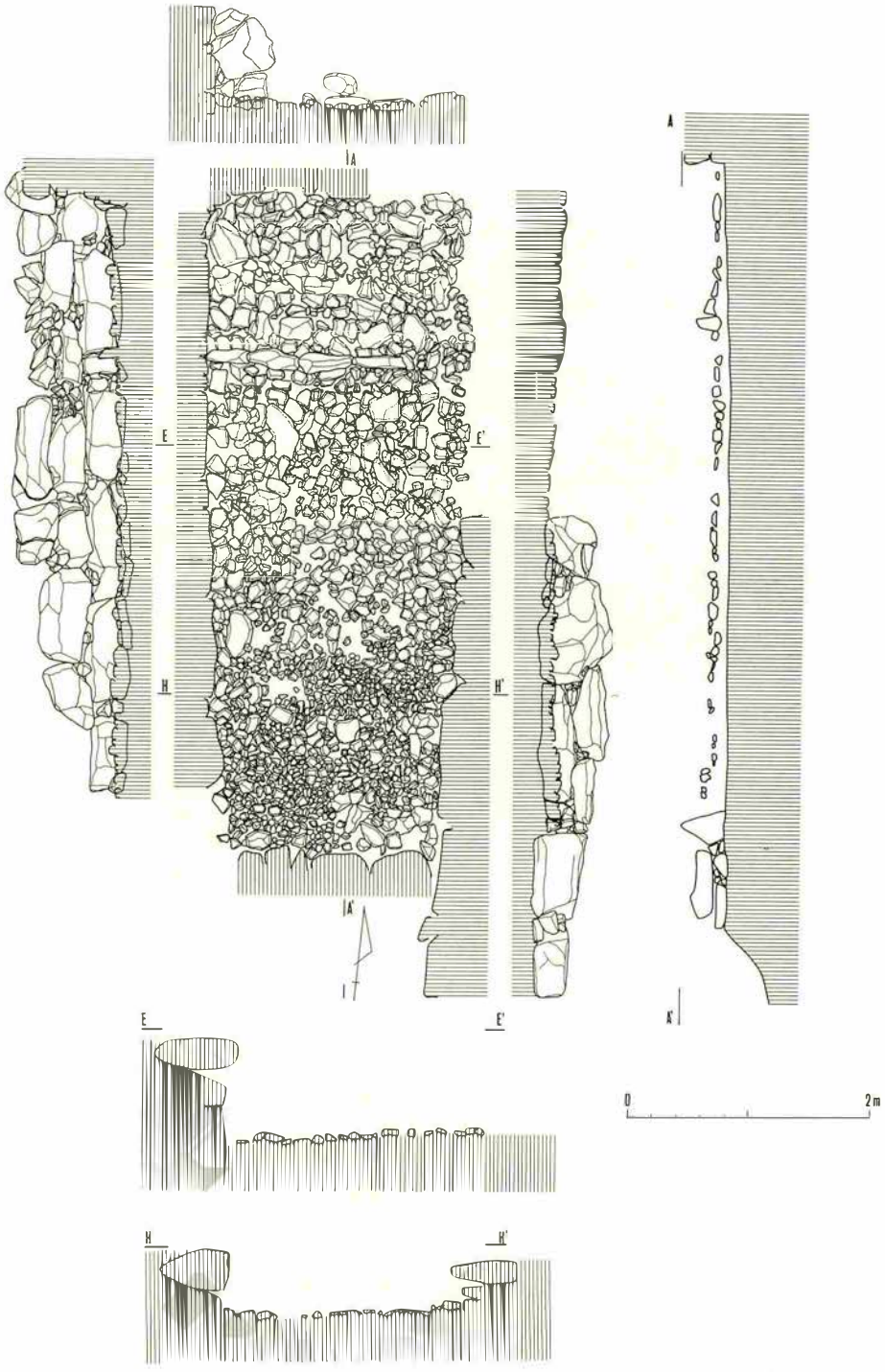


第４図　無名墳（きつね塚）墳丘石積平面図

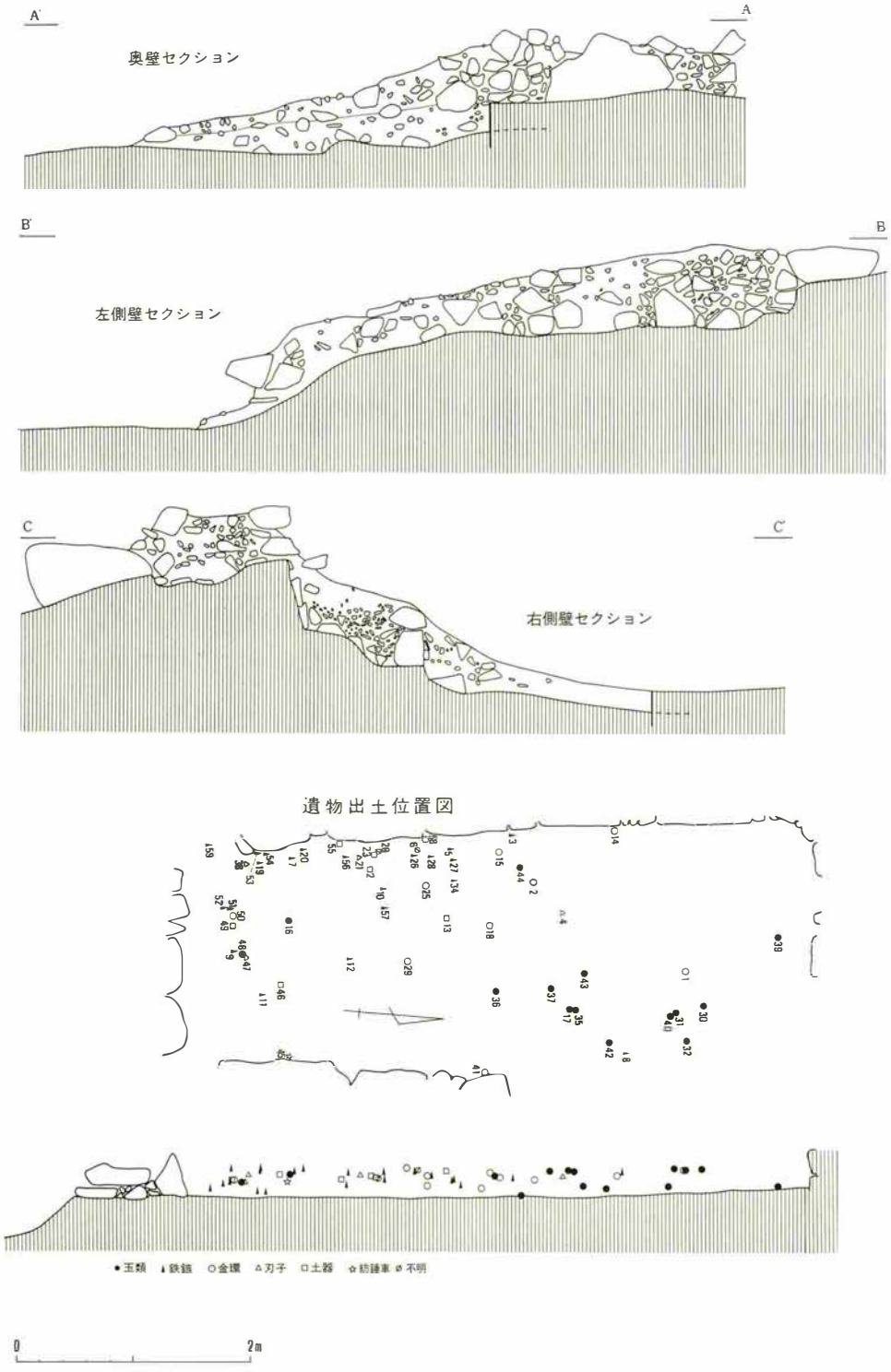
ら人頭大の礫が積み上げられ、あたかも積石塚のような状態であった。この地方の地表は礫よりも岩石の風化したような粘土が表土を形成しており、通常の礫は安山岩の小粒となっているので、それを畑から投げて積んだとしても、これ程の規模には到底ならない。従って、人工的な築造物として認識し、発掘調査対象とした。

墳丘上の礫の範囲は、南北20ｍ、東西30ｍで、最初の段階では古墳築造時の正確な範囲は把握できなかった。従って、墳丘測量を行う為、上面の不要小礫を除去する作業から着手し、墳丘規模、石室位置の検出に努めた。

この結果、石室はほぼ南北に主軸を持つ、横穴式石室で、前庭部は開墾によって完全に削除されてはいるが、石室閉塞石の一部が残存し、西側側壁の全部、東側側壁の南半分、奥壁の



第５図　無名墳（きつね塚）石室展開図



第６図　無名墳（きつね塚）墳丘断面図・石室内遺物出土位置図

一部が確認された。又、墳丘も土石混合によって盛り上げられ、墳丘保護の為に2段の石積が周囲を巡っている。1段目の石積は墳丘中央より半径3.4 mの円で造られ、2段目の石積は半径5 mの円を描く。3段目の石積があったかどうかは、断面観察でも判断できなかったので、墳丘の基礎は2段目までであろう。しかし、当初の石室高が1.5～2 mはあったであろうから、墳頂部での盛土肩は3 mにもなる。周囲の地形と比べると、直径10 mの基礎で3 mの墳丘（周辺からは更に高く4～5 mとなる）を支えるのは困難である。従って、何らかの形で3段目の墳端保護施設が存在したものと推定されるが、後世の耕作によって除去されたと思う。

第2節　石　　室

無袖長方形を呈した石室は完全に残ってはおらず、西側側壁は3段目より上の石積と、閉塞石付近より南側が破壊され、東側側壁は2段目以上の側壁と、中央部より北側が除去されている。奥壁はわずかに数個の石が残るだけである。現存した規模及び構築方法は次のとおりである。

西側側壁は南北長4.8 m、高さ85cmの範囲に、安山岩割石を横口積で3段に積んでいる。横口面は巾60～80cm、高さ30～40cmの立方体割石を互目積にしている。持ち込りはあまり見られないが、最上部の側石が若干内側に入り込んでいるので、3段目から上が持ち送られていたものであろう。

東側側壁の石は不揃いな大きさで、高さ20cm、巾50cmの立方体のもの、高さ60cm、巾80cmの不整形の石等を組み合わせて造られ、石積は1段ないし2段である。側壁残存長約4 mである。この最南端の石は羨門の石と思われるものであるから、本来の石室長は6.5 m位であった。石室の幅は、石室中央で2.5 m、入口部に近い所で2.25 mである。

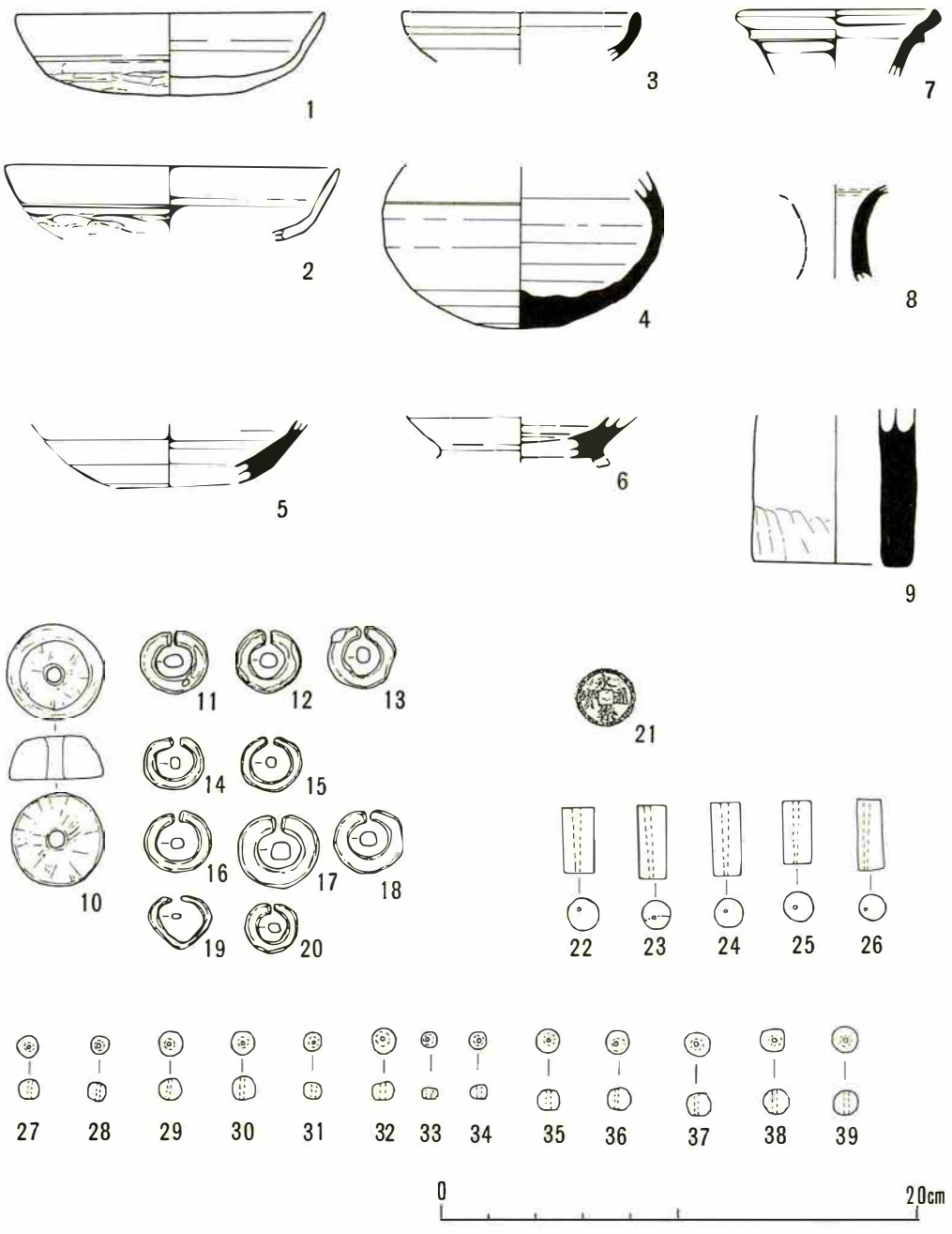
奥壁は礫を積んだもので、板状石の広口面を使用した奥壁とは異なる。石材は不揃いで、30cm位の角礫や60cmの割石角礫を使用している。

このことから、壁面で最も材を吟味したのが西壁で、奥壁は最も簡単に作られている。

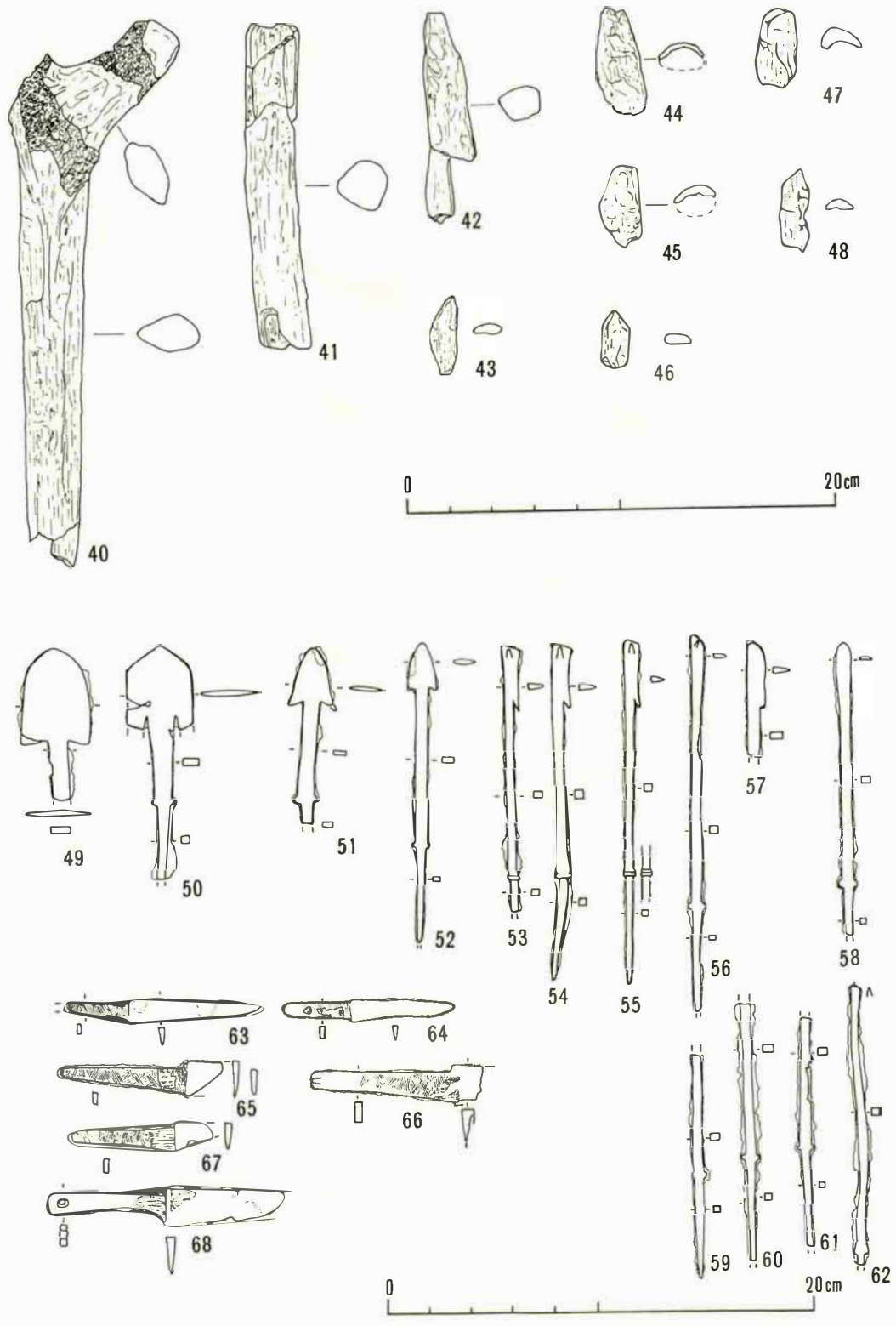
石室床面は小礫が敷き詰められており、閉塞石内側より2 m位までは、5～10cmの小礫が多く、更にその内側1.5 mの範囲は、10～20cmの角礫、そこから奥壁までは20～30cmの板状角礫が多く用いられる。なお、奥壁から1.5 m南には、石室を南北に仕切る石列が並んでいる。この仕切石は巾20cm、長さ40～50cm、高さ20～30cmの板状石を横長に使用しており、石室を二分する区画線を形成している。

この礫床は、地山面よりも若干上層に造られていることから、石室の構築順序を次のように想定することができよう。

①自然小丘の頂部を平坦に整形する。
②西側側壁の基礎施工
③東側側壁、奥壁の基礎施工
④墳丘保護列石の構築



第７図　無名墳（きつね塚）出土遺物（１）



第８図　無名墳（きつね塚）古墳出土人骨・鉄製品

⑤石室・墳丘の石積

⑥石室内敷石の敷込み

第3節　遺物の出土状況

石室内の出土遺物には鉄鏃、金環、刀子、土器（土師器、須恵器）、玉類、古銭などが出土しているが、ほとんどが礫床上面あるいは礫床中より出土している。このうち玉類は石室北半分に集中しており、14点中12点が北側、２点が入口部より出土した。鉄鏃は石室南半分から大部分が出土している。しかも、西壁および閉塞石に接した所からの出土である。金環10点は石室のほぼ中央に集中しており、特に中央西壁寄りが多い。刀子は鉄鏃と同様に石室南側３分の２に分布し、土師器、須恵器等は南半分に分布する。このように玉類を除いた他の遺物はほとんど石室中央部から南側で西壁側に分布域がある。仕切石の北側が棺床部であったとすれば、副葬品もこのあたりに多いはずであるが、遺体と副葬品は別々に置かれたということであろうか。

第4節　出土遺物

１、２は内外面に黒色タールの付着した土師器坏で、２点とも小片である。底部外面はヘラ削り後ヘラ磨きで、口縁部は内外面ともに横ナデ整形される。口唇は外傾し、体部中央で段をもつのを特徴とする。内面に黒色タールが多く付着し、器面には剥離が見られることから、燈明皿として使用された可能性がある。

３は須恵器坏であろうか。小片で明確ではなく、坏蓋の可能性もある。４は甕体部で、体部下半は回転ヘラ削り、中央部は横ナデ、上部には沈線が１本巡らされている。５も甕の底部と思われる。６は須恵器の台付壷底部片である。７、８は甕口縁、頸部であろうか。９は灰色の瓦器質胎土をもつ円筒形土器で、あるいは新しい時期のものであるかもしれない。

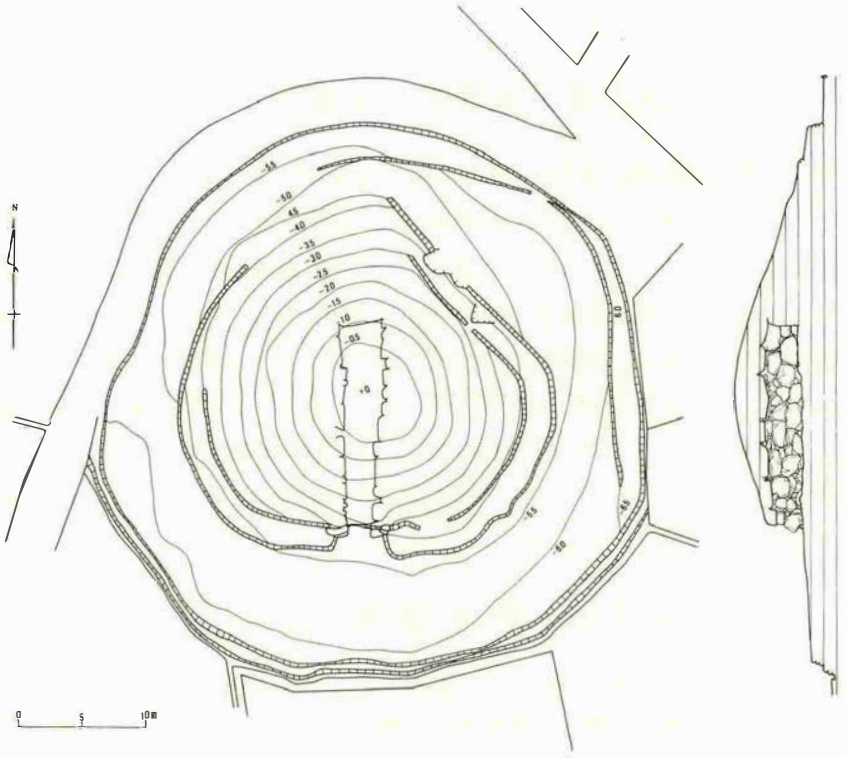
10は滑石製紡錘車である。直径４㎝、高さ1.8㎝の円錐裁頭形を呈し、上下面には放射状に微細な刻線文が施される。

11～20は金環である。22～26は碧玉製管玉で、片側より穿孔している。長さ３㎝前後、直径１㎝～1.3㎝の太さである。27～39は33、34を除いて土製の練玉で黒色を呈する。

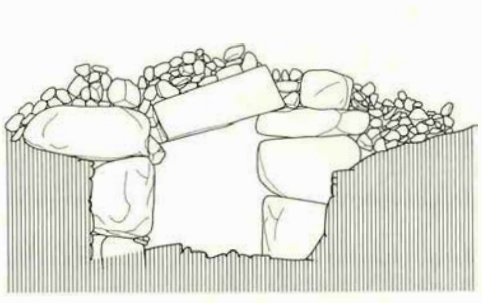
40～48は人骨で、40は大腿骨部であろうか。他は細片で部位は不明である。又、専門家の鑑定も経ていないので性別、部位、年令等については、今後の課題としておきたい。

49～62は鉄鏃で、分類すると６～７種類に分けられよう。49は広鋒両丸造棘箆被三角形式、50は箆被平造腸抉柳葉式、51、52は広鋒両丸造棘箆腸抉三角形式、53～57は棘箆被片関片刃箭式、58は片丸造棘箆被鏃箭式で、59～62は形式不明である。

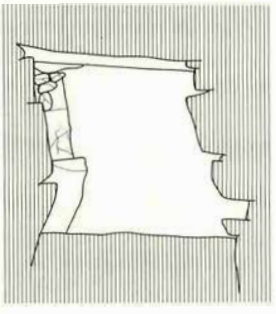
63～68は刀子である。いづれも両関で、68が目釘穴を有する他は、柄部に木質、糸巻跡などが観察される。



加牟那塚古墳墳丘実測図

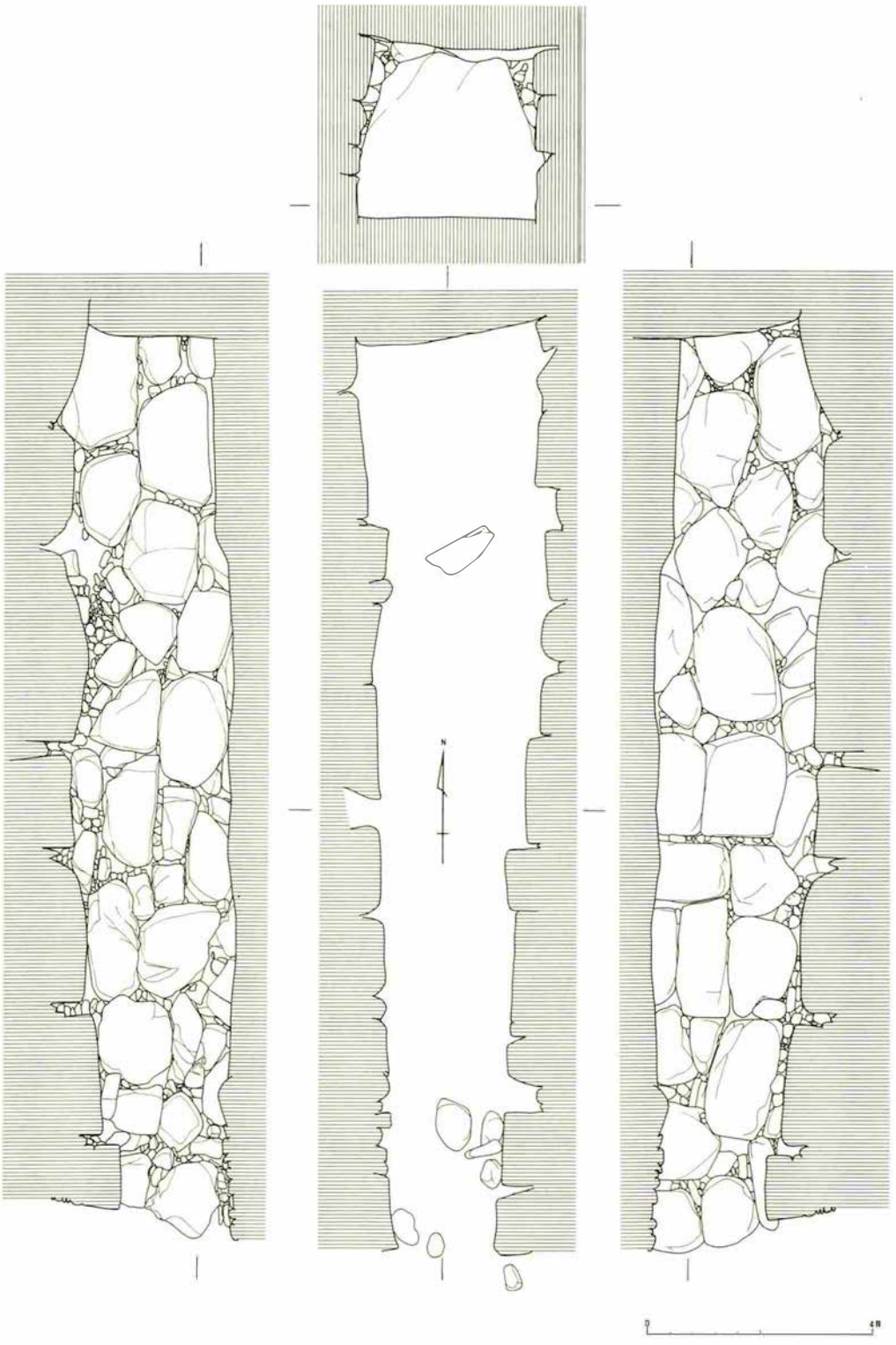


石室入口正面図



袖部断面図

第９図　加牟那塚古墳墳丘実測図、石室実測図



第10図　加牟那塚古墳石室展開図

第Ⅳ章　ま　と　め

赤坂台古墳群のうち、中央道建設に伴って発掘調査された古墳は、双葉町二ツ塚1号墳、双葉古墳2号墳、竜王1号墳、2号墳などであり、竜王町地内の二ツ塚2号墳はすでに削平されて、周溝も残存しなかった。これらの他に敷島町大塚が、町教育委員会によって昭和57年に部分的発掘調査及び測量、実測が行なわれ、昭和61年には竜王町きつね塚古墳が、町教育委員会山梨学院大学十菱教授によって発掘調査されている。このことによって赤坂台古墳群の様相は大部こまかく理解できるようになってきている。この地方とは若干様相の異なる盆地東部の荒川の左岸、湯村山との間に位置する加牟那塚古墳、万寿森古墳の石室と対比しながら、この様相を述べておこう。

加牟那塚古墳は県下で2番目に大きな規模を有する横穴式石室をもつ古墳で、甲府盆地北西部の荒川左岸の扇状地上、標高295ｍに位置する。現町名及び所在地は甲府市千塚三丁目7番地である。墳丘の直径は約60ｍの円形を呈し、高さ約7ｍ、石室全長16.75ｍ、奥壁巾3.3ｍ、羨門巾1.75ｍ、玄室長9.38ｍ、玄室入口巾2.2ｍ、玄室高3.2ｍの規模があり、石室は右片袖型である。墳丘上からは埴輪（円筒、太刀、楯、馬形、武人）破片が発見され、石室内からは須恵器、丸玉などが出土している。これらの資料から本墳の築造年代は6世紀後半の年代が考えられている（第9、10図）

これに先行すると推定されている万寿森古墳は、加牟那塚古墳よりも東へ約1㎞の湯村山南裾に位置している円墳で、南に開口する両袖型横穴式石室をもち、石室長14.2ｍ、玄室長7.9ｍ、奥壁2.44ｍ、高さ3.3ｍである。奥壁から側壁は河原石の乱石積で構築されている。出土遺物が無いので石室構造から判断して加牟那古墳より右手の年代が想定されている。

これら荒川左岸の大型古墳群に対して、荒川右岸では10ｍを超える規模の横穴式石室を有する古墳は存在せず、最大の双葉町二ツ塚1号墳でも9.1ｍである。又、双葉町、竜王町に含まれる赤坂台古墳群は、無袖型長方形の横穴式石室を有するものが多く、加牟那塚古墳や万寿森古墳とは若干性格が異なるかもしれない。しかし、敷島町境の大塚古墳は左片袖型石室と推定され左岸の古墳群と関係が強い可能性があろう。本無名墳（きつね塚）はこれらより後出であることが、出土土師器・須恵器の編年観から推定され、7世紀前半代におくことが可能であろう。

いづれにしても、こうした古墳群の石室構造及び出土遺物を詳細に対照して各古墳群の成立基盤を探る必要があろう。特に赤坂台古墳群は消滅した古墳が多いので、現存する古墳の調査と保存が望まれよう。

（参考文献）

山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡双葉町地内1―、1978

山梨県中央蔵埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡双葉町地内2、中巨摩郡竜王町地内　1979

大塚古墳　　敷島町教育委員会　1986

（註）

(1) 加牟那塚古墳の実測図は昭和45年12月に石室入口部修理に先行して測量したもので、青山学院大学教授吉田章一郎先生の御指導のもとに文化財主事末木健及び明治大学学生が作業を行った。

(2) 本古墳の報告にかかる図面整理は、宮沢公雄（現山梨文化財研究所第1研究室長）と末木が行った。

無名墳（きつね塚古墳）出土遺物
対照表（第 6 図遺物出土位置図）

1	金　環	16	玉	31	玉	46	土　器
2	〃	17	〃	32	玉	47	刃　子
3	鉄	18	金　環	33	玉	48	玉
4	刃　子	19	鉄	34	鉄	49	土　器
5	鉄	20	〃	35		50	金　環
6		21	刃　子	36	玉	51	鉄
7	鉄	22	土　器	37	玉	52	〃
8		23	〃	38	刃　子	53	〃
9	鉄	24		39	玉	54	〃
10	〃	25	金　環	40	玉	55	土　器
11	〃	26	鉄	41	鉄　環	56	鉄
12	〃	27	〃	42	玉　2	57	〃
13	土　器	28	〃	43	玉	58	金　環
14	金　環	29	金　環	44	管　玉	59	鉄
15	金　環	30	玉	45	紡錘車		

図版1　きつね塚古墳遠景、全景

図版2　きつね塚古墳、石室発掘状態

図版3　きつね塚古墳、発掘作業風景、遺物出土状態

山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第25集

金の尾遺跡
無名墳（きつね塚古墳）

印刷日　昭和62年３月20日
発行日　昭和62年３月31日
発行所　山梨県教育委員会
印刷所　温故堂株式会社